
I S 〈インフィニット・ストラトス〉 ～絆を紡ぎ、運命を変える決闘者～

天道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS ヘインフィニット・ストラトス〜絆を紡ぎ、運命を変える決闘者〜

【Nコード】

N4749Q

【作者名】

天道

【あらすじ】

不動産遊星はネオドミノシティを破滅の運命から救い、平和な時を過ごしていた。

しかし、遊星は赤き竜に導かれて異世界に飛ばされてしまう。

異世界で遊星に待ち受ける新たな運命とは！？

まさかの遊戯王5D'sとIS ヘインフィニット・ストラトス〜との異色クロスオーバー小説ですが、どうぞ！

設定 その1 不動遊星 (随時更新、ネタバレあり) 4月15日更新(前書き

やってしまった……。

遊戯王5D'sとインフィニット・ストラトスの異色クロスオーバー小説です。

インフィニット・ストラトスは少し難しいので、感想指摘をよろしくお願いします。

アンケートも随時行います。

設定 その1 不動遊星 **（随時更新、ネタバレあり） 4月15日更新**

不動遊星

遊戯王5D'sの主人公であり、仲間と絆を誰よりも大切にする。

ネオドミノシティに訪れる破滅の未来を変え、平和な時を過ごしていたが、赤き竜の導きでISの世界に転移してしまった。

本作品では遊戯王5D'sのヒロインである十六夜アキとは恋人同士である。

恋愛に関しては鈍感だったが、アキと交際することで敏感の域に達している。

そのため、一夏とそれを取り巻く筈たちとの関係をため息をつきながら見守る。

IS『星竜』↓『龍星』

遊星の愛機であるD・ホイール『ボルガニック遊星号』が変化したもの。

ISのコアとしてモーメントが使われている。

ちなみに、ISだけとしてではなく、D・ホイールになって今まで通り乗ることも可能。

これはジャック達のISにも共通する能力である。

ISの発明者である束は未知数の力と無限の可能性の意味を込めて、『第零世代型IS』と呼んでいる。

龍星（星竜）の基本的なボディはD・ホイールと同じく真紅の色をしており、形に特徴性がない。

待機状態は赤き竜の痣の紋章が描かれたカードであるが、アクセルシンクロによりスターダスト・ドラゴンの形をしたドラゴンネックレスとなった。

プリセット
基本装備は無く、基本は肉弾戦で戦うことになる。

しかし、龍星（星竜）の最大の特徴はISが様々な姿へと変形することである。

『ウォリアーズ・フォルム』

ジャンク・ウォリアーを始めとする遊星デッキのモンスターのデータを元にISがその姿を模した形へと「フォルムチェンジ」する。

ただし、次の姿にフォルムチェンジするには一分以上時間を経過しなければならないが、龍星に進化したことによりその制限も無くなった。

元となったモンスターの大半は武装が無く、拳や蹴りが主な攻撃と

なるが、剣などの武器を持つモンスターもいるので、そのモンスターにフォルムチェンジした場合はそのモンスターの武器を用いる。

それぞれのフォルムチェンジにはそのモンスターの効果を元にした特殊能力が備わっている。

更に、龍星（星竜）にスキャンしたカードの精霊がISに入り込み、遊星と話すことが可能となり、サポートを行う。

遊星とは念話で話すが、存在を知っていれば遊星以外の他人とも話すことができる。

ちなみにモンスターによって性格はかなり異なる。

「ジャンク・ウォリアー」

機動力に優れている。

攻撃時は背中に取り付けられたブーストで、機動力のスピードが上昇する。

特殊能力『パワー・オブ・フェローズ』

援護支援機が展開している時、援護支援機の攻撃力と機動力と防御力をその分だけ上昇させる。

「ニトロ・ウォリアー」

攻撃力が高く、一撃必殺を狙いやすいが、機動力はジャンク・ウォリアーに劣る。

特殊能力『ダイナマイト・ナックル』

強力な衝撃波を放ち、相手のISや武器の行動を数秒間停止させる。

「ターボ・ウォリアー」

ジャンク・ウォリアーとニトロ・ウォリアーの中間で攻撃力と機動力のバランスが取れている。

特殊能力『ハイレート・パワー』

星竜に特殊なオーラを纏い、一度だけ相手の攻撃の威力を半分に抑える事ができる。

「ロード・ウォリアー」

攻撃力は高いが、シールドエネルギーのダメージを大きく受けやすい。

特殊能力『バックアップ・サモン』

援護支援機を二体、シールドエネルギーのコスト無しで呼び出す。

「ドリル・ウォリアー」

ウォリアーズ・フォルムで唯一の近中距離型。

攻撃力と防御力が高めでバランスがいいが、機動力が低い。

基本装備『ドリル・ランサー』

射出可能なドリルの槍。

特殊能力『ドリル・ワープ』

半径約一キロ内を一度だけ空間移動する事が出来るが、一回の起動で一度しか使用できない。

「ジャンク・アーチャー」

ウォリアーズ・フォルム唯一の中遠距離タイプ。

遊星とジャンク・アーチャーとのISのシンクロ率が高ければ高いほど、矢の命中率が高くなる。

基本装備『スクラップ・アロー』

矢の威力を調整する事ができ、貫通攻撃も可能。

特殊能力『デイメンション・アロー』

矢が当たったISのパーツを数分間、異次元に送る。

「ジャンク・ガードナー」

攻撃手段が無いが、ウォリアーズ・フォーラムの中で最高クラスの防御力を誇る。

基本装備『ガードナー・シールド』

両腕に装備する二つの強固な盾。

二つの盾を合体させて防御する。

特殊能力『チェンジ・ガード』

仲間が攻撃を受ける直前に、その仲間の元にワープし、両腕の盾で完全防御して仲間を守る。

だが、それを使用する度に装甲や盾の防御力と耐久力が低下していく。

そのため限界が近づくと、遊星自身の身も危なくなる。

「ジャンク・デストロイヤー」

遊星の両腕に二本の腕が加わり、合計四本の腕となる。

遊星の精神とリンクしているため、自分の腕のように自由自在に動かすことができる。

イコライザを四つ同時装備で戦うことにより、本領発揮となる。

特殊能力『タイダル・エナジー』

相手のISに一時的なバグを起こさせる。

「ジャンク・バーサーカー」

攻撃力と防御力が非常に高いが、装甲（鎧）が大きく、重い故に機動力が低い。

遊星の怒りに比例して能力が上がる。

基本装備『バーサーカー・アックス』

巨大な斧の柄にモーニングスターを合体させた凶悪な武器。

特殊能力『バーサーカー・ソウル』

シールドエネルギーを大量消費して、一定時間攻撃力、速力を急上

昇させる。

「スターダスト・ドラゴン」

攻撃力、防御力、機動力がどれも高めで、バランスがとてもいい。
基本装備『スターソード』

スターダスト・ドラゴンの一片から創られた剣。

鍔と柄にスターダスト・ドラゴンを模した装飾が施されている。

特殊能力『ヴィクテム・サンクチュアリ』

ウォリアー・フォルムを一時解除してスターダスト・ドラゴンの幻影が現れ、遊星または対象をあらゆる攻撃から守る。

「スターダスト・ドラゴン／バスター」

スターダスト・ドラゴンに鎧を装着させ、全ての能力を向上させる。
基本装備『スターソード・バスター』

スターソードに／バスターの鎧に似た飾りが施されている。

特殊能力『ヴィクテム・サンクチュアリ』

スターダスト・ドラゴンの時より効果範囲が数倍に広がる。

「セイヴァー・スター・ドラゴン」

バックアップで、救世竜 セイヴァー・ドラゴンとスターダスト・シャオロンで呼び出し、スターダスト・ドラゴンとチューニングして、その姿となる。

攻撃力と機動力に特化している。

基本装備『スターソード・セイヴァー』

スターソードが進化した姿でクリスタルのような剣。

特殊能力『サブリメイション・ドレイン』

相手ISの特殊能力を無効にして、一度だけ自分の能力として使用することができる。

「カタパルト・ウォリアー」

ジャンク・ガードナーと同じく攻撃することのできない。

基本装備『ツイン・カタパルト』

両肩に装備された二つの発射台。

特殊能力『カタパルト・シュート』

ISを装備した操縦者に衝撃を無効化させる透明なバリアを纏わせ、半径数百キロ圏内どこにでも射出して運ぶことができる。

または『ジャンク』と名の付いたモンスターを砲弾のように射出する。

「スカー・ウォリアー」

防御力は高いが、攻撃力は若干低め。

基本装備『勇敢な短剣』
ブレイブ・ダガー

腕にくくりつけた短剣。

特殊能力『プル・マグネティック』

対象の攻撃を強制的に自分の所へ引き寄せる。

「セブン・ソード・ウォリアー」

攻撃力と防御力は安定しているが、基本装備の多さから機動力が低い。

基本装備『セブン・ソード』

形の異なる七つの剣。

特殊能力『イクイップ・シュート』

イコライザを装備した時、対象にレーザー攻撃でダメージを与える。

「シューティング・スター・ドラゴン」

攻撃力、防御力、機動力が全て最高ランクで龍星最大の切り札。

スターダスト・ドラゴンにフォーミュラ・シンクロンをチューニングし、アクセルシンクロを行うことによりこの姿となる。

基本装備『スターソード・シューティング』

スターソードが流星の如き輝きを光を放ち、剣の大きさが一回り大きくなっている。

特殊能力『スキルインバリッド』

エフェクト・ヴェーラーと同じ能力で、相手の能力を一定時間封じる事が出来る。

設定 その2 不動遊星 (随時更新、ネタバレあり) 4月15日更新 (前書き

遊星のIS設定は多いな……。

設定 その2 不動遊星 **（随時更新、ネタバレあり）** **4月15日更新**

『イコライザ後付装備』

遊星のデッキの装備カードから主に作られる。

「アームズ・エイド」

右手に装備する機械の爪。

攻撃力と機動力を上昇させるがシールドエネルギーが少しずつ消耗していく。

「バックアップ・ウォリアー」

バックアップ・ウォリアーが装着している両腕の巨大なマシンガン。

「シンクロ・ストライカー・ユニット」

右腕に装置するキャノン砲。

一定時間攻撃力を急上昇させる。

しかし、一定時間を過ぎると攻撃力を下がるが、シールドエネルギーを少しずつ回復させる。

「ガントレット・ウォリアー」

ガントレット・ウォリアーが右腕に装備しているガントレットを遊星が装置して防御力を高める。

「錆びた剣ーラスト・エッジ」

錆び付いた大剣。

耐久力が低いが、破壊されると、無数の破片が弾丸のように飛び、敵に襲いかかる。

「セカンド・ブースター」

機動力、速力を大幅に上昇させる。

それにより、近接の攻撃力も上昇する。

ただし、30秒しか使用できない。

バックアップ
『援護支援機』

主にシンクロモンスター以外のスキャンしたモンスターを呼び出して、補助として共に戦う。

一体呼び出すのに、シールドエネルギーの10パーセントから20パーセントをコストとして消費するが、龍星に進化したことによりシールドエネルギーのコストがなくなかった。

「ロード・ランナー」

比較的威力の高い攻撃を防ぐことができるが、逆に威力の低い攻撃にとても弱い。

「スピード・ウォリアー」

相手の武器を蹴り落とすのが得意。

「ハイパー・シンクロン」

遊星以上にコンピューターなどの精密機械に精通しており、ハッキングやプログラムの書き換えは朝飯前。

「レスキュー・ウォリアー」

救助活動を得意とする。

様々な災害時の状況に応じた装備がある。

更に、怪我に対する応急処置を完璧にこなす。

「ダッシュ・ウォリアー」

機動力は高く、走るのが得意。

スピード・ウォリアーの兄。

「ラピッド・ウォリアー」

攻撃力はスピード・ウォリアーとダッシュ・ウォリアーより高いが、機動力が低い。

スピード・ウォリアーの相棒。

「マックス・ウォリアー」

攻撃力が高く、接近戦に長けている。

「ジャステイス・ブリンガー」

精霊の中では正義感が一番強い。

「救世竜 セイヴァー・ドラゴン」

セイヴァー・スター・ドラゴンに進化するために必要な唯一のチューナーモンスター。

「スターダスト・シャオロン」

スターダスト・ドラゴンと共にセイヴァー・スター・ドラゴンのシンクロ素材となる。

「アンノウン・シンクロン」

球体の形をした正体不明の生物。

「フォーミュラ・シンクロン」

遊星が究極の進化、アクセルシンクロを使用するために必要なシン

クロチューナー。

「ボルト・ヘッジホッグ」

背中の針がボルトになっているハリネズミ。

ボルトを爆弾にして攻撃する。

『スキルエフェクト』

主に手札や墓地から効果を発動するカードを元に造られた効果を使用できる。

ただし、一回の戦闘で三分の二の効果しか発動できない。

「エフェクト・ヴェーラー」

スキルエフェクト『エフェクト・インバリッド』

相手のISの特殊能力を一時的に無効にする。

「ネクロ・ディフェンダー」

スキルエフェクト『ネクロ・ガーディアン』

半径10メートル以内の相手の攻撃を5秒間無効にする。

『スター・ドラゴン・システム』

龍星（星竜）の究極の力。

スターダスト・ドラゴンとその派生から生まれるドラゴンの時のみ使用できるが、遊星とのシンクロ率が100パーセントでないと

発動しない。

そして、最大の弱点は、使用後に星竜のシールドエネルギーがほぼゼロとなってしまう、星竜が戦闘不能状態となってしまう。更に、遊星の肉体と精神が大きく疲労してしまう。

『スターライト・ロード』

「スターダスト・ドラゴン」使用時に発動可能。

広範囲に星屑の光を散布させ、敵のあらゆる攻撃を吸収して「癒し」の力へと変換させる。

遊星が味方と判断したものの全ての心と体の傷を癒し、ISのシールドエネルギーと装甲の損傷を回復させる。

その後、攻撃力を倍増させた「シューティング・ソニック」を放つ。

『スターダスト・オーバードライブ』

「セイヴァー・スター・ドラゴン」使用時に使用することができる。人々の誰かを助きたい、助けて欲しい気持ちの心を輝きをセイヴァー・スター・ドラゴンが吸収する。

それにより、攻撃力、防御力、機動力を上昇させる。

設定 その3 シンクロフォルム（随時更新、ネタバレあり） 4月15日更新

『シンクロフォルム』

遊星がバックアップでチューナーモンスターを呼び出し、チューナーモンスターとISをチューニングして、ISに新たな進化の力を造りだす。

ただし、チューナーモンスターとIS、そして、パイロットとの相性が合わないと使用する事ができない。

主に、ISの装甲と能力をパワーアップさせる。

ちなみに、遊星が作製したチューナーズ・カードと呼ばれる龍星（星竜）とリンクしたカードによって、バックアップで呼び出さなくても、いつでもチューナーモンスターを呼び出してシンクロフォルムを使用できるようにした。

「白式」＋「ジャンク・シンクロン」

↓「白式・ジャンクフォルム」

機動力と速力を大幅に上昇している。

ジャンク・シンクロンが白式のシステムと、シールドエネルギーのエネルギー効率を良くするように常に調律を行っているので、一夏が行う白式のコントロールが以前より簡単になっている。

「紅椿」＋「デブリ・ドラゴン」

↓「紅椿・スターダストフォルム」

白銀に輝く両翼が背中に現れ、紅椿の装甲の一部がスターダスト・ドラゴンに似た形になる。

雨月と空裂にスターダスト・ドラゴンの装飾が施される。

「ブルー・ティアーズ」＋「ターボ・シンクロン」

↓「ブルー・ティアーズ・ターボフォルム」

ライフルとビットのビームの威力がアップする。

そして、『ブルー・ティアーズ』のビット数が八機、ミサイルが四機に増え、ターボ・シンクロンが操作する。

これにより、今まで出来なかったライフルとビットの同時攻撃を行うことができる。

更にビームの軌道を簡単に曲げることができる。

「甲龍」＋「ニトロ・シンクロン」

↓「甲龍・ニトロフォルム」

両肩の「龍砲」の攻撃力が文字通り爆発的に上昇している。

更に、「双天牙月」が対象を斬りつけると、爆発が起きる。

「ラファール・リヴァイヴ・カスタム——」＋「クイック・シンクロン」↓

「ラファール・リヴァイヴ・クイックフォルム」

『ジャンク・アーチャー』『ジャンク・ガードナー』『ジャンク・デストロイヤー』『ジャンク・バーサーカー』の力の一部使用することができる。

ジャンク・アーチャーの射撃の精密度。

ジャンク・ガードナーの高い防御力。

ジャンク・デストロイヤーの二つの腕。

ジャンク・バーサーカーの破壊力とバーサーカー・アックスを使用する。

「シュヴァルツェア・レーゲン」＋「ロード・シンクロン」

↓「シュヴァルツェア・レーゲン・ロードフォルム」

黒を主体としていた装甲の所々に黄金の装甲が構成され、背中にはマントに似た大剣が携えている。

設定 その4 チーム5D's (随時更新、ネタバレあり) 4月17日更新

十六夜アキ専用IS。

『ブレイブ・ローズ』

待機状態は薔薇が描かれた指輪。

アキのD・ホイール『ブラッディー・キッス』が変化したもの。

「ブラック・ローズ・ドラゴン」

西洋の鎧に薔薇の花びらが飾られた姿となる。

接近戦向けだが、中距離戦も可能。

基本装備『ローズ・ソード』

鰐が薔薇を象った西洋剣。

『ローズ・シールド』

薔薇が描かれた円盾。

『ローズ・ウィップ』

鋭い棘の鞭。

特殊能力『ブラック・ローズ・ガイル』

鎧を飾る無数の花びらが、十六枚の花びらの形をしたビット兵器『

ローズ・ビット』となる。

鎖を作り出す『ローズ・ビット・バインド』。

ビームを撃つ『ローズ・ビット・ビーム』。

刃となる『ローズ・ビット・ブレード』。

炎を生み出す『ローズ・ビット・フレア』。

それぞれ四枚ずつで能力が異なり、対象を追い詰める。

ジャック・アトラス専用IS。

ぐれんおうち
『紅蓮王』

待機状態は『レッド・デーモンズ・ドラゴン』がメインに描かれ、所々にスカルの装飾が施された派手な手甲。

ジャックのD・ホイール『ホイール・オブ・フォーチュン』が変化したもの。

「レッド・デーモンズ・ドラゴン」
ジャックのバトルスタイルである『力』^{パワー}を象徴するモンスター。
基本装備『デーモンアームズ』
全てを破壊する手甲。

鋭い爪に常に炎を纏っている。
特殊能力『デモン・メテオ』
必殺技のアブソリュート・パワー・フォースで対象を殴り飛ばした後、周囲を膨大な炎で包み込む。

「スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン」
レッド・デーモンズ・ドラゴンにチューナーモンスター二体をダブルチューニングすることで生まれる姿。

全てのISを凌駕する圧倒的な攻撃力を誇る。

基本装備『デーモンアームズ・スカーレッド』

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの究極のパワーに耐えられる手甲。

バックアップ。

「ダーク・リゾネーター」
音叉を持った悪魔。

「バリア・リゾネーター」
背中に発電器を背負った悪魔。

クロウ・ホーガン専用IS。
『ブラック・フェニックス』

待機状態は大きめの黒い羽に、赤い小さな宝石が飾られたのフェザードペンダント。

クロウのD・ホイール『ブラック・バード』が変化したもの。

「ブラックフェザー・ドラゴン」
攻撃力と防御力が高いが、機動力は若干低い。
防御の際は、エネルギーシールドではなく、背中の巨大な羽で防御する。

基本装備『シャイニング』『ダークネス』
光線と弾丸の二丁拳銃。

『カオス・フェニックス』
シャイニングとダークネスを融合することで造られる巨大な銃、カオス・フェニックスに闇のエネルギーを込め、実弾を光線に乗せて発射する。

特殊能力『ダメージ・ドレイン』
敵の攻撃を自分に引き寄せてダメージを喰らう。
その際に白色の翼が黒色に変化する。

『ブラック・バースト』
ダメージ・ドレインで喰らったダメージの分だけ相手のISの攻撃力と防御力と機動力を一定時間下げる。

龍亞専用IS。

『ホープ・ヒーロー』

ハイテク機能がついた黄色の機械の腕輪。

龍亞のデュエルボードが変化したもの。

「パワー・ツール・ドラゴン」

イコライザを複数同時に装備することによって、攻撃力と防御力が徐々に強化されていく。

基本装備『パワー・ドライバー』『パワー・ショベル』。

両腕に装備しているドライバーとショベル。

刀などの普通の武器よりかなり強力？

特殊能力『パワー・サーチ』

他のISの武装を完全複製して、ホープ・ヒーローのイコライザにする事ができる。

「ライフ・ストリーム・ドラゴン」

パワー・ツール・ドラゴンの進化した真の姿。

シンクロチューナーでもある。

基本武器『ライフ・ハルバード』

命の息吹きを込めることのできる矛。

特殊能力『ライフ・ストリーム・フィールド』

中距離から遠距離の攻撃を三回まで無効にする。

『ライフ・エナジー・バースト』

味方全員のシールドエネルギーを回復させる。

バックアップ。

「D・ライトン」

懐中電灯のロボット。

龍可専用IS。

『フェアリー・ガーディアン』

可愛らしい妖精や神聖な動物が刻まれた翡翠色の腕輪。

龍可のデュエルボードが変化したもの。

「エンシエント・フェアリー・ドラゴン」

防御力が高いが、攻撃力が低く、1対1の戦いでは圧倒的に不利。

しかし、他のISへのサポート能力はトップクラスで、ISでは珍しい支援型の機体である。

基本武器『フェアリー・フェザー』

美しい羽で作られた羽毛扇。

特殊能力『フィールド・クリエイト』

様々な能力を持った特殊な空間を作り出し、味方のISに特殊な効果を加える。

ブルーノ（アンチノミー）専用IS。

『デルタ・ストライク』

待機状態はピンク色の透明なサングラス。

D・ホイール『デルタ・イーグル』変化したもの。

「TG パワー・グラディエイター」

緑色の剣闘士の鎧を身に纏い、
基本装備『パワー・アックス』

片手で振るえる小さな両刃の斧。

「TG ブレード・ガンナー」

アクセルシンクロにより生まれるシューティング・スター・ドラゴンと同じアクセルシンクロモンスター。

基本武器『ブレード・ガン』

緑色の巨大な銃剣。

バックアップ。

「TG カタパルト・ドラゴン」

頭に発射台が合体した竜。

「TG ジェット・ファルコン」

体に戦闘機が合体した鳥。

「TG ワンダー・マジシャン」

機会の体を持つ魔術師で、ブルーノのシンクロチューナー。

第1話 次の戦いの舞台は異世界？（前書き）

小説は一話一話短めに投稿します。

それでは、まず遊星が異世界に行くところです。

第1話 次の戦いの舞台は異世界？

全ての戦いが終わり、ネオドミノシティを破滅の未来から救った不動遊星は平和な時を過ごしていた。

そんなある日、D・ホイールで道を走っていると突然、右腕の『ドラゴンヘッドの痣』が輝きだし、真紅の光は遊星とD・ホイールを包み込む。

「何だ！？ くっ、うわあああああっ！！！」

次の瞬間、遊星とD・ホイールはネオドミノシティから消えた。

ネオドミノシティとは異なる世界の日本にある『IS学園』。

そこの敷地内にある競技場『ISアリーナ』で近未来的な装甲を身に着けた二人の少年少女が剣を振るう。

「行くぞ、一夏！」

一夏と呼ばれた少年は黒髪で容姿が整っており、白を基調とした装甲を身に着けている。

「ああ、箒！」

箒と呼ばれた少女は長髪の黒髪に凜とした可愛らしさがあり、黒を基調とした装甲を身に着けている。

二つの剣が何度も交差すると、一夏の瞳に空間の歪みが見えた。

そして、何かが勢い良く出て来るのを見ると、一夏はとっさに片腕で箒を抱き締めた。

「い、一夏!?!」

一夏に抱き締められた箒は顔が真っ赤になる。

「箒、ちょっと待ってろ!」

一夏は箒を抱き締めながら上空へ高く飛び上がる。

それと同時に真紅のバイクは数回バウンドし、それを乗ってたドライバーが転がって倒れた。

「大丈夫か、箒?」

「あ、う、うん。ありがとう……」

箒は俯きながら一夏に礼を言う。

「あの人が心配だ。下に降りよう」

「わ、わかった」

箒は心臓の鼓動が激しくなるのを感じながら頷く。

ゆっくりと地面に降りると二人の装甲は消え、体のラインがくつきりとするスーツ姿となり、急いでドライバールの元へ向かう。

一夏はドライバールのヘルメットを外した。

（この人、なかなかのイケメンだな）

素顔を最初に見た感想はそれだった。

（でも、凄い個性的な髪だな……左頬のは入れ墨なのか？）

かなり特徴的な髪と、左頬に刻まれている不思議な形の黄色の線に疑問を抱きながら一夏はドライバールの体を持ち上げる。

「箒、背中に乗せるのを手伝ってくれ」

「ああ」

箒に手伝ってもらい、一夏はドライバールを背中におぶる。

「俺はこの人を医務室に連れて行くから、箒は千冬姉を呼んできてくれ」

「わかった、気をつけるんだぞ」

「ああ」

一夏と箒は一旦別れた。

それから三十分が過ぎた頃。

「う……うん……？」

遊星はゆっくり目を開けるとそこには見られない白い天井が広がる。

「ここは……？」

「目が覚めたな」

振り向くとそこには二十代半ばのスーツ姿の黒髪の女性がいた。

その堂々とした姿や纏う空気が只者ではないと感じられる。

「私の名前は織斑千冬。お前の名前は？」

「俺の名前は不動遊星だ」

「では、不動。目覚めたばかりで悪いが、色々話を聞かせてもらうぞ」

「……何から話せばいい？」

千冬は顎に手を添え考える動作をする。

「織斑……いや、お前を医務室まで運んだ私の弟の一夏が歪んだ空間から出て来たと言ったが、お前はどこから来たんだ？」

「俺は……ネオドミノシティから来た」

「ネオドミノシティ……？ そんな名前の都市は聞いたことも無いぞ」

「ネオドミノシティを知らない……？ つ！？」

遊星は窓からの見たことのないネオドミノシティとは違う近未来的な世界の風景に驚く。

「何だ、ここは！？」

「落ち着け、不動。ここはIS学園だ。知らないのか？」

（IS学園？ デュエルアカデミアじゃない？ もしかして……）

遊星は右腕の痣に触れ、全てを悟った。

「そう言うことか……」

「ちょっと待て。一人で勝手に納得するな。ちゃんと私に説明しろ」

「ああ、すまない」

遊星は千冬に視線を向ける。

「信じられないかもしれないが、俺はこの世界とは別の異なる世界から来た」

「何を馬鹿な事を言っている」

千冬は呆れたようにバツサリと言い捨てる。

「嘘だと思うなら俺の側にあった赤いバイクー―D・ホイールを見ればこの世界のテクノロジーとは全くの別物だとすぐに分かる」

「ほう……それは興味深いな。良いだろう、そのD・ホイールとやらはISアリーナにある。付いて来い」

遊星は畳まれた上着を羽織り、千冬の後について行った。

第2話 愛機がまさかのIS変形？（前書き）

えっと、時間軸は一夏がセシリアと模擬戦をした後で、鈴音が来る前とします。

まだ本編には行けません……。

今回は遊星のIS登場です。

第2話 愛機がまさかのIS変形？

遊星と千冬はISアリーナへと向かっている。

「そうだ。異世界の住人なら、先にお前にはISの事を話しとかな
いとな」

「IS……？」

「IS。正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での
活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツだが、従来の兵器
よりも能力が高い。そして、このIS学園はIS操縦者育成機関だ」

「なるほど……俺の世界には無いものだな」

「だが、何故か分からないことにISは女にしか使えない」

「ISが女にしか使えない……？ あなたの弟が俺を見つけたんじ
ゃないのか？」

ISが女にしか使えないならこのIS学園の生徒は女子のみと言う
ことになる。

遊星の鋭い指摘に千冬は若干驚きながら言う。

「なかなか鋭いじゃないか。確かにISは女にしか使えないが、一
夏は異例で『世界で唯一ISを扱える男子』なんだよ」

「世界で唯一か……」

「着いたぞ。ここがISアリーナだ」

ISアリーナに入ると、フィールドの中心に遊星のD・ホイールがポツンとそこにあった。

そして、D・ホイールをマジマジと見る一夏と箒の姿。

「織斑、篠ノ之。待たせたな」

「あ、千冬姉」

ガシッ！　グググッ！！

「イタッ！　イタタタタッ！？」

「一夏！？」

千冬は一夏の頭を掴み、アイアンクローをする。

「何度言えば分かる？　織斑先生だろ、馬鹿者」

「千冬姉、じゃなくて、織斑先生！　ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！」

遊星は初めて見る光景にパチクリさせる。

千冬のアイアンクローから解放された一夏は頭を押さえながら遊星に近づく。

「えっと、始めまして。俺は織斑一夏です」

一夏が挨拶をすると、箒がそれに続く。

「私は篠ノ之箒です」

「俺は不動遊星だ。礼がまだだったな。助けてくれてありがとう」

三人は挨拶を交わし、千冬はD・ホイールを見る。

「これがD・ホイールか。詳しく中身を見てみたいものだな」

「構わないが、その前に動くどうか確かめたい」

「わかった。やってみろ」

派手に転んでしまったのでD・ホイールが無事に動くかどうかを確かめたかった。

遊星はD・ホイールの電源を入れる。

D・ホイールはいつも通りに動き出した。

「ふうー、大丈夫だ」

遊星がホッと一安心するが、D・ホイールに予想外の出来事が起こってしまう。

『ISモード、初期設定を開始します』

「は？」

突然D・ホイールから音声流れ、遊星は啞然とし、一夏達は首を傾げる。

『マスター認証、不動遊星。ボルカニック遊星号改め、個体名称を登録してください』

「個体名称……？」

「不動！ 状況は全く理解できないが、そのISに名前を付けろ！」

千冬に言われ、遊星は名前を考える。

（名前、か……）

遊星はふと空を見上げた。

夜の闇に染まりつつある空に輝く無数の星たち。

遊星の脳裏には白銀に輝くあの竜の姿が浮かび上がった。

「星竜……お前の名前は星の竜、星竜だ」

『了解。個体名称・星竜を登録しました。ISモード、初期設定完

了。起動します』

D・ホイールが粒子分解され、遊星に纏い、新たな形へと姿を変えた。

遊星の体全体にD・ホイールと同じ色の真紅を基調とした装甲が纏う。

装甲の両肩には『チーム5D's』のマークが描かれていた。

（不思議だ……体がとても軽い）

遊星は今まで感じたことのない心地よい感覚を得た。

状況を理解できていない一夏たちは驚きを隠せなかった。

「千冬姉、これは……？」

「わからん。だが、男で二人目のIS起動者が現れたと言うことだ」

「でも、バイクがISになるなんて……」

すると、遊星の目の前に映像が映し出された。

『カードをスキャンしてください』

「カード……？」

遊星はおもむろにデッキを取り出した。

『スキャン開始』

突然デッキが勝手に宙に散らばり遊星を中心に螺旋状に舞った。

星竜はデッキの中からモンスターを選択し、不思議な光を当てる。

そして、一夏達にはあまりにも信じられない光景を目にする。

遊星の周囲にカードに描かれた見たことのないモンスター達が姿を現した。

それはソリッドヴィジョンによる映像だが、一夏達にとっては本当にモンスターがそこにいるように見える。

「みんな……」

遊星にとっては幾つもの激戦を戦ってきた仲間であるモンスター達に笑みを浮かべる。

モンスター達は頷くと無数の光の玉となって、星竜の中に入った。

『スキャン完了』

螺旋状に飛んだカードは遊星の手に戻る。

遊星は思考が追いつかず、ぼーっとしてしていると千冬が話しかけられた。

「不動。お前に提案がある」

「提案？」

千冬の提案に遊星だけでなく一夏と箒も度肝を抜かれる事になる。

「ああ。このIS学園に入れ」

「…………えええええええええええええつ！？」

一夏と箒は絶叫し、遊星は口をポカーンと開けた。

（俺がこの学園に……？）

こうして遊星にとって初めての学生生活が始まることとなった。

しかし、それは休む暇さえ与えないドタバタな日々の幕開けだったのだ。

何故ならこのIS学園の生徒は男子は一人でそれ以外が全員女子だからである……。

.

第3話 クラスメイトは女ばかり! (前書き)

遊星が遂に編入です!

さて、どうなることやら……。

(ー)

第3話 クラスメイトは女ばかり！

朝。

遊星はいつもの服装からIS学園の制服に身を包み、好物のミルクを飲んでいた。

（まさか俺が学校に行くことになるとはな……）

昨日の夜、千冬は遊星をIS学園で生徒として保護する代わりに、D・ホイールの一部の技術を提供するよう交渉してきた。

遊星は迷ったが、異世界で頼れるものが無いため背には変えられないと思い承知した。

それに、何も全ての技術を提供するわけでもないので、モーメント以外の技術を教えれば問題ないと判断したのだ。

千冬は早急にIS学園の関係者と話をし、すぐに遊星の編入手続きを終わらせてめでたくIS学園の生徒の一人となった。

ちなみにクラスは千冬が担当の1年1組で、一夏と箒と同じクラスでもある。

遊星は学生寮の一部屋を与えられ、そこで生活することとなった。

そして、編入初日の時間が迫り、遊星はテーブルに置かれた一枚のカードを手取る。

それは赤き竜の痣の紋章が描かれたカードだった。

そのカードは遊星のISとなった星竜の待機状態の姿である。

遊星はカードを胸ポケットに入れ、与えられた教科書や筆記用具などを鞆に入れて部屋を後にする。

ショートホームルームの時間が迫り、遊星は職員室でIS学園の教師に挨拶すると担当教師である千冬ともう一人。

「始めまして。私は1年1組の副担任の山田真耶です」

緑の髪に優しそうな容貌の女性、山田真耶だった。

「俺は不動遊星です」

「では、不動君。これからよろしくね」

「はい」

そして、これから一緒に過ごしていくことになる1年1組の教室の前についた。

「不動はここで私が呼ぶまで待ってろ」

「わかった」

千冬と摩耶が先に教室に入り、ショートホームルームを始める。

遊星は壁により掛かり、窓から外を見る。

（正直、今までで一番緊張するな……）

遊星は今まで多くの体験をしてきたが（一般人には全く考えられないものばかり）、それを超える緊張感が遊星の心を締め付けている。

「入れ、不動」

千冬の呼び出しに遊星は意を決して教室の扉を開けて中に入る。

1年1組の生徒全員の視線が遊星に向けられる。

（本当にほとんど女子なんだな……）

すると、教卓の前が一番前の席に座っている一夏と目が合い、一夏は遊星に向けて苦笑を浮かべる。

遊星軽くうなずき、千冬の隣に立つと、心を落ち着かせて取りあえず挨拶をする。

「始めまして、不動遊星だ。これから宜しく頼む」

軽く頭を下げて、問題なく挨拶をしたつもりだが、何故か教室に沈黙が走る。

（えっと……あれ！？ ひょっとして俺は何かミスをしてしまったのか！？）

遊星は表情には出さなかったが、内心かなりオロオロと焦っている。

『キ……』

「キ？」

『キャアアアアアアアアッ！！！』

突然クラスのほとんどの女子が大声で叫び、教室のガラスが震え、恐らく隣の教室にまで響いているだろう。

「男子だ！」

「しかもイケメン！」

「凄いクールに見える〜！」

「私と付き合っ〜！」

「不動く〜ん！ こっち向いてえ〜！」

女子の黄色の声に遊星は思わず後ずさりしたくなかったが、何とか踏ん張った。

（と、取りあえず、歓迎されているみたいだな……）

遊星は冷や汗を流しながらも一安心する。

「不動は空いている席に座れ。この後一時間目はグラウンドで訓練だ。全員遅れるなよ！ 織斑、お前は不動を案内しろ」

「あ、は、はい！」

「では、ショートホームルームを終了する。解散！」

遊星はたくさんの女子達の視線を受けながら鞆を自分の席に置く。

そして、一夏は遊星に近づく。

「じゃあ、遊星、行こうか」

「ああ。ありがとう、一夏」

遊星は一夏の案内で更衣室へ向かった。

第4話 ウォリアーズ・フォーラム（前編）

更衣室にて遊星は既に疲れた表情をしながら、渡されたISスーツに着替える。

遊星は更衣室に来るたった数十分でかなりの体力を消耗してしまったのだ。

何故なら、移動中にクラスメイト（当然女子）からどんどん遊星に話しかけたり、話の話題にされたりしている。

これで疲れない方が不思議である。

「学校には一度も行ったことないから分からないが、俺たち以外女子はキツいな……」

思わず呟いた言葉に一夏は耳を疑う。

「え？ 遊星って、学校に行ったこと無かったのか？」

「ああ、俺の住んでいる環境に恵まれていなくてな。勉強は全部独学だ」

「でも、あのD・ホイールだっけ？ あれを自分で造ったんだろ？」

実は昨日、遊星は一夏と箒にも自分が異世界から来たと話した。

その際にD・ホイールの事を話しておいたのだ。

「まあ、厳密には仲間達と一緒に造ったんだ。新しいエンジンを設計したり、プログラムを造ったり……」

「それって、充分凄すぎる領域だと思いますが……」

（遊星って、天才じゃないのか……？）

あまり勉強が得意ではない一夏はちょっとショックを受けながらISスーツに着替える。

ISスーツに着替えた遊星と一夏はグラウンドに行き、女子の視線に耐えながら並ぶ。

すると、それを狙ったかどうか不明だが、ジャージ姿の千冬が突然とんでもない事を言い始めた。

「よし。不動とオルコットには模擬戦をしてみよう」

「なっ!？」

（ま、待ってくれ! 千冬じゃなくて、織斑先生! 俺はまだ一回しかISを動かしたことないのだが!？）

遊星はまた内心オロオロしてしまう。

「不動さんは専用機をお持ちになられているのですか？」

セリシア・オルコット。

金髪に透き通った碧の瞳の少女で、IS学園のイギリス代表候補生である。

「ああ。だが、まだ実戦を行った事がないからな。協力してくれ」

「わかりましたわ。では、不動さん。私がお相手しますわ」

セリシアは前に出ると、耳についている蒼のイヤークラスが一瞬輝き、セリシアの専用機、中距離射撃型IS『ブルー・ティアーズ（蒼い雫）』を起動させる。

（勝手に話を進められた……）

遊星は心が沈みながら前に出て星竜のカードを持つ。

「行くぞ、星竜」

遊星は星竜を起動させるが、セリシアは少し苦笑いを浮かべる。

「あの……不動さん？」

「何だ？」

「まさか、その貧相なISで戦うのですか？」

確かに星竜はブルー・ティアーズに比べて武装とか見た目がかなり

貧相である。

しかし、遊星は瞳を閉じて笑みを浮かべる。

「勘違いするな。まだ、俺のターンはこれからだ。行くぞ、星竜！
『ウォリアーズ・フォルム』発動！」

右腕を掲げると、遊星の周りを無数のカードの映像が現れて舞う。

「フォルムチェンジ！ 『ジャンク・ウォリアー』！！」

ジャンク・ウォリアーのカードと星竜が輝き、光に包まれる。

光が止むと、星竜がジャンク・ウォリアーに似た形状となる。

ウォリアーズ・フォルムとは、星竜がスキャンしたモンスターの姿
形を元に星竜の外装や装備の形状が変化するのである。

「な、何ですの……その姿は？」

セリシアはもちろん、クラスメイト全員が驚きを隠せない。

「これは他のISには無い星竜だけの能力だ」

遊星は空中に上がり、慌ててセリシアも同じ高さまで上がる。

「織斑先生、始めてくれ」

「良かろう。セシリア・オルコット対、不動遊星。模擬戦、始め！
！」

千冬の合図にセシリアはレーザーライフル「スターライトmk――」で遊星を狙い撃つ。

「行きますわよ！」

遊星は両足のスケート靴に似た靴で空中を滑走しながらレーザーを軽々と避けるが、実際のところどうすれば良いか分からなかった。

遊星は喧嘩はそれなりに強いが戦闘のプロではない。

まず、どうやって戦えばいいのかすら分からない。

（当たり前だが、デュエルとは違うからな……モンスターを元にした姿とは言え）

そんな事を考えながらも、器用にセシリアの攻撃を避けていく。

その時、遊星の頭に声が響いた。

《何を恐れているんだ、マスター？》

（誰だ、お前は？）

《おいおい……長年一緒に多くのデュエリスト達と戦ってきたこの俺を忘れたのか？》

（まさか……お前、ジャンク・ウォリアーなのか!?!）

《その通り、正解だ。俺達カードの精霊が全員、星竜に入ってしまった

ってな。こうやって話すことが可能になった。星竜の待機状態とフォルムチェンジをしている時に話せる》

（そうか……何か嬉しいな）

《嬉しい？》

（ああ。龍可みたいにお前達と話したかったんだ。いつも一緒に戦ってくれて、側にいてくれる、俺の大切な仲間達であるお前達と……）

遊星の言葉にジャンク・ウォリアーと星竜の中にいるカードの精霊達は嬉しさがこみ上げてきた。

《マスター……よし、じゃあ、今はあの娘を倒すために俺達がサポートしてやる！》

（ふっ……頼りにしている！）

《それじゃあ、行くぜ！　まずは間合いを詰めて必殺技だ！》

（ああ！）

遊星はただ避けるだけの行為を止め、セシリアに向かって駆ける。

（仕掛けてきた！？）

セシリアは遊星の動きが明らかに変わったことを見抜いた。

（それなら、私も少し本気を出させてもらいますわ！）

セシリアはビット型の武器であり、このISの名前の由来でもある
「ブルー・ティアーズ」を四機出撃させる。

不規則な動きをしながらレーザービームを発射する。

《マスター、この距離なら俺の拳は充分届く！ 派手にぶちかましてやれ！》

ジャンク・ウォリアーに言われ、遊星は右手を強く握りしめ、背中のブースターから炎が勢い良く噴き出し、星竜のスピードが急上昇する。

「スクラップ・フィスト!!」

巨大な紫色の拳のオーラが、前に突き出した右拳から遊星を包み込む。

ブルー・ティアーズのレーザービームを弾き、セシリアに突撃する。

（ミサイルが間に合わない!?）

「くっ！」

セシリアは横に回避しようとする。

だが、遊星が逃がすわけがない。

「行けえっ!!!!」

遊星の右拳はセシリアの左肩を強く打ち、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーを減らす。

（まさか、この私が……）

セシリアは一旦距離を離し、予想外の出来事に驚くばかりだった。

遊星はフツと笑みを出す。

「まだこれからが俺のターンだ！ 行くぞ、フォームチェンジ！」

再び遊星の周りを無数のカードが舞う。

第5話 ウォリアーズ・フォーラム（後編）（前書き）

遊星VSセシリアの模擬戦後編です！

今日中には設定を追加で書き直しますので！

第5話 ウォリアーズ・フォルム（後編）

「フォルムチェンジ！ 『ニトロ・ウォリアー』！」

遊星の周りを舞うニトロ・ウォリアーのカードと、星竜が光に包まれる。

光が止むと、星竜がニトロ・ウォリアーに似た緑色の強靱な肉体の姿形となる。

「ISの形が変わった！？ こうなったら！」

セシリアは驚きながらライフルとビットからビームを連射する。

遊星は強靱な力を秘めた両腕でビームを爆撃しながら撃ち落としていくと、頭にジャンク・ウォリアーの代わりに違う声が響く。

《うおおおおおっ！！ 俺の魂のニトロが燃え上がるぜええええっ！！！！》

（え、えつと……ニ、ニトロ・ウォリアーか……？）

遊星は思わず聞き返してしまう。

《おうよ、遊星アニキ！ ウォリアーズ屈指のパワーファイターのニトロ・ウォリアーだぜ！！》

（お前、そんな性格だったのか……）

《細かいことを気にしたら負けだぜ！ とつとあの嬢ちゃんのライフポイントをゼロにしようぜ！》

（ライフポイントじゃなくてシールドエネルギーだぞ。まあ、良いか。行くぞ、ニトロ・ウォリアー！）

《だったらまずはあのうざったいビットを破壊するか……なら、俺の特殊能力を使い！》

（特殊能力？）

《ウォリアーズ・フォルムにスキャンしたモンスターの効果を元に造られた特殊能力がそれぞれに備わっている。俺の特殊能力を使ったらすぐにターボにフォルムチェンジしてあのビットを破壊してくれ！》

（わかった！）

遊星はニトロ・ウォリアーの言葉を信じて遊星は二つの拳に力を込め、強くぶつけ合い、衝撃波を放つ。

「ダイナマイト・インパクト！」

衝撃波は空気を伝わり、ビットに襲いかかる。

すると、ビットはぴたりと動きを止めた。

「ブルー・ティアーズ！？」

ニトロ・ウォリアーの特殊能力、ダイナマイト・インパクトは強力

な衝撃波を放ち、ISや武器の行動を数秒間停止させるのだ。

「フォルムチェンジ！『ターボ・ウォリアー』！！」

遊星はすぐさま星竜をターボ・ウォリアーに似た赤色で所々が車のパーツで形成された姿形にする。

《行きますよ、主！》

（ああ、ターボ・ウォリアー！）

遊星は右手を振り上げる。

「アクセル・スラッシュ！」

右手にある鋭い五つの爪から巨大な赤色のオーラを纏い、四つのビツトを一度に破壊する。

《接近してからの奇襲攻撃があるかもしれません。私の特殊能力を使用してください》

（わかった！）

「ハイレート・パワー！」

星竜に不思議な赤色のオーラを纏い、セシリアとの間合いを一気に詰める。

「そう簡単にやられたりはしませんわ！」

セシリアはブルー・ティアーズに残っている二機のミサイルを撃つ。

ミサイルは遊星に直撃し、大きな爆発が起きる。

すると、煙の中から再び巨大なオーラを纏った五指の爪が現れ、セシリアを攻撃し、シールドエネルギーを大きく剥ぎ取った。

「キャッ!？」

セシリアはそのままぶっ飛ばされるが、何とか体勢を立て直す。

「ミサイルを近距離で受けたはずなのにどうして攻撃に転ずることが……」

その疑問を煙の中から出てきた遊星が答える。

「ターボ・ウオリアーの特殊能力、ハイレート・パワーは一度だけ相手の攻撃の威力を半分にする事ができる。シールドエネルギーは確かに減ったが、大した数値じゃない!」

「そ、そんな……」

（な、何ですの!？ 不動さんのISの能力は! 多くの姿形を変えて、戦況を変える能力を使う……こんなISがありえるのですか!？）

セシリアは今までにないISの力と、それを見事に扱いこなす遊星に恐怖を覚えるのだった。

《さて、そろそろ戦いの終局が近付いていますね。クラスメイトの

皆さんが見ていることですし、最後は我らウォリアーズの王をお呼びして、最後を飾りましょう。彼を呼び出すのも良いですが、それはこれからの強敵が現れた時にとっておくのが乙でしょう」

（なるほどな……それにしても、ターボ・ウォリアーがここまで計算高い性格なのが驚きだな）

《……戦士故の性格と言いますか、他のウォリアーズは少々戦闘好きが多いので私みたいなのが居ないと暴走しかねないので》

意外と苦勞しているターボ・ウォリアーだった。

（そ、そうか……これからも頼むぞ）

《はい。主の為ならいつでも全力を尽くします》

ターボ・ウォリアーとの話が終わった遊星は右手を前に出す。

「フォルムチェンジ！ 『ロード・ウォリアー』！！」

今度は星竜を金色に輝き、プライドの高い王の風格を見せるロード・ウォリアーに似た姿形となる。

（頼むぞ、ロード・ウォリアー！）

《断る！》

初めての話の第一声を即答で断られた。

（何だと！？）

《我が王だからだ。命令されるのは好まん……だが……》

(ん?)

《遊星がどうしてもと言うなら協力してもやらんことはない!》

ウォリアーズの王がまさかのツンデレキャラクターだった。

(……お前の力が必要なんだ、ロード・ウォリアー!)

《良からう! 王である私の力を存分に使うが良い!》

ツンデレのツンツンモードからデレデレモードに入ったロード・ウォリアーだった。

《さて……あの娘、王である私に銃口を向けるとは何と愚かな。まずは私の力を見せてくれよう!》

「バックアップ・サモン! 来い、『スピード・ウォリアー!』
『ロード・ランナー!』!」

遊星の目の前に特殊なアーマーとローラースケートを履いた戦士と、靴を履いた可愛いピンク色の鳥が現れた。

遊星が呼び出したのは、他のISには無い援護支援機である。
バックアップ

これも星竜の能力の一つで、主にシンクロモンスター以外のスキヤンしたモンスターを呼び出し、補助として共に戦うのである。

だが、本来なら一体呼び出すのに、シールドエネルギーの10パーセントから20パーセントをコストで消費するのだが、ロード・ウオリアーの特殊能力でシールドエネルギーのコストをゼロにしている。

《うっしあ！ 行こうぜ、鳥ちゃん！》

《うん、行くよー！》

遊星のデッキの中でも特に走りが得意な二体はセシリアに向かって走り出す。

「くっ！ もう、今度は何ですの！？」

セシリアは若干混乱しながら取りあえずライフルでスピード・ウオリアーを狙い撃つ。

《ちくしょう！ やっぱ俺狙いかよ！ これだから女は！》

《大丈夫、僕に任せて！》

ロード・ランナーはスピード・ウオリアーの前に出てビームの直撃を受けるが、ロード・ランナーは無傷だ。

《今だよ！》

《サンキュー！ 行くぜ、ソニック・エッジ！！》

スピード・ウオリアーは一気にセシリアの間合いに入り、必殺技の開脚蹴りでライフルを蹴り落とす。

「なっ!?!」

《今だ、マスター! ロード・ウォリアー!》

みんなが繋げてくれた勝利の道を突き進む。

遊星は星竜の機動力を全開にして右手に光の力を纏う。

「これでファイナルだ、オルコット! ライトニング・クロー!」

武器を全て失ったセシリアは何もすることができない。

セシリアは敗北を覚悟してギュッと目を閉じた。

「それまで!?!」

千冬の凜とした声が響き渡り、遊星は星竜を急停止させる。

「決着は既に着いた。二人とも、下に降りてこい」

遊星とセシリアはそれに従い、地面に降りる。

「模擬戦勝者、不動遊星」

千冬の言い渡した言葉にクラスメイトの黄色の声援が遊星とセシリアを包む。

「完敗ですわ……お強いんですね、不動さんは」

「いや……俺だけの力じゃ、絶対に勝てなかった」

「え？」

遊星は星竜を解除して待機状態にする。

「星竜の中にいる俺のたくさんの仲間達との絆がなければ俺は勝つことができなかった。だから……」

遊星は握った拳をセシリアに向ける。

「強くなる。仲間達との絆を守るために」

遊星の言葉にセシリアは笑みを浮かべて、手を差し出した。

（この方は……一夏さんとはまた違う男性の魅力をもっていますのね……）

「改めてご挨拶を。私はセシリア・オルコットです。これからよろしく願います、遊星さん」

遊星はセシリアに向けた拳を解き、その手を握り返して握手をする。

「ああ、よろしく頼む。セシリア」

その光景にクラスメイトの拍手喝采が鳴り響いたのだった。

.

第6話 鈍感とセカンド幼なじみ！（前書き）

タイトル通り、ようやく話が原作に入り、あの中国娘の登場です！

第6話 鈍感とセカンド幼なじみ！

セシリアとの模擬戦を終えたその夜。

『織斑くん、クラス代表おめでとう〜！』

一夏のクラス代表就任パーティーと。

『ようこそ、不動くん！これからよろしく〜！』

遊星の歓迎パーティーが行われた。

一夏はこういうのは苦手で、苦笑いをする。

ちなみに、一夏両側の隣に座っている筈はとても不機嫌で、セシリアは逆に機嫌がよかった。

そして、遊星は歓迎パーティーをしてくれたクラスメイトに向けて優しくは微笑む。

「ありがとう、みんな」

この微笑みにクラスメイトの女子の心を何人射抜いたことか……。

すると、ボイスレコーダーとカメラを持ったメガネをかけた女子が来た。

「話題の新人生のインタビューに来ました！ 新聞部副部長二年の黛薫子です！」

薫子は一夏にインタビューすると、次に遊星にインタビューする。

「さて、もう一人の話題の新入生の遊星くん。男としてISを使えて何か感想は!？」

遊星は何を言ったらいいかわからなかったが、取りあえず自分の思ったことを口にする。

「俺とISの星竜、そして仲間達との可能性を信じ、限界を越えたい」

「おう！　なかなかの熱い一言をありがとう！　それじゃあ、みんなで写真を撮ろうか！」

クラス全員で集まり、写真を撮る。

その際、箒とセシリアは一夏にくつついた。

その光景に遊星は閃き、納得するのだった。

（なるほど……箒とセシリアは一夏が好きなんだな。だが、一夏は鈍感で気づいていない……これは色々大変だな）

そう思いながら、遊星はミルクを口にする。

《……遊星、人のことを言えないだろ。昔のお前がまさにそうだっただろ……》

星竜に眠るとある竜が呟いた一言だった。

数日後。

一組ではとある話題で持ちきりだった。

それは、中国の代表候補生の転校生が来るらしい。

そんなことを一夏達が話していると、箒とセシリアが一夏に迫る。

「今のお前に女子を気にする余裕はないぞ！ 来月にはクラス対抗戦があるんだからな！」

「そうですわ一夏さん！ 対抗戦に向けてより実践的な訓練をしましょう！」

クラス対抗戦とは一年生のそれぞれのクラスからクラス代表を一人ずつ選び、トーナメント式で戦うのだ。

「確かに実戦経験は必要だよな……あ、そうだ。遊星も一緒に訓練やらないか？」

「「え？」」

「俺もか？」

箒とセシリアは一夏の予想外の言葉にハモる。

「遊星のISは多種多様の姿になれるだろう？ 一緒に訓練すれば、俺の経験にもなれるし、遊星は少しでも他の姿に慣れるようになるし、一石二鳥だろ？」

一夏の言うことはもっともだった。

遊星は星竜に秘めた能力をまだ数割も使いこなせていない。

「だが、俺なんか邪魔していいのか？」

遊星は二人に視線を向ける。

「な、何が言いたい！ 遊星！？」

箒は明らかな動揺をすると遊星は意地悪な笑みをする。

「それはもつと一夏のと一緒にの時——」

ガシッ！

箒は遊星の肩を掴み、言葉を遮る。

「それ以上言ったら斬る！」

「すまない」

遊星は箒の殺気に圧倒され、すぐに謝る。

「でも、一夏さんの言うことには一理ありますわ。それでは、遊星さん。放課後、私達と一緒に訓練しましょう」

セシリアは一夏の意見に賛成し、誘いを受けた遊星は首を縦に振る。

「わかった。そこまで言うなら参加する。やるからには一夏を優勝させよう」

遊星がそう言った直後だった。

「残念だけど、二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には勝てないから」

一組の教室にツインテールの可愛らしい少女が入ってきた。

「お前……鈴^{リン}か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳^{ファン}鈴音^{リンイン}。久しぶりね、一夏！」

その少女——鈴音は一夏のセカンド幼なじみであり、これから一夏

を巡る乙女の一人となるのだった。

第7話 遊星を巡る精霊達の戦争勃発！？（前書き）

私が自分で勝手に決めた、一週間連続投稿成功！

これからは更新ペースは少し落ちますが、地道に少しずつ投稿していくので、よろしく願います。

そして、後書きにアンケートがあるので、もしよかったら、ご協力
よろしく願います。

m () m

第7話 遊星を巡る精霊達の戦争勃発!?

一夏のもう一人の幼なじみ、鈴音がI S学園に転校してきた。

鈴音は一夏が小学生の頃に、箒と入れ違いで転校してきたらしい。

一夏曰わく『セカンド幼なじみ』。

(なるほど。ここにも一夏に好意をもつ子がいるわけか……女難と
言うか何と言うか……一体何人の女の子とフラグを立てたんだお前
は……)

遊星は一夏の女難に呆れるが、星竜の中では。

《だから、遊星。お前が言うな……》

とある竜がモンスター達を代表して心の中でツツコム。

放課後。

I Sアリーナにて一夏と遊星の実戦訓練が行われる。

だが、遊星の星竜に事件が起きた。

《ここは使いやすい俺を使って……》

《いいや！ 遊星アニキ、癖のある俺を使ってくれ！》

《いいいや、ここは私をご使用ください》

《遊星。命令だ、王である我を使うのだ！！》

ジャンク・ウォリアー、ニトロ・ウォリアー、ターボ・ウォリアー、ロード・ウォリアーが遊星との訓練を巡っている。

しかも、小さな人形ぐらいの大きさの半透明な精霊の姿で討論している。

ちなみに、一夏、箒、セシリアの三人はついさっき、遊星からモンスターの精霊の存在を聞いたことにより、その姿を見ることができるようになった。

「遊星、人気者だ」

「人気者だな、遊星」

「遊星さん、皆さんから人気者ですわね」

「と、取りあえず、みんな落ち着け」

遊星は落ち着かせようとするが……。

《待て待て待てえい！！》

《俺も……訓練、する……》

《俺たちにも訓練に参加する権利を頂きたい》

《僕も参加させてもらうよ》

話に突然参加してきたのはドリル・ウォリアー、ジャンク・アーチャー、セブン・ソード・ウォリアー、カタパルト・ウォリアーだった。

《先日暴れた先輩皆さんよ、ここは俺たちに譲ってくれねえかな？》

新たに登場した四体を代表してドリル・ウォリアーが言う。

《ふん。王である我に意見するとは良い度胸だな》

ロード・ウォリアーが喧嘩を売り、その喧嘩を買う者が居た。

《大した能力も無いのによく大口を叩くね、無能な王様》

カタパルト・ウォリアーだった。

ピシッ！！！！

（（（（……あ））））

遊星達の頭にハッキリと何かが切れる音が聞こえる。

《貴様……我を愚弄するつもりか？》

《そもそも、あなたは召喚条件が難しいのに、他の戦士達に比べて効果が微妙だ。そんなあなたが王としての器があるのかな?》

カタパルト・ウォリアーは、ロード・ウォリアーが特に気にしている事を言ってしまった。

《貴様ああああああっ！ 評価がそれなりに高いからと言って調子に乗るなあああああっ！》

遂にロード・ウォリアーがブチ切れた。

《カタパルト、助太刀する！》

セブン・ソード・ウォリアーが携えた七本の剣の内の、背中に背負った長い刀を抜き、ロード・ウォリアーに向ける。

《貴様、王に刃を向けるとは無礼な！》

《カタパルトは俺の友。友の敵となるなら、それがたとえ王だとしても俺は剣を抜く！》

《ハッハッハ！ 面白くなってきたじゃないか！ 俺も混ぜろ！》

《戦いなら俺の魂が燃えるぜえええっ！！》

ドリル・ウォリアーとニトロ・ウォリアーまで暴れはじめ、事態が悪化していく。

「ゆ、遊星、止めなきゃマズいんじゃないか？」

「下手すれば死人が出るぞ！」

さすがの一夏と箒も焦っていく。

「そうだな。みんな、いい加減に……」

《マスター（遊星）は口出するな……！！》

「なっ！？」

この場の精霊全員の大声に遊星は圧倒されてしまう。

「もう完全に事態の収集が難しくなってきましたわね……」

セシリアはため息をつく。

しかし、救いの手が現れるのだった。

《ライトニング・パニッシャー……！！》

雷電の閃光が轟き、精霊達に電撃が迸る。

《ギャアアアアアアアアアアアッ！！！！》

感電した精霊たちから煙が立ち上る。

「「「えええっ?!?!?」」」

遊星たちも思わず叫んでしまう。

《全く。数々の戦を共に乗り越えてきたのに、何だこの様は！》

怒りの形相で精霊たちを見下ろすのは、ライトニング・ウォリアーだった。

そして、もう一人。

《ふおふおふお。まあまあ、その辺にしておけ、ライトニング。若さの至りと言うやつじゃよ》

スカー・ウォリアーだった。

そして、スカー・ウォリアーの話が始まる。

《さて、皆の者。主である遊星と共に戦いたい気持ちは、よくわかるのじゃが。現にその遊星を困らせておるじゃないか》

なぜか正座をしている精霊たちの体が一瞬震える。

《文字通り一心団体として戦いたいことを望むのは当然じゃが、わしらの存在は遊星の為にあることを忘れてはならぬぞ。くだらない争いなどせず、また共に戦うのじゃ》

スカー・ウォリアーの言葉に、正座をした精霊達は土下座をして一斉に謝罪する。

《申し訳ありませんでした、翁！！　もう、二度と争いません》

実を言うと、スカー・ウォリアーはみんなの先生か、お爺ちゃんみたいな立場なのだ。

《わかればよいのじゃ。さて、ライトニング。あれを出してくれ》

《承知。では、皆の者。手っ取り早く、公平に遊星と戦う順番を決めよう！》

《それで、その方法は？》

ターボ・ウォリアーが代表で聞く。

《それは……》

《それは……？》

全員が固唾をのんで聞く。

《みんなで楽しく、くじ引き大会だあっ!》

ズドーン!!!

ライトニング・ウォリアーの高らかな宣言に遊星達はずっとけた。

ライトニング・ウォリアーの手にはパーティーで使うようなくじ引きの箱があった。

《ウオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!》

そして、精霊達はそれに賛同するかのよう to 歓喜の雄叫びを上げる。

「良いのかよ……」

「それで解決するのモどうかと思うが……」

「でも、本人達が納得すれば良いんじゃないでしょうか?」

一夏達は顔をひきつりながら苦笑する。

「あはは……」

遊星は肩を落として疲れた表情をする。

その夜。

訓練を終え、シャワーを浴びた遊星は寝間着に着替えてベッドに横たわる。

すると、星竜から小さな光の玉が現れ、遊星の前に現れる。

「……スターダスト・ドラゴンか？」

《ああ……》

光は見慣れた細身の美しい竜の形となる。

「どうしたんだ？」

《少し、話したいことがあってな……嫌な予感がする》

「嫌な予感？」

《何か、未知なる力が襲いかかってきそうな気がする》

「未知なる力……俺達が戦うべき相手だな」

《おそろくはまた世界を巻き込むかもしれないぞ》

遊星は右腕の赤き竜の痣『ドラゴン・ヘッド』を見る。

「たとえば、そうだとっても俺は世界を……仲間達を守る。それだけだ」

《ふっ……そうだな。すまない、遊星にはいらぬ心配だったな。では、俺も寝よう》

「ああ。お休み、スターダスト・ドラゴン」

《お休み、遊星》

遊星は目を閉じ、スターダスト・ドラゴンは星竜の中に入り、眠りについた。

しかし、数週間後のクラス代表戦でスターダスト・ドラゴンの嫌な予感的中することになるのは、まだ知る由も無かった……。

第7話 遊星を巡る精霊達の戦争勃発!?(後書き)

ウォリアーズ・フォルムのフォルムチェンジと、バックアップのアイデアを募集します!

特徴や特殊能力を記載してください。

期限は一週間とします。

皆さんのご応募、お待ちしております。

第8話 愛しき人と戦いの序曲（前書き）

多くのアイデア投稿ありがとうございます！

とても参考になりました。

これからもよろしくお願いします。

第8話 愛しき人と戦いの序曲

クラス代表戦当日。

あれから数週間、一夏と遊星は訓練を重ね、実力を上げてきた。

そして、一組クラス代表の一夏と、二組クラス代表の鈴音のとの対決が迫る。

遊星は前々から一夏と鈴音の関係が何故か悪化しているのを見て、それを知ってそうな筈に尋ねた。

「『料理の腕が上がったら毎日酢豚を作る』……？ それって、誰がどう聞いても『毎日味噌汁を作ってくれ』を変えたようなものだよな？」

（遠まわしに結婚してくれって言ってるようなもんじゃないか……）

一夏と鈴音の、小学生の時の約束の内容に遊星は額に手を当てて呆れる。

「ああ。だが、あろうことか一夏はその約束を忘れていてな。しかも『奢る』って解釈をしてしまったんだ……」

「それは鳳が可哀想になってくるな……」

遊星は鈴音に同情をする。

「それにしても……」

「何だ？」

「箒もセシリアも鳳もとんでもない男を好きになってしまったんだな……」

ため息をつきながらの遊星の一言に箒の顔が真っ赤になる。

「な、な、何を言い出すんだ、遊星！！ 誰があんな奴を……」

「いや、否定をしても分かるからな。誰が見ても」

「じゃ、じゃあ、遊星はどうなんだ！ 好きな人とかいるのか！？」

箒は反撃と言わんばかりに遊星に聞く。

すると、遊星は真顔でこう答えた。

「異世界に、大切に……愛する恋人がいる」

「……へ？」

予想外の答えに箒は凍りつく。

「写真があるけど、見るか？」

「あ、ああ……見せてくれ」

遊星はポケットから小さなアルバムを出してその中からとある写真を見せた。

箒は食いつくようにその写真を見る。

その写真は遊星ともう一人が幸せそうな笑顔をしながら写っていた。赤を基調としたかなり大胆な服を着た、綺麗な赤い髪のもとても可愛いらしい少女だった。

そして、箒が特に気になったのは。

（凄い美少女だ……それに、私より胸が大きい……）

箒の胸の大きさは同年代に比べてもかなりあり、箒にとってはコンプレックスであるが、この写真に写っている少女はそれ以上ある。

（胸なのか……やはり男は胸なのか！？　一夏も大きいのが好きなのか！？）

当初と目的が大きく外れている箒に遊星は首を傾げながら聞く。

「どうした、箒？」

「何でもない！ それより、この人の名前は何だ？」

「アキだ……十六夜アキ」

その時の遊星の顔は愛しい者を求める表情をしていた。

「十六夜、アキ……」

遊星はアルバムをポケットに仕舞う。

「さて、そろそろ一夏の試合が始まる。行くぞ」

「わかっている！」

箒は心の中で想う。

（いつか私も一夏と恋人同士に……）

そんな乙女の一途な願いを胸に秘め、箒は走り出す。

ISアリーナにて、一夏と鈴音が対峙する。

鈴音のIS『甲龍（シェンロン／こうりゅう）』は一夏の『白式』と同じ接近戦型である。

大型の青竜刀『双天牙月』を構え、一夏を見つめる。

「行くわよ、一夏！」

「望むところだ！」

一夏と鈴音の戦いが始まる。

開始早々、鈴音の両肩の衝撃砲『龍砲』により、一夏が追い込まれていく。

そして、一夏は姉の千冬がかつて使用していた剣、『雪片式型』を握り締め、『イグニッション・ブースト瞬時加速』と呼ばれる技能を使つての奇襲攻撃を行うおとした。

「うおおおおっ！」

雪片式型の刃が鈴音に届きそうな時だった。

数ヶ月前、スターダスト・ドラゴンの感じた嫌な予感が。

ズドオオオオンッ！！！！

的中することとなる。

それは空からISアリーナの地面の中心に降り立つ。

その姿は紛れもないISだが、『フル・スキン全身装甲』の異形だった。

第9話 戦いに赴く者（前書き）

勢いで書いてしまいました。

本日二度目の投稿となります！

第9話 戦いに赴く者

謎の『フル・スキン全身装甲』のISが試合に乱入してきた事によりISアリーナに混乱が生じた。

そして、一夏と鈴音は先生たちが来るまで敵ISを食い止めると言い出した。

だが、問題はそれではなかった。

ISアリーナの遮断シールドがレベル4に設定され、扉が全てロックされているしない。

つまり、避難することも救援に向かうこともできない。

「山田先生、ちょっと退いてください」

「不動くん!?!」

遊星は真耶を退かして、コンピューターを慣れた手付きで操作する。

「不動、何をしている?」

「すぐに遮断シールドと扉を解除できるようにハッキングしている」

「どうして貴様がハッキング技術を持っている!?!」

千冬のツツコミを無視し、遊星は動かす手を早くする。

（だが、それでもかなり時間がかかる。くっ！ 早く一夏を助けに行きたいのに……）

《遊星、だったらハイパー・シンクロンを使い》

（ロード・ウォリアー！？）

星竜からロード・ウォリアーが遊星に話しかける。

《ハイパー・シンクロンはお前と同じくコンピューターの使いに慣れている。後はレスキュー・ウォリアーを呼べばいい。緊急事態に奴ほど頼りになる戦士はいない》

（わかった。行くぞ、ロード・ウォリアー！）

《ああ！》

遊星は立ち上がり、星竜を構える。

「星竜起動！ フォルムチェンジ 『ロード・ウォリアー！』」

遊星はロード・ウォリアーの姿になると右手を上にかざす。

「バックアップ！ 『ハイパー・シンクロン』！ 『レスキュー・ウォリアー』！」

遊星の隣に青色のボディをしたロボットと、完全装備の救急隊の戦士が現れた。

「ハイパー・シンクロンはISアリーナのプログラムにハッキング

して遮断シールドと扉の解除を頼む！」

ハイパー・シンクロンは頷くと、胸がパカッと開き、中から無数のケーブルが現れて、コンピューターの色んな所に接続するとハッキングを開始する。

《ふっ、この程度のプログラムで、俺のハイパーハッキングタイムは止まらないぜ！》

（（IS学園のプログラムをこの程度呼ばわり！？！？））

IS学園の教師である千冬と真耶は複雑な気持ちをする。

「レスキュー・ウォリアーは一人でも多くの怪我人の手当てを頼む」

《ハッ！ 了解しました、ボス！》

レスキュー・ウォリアーは遊星に敬礼をすると、すぐさま救助に向かう。

「さて……セシリア、行くぞ」

「行くって、どこにですの？」

「決まっている。一夏の援護だ！ すぐにISの準備をするんだ！」

「わ、わかりましたわ！」

セシリアはISスーツに着替えるために部屋を出る。

「だがな、不動。今すぐに行けるわけじゃない。部隊が来るまで大人しくしている」

千冬はそう言うが、遊星は真剣な表情をする。

「それは無理だ」

「何だと？」

「俺は……何があっても仲間を守る。そのためなら、命を懸けて戦う」

遊星の真っ直ぐな瞳に千冬はため息をつく。

（覚悟は本物か……恐らくは私達には想像も出来ない体験をしたのだな）

「だが、それでどうやって一夏達の所へ行くんだ？」

「方法ならある」

「お待ちせしました！」

たった数十秒でセシリアはISスーツに着替えてきた。

そして、ブルー・ティアーズを起動させると遊星は手を前に出す。

「フォルムチェンジ！ 『ドリル・ウォリアー』！」

《さあさあ！ ダチのピンチを助けに行こうぜ！！》

遊星は琥珀色のボディに、ドリルの槍を持つドリル・ウォリアーの姿となる。

「ドリル・ワープ！」

遊星は右手の『ドリルランス』を振り下ろすと、空間が真っ二つに裂けた。

「ここに飛び込めば一夏達の所に行ける！」

ドリル・ウォリアーの特殊能力は一度しか使えないが、半径数キロ内をどこでもワープする事ができる。

「待て、二人とも！ 本当に行くつもりか！？」

「説教なら後で幾らでも聞く！」

「行ってきますわ！」

遊星とセシリアは空間の裂け目に入り、一夏達の所へ向かう。

第10話 進化の力『シンクロフォルム』起動！（前書き）

今回の話で星竜の新たな設定が加わります。

それにしても、遊星の星竜はバリエーション豊富だな……。

って、自分で言ってる作者！？

Σ（□□）！？

第10話 進化の力『シンクロフォルム』起動！

一夏と鈴音は敵I Sの攻撃を回避し続けていた。

そんな中、一夏は敵I Sの姿や行動から、人間ではなく、機械で動いているとわかった。

すると。

「一夏さん！」

高い声と共にレーザービームが敵I Sに降り注ぐ。

「貫け、ドリルシュート！」

次に巨大なドリルがミサイルのように飛んできて、敵I Sの装甲を大きく削り、元の持ち主のところへ戻る。

一夏と鈴音がレーザービームとドリルが飛んできた方向を見ると、そこには遊星とセシリアがいた。

「セシリアに遊星！？」

「な、何であの二人が！？」

一夏と鈴音は、遊星とセシリアがいることに驚いた。

「助けに来た！」

「私達が来たからにはもう大丈夫ですわ！」

すると、敵ISは遊星とセシリアに視線を向けると、両腕の砲撃を放つ。

「セシリア！」

「はいですわ！」

二人はすぐに砲撃を回避する。

そして遊星は一夏と連絡を取る。

「一夏、シールドエネルギー残量は大丈夫か？」

「正直、かなりキツイ……さっきの試合でけっこう使っちゃった」

「そうか……」

（敵の砲撃の破壊力は高い。一撃でも喰らえばアウトだ。それなら……）

遊星はこの状況でもっとも有効な手を考え、星竜の中の精霊たちに話しかける。

（みんな、あれを使う時が来た。鳳鈴音とISの相性が良いのは誰だ？）

《遊星、こちらジャンク・シンクロンだ》

ジャンク・シンクロンは、チューナーモンスターを束ねる王である。ちなみに何故ロード・シンクロンが王では無いのかと言うと、単純に遊星と付き合いが一番長く、チューナーモンスターの中で能力が一番高いからである。

《鳳鈴音の性格と潜在能力、そしてISのデータから検証した結果、シンクロ率がもつともいいのはこいつだ》

ジャンク・シンクロンは、星竜を通して遊星の目の前に多くの画像が映し出した。

（ありがとう。ジャンク・シンクロン）

《礼はいらない。俺と遊星の仲だろ？ 早くアイツを倒して前から企画した精霊たちとの宴会をやろうぜ！》

（ああ！）

遊星はジャンク・シンクロンと連絡を切り、三人に話しかける。

「一夏、セシリア、鳳、三人は攻撃に専念しろ！ 防御は俺が全て引き受ける！」

「遊星、あれをやるつもりか！？」

「ああ！ バックアップ 『ジャンク・シンクロン』！ 『ニトロ・シンクロン』！ 『ターボ・シンクロン』！」

シールド・エネルギーをコストに遊星の周りにくず鉄から作られた

戦士、スプレー缶に手足とメーターをつけた機械、小さな車に手足がついた機械が現れる。

「白式にジャンク・シンクロンをチューニング！ 甲龍にニトロ・シンクロンをチューニング！ ブルー・ティアーズにターボ・シンクロンをチューニング！」

「はあ！？ ちょっと、私に何をするつもりなの！？」

事情を知らない鈴音は叫んだ。

ジャンク・シンクロンは腰のレバーを引き、三つの星から輪となり、一夏と白式を囲う。

ニトロ・シンクロンは頭部のメーターが動きだし、二つの星から輪となり、鈴音と甲龍を囲う。

ターボ・シンクロンは頭に乗っていたバイザーを装着し、一つの星から輪となり、セシリアとブルー・ティアーズを囲う。

「シンクロフォルム！」

三人とISは光の柱に包まれる。

光が収まると、それぞれのISの姿が大きく変化し、シールドエネルギーが回復した。

白式はジャンク・ウォリアーと同じ強力なブースターが背中に装着されていた。

甲龍は両肩の『龍砲』の形がよりゴツい感じになり、『双天牙月』が炎を帯びていた。

ブルー・ティアーズはビットの数がそれぞれ二倍に増えており、ラIFルの形状は少し大きめに変化していた。

これは、遊星が見つけたISの新たな進化の可能性である『シンクロフォルム』である。

チューナーモンスターとISをシンクロさせて、ISの装甲と能力を飛躍的にパワーアップさせるのだ。

ただし、これを使用した後、遊星は一定時間は攻撃する事ができなくなる。

しかし、遊星にはその対策がある。

「フォルムチェンジ！ 『ジャンク・ガードナー』！」

星竜は巨大な盾を両手に装備し、強固な緑色の装甲を身に着けたジャンク・ガードナーの姿となる。

《さあて、最強の盾を見せてやろうか！》

攻撃を一切行えないが、ウォリアーズ・フォルムの中では最高クラスの防御力を誇る。

「行くぞ！！！！」

遊星の合図に反撃の狼煙を上げる。

.

第11話 星屑の煌めき（前書き）

いよいよ新パックのエクストリーム・ビクトリーの登場ですね！

そして、今回は遊星のウォリアーズ・フォーラム、真打ち登場です！

第11話 星屑の煌めき

シンクロフォームで進化したISで遊星と一夏達の反撃が始まった。

「行きますわよ、ターボさん！」

《了解、セシリア！ ブルー・ティアーズ、全機出撃！！》

セシリアはライフルを構えて敵ISを狙い撃つ。

《乱れ撃ちだあっ！！！！》

ブルー・ティアーズの中にいるターボ・シンクロンは八機のビットを操作し、嵐のようにビームを乱れ撃つ。

敵ISは攻撃を受けながら砲撃をセシリアに向けて撃つ。

「チェンジ・ガード！」

セシリアの前にワープした遊星が現れ、両腕の盾『ガードナー・シールド』で防御する。

「鳳、やれ！」

「ああ、もう！ やってやるわよ！！」

鈴音はやケクソ気味に龍砲を発射する。

敵ISの背中に直撃すると前屈みに倒れた。

衝撃砲の威力が明らかに上昇していた。

「あれ……?」

《にいー! やっぱり相性抜群だにいー!》

龍砲の威力に驚いていると頭に声が響いた。

「この声はもしかしてさっきのキモカワスプレー缶!?」

甲龍の中のニトロ・シンクロンの声に驚く。

《誰がキモカワスプレー缶だにいー!? 俺はニトロ・シンクロンにいー!》

「で、そのニトロが私の甲龍に何をしたのよ!」

《ISの装甲と武装強化にいー。試しにその青竜刀を投げてみるにいー》

「双天牙月を? わかったわよ」

《でもその前に逃げるにいー!》

「えっ!?!」

敵ISは鈴音の方を向くなり、ミサイルを放つ。

「ちよっ!?!」

「チェンジ・ガード！」

再び遊星がワープし、鈴音の前に現れてミサイルを防御する。

《流星はマスターだにー！》

「ちょっと不動！ そんなに私達を守ってシールドエネルギーは大丈夫なの！？」

「心配ない。俺のことは気にせずに攻撃に専念するんだ」

「……わかったわ！ 不動を信じるわ！」

鈴音は二つの双天牙月の柄を合体させて投げる。

投擲武器にして投げた双天牙月が敵ISを斬りつけると、爆発が起きた。

「爆発した！？ ニトロ、あんた使えるわ！！」

《にー！ じゃあ、どんどん行くにー！》

「うん！」

そして、一夏は機動力と速力が数倍に跳ね上がった白式・ジャンクフォルムを駆使していた。

敵ISを翻弄させながら雪片式型で切り裂いていく。

《いい感じだぞ、一夏》

ジャンク・シンクロンは一夏の動きを誉める。

「オッケー、ジャンクロン！」

《略すな！！》

さて、鈴音はともかく、なぜ一夏とセシリアがシンクロン達とのコンビネーションが良いのだろうか。

その答えはここ数週間の放課後の特訓の余った時間を利用してシンクロフォルムでの動きを練習していたのだ。

それにより一夏とセシリアは慣れた手つきで動かしているのだ。

（よし、このまま行けば……）

遊星は勝利を確信した。

しかし。

「一夏あっ！」

突然、アリーナのスピーカーから箒の大声が響いた。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

どうやら箒はじっとしていらなくて、中継室をジャックして一夏に必死の声援を送りに来たらしい。

だが、それが仇となる。

敵I Sは箒の方に視線が向き、両腕を構えた。

（今からじゃ一夏のスピードでも間に合わない!?!）

遊星は唇を噛み締めた。

「箒!?!」

敵I Sの砲撃が発射される。

「くっ! チェンジ・ガード!」

《遊星! これ以上は危険だ!》

遊星はジャンク・ガードナーの声を無視し、ワープで中継室の前に立ち、ガードナー・シールドで防御する。

だが、連続で威力の高い敵I Sの砲撃を受けたことにより、盾と装甲全体にヒビが入る。

（耐えろ!?!）

しかし、遊星の思いとは裏腹に。

パライーン!?!

限界を超えたガードナー・シールドが粉碎し、遊星と箒を守るもの

がない。

遊星と箒は砲撃の不気味な光に包まれ、爆発が起きた。

「箒いいいいっ!!! 遊星ええええっ!!!」

一夏は声が枯れるほどの音量で叫んだ。

「そんな……」

「あの、二人、が……?」

セシリアと鈴音は目の前のことを全く信じられず、体が大きく震えている。

《……………来た》

ジャンク・シンクロンはそれだけ言った。

その時だった。

《――――！！！！》

空気を突き抜ける轟音に一夏達は耳を疑い、目を見開いた。

その音は遊星と箒がいたところから響いているのだ。

バサアン！！

煙を吹き飛ばす音が鳴り、そこにいたのは、無傷の遊星と箒だった。

「箒！！！！ 遊星！！！！」

一夏は二人の無事に安堵する。

そして、一夏達は遊星の今の姿に驚くのだった。

星竜はジャンク・ガードナーの姿ではなく、ましてや今までの姿とも違っていた。

白銀に輝く白と青のボディに、絹のように柔らかく大きな翼。

そして常に放出する光り輝く星屑の粒子。

神々しくも気高い姿だった。

その姿に一夏達は思わず見とれてしまった。

《危なかったな、遊星。あと少し遅かったら終わりだったぞ》

（すまない、スターダスト・ドラゴン）

そう、今の星竜の姿こそ遊星がもつとも信頼を置くエースモンスターである『スターダスト・ドラゴン』にフォルムチェンジしたのである。

《俺の予想が当たってしまったな》

（ああ、だからこそ。俺は未来を切り開くために戦う！）

遊星は右手を高く翳す。

すると、遊星の手に一太刀の剣が現れた。

その剣の鍔や柄にスターダスト・ドラゴンを模した装飾が施されていた。

「スターソード！」

スターソードは、スターダスト・ドラゴンの力の一片から創られた剣である。

「これで、終わらせる！！！」

遊星はスターソードの切っ先を敵ISに向けた。

切っ先の先端に無数の光が収束されていき、巨大な球体となる。

「響け、シューティング・ソニック!!!」

球体から、スターダスト・ドラゴンの必殺技である白銀の閃光が放たれ、敵ISを包み込んだ……。

第12話 星屑の奇跡（前書き）

いやー、エクストリーム・ビクトリーはまずまずの結果でした。

ライフ・ストリーム来ない……（泣）

今回は遊星のチートがさらに爆発してしまいます（笑）

第12話 星屑の奇跡

「響け、シューティング・ソニック!!!」

白銀の閃光が放たれ、敵ISを包み込んだ。

光が晴れると敵ISは戦闘不能まで破壊されていた。

「ふう……」

遊星は大きく息を吐きながらスターソードを降ろす。

すると、星竜の中のスターダスト・ドラゴンは箒に語りかけた。

《娘よ。確か、箒と言ったな》

（あなたは……？）

《俺はスターダスト・ドラゴン。遊星の持つモンスター達のエースだ。お前に話しておきたいことがある》

（何でしょうか？）

《あの男、一夏と言ったな？ 愛する者の為に何かしたかったのだな？》

（なっ！ あ、愛する者って……）

《落ち着け。確かにお前の行動は評価に価するものがあるが、同時

に愚かな事でもある》

スターダスト・ドラゴンの口調が厳しいものとなる。

(――っ！)

《愛する者の為でも時にそれは破滅を呼んでしまう。覚えておくんだ》

(……はい)

《しかし、その強い想いがあれば、いつか『力』を授かった時に誰にも負けない……愛する者を護れる、お前にとっての無敵の刃となる》

(無敵の刃……はい、ありがとう。スターダスト・ドラゴン)

スターダスト・ドラゴンの言葉は箒に新たな道を示す。

《ああ、頑張れよ》

スターダスト・ドラゴンと箒の話が終わる直後、ようやくISアリーナの遮断シールドや扉が解除され、IS学園の精鋭達が入ってきた。

「一夏、セシリア、鳳、事後処理は任せて俺達は織斑先生の元へ戻ろう」

「「「了解ですわ(よ)！」「」」

「箒も行くぞ」

「わかった」

遊星達はこの場から去ろうとしたその時だった。

ズドオオオオンッ！！！！

「「「「「なっ!?!」」」」」

空から破壊されたのと別の『全身装甲』のISが三機も現れた。

三機の敵ISは背中に搭載していた、たくさんのミサイルをISを使用する者に向けて一斉に発射した。

「みんな！ 俺の周りに集まれ！！」

一夏、セシリア、鈴音は遊星の言葉を信じ、遊星の周りに集まる。

「ヴィクテム・サンクチュアリ！！」

星竜のウォリアーズ・フォルムが解除され、スターダスト・ドラゴンの幻影が現れる。

そして、遊星達を抱きしめるように両腕と翼で包み込んでミサイル

から守る。

ヴィクテム・サンクチュアリは一定時間、あらゆる攻撃から遊星達を守るのだ。

先ほど、箒を守ったのもこの特殊能力のお陰である。

ヴィクテム・サンクチュアリからスターダスト・ドラゴンが星竜に戻る。

敵ISの無情な攻撃により、ISアリーナが戦場と化してしまう。

（このままじゃ、みんなが……IS学園が……）

遊星の脳裏には、かつてネオドミノシティに起きた『ゼロ・リバーズ』の悲劇が流れる。

（もう二度と、あんな悲劇を起こさせない！！）

右腕のドラゴン・ヘッドの痣が強い光で輝く。

遊星と星竜、そしてスターダスト・ドラゴンのシンクロ率が100パーセントとなる。

（みんなを……大切な仲間を守るために！！！！）

『スター・ドラゴン・システム、発動！』

星竜から音声と画像が流れ、遊星は咆哮を上げた。

「うおおおおおおおおおっ!!!」

『スターライト・ロード!!』

スターダスト・ドラゴンの姿になっている星竜から放出されている星屑の粒子が、大量に放出される。

星屑の粒子がやがてISアリーナ全てを包み込むように散布された。

一夏達はもちろん、IS学園の精鋭達もその星屑の粒子に驚き、そして、魅了された。

何故なら、星屑の粒子はとても美しく輝き、幻想的な七色の光を生み出しているからだ。

敵ISは解析不能なこの光に翻弄されながらも砲撃で攻撃する。

しかし、砲撃はすぐに星屑の粒子に包まれて、吸収される。

そして、不思議な現象が起きた。

「シールドエネルギーが回復している……?」

一夏達を含む、IS学園の精鋭達のISのシールドエネルギーが回復していて、更に装甲の損傷も回復している。

だが、それだけではない。

「何だ……? 私の心と体が癒されている感じがする……」

箒の言う通り、人の心と体も癒されているのだ。

人とISを癒し、敵ISの攻撃を完全に打ち消す星屑の粒子はまるで、奇跡のような力だった。

そして、遊星は地面に降り立ち、スターソードを高く掲げた。

「これでファイナルだ！！ 俺達の『絆』は誰にも負けやしない！！！！」

ISアリーナを包み込んだ星屑の粒子が一気にスターソードの刃に収束され、より強い光を放つ。

「響け、シューティング・ソニック！！！！」

スターソードを勢いよく振り下ろすと、威力を数倍にしたシューティング・ソニックが放たれる。

威力を高めた白銀の閃光は敵ISをシールドごと貫き、完全に破壊した。

ようやく敵がいなくなり、全員がホッとした。

「終わっ、た、か……」

遊星は手からスターソードが抜け落ち、そのまま意識を失い、力無く倒れた。

「遊星！！」

一夏達は慌てて遊星の元へと向かった。

第13話 一夏達の新たな成長と遊星の女難！？（前書き）

今回で原作第一巻の区切りです。

次回は遊星達の日常で、その次にいよいよシャルとラウラの登場となります！

第13話 一夏達の新たな成長と遊星の女難!?

敵ISの襲撃から数時間後、医務室にて遊星はベッドで横たわっていた。

そして、そのベッドの周りには、一夏、箒、千冬、セシリア、鈴音がいた。

「なかなか起きないな……ダメージを喰らったわけでもないのに」

「遊星に何があったんだ？」

一夏と箒の疑問に星竜からスターダスト・ドラゴンが現れて答える。

《それは遊星がスター・ドラゴン・システムを使ったからだ》

「スター・ドラゴン・システム？」

「それって、ISアリーナを包んだあのキラキラした光のこと？」

セシリアと鈴音の言葉にスターダスト・ドラゴンは頷く。

《ああ。スター・ドラゴン・システムを使用すると、その力を受け止める遊星の体力と精神力を大きく疲労してしまう。それで今死んだように眠っているんだ》

「まさか、不動はそれを知っていてその力を使ったのか？」

千冬は厳しい表情を見せる。

《ああ。たとえどんなリスクが有ろうと、お前達を守るために命を懸ける。それが不動遊星と言う人間だ》

「どうして……不動はそこまでの強い信念と覚悟を持っている？」

千冬はスターダスト・ドラゴンに問う。

《話してやっても良いが、それは遊星の生まれてからの過去に関わる。……遊星はとてつもない過酷な運命を背負ってきたからな》

スターダスト・ドラゴンの言葉に重みを感じた一夏達は言葉を失ってしまう。

《これからも遊星はお前達を守るために必ず無理をするだろう。そのために、俺達は遊星と共に戦う。だから……》

スターダスト・ドラゴンは一夏、箒、セシリア、鈴音を見る。

《強くなるんだ。少しでも強く……少なくとも、隣にいる仲間達を守るほどに》

一夏達はハッと息を呑んだ。

そして、決心を付け、頷く。

「ああ！」

「はい！」

「ええ！」

「うん！」

その光景に、千冬は腕を組んで微笑む。

（これからどうなるか分からんが、楽しみになってきたな）

生徒達の大きな成長の一步に心の中で喜ぶ千冬だった。

すると……。

「う……うつ……」

遊星の意識が戻り、目を開けた。

「ここは……医務室？」

「大丈夫か？ 遊星」

「一夏……？ みんなは、無事なのか？」

「お前が無理をしたお陰でな」

千冬は棘のある言葉で言い、出席簿で軽く遊星の頭を叩く。

さすがにそれを言われちゃ遊星もぐうの音が出ない。

「だが、感謝しなくてはな」

「えっ？」

「ハイパー・シンクロンのお陰でISアリーナのシステムをすぐ元通りにしてくれた。ただ……帰る前に悪巧みをするような笑みを浮かべていたがな……」

（ハイパー・シンクロン！ お前は何を企んでいる！？）

マスターである遊星でさえも嫌な感じを覚える。

「レスキュー・ウォリアーは生徒達の心を落ち着かせ、怪我人の応急処置をしてくれた。IS学園の生徒達や先生方はみんな不動に感謝している」

「そうか……」

遊星は何か少し恥ずかしくなり、頬を指でかく。

「さて、明日も授業があるからな。不動はもう一度寝るんだ。お前たちも早く寮に戻れ」

一夏達は千冬の指示に従い、千冬と共に医務室を出た。

遊星は再びベッドに横たわり、眠りについた。

翌日。

遊星が教室に入ると、クラスメイトの約半分の女子が集まってきた。

「ど、どうしたんだ？」

「ゆーくん、これ見て！」

クラスメイトの一人、別名『のほほんさん』こと、のほとけほんね布仏本音が一枚の大きな紙を見せた。

それは、新聞部が作ったIS学園の学生新聞で、こう書かれていた。

『ISアリーナに舞い降りた光の勇者!？』

新聞のメインを飾る写真には昨日、遊星がウォリアーズ・フォーラムでスターダスト・ドラゴンの姿になっていた時のだった。

しかも、写りがとてもよく、誰が見てもカッコいいという素晴らし
い出来である。

「こ、これは……」

（一体誰が撮ったんだ!？）

だが、そんなことより、クラスメイトの女子たちの目がキラキラ
している。

さらに、廊下には学年とクラス関係なしにたくさんの女子が遊星目
当てで集まってきている。

遊星は別の危機感に襲われる。

《遊星！ 早く逃げないとマズいことになるぞ！》

星竜からスターダスト・ドラゴンの緊急連絡が入る。

（わかっている！）

遊星は全く関係ない方向を向き、指さす。

「あ！」

女子達の姿勢がそちらに向いた瞬間、遊星はすぐさま教室の窓を開けた。

そして。

「一時撤退！」

そのまま窓から飛び降りた。

とりあえず、遊星の無事を願うために神様に祈るのだった。

ちなみに、朝のショートホームルームが始まるまで後30分はある。
それまで遊星は多くの女子から逃げ続けなければならない。

D・ホイールに乗っていれば恐らくは捕まらないと思うが、恋する
乙女の本領はそれを越えるかもしれない。

幸か不幸か、仲間達やIS学園を守るための行動が、まさかの女難
を呼び出すことになる結果になってしまった遊星は自分を呪った。

（誰か……誰か助けてくれえええええっ！！！！）

番外編 バレンタインデーの災難と幸福（前書き）

1日早いですが、バレンタインデー記念小説です。

少し先の未来を想定して書いたので、若干ネタバレ状態ですのでご了承ください。

今回は遊星×アキ中心のバレンタインデー小説です。

かなり（？）甘いです！

では、どうぞ！

番外編 バレンタインデーの災難と幸福

2月14日。

日本の女の子の一大イベントであるバレンタインデーである。

それは異世界の日本でも変わらず、このIS学園でも例外ではなかった。

「よし、出来た！」

その日の前日に完成したお菓子を目の前に喜んでいるのは、十六夜アキ。

渡す相手はもちろん、恋人の不動遊星。

（遊星、喜んでくれるかな？）

恋人になってから初めてのバレンタインデー。

アキにはドキドキのイベントである。

（明日は聖戦だ！ 頑張らなきゃ！）

《その意気よ、アキ！》

アキの待機状態のISからブラック・ローズ・ドラゴンの声が聞こえる。

《女は度胸！ 勢いで行けば遊星も必ず喜ぶわ！》

（ありがとう、ブラック・ローズ）

《でも……スタイルがよくて、胸の大きいアキなら体にチョコを塗って『わ、私がプレゼント……遊星、貰って？』って言えば遊星もイチコロだと思わよ？》

乙女にはかなり刺激の強いアダルトなプレゼント方法を提案するブラック・ローズ・ドラゴンにアキの顔は真っ赤になる。

（ブ、ブラック・ローズ?!?!）

《冗談、冗談。明日は頑張ってね、アキ。 遊星に食べられないようにね♪》

（もう、ブラック・ローズのバカア!!）

《じゃあね~~~~♪》

ブラック・ローズ・ドラゴンは連絡を切った。

アキはまだ顔に熱が残るのを感じながらお菓子にラッピングをする。

（渡すなら、明日の放課後よね……）

だが、明日は壮絶な1日となるのを今のアキは知らなかった。

バレンタインデー当日。

遊星、一夏は教室に入るなり疲れきった表情をしていた。

何故なら、その隣には大量のチョコレートを中心としたプレゼントがあるからだ。

登校中に学年クラス関係なしにバレンタインデーのプレゼントをたくさん女子から渡されたからだ。

あまりの量に遊星は仕方なくバックアップで救援を呼んで、ここまで運んで貰ったのだ。

《えっと、56、57、58……》

そして今、精霊達が遊星と一夏のチョコレートの数を同時に数えている。

この時、二人は思った。

（（どうやって、これ进行处理しよう……））

だが、チョコレートの災難は二人だけでは無かった。

「遊星……一夏兄ちゃん……」

教室に龍亜が疲れきった表情で入ってきた。

「どうしたんだ、龍亞!？」

「今の二人と同じ状況なんだよ……」

龍亞は涙ぐんでいる。

その後ろには大量のプレゼントを持ったバックアップで呼んだ精霊達。

「朝からたくさんのお姉ちゃん達からプレゼントを貰って、そしてなぜか龍可が鬼のような顔をして口を利いてくれないし……もう、どうしよう……」

「俺もアキが黒薔薇の魔女化していて、近づいたらISを発動するから話すこともできない……」

「箒もセシリアも鈴もシャルもラウラもISの武器を展開するし……もう、どうしたらいいんだ……」

三人は大きなため息をつく。

そして、放課後。

三人は話し合い、それぞれの作戦を決め、ある意味で一大決心して

行動を移す。

龍亞は龍可に甘える作戦で、龍可の機嫌を直すものである。

しかし、一夏は特に一番過酷で、箒達の怒りを受け止めるためにI
Sアリーナで無謀の1対5の対決をすることに……。

そして、遊星は。

「アキ、来てくれ」

「えっ？ 遊星!？」

遊星はアキの手を無理やり引っ張り、屋上へ連れて行く。

そして、遊星は深く頭を下げる。

「すまない、アキ。お前に不快な思いをさせて」

「遊星……」

そして、遊星はアキを自分の胸に抱き寄せて、優しく抱きしめる。

「俺が愛しているのはお前だけだ、アキ」

遊星の愛の言葉にアキは小さな涙を流す。

アキは遊星の背中に手を回す。

「ごめんなさい。嫉妬して、怒ってしまって……私が子供だったわ

……」

「いいんだ。それだけ、俺を思ってくれる証拠だから……」

「ありがとう、遊星……私の作ったバレンタインデープレゼント、貰ってくれる？」

「当たり前だ。アキがくれるのをずっと待っていたんだ」

「嬉しい……」

アキは鞆からラッピングをしたお菓子を渡す。

「ありがとう。開けてもいいか？」

「うん」

遊星はリボンを解き、中身を見る。

「チョコとミルクのマールブルクッキーか」

遊星は一枚を口に入れる。

「……美味しい。美味しいよ、アキ」

遊星は思わず、顔がほころんでしまう。

「本当に？」

「ああ。俺好みの甘さ控えめでとても美味しい」

「よかった……」

アキは安心から柔らかな優しい笑みとなる。

遊星はそんなアキが愛おしくなり、アキを強く抱きしめる。

「遊、星……？」

「アキ……」

遊星は顔をアキに近づける。

その意図を理解したアキはゆっくり、目を閉じ遊星に身をゆだねる。

二人の唇はチョコレートのように甘く重ねられ、愛が深まるのだった。

そして、龍亞と一夏。

龍亞は龍可の機嫌を直し、龍可からチョコレートを貰ったのだった。

一夏は数十分に渡る死闘を繰り広げ、何とか箒達の機嫌を直し、全く異なる五つのチョコレートを貰ったが、相変わらずの鈍感で箒達を怒らせてしまったのは言うまでもない。

ちなみに、大量のチョコレートは精霊達の手伝いによって何とか処理することができた。

・

第14話 遊星の日常と超人レベル？（前書き）

今回は遊星の日常です。

ちよつとギャグ風に仕上げました。

特に遊星の有能について（笑）

では、どうぞ！

第14話 遊星の日常と超人レベル？

『全身装甲』の敵IS襲撃と、不動遊星の女難追いかけてこの事件から数日後。

遊星は持ち前の運動神経と最終手段のD・ホイールを駆使して何とか恋する乙女から逃げ延びていた。

そして、さすがにこのままでは大きな問題になると思った千冬とIS学園の教員一同は、事態を収集するためにちよつとしたお仕置き（どんなお仕置きか不明だが……）を行い、遊星の女難は静まるのだった。

だが、ただ静まっただけで、終わった訳ではないので、遊星の苦労はまだまだ続く。

そんなある日の遊星の日常。

IS学園の授業はISの操作のみならず、一般教科も行われている。

そして、物理の授業にて遊星はサラサラとノートに物理とは全く別の何かを書いていた。

それを見た物理の教員が注意しようとする。

「不動君、何をしているの？」

「ISの新しいシステムを考案中です」

教員は無言で遊星のノートを取り上げてみると、教員は言葉を失う。

それはISの出力の効率化のための新しいシステムだった。

「……素晴らしいシステムですけど、授業中にやらないでください。罰としてこのページの問題を全て答えて下さい」

「わかりました」

遊星は黒板に行くと、考える時間も必要なしと言わんばかりにあっという間に答えを書き上げた。

「せ、正解……です」

『おおっ!!』

完璧な答えにクラス中が騒ぎだした。

遊星は理数系の教科にとっても強い。

特に数学と物理は遊星の得意科目である。

しかし、遊星の一番の苦手科目は古典である。

これに関しては、古典が得意な筈に教えてもらっているのである。

あまりの優秀さに遊星が教員となって教えた方がいいのでは……と、本気で考える物理の教員であった。

ちなみに、これを機に遊星に勉強を教えてもらおうと女子が詰め寄るのも言うまでもない。

一夏に関しては土下座をして家庭教師を頼むほどだった。

次に体育の時間。

体育はI Sを動かすための基礎体力をつけるための授業である。

授業が終わると、かなりハードな授業内容にクラスメイトの大半は疲れきった表情をする。

しかし、遊星だけは涼しい表情をし、あろうことか、こんなセリフまで言う。

「まだまだ満足できないな……」

『あれだけやって満足できない!?!?』

クラスメイトのツツコミが入る。

「遊星、前から思ったけど、お前は天才を越えた超人!？」

一夏の言葉に同意するように頷くクラスメイトだった。

昼食の時間となり、食堂で遊星は一夏達と食事をとっていると、色々と遊星に質問してくる。

「遊星、どうやって物理とか数学が得意になったんだ？」

まずは一夏。

「昔、サテライト……スラム街と云えばいいかな。そこでD・ホイールを造ろうとしたら自然と知識が頭に入った」

「造ったって……もしかして、廃材からバイクを？」

次に箒は目をぱちくりさせる。

「ああ。今のエンジンは知り合いの企業から造ってもらったが、その前は全部廃材から造ったんだ」

もう既にこの時点で遊星の超人レベルが高いと判断する一夏達。

「では、その身体能力の高さはどこで？」

これは最初に遊星と模擬戦をしたセシリア。

すると遊星は昔を懐かしむように外を見る。

「……昔、三人の仲間と共に『チーム・サティスファクション』と言う名のチームを結成して、サテライト統一を目指して暴れまわったから……」

（（（今のって、もしかしくてもあなたの黒歴史ですか！?!?））））

まさかの地雷を踏んでしまったと思い、鈴音は流れを変えようという質問をする。

「そ、そう言えば、D・ホイールって何をする物なの？　もしかして、レース？」

「D・ホイールは『ライディングデュエル』を行うための物なんだ」

「「「ライディングデュエル？」」「」」

「一言で言うならD・ホイールに乗りながらデュエルモンスターズと呼ばれるカードゲームで対戦するんだ」

「え？　デュエルモンスターズで？」

一夏は思わず聞き返してしまう。

「知っているのか？」

「まあ、昔少しやった程度だけだな」

（この世界にも一応あるんだな……）

「そうか。ライディングデュエルは言わば、進化したデュエル。俺の世界では世界大会とか開催されるほど大流行しているんだ」

「もしかして……遊星はその世界大会で優勝したり……」

一夏が冗談混じりで言うが、遊星は少し得意気な表情となる。

「ああ。こう見えても、ライディングデュエルの第一回の世界大会『ワールド・ライディング・デュエル・グランプリ』の優勝チーム『チーム5D's』のラストホーラーだからな」

（（（（本当にこの人は凄すぎる……））））

もはや超人レベルを遙かに越えていて、本当に自分達と同じ人間なのか不安に思える一夏達だった。

放課後の訓練では、遊星は星竜の新たな可能性を発見し、それを使用して戦い、一夏達を圧倒するのだった。

そして、落ち込む一夏達に遊星はこう言った。

「己の限界を越えた時に、新たな境地が見えてくる」

その言葉に一夏達は遊星には限界と言うものを知らないのだと確信するのだった。

数日後、二人の新たな転校生により、クラスに新たな波乱が巻き起こるのだった。

第15話 1年1組転校生騒動!?(前書き)

やっぱりゾーンⅡ未来の遊星だった?

どうしよう……今更ながら最終回はどうなってしまおう!?

この小説に繋げるか!?

第15話 1年1組転校生騒動!?

本日の騒ぎ……全ての始まり、それは朝のショートホームルームの真耶の一言からだった。

「今日はなんと転校生を紹介します！ しかも二名です！」

『ええええええええええええええええっ!?!?』

クラスの女子が驚く。

当たり前の事だ、遊星が入ってまだ一ヶ月ぐらいしか経過してないのに転校生が来るのだから。

「失礼します」

「……………」

そして、クラスに入ってきた二人の転校生に、ざわめきがピタリと止まる。

一人は金髪に人懐っこそうな顔のまさに『貴公子』の名にふさわしい男だった。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

シャルルはにこやかに一礼する。

『キャアアアアアアアアアッ!!!!!!』

そして、このクラス二回目の歓喜の絶叫だった。

(凄いデジャヴだ……)

遊星は一ヶ月前のことを思い出した。

「男子！ 三人目の男子！」

「しかもまたうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてきて良かった〜！」

「もう、このクラスは最高！ 全く違う三人の男子が居て!!」

またクラスの女子が発狂し始めた。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ、自己紹介が終わってませんから！」

千冬と真耶の制止により、とりあえず静まるのだった。

もう一人の転校生は銀髪に、黒眼帯をつけ、まるで氷のような空気を纏った『軍人』のような少女だった。

「……………」

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

どうやらその少女——ラウラは千冬のことを知っているようだった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

その一言でクラスに沈黙が走る。

（おい、クラスが白けてしまったぞ……）

遊星は頬に手を当ててため息をつく。

すると、ラウラは何故か一夏を睨みつけた。

（……なんだこの気配は！？）

遊星はとっさにポケットに手を伸ばした。

ラウラは静かな怒りを一夏に向ける。

（認めない……貴様を！）

ラウラは手を振り上げた。

ヒュン！ パァン！！

「っ！？」

すると、ラウラの手が何かによって弾かれた。

それは一夏が机の上に置いたISの理論書に突き刺さった。

「えっ！？」

クラス全員の姿勢がそこに移る。

それはジャンク・シンクロンのカードだった。

そして、立ち上がり手を前に出して何かを投げる動作をしている遊星。

つまり……。

（カードを手裏剣のように投げたあ！？）

ここにまた遊星の新たな超人伝説が生まれたのだった。

ラウラは遊星を睨みつける。

「貴様……何者だ？」

「俺は不動遊星。お前が一夏に何の怨みがあるか知らないが、仲間

には手出しさせない」

「……面白い、私に喧嘩を売るのか？」

「必要ならば……」

遊星は待機状態の星竜を指に挟んで取り出す。

「なるほど、貴様も専用機持ちか」

ラウラは黒いレッグバンドを見せる。

それは、ラウラの専用ISの待機状態だった。

二人の間に火花が散り、まさに一触即発状態。

クラス中にピリピリとした空気が広がる。

「二人共、その辺にしておけ」

千冬が仲介し、遊星とラウラを止める。

ラウラは無言で開いている席に座る。

「あと、不動。もうカードを手裏剣のように投げるのは止めろ」

「約束する」

「よし」

「だが、時と場合と状況によっては破ることになる」

「おい。約束の意味ないだろ」

千冬のツツコミが入る。

「仕方ない……では、各人急いで第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

そして、千冬は一夏にも視線を向ける。

「織斑と不動はデュノアの面倒を見てやれ」

「君が織斑君？ 初めまして、僕は――」

「それは後でいいから……遊星！ 早く脱出するぞ！」

「ああ！」

一夏はシャルルの手を引き、遊星と共に教室を出る。

何故なら、このままだと教室で女子達の着替えが始まってしまいうからである。

さらにもう一つ……。

「ああっ！ 転校生発見！」

恐れていたこと……早速他のクラスの女子に発見されてしまった。

このままだと質問攻めにあい、授業に遅刻してしまう。

そうなれば鬼教師こと、織斑千冬の特別カリキュラムが待つことになる。

（（それだけは絶対に避けなければ！））

だが、遊星と一夏の思いとは裏腹に女子がどんどん集まってくる。

「しかも、織斑君と不動君と一緒に！」

「いたっ！ こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

（（いつからIS学園は武家屋敷になった！？））

そして、時代劇のごとくさらに女子が増える。

「織斑君や不動君の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！ 不動君のサファイアの瞳と並ぶとなお美しい！」

「きゃああっ！ 見て見て！ 織斑君と手繋いでる！」

「日本に生まれて良かった！　ありがとうお母さん！　今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

（駄目じゃないか……大切な母には立派なプレゼントを用意しないと……）

遊星は目尻が熱くなるのを感じる。

すると、全ての通路から女子が駆け寄ってくる。

つまり、囲まれてしまった。

「囲まれた！？」

「ど、どうしよう……」

一夏とシャルルは慌てる。

「仕方ない……」

遊星は再び待機状態の星竜の持つ。

「ウォリアーズ・フォーラム『ドリル・ウォリアー』！！」

《ふはははは！　リアル罠カード、亜空間物質転送装置、発動だぜ！》

遊星はドリル・ウォリアーの姿になると、ドリルランスを振り下ろし、空間を切り裂く。

「ドリル・ワープ！」

「よし、飛び込むぞ、シャルル！」

「えっ!？」

一夏はシャルルの手を引いて空間の裂け目に飛び込み、遊星もそれに続いて空間の裂け目が閉じる。

『逃げたああああああああっ!？』

女子達の叫びが廊下に響き渡るのだった。

第16話 止むことのない騒ぎと遊星の心の強さ(前書き)

いやー、早くラウラVS遊星をやりたい。

そのまえに書くこといっぱいですけど？

第16話 止むことのない騒ぎと遊星の心の強さ

何とか女子の大軍から脱出した遊星と一夏とシャルルは、ドリル・ウォリアーのドリル・ワープで更衣室へ移動した。

「凄いねさっきの！　それが遊星のISの能力？」

シャルルは興味津々で聞いてくる。

「厳密には数ある特殊能力の一つだ」

「えっ！？　他にもたくさん能力があるの！？」

「俺のISはかなり特殊でこの世界にある全てのISとは違うんだ」

「むー？　どういうこと？」

シャルルはイマイチ理解できないらしく、可愛く首を傾げる。

（……本当に男なのか？）

遊星は疑ってしまう。

何故なら今まで会ったことのないタイプだからである。

（まあ、いいか……）

そう思いながら着替え始めると、シャルルは顔を違う方に向けた。

(……どうした?)

遊星は疑問を抱きながらもISスーツに着替える。

グラウンドに行き、全員が並ぶと、千冬はセシリアと鈴音を呼び出す。

すると……。

「あああーっ! ど、どいてくださいーっ!」

(え? あれは山田先生!?)

なんと、空からISを纏った真耶が制御不能で急降下してくる。

ドカーン!

一夏と激突し、土煙が舞う。

土煙が止むと、その光景に遊星は目を閉じ、頭に頭痛が走るのを感じる。

どうしてそうなったのか、一夏が真耶を押し倒す形となっている。

しかも、あろうことか一夏の手が真耶の豊満な胸を掴んでいる始末。

「うわっ！　ご、ごめんなさい！」

一夏は急いで真耶から離れる。

（これが巷で噂のラッキースケベなのか……俺は絶対にそのスキルは欲しくないな）

遊星はため息をついた直後。

《何してるんだ、このラッキースケベ野郎！！！》

「ぶべばらあっ！？」

突然一夏は何者かの手によってぶっ飛ばされた。

一夏を抹殺しようと武器を展開したセシリアと鈴音は啞然とする。

そこにいたのは……。

「……一体お前達は何をしている？　スピード・ウォリアー、ダッシュ・ウォリアー、ラピッド・ウォリアー」

一体目は特殊なアーマーとローラースケートを履いた戦士である『スピード・ウォリアー』。

二体目は同じく似たような赤色の装備をした『ダッシュ・ウォリアー』。

三体目は青色の細い機械の体の戦士である『ラピッド・ウォリアー』。

言うまでもなく、遊星のモンスターで、その中でも速さを司るモンスターなのである。

《決まっている……箒様、セシリア様、鈴音様という素晴らしい御方が居りながら……教師相手にラッキースケベを発動させたその男に裁きを下すためだ!》

スピード・ウォリアーが堂々と言い放つ。

(いつの間に箒たちに惚れたんだ、お前達……)

遊星は知らなかった。

星竜の中の精霊達で一夏のお相手の女性の派閥が徐々に結成されていることを……。

《さあ、行くぜ、兄貴! 相棒!》

《応っ!》

《了解!》

ダッシュ・ウォリアーとラピッド・ウォリアーは目を怪しく光らせ、

スピード・ウォリアーと共に一夏に襲いかかる。

「うわっ、ちょっ、やめ————イヤアアアアアアアアッ！！」

一夏の絶叫が第二グラウンドに広がる。

数分後、一夏に裁きを終えたスピード・ウォリアー達は箒達に挨拶をすませると星竜に帰った。

一夏はボロボロになっているが、何事もなかったかのように真耶VSセシリア&鈴音の模擬戦闘が行われる。

しかし、二人のコンビネーションが悪く、さらに元日本代表候補生である真耶の高い実力により、結果はセシリアと鈴音の大敗となっていた。

次に、訓練機IS『打鉄』で乗り方や動かし方の訓練が始まる。

専用機を持つ、遊星、一夏、セシリア、鈴音、シャルル、ラウラが教えることになる。

すると、女子達は遊星、一夏、シャルルを目当てに集まってくるが、千冬の一喝により静まるのだった。

遊星が担当することになった数名の女子にISの動かし方をわかりやすいように丁寧に教える。

そして、訓練が終わると、遊星は一夏に呼び出される。

「遊星、お昼は屋上で食べないか？」

「屋上？ ああ、構わないよ」

「じゃあ、後でな」

「ああ」

だが、遊星はこの誘いを断ればよかったと後悔するのだった。

（何だこれは……）

遊星は目の前の出来事に額を歪ませる。

屋上にて箸、セシリア、鈴音はお手製の弁当を一夏に食べてもらおうと、奮闘している。

更には、もはや伝説と化している『はい、あーん』を一夏にやってもらおうと言う始末。

（俺はこれを見せつけられるためにここにいるのか？）

遊星は気を紛らわすためにアルバムを見る。

すると、シャルルが隣から覗いてくる。

「それ、遊星の両親の写真？」

ちょうど開いたページは、遊星の両親と生まれたばかりの遊星が写った写真だった。

「ああ。俺が生まれてすぐに撮られた写真だそうだ」

「へえー。遊星って、お父さんにそっくりだね。お母さんも凄い美人だし」

「だけど、話したことが無いんだ」

遊星は少し暗い表情をして、シャルルは凍ったように固まる。

「」「……え？」「」

騒いでいた一夏達も止まり、遊星を見る。

「俺の両親は……ある実験の事故で死んだんだ。俺が生まれてすぐのことだった……」

「ごめん、遊星！ 嫌なことを思い出させちゃって……」

シャルルはすぐに遊星に頭を下げて謝罪する。

一夏達は言葉を失う。

「いいんだ、お前が気にすることはない。俺は幸せだからな」

「幸せ……？」

「ああ。これを見てくれ」

遊星は一番思いである大切な写真をみんなに見せる。

それは遊星の他に六人の男女が写った写真だった。

遊星を含めて全員がとても幸せそうな笑顔を見せていた。

「俺は自分の人生を不幸だと思ったことはない。むしろ、仲間達がいつも周りにいて幸せだと思っている。現に今もそうだ」

遊星はみんなを見渡し、優しい笑みを浮かべる。

「お前たちが側にいてくれるだけで俺は幸せだ。そして、どんな敵が来ようとも戦うことが出来る」

冗談に聞こえるこの言葉も遊星が話すと、とても重みがあるのを一夏達は感じ取る。

シャルルは遊星の心の強さに驚きつつ、自分の胸に手を当てる。

（遊星はこんなにも心が強いのに……それに比べて僕は……）

シャルルの心臓が締め付けられるように痛くなり、唇を噛み締めた。

（強く、なりたい……遊星のように……）

第17話 訪れた小さき嵐（前書き）

いよいよ来週に迫りましたね。

遊戯王の映画、楽しみです！

一度見たけど何度も見たくなる！

映画記念パックは一箱は買わなくてわ！

第17話 訪れた小さき嵐

土曜日。

遊星、一夏、シャルルの三人はISアリーナにて一夏の白式や戦い方について話し合う。

「ええとね、一夏がオルコットや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？ 一応わかっているつもりだったんだが……遊星はどうしているんだ？」

「俺の場合は様々な戦闘スタイルを持つウォリアー達と星竜で一つになって戦っているから感覚としか言いようがない」

「遊星の星竜の能力、確か……ウォリアーズ・フォルムだっけ？ 一体どれぐらいの姿に変身できるの？」

シャルルに言われ、遊星は現在ウォリアーズ・フォルムが可能な戦士を数える。

「俺が把握しているのは……十五体だ」

「つまり、十五の戦士の姿に変身できる訳だな？ しかも、どれも戦闘スタイルが異なる……何だかもう反則じみた力だな……」

一夏は大きなショックを受け、落ち込む。

「あ、あはは……えっと、一夏の白式には後付武器イコライザがないんだよね？」

「ああ。何回か調べてもらったんだけど、バススロット（拡張領域）が空いてないらしい」

「一夏の場合は織斑先生と同じワンオフ・アビリティー（唯一仕様の特許才能）『零落白夜』に使用している」

遊星が説明した『零落白夜』はシールドエネルギーをコストに、雪片式型で相手のシールドを断ち切る技で、千冬曰わく、諸刃の剣である。

「姉弟だからで同じ能力を使えるのかな……？」

シャルルは腑に落ちない表情をする。

（もしかしたら、それが男でありながらISを使える一夏の秘密と関係があるのか？）

遊星は考えるが、情報が少なすぎるため、答えに導けない。

「それなら、一夏には実際に射撃をやってみて撃っている側からの感覚を学び、それから俺とシャルルの銃撃の嵐から回避するのはどうだ？」

遊星の提案に一夏は手を前に出す。

「ちょっと、タイム」

「どうしたんだ？」

「……前半はともかく、後半の銃撃の嵐は何ですか？ 遊星は俺を殺す気ですか！？」

「まさか」

遊星は涼しい顔をする。

「遊星には射撃用の武器はあるの？」

「なら、呼び出すよ。イコライザ『バックアップ・ウォリアー』！」

軍服を着て、両腕にはマシンガン、そして背中には三つのキャノンが装着された戦士、バックアップ・ウォリアーの武装がそのまま遊星に装備される。

《マスター！ 今からこの兄ちゃんを殺っちゃうんですか！？ 今、我々精霊の中で一番の話題人物を！？》

バックアップ・ウォリアーはテンションが高かった。

しかも、一夏を殺す気満々で。

（誰が殺すか……この武器を紹介しただけだぞ）

《そうですか。と言うことは、俺の出番はまた今度で？》

（ああ。一夏の訓練の時に呼ぶよ）

《了解！ 楽しみにしていますよ、その兄ちゃんを殺るのを！》

(おい)

遊星はバックアップ・ウォリアーの武器を解除する。

「じゃあ、一夏。僕のライフルを貸すからちよつと試し撃ちをやってみようか」

シャルルは一夏にライフルを貸し渡す。

「ああ。えっと……」

「そうじゃなくて、もっと脇を締めて」

「お、おう」

当然初めて銃を扱う一夏にシャルルはくつついて指導する。

(一夏、シャルル。向こうで見ている三人娘が嫉妬の視線で睨みつけているぞ……)

一夏を最初に教えていた箒、セシリア、鈴音はシャルルに指導を奪われて嫉妬している。

射撃の指導が終わると、一夏は『速い』と言う感動を得た。

「それじゃあ、俺もイコライザを試してみよう」

遊星が名乗り出て前に出る。

一夏とシャルルは遊星の射撃の実力を見るために下がる。

「ウォリアーズ・フォルム！」

遊星の周囲にカードが舞う。

「『ジャンク・アーチャー』！」

オレンジ色のボディに、左手には『スクラップ・ボウ』と呼ばれる弓が装着されている、ウォリアーズ・フォルム唯一の遠距離型の武器を持つ戦士、ジャンク・アーチャーの姿となる。

《行き……ます……》

「イコライザ、『シンクロ・ストライカー・ユニット』！」

右腕に装置する巨大なキャノン砲が現れ、遊星は構える。

前方に的が現れ、狙いを定める。

（行くぞ、ジャンク・アーチャー）

《はい……マスター……ターゲット……ロックオン！》

（シュート！）

シンクロ・ストライカー・ユニットの銃口からエネルギー弾が発射され、的の中心にヒットする。

すぐさま隣に現れた的に狙いを定め、エネルギー弾を撃ち、その繰り返しを行う。

全部の的を撃ち終わると全て中心に当たり、パーフェクトだった。

「凄いな遊星！ 接近戦だけじゃなくて遠距型の武器も自在に使えるなんて！」

「しかもパーフェクト！ 本当に凄いね、遊星は」

一夏とシャルルは初めてとは思えない腕前に興奮する。

「ジャンク・アーチャーのお陰さ。さっき撃ったのは、ほとんどジャンク・アーチャーが動かしたみたいなものだからな」

「それって、前に言ってた精霊のこと？ 聞こえる？ ジャンク・アーチャー、君の腕前は素晴らしいね」

シャルルは周囲にキラキラとした輝きを出しそうな笑顔をした。

《そ、それほどでも……ありません》

（……ジャンク・アーチャー？）

いつもなら冷静で寡黙のジャンク・アーチャーが明らかに同様している。

（まさか……いや、一応言っておくが、シャルルは男だぞ？）

遊星は最悪な状況を踏まえて言うが。

《この気持ち……初めて……例え……男でも!》

遂に精霊達の中で間違った道へと目覚めてしまった者が現れてしまった。

(ジャンク・アーチャアアアアアアアアッ!! 止めろおつ、気をしっかり持つんだあっ!!!)

《止めないで……マスター……今すぐ……みんなに助言を……貰ってきます》

(ダメだあああああっ!!!)

まさかの非常事態に遊星は解決策を練る。

(どうする!? 相手は男だぞ! マスターとして止めるべきか!? それ以前に人間に……増してや同性に恋するのはどうなんだ!?)

解決策を練るところか、暴走し始める遊星。

すると、女子達がざわめきだした。

上を向くとラウラがIS『シュヴァルツェア・レーゲン』を起動させ、こちらを睨みつけている。

「おい」

「……なんだよ」

ラウラの呼びかけに一夏が応える。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

と、いきなり戦いを挑んできた。

（なぜそこまで一夏にこだわる……？）

ラウラの一夏に対する異常なまでの執念に遊星は不快感を持つ。

「イヤだ。理由がねえよ」

一夏はすぐに断ったが、ラウラが逃がさなかった。

「貴様にはなくても私にはある！」

すると突然、左肩に装備された大型の実弾砲が発射された。

「『マッシブ・ウォリアー』！！」

一夏とシャルルの前に、小さな要塞を持ち上げた岩石の姿をした戦士、マッシブ・ウォリアーが現れる。

マッシブ・ウォリアーは実弾砲の一撃を受け止める。

《マスター、今だ！》

遊星はシンクロ・ストライカー・ユニットを解除する。

左手のスクラップ・ボウを構え、右手で弦を引くと、一本の矢が現れる。

「デイメンション・アロー!!」

右手を離し、矢はラウラのISの実弾砲に刺さる。

「これで終わりか？」

ラウラは見下すように遊星を見る。

「これを見てもその台詞を言えるかな？」

「何だと？」

「異次元の狭間に消え去れ！」

すると、ラウラの実弾砲は突然消えた。

「なっ!？」

主力の武器が消えたことにより、ラウラの表情は歪む。

「さて……次はどれを消してほしい？」

遊星は不敵な笑みを浮かべ、ラウラに脅しをかけるように再びスクラップ・ボウを構える。

「貴様……」

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

騒ぎを聞きつけた担当の教師の声がスピーカーから響く。

「ちっ……今日は引こう」

ラウラはISを解除し、アリーナゲートへと去っていく。

遊星はウォリアーズ・フォーラムを解除し、ゆっくり地面に降りる。

「マッシブ・ウォリアー、二人を守ってくれてありがとう。助かったよ」

《それぐらいいたしたことない。だが、あの娘は戦いを拒否した者にいきなり攻撃を仕掛けるとは……戦士の風上にも置けない》

「ああ。だけど……」

《マスター？》

「遊星、どうしたんだ？」

「大丈夫？」

一夏とシャルルは遊星の様子をうかがう。

「いや……何でもない。そろそろあがろうか」

「ああ、わかった」

「うん、そうだね」

三人はI Sを解除し、I Sアリーナを後にする。

（感じたんだ。ラウラの……とても強い……悲しさと寂しさの心を……）

ラウラと僅かに戦った遊星の心にそれが感じられたのだった。

第18話 薄幸の少女に未来を（前書き）

今回はあの話ですが、遊星の存在により、かなりシャルの運命が変わるのでどうぞ！

第18話 薄幸の少女に未来を

夕暮れ時、遊星は自分で作成した資料を持ってきて学生寮の廊下を歩いていた。

（一夏の白式のシンクロフォーム用の資料はこれでいいな）

資料にはシンクロフォームをより活用するための事を細かく記載されていた。

「えっと……ここだな」

遊星は一夏とシャルルの部屋の前にたどり着き、ドアをノックしようとして手を上げる。

《お待ちください、マスター》

星竜から高い声が頭に響く。

（その声……エフェクト・ヴェーラーか？）

《私の女の感が騒いでいます。今、マスターがこの部屋に入らない方が宜しいです。お手数ですが、バックアップで先に行かせてください》

（わかった……事情はわからないが、お前に任せる。バックアップ『エフェクト・ヴェーラー』！）

ドア越しに、一夏の部屋に小さな天使、エフェクト・ヴェーラーが

現れる。

シャワールームが開いており、恐る恐る覗くと目を疑う。

そこには、ボディソープを持ちながら固まった一夏が居て、奥にもう一人。

《……やっぱり！》

男の筈なのに胸に女独特の二つの膨らみがある、裸のシャルルがいた。

エフェクト・ヴェーラーはすぐに一夏とシャルルの間へ飛んだ。

《見とれてないで今すぐ出て行きなさい！ この変態エロスケベ！
！》

すぐさま強烈なドロップキックを一夏の顔面に喰らわせ、シャワールームから追い出す。

「ゲブッ!？」

変な声を上げながら一夏は壁に叩きつけられるが、エフェクト・ヴェーラーは完全無視して、ピシャリとシャワールームのドアを閉める。

《全く……》

エフェクト・ヴェーラーは床に落ちたボディソープを持ち上げてシャルルに渡す。

《はい。大丈夫？》

「あ、うん……ありがとう……えっと、君は？」

《私はエフェクト・ヴェーラー。マスター遊星のモンスターの一体よ。今、外にマスターを待たせてあるの。シャワーを浴び終わったら、一夏だけじゃなく、マスターにもちゃんと事情を話してくれる？》

「うん……」

シャルルは暗い表情をするが、エフェクト・ヴェーラーは安心させるように優しい笑みをする。

《大丈夫、マスターは大切な仲間を見捨てないわ。必ずあなたの力になれるわ》

「……ありがとう。エフェクト・ヴェーラー」

《うん。じゃあね》

エフェクト・ヴェーラーは星竜に帰り、遊星にシャルルが女だと言うことを伝えた。

《マスター。シャルルには何か背負っているみたいなんです。だから……》

（わかっている。俺は全力を尽くすつもりだ）

《ありがとうございます。マスター》

遊星はエフェクト・ヴェーラーとの連絡を切り、ドアをノックすると、一夏が出る。

「遊星……」

「入っていいか？ ……シャルルのことで」

「ああ、わかった……」

遊星は部屋に入り、一夏と一緒にシャルルが来るのを待つ。

しばらくすると、髪を下ろしたジャージ姿のシャルルが出てくる。

シャルルは自分のベッドに座る。

「じゃあ、全部話すよ。どうして男としてこのIS学園に入ってきたか……」

シャルルの実家のデュノア社は量産機ISシェアが世界第三位であるが、第二世代型しか売られてなく、第三世代型の開発に遅れてしまい、経営危機に陥った。

そこで、デュノア社の社長は愛人の娘であるシャルルを利用し、男子に変装して一夏に近づき、白式のデータを盗ませようとした。

シャルルの話を聞き、遊星と一夏は怒りがこみ上げてくる。

一夏は立ち上がり、シャルルの肩を掴んだ。

「い、一夏……?」

「親がいなけりゃ子供は生まれない。そりゃそうだろうよ。でも、だからって親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか! 生き方を選ぶ権利だって誰にだってあるはずだ。それを、親なんか邪魔されるなんて無いはずだ!」

熱くなった一夏を遊星は引き離す。

「一夏、落ち着くんだ。シャルルが戸惑っている」

「あ、ああ……悪い」

「一夏……どうしたの?」

「俺は――俺と千冬姉は両親に捨てられたから」

一夏の明かした過去に、遊星とシャルルは驚く。

そして、二人は申し訳なさそうに顔を伏せる。

「すまない……」

「その……ゴメン」

「二人が謝らなくていいよ。それより、シャルルはこれからどうするんだよ?」

「どうって……時間の問題じゃないかな。フランス政府もことの真

相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「それなら問題ない。ここに居る限りは」

遊星はIS学園の生徒手帳を見せる。

「……そうか！ 特記事項第二十一、本学園における生徒は在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする！」

一夏は暗記していたテキストをスラスラと言う。

「つまり、この学園にいれば、すくなくとも三年間はフランス政府も手出しが出来ない。その間に方法を見つければいい」

見えてくる希望の光明に三人はホッとする。

すると。

コンコン！

「一夏さん、いらっしゃいます？ 夕食をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか？」

いきなりのセシリアのノックと呼び声に一夏とシャルルは慌てるが、遊星はいつもの冷静な心情で対応する。

「シャルル、今すぐ布団の中に入って病人のふりをするんだ。一夏

はセシリアの元へ行くんだ」

「「りよ、了解！」」

シャルルは急いで自分のベッドに入り、一夏はドアをゆっくり開けてセシリアを迎える。

「あら、遊星さんもいらっしやったのですか？　シャルルさんはどうかなさったのですか？」

「シャルルは気分が悪くなったから俺達で看ていたんだ。一夏、シャルルは俺が見ているから、お前はそこのお姫様のエスコートをするんだ」

「えっ！？　あの、遊星！？」

一刻も早くこの場から立ち去ってもらうために一夏をセシリアに売る遊星。

「あら、遊星さん。お姫様だなんて……ありがとうございます。では、一夏さん。参りましょう♪」

「は、はい……」

遊星の狙い通り、セシリアは上機嫌で一夏を食堂へと連行する。

部屋が静かになると、遊星はシャルルの元へ行く。

「大丈夫か？」

「うん……ねえ、遊星」

「何だ？」

「僕、これからどうなるかな……？」

シャルルの不安に、遊星は自分の心臓の辺りに手を置く。

「わからない。だが、心の中に僅かでも希望があれば必ず未来を切り開くことは出来る」

「希望、未来……」

「大丈夫だ。俺達が側にいる」

遊星はシャルルの頭を撫でる。

（何だろ……凄くホッとする……）

シャルルは初めて感じる心地よさに満たされる。

「シャルル？」

「遊星がお父さんだったらいいな……」

「……え？」

シャルルが呟いた一言に遊星はポカーンとなる。

「……はっ！？ ご、ごめん！ 変なことを言って！ お願い、忘

れて！」

シャルルは慌ててベッドから起きあがる。

「……どうしてそう思ったんだ？」

「ううっ……遊星と居ると疲れた心が安らぐと言うか……凄く安心するの。それに、大人びている感じもして……」

（まあ、実際シャルルよりは年上だが……俺が父さんか……）

遊星は顎に手を添えて考える動作をする。

「本当に——」

「考えておくよ」

「え!？」

「お前が本気ならな」

遊星は優しく微笑んでシャルルの頭を再び撫でる。

「ありが、とう……」

シャルルは小さな涙を流す。

だが、それは悲しみからでなく、嬉しさからである。

これが、シャルル自身の未来を切り開く第一歩となる。

おまけ。

星竜の中でジャンク・アーチャーを中心に精霊達がエフェクト・ヴェーラーから話を聞いていた。

しかも、第××回、織斑一夏嫁会議と言う変な会議を開いて。

《それは……本当なのか……？ エフェクト・ヴェーラー？》

ジャンク・アーチャーはかなりドキドキしながらエフェクト・ヴェーラーを見る。

《ええ。シャルルは男じゃなく、真正正銘の女よ。よかったわね、ジャンク・アーチャー。変な道に渡らずに済んで》

《……デュエルモンスターズ界の神、オシリスの天空竜、オベリスクの巨神兵、ラーの翼神竜に感謝します》

ジャンク・アーチャーは祈りを捧げる。

《いやいやいや。三幻神のカードは現在行方不明だし、そんな訳わからない事を感謝されても困ると思うわよ》

エフェクト・ヴェーラーは的確なツツコミを入れる。

《では、今は織斑一夏と二人きりか……異次元の精霊!》

ロード・ウォリアーはとても小さな可愛らしい少女の姿をした精霊、異次元の精霊を呼ぶ。

《何ですか? ロード様?》

《今から織斑一夏の部屋の状況を覗き込みたい。出来るな?》

《はい!》

異次元の精霊は次元空間を少し操作して、一夏とシャルルの部屋を盗み見る。

すると、シャルルが和食で箸の使い方に戸惑っている時だった。

「一夏が食べさせて?」

シャルルは一夏に『はい、あーん』を求めてきた。

《ぬおおおおおおおおお!》

《きゃあああああああ!》

《可愛い!》

《なるほど、これが新たな萌えか!》

《おのれ、織斑一夏! 羨ましいぞ!》

シャルルのあまりの可愛い台詞と仕草に精霊達（主に男性陣）は暴走し始めた。

《うむ。これは第一嫁候補の箒嬢、第二嫁候補のセシリア嬢、第三嫁候補の鈴音嬢に続く、一夏の第四嫁候補に加えるとする！ 皆の者、異論は無いな！？》

ロード・ウォリアーが精霊達に向かって宣言する。

《異論なし！！！！》

精霊達は、心が一つになり、ほぼ同時に返事する。

《では、これにて第××回、織斑一夏嫁会議を閉幕する！ 解散！
！！》

《……お前たち、凄く楽しんでいないか？》

スターダスト・ドラゴンが精霊達の会議に呆れ果てた。

.

第19話 未来への道標と遊星の怒号（前書き）

念のため言っておきます。

遊星はアキLOVEです！

シャルロットは一夏LOVEです！

この設定はずっと変わらないので！

第19話 未来への道標と遊星の怒号

シャルルの正体が遊星と一夏にバレて、数日後のことだった。

いつものように登校する一夏とシャルルだったが、食堂や教室に遊星の姿がどこにも見当たらなかった。

そのまま朝のショートホームルームが始まってしまった。

「あの一、織斑先生」

「どうした、織斑？」

一夏は千冬に質問する。

「遊星の姿が朝からどこにも見当たらないんですけど、何かあったんですか？」

「その事か。不動は昨日から少し遠出をしている。心配するな、そのうち帰ってくる」

遊星の遠出にシャルルは直感的にあの日の事を思い出す。

（まさか、遊星……いや、そんなはずは無い……よね？）

その頃、遊星はと言うと……。

「……ここか」

遊星は、とある企業の建物の前に訪れた。

さっそく中に入り、受付嬢と話をする。

数分後、遊星は許可をもらい、エレベーターに乗って一気に最上階まで上る。

そして、最上階にある一際大きなドアを開ける。

そこには一人の男性がいた。

「君かね？ 先日電話したのは」

「はい。初めまして、不動遊星です。あなたがデュノア社長ですね？」

そう……この建物はシャルルをIS学園に送り込んだフランスにあるデュノア社であり、遊星の目の前にいるのがシャルルの父親である。

遊星は日本のIS学園からはるばるここに來たのだった。

「さっそく、この資料をご覧になってください」

遊星はカバンから数枚の資料を取り出して社長に見せる。

「……これは!？」

社長の資料を掴む手の力が強くなる。

「そのシステムや技術さえあればこの会社で遅れている第三世代の開発も大幅に取り戻せるはずです。俺の要求を呑んでくれればまだ見せていない残り半分も含めてあなたに譲ります」

遊星は不敵な表情で社長と交渉する。

このシステムや技術は遊星が独自に考えたものであるが、未完成や不完全や欠点な部分がかなり多く、遊星は使い物にならないと処分しようとしていた。

しかし、この世界のISの完成度を上げるものとしてはかなり有効なものらしい。

今のデュノア社にとっては喉から手が出るほど欲しいものである。

「それで……あなたの要求とは？」

(その言葉、待っていた!)

遊星は小さな笑みを浮かべる。

「あなたにはとても簡単なことです。お金とかそう言うものではありませんから」

「では、一体何を……」

「あなたの娘、シャルルとの親子の縁を切ってください。そして、もう二度とシャルルと関わらないと約束してください」

遊星の目的はこれだった。

シャルルを一刻も早く自由にすること。

そのためにデュノア社に乗り込んで来たのだ。

「何！？ どうしてアレのことを……」

自分の娘であるシャルルの事を『アレ』呼ばわりし、遊星はピクツと額を動かす。

バンツ！！！！

遊星は怒りに任せてテーブルを叩きつける。

「知っている……シャルルを道具として利用し、一夏の白式のデータを盗ませようとしたあんた達の身勝手な行動を！！！！」

そして、遊星の怒りを孕んだ瞳に、社長は完全に圧倒されてしまう。

「シャルルの未来を……これ以上あんたたちに奪わせない。さあ？ どうする？」

社長はカタカタと震えながら頷く。

「わ、わかった……好きにしろ。アレをお前にくれてやる……」

「……よし」

遊星はデータの入ったフラッシュメモリーを渡す。

「何故だ……何故そこまでアレをこだわる？」

社長には遊星の行動は理解不能だった。

「……あんたには一生わからないよ」

（父として認められていないあんたにはな……）

そう言い残し、遊星はデュノア社から立ち去った。

数時間後、日本行き飛行機内にて遊星は服の内ポケットからボイスレコーダーを取り出して、イヤホンに付けて再生する。

先ほどの交渉の時の録音がしっかりとされていた。

（言質も完璧。これでシャルルは自由だな。もし、デュノア社が何かを仕掛けてきたらハイパー・シンクロンと共にデータベースにハッキングして、デュノア社を脅せば問題ないな）

遊星は完璧な戦略にとりあえず安心し、機内で眠りにつく。

《遊星……誰かのためにやる気になったお前はもう無敵すぎるな……》

星竜の中のスターダスト・ドラゴンが代表で眩き、他の精霊たちはうんうんと何度も頷く。

それから日本に到着すると、すぐにD・ホイールを走らせてIS学園に戻る。

まずは色々と迷惑をかけた千冬に挨拶をしようと職員室に向かおうとする。

《マスター！ 第三ISアリーナにて、セシリアと鈴音がラウラと模擬戦をしている！》

IS学園のシステムとリンクしているハイパー・シンクロンからの緊急連絡だった。

（二人がラウラと模擬戦！？）

《だが、すでに勝敗はついているラウラはセシリアと鈴音を容赦なく痛めつけている！ このままじゃ二人の命が危ない！》

（っ！？ セシリア！ 鈴音！）

遊星は星竜を起動させ、ジャンク・ウォリアーの姿となり、高速で駆け抜ける。

《限界突破で行く、千冬の姐さんのお仕置き覚悟で!》

(最初からそのつもりだ!)

第三ISアリーナに近づくが、遮断シールドの事を忘れていた。

(だったら……遮断シールドをぶち抜く!!)

「イコライザ『セカンド・ブースター』!」

青色の飛行機に似たロボットが現れ、遊星の背中に装着される。

《マスター、マッハスピードで行きまっせ!》

「行くぞ!」

セカンド・ブースターとジャンク・ウォリアーの二つのブースターにより、速力が何倍にも加速され、遊星はその速力を拳に乗せる。

「スクラップ・フィスト!!!」

速力による威力が何倍にも上昇した巨大な拳のオーラは遮断シールドを破壊し、フィールドにいるラウラへと突撃する。

ラウラはワイヤーブレードと呼ばれる糸によりセシリアと鈴音を縛り上げ、殴り、蹴るなどをして痛めつけていた。

「止めろおおおおおおおっ!!!」

「なっ!?! 不動遊星!?!」

遊星の怒号の叫びに気づいたラウラは後ろに下がり、遊星の攻撃を避ける。

拳が地面に激突すると、強力な衝撃波が発生する。

「くっ!?!」

衝撃波によりラウラは少し吹き飛ばされ、遊星はその隙をついた。

「バックアップ『マックス・ウォリアー』! 『ジャスティス・ブリ
ンガー』!!!」

現れたのは、二つ又の鉾を持つ僧侶の姿をした戦士、マックス・ウ
ォリアー。

もう一体は正義と光の剣を持つ聖なる戦士、ジャスティス・ブリ
ンガー。

二体はシャルルと鈴音を縛り上げたワイヤーブレードを断ち切ると、
シャルルと鈴音を抱えて下がる。

《マスター、他の精霊たちがあの娘に怒りを募らせています》

《セシリア様と鈴音様の敵討ちを臨んでいる》

「ああ、わかっている。二人はセシリアと鈴音を安全な場所へ頼む」

《はい》

《了解しました》

マックス・ウォリアーとジャステイス・ブリンガーはセシリアと鈴音を運ぶ。

「遊星、俺にもやらせてくれ！」

「僕も！」

一夏とシャルルは遊星に加勢しようとするが、遊星は断る。

「ダメだ。俺一人でやらせてくれ」

「でも、あいつの強さは！」

「今から俺は……魔神と鬼神をこの身に宿す。そうなれば、二人を巻き込みかねない。頼む、下がってセシリアと鈴音を見ていてくれ」

遊星の心に怒りが満ちているのを感じた二人は頷くしかなかった。

二人は下がり、遊星はラウラを睨みつける。

ラウラはレールガンを構え、不敵の笑みを浮かべる。

「不動遊星……貴様を叩き潰すこの時を待っていた！」

「俺の大切な仲間を傷つけたお前を倒す！ ラウラ！！」

遂に、遊星とラウラの対決が始まる——！！！！

・

第20話 魔神と鬼神（前編）（前書き）

ええええええええええええっ!?

ゾーンの正体にビックリですよ!

ってか、ゾーンのチートドロロー半端ねっ!!

第20話 魔神と鬼神（前編）

「ウォリアーズ・フォルム！」

遊星の周囲をカードが舞う。

（不動遊星、貴様の力を見せてもらおうぞ！）

ラウラは大型のレールカノンを遊星に向ける。

「『ジャンク・デストロイヤー』！！」

遊星の姿は全てを破壊する怒号の魔神、ジャンク・デストロイヤーとなる。

二本の腕が遊星の両肩の辺りに取り付けられ、遊星の腕と合わせて四本の腕となる。

「イコライザ『シンクロ・ストライカー・ユニット』！『ガントレット・ウォリアー』！『アームズ・エイド』！『錆びた剣ーラスト・エッジ』！」

まず遊星の左腕にシンクロ・ストライカー・ユニットを装備。

次に遊星の右腕に巨大なガントレットを身につけた戦士、ガントレット・ウォリアーのガントレットを装備。

続いてもう一つの右腕に鋭利な爪を持つ機械の手、アームズ・エイドを装備。

最後にもう一つの左腕には錆び付いた巨大な剣、錆びた剣―ラスト・エッジを装備。

四つの腕に四つのイコライザを装備した遊星のISの全体の能力が大幅に上昇する。

（行くぞ、ジャンク・デストロイヤー！）

《奴のISとプライドを壊しまくる！ それぐらいじゃないと気が収まらねえ！！》

遊星は飛びながらシンクロ・ストライカー・ユニットでエネルギー弾を発射する。

ラウラはエネルギー弾を避けながらレールカノンを発射する。

遊星はシンクロ・ストライカー・ユニットの引き金を引くのを止め、右腕のガントレットでレールカノンを防ぎながら接近する。

すると、ラウラのISから数本のワイヤーブレードが現れ、生き物のように動き、遊星に襲いかかる。

「はぁ……ふっ！！」

息を吐き、ラスト・エッジとアームズ・エイドでワイヤーブレードを弾いていく。

「喰らえ！」

ラウラは近づいてきた遊星にレールカノンを再び発射する。

「くっ！」

遊星は辛うじて避けるが、ラスト・エッジに直撃してしまい、破片となって宙に飛び散る。

「次は外さん！」

「錆びた剣―ラスト・エッジの特殊能力、発動！」

遊星が言うと、宙に飛び散った破片はピタリと止まり、一斉にラウラに向かって弾丸のように飛ぶ。

「何!？」

（これで一瞬でも隙を作れば……）

「だが、甘い！」

ラウラは右手を前に出すと、大きめのバリアが張られ、ラスト・エッジの破片を完全に防いだ。

（何だあれは？ ターボ・ウォリアー！）

《マスター、あれはどうやらA I Cと呼ばれる、あの機体独特の能力で、対象を任意に停止させる結果です。恐らく、セシリア様と鈴音様がやられたのも、その結界によるものかと思われます。ですが、彼女を使えば封じることができます》

（なるほど。なら、まずは相手に近づく事だな）

《はい。マスター、ご武運を》

（ああ！）

「何を考え事をしている！」

ラウラに隙を突かれ、足にワイヤーブレードが巻きつき、地面に叩き落とされる。

「があっ！」

更に、ワイヤーブレードで四本の腕と両足を完全に縛り、遊星を動けなくする。

「貴様もこの程度なのか。やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない。――消えろ」

レールカノンを遊星に向ける。

しかし。

「ふふふふ……」

遊星は少々不気味な笑いをする。

「何が可笑しい？　これから消える弱者が」

「それはどうかな？」

「何だと？」

「スキルエフェクト！『エフェクト・ヴェーラー』！！」

遊星とラウラの間にエフェクト・ヴェーラーが現れる。

《これ以上、マスター達や私の仲間をあなたに傷つけさせない！》

「エフェクト・インバリッド！」

両手から小さな光を放ち、シュヴァルツェア・レーゲンに当てる。

「今は……」

すると、シュヴァルツェア・レーゲンからラウラの目の前に画像を映す。

その画像にラウラは目を疑う。

『A I C使用不能』

（まさか……今の光で！？）

ラウラに動揺の表情が現れ、遊星は勝機を見出す。

「タイダル・エナジー！！」

ジャンク・デストロイヤーの胸の辺りにある、大きな赤色の球体か

ら海の大波のようなエナジーが現れ、今度はワイヤーブレードに当た
てる。

すると、縛っていたワイヤーブレードが緩み、遊星はアームズ・エ
イドで切り裂く。

更にラウラの前に画像が映される。

『ワイヤーブレードシステムにバグ発生。コントロール不能』

（そんな馬鹿な！？）

一体何が起きたのかラウラにはまったく理解できなかった。

遊星はイコライザを解除し、四つの手を強く握り締めてエネルギー
を込める。

《穿て、我が裁きの鉄拳！！》

「デストロイ・ナックル！」

四つの拳から拳の形をしたエネルギー体が現れ、ラウラに襲いかか
る。

ラウラはまともに防御出来ないまま直撃を受け、吹き飛ばされる。

「があ、くっ！？」

体勢を立て直すが、ラウラの表情に初めて焦りが現れる。

（ありえない……私が、シュヴァルツェア・レーゲンがここまで追い込まれるなんて）

ラウラは化け物を見るような目をして遊星を見る。

（不動遊星とISの星竜、一体お前たちは何なんだ！？）

「まだ、これで終わりじゃない」

ビクッ！！

遊星の言葉にラウラは一瞬震えた。

「ウォリアーズ・フォーラム」

遊星はゆっくりと言葉を並べる。

「この姿でラウラを叩き潰す」

星竜から真紅のオーラが放たれる。

「来い……怒れる鬼神」

遊星が一瞬光に包まれ、すぐに光が止む。

「『ジャンク・バーサーカー』」

現れたのは、真紅の鎧を身に纏い、巨大な斧とモーニングスターが合体した凶悪な武器を持った狂戦士、ジャンク・バーサーカー。

その姿にラウラだけでなく、一夏とアリーナにいる女子生徒全員があまりの恐ろしい姿に身震いする。

遊星は大きく息を吸い、全身に力を入れ、そして。

「――！！！」

声にもならない大きな叫びを上げた。

《――！！！！》

ジャンク・バーサーカーも遊星と同じように叫びを上げた。

叫び終わると、遊星はラウラを睨みつける。

「覚悟は出来たか？」

その一言に、まるで、ラウラは死刑宣告をされたような気分となる。

第21話 魔神と鬼神（後編）（前書き）

遊星とラウラの決着（？）がつきます。

それでは、後編どうぞ！

第21話 魔神と鬼神（後編）

遊星は凶悪な斧『バーサーカー・アックス』を振り上げ、飛びながらラウラに向かって振り下ろす。

「ちっ！」

AICとワイヤーブレードが使用できなくなったラウラは回避するしか手段がないため、加速しながら避ける。

ズドォーン！！！！

バーサーカー・アックスの刃は地面に深くめり込み、そこから強い地響きと地割れが起きる。

その一撃がとてつもない破壊力を秘めているのを安易に物語っている。

「あ、ああ……」

あまりの破壊力にラウラは背筋が凍る。

だが、唇を噛みしめ、心を静めてレールカノンを発射する。

しかし、遊星は回避もせず、ましてや防御の体勢も行わなかった。

遊星はバーサーカー・アックスを下ろし、右手を軽く上げた。

その後の行動にラウラは今度は度肝を抜かれた。

ギーン！！

何と、遊星はレールカノンの実弾のスピードを見極め、鎧を纏った右手で弾き返したのだ。

弾き返した実弾は地面に激突し、爆発する。

「馬鹿な……」

「今度は俺のターンだ」

一方、一夏達は圧倒的な強さでラウラを圧している遊星に啞然としていた。

「遊星、強い……」

「強力なラウラの能力を完全に封じて自らのペースに巻き込んでいく……」

一夏と箒は開いた口が閉じなかった。

「だけど、雰囲気がいつもの優しくクールな遊星じゃない……どうしちゃったんだろう……？」

シャルルは手を組み、心配しながら見守る。

「ジャンク・バーサーカーの特殊能力、バーサーカー・ソウル」

すると、突然星竜のエネルギーシールドが大量消費され、残り僅かとなる。

「防御を捨て……」

遊星は瞳を閉じ、バーサーカー・アックスを地面に突き刺す。

「攻撃のみに力を注ぐ……」

遊星の体に狂気のオーラが纏われる。

「全ては……」

《遊星、奴の歪んだ魂を打ち碎け！！！！》

「敵を倒すために！」

遊星が瞳を開くと同時に姿が消える。

「はっ！？ 消え——」

「遅い」

ラウラの背後にいつの間にか遊星が回り込んでいた。

遊星はラウラの背中を殴り、地面に叩き落とす。

「があ、あぐっ!?!」

遊星は一瞬で地面に降り、ラウラの腕を掴んで壁に向かって投げ飛ばす。

ラウラは壁に強く激突する。

「ぐうっ!?!」

「これで終わりだ」

遊星は地面に突き刺したバーサーカー・アックスを引き抜き、ラウラに向かって一直線で駆ける。

すると、千冬が近接ブレードを持ち、こちらに向かってくる。

（千冬、戦いを止めに来たのか……だけど、最後のこの一撃だけは！）

遊星は千冬に視線を向けた。

遊星の意図をわかった千冬は走るのを止め、近接ブレードを地面に突き刺す。

（なるほど……仕方ないな。まあ、ラウラにはいい薬になるか）

千冬は僅かに頷き、遊星はスピードを加速させる。

迫り来る恐怖の力にラウラは移動することが出来なかった。

最後の力を振り絞り、レールカノンの引き金を引く。

「あああああああっ！！」

ほぼ近距離でレールカノンの直撃を受け、遊星は先ほどのような弾き返す動作もしていない。

（た、倒した……）

しかし、煙が晴れると、そこには。

「スキルエフェクト『ネクロ・ディフェンダー』。ネクロ・ガーデイアン」

遊星の前に現れたのは、下半身がなく、紫色の不気味な姿をした悪魔、ネクロ・ディフェンダー。

（まさか……あれが私のレールカノンを防いだのか！？）

《マスター、最後を決めてくれ》

ネクロ・ディフェンダーの言葉に遊星は頷き、バーサーカー・アックスを再び振り上げた。

その瞬間、ラウラはギュッと目を閉じた。

（や、殺られる！！）

パン！！！！

「……ふえ？」

ラウラは頬に強烈な痛みを感じ、思わず気の抜けた声を出してしま
う。

目を開くと、そこにはジャンク・バーサーカーの姿の遊星ではなく、
星竜の通常状態の姿だった。

遊星はジャンク・バーサーカーを解除して、ラウラの頬に平手打ち
をしたのだ。

遊星は大きく息を吐き、ラウラに背を向けて立ち去り、一夏達の所
へ向こうとする。

「何故だ……不動遊星、何故とどめを刺さない！？ あのと二人の敵
討ちをするのではなかったのか！？」

ラウラに言われ、遊星は立ち止まる。

「……俺は充分お前とISを追い込んだ。セシリアと鈴音の敵討ちは終わりだ」

そう言い残し、今度こそ一夏達のところへ向かう。

すると、千冬が呆れた表情をしながら遊星に近づく。

「まったく……ヒヤヒヤしたぞ」

「すまない……」

「いいや、あいつにはいい薬だ。今回は特別に見逃してやる」

「……感謝する」

「ああ。さっさと行け、一夏達が待ってる」

遊星は頷き、一夏達の元へ走った。

保険室にてラウラに痛めつけられたセシリアと鈴音はベッドに横たわっていた。

体には痛々しく包帯が巻かれていた。

そこに、遊星と一夏とシャルルは見舞いにきている。

「二人とも、大丈夫か？」

「ええ、ご心配には及びませんわ。それと、遊星さん、ありがとうございます」

「えっと、私達の敵討ちをしてくれて……ありがとう」

セシリアと鈴音は遊星に感謝する。

「ああ」

すると、保険室に地響きが起こる。

ドドドドドドッ……！

（っ！？ 何だこの音は！ それに、この凄まじい気配は！？）

ドカーン！

保険室のドアが吹き飛び、女子生徒がずらずらとホラー映画の無数のゾンビのごとく入ってきた。

（今ドアを蹴り飛ばしてなかったか！？）

状況が理解できない遊星達に女子生徒一同が出したのは学内の緊急告知文が書かれた申込書だった。

そこには、今月末の学年別トーナメントが二人組のペアで参加することになった知らせだった。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

「私と組みましょう、不動君！」

たくさんの女子生徒達が誘ってくるが、遊星は一夏とシャルルの肩を叩いて言う。

「一夏はシャルルとペアを組むことになっている。俺は二人をサポートしなくてはならないから学年別トーナメントには出ない」

一夏とシャルルは遊星の意図をわかり、頷く。

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男同士っていうのも絵になるし……ごほんごほん」

（何を期待している？）

幸い、女子生徒達はあっさり納得し、すぐに保険室から出る。

「一夏っ！」

「一夏さんっ!」

セシリアと鈴音がベッドから飛び出すが、遊星は二人の言いたいことを分かっているため、先手を打つ。

「二人には残念な知らせがある。ブルー・ティアーズと甲龍の損害がレベルCになって、今月末のトーナメントには参加できない。無理に出たらISが使い物になる」

「えっ、そんな……」

「うう……」

「トーナメントには間に合わないが、俺に修理させてくれないか？新しい力を組み込んでおく」

「はい、お願いします……」

「頼んだわよ……」

二人はショックを受けながら返事する。

「一夏とシャルルの白式とリヴァイヴも新しい力を組み込む。これから始めるから手伝ってくれるか？」

「わかった!」

「うん、もちろん!」

遊星達はセシリアと鈴音に挨拶をすると、保険室を後にする。

.

第22話 父と娘、そして忍び寄る影（前書き）

遊戯王の映画、見に行きました！

去年と違い、クオリティーが数段上がってとても見やすく綺麗でした！

スターダスト・ドラゴンがとても美しい？

ゼアルの第一話の縮小版も見られてとても良かったです！

第22話 父と娘、そして忍び寄る影

深夜。

遊星は千冬に許可をもらい、白式、ブルー・ティアーズ、甲龍、ラファール・リヴァイヴ・カスタム——の整備を行っていた。

白式とラファール・リヴァイヴ・カスタム——は調整、ブルー・ティアーズと甲龍は修理を行う。

「あんまりやり過ぎると体に悪いよ？」

シャルルが夜食を持って遊星の様子を見に来た。

「シャルルか。大丈夫、俺は徹夜に慣れている」

「うん。わかったからとりあえず、休もう？」

有無を言わせないシャルルの笑顔に遊星は了解するしかなかった。

「わ、わかった……」

「うん♪」

シャルルが用意した夜食とコーヒーで一息をついた。

「それにしても、ISを四機同時に整備するなんてやっぱり遊星は凄いな」

「そんな事はない。IS学園の設備がいいからとても楽だよ」

「そう言えば、ここ数日間居なかったけど、どこに行ってたの？」

「……ああ。そう言えば、今日は忙しくて話す暇がなかったな」

遊星はコーヒーを一気に飲み干す。

「今はシャルルと二人きりだからちょうどいいな……実は、フランスのデュノア社に行ってたんだ」

「……えええっ!？」

「そこで、社長とシャルルの縁を切るように話を付けてきた。つまり、シャルルはもう自由だ」

「えっ……それじゃあ、あの……」

遊星は椅子から立ち上がり、シャルルに近づいての頭を撫でる。

「この前の約束……シャルルが望むなら、俺が父親になってもいい」
目を見開き、シャルルは声が震える。

「本、当に……? 本当に、遊星が……?」

シャルルは信じられないような表情を浮かべる。

「俺はシャルルの父親として、お前の人生と幸せを守っていくつもりだ」

遊星はとても優しい笑みを浮かべた。

その優しい笑みにシャルルは大好きだった亡き母の面影が見えた。

「うっ……あっ……遊星えっ!!」

「おっ!?!」

シャルルは遊星に抱きついた。

遊星の服を引きちぎるかのように強く握りしめ、顔を遊星の胸へと置く。

「ありがとう……ありがとう、遊星……」

いつしかシャルルの両目には大粒の涙を浮かべ、遊星は子供をあやすように優しく抱きしめる。

（俺の娘……シャルルを幸せにする目的が生まれたな……）

遊星は新たな覚悟を胸に秘めた。

一方、遊星に大敗したラウラはI Sアリーナで苦悩していた。

（何故だ……何故私がああ男……不動遊星に負けてしまったんだ？）

自分が負けた理由を考え、拳を壁に叩きつける。

（私は……戦うために生まれてきた。絶対に、負けるわけにはいかない……不動遊星にも、織斑一夏にも！！！！）

敗北を呪い、勝利を渴望するラウラ。

『ならば、お前に力を貸してやろう』

「っ！？ 誰だ！？」

ラウラが振り向くとそこには不気味な黒い霧がいた。

「くっ！？」

ラウラはシュヴァルツェア・レーゲンを起動させようとする。

『まあ、待て』

「ぐう!？」

(か、体が動かない!?)

ラウラは体が金縛りにあったように動かなくなった。

『さあ、我に委ねるのだ』

黒い霧はラウラの左目の眼帯を外し、左目の中に入り込む。

「止めろ……止めろおおおおおっ!!！」

ラウラの叫びも虚しく、黒い霧は左目の中に入り込み、体中に激痛が走る。

「ぐっ、があっ、ああああああっ!!！」

(負けるか……邪な力に捕られる私ではない!!！)

ラウラは自分の腕を強く噛み、意識を奪われないように保つ。

そしてやがて、激痛が収まっていく。

(収まったか……?)

『やれやれ。強情な奴だ』

黒い霧の声が頭に響く。

（貴様……私の中から出ていけ！ 貴様の力など最初からいらん！）

『そうはいかない。我はお前を宿主と決めた。体を明け渡すまでこの中にいるつもりだ。せいぜい心が折れないよう頑張ることだ』

（くっ、おのれ……）

ラウラは落ちた眼帯を再び左目につける。

（このようなこと、教官には相談できない。私一人の戦いになる……）

ラウラはたった一人の孤独で邪悪な存在と戦うこととなってしまうのだった。

それから時が過ぎ、月末の学年別トーナメント当日となる。

そして、発表された対戦表に遊星達は驚く。

なんと、一夏とシャルルの相手はまさかのラウラと箒のペアだった。

（何て運命なんだ……まさか一回戦からラウラとか……それに、箒とペアか）

遊星は試合前に一夏とシャルルと話す。

「一夏、シャルル。二人にはあれを渡してあるが、注意しろよ」

遊星の言うあれとは、先日遊星が白式とラファール・リヴァイヴ・カスタム——に組み込んだ新しい力である。

「わかってるって！」

「うん。必ず勝ってくるからね」

一夏とシャルルは拳を握り、気合い十分だった。

「よし、じゃあ、行ってこい！」

遊星は両手を上げ、一夏とシャルルは片手を上げて、遊星の片手をそれぞれにハイタッチを行う。

パン！

「行ってきます！！」

二人はISを起動させ、フィールドへ飛ぶ。

.

第23話 迫り来る暴走の力（前書き）

今回は原作に近い感じですが、シャルルがかなり強くなっています
（笑）

第23話 迫り来る暴走の力

フィールドにて、一夏とシャルル、ラウラと箒が対峙する。

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

ラウラと一夏のその話の直後、試合が開始された。

「叩きのめす」

一夏はラウラとすぐさま刃を交える。

シャルルは箒と対峙し、ラファール・リヴァイヴ・カスタム——とシャルル自身の器用の特技である『高速切替^{ラビット・スイッチ}』で徐々に追いつめていく。

それと同時に、ラウラに向かって攻撃していき、一夏の援護を行う。

（篠ノ之さん……悪いけどすぐに終わらせるからね！）

シャルルは一気に畳みかけ、箒を圧倒する。

「くっ、ぐあっ！！」

そもそも、訓練機と専用機のパフォーマンスに大きな差がある。

更には戦い方の相性が悪いため、箒には初めから勝ち目が薄かった

のである。

（これで、終わり！）

シャルルは箒に最後のトドメの一撃を喰らわせ、箒の打鉄のシールドエネルギーをゼロにする。

「くっ……」

箒は悔しがりながら地面に降りる。

シャルルはすぐさま一夏の元へ行く。

「一夏、お待たせ！」

「シャルル、待っていたぜ！ さあ、切り札を使おうぜ！！」

「うん！」

（切り札だと！？）

一夏とシャルルは片手を前に出すと、それぞれの手にカードが現れた。

二人はカードを上投げた。

「来い、ジャンク・シンクロン！」

「来て、クイック・シンクロン！」

一夏の前にジャンク・シンクロンが現れ、シャルルの前にはガンマンの姿をしたロボット、クイック・シンクロンが現れた。

白式とラファール・リヴァイヴ・カスタム——を星竜とリンクさせるように遊星がカスタマイズし、遊星がバックアップで呼び出さなくてもいつでもシンクロフォームを使用できるようにしたのだ。

ちなみに現在修理中のブルー・ティアーズと甲龍にも同じようにシンクロフォームを使えるようにしている。

「白式にジャンク・シンクロンをチューニング！」

《一夏。俺達の力を見せてやろうぜ！》

ジャンク・シンクロンは腰のレバーを引き、三つの星から輪となり、白式に纏う。

「ラファール・リヴァイヴ・カスタム——にクイック・シンクロンをチューニング！」

《行くぜ、あいつに一泡吹かせてやる！》

クイック・シンクロンは拳銃をクルクル回し、五つの星から輪となり、ラファール・リヴァイヴ・カスタム——に囲む。

「「シンクロフォーム！！」」

白式は白式・ジャンクフォームとなり、ラファール・リヴァイヴ・カスタム——にはイコライザが強化され、ジャンク・デストロイヤーと同じ四本の腕となり、ラファール・リヴァイヴ・クイックフォー

ルムとなる。

（あのロボットと四本の腕は間違いなく不動遊星の星竜の力の一端くっ、不動遊星……やはり侮れない！）

ラウラは苦い表情を浮かべる。

「行くぜ、ジャンクロン！」

《略すな！ それより、零落白夜と機動力のエネルギー効率計算完了、いつでも準備オーケーだ！》

「クイック・シンクロン、シールド・エネルギーの出し惜しみ無しで全力で行くよ！」

《了解、イコライザの出力調整は任せてくれ！ 派手に踊ろうぜ！》

一夏とシャルルは二手に分かれ、ラウラに立ち向かう。

まずは一夏が加速しながらラウラに接近する。

ラウラはワイヤーブレードを出し、レールガンを繰り出すが、一夏はジャンク・シンクロンの的確なナビのお陰で難なくそれらをくぐり抜け、間合いに入る。

「無駄だ、貴様の攻撃は読んでいる」

「……確かに俺だけなら簡単に読まれるな。だけど、俺達二人だったらどうだ？」

一夏の言葉の次に、ラウラに向けて銃弾とビームの嵐が降り注ぐ。

（くっ！？）

ラウラは一旦距離を離す。

シャルルは四本の腕にイコライザの銃器を装備して構えている。

腕が四本になったことにより、単純に考えてシャルルが二人いるような攻撃量となる。

それに加え、射撃の命中率とイコライザの攻撃力も格段に上がっている。

シャルルは引き続いて銃弾をラウラに向けて乱射する。

「はあっ！！」

しかし、ラウラは片手を前に出し、A I Cを発動させて全て防ぎきっている。

（A I Cはやっぱりそう簡単には破れない。でも、弱点はある！）

シャルルは一旦全部のイコライザを解除する。

「……これならどうか！？」

シャルルが呼び出したのは、近接武器だった。

その武器を四本の腕で持ち上げる。

しかし、ただのブレードなどの物ではない。

「っ！？ その武器は！？」

ラウラの顔が一瞬、恐怖の色に歪む。

その武器は大きさはシャルルの体格に合わせて調整されているが、間違いなくそれは遊星がジャンク・バーサーカーの姿の時に携えていた凶悪な斧、バーサーカー・アックスだった。

「やああああああああっ！！」

シャルルはとっさに覚えた瞬時加速で一気にラウラに近づき、バーサーカー・アックスを振り下ろす。

ラウラはA I Cでバーサーカー・アックスの一撃を受け止める。

だが。

ピシッ……ピシッ！！

A I Cにヒビが入る。

（ば、馬鹿な！？）

ラウラは目を見開き、驚くしかなかった。

シャルルは予想通りと笑みを浮かべる。

A I Cは一对一の戦いでは反則的な力を発揮するが、発動には多量の集中力を要する。

シャルルは、ラウラが前日の遊星との戦いで、ジャンク・バーサーカーの力に僅かでもトラウマになっていると推測した。

そして、ジャンク・バーサーカーの武器であるバーサーカー・アックスで攻撃を行えば集中力が乱れると判断したのだ。

案の定、ラウラは集中力が乱れ、自身の強みの一つであるA I Cにひびが入った。

「あああああっ!!」

シャルルはバーサーカー・アックスでA I Cを破壊する。

「貴様あ!」

ラウラはレールガンを零距离でぶっ放す。

しかし、シャルルはシールドでギリギリ弾丸を防いだ。

(これで……決めるよ!!!)

シャルルはシールドの下から69口径パイルバンカーを取り出す。

これはラファール・リヴァイヴ・カスタム——の切り札である『灰色の鱗殻』グレー・スケール。

通称『盾殺し（シールド・ピアース）』と呼ばれている。

シャルルはパイルバンカーを構え、引き金を引き、発射する。

ズガンッ！！！

「ぐううっ……！」

ラウラは苦痛の表情を浮かべる。

パイルバンカーの弾丸はシュヴァルツェア・レーゲンのシールドエネルギーごとそりと奪う。

（僕達の、勝利だ！！！）

シャルルは再び引き金を引き、パイルバンカーを三発撃ち込む。

ズガンッ！ ズガンッ！ ズガンッ！

三発撃ち込まれたことによりラウラのISに紫電が走り、IS強制解除の兆候を見せ始める。

（こんな……こんなところで負けるのか、私は……！ 私は負けれない！ 負けるわけにはいかない……！ 織斑一夏を、不動遊星を完膚無きまでに叩き伏せる力が欲しい……！）

ラウラは力を……比類無き最強を、唯一無二の絶対を——願った。

『ふっ……ようやく力を願ったか……しかし、私の力は今は要らぬようだ。なら……見せてもらうぞ、お前と……この機体に仕組まれた力を、な……』

ラウラの左目に潜む闇の影が高みの見物をするかのように邪悪な笑みを浮かべた。

「あああああっ！！！！」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発すと同時にシュヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃を放ち、シャルルの体を吹き飛ばした。

第24話 少年の決着と闇の襲撃（前書き）

キャアアアアアッ！！！

Σ （ $\square$ $\circ$ $\therefore$ ）

超展開！

シューティング・クエーサー・ドラゴン！！！！

遊星凄い！

、（ $\equiv$ ∇ $\leq$ ）／

そして是非ともカード化を！！！！

第24話 少年の決着と闇の襲撃

ラウラに異変が起こり、セシリアと鈴音と共に観客席で見ていた遊星は反射的に動いた。

カタパルトへたどり着き、待機状態の星竜を持つ。

「星竜起動！」

遊星は通常状態の星竜を纏い、カタパルトから飛び立ち、一夏達の元へ行くが、ラウラの今の姿に驚く。

シュヴァルツエア・レーゲンだったISはどろとろに溶け、ラウラを飲み込んで、全く別のISの形となっていた。

驚くことに、手には一夏の持つ雪片式型とよく似た刀があった。

「みんな、大丈夫か!？」

「遊星! うん、大丈夫だよ」

「しかし、ラウラが……」

シャルルと箒が応え、遊星は悔しそうな表情をする一夏に話しかける。

「一夏、何があった? ラウラのあの姿は?」

「あいつ……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉ものだ。千

冬姉だけのものなんだよ。それを……くそっ！」

どうやら今のラウラの力は現役時代の千冬らしい。

（ようするに過去の千冬を相手にするものか……これは一筋縄じゃない。スターダスト・ドラゴンで行けるか？）

「遊星、手を出すな。俺がやる……」

一夏はラウラを倒すという強い意志を持ち、遊星はそれを尊重させることにする。

「一夏……ジャンク・シンクロン、白式のシールドエネルギーは？」

《それが……かなり消費しちゃってもうほとんど残っていない》

遊星はある決意をし、千冬と連絡を取る。

「織斑先生、しばらくの間、教師陣を下がらせてくれ。一夏は自身の手で決着をつけたい」

『……良いだろう。一夏が望むならそれを尊重する』

「ありがとう」

遊星は連絡を切り、一夏の肩に手を置く。

「……一夏。俺の星竜のシールドエネルギーをお前に託す」

「そんな事、出来るのか!？」

「問題ない、可能だ」

遊星は白式の箆手状態に手を置き、そこからエネルギーを流す。

十分なエネルギーを流し終えると、遊星は手を離す。

「……これでいいだろ。十分戦えるはずだ」

「サンキュー、遊星。借りは後で返すぜ」

一夏は白式を起動させる。

《一夏、相手は千冬の姐さんみたいなものだ。零落白夜の奥義を使ってみるぞ》

ジャンク・シンクロンの唐突の提案に一夏は驚く。

（なんだそりゃあ!？ そんなの聞いてないぞ!）

《何故なら今考えたからだ! 心配するな、名前ならしっかり考えてある!》

（そう言う問題じゃないだろ!？ 俺はそれを使えるのか!？）

《もちろん。一夏なら余裕だ》

（わかったよ、やってやる!!!）

「い、一夏っ!」

箒は真剣に一夏を見つめる。

「死ぬな……。絶対に死ぬな！」

「何を心配してるんだよ、バカ」

「ばっ、バカとはなんだ！ 私はお前が——」

「信じろ」

「え？」

「俺を信じろよ、箒。心配も祈りも不必要だ。ただ、信じて待っていてくれ。必ず勝って帰ってくる」

箒と話し終えた一夏は雪片式型を構える。

「零落白夜——発動」

雪片式型に全てのエネルギーを消し去る絶対無効の刃が現れる。

《行くぜ、零落白夜・幻桜陣！！！！》

その瞬間、一夏の姿が消えた。

すると、ラウラの周囲に複数の一夏の姿が現れる。

ラウラは偽雪片で切り裂くが、複数の一夏は霧のように消え去る。

そして、ラウラの背後に一夏が現れる。

「はああああああっ!!」

気合いの一声と共に、雪片式型で黒いISを断つ。

黒いISの切り口からひどく消耗したラウラが出てきた。

眼帯が外れて金色の左目が露わになり、目線が合い、一夏はラウラを抱き抱える。

「織斑、一夏……?」

「ラウラ、大丈夫か?」

「ああ……」

(何だろ……凄く心地よい……悪くないな……)

ラウラはゆっくり目を閉じ、身を一夏に預け、意識を手放そうとする。

『……さて、我の定番だな』

突如、ラウラの左目から黒いな霧が溢れ出し、ラウラの体中に激痛が走り出す。

「ぐっ、あつ、がああああああああああ！！！！」

「ラウラ！？　おい、ラウラ！！」

「一、夏……離れろ！！」

ラウラは消耗した体で最後の力を振り絞り、一夏を押しとばした。

黒いな霧はラウラを包み込み、球体となってどんどん大きさが膨らんでいく。

『さあ、冥府へ堕ちろ。不動遊星』

ヒュン！

球体から高速で何かが飛び出す。

ドスッ！！

一夏達が気づいた時には目を大きく見開き、目の前に起きた現実が全く信じられなかった。

「あ……があ、ぐっ……」

遊星は球体から出てきた太く、鋭い複数の槍みたいな物によって、体の至る所を貫かれた。

星竜……ISの絶対防御を無視しての非情な攻撃だった。

ズルッ……。

槍は遊星の体からゆっくり引き抜かれ、刺された傷口から大量の血が流れ出し、遊星は倒れた。

「「「ゆ……遊星ええええええええええっ！！！！」」」

一夏、箒、シャルルは叫びを上げた。

『さあ、これで邪魔者はいなくなった』

球体は再び形を変え、巨大な悪魔に似た姿となる。

その巨大な悪魔の心臓の代わりに、両手両足と首を鎖によってラウラが繋がれ、捕らわれていた。

「不動……遊、星……」

辛うじて意識を失っていなかったラウラは遊星の姿を見て、涙を流す。

（全部……全部、私のせいだ……）

第25話 仲間を救う、奇跡の竜（前書き）

ふうー。

（；―――） || 3

ラウラ編もクライマックスに近づいたので勢いで書き上げました！

遂にあのロマンモンスターの登場です！

ちなみに私は何度かデュエルで出しました（笑）

（☆▽☆）

『知らないなら教えよう。不動遊星は異世界で英雄として語り継がれた男だ』

「異世界、英雄……？」

『神の化身の戦士に選ばれ、仲間と共に冥界の王から世界を救い、未来からの刺客から破滅の運命を変えたのも不動遊星だ』

遊星の正体に驚く一夏達だったが、泣きながら必死に遊星の出血を止めているシャルルはそんな事はどうでもよかった。

（嫌だ、嫌だよ……）

大切な母を数年前に失ったシャルルはこれ以上失うものは無いと思っていた。

しかし、IS学園に来て、居場所が出来、好きな人ができた。

そして、自分の人生と幸せを守ると約束してくれた。

「遊星……」

シャルルの目から流れた一粒の涙の雫が遊星の頬に落ちる。

（暗い……俺は、死んだのか……？）

死へと向かう遊星は意識が僅かに残っていたが、だんだん遠のいていく。

「起きてよ……」

すると、シャルルの声が微かに届く。

（シャルル……？）

「約束したのに……」

（約束……？ そうだ、俺は……）

遊星はピクツと指が動く。

「目を覚まして……父さん!!」

（まだ……死ぬわけにはいかない！ 仲間を、シャルルを……愛する人を守るために!!）

ドラゴン・ヘッドの痣が輝き、遊星の体に真紅のオーラを纏う。

「これ、は……？」

シャルルは呆然とする。

ムクツ……。

遊星は体をお越し、立ち上がる。

体中の傷口が全て塞ぎ、完全に治ると、真紅のオーラが消える。

「遊星……？」

「心配をかけたな、シャルル」

「よか、った……」

シャルルは涙が溢れ、遊星は指で拭う。

「シャルル。一夏と箒と一緒に下がってくれ」

「え、でも！」

「「遊星!!」」

一夏と箒が駆け寄る。

「大丈夫なのか!？」

「どうやって傷を治した!？」

「話は後だ。みんなは下がっていてくれ。ラウラを……助ける!」

星竜から星屑の光が現れる。

「ウォリアーズ・フォルム、『スターダスト・ドラゴン』！！」

《遊星、心配したぞ！　だが、不死身のお前が死なないとは思っていた》

スターダスト・ドラゴンの姿になり、高く飛翔する。

『くっ、おのれ……赤き竜の加護によって蘇生したか』

「ラウラを返してもらおう！　スターソード！！」

スターソードを呼び出し、光を集める。

「シューティング・ソニック！」

スターソードを振り下ろし、光の閃光を放つ。

『させるか！』

悪魔は闇の砲撃を放ち、シューティング・ソニックを相殺させる。

「スターダスト、まずはラウラをあいつから切り離すぞ！」

《それなら、まずは足を狙って体勢を崩して左半身を切り裂けば……》

『そんな事をすれば、この女は死ぬ』

悪魔の言葉に遊星の動きが止まる。

「なっ!?!」

『この女は私の心臓の役割をしている。我を倒せばこの女も死ぬ』

「くっ……」

ラウラの命が懸かっていると知り、遊星は行動が出来なくなってしまう。

「……構わん。不動遊星、私を殺せ」

「ラウラ!?!」

「こうなったのも、私の『弱さ』が原因だ。お前たちに……迷惑をかけてしまった」

ラウラは自分の死期を悟り、安らかな表情をして、目を閉じた。

「……ふざけるな!?!」

「っ!?!」

遊星は怒鳴りつけ、ラウラは瞬間的に目を開いた。

「そんな事で簡単に諦めるな! お前はまだこの世界で生きている!」

「だが、こいつを倒すには……」

「俺は……目の前で苦しむ『仲間』を絶対に見捨てない！」

「仲間……？」

「そうだ。ラウラ、お前は俺の……俺達の仲間だ！」

ラウラは言葉を失ってしまふ。

（どうして……お前は、私を『仲間』と言ってくれる？ どうして、そんなに、強くいられる……？）

遊星の強さにラウラは理解が追いつかなくなる。

「ラウラ！ お前を絶対に助ける！ 俺の……命にかえても……！」

遊星は右手を握りしめると、胸の辺りに置く。

（アキ、ジャック、クロウ、龍亞、龍可。俺に……力を……！）

遊星の強い想いにドラゴン・ヘッドの痣が更に輝きを増す。

すると、天から五つの赤い光が遊星に向かって来る。

五つの赤い光が遊星の背中に直撃する。

右腕のドラゴン・ヘッドの痣が消え、遊星の背中に六つの赤き竜の痣が集結し、完成する。

そして、遊星の手に金色に輝く一枚のカードが現れる。

（この力は……これなら、いける！！）

遊星は星竜にそのカードをスキャンさせ、バックアップで呼び出す。

「来い、『救世竜 セイヴァー・ドラゴン』！」

ピンク色に輝く不思議な形をした竜が現れる。

《遊星、絶対にあの子を救おう！》

（ああ、共に行こう！）

「更に、『スターダスト・シャオロン』！！」

小さな緑色の蛇によく似た東洋竜が現れる。

《うっしやあ！ 久々に派手にやろうぜい！！》

「みんな……行くぞ！ スターダスト・ドラゴンとスターダスト・シャオロンに、救世竜 セイヴァー・ドラゴンをチューニング！！」

救世竜 セイヴァー・ドラゴンが巨大化し、スターダスト・ドラゴンの姿をした遊星とスターダスト・シャオロンが中に入る。

「集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らし出す。光さす道となれ！！」

遊星達は大きな光の柱に包まれる。

救世竜 セイヴァー・ドラゴンの中で、スターダスト・ドラゴンとスターダスト・シャオロンが交わり、新たな姿へと進化する。

「シンクロフォルム！！ 光来せよ、『セイヴァー・スター・ドラゴン』！！！」

光の柱が晴れると、そこにはスターダスト・ドラゴン、スターダスト・シャオロン、救世竜 セイヴァー・ドラゴンの姿が無かった。

遊星はクリスタルのように美しく、透明なボディをした竜、セイヴァー・スター・ドラゴンになる。

セイヴァー・スター・ドラゴンは全ての闇を祓うかのような煌めく光を放つのだった。

そして、セイヴァー・スター・ドラゴンになったことによりスターソードが進化する。

刀身から柄まで全てクリスタルで造られたように、とても美しく、眩しいくらいの輝きを放っていた。

「スターソード・セイヴァー！」

遊星は切っ先を邪悪の存在に向ける。

『くっ、これは……赤き竜の奇跡か！』

「だが、セイヴァー・スター・ドラゴンだけじゃ、ラウラを助けることは出来ない。だから……」

遊星は目を閉じ、セイヴァー・スター・ドラゴンの両腕の翼を広げる。

心を深く沈め、セイヴァー・スター・ドラゴンとのシンクロ率を100パーセントにする。

すると、遊星の周りに画像と映像、そして音声が流れる。

『スター・ドラゴン・システム、発動！ スターダスト・オーバードライブ！！』

すると、ISアリーナにいる一夏達を含む、多くのIS学園の生徒や教師の体から小さな光が溢れ出す。

その光はセイヴァー・スター・ドラゴンへと集まり、吸収されていく。

「この光はみんなの心の輝きだ。ラウラを助けたみんなの思いと願いが俺とセイヴァー・スター・ドラゴンに力を与えてくれる」

《遊星、チャンスは一度。奴とラウラの力の均衡が崩れた時だ》

（わかった！）

遊星は目を開き、スターソード・セイヴァーを上へ掲げる。

「セイヴァー・スター・ドラゴンの特殊能力！ 相手の能力を無効化にして、その能力を吸収する！ サブリメイション・ドレイン！」

悪魔から力を奪い取り、セイヴァー・スター・ドラゴンが吸収する。

『ぐあああああっ！！ わ、私の力がっ！！』

「……む？ あれは……」

ラウラは地面に落ちているシュヴァルツェア・レーゲンの残骸から光が出てきてセイヴァー・スター・ドラゴンに吸収されるのを見た。

「ラウラ、お前の力を借りる！」

「私の、力……？」

『おのれ……おのれええええええっ！！』

悪魔は先ほど遊星を貫いた槍を出す、遊星の表情はとても落ち着いていた。

「A I C、発動！」

遊星の前にラウラのシュヴァルツェア・レーゲンのA I Cが発動し、槍を受け止める。

『ば、馬鹿な！？ ぐおう！？』

悪魔は突然体勢が崩れ、膝が地面に付き、ラウラを縛った鎖が崩壊していく。

《遊星、力の均衡が崩れた。今だ！！》

遊星は一直線にラウラの元へ向かう。

セイヴァー・スター・ドラゴンから青色のオーラが放出される。

「うおおおおおおおおおっ!!!」

徐々に加速していき、スターソード・セイヴァーを振り上げる。

「シューティング・ブラスター・ソニック!!!」

スターソード・セイヴァーは悪魔の表面を切り裂くと同時にラウラの鎖を断ち切る。

遊星はラウラを自分の胸に抱き寄せ、そのまま悪魔を貫いた。

『ぐおおおおおおおっ!!!』

悪魔は遊星が貫いた所から力が失っていき、断末魔の叫びをあげる。

『くっ！ これで終わりだと思うな！ 何度でも貴様の命を——』

遊星はスターソード・セイヴァーで悪魔の言葉を遮るように真つ二つに斬る。

「……例え、何度お前達が俺の命を狙っても負けはしない。仲間達の絆がある限り!!!」

悪魔は消滅し、遊星は地面に降りる。

「ラウラ、大丈夫か？」

ラウラはひどく疲れた表情をしていたが、淡い笑顔を見せる。

「……ああ。だが、凄く疲れた」

「ははは……俺もだよ」

遊星は苦笑を浮かべ、ラウラを下ろすと、二人は地面に横たわる。

「遊星……」

「何だ？」

「ありがとう……」

「……ああ、ラウラ」

遊星はポンポンとラウラの頭を叩いた。

第26話 本当の自分（前書き）

ISのアニメ本編でラウラのデレっぷりには思わずニヤニヤしてしまいました。

（1、1）

早く臨海学校編に突入したいですが、早めにチーム5D、Sを全員揃えさせなくては……。

第26話 本当の自分

戦いの後、遊星とラウラは保健室に運ばれた。

遊星は傷は治っているが、血を大量に流したため、点滴で輸血を行っている。

更にスター・ドラゴン・システムを使用したため肉体と精神がひどく疲れているが、前回よりは酷くはない。

ラウラも同じく肉体と精神が疲れており、現在すやすやと可愛い寝顔と寝息で眠っている。

すると、真耶が保健室に入る。

今日は大浴場が点検日で使えない日だったが、点検が早く終わり、特別に男子に使ってもらおうという吉報だった。

「なるほど……でも、まだ輸血中なので後でもいいですか？」

「あ、はい、大丈夫ですよ。じゃあ、私は織斑君とデュノア君が待っているのです、失礼します」

(……何？ 一夏とシャルルが？)

真耶が保健室を出ると、遊星はすぐに一夏と連絡をとる。

「一夏、今どこにいる？」

『あ、遊星？　大浴場に行く準備を』

「単刀直入に聞く。大浴場でこれからどうするつもりだ？」

『えっと、シャルルが出るのを待って、俺はシャワーで済ませるつもりだ』

「……シャルルの事だ。一緒に入りたい絶対に言う……そうなければ入るしかないよな？」

（何しろ好きな男と一緒にだから……箒達には黙っておくか）

『た、確かに……』

「父親として混浴と考えれば……まだ許せる……だが」

遊星の声のトーンが低くなり、一夏は背中に大量の汗をかく。

『だ、が……？』

「もし仮にシャルルに手を出したら……俺とウォリアー達、後は千冬も加えてお前に天誅を下すから心に刻んでおくんだ」

遊星は親としての最大級の脅しに、一夏はビシッと敬礼して答える。

『はい！　わたくし、織斑一夏は神と千冬姉に誓って、そのような行為は行いません！』

「それならいい。じゃあ、また後でな」

遊星は連絡を切り、輸血が終わるのをしばし待つ。

それから数時間後、輸血が終わり、元気になったところで遊星は大浴場で疲れを癒し、自室で一息ついていた。

コンコン。

ドアをノックする音がする。

「ん？」

「遊星、僕だよ」

「シャルルか。開いているから入っていいよ」

「うん」

シャルルは部屋に入り、遊星はお茶の用意をする。

「何が飲みたい？」

「えっと、じゃあ、日本茶で」

「わかった」

遊星は二人分の日本茶をすぐに入れて一つをシャルルに渡す。

「ありがとう」

「それで、どうしたんだ？　大浴場で一夏に何かされたのか？」

ビクッ！？

「けほっ！　けほっ！　ちょっと、いきなり何て事を言うの！？」

シャルルはむせてしまい、危うく日本茶を吐きそうになった。

遊星は意地悪な笑みを浮かべながら追撃の言葉を言う。

「じゃあ、シャルルが何か大胆なアプローチをしたのか？」

ボン！　プシュー……。

シャルルの顔は一気に真っ赤になり、頭から蒸気(?)が出る。

「えっと……背中合わせに一夏とお風呂に入って……む、胸を一夏の背中に……で、でも、裸は見られてないから……」

シャルルの余りの大胆さに遊星は一瞬真っ白となる。

(まさか……ここまでとはな。シャルル、娘ながら恐ろしい……)

シャルルに別の意味での恐怖を持ちながら、遊星は一応『父親』として釘を刺しておく。

「シャルル。あまりとやかく言うつもりは無いが、学生の中で『過ち』を犯したらだめだからな」

「——っ!？　そ、そんなことはしないよ!!　もう『父さん』のイジワル!!」

「ははは、すまない。それより……また『父さん』って、呼んでくれたな」

「うん……嫌だった?」

シャルルは不安な顔をするが遊星は顔を横に振る。

「そんなわけ無いだろ。まだ、正式じゃないけど、親子に一步近づいた気がする」

「あ、実はね、それも踏まえて相談があるの」

「相談……?」

「うん。実はね——」

翌日。

真耶は何故か疲れた表情で教室に入り、ホームルームを始めた。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といえますか、すでに紹介は済んでいるといえますか、ええと……」

いまいち理解が難しい説明に、一人を除くクラス全員が頭に『？』の疑問符を浮かべる。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

教室に入ってきた一人の少女に、一夏達はぽかんとする。

「不動シャルロットです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

ぺこりと、スカート姿のシャルル改め——シャルロットが礼をする。

クラスメイトの女子達はもちろん騒ぎ出すが、特に気になったのは『不動』の姓である。

それは遡ること昨日の夜。

「女に戻って転校しなおしたい？」

「うん。時期的にはちょうど良いかなって。それでね……父さんの娘になるなら『デュノア』の姓は捨てた方がいいと思うの。本当の自分に戻りたいから」

「……わかった。じゃあ、今から千冬の所に行こう」

「うん！」

「それと、デュノアの姓を捨てるなら……俺の『不動』の姓をもらってくれ」

「え？ あ、ありがとう、父さん！」

「ああ」

「それと、私のことをシャルロットって、呼んで？　それが、お母さんがくれた本当の名前なの」

「シャルロットか……わかったよ、シャルロット」

「うん！」

そして、クラスメイトの視線が当然遊星に向けられる。

遊星は立ち上がると、事態を少しでも収縮するために話を始める。

「実はシャルロットの家庭内の事情で親と縁を切ることになってしまい、俺が親として引き取ることにしたんだ。まだ正式な手続きは

行っていないが、俺とシャルロットは父親と娘の関係だ。何か質問は？」

「はい！」

箒が手を挙げた。

「遊星は私たちと同じ年なのに、養子は難しいのでは？」

「……そういえば言っていなかったな。俺は既に二十歳を越えている。男でISを使えるということで、保護される形でIS学園に転入してきたんだ」

『……ええええええええええええっ?!?!?!?!?』

クラスメイトの驚きの絶叫が響きわたる。

そして、次に大事な事実が頭をよぎる。

「え? デュノア……じゃなくて、不動さんが女と言うことは……」

「不動君はともかく、同室の織斑君が知らないってことは――」

「ちょっと待って! 昨日って確か、男子が大浴場を使ったわよね!?!」

(あ、これはまずいな……)

遊星は嫌な予感がビンビン来る。

バシーン！

教室のドアが派手にぶっ飛んだ。

「一夏あっ！！！」

鈴音が修理を終えた甲龍を身に纏い、教室に殴り込んできた。

「死ね！！！」

両肩の龍咆をフルパワーで開放される。

ズドドドオンッ！

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

撃ち終わると、毛を逆立てて怒る猫のように肩で息をしている。

「……あれ？ 俺……生きてる……？ 俺生きてる！？」

「……………」

間一髪のところ、一夏と鈴との間に割って入り、一夏を助けたのは――。

「……ラウラ？」

シュヴァルツェア・レーゲンを纏い、AICを発動させたラウラだ

っ
た。

第27話 一夏の婿と遊星の嫁??? (前書き)

やっと二巻分が終わりました。

やっと臨海学校編……ではありません！

Σ（□□）！

なぜなら、次回は遂にあの人の登場ですから！

Σ（。□。；）

遊星の運命は如何に！？

第27話 一夏の婿と遊星の嫁????

一夏は助けてくれたラウラに礼を言う。

「助かったぜ、サンキュ。……っていうかお前のISもう直ったのか？　すげえな」

「……コアはかろうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」

「へー。そうなん——むぐっ!？」

突然ラウラは一夏の胸ぐらを掴み、そのまま引き寄せて一夏の唇を奪った。

「!?!?!?!?!」

あまりに突然の事にその場の全員があんぐりとしている。

ただ一人、遊星だけはやれやれとした表情で笑っている。

（全く……五人目とは、やるじゃないか、一夏。しかも、キス付きで）

ラウラは頬を赤く染めながら宣言する。

「お、お前は私の嫁にする！ 決定事項だ！ 異論は認めん！」

「……嫁？ 婿じゃなくて？」

「日本では気に入った相手を『婿にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

（……おそらくその事を教えた責任者は日本の漫画を見て知識を得たんだろうな……）

遊星は直感で推理し、それが見事に当たっているという驚きと凄さ。

「あ、後一つ……」

するとラウラはテクテクと遊星に向かって歩く。

ラウラは、遊星の前に着くと、遊星を見つめる。

「……どうした、ラウラ？」

「……………」

ムギユ！

「は………？」

今度は遊星に抱きついた。

ラウラは体型が小さいので、遊星の腹の辺りに抱きつく感じになっ

ている。

すると、ラウラは上目づかいで遊星を見て口を開いた。

「あ、あなたを私の父上にする！　け、決定事項なので、異論は認めません！！」

「……ラウラ、理由を聞こう」

遊星は真剣な表情でラウラを見る。

「わ、私は生まれたときから親という存在がおりません故、今まで心のどこかで憧れていました。そして、あなたに出会い、私を本気で叱って、命をかけて助けてくれて……あなたには、私の父親になって欲しいのです！　あなたの、娘になりたい！！」

ラウラのとても純粋で切なる願い。

（まさか……俺の運命がこうなるとはな。さて、どうするか……）

遊星は迷い、シャルロットに視線を向ける。

シャルロットは苦笑を浮かべ、頷いた。

それを見た遊星は優しい笑みを浮かべ、ラウラの髪を撫でた。

「……わかったよ。ラウラ、今からお前も俺の娘だ」

「は、はい、父上！」

ラウラは太陽のような笑顔となり、猫のように遊星にすりすりと抱きしめる。

驚きの連続に一夏達は驚きを通り越して茫然自失となる。

だが、鈴音は一夏を許すわけがなかった。

「アンタねえええっ！！！！」

再び龍咆が開く。

「待て！ 俺は悪くない！ どちらかというと被害者サイドだ！」

「アンタが悪いに決まってるんでしょが！ 全部！ 絶対！ アンタが悪い！ ニトロ・シンクロン、来なさい！！！」

鈴音はニトロ・シンクロンのカードを取り出して、呼び出すと同時にシンクロフォームを行う。

《にいー！ あのバカ野郎を爆殺だにいー！！》

「当たり前よ！！」

（爆殺！？ しかもニトロ・シンクロン一緒もかよ！？ ……ん？
待てよ、となると……）

一夏が振り向くとそこにはセシリアがいた。

ターボ・シンクロンのカードを手にとって。

（やっぱりいいいいっ！！？？）

「ああら、一夏さん？ どこかにおでかけですか？ わたくし、実はどうしてもお話しなくてはならないことがあります。ええ、突然ですが急をようしますの。おほほほ……いらっしゃい、ターボ・シンクロンさん！」

ブルー・ティアーズを起動させて、ターボ・シンクロンを呼び出し、鈴音と同じくシンクロフォームを行う。

《さあさあ……あいつをどう料理してあげましょうかね？ まずは逃げられないように両足から調理開始と行きますかね……》

（ひいいいいっ！！ ちょっと、あんたはこの殺人鬼！？ 逃げなきゃ本当に死ぬよこれ！）

一夏は窓から逃亡を図ろうとするが、目の前に日本刀が突きつけられる。

このクラス……否、この学園で日本刀を扱う人物はおそらく一人しか存在しない。

「ほ、箒さん……?」

「……一夏、貴様どういふつもりか説明してもらおうか」

「待て待て待て! 説明を求めたいのは俺の方で——おわあっ!」?

箒は聞く耳持たんと言わんばかりに日本刀で鋭い斬撃を繰り出す。

(さすがは女子剣道日本一! 太刀筋が凄く綺麗! って、感心している場合か!?)

一夏は自分にツツコミながら逃げ続けるが、誰かとぶつかる。

「一夏、にこっ」

シャルロットは天使の笑顔を見せる。

「シャル、ロット……?」

思わず一夏も笑顔を見せなくなるが、シャルロットの手に持っている物のせいで笑顔は一気に崩れる。

「あのー……シャルロット? そのすごく危ない斧は何ですか……?」

シャルロットはニコニコしながらバーサーカー・アックスを振り上げていた。

シャルロットの背後にジャンク・バーサーカーのオーラが見える。

「は、はは、ははは……」

一夏の周りには四人の鬼神が勢揃いしている。

唯一の頼みの綱である遊星はラウラに今も抱きつかれていて動けない。

遊星はノートにあることを書いて一夏に見せる。

『諦めて天罰を受けろ』

遊星にまで見捨てられ、一夏は目頭に熱い物を感じ、眼を閉じた。

（さよなら、俺……）

ドガアアアアンツ！！！！

凄まじい轟音と爆音、そして絶え間ない衝撃で教室は激しく揺れた。

おまけ。

《キャアアアアアアアアアッ！！！！》

星竜内で精霊達は絶叫する。

《ま、まさか、あのラウラ・ボーデヴィツヒがデレた！？　これは、緊急会議だ！　只今より、第××回、織斑一夏嫁会議を開催する！！》

《了解！！》

ロード・ウォリアーの一言ですぐさま精霊達が集まり、会議を始める。

《織斑一夏にキスをして、まさかの嫁発言！　これはラウラを第五嫁候補、もとい、第一婿候補に決定しかない！！》

ロード・ウォリアーのテンションが今までにないくらい高まっている。

《ロード、まさか……ラウラに惚れたのか！？》

ライトニング・ウォリアーがいち早く気づき、精霊達は驚いた表情となる。

《……ああ！　我はラウラの純粹で幼く、可愛いところに惚れた！！》

《このロリコン王が！　ライトニング・パニッシャー！》

ライトニング・ウォリアーは制裁を下す。

《ぐはっ！？　ライトニング！　貴様、何をする！？》

《貴様の歪んだ精神にお仕置きだ！　みんな、殺れ！！》

《うおおおおおおおおお！！！！》

精霊達は一斉にロード・ウォリアー（ロリコン王）に襲いかかる。

《き、貴様等ああああああああっ！！》

ロリコン王、ロード・ウォリアーピーンチ（笑）！！

《誰が、ロリコン王だああああああっ！！！！》

《シューティング・ソニック！》

白銀の閃光が間に割り込み、精霊達の動きを止める。

《ス、スターダスト！？》

今まで会議に一度も参加してこなかったスターダスト・ドラゴンが戦いを中断させた。

《……お前達。騒ぐのは勝手だが何か大切なことを忘れていないか？》

《大切なこと……?》

精霊達は首を傾げる。

《シャルロットとラウラが遊星の娘になったよな》

《うん》

精霊達は一回頷く。

《つまり、遊星は父親ってことだよな》

《うんうん》

今度は二回頷く。

《じゃあ、母親は?》

《……え????》

精霊達は一気に固まる。

《……お前達、遊星の唯一の嫁の存在を忘れた訳じゃないよな……?
》

《……しまったああああああああああっ！！！！》

精霊達は頭を抱えて絶叫した。

スターダスト・ドラゴンはこの先に訪れる破滅(?)の運命を恐れているのだ。

遊星の愛する恋人と同時に、精霊達にとって最も恐ろしい決闘者。

——十六夜アキ。

第28話 空から現れた恋人（前書き）

遂にみなさんお待ちかねのあの人の当時です！

では、どうぞ！

（・▽・）っ

第28話 空から現れた恋人

シャルロットの再転入とラウラの一夏嫁発言。

そして、遊星とラウラの親子誕生から約一週間後。

「えー、今日は新しい物理学の先生が来るので、皆さん楽しみにしててくださいね」

朝のホームルームで真耶がそれを話すと、ホームルーム後にクラスメイトはその話で持ちきりとなる。

「新しい物理学の先生か……どんな人だろ？」

一夏が呟くと、シャルロットとラウラが来る。

「ねえ、一夏。お父さんがどこに行ったか知らない？」

「実は父上が朝から音信不通で私達は不安なのだ」

「遊星が？ 俺は何も聞いてないけどな……わかった、放課後一緒に探そう」

「うん」

「感謝する」

そして、話が終わると同時にチャイムが鳴り、急いで席に戻る。

ドアが開き、新しい物理学の先生が入った瞬間、クラスメイト全員は目を疑う。

「今日からこのクラスの物理学を担当する不動遊星だ。よろしく頼む」

いつもの私服に白衣を身に纏い、伊達眼鏡をかけた遊星がいた。

『不動君（遊星）！ 一体君は何をやっている！？』

クラスメイト全員のツツコミが一斉に入る。

「実は、前の物理学の先生が急病でしばらく休むことになり、俺が代役に指名されて担当する事になったんだ」

「あの一、遊星？」

一夏が質問しようとするが、遊星は厳しい表情をする。

「織斑、今は教師と生徒の関係だ。俺のことは『不動先生』と呼んでくれ」

「あ、はい、不動先生。物理学以外の時間や訓練は普通に俺達と同じで受けるのですか？」

「ああ。このクラスの物理学だけだからな」

「わかりました」

「では、さっそく授業を始めよう。前回の続きから行う」

一夏達は教科書を開き、物理学の授業を始める。

物理学の科目はとても難しく、理解するのは大変だが、遊星の教え方が上手で何より授業が面白かった。

あっという間に物理学の授業が終わった。

次の時間はI Sの操縦訓練で、授業が終わると遊星は白衣を脱ぎ去り、伊達眼鏡を取る。

「一夏、更衣室に行くぞ!」

「遊星切り替え早っ!? もう学生モード!?!」

「ああ。そうじゃないとこれからやってられないかな」

「流石だ……」

一夏は苦笑いを浮かべて遊星と共に更衣室へ向かう。

グラウンドにて整列をし、千冬が本日の訓練内容を説明する。

遊星は空を見上げ、大きく息を吐いたその時だった。

ドクンッ！！！！

赤き竜の痣が疼き、遊星は痣に腕を添える。

（この、疼きは……？）

すると、女子生徒が空を見て騒ぐ。

「ねえ、空を見て！」

「あれって、もしかして人！？」

「こっちに落ちてくるよ！」

遊星は空を見上げると、落ちてくる二つの赤い姿があった。

（ま、まさか……）

それは遊星に見覚えのあるものだった。

一つは可愛らしく、赤いD・ホイール。

そして、もう一つは綺麗な赤い髪に赤と黒を基調とした服の少女。

その少女の姿を遊星は見間違えるはずがなかった。

何故なら、その少女は遊星の――。

「アキ!!!」

大切な恋人だからである。

星竜を起動させ、飛翔する。

「『スターダスト・ドラゴン』!!!!」

スターダスト・ドラゴンの姿となり、速度を上げる。

《まさか……アキが来るとは……》

「アキ! アキ!!!」

遊星はアキの名前を必至に呼ぶが、アキの意識が無かった。

突然、アキのD・ホイール『ブラッディー・キッス』が輝きだし、粒子分解され、アキに纏う。

そして、遊星の時と同じく、ブラッディー・キッスはISとなる。

星竜と同じく形に特徴的な部分がなかった。

(アキのD・ホイールもISに……?)

遊星は驚きながらアキを両腕で受け止めた。

ISは待機状態となり、薔薇が象られた指輪となり、アキの右手の人差し指にはめられる。

遊星は急いでアキを保健室まで飛んでいく。

下で千冬が何かを叫んでいたが、遊星はそれを完全無視する。

保健室でアキを寝かせると、遊星とアキの赤き竜の痣が共鳴する。

「ん……んう……？ 遊星……？」

赤き竜の力でアキはすぐに目を覚ました。

「アキ、大丈夫か？」

「遊、星……？ 本当に……遊星なの？」

アキは信じられないような顔で遊星を見る。

「他に誰がいるんだ？ アキ」

遊星はアキの頬に手を添えて笑顔を見せる。

「ゆ……遊星え!!」

アキは遊星に勢いよく抱きついた。

「アキ……」

遊星はアキを強く抱きしめる。

「遊星、会いたかった……ずっと、ずっと……」

「俺もだよ、アキ……会いたかったよ」

遊星はアキの首の後ろに手を回し、自分の顔をアキの顔に近づけた。

「アキ……」

「遊星……」

遊星はアキと唇を重ねて、キスをする。

とても優しいキスで何度向きを変えて唇を重ねる。

数分後、遊星とアキは漸く唇を離し、恥ずかしさの笑みを浮かべる。

「ほう……不動。授業をサボって不純異性交遊とはいいい度胸じゃないか」

ビクッ!?

保健室のドアの方を見ると、鬼の形相をした千冬がいた。

「お、織斑先生……」

「えっと……遊星、この人は？」

「私は織斑千冬。このIS学園の教師だ。さて、不動。訓練は山田先生に任せてある。その子のことをしっかりと聞かせてもらおうぞ」

「わ、わかった……」

怒った千冬には誰にも逆らえない。

アキの話によると、遊星が行方不明と知ってから仲間達と共に各地を探していた。

そして、焦りのあまりからアキはD・ホイールのバランスを崩し、空中に派手に投げ出されたが、突然赤き竜が現れ、アキとD・ホイールをどこかに連れ去った。

「そして、アキは気を失い、空に現れた訳か……」

「遊星、私はこれからどうすればいいの？」

「それなら心配ない。アキのD・ホイールがISとして使えるならこの学園に転入できる。織斑先生、アキを転入させることはできますか？」

「ああ。すぐにでも上層部に掛け合おう。十六夜、すまないが一緒に来てくれるか？ 明日にでも授業を受けられるように手続きを行う」

「わかりました」

「それから、不動はすぐに授業に戻れ」

「ああ、わかった。アキ、また後で」

「ええ」

遊星はアキと千冬と別れ、教室に戻る。

教室に戻るとさっそく質問攻めに遭うのだった。

「ねえねえねえ、不動君！ さっきの女の子は一体誰なの！？」

「ISみたいなのを身につけていたけど！」

「それより、不動君とどういう関係！？」

女子達からの怒涛の質問の嵐に遊星はどれから答えればいいのか迷う。

そんな中、箒は腕を組んで何かを思い出そうとなっていた。

「うーん……」

「箒、どうしたんだ？」

「ああ、一夏。遊星が運んだ人をどこかで見たような……」

必死に記憶を手繰り寄せる。

（確か、一夏と鈴音の代表戦の時に……）

「おお！ 思い出したぞ！」

ポンと手を叩いて思い出した動作をすると、クラスの視線が一気に箒に集まる。

「彼女の名前は十六夜アキ！ 遊星の恋人だ！！」

「……え？」

「う、そ……？」

「本当なの……？ 不動君……？」

遊星はゆっくり頷く。

「ああ、箒の言う通りだ。アキは俺の大切な恋人で、愛している」

その時、時間が止まったように静かになる。

そして。

『イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ッ！……！！……！！』

『キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ッ！……！！……！！』

『フニャアアアアアアアアアアアアアアアアアア———
ッ!!!!!!!!!!』

教室に絶望と色んな絶叫がこの世の終わりのごとく轟いた。

「わ、私の恋が終わったあああああ!!!!」

「うわああああああああああん!!!!」

「神様のバカアアアアアアアアアッ!!!!」

「あの不動君が『愛している』って言うなんて、一体どんな人!?!」

「もう、不幸だあああああああ!!!!」

女子達がマジ泣きしながら次々と倒れていく。

そして、遊星の恋人が居るという事実が瞬く間にIS学園を駆け巡った。

それにより、遊星に好意を持つ一年から三年の女子、更には女性の教師までもが、失神したり泣き崩れたり絶叫したり、と色々とマズい状況に陥った。

この日はIS学園創立史上最大の危機となったらしい。

「ねえ、ラウラ」

「何だ、シャルロット？」

「その……十六夜アキさんが父さんの恋人なら、僕達の母さんになるんだよね？」

「確かに、そう言うことになるな……」

「ふつうに考えて認めてもらえと思う？」

「……認めてもらうよう頑張るしかないな」

「そうだね……でも、正直言って……」

「ああ……」

シャルロットとラウラは同時にため息をつく。

「「嫌な予感しかない……」」

.

第29話 恐れていた戦い（SMバトル）の幕開け！（前書き）

遂にやって来ました皆さんが待ち望んだ戦い！

遊星VSアキ!!!

Σ（□□）！

次回は水曜日を予定します！

第29話 恐れていた戦い（SMバトル）の幕開け！

アキはIS学園の転入の手続きを済ませ、遊星の部屋と同室するこ
ととなった。

「ISか……この指輪が待機状態なの？」

「ああ。明日試してみる前に初期設定だけ済ませよう。アキ、デ
ッキを用意するんだ」

「わかったわ」

アキは自分のデッキを出して初期設定を行う。

「あなたの名前は……『ブレイブ・ローズ』。勇敢なる薔薇よ。そ
して……」

アキのカードが鮮やかに舞う。

しばらくすると、スキャンが完了し、精霊の声が聞こえる。

《アキ、やっと話せることができたわ》

大人びた優しい女性の声だった。

《この声……ブラック・ローズ・ドラゴン？》

それは、アキのデッキのエースモンスター、ブラック・ローズ・ド
ラゴンだった。

《そうよ。アキ、これからよろしくね!》

《ええ、こちらこそ》

こうして、アキは専用IS『ブレイブ・ローズ』を手に入れたのだ
った。

次の日、アキは朝から注目の的だった。

唯一わかったのはそれが遊星に関係していることだった。

(そっか、遊星はモテるからその恋人が気になるのね。よし!)

アキは勝利者の気分で遊星の腕に抱きついた。

「ア、アキ!？」

「これでいいの♪」

ガビーン!!

ガクッ……。

アキの狙い通り、大半の女子達が大きなショックを受けた。

そして、朝のホームルームにてアキの紹介が始まる。

「初めまして、十六夜アキです。皆さん、よろしくお願いします」

アキを見た遊星に好意を持っていた女子達は哑然とする。

（び、美少女！？ しかも、スタイル抜群で山田先生にも負けない超巨乳！？）

女子達は戦わずしてアキに敗北するのだった。

一時間目に訓練があるので、女子達は着替えの準備を始めるがその前にシャルロットとラウラが遊星に話しかける。

「お父さん、ラウラが話があるって」

「父上。実は修理中のシュヴァルツェア・レーゲンと先日提案されたシンクロフォームについて……」

ピシッ！！

これが三度目の遊星とアキの戦い（別名、S Mバトル）の引き金だった。

「……お父さん？ 父上？ 遊星、どういうこと？」

ゾクッ!?

アキは素晴らしいほどの笑顔だが、どす黒いオーラが体から沸々と噴き出ている。

「シャルロットとラウラだっけ？ お父さんと父上って何かしら？」

アキはまず最初にシャルロットを睨む。

「え、えつと……私はお父さんの娘で……」

「娘？」

「あうっ!？」

シャルロットはあまりの恐ろしさに後ずさりする。

アキのオーラが強くなり、顔の血管が何本も浮き出ている。

次にラウラに視線を向ける。

「わ、私と父上は親子の関係で……」

「親子？」

「ひいっ!？」

ラウラは小さな悲鳴を上げる。

「遊、星……」

そして、オーラによって髪と服がゆらゆらと動き、頭のドリルカラーが弾き飛び、長い前髪が不気味に垂れる。

「アキ、これには訳が……」

「訳？ 何週間も心を締め付けるほど心配していた間に娘を二人？
一体、誰との子？ 答えなさい……遊星!!!!」

アキのサイコパワーが遂に開放されてしまった。

一夏達クラスメイトはまるでホラー映画に出演しているような心境に陥る。

遊星は星竜を起動させ、ウォリアーズ・フォルムを発動させる。

「ウォリアーズ・フォルム『ドリル・ウォリアー!』!」

《ぎゃあああ! 恐れていた最悪の事態に! マスターのバカアツ
!!》

ドリル・ウォリアーは精霊達を代表して苦悩する。

「そして、困ったときのドリル・ワープ！」

空間を切り裂くと、アキの手を掴み、無理やり裂け目に押し込んだ。

「シャルロット、ラウラ、後は頼んだ！」

「お父さん!？」

「父上!？」

遊星も空間の裂け目に入り、どこかへワープした。

遊星が移動したのはグラウンドだった。

アキはゆらりと立ち上がり、右手を顔の前に近づける。

「遊星……あなたにはキツイお仕置きが必要みたいね。ブレイブ・ローズ！」

薔薇の指輪が光り、アキに纏うと、遊星の星竜と同じく無数のカードが現れる。

「ローズ・フォーラム！ 咲き乱れよ、美しき漆黒の花！ 『ブラック・

ローズ・ドラゴン』!」

アキのブレイブ・ローズは光に包まれ、西洋の鎧とドレスが融合したようなものに変化した。

その上から、ブラック・ローズ・ドラゴンを現す無数の薔薇の花びらが美しく飾られ、アキの魅力をより引き出していた。

腰には薔薇をモチーフにした三つの武器が備えている。

鐐が薔薇を象った西洋剣、『ローズ・ソード』。

盾の中心に薔薇が描かれた丸盾『ローズ・シールド』。

そして、茨の鞭『ローズ・ウィップ』。

不覚にも、遊星はアキの美しい姿に見とれてしまい、心を奪われてしまった。

(アキ、綺麗だ……)

だが、そんなことを知らないアキはローズ・ソードを構える。

「来なさい……遊星!」

(アキ……やるしかない)

遊星は意を決し、ドリル・ウォリアーを解除する。

「……ウォリアーズ・フォーラム!! 飛翔せよ、『スターダスト・

ドラゴン』！！！」

遊星はスターダスト・ドラゴンの姿となり、スターソードを構える。

（アキを止めなきゃ……IS学園は崩壊する！）

遊星の手にはIS学園の未来が掛かっているのだった。

《遊星……全ては、全てはお前の責任だから！！ この阿呆！
馬鹿！！》

さすがのスターダスト・ドラゴンも、この時だけ遊星を呪ったのだ
った。

一夏達はISスーツに着替え、遊星とアキがいるグラウンドへ向か
う。

すでに遊星とアキは戦いをはじめ、スターソードとローズ・ソード
の刃が交叉して火花が散る。

高速で飛翔すると同時に高度な剣技を繰り出す。

「はっ！」

遊星は斜め上に薙払うが、アキは腰のローズ・シールドを左手に持って防いだ。

すると、アキは手首を上手に使い、ローズ・シールドでスターソードを弾いて遊星を一瞬だけ無防備にさせる。

「はあああっ！！」

「っ！？」

アキはローズ・ソードで一瞬の斬撃を放つが、遊星はとっさに動いたバックステップで直撃は免れたが、左肩の装甲が少し破損してしまふ。

「くっ……」

「簡単に終わらせないわよ、遊星！」

ローズ・ソードを一旦腰に戻し、ローズ・ウィップを持ち、鋭く振るう。

「ヘイト・ローズ・ウィップ！！」

ローズ・ウィップは生き物のように動き、遊星に襲いかかる。

遊星はスターソードで防ごうとするが、あまりにも動きが早く捕ら

えることができず、直撃を受ける。

「ぐああああっ!!」

ローズ・ウィップの棘と鞭が遊星の体中を痛めつける。

「ぐっ、がっ……あっ……」

遊星は体中に広がる激痛に耐え、スターソードを構え直す。

戦いを見ていた一夏達は口を開けながら啞然とする。

初めてISを使うアキの異常なまでの戦闘力。

そして、IS学園で最早最強クラスの实力を持つ遊星が追いつめられている状況。

一夏達にとって、あり得ないとしか言えない光景だった。

その中で、シャルロットとラウラは心配しながら戦いを見守る。

「お父さん……」

「まさか……あの父上が追い込まれるなんて……」

《流石はアキだ。やるな……》

突然、一夏達の周りに遊星の精霊達が半透明で現れた。

「どうしてみんながここに……？」

「遊星さんのISに戻らなくてよろしいのですか？」

「つてか、あんた達が居なきゃ、遊星はウォリアーズ・フォルムが使えないじゃない！」

《スターダスト・ドラゴンに全て任せてあるから問題ない！》

『もしかして不動君（遊星）を見捨てて逃げてきた！？』

《その通り！！》

『おいっ！！』

《アキとブラック・ローズ・ドラゴンが恐いから仕方ない！！》

『開き直るな！！』

外道すぎる精霊達の行為に一夏達はツツコミを入れる。

すると、ジャンク・ウォリアーが騒ぎを静めるために前に出る。

《だが、そう言っても、アキとブラック・ローズ・ドラゴンを静められるのは遊星とスターダスト・ドラゴンしかないぞ？》

「なぜ、そう言い切れるんだ？」

一夏が尋ねる。

《過去に遊星とアキは二回戦ったことがある。当時のアキは暴走しやすく、それを唯一食い止めることができたのは遊星とスターダスト・ドラゴンだけだ》

ジャンク・ウォリアーは遊星とアキの戦いを見つめる。

《アキのブラック・ローズ・ドラゴンは破壊の力を司る。逆に、スターダスト・ドラゴンは中和の力を司る。だからこそ、俺達では無理なんだ。今は遊星達を見守ることしかできない……》

そして、遊星は全く反撃できず、スターダスト・ドラゴンと共に満身創痍である。

すると、スターダスト・ドラゴンはまるで走馬灯を見るように昔を思い出す。

《遊星……何か、あの時を思い出すな。特に二度目のデュエル》

（ああ……あの時は大変だったな）

《憎悪の棘で俺の皮膚と肉と骨を貫かれ……挙げ句の果てには俺の

攻撃力が極限まで下がったからな……」

（俺も体中にたくさんの切り傷を作ったな……）

《今になって思う。俺達って、主従揃ってマゾヒストなのか？》

（……やめてくれ。俺はそうじゃないと願いたい……だけど、今はアキを何とかしなくては！）

《こういう時は……アレを使うしかないよな？》

（だな、行くぞ、スターダスト・ドラゴン！）

《ああ！》

遊星とスターダスト・ドラゴンは気合いを入れ直したが、アキはトドメを刺すためにローズ・ソードを前に突き出した。

「これで終わりよ、遊星！」

ローズ・ソードの刃に熱が吸収されて燃え上がり、漆黒の炎となる。

「焼き尽くせ、ブラック・ローズ・フレア！！！」

ローズ・ソードを振り下ろし、漆黒の炎は一直線に遊星の元へ走る。

遊星はゆっくり目を閉じ、体の力を抜いて自然体のままにする。

ブラック・ローズ・フレアは遊星に直撃し、爆発が起きた。

「「「遊星^{さん}!!」」」

「お父さん!!」

「父上!!」

一夏達は遊星の名を叫び、誰もが遊星が敗北したと思った。

「バスター・モード!!!」

遊星の声が敗北を突き破り、無数の星屑の光が散布される。

スターダスト・ドラゴンの傷が完治すると同時に、散布された星屑がスターダスト・ドラゴンの胸に、両腕に、両脚に、翼に集まる。

そして、星屑が一気に集束され、蒼穹の如く美しい輝きを放つ鎧が形成され、スターダスト・ドラゴンは新たな力を手に入れる。

「モード・チェンジ!! スターダスト・ドラゴン／バスター!!」

シールドエネルギーも回復し、スターソードがバスター・モードの鎧に似た新たな姿『スターソード・バスター』となる。

遊星はスターソード・バスターを両手で構え、アキを見つめる。

「何度でも受け止めてやる！ アキの想いを全て！！」

「遊星……わかったわ、私の全てをあなたにぶつけるわ！！」

第30話 遊星とアキ、二人の想い（前書き）

遊星VSゾーンの長き戦いに終止符！！！

最初から最後までクライマックスでした！

って、スタッフよ！

次回予告にあったスターダスト・ドラゴン／バスターはどこに消えた！？

、（。；）ノ

でも、アキちゃんが可愛かったから許す！

、（≡▽≡）／

って、次回は何！？

いきなり数年後の世界ですか！？

Σ（□）！

そして、こちらは遊星VSアキの決着です！

第30話 遊星とアキ、二人の想い

遊星は星屑の光を集め、スターソード・バスターで斬る。

「アサルト・ソニック・バーン!!」

シューティング・ソニックを越えた白銀の閃光を放つ。

「ブラック・ローズ・フレア!!」

アキはローズ・ソードから漆黒の炎を放つ。

だが、僅かにアサルト・ソニック・バーンが威力を上回り、ブラック・ローズ・フレアを押し返す。

「くっ!!」

白銀の閃光をローズ・シールドで防御するが、耐えきれなくなり破壊される。

「まさか、ここに来て形勢逆転か……やっぱり遊星は強いわね」

「アキこそ。初めてとは思えない強さだ」

「昔、暴れていたせいかしら? 体が勝手に動くのよ」

「そうか……」

「……ねえ、遊星。今なら心が少し落ち着いているわ」

「……アキ、聞いてくれるか？ シャルロットとラウラのことを」

「ええ、話して……」

だが、二人はただ突っ立って会話をするのではなく、剣を交えながら会話を行う。

「シャルロットは……数年前に母を亡くし、実の父親に道具として扱われていたんだ」

「えっ……？」

アキは息をするのを忘れるぐらい驚く。

「次に……ラウラだ。ラウラは、親が居ないんだ……試験管ベビーで生まれてきた。戦うための道具として」

「そんな……」

「シャルロットとラウラは、俺に父親になって欲しいと願った。初めは戸惑ったが、俺はこの二人の人生と幸せを守りたいと思ったんだ」

「遊星……」

二人はお互いの剣を弾き返して距離をとる。

「だが、居なかったとはいえ、アキに黙って勝手にやったことは事実だ。後は……アキに任せる」

遊星はスターソード・バスターをアキに投げ渡す。

「お父さん!？」

「父上! 何を……くっ、今そちらに!」

シャルロットとラウラはISを起動させようとする。

「来るな! これは俺とアキの戦いだ。手を出さないでくれ!」

「「っ!？」」

シャルロットとラウラは今すぐ行きたい気持ちを抑え、遊星を信じる。

（お父さん……頑張って）

（父上、信じています）

アキはスターソード・バスターを受け取ると、刀身を鏡にして自分の顔を映す。

（遊星は何も変わっていなかった……私の大好きな……クールで熱く、優しい遊星のまま。それなのに、私ったら暴走して……）

アキは自分を恥じ、スターソード・バスターを遊星に投げ返す。

「アキ……？」

「遊星、あなたの二人に対する気持ちはわかったわ。今から、私の気持ちを乗せた全力を貴方にぶつけるから……私に対する遊星の気持ちを教えて？」

「わかった」

《全く、相変わらず損なマスターだ。こんな形でしか想いを伝えられないとはな。そう言うところだけは不器用だな》

スターダスト・ドラゴンはため息をつく。

（ああ……自分でもわかっている。すまない、巻き込んでしまった）

《今更何を言っているんだ？ 俺達は言わば一心同体、いつでも一緒だ。それに……俺もブラック・ローズとは話を付けたいからな》

（ああ。行くぞ、スターダスト・ドラゴン！！）

《おうよ！！》

対するアキもブラック・ローズ・ドラゴンと話す。

（ごめんなさい、ブラック・ローズ。また暴走しちゃって……）

《大丈夫よ。なんたって、マスターであるアキは……可愛くて巨乳でスタイル抜群だけど、嫉妬深くて怒りっぽくて超弩級サディスト美少女だからね♪》

(ブラック・ローズ!?)

《でも、そこが好きだから、私は一緒に戦うのよ》

(……ありがとう、ブラック・ローズ)

《ええ♪ じゃあ、派手に行くわよ!!》

(うん!!)

アキはローズ・ソードを両手で構え、全神経を集中させる。

「全てを破壊する黒薔薇の舞……ブラック・ローズ・ガイル!!!」

すると、ブレイブ・ローズを飾った無数の黒薔薇の花びらが一斉に散り、それぞれが一つとなる。

そして、四つの力を秘めた、花びらの形をした十六枚のビット兵器『ローズ・ビット』となる。

「行け!!」

十六枚のローズ・ビットは四枚ずつで行動し、遊星の周囲を囲む。

「バインドロック!」

まずは『ローズ・ビット・バインド』が互いを棘の鎖で繋ぎ合い、遊星を縛り上げる。

「ビームシュート!」

次に『ローズ・ビット・ビーム』がビームを発射する。

「ブレードブレイク！」

そこから『ローズ・ビット・ブレード』の刃で遊星の星竜を切り刻む。

「フレアバーニング！」

最後に『ローズ・ビット・フレア』は炎を放出して焼き尽くす。

「ぐあああああああっ！！！」

止まることのないローズ・ビットの連続攻撃に遊星は意識を失いそうになる。

（まだだ……アキに、俺の想いを……）

「破壊を包む星となれ……」

遊星は手を強く握りしめる。

（全て、伝えるんだ！）

「ヴィクテム・サンクチュアリ！！！」

スターダスト・ドラゴン／バスターが無数の星屑に分解され、星竜は通常状態になる。

星屑は遊星の周囲で襲いかかったローズ・ビットを全て包み込んで動きを完全に停止させた。

その上でスターダスト・ドラゴン／バスターがブラック・ローズ・ドラゴンを抱きしめている幻が現れた。

スターダスト・ドラゴン／バスターが抑えている隙に、遊星はスターソード・バスターで、ローズ・ビット・バインドの鎖を断ち切り、アキに一直線へ向かう。

アキはローズ・ビットの操作を止め、ローズ・ソードを斜め後ろに振り上げ、ブラック・ローズ・フレアの漆黒の炎を込める。

「はああああああああっ！！！」

遊星はスターソード・バスターにアサルト・ソニック・バーンの閃光を込めて後ろに構える。

「うおおおおおおおおおおおっ！！！」

二人は近づくとはぼ同時に剣を振り下ろすと、十字に交差しエネルギーの衝突による衝撃波が発生する。

スターソード・バスターとローズ・ソードは遊星とアキの手から離れ、そのまま落ちて地面に突き刺さる。

アキは残っている武器のローズ・ウィップを取ろうとするが、その前に遊星に手を掴んで、アキを引き寄せた。

「キャッ!? 遊——んむっ!?」

遊星はアキの言葉を遮って唇を強引に奪った。

アキは遊星を引き離そうとするが、首の後ろを手で押さえられ、腰に腕を回されて引き離すことが不可能となる。

「んーっ! むうっ!? んうっ!!??」

遊星はアキの口の中に自分の舌を入れ、大人のキス……ディープキスをする。

一方、一夏達は遊星とアキのディープキスに顔を真っ赤にして凝視していた。

間近で見る大胆なディープキスに失神する女子も続出している。

すると、ラウラは一夏にゆっくり近づいてディープキスを試そうとする。

「い、一夏……ふ、夫婦として、私達も……ディープキスを……」

「ええっ!？」

「さ、させるかあっ!!」

「抜け駆けは許しませんわ!!」

「これ以上一夏の唇を奪わせないわよ!!」

「絶対にダメだからね、ラウラ!!」

箒、セシリア、鈴音、シャルロットが全力でラウラを押さえ込む。

「は、離せーっ!! ふ、夫婦として一夏とディープキスを……っ!？」

突然、ラウラは大きな殺気を感じる。

「ラウラ……実の姉の前でそんなことをさせると思っか？」

言わずもがな、鬼の形相をした千冬である。

「きよ、教官……」

「篠ノ之、オルコット、凰、不動、そのままラウラを押さえている」

「「「はい!」」」

「そ、そんな……」

ラウラはガクツとうなだれ、魂が抜けたようにショックを受けた。

「ん、んっ……むう……んくう……」

それから、アキは抵抗しなくなり、遊星に身を任せる。

そして、数分後。

ようやく遊星はアキの唇から解放し、お互いの顔は真っ赤になる。

アキは真っ赤な顔を隠すように遊星の胸にうずくまる。

「バカ……バカ……遊星のバカ……」

「ごめん……こんな形でしか想いを伝えられなくて……愛してるよ、アキ」

「私もよ……愛してるわ、遊星」

遊星とアキはウォリアーズ・フォルムとローズ・フォルムを解除し

て地面に降りた。

すると、シャルロットとラウラは恐る恐る二人に近づいた。

アキは自分の胸の前に手を置き、ゆつくりとシャルロットとラウラに近づき、微笑む。

「……ごめんなさい。シャルロット、ラウラ。あなた達二人を怖がらせてしまって」

「い、いえ！」

「だ、大丈夫です！」

「……………」

アキは無言で両腕を開き、シャルロットとラウラを抱き寄せた。

「ふえっ!？」

「あうっ!？」

「……二つ歳が上だけど、私で良ければ……あなた達の母親になるわ」

アキの心に母性本能が生まれたのだ。

「アキ、お母さん……?」

「母上……?」

「ええ。シャルロット、ラウラ……」

（私も、守りたくなつたな……シャルロットとラウラを……そして、みんなを……）

アキの母のような笑みにシャルロットとラウラは涙を流し、アキは二人の背中を撫でる。

「ありがとう……お母さん」

「母上……私は今とても幸せです」

シャルロットとラウラはゆっくり目を閉じる。

こうして、遊星とアキの戦いが終わり、愛を深めた。

アキはシャルロットとラウラと親子の絆を作り出すことができた。

そして、これを機に遊星とアキはIS学園公認のカップルとなったのだった。

.

第31話 デートと再会（前書き）

今回で急展開を見せます！

それから、後書きにアンケートを記載したので、よろしかったら、協力をお願いします。

第31話 デートと再会

ある日の夜、千冬はある人物から連絡が来た。

『やつほー！ 私の愛しのちーちゃー』

ブチッ。

千冬は無言で連絡を切る。

そしてすぐにまた連絡が来る。

『ちよっと！ いくら何でもヒドいよ、ちーちゃん！』

「黙れ、束。いつも言っているが、ちーちゃん言うな」

千冬と話をしているのは、箒の姉であり、ISの開発者の篠ノ之束である。

束は数年前に謎の失踪をして現在行方不明であるが、箒と千冬には連絡を取っているのだ。

「まあいい。それより、お前から連絡するなんて珍しいな。何かあったのか？」

『うん。ちーちゃん、前に話してくれた不動遊星っていう男の人がいるよね？』

「……驚いたな。お前が私と一夏と箒以外の人間に興味を持つなん

てな」

『まあ、さすがにいくくん以外で男でISを使えるとなるとね。でも、今回は違うんだよ。実はね、IS学園で預かって欲しい双子ちゃんがいるんだよ』

「双子？」

『一週間ぐらい前に見つけた将来有望なIS操縦者だよ。それでね、不動遊星を探しているんだって』

「わかった。確か今度の臨海学校の時に箒の専用機を持ってくるんだっけ？ その時に一緒に連れてきてくれ」

『うん、わかった。ありがとう、ちーちゃん！ ちなみに、一つ言っておくと、その双子ちゃんは専用機を持っているよ』

「何だと？ お前が作ったのか？」

『違うよ。双子ちゃんが最初から持っていたものがISになっちゃんだよ。理由は全くわからないけどね』

（不動と十六夜と同じか……一体どうなっているんだ？ 更に束もわからないとなると……）

『それじゃあ、そろそろ切るね、ちーちゃん』

「ああ、またな」

千冬は束と連絡を切った。

週末の日曜日。

来週に迎えた臨海学校に向けて、遊星とアキはショッピングモールで買い物に来た。

しかし、何かとこのような遠出の行事には色々買わなければならぬ物が多いため、必然的に資金が必要になる。

だが、遊星はIS学園にさまざまな技術を提供し、更には物理学の教師をしているので、IS学園から相当な額の給料を頂いているのだ。

お金を持っていないアキは少し申し訳ない表情をするが、遊星は耳元でささやく。

「今まで寂しい思いをさせたからこれぐらいさせてくれ」

「遊星……今日はいっぱい甘えても良い？」

「ああ」

結論から言うと、これはデートである。

ショッピングモールで色々な日用品や臨海学校で必要な物を購入し、二人は水着売場に来た。

すると、一夏とシャルロットが同じ試着室で出てくるのを目撃した。

そしてタイミングよく、買い物に来た千冬と真耶もいた。

「一夏……ちょっと来い」

遊星とアキは一夏の両腕をしっかりと掴んだ。

「え？　遊星とアキ!？」

「お、お父さん!？　お母さん!？」

「「さあ、一夏。ちょっと話し（天罰）をしよう……」」

「今、天罰って聞こえだぞ!？　二人は俺に何をするんだ!？」

遊星とアキは一夏を使われていない薄暗い空き店舗へ、ずるずると引っ張っていく。

「娘に手を出した罪は重いぞ……」

「今までの罪を数え、悔い改めなさい……」

「ご、誤解だ！ 俺は何もしてない！ ち、千冬姉！ シャル！ 助けてくれ！」

「一夏、お前の無事を祈っている」

「ごめんね、一夏」

「のおおおおおおっ！！」

一夏は空き店舗へ引きずり込まれる。

「うわっ！ ちょっと、なっ、何ですか、怖いそのモンスターは！？
イヤアアアアア！ た、助け……」

一夏の声がぷつりと聞こえなくなり、千冬達は全員で合掌する。

しばらくすると、遊星とアキのお話（天罰）が終わり、一夏は天国（地獄？）に行きかけたが、何とか現世に生き残った。

遊星とアキは水着を選んだ後に一夏達と分かれ、次の店に行こうとすると、アキは何かを見つける。

「遊星、あれ……」

アキが示す先を見ると、異様な光景だった。

二人の男をI S学園のクラスメイトの女子達、約十人が囲んでいた。

「ねえ、ねえ！ 私達とお茶しようよ！」

「助けてくれたお礼だよ」

「うわあゝ！ 結構体を鍛えているんだねゝ！」

「よく見れば二人とも可愛い顔をしているんだねゝ」

「私の母性本能がくすぐられるゝ！」

と、甘い声で女子達が世間で言う……逆ナンパを行っている。

すると、男二人は焦りながら必死に断ろうとする声が響く。

「は、離せえ！ 今すぐに俺達を解放しろお！！」

「俺達はそんなつもりで助けたんじゃないよ！ 人探しをしているんだ！！」

逆ナンされている男二人の切なる叫びに遊星とアキは聞き覚えがあ

る。

「この声は……」

「もしかして……」

遊星とアキは走り出し、男二人の顔を確かめるために向かう。

「ええい！ 何とかしろ、クロウ！！」

「んなこと出来るかあ！ こういう状況になれているのはお前だろ、ジャック！！」

そこにいたのは、金髪で長身の男、ジャック・アトラス。

もう一人は顔にたくさんのマーカーが刻まれた男、クロウ・ホーガン。

二人は遊星とアキの大切な仲間であり、特にジャックは遊星の永遠のライバルで、クロウは遊星の親友である。

「ジャック！！！！ クロウ！！！！」

「むう！？ 遊星！ アキ！！」

「二人とも無事だったか！ 心配したぜ！」

遊星、ジャック、アキ、クロウは再会を喜び合う。

「ふん！ 全く、心配させて……遊星、後でコーヒーを奢ってもらうぞ！ 最低でもそれぐらいしてもらわないとな！」

「ああ、わかった。後で絶品の喫茶店を探すよ」

「それにしても、遊星とアキ、相変わらずお二人さんは超ラブラブか？ ひゅーひゅー！ お熱いねぇ？」

「もう！ 冷やかさないでよ、クロウ！」

ポカーンと見てた女子達は現実に戻る。

『えっ！？ この二人は不動君達の知り合い！？』

「知り合いも何も俺達は仲間だ」

『キヤーツ！ ぜひお話がしたい！』

遊星の仲間と聞き、女子達はテンションが上がる。

「そんなことより、遊星。お前に見せたい物がある」

「実は、俺達のD・ホイールがこんなになっちまったんだよ」

ジャックは両腕の裾をめくり、クロウは服の下から何かを引っ張り上げる。

ジャックが見せたのは、自ら魂のであり、エースモンスターである『レッド・デーモンズ・ドラゴン』がメインに描かれ、所々にスカルの装飾が施された派手な手甲。

クロウは大きめの黒い羽に、赤い小さな宝石が飾られたのフェザーペンダント。

「まさか……二人も？」

「D・ホイールが変化したの？」

「では、遊星とアキもか？」

「おいおい、一体どうなってるんだ？」

四人が考えていると、女子達がジャックとクロウの腕をしっかりと掴んだ。

「「……え？」」

『さあ、一緒にお茶に行きましょう！ 色々お話を聞かせて下さい！』

そう言ってジャックとクロウをずるずるを引きずる。

「うおおおおおっ！？ 何をするんだ！？」

「や、止めてくれえええええええっ！！」

「……ところで、二人はここで何をやっていたんだ？」

遊星が重要な質問をする。

「俺達が世界に来て、まず始めに人が集まりそうな場所に行けば遊星の情報が手に入ると俺は睨んだのだ！」

「そしたら嫌な感じのチンピラ達がいっつらにちょっかいを出すから俺達で追い払ったんだよ！」

そこからの流れに、アキが結論を言う。

「それで、逆ナンパされた訳ね……」

「「その通りです……」」

「ジャック、クロウ」

遊星はジャックとクロウに何かを渡す。

二人がそれを見ると、大量の汗をかく。

「「遊星……どういふつもりだ？」」

「金を渡しておくから彼女達とお茶を楽しんで来い」

『ありがとう、不動君！』

「「遊星、俺達を見捨てるなあああああああっ……！」」

「それから、お茶が終わったら二人をIS学園に連れてきてくれるか？　もしかしたら、俺達のクラスメイトになるかもしれない」

『本当に！？わかった！！』

「IS学園!？」
何だそこは!？」

「しかも、クラスメイトって何だ!？」

「じゃあ、また後でな」

遊星はアキを連れてデートの続きをする。

「遊星えええええええええええええええええつ!!!」

ジャックとクロウの叫びを置いておき、遊星は千冬に連絡を取り、二人をIS学園に転入できるように頼んでおく。

その後、遊星とアキはデートを堪能し、ジャックとクロウは女子達に連れ回された挙げ句、IS学園に連行され、手続きを行う。

そして、ジャックとクロウは遊星や一夏達と同じクラスに配属となるのだった。

第31話 デートと再会（後書き）

遊星、アキ、ジャック、クロウ、龍亞、龍可のISのフォーラム、バツクアップ、スキルエフェクト等のアンケートを大募集します。

※BFのカードはあまり持っていないので、もしイコライザを書くときは武器の形などをよろしくお願いします。

期間は、本日から三月の終わりまでとします。

書き込む場所は、感想やメールボックスを問いません。

皆さんのアイディアを待っています！

m () m

第32話 集いし仲間（前書き）

皆さん地震は大丈夫でしたか！？

（（（（（。；）））））

私は群馬に住んでいるからまだ大丈夫でしたが、机の上が雪崩に…。

。。（ノ厶）。。。

アンケートで、ジャックとクロウが中心だったので、アキと龍亞と龍可のIS設定を是非お願いします。

m（（（（（ m

第32話 集いし仲間

ジャックとクロウはIS学園に転入することになり、本来なら授業のある日のホームルームに紹介するのだが、次の授業の日は臨海学校なので紹介できない。

そこで、一年一組のクラスメイト全員を食堂に呼び、紹介兼歓迎会を行うことになった。

「俺の名はジャック・アトラス!! 遊星の仲間にして、永遠のライバルだ!!!」

『あの不動君（遊星）のライバル!?!?!』

一夏達はもちろん驚く。

「ジャック、別に自己紹介に言わなくてもいいだろう？」

「ふん! ここで言うておくのが俺だ!」

「そうだったな。今度はISの戦いで決着をつけるか？」

「良からう! 我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴンと共に貴様を葬ってくれる!!!」

「望むところだ! スターダスト・ドラゴンと絆の力で返り討ちにする!!!」

二人の心は熱く燃え上がり、背後にスターダスト・ドラゴンとレッ

ド・デーモンズ・ドラゴンの幻が現れる。

これにより、一夏達は本当に遊星とジャックがライバル同士だとわかる。

「まあまあ、その辺にしておけよ。今戦う訳じゃないんだからな」

熱くなった二人をクロウが仲裁する。

「……そうだな、クロウ」

「仕方ない。戦う時は相応の舞台が望ましいからな」

「んじゃあ、次は俺だ。俺はクロウ・ホーガン！ 遊星とジャックの親友だ。よろしくな！」

（ライバルの次は親友！？ この二人……只者じゃない！）

その後、ジャックとクロウは女子達と長い時間会話し、疲れきった表情で用意された学生寮の部屋に入るのだった。

「二人とも、大丈夫か？」

「俺の魂が極限まで磨り減った気分だ……」

「男子が俺達と織斑一夏って奴だけはキツイ……」

ベッドに倒れ込んだ二人に遊星は苦笑を浮かべると、ドアに誰かがノックする。

「こんばんは」

「失礼する」

入ってきたのはシャルロットとラウラだった。

「ん？ 何だ、お前たちは？」

「確か同じクラスの……」

「えっと、お父さんとお母さんの友人なら」

「一言挨拶をしようと思ひまして」

「「……は？ お父さんとお母さん？」」

ジャックとクロウはベッドから起きあがる。

「私は不動シャルロットです」

「私はラウラ・不動・ボーデヴィツヒ」

二人は遊星を睨みつける。

「……遊星」

「一体どういうことだ……？」

「シャルロットとラウラを俺とアキの娘だ。血は繋がっていないが、俺達は絆で結ばれた親子だ」

「………何いいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
いっ！？！？！？」

ジャックとクロウの絶叫が学生寮に響き渡り、その後すぐに寮長である千冬が殴り込みに来て出席簿アタックを喰らい、二人は撃沈した。

復活した二人に事情を説明すると、思いのほか納得した。

「遊星達が納得しているなら、俺は何も言わない」

「ま、俺も昔はガキ共を育てていたからな。気持ちは分かるぜ」

「とりあえず挨拶だ。よろしく頼む、シャルロット、ラウラ」

「そうだな。二人とも、よろしくな！」

「「はい！」」

4人とラウラは握手を交わし、交流を深める。

次の日にジャックとクロウの日用品と臨海学校の必要な物を遊星が代わりに支払って購入する。

そして、臨海学校当日。

旅館に到着すると、初日は終日自由時間で一日海などで遊ぶことができる。

さっそく遊星達や一夏達は水着に着替えて浜辺につく。

全員が一斉に遊ぼうとしたその時だった。

海の方こうから二つの影が、もの凄い速さで何かが向かってくる。

それは海面を切り裂くように滑り、その二つの影は間違いなく人だ

った。

すると、遊星達の赤き竜の痣が強い輝きを放つ。

「まさか……」

遊星達は赤き竜の痣を手で押さえ、その影を見る。

「遂にあの二人も来たか！ 遊星、アキ、クロウ、一つ歓迎するぞ！」

ジャックはISからデュエルディスクを呼び出す。

「わかった！」

「そうね、行くわよ！」

「よっしゃあ！ 派手に行こうぜ！」

遊星達もISからデュエルディスクを呼び出し、それぞれのエースカードを持ち、デュエルディスクに置く。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光指す道となれ！ 飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！！」

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！我が魂、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け！ 現れよ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！！」

「黒き疾風よ！ 秘めたる思いをその翼に現出せよ！ 舞い上がれ、
『ブラックフェザー・ドラゴン』！！」

星屑の竜、悪魔の姿をした竜、黒薔薇の竜、鴉の姿をした竜が姿を
現し、咆哮を上げる。

二つの影はそれに気づくと、左腕にデュエルディスクが現れ、カー
ドを置く。

「世界の未来を守るため、勇気と力がレヴオリューション！ 進化
せよ、『ライフ・ストリーム・ドラゴン』！！」

「聖なる守護の光、今交わりて永久の命となる。降誕せよ、『エン
シェント・フェアリー・ドラゴン』！！」

黄色の竜と妖精の竜が現れ、六体の竜は互いに共鳴し合う。

そして、二人は大声で呼ぶ。

「遊星え!!!!!!」

「みんなあ!!!!!!」

それは、幼い双子の兄妹だが、遊星達の仲間で歴とした戦士の一人。

「「「龍亞!!!!!! 龍可!!!!!!」」」」

龍亞と龍可は大きく改造されたデュエル・ボードに乗って海面を滑走してきたのだ。

海を渡り、砂地になった瞬間にデュエル・ボードは龍亞と龍可の両手首の腕輪に入り込んだ。

龍亞と龍可は遊星に抱きついて、遊星はそのまま二人を抱き上げる。

「遊星だ!! 遊星だ!! 遊星だ!!!!!!」

龍亞は遊星が無事だったという嬉しさのあまり、はしゃぎまくっている。

「よかった、遊星が無事で……」

龍可はギュッと遊星にしがみつく。

「龍亞、龍可。心配をかけたな」

遊星は二人の後頭部をポンポンと優しく叩き、二人を降ろすと、ジャックが代表で言う。

「これで、全員揃ったな」

遊星、ジャック、アキ、龍亞、龍可、クロウは赤き竜の痣を見せ合
い、それぞれの右手を重ねる。

その六人の上では、スターダスト・ドラゴン、レッド・デーモンズ・
ドラゴン、ブラック・ローズ・ドラゴン、ライフ・ストリーム・ド
ラゴン、エンシェント・フェアリー・ドラゴン、ブラックフェザー・
ドラゴンが見守る。

「チーム5D's、全員集合だ!!!!」

「ああ!!」

「ええ!!」

「よし!!」

「はい!!」

「おう!!」

遊星達は右手を高く掲げた。

ちなみに、流れに全くついて行っていない一夏達はもちろん呆然とし

ていたのだった。

・

番外編 甘いホワイトデーデート（前書き）

まず始めに一言。

インフィニット・ストラトスの五大党のオルコツ党、セカン党、シヤルロッ党、ブラックラピツ党の皆様、申し訳ありません。

$$\begin{array}{c} \text{m} \\ \cap \\ \text{L} \\ \text{m} \end{array}$$

衝撃のクライマックスに怒らないで下さい。

$$\begin{pmatrix} \circ \\ \text{Д} \end{pmatrix};$$

番外編 甘いホワイトデーデート

ホワイトデー。

それは2月14日にバレンタインデーにプレゼントを貰った人、主に男子が1ヶ月後の3月14日に何かしらのお返しをする日である。

IS学園の男子で、たくさんのプレゼントを貰った遊星と一夏はどうお返しをすればいいのか迷っていた。

そんな時に救いの手（？）が差し伸べられた。

「生徒会長の私が知恵を拝借してあげるわよ」

楯無が何やらいつもの悪巧みをしているような顔で言うのだった。

そして、ホワイトデー当日。

放課後に生徒会がIS学園の生徒や教師を集めた。

楯無がマイクを持つと、ドドンと言い放った。

「今から、遊星君と一夏君にバレンタインデーのプレゼントをあげた人限定で、二人公認の写真をプレゼントします！」

『な、何ですと!?!』

「さあ、この大きな箱に数千枚の写真があります! 持ってけ、ドロボー!」

『うおおおおおおおおおおおおおおっ!!』

楯無が可愛らしく言うと、女子と教師達は一斉に写真をゲットしに突撃する。

「うわぁ! 不動君も織斑君もカッコいい!」

「ちょっと! これ、更衣室の隠し撮り写真!? 上半身裸だよ!」

「こっ、こっちはギリギリで際どいところまで!」

「ま、眩しい! 素の笑顔が輝いて眩しいよ!!」

「ISで戦っている時の凛々しい表情も最高!!」

「ありがとうございます、神様! 一生の宝物……いや、家宝にします!!」

予想を通り越してのかなりの大評判だった。

ちなみに、遊星と一夏はというと……。

「お、おい！ みんな、落ち着けて……」

「一夏、早く行くぞ！」

「一夏さん、あのアトラクションに一緒に乗りましょう！」

「一夏、あそこのデザート、すごく美味しそうよ、食べに行こう！」

「一夏、あそこで写真撮影しようよ！」

「一夏、あそこに売っているグッズを見たい！」

巨大遊園地で一夏と箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラがデートをしていた。

「相変わらず大変だな、一夏」

「好意を持つ女の子が五人もいるとね」

「一夏兄ちゃんは結局誰を選ぶのかな？」

「さあ？ 誰でもおかしくないと思うけど……」

その後ろでは、遊星、アキ、龍亞、龍可が苦笑いをしながら歩いている。

「さあ、俺達も楽しもう！」

「ええ」

「「うん！」」

一夏は五人娘に引っ張られながらも遊園地で楽しんだ。

そして、ホワイトデーと言うこともあるので、それぞれの要望に一つ応える約束をしたのだ。

一番目はラウラ。

ラウラの要望は一夏が選んだグッズをプレゼントすること。

「んーと……じゃあ、これはどうかな？」

一夏はこの遊園地のキャラクター（？）の右目に眼帯を付けた黒ウサギのぬいぐるみを選び、ラウラにプレゼントする。

「黒ウサギに眼帯……」

「イヤだったか？ ラウラみたいに可愛かったんだが……」

「そんなことはない！ 私は嬉しいぞ！」

「そうか、ならよかった」

「大切にする……」

「ああ」

二番目はシャルロット。

シャルロットの要望は遊園地で用意された衣装に着替えて一緒に写真撮影をすることだった。

「シャル、これは何だ……？」

「一夏がお姫様で、僕は王子様！」

一夏はフリフリがたくさんついたお姫様の衣装を着た。

更には黒髪にウィッグを付けて、ロングヘアーとなる。

千冬と姉弟と言うこともあるので、千冬によく似ていた。

シャルは以前男装していたこともあったので特に問題なく王子様の衣装を着た。

あまり見られない一夏の女装姿に箒達が興奮したのは言うまでもない。

一夏は男として何かを失いながら写真撮影を行い、シャルロットは上機嫌だった。

三番目は鈴音。

鈴音と一緒にパフェを食べることだった。

「一夏、食べさせて〜」

「はいはい」

鈴音は口を開け、一夏はパフェを食べさせる。

「うまいか？」

「うん！ ほら、一夏もアーン」

「あ、ああ……」

「えへへ〜」

四番目はセシリア。

セシリアはホラー系のアトラクションと一緒に乗ることだった。

「キャアッ!!」

「お、おい。セシリア、大丈夫か？」

「え、ええ……」

セシリアは一夏の腕にしがみつく。

そんなやりとりが数分間続き、ラストの一番怖い場面に来ると……。

「キャアアアアアアアアアッ!!」

セシリアは怖さのあまり、一夏に抱きついた。

「い、一夏さん……」

「大丈夫だって、セシリア。ほら、行こうぜ。手を繋いでやるからさ」

「は、はい！」

最後は手を繋いでアトラクションを出て、セシリアはご満悦だった。

五番目で最後は箒。

箒は日本の遊園地にてカップルの醍醐味を実行するのだった。

それは……。

「おお、夕暮れだから景色が綺麗だな」

「そ、そうだな」

一夏と二人で観覧車に乗ることだった。

夕暮れ時の観覧車に乗ることは、日本のカップルにとってはメインイベントでもあるのだ。

知らなかったり、盲点だったため、セシリア達は大きなショックを受けた。

夕暮れ時の観覧車で二人きり、邪魔者の四人はいない。

箒にとっては最高のシチュエーションである。

（きよ、今日こそは一夏に！）

「一夏！！」

箒は立ち上がった。

ガゴン！！！！

突然、観覧車がてっぺんで止まり、箒は体勢を前に崩した。

「うわっ!？」

「箒! 危ない!!」

一夏が受け止めようとするが……。

「んむう!?!?!?!」

「んう!?!?!?!」

箒が一夏を押し倒す形となり、うまく二人の唇が重なってキスをする。

一夏は思わず箒を離そうとするが、箒は一夏の首に手を回して離れようとする。

（ほほほほ、箒さん!? 早く退いてくれないとおおおおっ
!!）

（一夏、神様が与えてくれたチャンスを無駄にしないためにも……
お前を離すもんか!!）

そのまま箒は一夏を離さずにキスをし続け、果てには箒が舌を入れてディープキスにまで発展してしまった。

「んっ、くっ……んむう………はんう………」

それから約十分後、観覧車は再び動きだし、箒は一夏の唇を離した。

「………すまない、一夏」

「えっと………うん、大丈夫だ………」

お互いの顔を見られないほど真っ赤に染まり、俯いてしまう。

「一夏………これから言う私の言葉をしっかりと受け止めろ。いいな？」

「あ、ああ………ちゃんと聞くよ」

箒は、大きく深呼吸をして、一夏の瞳を見つめる。

「私は一夏、お前のことを——………」

一夏と箒を乗せた観覧車は下に付き、二人が降りるとセシリア達が詰め寄る。

「「「観覧車で何かあった!?!」」」

それだけが心配だった。

すると、箒が慌てて言う。

「わ、私は一夏を押し倒してキスはしておらんぞ!?!」

冷静を失った箒は自ら墓穴を掘る。

「一夏さん!! 箒さん!?!」

「一夏あつ!?! 死ねえつ!?!」

「一夏のバカアツ!?!」

「私と言うものがありながら、この浮気者!?!」

その後、何とかセシリア達を静め、IS学園に戻ったが、遊園地で暴れたセシリア、鈴音、シャルロット、ラウラには千冬からのキツい説教を待ち受けていたのだった。

おまけ。

「ふっふっふ……箒ちゃん、上手く行ってよかったね。ぶいぶい！」

遊園地のメインコンピューターに侵入し、一夏と箒が乗った観覧車を止めたのは、束だった。

「いやー、まさかあそこで箒ちゃんがいつくんにキスをして、告白するとは思わなかったな。これは後でお赤飯を届けなきゃ！」

予想以上の成果を上げた束はご機嫌な様子で衛星をジャックして録画した観覧車の一夏と箒のラブラブ映像を何回も見ていた。

第33話 精霊との休暇（前書き）

今回は少し遊び心を入れて書きました。

第33話 精霊との休暇

龍亞と龍可が遊星達の元に集まり、チーム5D'sが集合した。

一夏達は状況を全く理解してなかったが、唯一事情を知っている千冬が話しかける。

「君達が篠ノ之束が送った双子だな？」

「えっと、もしかして、織斑千冬さんですか？ IS世界大会のモンド・グロッソで優勝した……」

龍亞はワクワクした様子で聞く。

「ああ、その織斑千冬だ。束から話を聞いたのか？」

「は、はい！ 俺、龍亞って言います！ こっちは妹の龍可です！ 束姉ちゃんから話は聞きました！ こ、今度時間があったらISの操作技術を教えて下さい！」

龍亞は緊張しながら千冬に願う。

「そう言えば君も専用機を持っていたな。良いだろう。時間がある時に教えてやろう」

「ありがとうございます！」

「織斑先生、龍亞と龍可が来ることを知っていたのか？」

遊星が尋ねると、千冬は頷く。

「先日、IS開発者の篠ノ之束から双子をIS学園で預かってほしいと連絡が来てな。ま、こんなに小さな子だとは聞いていなかったけどな。二人にはこれから臨海学校に参加してもらおうことになっている。不動達もそれで構わないな？」

「ああ。異論はない」

「なら、龍亞と龍可。束から水着を貰っているはずだ。着替えてみんなと遊ぶといい」

「「はい！」」

遊星は龍亞、アキは龍可を連れて更衣室へ案内した。

一夏達はジャックとクロウに龍亞と龍可の事を聞く。

「なあ、あの二人は随分遊星やジャック達と親しかったけど、兄弟みたいなものなのか？」

「兄弟だと？ 勘違いするな、一夏」

「確かに龍亞と龍可は俺達にとっては、弟と妹みたいなもんだが、それだけじゃねえ」

ジャックとクロウは誇らしく言う。

「あの二人は俺達が認めた戦士で、大切な仲間だ！」

「そうだ、俺達チーム5D'sは強い絆で結ばれているんだぜ！」

『おお~~~~っ!!』

二人の話を聞いていた女子達は一斉に拍手する。

そして、一夏は思った。

（うーん、遊星達が認める双子の兄妹か……一体どんな実力者なんだ？）

その後、龍亞と龍可も合流し、本格的に海で遊び始めた。

すると、遊星達のISが突然大きな光を放つ。

そして、たくさんの精霊達が実体化して現れる。

「みんな、何をやっているんだ!？」

《マスター、我々に一時の休暇を与えて下さい!》

「休暇？」

《海が苦手な仲間を除き、我々の海での休暇を許可して貰いたい!》

「そうだな……」

遊星はふと振り返ると、女子達がキラキラとした目で精霊達を見て

いる。

ジャックやアキ達に視線を向けるとヤレヤレと言った表情をして頷く。

「わかった。みんなで海を楽しもう！」

《ありがとうございます！！》

精霊達も思いつきはしゃぎまくる。

一夏達のパートナーである『シンクロン』達が出てきて、砂浜は騒がしくなってきた。

一夏side。

「よし、ジャンクロン。泳いで競争するか？」

《一夏、お前は俺をスクラップモンスターにしたいのか？》

「冗談だって、そう睨むな」

《なら、俺が相手をしてやろう》

「お前は確か、ジャンク・ウォリアー？」

《おう、兄ちゃん!》

「兄弟だったのか!？」

《一夏、ただ勝負するだけじゃ、つまらないから負けたら罰ゲームはどうだ?》

「罰ゲーム？」

《敗者は俺のカタパルトで空高く射出される》

カタパルト・ウォリアーが待っていました!　と言わんばかりに両肩のカタパルトを整備して出てくる。

「な、何!？」

《さあ、勝負だ!　レディ・ゴー!》

一夏はすぐさま海に飛び込んだ。

(よし、スタートダッシュは完璧!)

だが。

《はっはっは!　遅い遅い!》

ジャンク・ウォリアーは海を滑走する。

「卑怯だああああっ!！」

《よし、ゴール!》

「早っ!?!」

《さて、一夏……》

「うおっ!?!」

ジャンク・ウォリアーは一夏をグイッと掴み、カタパルト・ウォリアーのカタパルトに乗せる。

《それでは一夏、さよなら♪》

「お前らああああああああっ!?!」

《織斑一夏、射出!?!》

「うわああああああああああっ!?!」

一夏は空の彼方へ飛んでいった。

《計画通り(ニヤリ)》

実はこれはウォリアーズの作戦で、一夏を懲らしめようと考えたものである。

あまりヒドいことをすると、マスターの遊星に叱られるので、あまりヒドくない(?)程度にしたのである。

鈴音 side。

「ふうーん……」

鈴音はニトロ・シンクロンとニトロ・ウォリアーを見比べた。

「ねえ、ニトロ・シンクロン。本当にニトロ・ウォリアーが進化した姿なの？」

《何を言ってるにー！ 正真正銘、俺はニトロ・ウォリアーになれるにー！》

「嘘を……」

鈴音はニトロ・シンクロンを掴んだ。

《にー？》

「つくなあああああああああっ！！」

そのままニトロ・シンクロンを海の遙か先へ投げ飛ばす。

《にiiiiiiiiiiiiっ！？》

そして、ニトロ・シンクロンは自分の命の危機を察し、カードの中

に戻った。

「ニトロ・ウォリアー、肩に乗らせて。眺めが良さそうだし」

《お安いご用だ!》

ニトロ・ウォリアーは鈴音を肩に乗せて立ち上がる。

「おおっ! 高い高い!」

そのままニトロ・ウォリアーに乗って移動監視塔ごっこを楽しむのだった。

セシリア side。

「ターボ・ウォリアーさん、夏にピッタリの曲をお願いしますわ」

《了解しました》

セシリアは持参のビーチパラソルの影の下でのんびりと寝ていて、その隣ではターボ・ウォリアーものんびりと日向ごっこをしていて、セシリアのリクエストの曲を流している。

《平和だなあ》

ターボ・シンクロンは自前のオイルをジュースのように飲みながらセシリアの隣に座っている。

シャルロット&ラウラ side。

「ううっ……」

「ほら、大丈夫だって、ラウラ」

「し、しかし……」

ラウラはシャルロットの後ろに隠れている。

何故かというと、すぐ近くにはラウラのトラウマであるジャンク・デストロイヤーとジャンク・バーサーカーがいるからである。

「ラウラはもう前とは違うから大丈夫だよ」

「うむ……わかった」

ラウラは勇気を振り絞り、体をもじもじさせながらジャンク・デストロイヤーとジャンク・バーサーカーを見る。

「す、すまなかった……私を……許してくれ」

《……グハッ!!!》

「「ええっ!?!」」

二体は吐血（!?!）をして倒れた。

そして、砂浜に遺書を書く。

《ラウラ、可愛かった……萌え……ガクツ》

《あんな可愛らしい姿を見て幸せ……一片の悔い無し……ガクツ》
ジャンク・デストロイヤーとジャンク・バーサーカーは永遠の眠りに――。

《死ぬな、馬鹿者共!!!》

《ドバァッ!?!》

つかなかった。

ロード・シンクロンとロード・ウォリアーの攻撃によりなんとか戻ってきた。

《あれ、あれ!?! ここは!?! 天使族のみんなは!?! 天空の聖

域は!?!?」

《そんなところへは行かせるか!》

《愚か者め、戦士としての修行が足りないぞ!》

ロード・シンクロンとロード・ウォリアーはジャック・デストロイヤーとジャンク・バーサーカーに数分間説教をすると、ラウラの所へ行く。

「お前達は確か、私のシンクロフォルムの……?」

ロード・シンクロンとロード・ウォリアーは跪き、ラウラの手の甲にキスをする。

《我らは何時如何なる時でもラウラの力になると誓う》

《ラウラとシュヴァルツェア・レーゲンに進化の力を授け、織斑一夏を嫁にする手助けをする》

「おお……感謝する! ロード・シンクロン、ロード・ウォリアー!」

ラウラは笑顔を見せ、ロード・シンクロンとロード・ウォリアーとの絆を深めた。

第34話 少女の大きな一歩（前書き）

今回は箒ちゃんメインで、紅椿登場です。

そして、IS最強キャラクターの一人、篠ノ之束さんにまさかの敵が誕生です（笑）

第34話 少女の大きな一歩

夕日が沈み、海が茜色に染まる頃、箒は浜辺の近くにある崖にいた。

《何やってるんだ？》

「お前は……？」

箒の前に現れたのは、どこかで見たような白銀の竜がデフォルトした小さな竜だった。

《俺はデブリ・ドラゴン。スターダスト・ドラゴンの化身みたいなものだ》

「そ、そうか……」

《そのスターダスト・ドラゴンなら、そこにいるぞ》

「え？」

空の無数の星屑の光が集まり、スターダスト・ドラゴンが現れる。

「スターダスト・ドラゴン……」

《浮かない顔をしているな、箒。よかったら、俺達が話を聞こう》

「ああ……実は――」

明日の七月七日が箒の誕生日で、その日に行方不明の姉の束が『紅

椿』という箒の専用機を持ってくるそうだ。

「以前、スターダスト・ドラゴンは私に言ってくれたな。いつか『力』を授かった時に誰にも負けない、愛する者を護れる、お前にとつての無敵の刃となると」

《ああ》

「私は、一夏を護ることができるとか……」

《……箒》

スターダスト・ドラゴンはデブリ・ドラゴンを掴んで渡す。

「は？」

《デブリ・ドラゴンを一日預ける。頼んだぞ》

「え？ わ、わかった……」

《それじゃあ、また後でな》

スターダスト・ドラゴンは星屑に分解されて消える。

箒はデブリ・ドラゴンを見る。

「……旅館に行くか？」

《うん》

デブリ・ドラゴンを抱き抱えたまま箒は旅館に戻る。

旅館に戻ると、一夏達はデブリ・ドラゴンに驚いていたが、箒はただ「預かった」と言っただけで無理やり納得させた。

マスターである遊星には既に説明が行き渡っていたので問題はなかった。

夕食の時にはかなりシユールな光景があった。

「食べるか？」

《うん》

箒は夕食に用意された刺身をデブリ・ドラゴンに食べさせる。

「美味いか？」

《初めて刺身を食ったがなかなかの美味だな》

「そうか、それはよかった」

《でも、あまり俺に食べさせると箒の分が無くなるぞ？》

「今日はあまりお腹が空いてないから大丈夫だ。ほら、もっと食べて良いぞ」

《ありがとう、箒》

このやり取りに、一夏達は思った。

（これって、ファンタジーの竜の餌付け？）

翌日の合宿二日目。

今日は丸一日ISの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。

「篠ノ之、お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

千冬に呼ばれ、箒は向かう。

デブリ・ドラゴンも付いてきてるが、誰も何も言わなかった。

「お前には今日から専用――」

「ちーちゃ~~~~~ん!!!!」

ずどどどど……！

砂煙を上げながら無茶苦茶な速度で走る。

臨海学校に乱入してきたのは、IS開発者である稀代の天才・篠ノ之束。

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！ さあ、ハグハグしよう！ 愛を確かめーぶへっ」

千冬に飛びかかった束をアイアンクローでキャッチする。

もちろん手加減なしで容赦なく。

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

束はアイアンクローから抜け出し、箒の方を向く。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

「やれ、デブリ・ドラゴン」

《シューティング・ソニック（劣化版）！》

デブリ・ドラゴンは口から白銀の閃光を放つ。

「のわああああっ！？ 何奴！？ 私と箒ちゃんの仲を引き裂こうとする奴は……！」

（完全に竜の餌付けが完了している……）

一夏達は苦笑いを浮かべる。

「もう一発だ」

《シューティング・ソニック！！》

「うにゃあああっ！ ええい！ こうなったらこの不思議生物を抹さ——」

「返り討ちにしろ」

《シューティング・ソニック！！！！》

「うひゃあああっ！？」

そんなアホらしいやり取りが繰り返し続き、数分後には束の服のあちこちが焼け焦げて煙が立ち上る。

「えっと……それじゃあ、大空をご覧あれ！」

びしっと直上を指すと、金属の塊が落下してきた。

「じゃじゃーん！ これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！ 全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

金属の塊が開き、中から真紅の装甲に身を包んだIS『紅椿』である。

箒はさっそく紅椿に乗り、束の元で最終調整を行う。

それと同時進行で一夏の白式を見てみるが、なぜ一夏がISが使えるのかさっぱりだった。

最終調整が終わると、箒はデブリ・ドラゴンと共に空を駆け抜け、紅椿の性能を確かめる。

《箒、そのISは気に入ったか？》

「ああ、やれる！ この紅椿なら！」

《それじゃあ、シンクロフォームをやるか？》

「シンクロフォーム……よし、共に行くぞ、デブリ・ドラゴン！！」

《おっしやあ！》

デブリ・ドラゴンは両腕を大きく開き、咆哮を上げると四つの星となり、箒と紅椿に纏う。

「シンクロフォーム！」

光の柱に包まれ、紅椿が新たな姿へと進化する。

光が晴れると、白銀に輝く両翼が背中に現れ、紅椿の装甲の一部がスターダスト・ドラゴンに似た形になる。

更に両手に持つ二つの刀『雨月』と『空裂』にスターダスト・ドラゴンの装飾が施される。

「何々！？ どう言うことなの！？ 私の自信作の紅椿が変な形に

！？ おのれ、あの不可思議生物の仕業かあ！」

状況を全く理解出来ない束は混乱状態に陥り、デブリ・ドラゴンに殺意を向ける。

箒は、新たに進化した紅椿を見て、魅了されると同時に感動する。

「これが、シンクロフォルム……」

《箒……》

箒の背後にスターダスト・ドラゴンの幻影が現れる。

「スターダスト・ドラゴン……」

《お前と紅椿に俺の力の一部を託す。共に戦おう》

「ああ、これなら護れる……この『紅椿・スターダストフォルム』なら！」

箒は雨月と空裂を振るい、空と雲を切り裂いた。

「もう！ 勝手に話を進めないでよ、箒ちゃん！ それからその
不可思議生物！ 後でナノ単位まで分解してやるう！！」

束の声が響いたが、箒とスターダスト・ドラゴンとデブリ・ドラゴ
ンは完全無視するのだった。

番外編 春に咲く恋の桜（前書き）

I S 短編小説コンテストに出した小説をここでも投稿します。

前回の番外編のホワイトデー小説の続きとして書きました。

今回は時間をかけた私なりの自信作です。

では、どうぞ！

番外編 春に咲く恋の桜

春。

始まりと変わり目の季節で、暖かく心地よい日々が流れる。

そして、春の代名詞である桜が満開のこの時期に、遊星と一夏達は楯無に呼ばれ、大きな桜の木の下でお花見をする事になった。

お花見のメンバーはチーム5D's、一夏と五人娘、そして楯無の計13人の大人数である。

お弁当は遊星、アキ、一夏、箒、シャルロット、楯無が用意した（料理が苦手な人には有無を言わずに別の準備をさせた）。

楯無はジュースが入ったコップを持ち上げ、主催者としてみんなに一言を伝える。

「今日はこの綺麗に咲いた桜に感謝しつつ、程よい無礼講でお花見を楽しみましょう。それでは、乾杯！」

『乾杯！！！！』

全員はジュースを一気に飲み、さっそく料理に手をつける。

「さあ、一夏さん、どうぞ」

「一夏、食べなさい」

「一夏、はい」

「一夏、ほら、食べ」

セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラが我先にと料理を皿に載せて一夏に出す。

「お、落ち着けて、突然料理を渡されても困るって」

一夏はセシリア達を静めるために説得を始める。

「全く、相変わらずのハーレム野郎だな」

「あれはもう神が与えた天性の才能としか思えんな」

クロウとジャックは呆れながら料理を口にする。

すると、楯無がキランと目が光り、クロウを見る。

「ほう、君がそれを言うかな？ クロウ君」

「はい？ 何のこっちゃ？」

「最近……うちの本音ちゃんといい雰囲気らしいじゃない。幼なじみとして、生徒会長として、お姉さんはそこんところの詳しい話を聞きたいな？」

「ギクッ！？」 あ、ははは！ 本音とはそんな関係じゃないぞ！」

「ジャック君、クロウ君の尋問を開始しなさい。後で報告書を書い

てくれたら高額の給料を出すわよ？」

「了解だ！ さあ、リア充クロウめ、覚悟しろ！ 本気になった俺から逃げられると思うな！！」

「楯無、後で覚えてろよおおおおおっ！！」

「はっはっは！ 報告書を期待して待っているわ！」

楯無は扇子で仰ぎながら移動すると、気になるものを見つける。

「……………」

箒はムスツとしながら、料理を黙々と食べている。

「箒ちゃん、どうかしたの？」

「……何でもありません」

「そう言えば、一夏君に告白したらしいわね」

「まだ、返事はもらってませんけど……」

楯無は指を顎に添え、空を見上げながら考える。

（ここは一つ、お姉さんが手を貸してあげますかな♪）

「まあまあ、箒ちゃん。これを飲んで元気を出してね」

楯無はコップに飲み物を注ぎ、箒に渡す。

「ほら、箒ちゃん。一気にグイッと！」

「は、はあ……」

箒は言われるがままにコップの飲み物を一気に飲み干す。

「んっ!？」

飲み物の中身に異変を感じた箒は顔を歪ませる。

「楯無さん、これ、は……ふにゃ……?」

突然、箒の意識が大きく揺らいだ。

（ふっふっふ。これは楽しみね♪）

楯無は扇子で口元に浮かんだ悪の笑みを隠す。

楯無がちょっとした悪戯計画を実行しているのを知らない遊星は、アキと龍亞と龍可と一緒に親子のように花見を楽しんでいる。

「うんまーい！ 遊星達が作った料理、スゴく美味しいよ！」

「龍亞、あんまり急いで食べるのどに詰まるわよ」

龍亞と龍可はいつもと同じやり取りをする。

アキは自身の赤い髪を掻き分け、見事な桜を見上げる。

「綺麗ね、桜……こうやって楽しんで見るのは初めてかも」

遊星はそれに同意するように小さく頷く。

「ああ。思えば、こうやってのんびりと桜を見る事なんて本当に無かったからな」

「私達はいつも数奇な運命の中、戦ってきたから……」

アキは一瞬暗い顔を見ると、遊星はアキを自分の肩へと抱き寄せる。

「遊星？」

「だが、その数奇な運命で俺達は出会えることができた。掛け替えない仲間達と、大切な人を……」

遊星らしい言葉に、アキはゆっくり眼を閉じた。

「そうね……確かに嫌な事だけじゃないわね」

「……アキ、一ついいか？」

「何？」

「アキは今、幸せか？」

遊星は今まで聞けなかった事をアキに尋ねる。

果たして自分はアキを幸せにしてやっているのか？

時折、遊星の脳裏にはそれが過ぎり、心が不安に締め付けられることがある。

不安な表情をする遊星に、アキはクスツと笑い、頬に優しいキスを落とす。

「アキ……？」

アキは優しい笑みを浮かべ、遊星の肩に自分の頭を置く。

「全く、何を言い出すのかと思えば……そんなの、当たり前じゃない。私はとても幸せよ。ここにいる大切な仲間達。そして……遊星、あなたが私の側にいてくれるから……」

「そうか……」

遊星は不安が晴れ、一息を吐く。

「そういう遊星も幸せ？」

「ああ、アキと同じ答えだ。みんなが、アキが俺の側に居てくれるからな……」

「よかった……」

遊星とアキは互いの指を絡ませて手を繋ぎ、桜を見る。

ジーン……。

「日が経つに連れて、遊星とアキ姉ちゃんのラブラブ度が上がっているね」

「そうだね。見ている……こっちも恥ずかしいわね」

二人の話と行動を龍亞と龍可がじっくり見ているのを遊星とアキは驚く。

「「る、龍亞!? 龍可!?」」

「二人共々、イチャイチャするのは勝手だけど、少しは周りを見なきゃダメだよ?」

「少しは私達に構って欲しいな……」

「「ゴメンナサイ……」」

遊星とアキは謝ると、龍可は何かを思いつく。

「ねえ、アキさん。膝の上に座ってもいい？」

「膝？」

「ちょっとした憧れだったの。私の両親はあまり家にいないから……」

「龍可……良いわよ、来て」

アキは龍可を手招きすると、龍亞が手を元気よく挙げる。

「あ、じゃあ俺も俺も！ 遊星の膝に座らせて！」

「ああ、良いぞ」

龍亞は遊星の膝に、龍可はアキの膝に座る。

龍亞と龍可はご満悦な表情を浮かべると、遊星とアキはそのまま後ろから二人を抱きしめる。

そして、アキはそっと呟く。

「幸せ……みんなと会えて、本当に良かった……」

アキの言葉に遊星、龍亞、龍可は笑みを浮かべ、今流れるこの時を心に深く刻んだ。

「あの〜遊星君。お取り込み中のところ悪いけど、ちょっぴりヤバい状況なのよね〜……」

楯無が苦笑いを浮かべながら遊星に話しかける。

「……楯無、今だけお前を怨んでいいか？」

せつかくの雰囲気をぶち壊された遊星が珍しく他人を怨む表情をすると、楯無は土下座して謝る。

「ごめんなさい……後で何でもお詫びをするから……」

「……それで、何があったんだ？」

「あれを見て……」

遊星はそれを見た瞬間、アキ達と尋問中のジャック達を連れてこの場から離れる。

（あれは太刀打ち出来ない……一夏、申し訳ないが今だけお前を見捨てることにする。頑張れ）

遊星達は何故か逃げるように離れるのを見た一夏達は首を傾げた。

「一夏~~~~♪」

「「「「え???」」」」

聞き慣れた声で甘ったるい声音に一夏達は恐る恐る振り向いた。

一夏達は振り向いた事をとて後悔した。

そこには、顔が火照っていて、服をかなり着くずした、いつもの凛々しい姿とはかなりかけ離れた篠ノ之箒がいた。

「ほ、箒……か？」

一夏は目の前にいるのが自分の知っている幼なじみの箒かどうか本気で疑ってしまう。

「そうだよ♪ 一夏の事が大好きな篠ノ之箒ちゃんだよ♪」

（（（（キャラクターがかなり変わっていますけど!?!））））

全員落雷が落ちたような衝撃を受ける。

「ねえ、一夏あ」

箒は一夏の膝の上に座り、首に手を回す。

「ちょっ、箒さん!？」

「ず、ズルいわよ!」

「ダメダメ! 僕と代わってよ!」

「私の嫁に手を出すな!」

セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラが文句の嵐を言うと、箒の表情が研ぎ澄まされた刃のように鋭くなる。

「黙れ」

箒の右手に空裂が現れ、セシリア達は凍り付くように固まる。

「」「はい!？」」「」

「失せろ」

空裂の刃が一閃し、エネルギーと化した斬撃がセシリア達を問答無用で吹き飛ばす。

「」「きゃああああああああああつ!!」「」

「ほ、箒!？ 一体何が……」

一夏の目線の先には、楯無が何度も謝る姿があった。

手には、ジュースとは別の飲み物の缶があった。

それは、二十歳を越えた遊星達が飲むはずだった飲み物、つまり――お酒である。

（もしかしくなくても、箒さんは酔っぱらっていらっしやる!?!）

「一夏あゝ♪」

箒の吐く息から甘いお酒の匂いが広がり、確信する。

しかも、表情と症状を見るからに相当酔っぱらっている様子。

（箒ってアルコールに弱かったのか!?!　　ってか、楯無さん!?!）

あんた一体何をしてくれるんですかあああああああああああ
あっ!?!?!　　マジでこれ、どうするの!?!）

孤立無援状態で、酔っ払いの箒に抱きつかれて逃げることができない。

箒は顔を一夏に近づけて話しかける。

「一夏、私の事……好きか？」

「えっ……?」

突然いつものような口調で話し、更には好きかどうかを聞いてくるので、一夏はかなり混乱する。

「まだ……お前からちゃんとした答えを貰っていない。今すぐ答えが欲しい……」

「箒……っ!？」

一夏は箒を見て言葉を失う。

何故なら、箒の瞳から涙がこぼれ落ちているからだ。

「お前が、本当に私のことを何とも思っていないなら……好きでもないなら、それでもいい。他の者に任せて、私は武士として潔くお前から離れる。だから、頼む。聞かせてくれ……一夏。お前の本当の気持ち」

箒の覚悟を決めた切なる願いに、一夏は唾を呑み込む。

涙で潤んだ瞳で上目遣いに自分を見つめる箒。

一夏は今まで生きてきた記憶から、箒と過ごしたたくさんの思い出が鮮明に蘇る。

突然、一夏は目の前にいる少女をとて愛おしく思い始め、想いが沸き上がる。

「箒!!」

「え? きゃっ!？」

一夏は箒を優しく抱きしめ、箒の耳に囁いた。

「今、気づいた……俺は……箒の事が好きだ」

「一、夏……」

「だから、俺の恋人になってくれますか？」

箒はコクコクと頷いて笑みを浮かべる。

「はい……!」

二人はそのまま互いの顔を両手で添え、唇にキスをする。

ブワッ……ゾクッ!?

一夏は背後に四つの殺意を気づき、振り向いた瞬間、幸せから一氣に不幸へと落とされた。

「一夏さん、箒さん。覚悟は出来ていますか？」

「よし、殺そう」

「一夏……ふふふっ……」

「そうか、これが浮気なのか……」

箒の斬撃から生還した四人がISを起動させて一夏と箒を狙う。

箒は一夏から離れると、紅椿を起動させ、雨月と空裂を構える。

「一夏、お前は私が命を懸けても護る！ だから……」

「箒？」

「一夏は私を護ってくれ！ そうすれば、必ず乗り切れる！」

「箒……ああ、わかった！」

一夏も白式を起動させて雪片式型を構える。

退避していた遊星達も非常にマズいと思い、ジャックは楯無を睨みつける。

「楯無！ 貴様が元凶なら責任を取ってアイツ等を止めてこい！！」

「IS学園生徒会長として責任を持って、行ってきます！！」

楯無は霧纏の淑女を起動させて暴走するセシリア達を止めるために介入する。

「……ジャック、俺達も行くか」

「何!?! 遊星、俺もか!?!」

「早く花見を再開させるためだ。俺はシャルロットとラウラを止める。セシリアと鈴音はジャックが止めてくれ」

「ええい、仕方ない! なら、とつと始めるぞ、遊星!」

「ああ!」

遊星とジャックも星竜と紅蓮王を起動させる。

「飛翔せよ! 『スターダスト・ドラゴン』! !」

《全く、コイツ等といると飽きないな……》

「我が魂! 『レッド・デーモンズ・ドラゴン』! !」

《むしろ騒がしすぎるだろ!》

遊星とジャック、そしてスターダスト・ドラゴンとレッド・デーモンズ・ドラゴンも事態を収拾するために向かった。

その後、セシリア達の暴走を何とか止め、恋人同士となった一夏と箒は初々しい感じで接し、セシリア達は嫉妬心を膨らませた。

そして、次の日以降、一夏と箒を襲撃して、IS学園を舞台に殺伐とした一夏の争奪戦が始まるのだった……。

.

第35話 白と紅、初陣！（前書き）

さあ、いよいよ銀の福音との戦いが近づいてきました！

参考に早くアニメ見たい……。

第35話 白と紅、初陣！

箒は紅椿とシンクロフォルムの性能を一通り確かめると、デブリ・ドラゴンを元に戻して、一夏達の所へ行く。

束は満足気に頷くと、龍亞と龍可が近づく。

「おっす、束姉ちゃん！」

「束さん！」

龍亞と龍可が手を挙げて束を呼ぶと、束も手を挙げて返事する。

「おお、龍亞君！ 龍可ちゃん！ 相変わらず元気だねっ。どう？ 私が改良したデュエル・ボードは？」

「うん、最高！！！」

「さて、チーム5D'sの皆さん、私にISを見せてくださいな！ 私は興味津々なのです！」

「束さん、あなたが龍亞と龍可を保護してくれたんですね？」

遊星が聞くと束はVサインをする。

「うん、そうだよ！ 神のお告げやら色々あって、二人を保護して、私自らがISのことを色々教えてあげたんだよ！」

「ありがとうございます」

遊星は頭を下げた。

「ほえ？」

「俺達の大切な仲間を守ってくれて、束さんには感謝しきれません」
アキ、ジャック、クロウも頭を下げると、さすがの束も少し恥ずかしくなり、視線を逸らした。

「あ、あはは。い、良いんだよく好きでやったんだから」

すると、千冬がいつもの意地悪な笑みをする。

「束、今のお前は今までで一番可愛いと思うぞ？」

「もう！　ちーちゃんの意地悪！　だからいっくんブラコー——ふもっ！？」

今度はアイアンクローに首締めを加えたコンボ技を繰り出す。

「や、止めて、ちーちゃん！　それ以上やられると私に新たな境地が目覚めちゃうよー！」

「ほう……どんな境地か楽しみだな。ほれほれ、遠慮せずにとっと目覚めろ」

「あっ、あっ、ちーちゃ……あうううううううううっ！！」

束は新たな境地（！？）に目覚めると、その場に倒れて口から魂が

出てしまっている。

「さて、訓練の続きを始めよう」

そして千冬は何事もなかったかのように束をほったらかしにする。

「たっ、た、大変です！ お、おお、織斑先生っ！」

何やら真耶が慌てて来ると、千冬と極秘レベルの話をする。

「全員注目！ 現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。
今日のテスト稼働は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡
があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

千冬の一声に女子達はざわめき、次に遊星達に向けられる。

「専用機持ちは全員集合しろ！ 織斑、篠ノ之、オルコット、不動、
ボーデヴィツヒ、凰！ それから、不動遊星、十六夜、アトラス、
ホーガン、龍亞、龍可、全員だ！」

専用機持ちが合計十二人集まるが、一夏達はその内二人に疑問を抱く。

「えっと、どうして龍亞と龍可もいるんだ？」

一夏が代表で聞くと、龍亞はケロッとして答える。

「だって俺と龍可は専用機を持っているよ？ な？ 龍可」

「うん」

「「「「「えっ!？」」」」」」

「ほら」

「はい」

龍亞の左手首には様々なハイテク機能がついた黄色の機械の腕輪があり、龍可の右手首には可愛い妖精や神聖な動物が刻まれた翡翠色の腕輪があった。

「俺のは『ホープ・ヒーロー』だよ」

「私のは『フェアリー・ガーディアン』です」

こんな小さな子供が専用機ISを持っていることに一夏達は哑然とする。

その後すぐに旅館の一番奥の宴会用の大座敷で専用機持ち達と教師陣が集められた。

証明を落とした薄暗い室内に大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共

同開発の第三世代型の軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスペルが制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

軍用ISの銀の福音は攻撃と起動に特化した機体であり、専用機持ち全員で色々と意見を出し合っていく。

すると。

「イヤッホー！　ここは私の出番だね！」

全員が上を見上げると、天井から東の首が逆さに生えていた。

「うむ。篠ノ之東はくノ一スキルまで持っていたか……稀代の天才はやはり違うな！」

「あはは！　ジャック君はわかっているねー。もっと褒めて♪」

ジャックが変なところに感心すると、ノリの良い東もそれに応える。

「ここから出ていけ、東。出て行かないなら、お前に新たな境地を目覚めさせるぞ？」

「そ、それだけは！　って、違うよーちゃん！　ここは断・然！　紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

東は紅椿が作戦の適任と言い放ち、能力を説明し、第四世代型ISの『展開装甲』と呼ばれる東作成の能力に一夏達は哑然とする。

そんなこんなで数分間の話し合いの結果、一夏と箒のタッグによる作戦が行われることとなった。

各自それぞれが作戦成功に向けて、自分に出来ることを行う。

そして、作戦開始が近づく中、紅椿の調整が終わり、暇そうにしている束に一夏は一つ聞きたいことがあった。

「束さん。一ついいですか？」

「ん？　　いっくん、何かな？」

「前から思っただんですけど、遊星達のISは何世代型なんですか？」

「あー、やっぱりいっくんも気になるよねー？　　私は『第零世代型IS』って呼んでいるよ」

「零……？」

「遊星君達の持つISは私の作った……おそらく世界中のどのISとも異なる力を生み出す。つまり、ISであって、ISではないんだよ」

「つまり……いわゆる、別次元ってことですか？」

「その通り！『未知数の力』と『無限の可能性』の意味を込めて、零と名付けたんだよ？」

「なるほど……ありがとうございました、束さん」

「いえいえ。それじゃあ、いっくん。箒ちゃんと頑張ってね」

「はい！」

時刻は十一時半。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

砂浜で一夏と箒はISを纏う。

すると、遊星が出てきて星竜を構える。

「ウォリアーズ・フォルム『カタパルト・ウォリアー』」

両肩に巨大な発射台、カタパルトが装着された戦士、カタパルト・ウォリアーとなる。

「少しでもエネルギーを節約するために俺のカタパルトに乗れ。そうすれば二人を一気に飛ばすことが出来る。それから……箒、受け取れ」

遊星は何かを投げ飛ばし、箒がキャッチすると、目を丸くする。

「デブリ・ドラゴンのカード……」

「何かあった時の保険に箒にも『チューナーズ・カード』を渡しておく。いつでもデブリ・ドラゴンを呼べる」

「ありがとう、遊星」

「ああ。さあ、二人共、乗るんだ」

「わかった!」

「はい!」

一夏は右のカタパルト、箒は左のカタパルトに乗る。

すると、一夏と箒を包むように球体の形をした透明なバリアが現れる。

このバリアにより、発射や到着の衝撃をばゼロまでに押さえることが出来るのだ。

「行くぞ、カタパルト・ウォリアー!」

《空気抵抗、気圧、気候からの予定到着座標位置、計算完了。ツインカタパルト、システム異常無し! マスター、いつでも行けます
!!》

「カタパルト・シュート!」

両肩のツインカタパルトで一夏と箒を、銀の福音がいる空の彼方へ

と射出する。

その際に発生する膨大な衝撃波で遊星は後ろに吹っ飛ばされる。

場所が砂浜ということもあり、衝撃はかなり和らいだ。

「……行ったか？」

《ああ、無事に射出されました。それより、マスター。体は大丈夫か？》

「何とかな。それより、やはり心配だ……」

遊星は一夏と箒を射出した方の空を見る。

（無事に終わればいいが……）

第36話 勝利の先にある闇（前書き）

遊戯王5D's、いきなり数年後に飛びましたな。

計画停電でリアルタイムで見られませんでしたけど……うわあああ
ああああああん！！

。。（ノド）。。

じ、次回こそは、ってか、最終回は絶対にリアルタイムで！！

アキさんが美しく……医者希望ですか。

今まで破壊した反動かな？

遊星がアキの両親に相談されたのには興奮しました！

、（≡▽≡）／

こりゃあ、親公認かな！？

（☆▽☆）

そして、我らが未来のヒーロー龍亞君！

……成長した双子の妹に何故顔を赤くしているのかな？

わかっていると思うが、自分と顔の似ている双子の妹に手を出しち
ゃいかんぞ（爆）？

二週間ぶりのISは爽快感の戦いでした！

最終回？ が楽しみなってきました！

※あとがきにアンケートがあるので、よろしくお願いします。

第36話 勝利の先にある闇

一夏と箒をカタパルト・ウォリアーで送った遊星はしばらく砂浜で休むと、旅館へと戻る。

しかし、事態が急変するのだった。

ドクン……！

「くっ!？」

赤き竜の痣から激痛が走る。

そして、遊星の脳裏に映像が流れる。

それは、以前どこかで見覚えがある形をした十個の木の実が実った木から闇の力が溢れだし、十の悪魔が現れた。

そして、その十の悪魔の内の一体が銀の福音に取り憑いて空を飛んでいる。

「一夏と箒が危ない！」

遊星は瞬時にそれを察知し、振り返って海に向かう。

「ウォリアーズ・フォルム、『ジャンク・ウォリアー』！ イコライザ、『セカンド・ブースター』！！」

ジャンク・ウォリアーにセカンド・ブースターを取り付けた高速機動形態となり、一気に加速して飛ぶ。

（一夏、箒、無事でいてくれ！！）

一方、一夏と箒は銀の福音と交戦していた。

しかし、『重要軍事機密』と呼ばれるだけあってその能力は桁違いだった。

（このまま時間を懸けるわけにはいかない。こうなったら……）

一夏は箒に向かって大声で叫ぶ。

「箒！ シンクロフォームで一気に攻めるぞ！！」

「わかった！ 行くぞ、デブリ・ドラゴン！！」

「来い、ジャンク・シンクロン！！」

一夏と箒はチューナーズ・カードを取り出してジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンを呼び出す。

「「シンクロフォーム！！」」

すぐさまチューニングを行い、白式・ジャンクフォームと紅椿・スターダストフォームとなる。

福音は姿が変わった二つのISに反応し、銀色の翼を開いた。

それは、砲口だ。

一斉に開いた砲口から幾重の光の弾丸が撃ち出された。

だが、シンクロフォルムで強化された白式と紅椿はそれを難なく交わして自分の獲物を握り直す。

「箒、左右から同時に攻めるぞ。左は頼んだ！」

「了解した！」

二人は二手からの攻撃で隙を狙う作戦に出る。

「一夏！ 私が動きを止める！！！」

「わかった！」

「デブリ・ドラゴン、一気に追いつめるぞ！」

《応よ！ やっちゃえ、箒！！》

雨月と空裂に施されたスターダスト・ドラゴンの瞳が輝き、紅の刃が白銀へと変わる。

箒は突撃と斬撃を交互に繰り返し、腕部展開装甲が開くと、光速に駆ける白銀のエネルギー刃が攻撃に合わせて自動で射出、福音を狙う。

「星^{せい}雨！！！！」

それはまるで天球に雨のように降り注ぐ流星の如き美しい攻撃だった。

箒の凄まじい猛攻に、さすがの福音も防御を使い始めた。

「行くぜ、ジャンクロン！ 久々の奥義だ！！」

《だから、略すなあああああっ！！》

「零落白夜・幻桜陣！！！」

一夏の姿が十以上に分身し、上へある程度の高さまで上昇すると、一気に下へ急降下する。

「La……………♪」

甲高いマシンボイス。

その刹那、両翼のウイングスラスターの砲門全てが開いた。

その数、三十六。

しかも全方位に向けての一斉射撃。

「やるなっ……！ だが、押し切る！！」

箒が光弾の雨を紙一重でかわし、迫撃する。

——隙が、できた。

一夏は分身体で一気に攻めようとしたが、一夏の瞳にある物が映った。

（あれは、船！？）

海に浮かんだ船に向かって一発の光弾が飛ぶ。

（このままじゃ、あの船が！）

一夏は見殺しにはできないと、光弾を打ち消そうとしたその時だった。

全方位に放たれた光弾が何故か全く関係ない方向に曲がって行った。

「一夏、決めろ！！！」

一夏にとっての希望の一声が耳に届いた瞬間、福音に狙いを定め、雪片式型を振り下ろす。

零落白夜の刃が福音に突き刺さり、遂に福音が停止した。

アーマーを失い、スーツだけの状態になった操縦者は海に墜ちそう

になったが、一夏が慌ててキャッチする。

「どうやら、無事に終わったな」

遊星が安心した笑みで一夏と箒を見る。

星竜は体中が傷ついた戦士、スカー・ウォリアーの姿となっていた。

「さっき、福音の光弾を引き寄せてくれたのは遊星か？」

スカー・ウォリアーを解除しながら遊星が頷く。

「ああ。スカー・ウォリアーの特殊能力、プル・マグネティックでな。何とか間に合って良かったよ」

「助かったよ。ありがとう、遊星」

「ありがとうございます」

一夏と箒を感謝を受け取ると、遊星は周囲を警戒する。

「二人とも、何か変な感じとかしなかったか？」

「えっ？ 特に何も……」

「思い当たる節が無いが……」

「そうか……なら、帰ろう。福音の操縦者を早く休ませなければな。またカタパルト・ウォリアーで飛ばすぞ」

遊星は肩を回し、軽く関節を鳴らしてカタパルト・ウォリアーの準備をする。

『そうはさせん』

突然、待機状態の銀の福音が操縦者から遠くに離れ、膨大な闇を噴き出す。

遊星は一夏と箒を後ろに隠すように前に出る。

「一夏、箒、気をつけろ！」

「この感じ……ラウラの時と同じ!？」

「くっ……こんな時に！」

闇が大破した銀の福音を呼び出してそのまま取り込んだ。

闇は徐々に大きくなると、形を大きく変え、頭に王冠を被った白色の悪魔となった。

『我は天魔時戒神の一柱、ケテル』

「天魔、時戒神!？」

『貴様等のISを全て奪わせてもらう』

ケテルは翼を広げると、空を覆うほどのたくさんの召喚陣が現れ、その中から武器を持った悪魔を召喚する。

第36話 勝利の先にある闇（後書き）

ジャックの相手に今マジで悩んでいます。

そしてこれから登場予定のブルーノちゃんも。

もし誰か適任と思われる女性がいたらアイデアをお願いします。

m (| |) m

私の誤りでアポリアが出ないと書いてしまっって申し訳ありませんでした。

あれはアポリアにカップリング無しという意味でした。

第37話 闇からの逃走（前書き）

何とか遊戯王5D'sとISの最終回までにはクライマックスを迎えたいです。

それが終わったら仮面ライダーとヴェスperia。

やること一杯だ……。

（――；）

マスターガイド3を購入して、最強にして最後の龍星、シューティング・クエーサー・ドラゴンを手に入れました！

やっぱりカッコ良く、すぐにデッキを構築しました！

第37話 闇からの逃走

銀の福音を一夏と筭が無事に倒したが、銀の福音から天魔時戒神の一柱『ケテル』が姿を現した。

「天魔時戒神……」

（まさか、時戒神の名をこの世界で聞くことになるなんて……）

遊星はかつてネオドミノシティの未来をかけて戦った一人の男を思い出していた。

（だが、この禍々しい気は何だ？ 俺が戦った時戒神とは別物だ）

「貴様、なぜ俺達のISを狙う？」

『この世界の圧倒的な力を欲することに理由など必要か？』

「目的を話さないつもりか。なら、一ヶ月前に俺の娘のラウラに取り憑いた悪魔は貴様の差し金か！？」

『ああ、あの力を欲した娘のことか。あれは単なる余興。我らにとつては遊びだ』

「遊び、だと！？」

ラウラを苦しませたあの出来事を遊びと言い放ったケテルに対して、遊星は怒りがこみ上げてくる。

『話はこれで終わりだ。行け、我が下僕達よ』

ケテルの周りにいた悪魔達は一斉に襲いかかってきた。

「ウォリアーズ・フォルム『セブン・ソード・ウォリアー』!!!」

遊星は黄金の鎧を身に纏い、七つの剣『セブン・ソード』を携えた剣士、セブン・ソード・ウォリアーとなる。

「俺がこいつらを食い止める。その間に早く逃げるんだ!」

「だけど、遊星は!？」

「この数を相手にするのか!？」

「心配するな、俺もすぐに追いかける。だから……行け!!」

遊星は七つのセブン・ソードの内の二本の短剣を構える。

一夏と箒は遊星の気持ちを無駄にしないために少しでも遠くへ逃げるために飛んだ。

「行くぞ、セブン・ソード・ウォリアー!!!」

《邪魔する奴は全て斬る!!!》

「セブン・ソード・スラッシュ!」

セブン・ソードをほぼ同時に振るい、鋭い七つの剣閃で悪魔を次々切り裂き、闇へ葬る。

「うおおおおおおおおおおおっ!!」

『さすがはシグナーの一人と言ったところか。なら、これならどうだ?』

ケテルは更に悪魔を呼び出し、数で圧倒する作戦に出る。

その狙い通り、あまりの敵の多さに遊星も対応が難しくなっていき、何体かが一夏と箒へと向かった。

「しまった!?!?　ぐあっ!」

一瞬の隙をつかれ、遊星は鎖に縛られて動きを封じられてしまう。

そして、一夏と箒に迫る悪魔達が一斉に武器と鎖を投げる。

「っ!?!?　箒!!」

一夏は箒を庇うように悪魔に立ち向かう。

しかし、明らかに一夏が対応できる状況ではなかった。

その時、白式・ジャンクフォームと紅椿・スターダストフォームが一瞬光った。

グサツ!!

《ぐうつ……!》

《があっ……!》

「「えっ……?」」

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンが白式と紅椿のシンクロフォルムを解除し、体中に悪魔の武器と鎖が貫かれ、身を挺して一夏と箒を守った。

「ジャンクロン!!」

「デブリ・ドラゴン!!」

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンは意識を失いかけながら一夏と箒に逃げるよう言う。

《一、夏……早く行け……馬鹿……》

《箒……逃、げろ……》

悪魔に拘束された二体は意識を完全に失い、自分達が出てきた召喚陣に引きずり込もうとする。

「箒、この人を頼む」

一夏は箒に操縦者を託して雪片式型を構える。

「一夏!？」

「みんなを……離せえっ!!」

一夏は加速して向かうが、その瞬間に白式のシールドエネルギーの残量が無くなってしまい、停止してしまった。

「っ!？」

『愚かな……力のない者が策も無しに向かってくるとは――墜ちるがいい』

ケテルは銀の福音の光弾を何十発も放ち、一夏を撃ち抜く。

白式のエネルギーシールドを貫き、一夏の体に次々と光弾が容赦なく襲いかかる。

アーマーが破壊され、衝撃で骨が軋み、熱波で肌が焼けていく。

悪魔達は鎖を出して一夏を縛り、ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンと一緒に連れて行こうとする。

そして、一夏は体中に気が狂いそうな激痛が駆け巡る中、箒を見た。

（悪い、箒……またお前に心配をかけてしまったな。しかも、今度

は泣かせてしまった……ダメだな俺は。守るって、自分に誓ったのに……」

「一夏っ、一夏っ、一夏あっ!!」

箒は涙を流し、必死に一夏の名前を叫び続ける。

「一、夏……くっ!」

（どうする？ 状況は最悪だ。俺と一夏は動けないし、増してや箒は福音の操縦者がいて戦うことが出来ない……こうなったら!）

遊星は今出来る最善の策を閃き、星竜を待機状態にして箒に向かって投げ飛ばす。

「頼むぞ、スターダスト・ドラゴン!!」

星竜からスターダスト・ドラゴンが現れると、両腕で箒と福音の操縦者を抱きしめるようにして、その場から退避する。

「スターダスト・ドラゴン!? 何故ここから去る!? 一夏を……一夏達を見殺しにするのか!？」

《今戦ってどうなる……? 確実に俺達は全滅してしまう》

「しかし!」

《頼む、何も言わずに我慢してくれ……》

スターダスト・ドラゴンの抱きしめる力が若干強くなったのを感じ

た箒は口を閉ざした。

（辛いのはお前も同じなんだな……）

箒も辛さを耐えるために爪を手のひらに食い込ませて唇を噛みしめる。

『逃がすか、行け！』

ケテルは何百体の悪魔を呼び出して箒とスターダスト・ドラゴンを追いかける。

《箒、一気に奴らを蹴散らして行く。しっかり掴まってる！》

「……はい！」

《よし。モード・チェンジ、バスター・モード！！！》

スターダスト・ドラゴンは蒼穹に輝く鎧を身に纏い、スターダスト・ドラゴン／バスターとなる。

スターダスト・ドラゴン／バスターは振り向くと同時に白銀の閃光を放出する。

《アサルト・ソニック・バーン！！》

追いかけてきた悪魔を全で一掃し、悪魔の爆発で辺り一面が完全に見えなくなり、スターダスト・ドラゴン／バスターはその間に高速で飛翔し、悪魔達を振り切る。

『逃げたか……まあ、良い。目的の物をまず一つ手に入れた。こいつらを狭間の牢獄へ連れていけ』

ケテルが悪魔達に命ずると、遊星と一夏達を召喚陣の中に入れ、ある場所へと向かわせた。

『さて、逃げた女を追いかけたいところだが……人間の心理を考えれば他の仲間を引き連れてやってくるはず。そこを一網打尽に狙えば好都合。しばしここをさ迷ってみるか……』

ケテルは闇に戻って球体となると、眠りについた。

スターダスト・ドラゴン／バスターは箒と福音の操縦者を無事に砂浜まで運び、駆けつけた千冬やジャック達に何が起きたのかを全て話した。

そして、千冬が「時戒神とは何だ？」と言い、五人のシグナーは今

までの壮絶なる戦いを話すことにしたのだ。

第38話 過去から未来への戦いの記憶（前書き）

今回は書くのが大変でした（。▽。；）

間違っている点があるかもしれないので、そこは指摘をお願いします。

一夏達のデッキはターミナルや定番デッキを考えてみようと思います。

そして、ジャックの候補は楯無が近くなりました。

え？

これはどうなる！？

（。Д。；≡；。Д。）

第38話 過去から未来への戦いの記憶

大座敷にてジャック、アキ、クロウ、龍亞、龍可の遊星以外のシグナーを中心に、箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、千冬、束が座っている。

「さて……全ての戦いは19年前の出来事から始まった。遊星の父親である不動博士は『モーメント』の第1号機の開発者だった。モーメントのことは既に遊星から聞いているな？」

ジャックが確認のために聞くと、箒達は頷く。

「しかし、その第1号モーメントがある事故を起こすことになる。それは……『ゼロリバーズ』だ」

ジャックの話す言葉が重くなり、箒達の緊張感が増す。

クロウはディスプレイにISを繋いで過去の映像を映す。

「ゼロリバーズは表向きは自然災害だが、実はその第1号モーメントの制御が不安定なまま起動した際、通常とは逆のマイナス回転で暴走してネオ童実野シティをシティとサテライトに分断させてしまったんだ。その際、俺やジャックの両親、そして、遊星の親父さんが亡くなってしまったんだ……」

映像を見た箒達はハッと息を飲み込み、言葉を失った。

映像には、膨大なモーメントのエネルギーがネオ童実野シティを襲い、凄まじい天変地異を起こして地盤を真っ二つにするものだった。

「では、これは不動博士がやったことなのか？」

千冬は尋ねるが、アキは首を横に振って言う。

「違うわ。遊星のお父様はモーメントが暴走することをいち早く知り、実験を中止するように進言したの。だけど……」

「不動博士の助手の……後の俺達の敵になるダーク・シグナーのリーダー、ルドガー・ゴドウィンが暴走させたんだよ」

龍亞が繋いで話し、箒達はある単語に疑問を抱く。

「ダーク・シグナーとは、何だ？」

箒が聞くと、ジャック達は右腕の赤き竜の痣を見せる。

「私達、赤き竜に選ばれた戦士の『シグナー』と敵対する邪神に選ばれた戦士が『ダーク・シグナー』です」

龍可が説明するが今一理解ができず、クロウは次の映像を見せた。

それはダーク・シグナーの切り札である七体の邪神『地縛神』だった。

巨人の『地縛神 C c a p a c A p u』。

ハチドリ『地縛神 A s l l a p i s c u』。

トカゲの『地縛神 C c a r a y h u a』。

蜘蛛の『地縛神 Uru』。

猿の『地縛神 Cusillu』。

鯨の『地縛神 Chacu Chalhua』。

コンドルの『地縛神 Wiraqocha Rasca』。

箒達は不気味で邪悪な地縛神の姿に当てられ、気分が悪くなった。

クロウはすぐに地縛神の映像を切り、ジャックが再び話す。

「ダーク・シグナーの目的は冥界の王を現世に呼び出し、死者の世界を作ることだった。遊星と俺達シグナーはダーク・シグナーと命を懸けた戦いに勝利し、邪神と冥界の王から世界を救ったんだ」

「えっ!? ちょっと待ってください!」

「もしかして、龍亞と龍可も、そのダーク・シグナーと戦ったの!」

セシリアと鈴音は声を上げた。

「うん。まあ、凄く怖かったけど……龍可を絶対に守るのが俺の誓いだからね」

「私は龍亞が側に居てくれたから戦うことができたの」

幼いながら命を懸けた戦いを経験し、強い心を持つ龍亞と龍可にセ

シリアと鈴音のみならず、他のみんなも啞然とする。

「話を戻すぞ。それから俺達は過去の歴史を改ざんし、数百年後の未来に訪れる、人類破滅を変えようとする未来人『ゾーン』と戦うことになった」

クロウはネオ童実野シティ上空に現れた『アーク・クレイドル』を映した。

「アーク・クレイドルはネオ童実野シティの破滅の未来の姿だったんだ。ゾーンはこれをネオ童実野シティに衝突させて、ネオ童実野シティを消滅させることによって破滅の未来を回避しようとしたんだ」

「ちょっと、待って。そもそも、何でネオ童実野シティに破滅の未来が訪れてしまったの？」

「そして、ネオ童実野シティを消滅させることで破滅の未来を回避することと、どんな関係があるのだ？」

シャルロットとラウラの質問はもっともであり、アキはあるモノを見せる。

「それはね、これが原因の一つなのよ」

それはブラック・ローズ・ドラゴンのカードだった。

「進化の証であるシンクロモンスターはモーメントの回転数を上げて、未来の世界は急速に進化したの。だけど、人々の負の感情によってモーメントが暴走し、意志を持ったネットワークは地球滅亡を

救うために人類を排除に乗り出したの。それから、ネットワークは自滅の道を選んだ。世界中で爆発が起こり、人類は破滅した……」

アキは心が沈むと自分の右手を握り、胸の前に置く。

「ゾーンはその破滅した世界の生き残りの一人だったんだ」

「未来の世界と人類を救うために、過去や私達の時代に刺客を送り、ネオ童実野シティを消滅させようとしたんです」

龍亞と龍可がゾーンの話をあらかじめ終わりにする。

「そして、ゾーンが操る最強にして無敵のモンスターが『時戒神』だ。織斑先生、一つ頼みがある」

ジャックは千冬を真剣な瞳をして見る。

「何だ？」

「俺達シグナー全員の出撃を許可して貰いたい。天魔時戒神を倒し、遊星と一夏を必ず救い出す！」

ジャック、アキ、クロウ、龍亞、龍可は戦いの場へ赴くための覚悟を決めた瞳と表情をする。

千冬は臉をゆっくりと閉じ、ため息をつく。

「……今から準備を完璧にこなしてから行け。そして、無茶はするな。ダメだと判断したらすぐに撤退しろ。わかったな？」

ジャック達は同時に頷き、大座敷を出てすぐに準備に取りかかる。

箒達もその後を追い、大座敷には千冬と束が残る。

「どうした、束？」

束は千冬の膝に頭を乗せて膝枕をしてもらい、そのまま寝っ転がる。

「んー？　ちょっとね。不動博士に会ってみたいかな？　と思っ
ね……」

「理由を聞いても良いか？」

「うん。モーメントってね、凄く面白いんだよ。モーメントを動かすために必要不可欠な『遊星粒子』が特にね」

「遊星、粒子？」

「龍亞君と龍可ちゃんから聞いたんだけどね。遊星君の名前の由来になっているんだよ。遊星粒子は粒子と粒子を結びつける不思議が働きを持っているの。そして、遊星って名前は『他人同士を結びつけ、絆を大切にして欲しい』と言う願いが込められているんだよ」

「確かに、遊星は絆を特に大切にしていたな」

「うん。私はね、不動博士と話してみたかったな……モーメントや遊星粒子について語り合ってみたかったな……きつと面白い発見ができたと思うから」

束は珍しく残念な表情を浮かべて顔を千冬の方に向ける。

「そうか……」

千冬は束の髪を撫で、一夏の身を案じる。

（一夏、必ず帰ってこい……大切なお前を失うわけにはいかない……）

第39話 出撃、チーム5D、s!!! (前書き)

ふいー……大変だった。

(。▽。；)

今回、ちょっとだけですけど、皆さんお待ちかねのあの人の登場ですー!!

そして、謎の少女の登場です!

第39話 出撃、チーム5D's!!!!

夕暮れが近づき、ジャック、アキ、クロウ、龍亞、龍可は砂浜でI Sの最終調整を終えて立っていた。

「よし、みんな。準備はいいな？」

ジャックが全員に確認すると、アキ達は頷く。

I Sを構えて起動させようとする。

「待ってくれ！」

振り返るとI Sスーツを着た箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラがいた。

「私達も一緒に行かせてくれ！ 一夏と遊星、デブリ・ドラゴンとジャンク・シンクロンを助けたい!!！」

「だが、お前達は織斑先生に許可して貰っていないはずだ。それに、これは命を懸けた戦い。下手したら、死ぬかもしれないんだぞ？」

ジャックはいつもより厳しい表情を浮かべて箒達を見る。

「そんなことは百も承知だ！ 一夏達を助けるための戦う覚悟はこの胸に秘めている!!！」

「たとえどんな困難が待ち受けていようと、私達は前に進みますわ！ 一夏さん達を助ける為なら、なおのことですわ!!！」

「誰が止めても私達はそれを振り切る！ 私達の湧き上がる強い思いは止まらないわ！！」

「これ以上、僕の大切な人を死なせたくない。何が何でも一夏とお父さんを助けたい！！」

「私は死ぬことを恐れてはいない。だが、私の初めてできた大切な人達を失うのは一番怖い……だから戦う！ そして、絶対にみんなで勝つ！！」

箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラはそれぞれの思いを打ち明けて自身の強い覚悟を示した。

そこまで言われてしまったのは、ジャックも来るなどとは言えなくなる。

「……仕方ないな。みんなもそれでいいな？」

アキ、クロウ、龍亞、龍可は笑みを浮かべて頷く。

「よし。では、チーム5D、s……出撃だ！」

ジャックが腕を上げて堂々と言うが、箒達は疑問に思う。

「「「「チーム5D、sって……何？」「」「」」」」

ズドン！

ジャックは思いつきりずっこけ、すぐに復活する。

「チーム5D'sとは、赤き竜の痣によって導かれた俺達シグナーから俺が名付けたんだ!」

「でも……赤き竜の痣は確か6つあるよね?　つまり、シグナーは6人だよね?」

シャルロットが言うと、ジャックの表情は歪み、汗を大量に流す。

「そ、それは……」

「あー、実は俺の所為なんだよね……」

龍亞が苦笑いをして言う。

「「「「龍亞の所為?」」」」」

「元々赤き竜の痣は5つでシグナーは俺以外の五人だったんだけど……アーク・クレイドルの戦いで、赤き竜が『ドラゴンズ・ハート』の痣を俺にくれて、6人目のシグナーになったんだ」

「それじゃあ、チーム名が無効になるじゃない」

鈴音が半分呆れながら言うと、遂にジャックがキレた。

「ええい!　黙れ黙れ!!　龍亞と龍可は二人で一人分と初めから決まっていたんだ!　文句は言わせんぞ!!」

すると、セシリアとラウラが提案をする。

「なら、思い切ってここはチーム名を変えたら宜しいんじゃないで

すか？」

「いっそのこと、私達もチームに入れてもらおう！ 一夏も加えて総勢12人だ！」

「勝手なことをするなああああああつ！！！」

「うるさいわよ、ジャック！ そんなのはどうでもいいでしょう！
ヘイト・ローズ・ウィップ！」

「ま、待つんだ、アキ！ それだけは……ギャアアアアアアアアアアッ！！！」

ジャックの怒号が木霊するが、アキが大人しくさせるためにローズ・ウィップを呼び出して制裁を加え……ようやく出撃となるのだった。

「燃え上がれ、紅蓮王！ デモンズ・フォルム！ 我が魂、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！！」

ジャックのIS『紅蓮王』は悪魔の姿をした竜、レッド・デーモンズ・ドラゴンとなる。

両腕には、地獄の業火を纏い、全てを破壊する凶悪な手甲『デモン・アームズ』が装備されている。

「行くわよ、ブレイブ・ローズ！ ローズ・フォルム！ 咲き乱れよ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！！！」

ブレイブ・ローズはブラック・ローズ・ドラゴンの姿となり、アキに纏う。

「飛ばすぜ、ブラック・フェニックス！ B F・フォルム！ 舞い上がれ、『ブラックフェザー・ドラゴン』！！」

クロウのIS『ブラック・フェニックス』は鳥の姿をした竜、ブラックフェザー・ドラゴンとなる。

腰には二つの銃がぶら下がり、一つはオートマチック式拳銃に似た形をし、ボディに羽の模様が刻まれた白色の光線銃『シャイニング』。

もう一つは、ハンドキャノンに似た形をした、黒色のリボルバー式拳銃『ダークネス』。

「行くぞ、ホープ・ヒーロー！ ディフォマー・フォルム！ 愛と正義の使者、『パワー・ツール・ドラゴン』！！」

龍亞のホープ・ヒーローは左腕に電動式のマイナスドライバー『パワー・ドライバー』、右腕には青色のシヨベル『パワー・シヨベル』を装着した機械の竜、パワー・ツール・ドラゴンの姿となる。

「お願い、フェアリー・ガーディアン！ フェアリー・フォルム！ 降誕せよ、『エンシエント・フェアリー・ドラゴン』！！」

龍可のフェアリー・ガーディアンは妖精『エンシエント・フェアリー・ドラゴン』の姿となる。

龍可の手には、美しい羽毛で作られた羽毛扇『フェアリー・フェザー』が握られていた。

そして、箒達もISを起動させて纏う。

「行くぞ、紅椿！」

「参りますわ、ブルー・ティアーズ！」

「派手に暴れるわよ、甲龍！」

「行こう、リヴァイヴ！」

「必ず勝つ、シュヴァルツェア・レーゲン！」

全員がISを身に纏い、空へと駆け上がると、天魔時戒神 ケテル
がいる場所まで高速で飛翔する。

同時刻、日本に向かって一つの影が海を切り裂き、風と共に駆け抜ける。

「遊星、みんな。今……君達の元へ行くから」

それは、群青色のアーマーを身につけたIS操縦者だった。

ざあ……。

ざああん……。

(ここは……?)

一夏は太陽が照りつける砂浜を歩いていた。

しかし、一夏一人だけではなかった。

《どこだよ、ここ?》

《さあ? わからん》

先程一夏と箒を身を挺して守ったジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンがいた。

一夏はこの場所が何処なのかわからず、何故か今の自分の格好は制服になっていた。

《ここってもしかして天国?》

《モンスターである俺達が天国に行くなら、間違いなく天使族がいる天空の聖域に行くだろう?》

《それもそうだな》

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンが話していると、何処からか歌声が聞こえた。

「――。――♪　　♪」

一夏達は当然無性に気になり、歌声の方へ足を進める。

「ラ、ラ♪　　ラララ♪」

波打ち際に、わずかにつま先を濡らしながら、白い髪をした少女は踊るように歌い、謡うように踊る。

一夏達は近くの流木に腰をかけ、少女の歌と踊りをぼーっと見つめた。

《あの子……一体、誰だろう?》

デブリ・ドラゴンは首を傾げる。

《あの少女……どこかで会った気がする……多分、何回も一緒に居たような……》

それに対して、ジャンク・シンクロンは初めて見たような感じは全くなかった。

(ふむ……)

そして、一夏はただぼんやりと目の前の光景を眺めた……。

・

第40話 戦闘開始！　そして、生還した仲間（前書き）

さあ、皆さん！

ついにお待たせしました！

ε||ゞ（*~▽~）ノ

チーム5D、Sの最後の欠片である彼の登場となります！

、（≡▽≡）／

第40話 戦闘開始！そして、生還した仲間

チーム5D、S十五人娘（仮）はケテルに向かって飛んでいた。

セシリア、鈴音、シャルロットは万全を期すため、チューナーズ・カードからチューナーモンスターを呼び出す。

「「シンクロフォルム！」」

チューニングを行い、それぞれのISが、ターボフォルム、ニトロフォルム、クイックフォルムとなる。

それから初めてシンクロフォルムを行うラウラは不安になりながらロード・シンクロンを呼び出す。

「行くぞ、ロード・シンクロン！」

《ああ、ラウラ！》

ロード・シンクロンは四つの星から輪となり、ラウラとシュヴァルツェア・レーゲンに纏う。

「シンクロフォルム！」

黒を主体としていた装甲の所々に黄金の装甲が構成され、背中にはマントに似た大剣が携え、シュヴァルツェア・レーゲン・ロードフォルムとなった。

それを見た箒はデブリ・ドラゴンのチューナーズ・カードを見る。

絵にはデブリ・ドラゴンのイラストが丸ごと無く、カードの輝きが無い。

（待っている、デブリ・ドラゴン。必ずお前を助ける！）

箒は決意を新たにチューナーズ・カードを仕舞う。

『来たか……』

海上数百メートルで漂っていたケテルは真っ直ぐにこちらに向かってくる複数の気配を感じ取り、闇の球体から悪魔の姿となる。

『数は……10機か。こちらでも全力でいかないと忽ちやられるな』

ケテルは翼を広げ、悪魔達を呼び出そうとする。

「行くぞ、セシリア」

「はいですわ、ラウラさん」

その瞬間、黄金に輝く弾丸と、青と赤と緑の三色に輝くレーザービームがケテルの頭部を捉えて撃ち、直撃する。

『グオッ！？』

突然の先制攻撃にケテルは顔に手を当ててバランスを若干崩した。

ラウラの両肩には、八十口径レールカノン『ブリッツ』を二門左右それぞれに装備され、四枚の物理シールドが左右と正面を守っている。

これが、砲戦パッケージ『パンツァー・カノニア』を装備したシユヴァルツェア・レーゲンである。

対するセシリアは、2メートル以上ある大型BTレーザーライフル『スターダスト・シューター』を持っており、頭部にはバイザー状の超高感度ハイパーセンサー『ブリリアント・クリアランス』が装着された、強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備している。

「ふむ、先制攻撃は良好」

「みなさん、お願いしますわ!」

ラウラとセシリアは遠距離からの後方支援で、他の近距離チームと中距離チームを援護する。

『図に乗るな!』

ケテルは召喚陣を無数に配置して悪魔を呼び出す。

「行くぜ、龍可、シャルロット!」

クロウは光線と弾丸の二丁拳銃、シャイニングとダークネスを両手

で構えて発砲する。

「はい！ みんなに守護の力を……フェアリー・ブレス！！」

龍可はフェアリー・フェザーを持って可愛らしく踊り、龍可以外の全員に風の守護壁を作り出した。

「うん！」

シャルロットのリヴァイヴ専用防御パッケージ『ガーデン・カーテン』は二枚ずつの実体シールドとエネルギーシールドで防御を高めており、防御と同時に攻撃を行えるようになり、四つの腕に巨大な銃を装備してケテルと悪魔の軍勢を狙い撃つ。

クロウ、龍可、シャルロットは中距離から近距離チームを援護し、遠距離チームに敵が来ないようにする。

そして、近距離でケテルと直接戦うのは、ジャック、アキ、龍亞、箒、鈴音である。

ジャンクは先陣を切って、悪魔の軍勢へ突撃し、両腕のデーモン・アームズに獄炎を纏い、悪魔の一体を殴りつける。

「喰らえ、アブソリュート・パワーフォース！！」

悪魔一体に全てを破壊する炎を包み込み、そのまま殴り飛ばされる。

「悪しき力を蹂躪せよ！！ デモン・メテオ！！！！」

悪魔一体を包み込んだアブソリュート・パワーフォースの炎が何十

倍にも増幅され、周囲にいた悪魔を一気に全て焼き尽くした。

ケテルの前にいた悪魔が全て消えたのを見計らい、アキは目を閉じて集中する。

（一気にケテルの力を削ぐ！）

「ブラック・ローズ・ガイル！！」

黒薔薇の16機のビットが舞い、ケテルを注意を引きつけて、ビームと炎の攻撃が顔に集中する。

『くっ！ 小癩な！！』

「ぶっ飛べ！！」

龍咆が火を噴き、ケテルの右足に直撃して爆発して弾け飛ぶ。

鈴音の甲龍は機能増幅パッケージ『崩山』により、両肩の衝撃砲が四つに増え、不可視の弾丸から赤い炎を纏った弾丸となり、破壊力が格段に上がっている。

「クラフティ・ブレイク！！」

それと同時に龍亞が左腕のパワー・ドライバーでケテルの左足を打ち砕く。

『くっ、餓鬼共が！！』

ケテルは苦痛に顔を歪ませる。

「はああああああああああっ!!」

その隙に箒は雨月と空裂でケテルの心臓の前の肉を切り裂いた。

「今だ!!」

ジャックは右腕をケテルの体に突っ込んで、心臓の代わりをしていた銀の福音を引き抜いた。

引き抜いた銀の福音はすぐに待機状態となり、眠りについた。

『ぐああああああっ！ 我の、我の心臓があああああああっ!!』

ケテルの無くなった心臓の辺りから力が漏れ出していく。

「さあ、とつとと遊星達を返すんだ！」

「もし、一夏とデブリ・ドラゴンとジャンク・シンクロンが無事じゃなかったら貴様を容赦なく消し去る！」

ジャンクと箒はケテルを脅し、アキ達は武器を構えていつでも攻撃出来るようにする。

『俺様の同朋をそう簡単には殺させねえよ』

ケテルの後ろに巨大な召喚陣が現れ、その中から衝撃波が放たれ、ジャック達に襲いかかる。

召喚陣から出て来たのは、赤色のマントを羽織り、鎧を身に纏った青色の悪魔だった。

『お前は……ケセド！』

『助けに来たぞ、ケテル。ほら、こいつを使え。心臓の代わりだ』

ケセドはかなり大きいダイヤモンドとサファイアをケテルの心臓の辺りに埋め込んで、失った銀の福音の代わりにした。

『感謝する……ケセド』

『ああ。さてと……始めましてだな。俺様は天魔時戒神の一柱、ケセド。そして、さようならだ』

新たに現れたもう一体の天魔時戒神 ケセドは様々な波動の形をした衝撃波を放ち、再びジャック達に襲いかかり、全員吹き飛ばす。

「私の仲間を——よくも！」

何とか1人だけ衝撃波を回避した箒は急加速してケセドに接近し、続けざまに斬撃を放ち続ける。

『馬鹿が。小娘一人が天魔時戒神に刃向かうなど片腹痛い』

「ぐあっ！！」

衝撃波が箒に集中して降り注ぎ、体中に激痛が走り、強い衝撃波に耐えられなくなった箒の髪を縛っていたリボンは弾け飛び、長い髪が重力によって下ろされる。

ケセドは鎖を取り出して箒を縛り上げる。

『さてと、これでケテルの一機を含めて二機目か』

「そんなことはさせるか！ 全員で箒を奪還するんだ！！」

ジャックが指示し、全員でケセドへ向かって攻撃を行おうとする。

『いいだろう。次はお前達の番だ。ケテルも手伝え』

『ああ』

ケテルとケセドは共闘し、迎え撃とうとする。

二つの勢力の力がぶつかり合うその時。

一陣の風が吹いた。

「マシンナイズ・スラッシュー！」

突然、何者かの手によって、ケセドの腕を切り落とされ、解放された箒は鎖から抜け出して、みんなの居るところまで下がる。

そして、ケセドの腕を切り落とした者はジャック達の前に現れた。

その者は緑色の剣闘士の鎧を身に纏い、両刃の斧を持っており、ピンク色の透明なサングラスを付けていた。

「……久しぶりだね。ジャック、アキ、クロウ、龍亞、龍可」

若干高い声でジャック達の名前を呼び、サングラスを取り、その素顔が見えるようになる。

ジャック達は目の前にいる者がこの場にいることを信じられず、まるで夢を見ているような気分だった。

ジャック達は同時に名前を呼んだ。

「「「「ブルーノ」」」」

彼は……チーム5D'sのスーパーメカニックで遊星達の大切な仲間
の1人、ブルーノである。

「また会えて嬉しいよ……もう一度、君達の仲間として共に戦うよ」

第41話 再会と砂浜の決意（前書き）

今日は遊戯王5D's最終回!!!

遊星VSジャックの決着はどうか？

そして、それぞれの未来は！

頑張って今日中にもう一回更新出来るようにします！

第41話 再会と砂浜の決意

チーム5D、Sの最後の1人、ブルーノがジャック達の前に現れた。

ブルーノはサングラスをかけ直すと、アキを見る。

「アキ、君の持っている遊星のISを私に貸してくれ」

「遊星の……？」

アキは預かっていた星竜を取り出す。

「今から私が遊星と織斑一夏を救出しに行く。その間、君達はここで天魔時戒神をここで食い止めて欲しい。頼む」

「……わかったわ、遊星をお願い。ブルーノ」

アキは願いを込めて、ブルーノに星竜を託す。

「ああ、任せてくれ」

「あ、あの！」

箒が緊張した面持ちでブルーノを見る。

「先程は私を助けてくれてありがとうございます。それから……」

そして、深く頭を下げた。

「一夏を……一夏をお願いします」

セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラもそれに続いて頭を下げる。

ブルーノは微笑みを浮かべて頷く。

「……大丈夫。必ず君達の大切な人を連れてくる。だから、ここは頼んだよ」

「「「「はい!!」」」」」

「それじゃあ、行くよ。パワー・グラディエイター!」

《応! 俺はいつでも準備オーケーだぜ!》

ブルーノは加速し、遊星と一夏が捕らえられた場所に僅かな空間の裂け目があるのを発見する。

「あそこか!」

ブルーノはフルパワーでスピードを極限まで上げ、空間の裂け目へ突入しブルーノの姿が消えた。

「ここか……」

ブルーノがたどり着いたのは『狭間の牢獄』だった。

狭間の牢獄は、空間と空間の間に生まれた場所で、この場所自体が歪みきった空間である。

そんな場所に悪魔が埋め尽くされるようにいるが、一カ所だけ広く開いているスペースがあった。

それは、悪魔の鎖に繋がれた遊星と一夏だったが、遊星の赤き竜の痣が結界を作り出して悪魔を近づけさせないようにしている。

「遊星……バックアップ、『TG カタパルト・ドラゴン』！
TG ジェット・ファルコン』！」

ブルーノの前に、頭に発射台が合体した竜と、体に戦闘機が合体した鳥が現れた。

「イコライザ、『バスター・ショットマン』！」

更に、青色に輝くロボットが現れると、変形して巨大なキャノン砲となり、ブルーノは強靱な斧『パワー・アックス』を仕舞い、代わりにバスター・ショットマンを構える。

「GO!!」

ブルーノの合図にカタパルト・ドラゴンとジェット・ファルコンが動く。

《オラオラオラ!! ぶっ飛ばされたい奴は前に出やがれ!》

カタパルト・ドラゴンは頭のカタパルトで悪魔を殴り飛ばす。

《吹き飛びなさい!》

ジェット・ファルコンは羽を羽ばたいて竜巻を作り出し、悪魔を吹き飛ばす。

悪魔がある程度固まると、ブルーノはバスター・ショットマンを構成え、引き金を引く。

「バスター・ショット!!」

キャノン砲が発射され、悪魔が一気に全滅する。

バスター・ショットマンを解除し、ブルーノは遊星と一夏の元へ行く。

パワー・アックスで鎖を断ち切り、二人をゆっくりと地面に寝かせる。

「遊星! 遊星!!」

ブルーノが必死に遊星の名前を呼ぶと、遊星はゆっくりと目覚める。

「ん……んう……ブルーノ?」

遊星は起き上がってブルーノを見ると、手で目を擦り、もう一度よく見る。

「ブルーノ……お前、なのか?」

未だに信じられない遊星にブルーノは遊星の手を取って握りしめる。

「そうだよ。僕は君達の……チーム5D'sのブルーノだ。やっと、君に会えた……」

ブルーノは涙を浮かべ、釣られて遊星も涙を浮かべる。

「ブルーノ……よかった……お前が生きてて……」

再会を喜び合う二人。

すると、周囲に白い光の粒子が現れ、遊星とブルーノはその粒子が出ている元を見る。

「一夏……?」

一夏はケテルの攻撃で体中に大怪我を負っている。

しかし、一夏を守るように白い光の粒子が優しく包んでいた。

「一夏!」

「待つんだ、遊星。彼は今、新たな進化を迎えようとしている」

「新たな進化……?」

「そうだ。そして君も、新たな進化を迎える時なんだ」

ブルーノはアキから託された星竜を遊星に渡す。

「一夏……」

遊星は星竜を握りしめ、ブルーノと共に一夏を見守る。

ざあ、ざあん……。

さざ波の音を聞きながら、一夏とジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンは飽きもせず、に女の子を眺めていた。

ところが、ふと気がつく、少女の歌は終わっていた。

踊りも止めて、少女はじいっと空を見つめている。

一夏達は不思議に思い、座っていた木から離れて少女の隣へ向かう。

「どうかしたのか？」

一夏は声をかけるが、少女はまだじいっと空を見つめたまま動かない。

なんとなく空を眺めると、ふと少女の声が耳に届いた。

「呼んでる……行かなきゃ」

「え？」

一人と二体は視線を戻すと、もうそこに少女の姿はなかった。

(……あれ?)

《どこにいった?》

《居なくなった?》

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンもキョロキョロと周りを見渡す。

「力を欲しますか……?」

「え……」

急いで振り向くと、波の中——膝下までを海に沈めた女性が立っていた。

その姿は白く輝く甲冑を身に纏った騎士さながらの格好だった。

大きな剣は自らの前に立て、その上に両手を預けている。

その顔は目を覆うガードに隠されて、下半分にしか見えない。

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンは警戒して一夏の前に立つ。

「力を欲しますか……？ 何のために……」

「ん？ んー……難しいことを訊くなあ……そうだな。友達を——いや、仲間を守るためかな」

「仲間を……」

「仲間をな。なんていうか、世の中って結構色々戦わないといけないだろ？ 単純な腕力だけじゃなくて、色んなことでさ」

一夏は自分の秘めた思いを饒舌に喋る。

「そういうときに、ほら、不条理なことってあるだろ。道理のない暴力って結構多いぜ。そういうのから、できるだけ仲間を助けたいと思う。この世界で一緒に戦う——仲間を」

「……あなた達は どうしてですか？」

騎士は一夏からジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンに視線を向けて訊く。

《俺は……俺達を繋いでいる絆を守りたいんだ。マスターはもちろん、同朋や一夏、その周りの人達の絆を守りたい》

《俺もジャンク・シンクロンと同じ気持ちだ。絆を守ることはマスターの教えだからな。それから、俺は箒が大好きなんだ。その箒の周りにいる人や、箒の一番好きな人を守りたい》

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンも自分の理由を答えると、

騎士は納得したように笑みを浮かべて頷いた。

すると、一夏はデブリ・ドラゴンの言葉に凄く気になるところがあった。

「えっと、箒の一番大好きな人……って……？」

《……誰がお前みたいな鈍感野郎に教えるかよ、バーカ。自分で考えろ》

デブリ・ドラゴンは呆れながら一夏を蹴飛ばす。

「えっ、ちょっ!？」

「ふふふ。ねえ、早く行こう」

後ろから声をかけられると、白いワンピースの女の子が立っていた。人懐っこい笑みで一夏の手を取る。

「ほら、ね？」

少女はにこりと微笑み、一夏は頷く。

「ああ」

すると、この世界が眩いほどに輝きを放ち始める。

「な、なんだ？」

真っ白な光に抱かれて、まるで夢の終わりのように目の前の光景が徐々にぼやけていき、この世界から一夏は消えた。

デブリ・ドラゴンもそれに続き、最後にジャンク・シンクロンは騎士を見ると、頭を下げて一言を送る。

《ありがとう。それから、またな……》

ジャンク・シンクロンもこの世界から消える。

《白騎士》

第42話 新たな進化と13人の絆の力（前書き）

遊戯王5D、S最終回！

いやー、熱かった！

遊星VSジャックは心が熱くなりました！

シューティング・スターとスカーレット・ノヴァの殴り合いはぐつとききました！

、(≡▽≡)／

ラストアタックのジャンク・ウォリアーは驚喜ものでした！

俺のエース……！！

ε||ゞ(※~▽~)ノ

遊星とアキの手を握ったところはドキドキしました！

(※≡m≡※)

もう、お願いだから結婚して！

(☆▽☆)

龍亜の大人版、マジカッコイイ！

龍可ちゃんは超可愛い……！！

今度は新作のゼアルを期待しています！

※一夏達のチーム名を募集しています。

チーム5D'sとは別のを考えたいと思ひまして。

ぜひお願いします。

第42話 新たな進化と13人の絆の力

一夏を包んでいる白い光の粒子が眩いほどに輝きを放ち、一夏が負っていた怪我が瞬く間に治した。

すると、次の瞬間には一夏の体に白式を纏っていた。

だが、白式はいつもの姿ではなかった。

左手に多機能武装腕『雪羅』が発現し、大型化した四機のウイングスラスターが備わっていた。

一夏はゆっくりと目を開き、変化した白式に驚いている。

「これは……」

一夏の前に映像が現れ、その姿の名前が映し出される。

『白式第二形態・雪羅』

「雪羅……」

一夏は左手を握って離し、感触を掴もうとする。

（ワンピースの女の子と騎士の人がくれた力か……？　そういえば、誰かに似ていたような……）

「一夏！」

「遊星……って、ここはどこ!?　そして、あなたは誰!?!」

「僕はブルーノだ。さあ、織斑一夏が進化は完了した。次は遊星の番だ!　TG　カタパルト・ドラゴンに、TG　ジェット・ファルコンをチューニング!」

ジェット・ファルコンは三つの星から輪となり、カタパルト・ドラゴンに纏い、周囲に様々なデータの画像が現れる。

「リミッター解放、レベル5!　ブースターランチ、OK!　インクリネイション、OK!　グランドサポート、オールクリア!　G
O!　シンクロ召喚!　カモン、『TG　ワンダー・マジシャン』
!?!」

光の柱となり、中から魔術師、ワンダー・マジシャンが現れる。

「遊星、今こそ君のISを『アクセルシンクロ』で進化させるんだ」

「アクセルシンクロで……わかった!　行くぞ、『スターダスト・ドラゴン』!?!」

星竜を起動させ、スターダスト・ドラゴンの姿となる。

《ISでのアクセルシンクロか……久々に俺の魂が輝く!》

スターダスト・ドラゴンのやる気は充分である。

「バックアップ、『ロード・ランナー』!　『アンノウン・シンクロン』!」

遊星はロード・ランナーと不思議な姿をした球体、アンノウン・シンクロンを呼び出す。

「ロード・ランナーに、アンノウン・シンクロンをチューニング！」
アンノウン・シンクロンは一つの星から輪となり、ロード・ランナーに纏い、光の柱となる。

「集いし願いが新たな速度の地平へいざなう。光さす道となれ！」
シンクロ召喚！ 希望の力、シンクロチューナー、『フォーミュラ・シンクロン』！！」

光の柱からフォーミュラの姿をしたロボット、フォーミュラ・シンクロンが現れる。

「一夏！ 俺とブルーノに付いて来い！ 俺達がアクセルシンクロでこの空間に風穴を開ける。そしたら、箒達の元へ戻るんだ！！」

「わかった！ 頼むぜ！！」

遊星とブルーノが先行して走り、限界を超えたスピードの先へ見える揺るぎない境地『クリアマインド』を掴む。

「クリアマインド！ スターダスト・ドラゴンに、フォーミュラ・シンクロンをチューニング！」

フォーミュラ・シンクロンは二つの星から輪となる。

「クリアマインド！ TG パワー・グレイエイターに、TG ワンダー・マジシャンをチューニング！」

ワンダー・マジシャンは五つの星から輪となる。

遊星とブルーノはそれぞれの輪の中に突入して、そこから更に加速させる。

（は、速すぎる！！　これが遊星とブルーノのスピードの世界なのか！？）

一夏は白式・雪羅のマックススピードでようやく遊星とブルーノに追いついている状態である。

遊星は白地のカードを右手の指に挟んで持つ。

（俺は……みんなと、この世界で繋がれた絆の仲間達のために進化する！！！）

「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く。光さす道となれ！」

「リミッター解放レベル10！　メイン・バスブースター・コントロール、オールクリア！　無限の力、今ここに解き放ち、次元の彼方へ突き進め！」

遊星とブルーノは二人だけが持つスピードの先にある究極の進化の力を具現させる。

「アクセルシンクロ!!」

白地のカードにイラストとテキストが刻まれ、粒子となって星竜の中に入る。

「GO! アクセルシンクロ!!」

その瞬間、二人の姿は消え、狭間の牢獄に大きな風穴が開かれ、一夏は狭間の牢獄から脱出する。

ジャック達は遊星達が来るまで、ブルーノに言われた通りにケテルとケセドを食い止めていた。

すると、突然空間が揺れ動き、三つの光が現れる。

「生来せよ、『シューティング・スター・ドラゴン』!!!!」

遊星は自身の最強エースモンスター、体中が白銀に輝いて星の粒子を放出する竜、シューティング・スター・ドラゴンとなる。

「カモン、『TG ブレード・ガンナー』!!!!」

ブルーノは緑色の装甲に包まれた機械の戦士、ブレード・ガンナーとなる。

遊星とブルーノは二体の天魔時戒神に突然して吹き飛ばし、みんなの所へ戻る。

そして、最後の一人、一夏は真っ先に箒の元へ向かった。

「一夏っ、一夏なのだな!?! 体は、傷はっ……!」

「おう。待たせたな」

「よかつ……よかつた……本当に……」

「なんだよ、泣いているのか?」

「な、泣いてなどいないっ!」

ぐしぐしと目元を拭う箒に、一夏は優しく頭を撫でてやる。

「心配かけたな。もう大丈夫だ」

「し、心配してなどっ……」

「じゃあ、こいつは？」

一夏が言うと、雪羅からジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンが現れる。

「デブリ・ドラゴン！」

《箒！》

デブリ・ドラゴンは箒に抱きついた。

「お前も無事だったのだな……よかった」

《箒、泣いてる……一夏！！》

デブリ・ドラゴンは一夏を睨みつけた。

「な、何だよ！？」

《箒を泣かせたな……責任を取れ、責任を！！》

「はぁ！？」

《それは後でいいから、さっさとチューニングするぞ》

ジャンク・シンクロンが言うと、デブリ・ドラゴンが頷き、三つと四つの輪となって、雪羅と紅椿に纏う。

「「シンクロフォルム!!」」

雪羅・ジャンクフォルム、紅椿・スターダスト・フォルムとなる。

それを見た龍亞はテンションが上がり、ジャックに話しかける。

「よっしゃあ！ ジャック、俺達も!!」

「そうだな！ 行くぞ、龍亞！ 先にお前からだ！」

「うん、バックアップ！ D・ライトン！ パワー・ツール・ドラゴンにD・ライトンをチューニング!!」

懐中電灯のロボット、ライトンが現れ、一つの星から輪となり、龍亞がその中に入る。

「世界の未来を守るため、勇気と力がレヴオリュション！ シンクロフォルム！ 進化せよ、『ライフ・ストリーム・ドラゴン』！」

パワー・ツール・ドラゴンの装甲が弾け飛び、真の姿である、ライフ・ストリーム・ドラゴンとなる。

「ライフ・ストリーム・ドラゴンの特殊能力、ライフ・エナジー・バーストで味方全員のシールドエネルギーを回復させる!!」

ライフ・ストリーム・ドラゴンの翼から金色の光が溢れ、全員の消費したシールドエネルギーを回復させる。

ジャックは心臓の辺りを右拳で強く叩き、体から赤色の闘志が湧き上がる。

「荒ぶる魂、バーニングソウル！ バックアップ！ 『ダーク・リゾネーター』！ 『バリア・リゾネーター』！」

音叉を持った二体の悪魔、ダーク・リゾネーターとバリア・リゾネーターが現れる。

「レッド・デーモンズ・ドラゴンにダーク・リゾネーターとバリア・リゾネーターをダブルチューニング！」

ダーク・リゾネーターとバリア・リゾネーターは四つの炎の輪となり、ジャックが中に入ると、炎の輪が高速で回りだし、炎に包まれる。

「王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ！ 天地創造の叫びを上げよ。シンクロフォルム！ 出でよ、『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』！！！」

炎から出て来たジャックは、最強の力、真紅に燃え上がる灼熱の竜、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンとなる。

遊星達チーム5D'sと一夏達全員が揃うと、ケテルとケセドは圧倒される。

『馬鹿な……我ら天魔時戒神が……』

『たかが人間ごときに追いつめられている！？』

ケテルとケセドは目の前で起きた現実を信じられなかった。

遊星はみんなの前に出ると、天魔時戒神を指差さす。

「見たか、天魔時戒神。これが俺達の絆の力だ！ たとえお前達がどれほど強大な力を持とうとも、俺達は絶対に負けない！！」

そして、天魔時戒神のケテルとケセドとの最後の決着の時となる。

第43話 乗り越えた戦いの終幕（前書き）

IS 最終回は原作通りな感じでとりあえず納得して満足しました！

特にラストの一夏×箒が！

早くあそこのシーンを書きたいです。

もちろん、俺好みに仕上げます（笑）

この小説のヒロインは箒ちゃんとアキちゃんなのです！！

第43話 乗り越えた戦いの終幕

「一夏、ケテルはお前達に任せる。ケセドは俺達が倒す！」

「わかった、任せろ！」

一夏、箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラは天魔時戒神ケテルを相手にする。

「行くぞ、箒！」

「ああ！」

『来させるか!!！』

ケテルは大量の悪魔を召喚して行く手を阻むが、今の一夏達の敵ではない！

セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラが援護し、一夏と箒がケテルを討つ。

「うおおおおっ！」

一夏は右手の雪片式型と左手の雪羅から零落白夜の光刃を作り出して悪魔達を次々と倒して突入する。

（一夏が来てくれた……!!）

箒は一夏が来てくれたことに嬉しさを飛び越え、心が跳動する。

戦う一夏の姿を見て、何よりも強く願った。

（私は、ともに戦いたい。あの背中を守りたい！）

強く、強く願った。

そして、その願いに応えるように、紅椿の展開装甲から赤い光に混じって黄金の粒子が溢れ出す。

「これは……！？」

《紅椿のエネルギーが限界を越えて溢れるほどに回復している……
箒、一夏の雪羅にエネルギーを渡すんだ！ そうすれば、雪羅は真の力を発揮できる！》

それこそが、紅椿のワンオフ・アビリティー、『絢爛舞踏』である。

（ならば、行くぞ！ 紅椿！ デブリ・ドラゴン！！）

《応！》

箒は悪魔を切り裂きながら一夏の元へ向かう。

そして、デブリ・ドラゴンは呟いた。

《一夏を誰よりも想う箒の強き願いか……一夏、本当に箒を泣かせるような事をしたら許さないからな》

一方、一夏は進化した白式・雪羅で善戦していたが、それが急に転落する事態へ陥る。

（ヤバい！ さっき龍亞に回復してもらったのにもうエネルギー残量が半分以上！？）

《一夏の馬鹿者！ 雪羅は白式の時よりエネルギー消費が激しくて、燃費が悪いと言っただろ！？ 俺の調律にも限界があるぞ！》

「一夏！ 受け取れ！」

「箒！？」

一夏が困っていた時、箒は白式に触れた。

その瞬間、一夏の全身に電流のような衝撃と炎のような熱が走り、一度視界が大きく揺れた。

「な、なんだ……？ エネルギーが——回復！？ 箒、これは——」

「今は考えるな！ 行くぞ、一夏！」

「お、おう！」

一夏と箒は悪魔の軍勢をくぐり抜け、ケテルを追い詰める。

『こんな事が……こんな事が許されてたまるか!』

ケセドは衝撃波を全方位に放つと、龍亞は両手両足と翼を大きく広げて前に出る。

「ライフ・ストリーム・フィールド!!」

ライフ・ストリーム・ドラゴンから金色の光がケセドの衝撃波を包み込んで打ち消した。

そして、左腕の『ライフ・ハルバード』に命の息吹のエネルギーを込めて放出する。

「ライフ・イズ・ビューティーホール!!」

『何だと!?　ぐあっ!!』

ケセドは龍亞の隙を突かれた攻撃に混乱し始め、精神が不安定になる。

「アキ、龍可、すまねえが少し時間を稼いでくれ!」

クロウはシャイニングとダークネスの二つの銃を一つに融合させる。
アキはローズ・ソードを構え、龍可はフェアリー・フェザーを構える。

「わかったわ！」

「うん！」

二人はケテルに近づき、アキはローズ・ソードに炎を纏わせ、体を一回転して舞うように振るう。

「ブラック・ローズ・フレア！」

龍可はフェアリー・フェザーを掲げ、妖精の羽根を広げて光の力を吸収して一気に放出する。

「エターナル・サンシャイン！！」

漆黒の炎と聖なる光がケセドを包むように攻撃する。

『ぐおおおおっ！！』

ケセドはなんとか抜け出したが、鎧が粉碎してしまった。

すると、ケセドは背後に寒気を感じ取り、振り向くと夕日に隠れたクロウがいた。

夕日の光でケセドの目が一瞬やられる。

「行くぜ、カオス・フェニックス!!」

光線銃と実弾銃を一つに合体させた巨大な銃、カオス・フェニックスにブラックフェザー・ドラゴンの闇のエネルギーを込め、実弾を光線に乗せて発射する。

「ノーブル・ストリーム!!」

闇のエネルギーがケセドに直撃すると同時に大爆発が起きた。

『こうなったら……ケテル!』

大爆発の煙の中から出てきたケセドはケテルに呼びかけ、二体の天魔時戒神は体から光を発した。

『貴様等を全員地獄へ道連れにしてくれる!』

『覚悟しろ、今からじゃ逃げられないぞ!』

「遊星! あいつらは自爆して私達ごと葬り去るつもりだ!」

「そんなことはさせない! シューティング・スター・ドラゴンの特殊能力とスキルエフェクト『エフェクト・ヴェーラー』を発動!」

《エフェクト・インバリッド!》

シューティング・スター・ドラゴンとエフェクト・ヴェーラーは光弾をケテルとケセドにぶつけ、自爆を無効にした。

その隙にブルーノは銃剣『ブレード・ガン』で天魔時戒神を撃ち抜

く。

「ブレード・シュート!!」

ケテルとケセドの心臓に弾丸を撃ち込んで天魔時戒神の力をほぼ無力にする。

「遊星、ジャック、一夏、箒、最後を決めるんだ!!」

「行くぞ、ジャック!」

「ああ、遊星!」

遊星は右手を上にかざす。

「スターソード・シューティング!!」

遊星の右手に現れた新たなスターソードは流星のような輝きを放つ剣へと進化した。

ジャックは両手の拳を強くぶつける。

「デーモンアームズ・スカーレット!!」

デーモンアームズは緋色に燃え上がり、紅蓮の如く煌めいた。

「バーニング・ソウル!!!」

「スターダスト・ミラージュ!!!」

ジャックの体は紅蓮の炎に包まれ、遊星は流星の光を纏った五人に分身した。

二人はそのまま高速で駆け抜けて、ケセドに突進する。

ジャックのケテルの心臓を焼き尽くして灰にし、五人に分身した遊星はケセドの肉体を貫き、一片の欠片も残さずに消滅させた。

そして、一夏と箒も最後の攻撃に挑む。

《箒、雨月と空裂を一つに合体させるんだ!》

「こ、こうか!？」

デブリ・ドラゴンに言われ、二つの刀を重ねると、一瞬輝いて一振りの長刀となった。

「ほ、本当に合体した!」

《名付けて、椿姫!》

《それじゃあ、合体奥義と行きますか!》

ジャンク・シンクロンは意気揚々と言うのだった。

「ジャンクロン、またかよ!？」

「今度は私もか!？」

《つべこべ言わずにとつと動け！ 俺とデブリが合わせる！ ま
ずはエネルギー刃を天を貫くほど造って、天魔時戒神をぶった斬れ
！》

一夏と箒はテンションマックスのジャンク・シンクロンに反論する
のを諦め、雪片式型と椿姫にありったけのエネルギーを注ぎ込んで
数十メートルはあるエネルギー刃を造りだした。

「喰らえ!!!」

振り下ろした二つのエネルギー刃は斜め十字に交差し、ケテルの肉
体を切り裂いた。

『ゴオオオオオッ!!』

《最後にエネルギー刃を龍の姿に変えて投げろ！ イメージすれば
すぐに終わる!》

一夏と箒が思い描いた龍は言われるまでもない。

（（スターダスト・ドラゴン!））

二つの巨大なエネルギー刃は一夏と箒のイメージ通りにスターダス

ト・ドラゴンの姿となった。

「行けっ！！！」

一夏と箒は雪片式型と椿姫を再び振り下ろし、エネルギー体のスターダスト・ドラゴンを投げる。

二つのエネルギー体のスターダスト・ドラゴンはケテルの心臓の宝石と肉体を貫いて粉碎し、ケテルは完全に消滅した。

「終わった……か」

箒は椿姫を雨月と空裂に戻して両腰に納めた。

「ああ……ところでジャンクロン。今の合体奥義の名前は何か？」

《天星双龍破だ！》

「自信満々だな……箒もそれでいいか？」

「私は構わない……一夏！」

「ん？」

「おかえりなさい」

箒は笑みを浮かべて右手を差し伸べた。

一夏はその右手に自分の右手を置いて笑みを見せる。

「ただいま、箒」

・

第44話 満月と星が輝く夜空の下で（前書き）

さて！

あの名シーンを早く投稿したくてささっと書き上げました！

ラストにはちょっとビックリで次回に続きます！

では、どうぞ！

第44話 満月と星が輝く夜空の下で

天魔時戒神との戦いから無事に帰還した戦士たち。

だが、箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラの五人娘は独自行動をしたことにより、大広間で千冬からの説教を受けていた。

何とか説教を免れたチーム5D・Sと一夏はなにも出来ず、オロオロとする。

だが、そこに救世主が現れる。

「まあまあ、千冬。あまり度が過ぎると彼女達が可哀想ですよ。もうその辺にしてあげてください」

「……まさか、お前が帰ってくるとは驚きだよ。アンチノミー」

千冬はブルーノの本当の名前であるアンチノミーと呼んだ。

ブルーノはニコニコと笑う。

「これからはブルーノって呼んでください。ほらみんな、足を崩して。お疲れ様。真耶、みんなの治療を」

「は、はい！」

何故かブルーノを見て顔を赤く染めている真耶は急いで箒達の元に行く。

千冬は男性陣を連れて大広間から出る。

遊星達はいったん部屋に戻り、ブルーノに話を聞く。

「ブルーノ。あの戦いからお前はどうしていたんだ？」

「あの戦いで遊星をブラックホールから脱出させた後、本当なら僕は消滅して死ぬはずだった。だけど、運命の悪戯か、神の道標かわからないけど、気が付いたらこの世界にいたんだ。千冬と真耶はそこで助けてもらったんだ」

「そうだったのか……」

「僕は君達もこの世界に来るかもしれないと淡い期待を持ち、その時に君達の力になれるように世界を渡り歩いてISの技術を学んできたんだ。そして、チーム5D'sがこの世界に来たと言う情報を得て、君達の前に現れたんだ」

「……ブルーノ。これからは俺達と一緒に居てくれるか？ 俺達チーム5D'sの一人として」

遊星は手を差し伸べた。

「……ああ、もちろんだよ！」

ブルーノはその手を取り、固い握手を交わす。

「そのために僕はここにいるんだからね！」

その答えを聞いたジャック、クロウ、龍亞はブルーノに飛びかかった

「「ブルーノ!!」」

「うわっ!? ど、どうしたの!?」

「この馬鹿者が! 俺達に別れを告げないで消えよって! 今度勝手に消えたら許さんからな!」

「心配したんだぜ! この野郎!!」

「よかった……ブルーノが生きてて!」

「ジャック、クロウ、龍亞……ありがとう」

ブルーノは仲間からこれほどまで思われたことに感動し、涙を浮かべる。

（よかったな、ブルーノ）

遊星はみんなに飲み物を買う為に部屋から出た。

すると、自動販売機前に一夏がいた。

小さな袋を見て何かを悩みながらジュースを飲んでいた。

「何をしているんだ、一夏?」

「ああ、遊星。実は……」

一夏は遊星に悩みを打ち明けて協力を仰いだ。

「そうか、今日は箒の誕生日だったのか……」

「これをいつ渡そうか迷ってな……」

「なら、俺が知恵を貸してやるよ」

遊星は一夏から離れてISを取り出す。

だが、ISはカードの形をした待機状態ではなく、銀色に輝くスターダスト・ドラゴンのドラゴンネックレスだった。

アクセルシンクロにより『シューティング・スター・ドラゴン』のカードと星竜が融合して、新たな姿『龍星』へと進化したのだ。

遊星は龍星でアキのブレイブ・ローズと通信する。

『アキ、すまないがちょっと協力してくれ』

『どうしたの？』

『実は今日、箒の誕生日で一夏がプレゼントを用意しているんだ。そこで二人つきりにさせたいんだ』

『なるほど、二人のための場所と雰囲気ね。それなら——……』

アキはすぐに閃いたシチュエーションを遊星と話し合う。

『それじゃあ、今から一夏に伝えるよ』

『私もすぐに箒に伝えるわ。ふふふっ……』

『アキ、もしかして凄く楽しみか？』

『もちろん。女の子はこういう事に協力するのは好物なのよ♪』

『そうか……』

『それじゃあ、作戦開始よ♪』

『わかった』

遊星とアキはプライベート・チャンネルを切り、一夏と箒に時間や場所などを細かく伝えた。

そして、時間が流れ、遊星とアキの誕生日急接近作戦が実行される。

と言っても、遊星とアキはシチュエーションのお膳立てしただけで、現在は旅館で楽しみに待っている。

夜の海辺で一夏は箒を待っていた。

本日は満月で、夜空には雲一つ無く、星が瞬いていた。

「い、一夏……お待たせ……」

箒に呼ばれて一夏は振り向いたが、その瞬間一夏は目を見開いて今の箒の姿を焼き付けるように見てしまった。

何故なら、箒が絶対に着なさそうなビキニタイプの白い水着を着ていたからである。

「あ、あんまり、見ないで欲しい……。お、落ち着かないから……」

「す、すまん」

一夏は慌てて体の向きを元に戻す。

箒は1メートルほど間を開けて隣に座るが、二人は意識しすぎて喋れなくなってしまう。

（い、いかん、これはかなり気恥ずかしい……）

（い、一夏が私の水着姿をジッと見ていた……これは喜んでいいのか……？）

「……………」

「……………」

その状態が数分間続き、ようやく箒から話を切り出す。

「え、えっと……アキから聞いたんだ……私に用があるって……」

「あ、ああ……箒、これを受け取ってくれ……」

一夏は小さな紙袋からリボンを取り出した。

「誕生日おめでとう、箒」

「私の誕生日……覚えててくれたのか……？　　ありがとう……一夏」

箒は嬉しさが体から溢れ出すように心が満たされる。

「その、良かったら……一夏が結んでくれないか？」

「俺で良ければ喜んで」

一夏は立ち上がって箒の後ろに座り、ボリュームのある長髪を手で確かめるように触りながらリボンで結び、いつもの可愛いポニーテールにする。

「ど、どうだ？　似合っているか？」

「ああ。やっぱり箒はポニーテールがよく似合うよ」

「そ、そうか……」

その後、二人は一夏の大怪我の事で言い争った。

そして、箒はしょんぼりとしてしまった。

「私はお前を置いて逃げたんだぞ……」

「あの時は福音の操縦者がいたから仕方ないだろう？」

「わかっている。だが……自分が許せないのだ……」

「じゃあ箒、今から罰をやる」

「う、うむ……」

一夏は箒の方に向くと、箒はぎゅっと目を閉じて覚悟を表していた。

（しょうがないなあ、コイツは）

一夏は、その額をびしりと指で弾く。

「っ……!？」

「ほい、終わり」

「な、なに？」

困惑顔の箒は二回まばたきをしてから、真っ赤になって一夏に詰め寄った。

「ば、バカにしているのか!？ あんな、デコピンくらいで……!」

「まあまあ、落ち着け。興奮するな」

「だ、黙れ！ 私は武士だ！ 誇りを汚されて落ち着いてなど――」

「いや、その……一回離れないか？ えーと、当たってるんだけど……」

箒の丰满な胸が一夏の体に。

「！！！！」

かなり密着していたことに気づいた箒は、ばばっと一夏から離れ、抗議の眼差しを送る。

「お、お前は……！ 人が真面目に話しているというのに、ふ、不埒だぞ！」

（はい、そうですね。すみません。男に生まれてきて申し訳ない）

「……その、なんだ……いい、意識するのか……？」

「はい？」

「だ、だからだな！」

箒は一夏の手を掴み、そのまま自分の胸の谷間まで引っ張った。

（んなっ！？ ほ、箒……さん？）

「い、異性として意識するのか、訊いているのだ……」

さっきまでと違い、顔と耳を真っ赤にして恥ずかしそうにしている。

「う、ん……」

一夏はついつい肯定してしまう。

近くに遠くに聞こえる波の音、目の前にはセクシーな水着姿の幼なじみ、空から降り注ぐ月明かり、さまざまな雰囲気に一夏の心はぐらりと来てしまっている。

「そ、そうか……。そう、なのだな……」

箒は何度も言葉を噛み締めて飲み込む。

密着している状態でお互いの体温が伝わってくる。

それほどに一夏と箒は近い距離にいた。

そして、一夏と箒の視線が合った。

（あ……）

見とれて、しまった。

月明かりに照らされた箒があまりにも綺麗で。

「箒……」

一夏は空いている片手で箒の頬に添えた。

「一夏……」

箒は目を閉じ、やや唇を上向きに突き出す。

一夏はまるで何かに引き寄せられるように、箒の顔に近づいた。

ぐっつ。

突然額に何かが当たり、一夏は目を開けた。

待っていたのはフィン状の浮遊物体。

その先端が四角いスリットになっている。

「……ブルー・ティアーズ……」

キュイイイ……。

「ぬあああっ!？」

ズバシュッ！

間一髪、B Tレーザーがのけぞった一夏の髪を焼き切る。

上を見上げると、そこには四人の突き刺さるような視線。

「姿が見えないと思えば……」

「一夏、何をしているのかな……？」

「――よし、殺そう」

「ふふっ、うふふふっ」

ラウラ、シャルロット、鈴音、セシリアがI Sを身に纏っていた。

「ほ、箒っ！ 逃げるぞ！」

「えっ、あっ。きゃあっ！？」

一夏は箒を抱きかかえて悪鬼と化した四人から逃げる。

だが、夜空に輝く星の神々は一夏を見捨てなかった。

《シューティング・ソニック！！！！》

夜空から白銀の閃光がセシリア達を遮るように放たれ、セシリア達は急停止して見上げる。

「「「なっ！？」」「」」

「「えっ！？」」

一夏と箒も夜空を見上げた。

夜空の無数の星のように輝き、自ら幻想的な白い光の粒子を放つその姿に一夏と箒は何度見ても魅了される。

「「スターダスト・ドラゴン……」」

星屑の竜、スターダスト・ドラゴンはゆっくりと一夏と箒の前に降り立つと、セシリア達を睨みつけた。

《……お前達、俺の逆鱗に触れてしまったな……》

「「「……はい？」」」

スターダスト・ドラゴンは何故か凄く怒っており、セシリア達は固まってしまうのだった。

.

第45話 祝福の星空（前書き）

ヒヤッハー！

（☆▽☆
☆）

遂にやっちまったぜ、俺！！

もう後には引き返せないけど（もう既に手遅れ）、悔いはないぜ！
、（≡▽≡）／

では、一夏と箒の結末をどうぞ！

第45話 祝福の星空

突如として現れたスターダスト・ドラゴンだが、何故か激怒していた。

「ちょっと、スターダスト・ドラゴン！ ニトロ・シンクロンから聞いたけど、アンタは中立派じゃなかったの！？ どうして箒に荷担するのよ！！」

鈴音が抗議すると、スターダスト・ドラゴンは目を閉じて説明する。

《確かに俺は中立派だ。いつもの俺ならここで一夏と箒を助けないだろ。だが……今日と言う日なら話は別だ》

「それは、私の誕生日だからか？」

箒がもしかしたらと思って言うが、スターダスト・ドラゴンは首を横に振る。

《そうじゃない。今日、七月七日が七夕だからだ！》

「「「えっ？ 七夕？」」」

一夏、箒、鈴音は拍子抜けして驚く。

「「「タナバタ？？？」」」」

対して、日本の行事を全く知らないセシリアとシャルロットとラウラは疑問符を浮かべる。

《七夕……それは世界の数ある星の祭の一つ。運命によって天の川に引き下かれた織姫星と夏彦星が一年にたった一度だけ出会える日。そんな日に一組の男女が想いを伝えるための大切な接吻をお前達が邪魔した。つまり……それは星の竜である俺に対して喧嘩を売ったようなもの。今夜ばかりは箒に加担する！ 覚悟しろ、空気の読めない邪魔者共め！！》

スターダスト・ドラゴンは端から見れば滅茶苦茶な事を言っているが、当の本人（竜？）はいたって真面目である。

《なら、我々が相手をしよう》

セシリア達の前に現れたのは、ニトロ・ウォリアー、ターボ・ウォリアー、ロード・ウォリアー、ジャンク・アーチャー、ジャンク・ガードナー、ジャンク・デストロイヤー、ジャンク・バーサーカーだった。

《さあ、スターダストよ、我らと戦え！ その間にラウラ達は一夏にお仕置きするんだ》

ロード・ウォリアーは一夏を睨みつける。

「それ、俺、死んじゃうから！！」

《あら？ スターダスト一人が相手だと思っ？》

ビクッ！？

ロード・ウォリアー達は初夏なのに凄まじい寒気を背後に感じた。

《ブ、ブラック・ローズの姐さん!?》

振り向いた先にはウォリアー達の恐怖の代名詞でもあるブラック・ローズ・ドラゴンがいた。

しかし、ブラック・ローズ・ドラゴンだけではなかった。

《何故に俺がここにいるんだ?》

《早くしてくれよ。俺はクロウにやけに近づく一人の女の子との交流をB Fの仲間と一緒に見守りてえんだよ》

《やれやれ。この世界に来てからとても騒々しいですね》

《眠いよ……今日は疲れた……龍亞はもう寝て……ZZZ》

レッド・デーモンズ・ドラゴン、ブラックフェザー・ドラゴン、エンシェント・フェアリー・ドラゴン、ライフ・ストリーム・ドラゴン（宙に浮きながら就寝中）がいた。

《スターダスト、私達も一応古くからの星の竜のだから手伝うわ。それに、せっかくアキと遊星が最高のシチュエーションのお膳立てをしたのに、それを邪魔されたことには腹が立つわ》

「遊星さんとアキさん……?」

「これ、あの二人が仕組んだんだ……」

「へえー、そうなんだ……」

「ほう……父上、母上が……」

四人はこの場にいない遊星とアキに対して怒りを沸々と向ける。

そして、ちゃっかり巻き込まれた他の四体の竜は戦闘準備に入る。

《仕方ない。貴様等で日頃の鬱憤を晴らさせてもらおう》

《とっとと終わりにするかね。早くクロウとのほほんちゃんとの話を聞きたいし》

《私もたまには運動しましょうか。ライフ・ストリームはどうしますか？》

《姉ちゃん……明日寝坊していいならやるよ》

シグナーの六体の竜が相手となると、さすがのロード・ウォリアー達も分が悪くなり、大量の汗がにじみ出る。

《さあ、行くわよ！》

ブラック・ローズ・ドラゴンの合図とともに海上での大乱闘が開始する。

スターダスト・ドラゴンも腕を組んで悩んだ。

《うーん。さて、どうするか……》

《ヤッホー！俺っちの出番だね、スターダスト！》

《フォーミュラ!?》

スターダスト・ドラゴンの前に得意気に現れたのはフォーミュラ・シンクロンだった。

《今なら、マスターが居なくてもいけるだろ?》

《そうだな。行くぞ、フォーミュラ!》

《イエイ! そう来なくっちゃな!》

フォーミュラ・シンクロンは二つの星から輪となり、スターダスト・ドラゴンが入る。

《シンクロ召喚!》

光の柱が天を貫き、スターダスト・ドラゴンはシューティング・スター・ドラゴンとなる。

《俺、生来! シューティング・スター・ドラゴン!》

《ば、馬鹿な! シューティング・スター・ドラゴンはマスターとD・ホイールでの限界を超えたスピード、更にはクリアマインドからのアクセルシンクロで無ければ呼び出せないはずなのに!》

ターボ・ウォリアーが戦いながら驚愕していると、シューティング・スター・ドラゴンはグットサインをする。

《星竜が龍星に進化したことによって、俺自身もまた進化したんだ

！遊星はライディング・デュエルでしか俺を呼ぶことが出来なかつたが、これからはスタンディング・デュエルでも呼べるようになった！》

そして、砂浜に降りると、体勢を低くする。

《乗れ、一夏、箒。今から安全で素敵なお場所に招待してやる!》

「行くか？ 箒」

「二夏と一緒にどこでも行く！」

「決まりだな！」

すぐに一夏と筈はシューティング・スター・ドラゴンの背中に乗った。

《俺にしつかり掴まっつかまていろ！》

シューティング・スター・ドラゴンは両腕両脚を折り重ねて畳み、飛翔する。

そして、一瞬だけ光速に加速すると、シューティング・スター・ドラゴンは一夏と箒を乗せたまま消えた。

「「「そんなあああああつ?!?!?」

一夏と箒が消えてしまい、セシリア達は絶叫する。

そして、シューティング・スター・ドラゴンがたどり着いた先は…
…。

「見ろよ、箒……」

「凄……」

一夏と箒の瞳に映ったのは、数え切れない程の無数の星が広がる満天の星空だった。

周囲には星の光を遮るものが無く、星空の中央にはたくさんの星の集まりで構成された天の川があった。

一夏と箒はしばしその光景に圧倒され、時間が経過するのさえ忘れるのだった。

《さて、俺はしばらく意識を閉じている。ギリギリの時間まで楽しんでおけ》

シューティング・スター・ドラゴンは宙に浮き、その体勢を保ったまま目を閉じた。

すると、待機状態の紅椿からデブリ・ドラゴンの声が箒の頭に響く。

《箒、今しかないよ》

(デブリ・ドラゴン?)

《せっかくシューティング・スターがたくさん星が見れて、邪魔者が一切いないこの場所に連れてきたんだから、箒もそれ相応の覚悟で臨まなきゃダメだからね》

(デブリ・ドラゴン……ありがとう。お陰で勇気が出たよ)

《うん。頑張れ、箒》

(ああ)

デブリ・ドラゴンに箒にエールを送り、箒はそれに応えるため、勇気を出して一夏の手を握った。

「い、一夏!」

「は、はい!」

箒が真剣な表情をするので、一夏も緊張感を持って応える。

「わ、私は……」

「う、ん……」

「私は……お前を誰よりも愛している！ 私と、結婚を前提に付き合ってくれ！！」

「…………えええええええええええええええええつ！？！？！？」

一夏の予想を遙かに越える筈の告白に叫ぶのだった。

「愛している……???

口をぱくぱくさせ、一夏は顔を真っ赤にしている。

「私を始めて名前と呼んでくれたあの時から……一夏に惚れていた。転校した後も、いつも一夏のことばかり考えていた……」

「箒……」

「だから……私の恋人になって……その、時が来たら……私の夫になって欲しい……」

「えっ、あっ、うっ……」

さすが自称武士である箒は最早プロポーズに近い告白をして、一夏を極限まで追い込んでいる。

そして、一夏の心を射抜くトドメの一撃を喰らわせる。

「私の、心と体を……全で一夏にあげる。だから、一夏の全てを……私にくれ……」

上目遣いで迫る箒が可愛すぎて、一夏の理性が破壊されてしまう。

「ほ、箒!!」

「きゃあっ!?!」

一夏は箒を強く抱きしめた。

「箒がそこまで俺を想ってくれていたなんて……凄く嬉しいよ……」

「うん。一夏……答えを、訊かせてくれ……」

「わかった……」

一夏は覚悟を決め、箒を解放して視線を合わせる。

「箒!!」

「は、はい！」

「こんな俺で良ければ、貰ってください！」

「っ！？　は……はい！」

箒は一夏に飛びつくように抱きついた。

そして、一夏は箒の頬に再び手を添えて顔を近づけた。

一夏と箒の唇は優しく重なり、お互いを強く抱きしめた。

しばらくして、唇を離すと、箒は一夏にあるお願いをする。

「一夏……一つ、お願いがある」

「ん？　何だ？」

「あの、愛しているって、言ってくれ……」

「……愛しているよ、箒」

一夏は再び箒の唇にキスをする。

《……必ず幸せになれよ。一夏、筭。……おめでとさん》

シューティング・スター・ドラゴンは口には出さなかったが、二人を祝福する。

結婚を前提に恋人同士となった一夏と筭。

だが、明日にはかつてない程の凄まじい災難が降りかかる事になるとは、今の二人には知る由もなかった。

第45話 祝福の星空（後書き）

いかがでしたか？

一夏と筈のラブライブイベントは！

次回はIS学園にてドタバタ逃走劇を繰り広げようと思います！

それを書き終えたら次は仮面ライダーWなどを書くのでしばらくこの小説の更新を停止します。

ですが、今月中には更新を再開しますのでお楽しみに！

第46話 狂気の逃走劇（前編）（前書き）

2011／05／12、狂気の逃走劇前篇後編を大きく書き直しました。

第46話 狂気の逃走劇（前編）

臨海学校からIS学園に帰ってきた一年生一同。

だが、それから数時間後、IS学園ではかつてない騒動が起きている。

「ふふふふ……お待ちなさい。一夏さん。箒さん……」

「今すぐに殺してあげるから待ちなさい!!」

「一夏、箒……お願いだから待ってよ」

「一夏、私の嫁でありながら浮気をするとは何事か!!」

『待てええええええええええええっ!!!!』

先日恋人同士となった一夏と箒は現在、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラを中心にIS学園の半数の生徒に追いかけている。

「「待てるかああああああああっ!!!!」」

一夏と箒は全力疾走で逃げている。

なぜこのような状況になったのかと言うと、それは約十分前に遡る。

《うーん。臨海学校も良かったけど、やっぱりIS学園が落ち着くなー》

ジャンク・シンクロンはふわふわと飛びながらIS学園を散歩していた。

すると……。

ガシッ!!

《ターゲット、確保!》

《何!? これは何事!?!》

突然、体中がボロボロになっていたロード・ウォリアー達に取り押さえられた。

《連行しろ!》

《ギャアアア! 俺をどうする気だ!?!》

そして、ジャンク・シンクロンが連れてこられた場所は殺気立っている女子達が集まっている部屋だった。

《この部屋、超怖っ!?!》

そして、ジャンク・シンクロンは椅子に、体を拘束されると、頭にヘルメットみたい物を被らされる。

《お前達は一体、俺をどうする気だ!?!》

「心配いりませんわ。あなたの昨日の記憶を見せて貰うだけですから」

《その声はセシリア!?!　じゃあ、他の奴も!?!》

「ええ、もちろんいらっしゃいますわ。では、今からあなたの記憶を映像として映し出しますから」

《や、止めろおおおおおおおーっ!?!!》

ジャンク・シンクロンの抵抗も虚しく、昨日の一夏と箒のあの出来事が記憶から映像として映し出される。

『私は……お前を誰よりも愛している!　私と、結婚を前提に付き合ってくれ!!!』

『だから……私の恋人になって……その、時が来たら……私の夫になって欲しい……』

『私の、心と体を……全で一夏にあげる。だから、一夏の全てを……私にくれ……』

『こんな俺で良ければ、貰ってください!』

『っ!?!　は……はい!』

『あの、愛しているって、言ってくれ……』

『……愛しているよ、箒』

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！……！」

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアア！……！」

「そんなああああああああああああ！……！」

「神様の馬鹿野郎おおおおおおお！……！」

「人生最悪の不幸だああああああああ！……！」

一夏に恋する乙女達の悲しみの絶叫。

これが今回の事の発端である。

そして、悲しみから憎しみへと変わり、ある行動へ移される。

一夏と箒は恋人同士となった事で、少々照れくささがあるが、楽しそうに話をする。

「一夏、今度……」

「ん？ デートか？」

「そ、そうだ！ できれば……二人っきりで……」

「ああ、そうだな。夏休みも近いし、色々な所に行こうぜ」

「う、うん！」

箒は一夏の腕に抱きつく。

幸せ気分の二人だったが、この後に不幸のどん底に突き落とされる事となる。

ドドドドドドドドドドドドドッ！！

「な、何だ！？　じ、地震か！？」

「いや、地震じゃない！　これは……地響きだ！」

一夏と箒は本能的にダッシュすると同時に後ろを見る。

そこには、殺気だってこちらに向かって走ってくる数え切れない人数の女子だった。

「うふふふ……お待ちになってくださいな」

「よし、殺そう！」

「一夏、いつかの責任をとって貰うよ？」

「箒、よくも私の嫁を寝取ったな!!」

そして先頭には、昨日共に戦った仲間のはずのセシリア、鈴音、シヤルロット、ラウラがいた。

「に、逃げるぞ、箒！」

「言われなくても！」

こうして一夏と箒の逃走劇が始まるのだった。

騒ぎを聞きつけた千冬は遠くから箒をじつと見る。

「……箒。お前が一夏を奪うのか……それなら」

千冬は携帯電話を取り出し、束と話す。

『どうしたの、ちーちゃん？ 昨日の別れが切なくて私に会いたくなつたのー？ 相変わらず可愛いな〜♪』

「……束、今すぐにIS学園に来てくれ。一つ頼みがあるんだ」

『およ？ これは真剣な話だね。一体何かな？』

「お前の妹と一夏の事だ。実は――」

一夏は白式で遊星と連絡を取る。

（くっ、こうなったら遊星に助けを求めるしかない！）

「遊星！」

『一夏か……？』

「遊星、セシリア達に襲われているんだ！ 助けてくれ！」

『それは無理だ……』

普段なら絶対に助けに行く遊星だが、断られてしまった。

「何で!?!」

『何故なら今……正気を失ったアキに貞操を奪われかけている』

遊星自身も危険な立場に追われている。

「はい!?!? 何でそんな事に!?!」

『何者かがアキに媚薬みたいな薬を飲ませたらしく、かなりと危ない服で俺に迫っている』

遊星は今の状態のアキの声を一夏に訊かせる。

『遊星~~~~♪ 私と愛の階段を登りましょう? 私を——』

『……わかっただろ? 今ブラック・ローズ・ドラゴンが押さえて
てくれているが、いつまで持つかわからない。それに、ジャックと
クロウも今は忙しいんだ。だから、頑張れ……』

『遊星、いい加減あなたの全てを頂だ——』

ブチッ。

遊星は連絡を切る。

「……遊星」

「どうする、一夏?」

「こうなったら白式を起動させて、箒を抱きかかえて一気に逃げる

しかないな。行くぞ、箒！」

一夏は白式を起動させ、箒をお姫様抱っこをして高く飛ぶ。

「逃がしませんわ！」

「逃がさないわよ！」

「逃がさないよ！」

「逃がさん！」

四人の銃が火を吹き、一夏を狙い撃つ。

「ちよっ、嘘だろ！？」

それ以外にも女子達が色々な凶器などを投げてくる。

このまま箒を抱きかかえながら回避するのは難しいと判断し、箒を遠くに投げた。

「一夏！？」

「箒、紅椿を使って逃げろ！俺が身代わりになる！！」

「えっ！？」

箒は驚きながら一夏に言われた通りに紅椿を起動させる。

そして、一夏は集中攻撃の的になり、その全てが直撃する。

「ぐあああああああああっ!!!!」

一夏は集中攻撃に撃墜され、地面に落ちるとすぐに女子達に確保された。

「一夏あああああああーっ!!!!」

次にセシリア達は箒に狙いを定める。

（くっ……今行っても返り討ちに遭うだけだ。すまない、一夏。必ず助けに行く!）

箒は悔しさを押し殺し、一時撤退する。

そして、箒が逃げ込んだ場所は今は誰もいないISアリーナだった。

「頼むぞ、デブリ・ドラゴン」

《わかったぜ!》

箒はデブリ・ドラゴンに一夏が連れ去られた場所を見つけだしてもらい、一夏を助ける機会を伺う。

（一夏、頼む。無事でいてくれ……）

「篠ノ之」

「織斑先生！ えっ……その姿は！？」

箒はアリーナのフィールドに突然現れた千冬に驚くが、それだけではなかった。

何故なら、千冬の姿はいつものスーツ姿ではなかった。

「刀を抜け、篠ノ之」

黒いＩＳスーツに改造された打鉄を身に纏った姿だった。

世界最強のＩＳ操縦者、織斑千冬が再び舞い降りた瞬間だった。

「行くぞ！」

打鉄から近接ブレードを呼び出し、箒に襲いかかる。

「くっ！！」

箒は若干混乱しながら雨月と空裂で千冬の一撃を受け止める。

「織斑先生！ 何故こんな事を！？」

「臨海学校の言葉を忘れたのか？ 奪う気持ちで行けとな」

「で、ですが！ うあっ！？」

千冬は箒を押し返して近接ブレードを向ける。

「それとも何か？ お前の気持ちは生半可なものだったのか？」

「それは違います！ 私の一夏に対する気持ちは誰にも負けません！」

「私に一太刀でも浴びさせてみる。そうすれば一夏との交際を認めてやる」

「……わかりました」

箒は覚悟を決め、瞳を閉じ、深く息を吐いて雨月と空裂を構える。

「篠ノ之箒、参る……！」

瞳を開き、箒は最大の敵である千冬に戦いを挑む。

「……あれ？」

一夏が目覚めると、薄暗い部屋のベッドに寝かされていたが、両手両足を紐で縛られて動けなくなっている。

「ここは……どこだ？」

《一夏……》

ベッドの向かい側には椅子に拘束されたジャンク・シンクロンがいた。

「ジャンクロン!？」

《すまない。俺の所為でお前を危険な目に合わせてしまった……》

すると、ドアが開く音が鳴る。

部屋に入ってきた人物に一夏は驚愕する。

「ななな、何をやっているんだよ!？」

入ってきたのは、かなり危ない下着姿のセシリア達だった。

「決まっていますわ、一夏さん」

「今から私達と」

「すごい、えっちな事をするんだよ?」

「私達と既成事実を作るためだ」

「……………ええええええええええええええええっ!?!?!?」

.

第47話 狂気の逃走劇（後編）（前書き）

2011／05／12、狂気の逃走劇前篇後編を大きく書き直しました。

楯無会長の名前は伏せておきます。

第47話 狂気の逃走劇（後編）

箒と恋人同士になった一夏にセシリア達による貞操の危機が迫る！

《そこまでして一夏が欲しいのかお前達は！？》

四人はジャンク・シンクロンの言葉を無視し、一夏のベッドへと迫る。

（来い、白式！）

一夏は白式を起動させようとするが、ガントレットが無い。

両手両足を縛られ、周りには四人の代表候補生、逃げられる訳ない。

一夏は諦めて四人に最後の頼みをする。

「頼みがある。俺はどうなってもいいから、二度と箒には手を出さないでくれ……」

《一夏、初めてを箒に捧げなくてどうする！？ それじゃあ、箒を傷つけるだけだぞ！？》

「仕方ないだろ……箒を守るためなんだから……」

セシリア達は複雑な表情をしながらも頷いて了承する。

「では、まずは私から……」

「ちょっと待ちなさいよ、私からよ！」

「ま、待ってよ！　僕が先だよ！」

「ここは私の嫁なのだから私からだ！」

一夏の最初の相手を自分と言い張り、争う四人。

《ガジガジガジ……》

「「「……ん？」」「」」

背後に何かをかじる音が連続で鳴り続ける。

セシリア達は取りあえず今は一夏のことは置いておき、その音の正体を知るためにゆっくりと振り向いた。

《ガジガジガジ……》

それは、かなり大きいネズミだった。

しかも、ただのネズミではなく、ハリネズミの一種だと思われる生物で、ジャンク・シンクロンの椅子の拘束具を強靱な歯で噛んでいる。

「「「「………」」「」」」

セシリア達は無言となり、そのハリネズミの背中部分をジューツと見る。

何故なら、有り得ないことに、そのハリネズミの背中から鋭い針の代わりに……ボルトが生えていたからだ。

《……チュー？》

ハリネズミは、かじるのを一端止めてさっきから見てくるセシリア達を見て首を傾げる。

「「「な……何なの（ですか）、これえーっ！？！？」」「」」

見たことのない摩訶不思議な生命体に驚く四人。

だが……。

《チュー！》

そのハリネズミは乙女心を撃ち抜く可愛さと愛くるしさを持っていた。

「「「か、可愛い！！」「」」

もちろん四人も例外ではなかった。

「可愛い過ぎますわ！」

「あんな可愛いのは初めて見たわ！！」

「あのつぶらな瞳に凜々しい顔は反則だよ」

「ほ、欲しい！ 是非とも私のペットにしたい！！」

ハリネズミ（？）のあまりの可愛さに完全に虜と化してしまった四人。

すると、ハリネズミは小さい手で背中に手を伸ばした。

ズルッ。

そのまま自分の背中のボルトを一本抜いた。

「「「え？？？」」」」

《チュ！》

ハリネズミはそのボルトを投げ、セシリアはキャッチした。

そして。

ドカアアアアアン！！

ボルトが爆弾のように爆発した。

「「「キャアアアアアアアアッ！？！？」」」」

セシリア達は吹き飛ばされて気を失う。

《チュー！ チュ、チュー！！》

ハリネズミが何かを言うと、部屋のドアが開かれる。

《ナイスだ、ボルチューー!》

《流石だねー!》

《よし、一夏救出だ!》

中に入ってきたのは、デブリ・ドラゴン、ロード・ランナー、スピード・ウォリアーである。

デブリ・ドラゴンとスピード・ウォリアーが一夏の紐を外し、ロード・ランナーはジャンク・シンクロンの拘束を外す。

「ありがとう、みんな。ところで、このハリネズミはもしかして……」

一夏はハリネズミを持ち上げる。

《チューー! チュチュ、チューー!》

(何を言ってるかわかんねえ……)

《一夏、そのネズミの名前はボルト・ヘッジホッグ、俺達の仲間だ。ちなみにあだ名はボルチューーだ》

拘束から解放されたジャンク・シンクロンが言う。

「そうなのか? ありがとうな、ボルチューー」

一夏はボルト・ヘッジホッグの頭を撫でる。

《チュー♪》

《一夏、早く箒の所に戻らなきゃ!》

「ああ!」

デブリ・ドラゴンが慌てて言うと、一夏は頷いて部屋から出る。

そして外に出ると一夏は口をあんぐりと開けた。

「な、何だこの現状は……」

一夏と箒を追いかけた女子全員とロード・ウォリアー達が戦場に敗れた戦士のように倒れていた。

その周りにはスターダスト・ドラゴン、ジャンク・ウォリアーを中心とした遊星のモンスター達が集結していた。

《一夏、無事か?》

「まあ、何とかな。って、スターダスト! 遊星はどうした!?!」

《遊星なら今頃アキを逆に襲って食べちゃっているぞ》

「ええっ!?!」

《今まで遊星はアキを大切にすぎで一步を踏み出せなかったからな。遊星の鋼鉄の理性も崩壊しちゃったよ》

「い、いいのかよ……」

《まあ、いい機会だから問題ない。それより、早く箒の所に行くぞ》
そう言うと、スターダスト・ドラゴンは一夏に奪われた白式を渡し、
共にISアリーナへ向かった。

ISアリーナの観客席に行くと、意外な人物がいた。

「おー、来たね、いっくん。一日ぶりかな？」

「東さん！？　どうしてここに！？」

「ちーちゃんに呼ばれてきたからだよ。ほら、あれを見て」

東がフィールドを指差した先には、箒と千冬が戦っていた。

「はああああっ！！」

「甘い！」

千冬は箒の斬撃を軽々と受け止めて切り払う。

「くっ！？」

「どうした、これで終わりか？」

「まだまだ!」

箒は諦めずに何度でも千冬に立ち向かっていく。

「どうして箒と千冬姉が……?」

「これはね、いっくんを賭けた二人の戦いなんだよ。箒ちゃんがちーちゃんに一太刀でも浴びさせられればいっくんと之交際を認めるだって」

「えっ!」

「しかも、ちーちゃんは紅椿に対抗するためにわざわざ私にお願いして、打鉄を第三世代型並みのパワーとスピードと機動力に改造をしてもらったんだよ。世界最強のIS操縦者相手じゃ流石の箒ちゃんも無理かなー?」

「箒……」

一夏は爪を手に食い込ませるほど強く握りしめて席に座る。

スターダスト・ドラゴン達も黙って座り、戦いを見守る。

「頑張れ、箒……」

一夏はすぐに助けに行きたい気持ちを押し殺し、箒を見守る。

それから、十数分に渡って箒と千冬の戦いが続いた。

しかし、一向に千冬に一太刀を入れることが出来ず、箒の体力と紅椿のエネルギーも限界に近い。

「はあ、はあ、はあ……」

「もうお前の体力は限界の筈だ。いい加減諦めたらどうだ？」

「私は、諦めません！」

「……どうしてそこまで一夏にこだわる？」

千冬に問われるが、箒の答えは意外なものだった。

「……わかりません」

「何だと？」

「小学生の頃、始めて一夏に名前を呼ばれた時からずっと惚れていました。一夏のどこが好きになったかなんて、説明できません。ただ……」

箒は瞳を閉じて自分の胸に手を置く。

「一夏の側にずっといたい。一夏と幸せになりたい。そんな沢山の願いが私の心の中にあるんです」

「願い、か……」

「織斑先生。いや、千冬さん！ 私は今ここで断言します！」

箒は瞳を開いて、自分の気持ちを正直に言う。

「私は、織斑一夏という一人の人間を心の底から愛しています！
この気持ちは誰にも負けません！！」

箒の気持ちに千冬はフツと笑うと、近接ブレードを構える。

「なら……証明してみろ、篠ノ之箒！ お前の一夏を想う強さを！
！ 愛する気持ちを！！！！」

「はい！！」

箒は雨月と空裂を再び構えたその時、紅椿の赤い粒子に金色の粒子が混ざり、エネルギーが全回復する。

「絢爛舞踏……ありがとう、紅椿！」

紅椿のエネルギーを全開に使用し、一気に加速して千冬に接近する。

「はあっ!!」

雨月の突きからのレーザーと空裂のエネルギー刃の放出を連続で繰り出す。

（勝負だ、箒!!）

千冬は近接ブレードで箒の攻撃を全てを弾き返し、全身全霊をかけて近接ブレードを振り下ろした。

（チャンスは一度だけ!!）

箒は雨月と空裂を手から離し、二つの刀は地面に突き刺さる。

（何!?!）

箒は完全に無防備となり、千冬の一振りが箒に当たろうとした次の瞬間。

パシッ!!

（何、だと……?!）

千冬は目を見開いて驚く。

近接ブレードは箒に直撃しなかった。

何故なら……。

（真剣白刃取り!?!）

箒は振り下ろされた近接ブレードの刀身を両手でしっかりと挟んで受け止めたのだ。

「ハッ!?!」

そのまま気合いを入れ、両手で近接ブレードを捻るようにして刀身を真っ二つに割った。

「っ!?!」

箒は地面に突き刺さった雨月と空裂を抜くと同時に踏み込んだ。

「はあああああっ!?!?!」

近接ブレードを破壊された千冬にはなす術もなく、負けを悟って小さく笑った。

（この勝負はお前の勝ちだ、箒……）

雨月と空裂の刃が千冬の打鉄の装甲に二つの大きな傷をつけた。

「勝っ、た……?」

箒は緊張が解けるとそのまま倒れてしまい、紅椿が解除される。

「箒!?!?!」

一夏は観客席から飛び出し、箒の元へ向かう。

「箒、大丈夫か!？」

「一夏……? よかった、無事だったのだな……」

「こっちの台詞だよ。全く、千冬姉相手に無茶して……」

「一夏、箒」

打鉄を解除した千冬が話しかける。

「約束通り、二人の交際を認めよう。一夏の事を頼んだぞ、箒。いや……未来の義妹よ」

「えっ? 千冬さん、それって……?」

「一夏、早く箒を保健室に連れて行け。後始末は私がやっておく」

「わ、わかった!」

一夏は箒を抱きかかえて保健室へ向かう。

二人を見送った千冬を束は後ろから抱きしめる。

「負けちゃったね、ちーちゃん」

「今回はわざわざすまなかったな、束」

「いいえ。ところで、今夜はお酒を付き合ってあげようか?」

「……そうだな。今日は朝まで飲みたい気分だ」

「オッケー！今日は幾らでも付き合おうよ、ちーちゃん！その後
は私と愛を分かち合——ぶへっ！」

「調子に乗るな」

千冬のアイアンクローが束の顔を捉える。

一夏と箒の交際が千冬に認められたことにより、一夏を狙う女子達
はやむを得ず認めるしかなかったが、これで諦めたわけではなかつ
た。

これからは隙あらばいつでも一夏を狙うつもりでいるのだった。

おまけ、その1。

「疲れた……」

「同じく……」

「ほらほら、頑張ってよ。クロクロ、ジャック君」

「今日の課題は後10ページです。頑張ってください」

生徒会室にて、本音とその姉である布仏虚がジャックとクロウの教師となって二人に勉強を教えていた。

この二人は遊星とは違い、あまり勉強をしたことがないので、IS学園の授業に追いつくために休みを返上して本音と虚に勉強を教わっているのだ。

ちなみになぜ生徒会室なのかというと、ここが女子達に邪魔されずに勉強できるからと本音に案内されたからだ。

そして、その横ではIS学園の長、つまり生徒会長が龍亞と龍可に勉強を教えていた。

「うう……脳がリミッター解除みたいに破壊される……」

「もう、頑張ってよ、龍亞」

「ほら、龍亞くん。もうちょっとだから頑張って。この問題を解い

たら私のライトロードデッキでデュエルをしましょう」

生徒会長はニコニコしながら言い、龍亞の瞳が輝いてやる気が上がる。

「えっ!？　ライトロードデッキと!？　俺、頑張るよ!」

「龍亞は単純なんだから……」

「あらあら。これじゃあどっちが上なのか分からないわね」

生徒会長は扇子を広げて楽しそうに笑い、龍亞と龍可の面倒を見る。

おまけ、その2。

「んう……あれ?」

「起きたか、アキ?」

「遊星、どうして……」

「覚えてないのか?」

「何の——っ!？ わ、私、どうして裸なの!？ あっ!！」

「思い出したか？」

「確か、シャルロットとラウラからジュースを貰って、それから…」

「俺に襲いかかったが、逆に襲われちゃったんだろ？」

「あう……」

「アキ、夕食まで時間があるから、もう一回やるか？」

「……うん」

「可愛いな、アキ……」

「あっ、遊星……やあん!」

第48話 六人のデッキ（前書き）

やっと書き上げました。

それでは、一夏達のデッキ登場です！

今回はデュエル回ですが、誰と誰を戦わせましょう？

やっぱり遊星VS一夏かな？

第48話 六人のデッキ

八月。

I S 学園のかなり遅めの夏休みが始まったある日。

シャルロットは女の子らしい服を一つも持っていないラウラを買い物に誘った。

遊星達も誘ったが、あいにく用事があると言われ、シャルロットとラウラの二人で駅前のデパートへと向かう。

デパートにてシャルロットとラウラは夏物と秋物の服を買い、オーブンテラスのカフェでランチをとった。

すると、突然メイド（&執事）の店長にバイトを頼まれ、仕方なく働く羽目になった。

バイトが二時間ほど続いた頃、事件が起こった。

「全員、動くんじゃねえ！」

三人の銀行強盗犯が店に入り、立てこもりを行おうとしたその時、シャルロットとラウラの執事服とメイド服に入っていた二枚のチュ

ーナーズ・カードから、クイック・シンクロンとロード・シンクロンが現れ、姿が消えると、五体のシンクロモンスターが現れる。

《チェンジ・ガード!》

ジャンク・ガードナーがガードナー・シールドを合体させると、強盗犯は姿勢を崩されて倒れる。

《デイメンション・アロー!》

ジャンク・アーチャーは強盗犯の持っていた武器を全て異次元に飛ばすと、ジャンク・デストロイヤーとジャンク・バーサーカーとロード・ウォリアーの目がキラーンと光り、トドメの天誅を下す。

《デストロイ・ナックル!》

《バーサーカー・スラッシュ!》

《ライトニング・クロー!》

「「ギャアアアアアアアアアッ!!!!」」

強盗犯は何が起きたのか全く分からずに、ロード・ウォリアー達によって瞬殺された。

シャルロットとラウラはすぐにロード・ウォリアー達をチューナーズ・カードに戻し、店長からバイト代を貰うと、事が公になる前に退散した。

その後、二人は買い物を済ませ、デパートから出るとシャルロット

の勧めで城址公園でクレープを食べることになった。

ベンチに座ると、二人はチューナーズ・カードを取り出し、精霊状態のロード・ウォリアー達を呼んだ。

「ありがとう、みんな。強盗犯を瞬殺してくれて」

「うむ、よくやったぞ。ロード・シンクロン、ロード・ウォリアー」

シャルロットとラウラが精霊達を褒めると、頬を赤く染めて照れる。

（あ、そうだ！）

二人はちよつとした悪戯心とご褒美を兼ねて、精霊達の頬に軽いキスをする。

プシューッ！！！！

体から蒸気を噴き出し、精霊達は全員倒れた。

「えっ、みんな大丈夫！？」

「少々……やり過ぎたか？」

シャルロットとラウラは苦笑を浮かべてIS学園へ帰ろうとすると、ラウラはある店に目が向く。

（カードショップ……？）

その店は個人経営の小さなカードショップだった。

「カードショップ『キャッスル』……？」

「ラウラ、気になる？」

「うむ。だが、今日は定休日のような」

「ねえ、また明日来る？」

「いいのか？ では、今から銀行に行ってお金をおろしてこよう！
いくら使うか分からないからな。シャルロット、やり方を教えて
くれ！」

「うん。いいよ」

シャルロットとラウラは銀行に行き、ラウラにお金のおろし方を教え、ユーロから日本円に両替し翌日にシャルロットとラウラは再びカードショップ『キャッスル』に訪れた。

清潔感漂う店内に、壁に張り付けられたショーケースに並べられた
沢山のレアカード。

ラウラは感動し、シャルロットは感心する。

「おおー！」

「へえー、何か不思議な空間だね」

すると、奥にある扉が開いた。

「あらゝ？　いらっしやいませ、可愛いお客さん♪」

口調とあまりにもミスマッチな野太い声をする。

(……え？)

ラウラとシャルロットは衝撃的なそれを見て思考が停止した。

健康的な小麦色のマッチョな肉体に頭が光に反射しているスキンヘッド。

二人を身長を軽く越える、全長2メートルの巨漢……オカマだった。

「「キャアアアアアアア——ッ！！！」」

ラウラとシャルロットは嘗て無い恐怖に絶叫する。

(くっ、この命を懸けてもあの悪魔からシャルロットを守らなければ！)

ラウラはシャルロットを守るためにナイフを取り出して、その悪魔
|| オカマに襲いかかる。

しかし。

「ウラアアアアアアアアアッ！！！」

「ヒイッ!?!」

悪魔(?)が放つ強烈な気を込めた雄叫びにラウラはビビってしま

った。

「ラウラ！？ 大丈夫！？」

「す、すまない……シャルロット。私じゃコイツに勝てない……」

「全く、失礼な女の子ね。私自らがお仕置きしちゃうわよ？」

スパーン！！

「はうっ！？」

「何やってんだ、アホ店長！！」

奥の扉から、茶髪の長髪に、モデルのようなスタイルの良い綺麗な少女が出てきて、手に持ったハリセンで悪魔の頭を叩いて撃沈させる。

「大丈夫？」

茶髪の少女はラウラとシャルロットに話しかける。

二人はコクコクと首を縦に振る。

「私の名前はリオンよ。このアホ店長はグレイツ。まあ、オカマだけど根は良い人だから」

「もう、リオンちゃん。ハリセン攻撃は反則よ？」

復活グレイツはリオンに抗議するが、リオンはハリセンを構えて睨

みつける。

「アンタは黙ってろ」

「もう、リオンちゃんのイジワル♪」

「ったく……私が相手をするから店長は座ってて」

「はーい」

リオンはグレイツを椅子に座らせると、シャルロットとラウラに向けて笑みを浮かべる。

「君達はこの店は初めてだよ？　どんなカードが欲しいの？」

「えっと、デュエルモンスターズです」

「これで買えるだけ買うぞ」

ラウラは昨日銀行から引き落として両替した札束を取り出す。

「ええー！？　さ、札束！？」

「しかし、何を買えば良いか分からないから、どんなものがあるか教えてくれ！」

ラウラが子供のように言うと、リオンはとりあえず商品の説明する。

「デュエルモンスターズの主な商品は、1パック5枚入りのブースターパック。初心者向けのスターターデッキ。構築済みデッキのス

トラクチャーデッキかな？ 後は……」

リオンは店内にあるゲーム機械に手を置く。

「これはデュエルターミナル。一回百円で、ブースターパック等では手に入らない限定カードを1枚とゲームを楽しめるんだ」

リオンの一通りの説明が終わると、ラウラは目を輝かせながらドドンと言う。

「じゃあ、ブースターパックの箱とスターターデッキとストラクチャーデッキの全種類を3箱ずつ買うぞ！ あと、ターミナル内に入っているカードを全てだ」

「ちよっ、ラウラ！？」

「全種類3箱ずつとターミナルの中身！？」

「お買い上げ、ありがとうございます！ 今用意するから待っててね♪」

「グレイツ店長！？」

約10分後、ダンボール3箱分の大量のデュエルモンスターズの商品を購入したラウラは満面の笑みだった。

グレイツはさすがに女二人じゃ運べないと思い、車を用意して運ぶ手伝いをする。

「それじゃあ、リオンちゃん。留守番頼むわね」

「はいはい。寄り道しないでね、店長」

「わかってるわよ」

「それから……今度はお友達でも連れて、また来てね。ラウラ、シャルロット」

「うん。約束だ」

「リオンさん、ありがとうございました」

ラウラとシャルロットはリオンに挨拶をし、グレイツの車でIS学園に送ってもらう。

グレイツに送ってもらい、部屋についたラウラとシャルロットはあ
ることに気づいた。

「……多いな」

「そうだね……」

当たり前だが、あまりにも多すぎるカードの量に二人では処理仕切れないと判断する。

「仕方ない。一夏、箒、セシリア、鈴音を呼ぼう。まだ学園に居るはずだからな」

ラウラは携帯を取り出して一夏達を呼び出す。

「……なんだこりゃ？」

「まさか、これ全部……」

「デュエルモンスターのカードですの……？」

「ラウラ、あんたはどれだけ金を使ったの……？」

一夏達はラウラとシャルロットの部屋の大量のカードに口を開けて
咄然とする。

「とまあ、こう言うわけでみんなにカードの整理を手伝ってもらいたい。だが、タダでは言わないぞ」

「なんだ、飯でも奢ってくれるのか？」

「戯け。一夏よ、父上達みたいに自分のデッキを欲しくないか？」

「え？」

「整理を手伝ってくれたら、この大量のカードから好きなだけ持って行ってデッキを作ってもいいぞ！」

「良いのかよ!？」

「デュエルのルールとデッキの作り方はロード・シンクロン達から聞けばいい。よし、始めるぞ！」

ラウラは無理やり一夏達をカード整理を手伝わせた。

そして、最強のデュエリストの一人である遊星のモンスター達からデュエルのルールとデッキの作り方を教わり、遂に自分だけのデッキが完成した。

一夏は古代の氷の龍を守護する一族『氷結界』。

箒は戦国最強を誇った武士たち『真六武衆』。

セシリアは輝石の力を身に纏う大地の騎士団『ジェムナイト』。

鈴音は秘伝の竜を操る伝説の竜騎士『ドラグニティ』。

シャルロットは天上界に住み、神に等しい存在『ヴァイロン』。

ラウラは大地に封印されし神々『魔轟神』。

こうして一夏達はデュエリストとしての扉を開いたのだった。

.

第49話 星屑の龍VS氷龍（前編）（前書き）

いやー、初めての小説デュエルは大変でした。

おかしい所があるかもしれないので、その時は指摘をお願いします。

何度も見直して大丈夫だと思いますが……。

それでは、遊星VS一夏です。

どうぞ！

第49話 星屑の龍VS氷龍（前編）

ラウラが大量にカードを購入し、一夏達はそれぞれ自分のデッキを作ると、早速遊星達にデュエルを挑んだ。

だが、その前に遊星は一時間待ってくれと言い、一夏達のISを全て持って行き、何かを始めた。

一時間後、遊星は一夏達に待機状態のISを返した。

「みんなのISに俺が造ったデュエルディスクを入れといたよ」

「「「「「えっ？」」「」「」「」」

「ISのコアをエネルギーにデュエルディスクをいつでも使用できるようにした。早速呼び出してみてくれ」

一夏達は言われた通りにISからデュエルディスクを呼び出す。

すると、待機状態のISから左腕にデュエルディスクが現れる。

「「「「「おおー！！」「」「」「」」

一夏達はデュエルディスクにデッキをセットし、早速デュエルを開始する。

話し合いやくじ引きやジャンケンなどを行い、このような対戦カードとなる。

一夏は遊星。

箒はアキ。

セシリアは龍亞。

鈴音はクロウ。

シャルロットは龍可。

ラウラはジャック。

遊星達もI Sからデュエルディスクを呼び出してデッキをセットし、お互いの準備は完了である。

『デュエル!!!』

先攻は遊星から。

「俺のターン！ モンスターを裏守備表示でセット。カードを2枚伏せてターンエンド。さあ、一夏。お前のターンだ！」

一夏は初めてのデュエルにドキドキしながらデッキトップのカードに触れる。

「俺のターン、ドロー！ 『氷結界の武士』を召喚！」

LV4 氷結界の武士

水属性 戦士族

ATK／1800 DEF／1500

一夏の前に氷の鎧を身に纏った武士が現れる。

「氷結界の武士で裏守備表示モンスターを攻撃！」

氷結界の武士は氷の刀を振り上げる。

「残念だが、『シールド・ウィング』は1ターンに2度まで戦闘では破壊されない！」

LV2 シールド・ウィング

風属性 鳥獣族

ATK／0 DEF／900

遊星の前に緑色の鳥が現れ、氷結界の武士の攻撃を防ぐ。

「くっ、ターンエンドだ……」

「俺のターン。『マックス・ウォリアー』を召喚！」

LV4 マックス・ウォリアー

地属性 戦士族

ATK／1800 DEF／800

「マックス・ウォリアーで氷結界の武士を攻撃！」

「相打ち狙いか!?!」

「マックス・ウォリアーの効果、このカードが相手モンスターに攻撃する時、攻撃力を400ポイントアップさせる！」

ATK／1800↓ATK／2200

「げっ!？」

マックス・ウォリアーの槍が氷結界の武士を貫き、破壊する。

「くっ……」

LP4000↓LP3600

攻撃が終わると、マックス・ウォリアーの攻撃力が元に戻る。

ATK／2200↓ATK／1800

「そして、このカードが相手モンスターを破壊した時、次の俺のスタンバイフェイズまでレベルは2となり、攻撃力と守備力が半分になる」

LV4↓LV2

ATK／1800 DEF／800↓ATK／900 DEF／400

「ターンエンド」

「俺のターン、ドロー!」

（シールド・ウィングはともかく、今ならマックス・ウォリアーを倒せる!）

「『氷結界の軍師』を召喚！」

扇子を持った見事な白髭の老人が現れる。

L V 4 氷結界の軍師

水属性 魔法使い族

ATK／1600 DEF／1600

「氷結界の軍師の効果で、『氷結界の術者』を墓地に送り、デッキからカードを1枚ドローする！」

一夏が引いたカードは『氷結界の三方陣』。

「氷結界の軍師でマックス・ウォリアーに攻撃！」

「罠カード、オープン！ 『くず鉄のかかし』！」

「なっ!？」

マックス・ウォリアーと氷結界の軍師との間にくず鉄で作られたかかしが現れ、氷結界の軍師の攻撃を防いだ。

「くず鉄のかかしは相手モンスターの攻撃を一度だけ無効にする。そして、このカードは墓地に送らず、再びセットする」

くず鉄のかかしはカードの中に入り、再びセットされる。

（か、堅い……全然ダメージを与えられない……）

「タ、ターンエンド……」

「俺のターン！」

遊星はドローし、メインフェイズにて、マックス・ウォリアーのレベルと攻撃力と守備力が元に戻る。

LV2↓LV4

ATK／900 DEF／400↓ATK／1800 DEF／800

遊星は引いたカードを見て小さく笑う。

「俺は『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

LV3 ジャンク・シンクロン

闇属性 戦士族

ATK／1300 DEF／500

「じゃ、ジャンクロン!？」

相棒の登場に驚く一夏。

《悪いな、一夏。本気で行かせてもらうぜ!》

ジャンク・シンクロンはキラーンと目が光らせると、腰のレバーを引く。

「レベル2のシールド・ウイングに、レベル3のジャンク・ウォリ

アーをチューニング！」

三つの星から輪となり、シールド・ウィングが中に入り、二つの星となる。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！」

LV2+LV3↓LV5

「シンクロ召喚！ 出でよ、『ジャンク・ウォリアー』！！」

LV5 ジャンク・ウォリアー

閥属性 戦士族

ATK／2300 DEF／1500

「や、ヤバイ……」

一夏はサアーと一気に血の気が引く。

「ジャンク・ウォリアーで氷結界の軍師を攻撃！ スクラップ・フイスト！」

《覚悟しろ、一夏！！》

ジャンク・ウォリアーは右拳に巨大なオーラを纏って氷結界の軍師を破壊する。

「くっ！」

LP3600↓LP2900

「そして、マックス・ウォリアーでダイレクトアタック！」

マックス・ウォリアーの槍が一夏の体を貫く。

「ぐあっ！」

LP2900↓LP1100

一気にライフポイントが削られ、一夏は唇を噛む。

（強い……流石は遊星。異世界の最強のデュエリストと言われるだけのことはある……でも！）

「遊星！ 俺は最後まで諦めないからな！ そうじゃなきゃ、ラウとこのデッキのみんなに申し訳ないからな！」

「ああ！ お前の全力を見せろ、一夏！」

「行くぜ、俺のターン！」

一夏の運命のドローで引いたカードは……。

（氷結界の舞姫……そうか！）

「手札から魔法カード、『愚かな埋葬』を発動！ デッキから氷結界の水影を墓地に送る！ 更に、もう1枚魔法カード『サルベージ』を発動！」

「サルベージ？」

「サルベージの効果で自分の墓地から攻撃力1500以下の水属性モンスター2体を手札に加える！俺は墓地から氷結界の術者と氷結界の水影を手札に加える！」

（一夏、どんなコンボを見せてくれるんだ？）

遊星は一夏がどんな戦法をとるか楽しみにしている。

「そして、これが逆転の魔法カード『氷結界の三方陣』を発動！」

フィールドに氷結界の特別な魔法陣が現れる。

「手札の『氷結界』と名の付いたモンスター三種類を相手に見せ、効果発動。俺は、氷結界の舞姫、氷結界の術者、氷結界の水影を見せる」

遊星に見せた三体のモンスターが魔法陣の円の三カ所に立つ。

「そして、相手フィールド上のカードを1枚破壊する。俺はジャンク・ウォリアーを破壊！」

ジャンク・ウォリアーが三方陣から放たれる吹雪に凍結し、粉々に破壊される。

「ジャンク・ウォリアー！？」

《おのれ、一夏あああああああっ！！》

ジャンク・ウォリアーは叫びながら墓地に行く。

「最後に手札から『氷結界』と名の付いたモンスターを特殊召喚する。氷結界の舞姫を特殊召喚！」

LV4 氷結界の舞姫

水属性 魔法使い族

ATK／1700 DEF／900

一夏の前に可愛らしい踊り子が現れ、一夏に振り向いてウィンクする。

「一夏あ……私以外の女と……後でお仕置きだからな！」

（俺にどんなお仕置きをするんですか、愛しの箒さん……）

隣でデュエルしている箒が嫉妬の目で一夏と氷結界の舞姫を睨み、一夏はビクビクと震えながらはデュエルを続行する。

「お、俺は氷結界の術者を通常召喚する！」

LV2 氷結界の術者

水属性 水族

ATK／1300 DEF／0

不思議な氷の剣を持つ術者が降り立つ。

「氷結界の舞姫の効果。自分フィールドにこのカード以外の『氷結界』と名の付いたモンスターがいる時、手札の『氷結界』と名の付いたモンスターを任意の枚数見せる事で相手フィールド上にセットされた魔法・罠カードをその枚数分持ち主の手札に戻す。氷結界の

水影を見せ、遊星のくず鉄のかかしを手札に戻す！」

氷結界の舞姫は両手に持つ雪の結晶の形をした武器を投げ、くず鉄のかかしを遊星の手札に戻す。

（くず鉄のかかしが戻された……一夏、ナイスなコンボだ。次の手は多分……）

遊星は一夏の次にする事を読んだ。

「俺は、レベル4の氷結界の舞姫に、レベル2の氷結界の術者をチューニング！」

氷結界の術者は二つの星から輪となり、氷結界の舞姫が中に入り、四つの星となる。

L V 4 + L V 2 ↓ L V 6

（やはり来るか、一夏のシンクロモンスター！）

「今こそ蘇れ、全てを氷結させる古の氷龍！ その強大なる力にて、仇なす者を打ち砕け！」

フィールド全体が吹雪で凍り付き、氷河期のような氷の地面となる。

「シンクロ召喚！ 解放せよ、『氷結界の龍 ブリューナク』！！」

氷の地面を突き破り、現れたのは、氷結界の一族が古くから守り続けた強大な力を持つ、第一の氷龍。

《グオオオオオオオ——ッ!!!!》

LV6 氷結界の龍 ブリユーナク

水属性 海竜族

ATK／2300 DEF／1400

氷結界の龍 ブリユーナクは咆哮を上げて遊星を威嚇し、睨みつける。

（面白い……勝負だ、一夏！）

遊星は左腕のデュエルディスクで身構える。

第50話 星屑の龍VS氷龍（後編）（前書き）

遂に遊星VS一夏のデュエル回が終わりです。

いやー、大変でした。

氷結界デッキは持っていないから遊戯王Wikiとか見て何とかデュエル構成を考えました。

次回から原作で一夏と箒のお盆祭りイベントです。

では、どうぞ！

第50話 星屑の龍VS氷龍（後編）

遊星とデュエルしている一夏は氷結界デッキの切り札の一枚である、氷結界の龍 ブリューナクを召喚した。

「氷結界の龍 ブリューナクの効果発動！ 手札を任意の枚数墓地に捨てて、その枚数分だけフィールド上に存在するカードを持ち主の手札に戻す。俺は手札を2枚捨て、マックス・ウォリアーと伏せカードを遊星の手札に戻す！ ブリザード・バウンス！！」

「何だと！？」

氷結界の龍 ブリューナクの赤い瞳が光ると、マックス・ウォリアーと伏せカードが氷に包まれ、遊星の手札に戻る。

「俺のフィールドがから空きに……」

「これで遊星を守るものは無い。これで決めるぜ！ 俺の手札の最後の1枚、魔法カード『巨大化』！」

「そのカードは！」

「巨大化は自分のライフが相手より下の場合、装備モンスターの攻撃力は倍の数値になる！ よって、氷結界の龍 ブリューナクの攻撃力は……」

氷結界の龍 ブリューナクの体が二倍近くに大きくなり、攻撃力も二倍となる。

ATK／2300↓ATK／4600

「攻撃力、4600……!?!」

「これで俺の逆転勝ちだ! 氷結界の龍 ブリユーナクで遊星にダイレクトアタック! ブリザード・ブレイカー!!!」

氷結界の龍 ブリユーナクの口に冷気が集中し、一気に放出される。

(勝った!!!)

一夏は拳を強く握り、そう確信した。

誰が見ても一夏の勝利は確定だった。

しかし。

(遊星、笑っている……?)

遊星は瞳を閉じて、口元に笑みを浮かべていた。

「悪いが、一夏。俺はそう簡単には負けられない」

遊星は手札から1枚のカードを指に挟む。

「手札から、『ジャンク・ディフェンダー』を守備表示で特殊召喚
!」

「ええっ!?!」

遊星のフィールドに上半身で巨大な腕を持つロボットが現れる。

LV3 ジャンク・ディフェンダー

地属性 機械族

ATK／500 DEF／1800

「俺のターンにモンスターを特殊召喚するなんて……」

「ジャンク・ディフェンダーは相手のモンスターがダイレクトアタックする時、手札から特殊召喚できる。まだ俺の敗北じゃないぜ」

「くっ……」

氷結界の龍 ブリューナクの攻撃でジャンク・ディフェンダーを凍結させ、破壊する。

（ありがとう、ジャンク・ディフェンダー。お前のお陰で助かったよ）

遊星はジャンク・ディフェンダーに礼を言う。

一夏は手札の枚数は0で、これ以上何もできない。

「ターン、エンド……」

（だが、ブリューナクの攻撃力は4600。そう簡単には破れないはずだ）

「俺のターン」

遊星はデッキトップに指を置く。

（このままじゃ、一夏に勝つことは出来ない。デッキのカード達よ、俺に応えてくれ……）

遊星は祈るようにドローする。

「……ドロー!!」

遊星のドローカードは……。

（良い答えだ、カード達よ!）

「俺は『デブリ・ドラゴン』を召喚!」

《よっしゃあ! 俺、参上だぜ!》

L V 4 デブリ・ドラゴン

風属性 ドラゴン族

A T K / 1 0 0 0 D E F / 2 0 0 0

「ジャンクロンの次はお前かよ!?」

《やかましいわ! 遊星、とっとと始めようぜ!》

「ああ。デブリ・ドラゴンの効果で、墓地から攻撃力500以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する! 蘇れ、ジャンク・ディフェンダー!」

墓地からジャンク・ディフェンダーが蘇る。

「手札から魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動！ 手札の『ボルト・ヘッジホッグ』を墓地に捨て、デッキから『チューニング・サポーター』を特殊召喚！」

遊星のデッキから中華鍋を頭に被ったロボットが現れる。

LV1 チューニング・サポーター

光属性 機械族

ATK／100 DEF／300

「レベル1のチューニング・サポーターとレベル3のジャンク・デIFエンダーに、レベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

デブリ・ドラゴンが咆哮をあげ、四つの星から輪となり、チューニング・サポーターとジャンク・デIFエンダーが中に入る。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！ シンクロ召喚！ 飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！！」

遊星のエースモンスター、スターダスト・ドラゴンが現れる。

LV8 スターダスト・ドラゴン

風属性 ドラゴン族

ATK／2500 DEF／2000

「スターダスト・ドラゴン……」

《まさか、この俺を呼ぶことになるとはな。やるじゃないか、一夏》

「だけど、スターダスト・ドラゴンの攻撃力じゃ、巨大化で強化されたブリューナクには勝てない！」

《確かにそうだ。だが……》

「チューニング・サポーターの効果、このカードがシンクロ召喚の素材となり、墓地へ送られた時、デッキからカードを1枚ドローする。このドローで俺が勝つか、一夏が勝つかが決まる」

遊星の言葉に、一夏は心臓の鼓動が早くなる。

遊星は目を閉じ、デッキからカードをドローする。

「ドロー!!」

遊星の引いた運命のカードは……。

「……来た、逆転のカード！」

「何!？」

「俺はカードを1枚伏せ、速攻魔法『ダブル・サイクロン』を発動！ 自分フィールドの魔法・罠カードと相手フィールドの魔法・罠カードを1枚ずつ破壊する！ 俺は今伏せた『リミッター・ブレイク』を破壊！」

「そのカードはまさか、最初にくず鉄のかかしと一緒に伏せたカード!？」

「その通りだ。そして俺は、ダブル・サイクロンで巨大化を破壊す

る！」

氷結界の龍 ブリユーナクに装備された巨大化が破壊され、攻撃力が元に戻る。

ATK／4600↓ATK／2300

「ブリユーナク！」

「そして、破壊されたリミッター・ブレイクの効果、このカードが墓地に送られた時、手札・デッキ・墓地から『スピード・ウォリアー』を特殊召喚する！」

デッキからスピード・ウォリアーが現れる。

LV2 スピード・ウォリアー

風属性 戦士族

ATK／900 DEF／400

（ダブル・サイクロンのデメリット効果を逆手に取り、モンスターを特殊召喚するコンボ……遊星、すげえ……）

「行くぞ、一夏！ スターダスト・ドラゴンで、氷結界の龍 ブリユーナクを攻撃！ シューティング・ソニック！！」

スターダスト・ドラゴンは白銀の閃光を放ち、氷結界の龍 ブリユーナクを貫く。

「くっ！」

LP1100↓LP900

そして今度は一夏のフィールドが空きとなる。

「そして、これが最後の攻撃だ！ スピード・ウォリアーで、一夏にダイレクトアタック！ ソニック・エッジ！！」

スピード・ウォリアーのトドメの開脚蹴りで一夏を蹴り倒す。

「ぐあああああっ！」

LP900↓LP0

一夏のライフポイントは0になり、緊張が解けてその場に座る。

「あーあ。負けちゃったな……」

「大丈夫か？」

「やっぱり遊星は強いな。結局ライフを削れなかったぜ」

「だが、一夏の氷結界デッキも強かった。とても初心者とは思えない強さだったぞ」

遊星は一夏に手を差しだし、座った一夏を立ち上がらせる。

「ははっ、遊星にそう言ってもらえると嬉しいな。また、デュエルしてくれるか？」

「もちろん。デュエリストが己を高め合うデュエルを拒む理由は無

いからな」

「今度は絶対に俺が勝つぜ！」

「望むところだ！」

遊星と一夏はそのまま固い握手を交わし、次のデュエルを約束する。

「一夏……」

ギクッ!?

振り向いた先には、アキとのデュエルを終えた箒が刀を持って一夏を睨みつけていた。

「な、何でしょうか？ 箒さん……?」

「私というものがあひながら、氷結界の舞姫に現を抜かしよって！」

「いやいやいや！ 俺がいつ現を抜かしたんだよ!?!」

「問答無用だ！ 天誅うっ!!」

「うわああああああああっ!!??」

一夏は全速力で逃げ、箒は刀を振り回しながら追う。

「箒ったら、精霊に嫉妬するなんてね」

「アキ。箒のデュエルとのもうだった?」

「ええ。箒の真六武衆デッキはかなり強かったわ。私も結構危なかったし」

「負けたのか?」

「あら? 私はそう簡単に、勝ち譲らないわよ」

「そうだな。俺もデュエルするのが楽しみだ」

「その前に私と久しぶりにデュエルをする?」

「ああ。行くぞ、アキ」

「ええ」

「「デュエル!!」」

一夏は箒に追っかけられながら必死にこの場を乗り切る手段を考える。

（どうする、どうする！？ このままじゃ箒の天誅を喰らうのがオチだぞ！？ 箒も舞姫に嫉妬するなよ！ って、あれ……？ 舞姫と言え……）

その時、一夏は何かを思い出す。

（箒の実家の篠ノ之神社って……）

一夏は昔、剣道道場で通っていた篠ノ之神社の縁を思い出す。

（確か、千冬姉と束さんが言ってたな……よし、これだ！）

一夏は一発逆転の打開策を見つけ、急停止して箒を見つめる。

「箒！！」

「っ！？ な、何だ、一夏！！」

「今年の篠ノ之神社のお盆祭りで、箒の神楽舞を俺に見せてくれ！」

「え……？ ええええええええええええええええつ！？！？」

二夏の打開策に筭は体がガクガクと震え、驚愕して叫ぶ。

「そ、そそ、それだけは絶対にダメだ！ お前にだけは絶対に見せるわけにはいかない！！」

箒は首を左右に激しく振り、一夏の頼みを全力で拒む。

「……箒、俺はお前の何だ？」

一夏は真剣な表情で箒を見つめた。

「うっ!？」

「俺は箒のただの幼なじみか？ それとも、ただの男友達か？」

すると、箒はそれを否定するように断言する。

「ち、違う！一夏は私と将来を誓い合った恋人だ！！」

「なら、恋人であり、将来の夫の俺に神楽舞を見せてくれるよな？
いや。寧ろ、見せない訳がないよな？」

「くうっ!?!」

ケロッと笑顔になる一夏に箒は一気に顔が真っ赤になる。

「し、し、仕方ない……その代わり、ちゃんと、来るんだぞ……」

「ああ! 楽しみにしているよ、箒の神楽舞♪」

「ううっ……」

一夏は勝利者の笑みを浮かべる。

対する箒は敗北者のように体が震えて頭を抱えた。

(ど、どうしよう……今まで、一夏にだけは私の神楽舞を秘密にしていたのに!?!?!?)

箒は自身の小さい頃からのトラウマの一つを克服する時が遂に来てしまったのだ。

第51話 剣の巫女（前書き）

一夏と箒ちゃんのデート回です！

と言っても、次回に続きますが。

書いていて思ったことは、やっぱり箒ちゃんは現代に滅びつつある
大和撫子だね。

黒髪長髪の大和撫子は、やっぱり日本男子の憧れですな。

第51話 剣の巫女

八月のお盆週。

箒は生家である篠ノ之神社にいた。

しかし、現在進行形でかなり混乱していた。

（ど、どうしよう……一夏が、一夏が私の神楽舞を見にくる……）

幼い頃、自身の剣道の強さから同級生の男子からに男女と言われて、虐められたことから、女らしいことをしていることが箒のトラウマになっているのだ。

一夏に『女らしいことは似合わない』と言われたくないために、今まで秘密にしていたのだ。

その一夏が今夜、箒の神楽舞を見にやってくる。

《箒、まーだ戸惑っているのか？》

デブリ・ドラゴンがため息をつきながら器用な手で茶碗を持ってお茶を飲んでいる。

「仕方がないだろ！ もし、一夏に似合わないと言われたら……」

《……いくら一夏が鈍感な阿呆でもそんなことは言わないよ。寧ろ、惚れた女の舞を見たら惚れ直すかもしれないぞ？》

ピクッ。

「ほ、惚れ直す……?」

《少なくとも、今の箒はセシリア達も絶対に羨むぞー? 後で写真を撮って見せてやるか?》

「ダメに決まっているだろ!? 下手をすれば弄りのネタにされる!」

《あのさ、少しは自分に自信を持ちましょうよ、箒ちゃん……まあ、龍亞から借りたD・カメランとD・ビデオンに写真と撮影を頼んでいるけどな……》

デブリ・ドラゴンは箒に聞こえないように小さな声で呟いた。

すると、箒の叔母の雪子が部屋の外から話しかける。

「箒ちゃん。そろそろ時間よ」

「あ、は、はい!」

「うふふ。デブリちゃんが言っていた箒ちゃんの恋人もちゃんと来ているわよ」

箒の顔が一気に強張る。

「っ!?!?」

《頑張れよ、箒》

「い、行ってくる！」

箒は半分ヤケクソに気味に部屋を飛び出した。

控え室に残されたデブリ・ドラゴンはお茶を飲み干して立ち上がる。

《さてと、俺も行きますかな。頼むぞ、ディフォーマー撮影部隊》

デブリ・ドラゴンが呼ぶと、カメラとビデオカメラの変形ロボットが現れる。

《くれぐれもみんなにバレないようにな。これ、雪子叔母さんから許可を一応貰っているけど、箒からしたら盗撮だからな》

《了解！ シャッターチャンスは逃さないぜ！》

《最高の映像作品にしてやるぜ！》

《よし、行こう！》

デブリ・ドラゴン達は精霊化で半透明になり、行動するのだった。

神楽舞が始まる午後六時に近づくにつれ、篠ノ之神社に参拝客が集まっている。

その中に、箒の恋人である一夏は席の最前列に座っていた。

（始まるのは、後五分くらいか……）

その両肩には、一般人には見えないが、小さくなっているジャンク・シンクロンとスターダスト・ドラゴンが楽しみにして座っていた。

《箒の舞、楽しみだな》

《まさか、箒に剣道以外にもこんな特技があったとはな》

《マスター達も見に来れば良かったのにな》

《仕方ないだろ。遊星はあの計画のために動いているんだからな》

「ん？ スターダスト、計画って何だ？」

《それは秘密だ。後々に分かる。それより、箒の気配を感じる。そろそろだぞ》

スターダスト・ドラゴンが言い終わった直後に、篠ノ之神社の神楽舞が始まった。

奥から出てきた箒に一夏は目を疑った。

何故なら一夏の目にはいつもとは全く違う姿の箒が映っていたから

だ。

今の箒の格好は純白の衣と袴の舞装束に身を包み、金の飾りを装っており、いつもの箒よりもぐっと大人びている。

それだけではなく、神秘的な雰囲気も纏い、息を呑むような美しさがあった。

箒は刀を鞘から抜き、刀を右手に、扇を左手に持つ。

日本古来の楽器が演奏され、箒は篠ノ之流の神楽舞を踊る。

《わお……》

《なるほど、これはこれは……》

ジャンク・シンクロンとスターダスト・ドラゴンが箒の神楽舞を見て、今までにない感動を体験する。

神楽舞をしている箒は『剣の巫女』の名にふさわしい厳格さと静寂を兼ね備えていた。

（箒、凄く綺麗だ……）

一夏は瞳の瞬きをせず、箒を見つめた。

それほどに、箒が魅力的だったからだ……。

無事に神楽舞が終わった箒は控え室に着くと、その場に座り込んだ。

「はう……」

《箒、お疲れ様。冷たい麦茶だ》

「ありが、とう……」

箒はデブリ・ドラゴンから麦茶を貰うと、一気に喉に流し込んだ。

「今までで一番緊張した……」

《おーい、倒れるなよー？》

コンコン。

ドアをノックする音がする。

（雪子叔母さんかな？）

「どうぞ」

しかし、入ってきたのは雪子ではなかった。

「よっ、お疲れ、箒」

一夏だった。

「一夏あ!？」

一夏は控え室に入ると、箒は慌てて身形を整えてお互いに正座をし、緊張しながら二人は話す。

「えっと、その……」

「う、うむ……」

「綺麗だった……」

「え……?」

「神楽舞をしている箒が凄く綺麗で、目を離せなかった。それで……」

「そ、それで……?」

「改めて、箒に惚れ直したよ……」

「っ——!？」

ボンツと一瞬で顔が真っ赤に染まる箒。

一夏の頬も真っ赤に染まりながら、口を開く。

「あ、あのさ、この後……夏祭り、一緒に行かないか？ 八時から
の花火も一緒に……」

それは一夏からのデートのお誘いだ。

「だ、だが！ 私には篠ノ之神社の巫女の役目が……」

《箒！ 雪子叔母さんが夏祭りに行っても良いだって！》

今まで静かだと思っていたデブリ・ドラゴンはちゃっかり雪子に手を回していた。

雪子は控え室に入ると、箒の手を引っ張って連れ去った。

「お、お、叔母さん！？」

「ほらほら、急いで。まずはシャワーで汗を流してきてね。その間に叔母さん、浴衣を出しておくから」

「あ、あ、あのっ」

「いいからいいから」

箒の反論を許さず、強引に母屋まで連れて行く。

そして、控え室を出ようとした一夏だが、デブリ・ドラゴンに止められた。

「どうした、デブリ？」

《ほい、これ》

「ん？ 何だこれ——デブリ、これを幾らで譲ってくれるか？ お前の言い値で買うぞ」

急に一夏の顔が真剣そのものになる。

デブリ・ドラゴンが見せたのは、先ほどの神楽舞を踊った時の箒の写真だった。

しかも、ベストアングルで箒の凜とした美しい神楽舞がそのまま写し出されていた。

《お代はいらないよ。その代わり、花火の時は二人きりのところに行くんのだぞー》

「最初からそのつもりだ。じゃあ、これは貰ってくぜ」

一夏はその写真を大切そうに仕舞った。

数十分後、箒は浴衣に着替えて一夏と合流する。

「えっと……浴衣、似合っているよ、箒」

「あ、ありがとう……」

一夏は左手を差し出す。

「その、離れるといけないから……」

「わ、わかった……」

箒は右手で一夏の左手を優しく握る。

「行こうか、箒」

「ああ……」

二人は緊張しながら夏祭りデートを始めるのだった。

おまけ。

《よし、行ったぞ。カメラン、ビデオン。頼んだぞ》

《了解!》

木の影に隠れているデブリ・ドラゴンはカメランとビデオンに指示を出して、一夏と箒のデートの撮影を開始させる。

《それにしても初々しいな。マスターとアキの初デートを思い出すぜ》

ジャンク・シンクロンはうんうんと頷きながら思い出す。

《……なあ、こんなストーリーカーみたいな事をして良いのか?》

スターダスト・ドラゴンは呆然としながら言う。

《問題ない。俺は箒の相棒だから、デートを見守る義務があるのだ!》

《それに、これは精霊達の宴会の肴になるからな!　しっかりと見ておかなきゃな!》

デブリ・ドラゴンとジャンク・シンクロンは堂々と言う。

《はあ……全く、コイツらときたら……》

スターダスト・ドラゴンは大きなため息をついたが……。

《ま、いつか……》

遂には、スターダスト・ドラゴンも尾行に参加するのだった。

.

第51話 剣の巫女（後書き）

一夏達のチーム名の候補がとりあえず決まりました。

『フューチャーズネクサス』

意味は、未来への絆です。

どうでしょうか？

あくまで候補です。

第52話 夏の夜の想い（前書き）

いよいよ大学が始まりました。

更新速度はかなり遅くなりますが、出来るだけ頑張りますので。

感想の返信は極力すぐに行います。

第52話 夏の夜の想い

一夏と箒は篠ノ之神社の夏祭りデートをしていた。

二人は初々しく手を繋いで出店を回る。

しかし、そんな時にある者が声をかけた。

「――あれ？ 一夏……さん？」

「おー、蘭か」

（……誰だ？）

そこにいたのは、アキとは微妙に色が異なるが、見事な赤い髪をした可愛らしい少女がいた。

「えっと、一夏。この子は……？」

「紹介がまだだったよな。こっちが五反田蘭。ほら、前に話した俺の中学の友達、弾の妹だ」

「五反田蘭です」

箒に対して事務的なお辞儀をする蘭。

「で、こっちが俺のファースト幼なじみの篠ノ之箒だ」

「篠ノ之箒だ。よろしく」

「よろしく」

箒も事務的なお辞儀をする。

その際、蘭の瞳に一夏と箒が手を握っているのが映った。

（もしかして……）

蘭は一瞬で絶望の縁に立たされてしまう。

一方、木の影に隠れていた精霊達は突然の事態にハラハラドキドキする。

《じゃ、ジャンクロン！ あの子も赤髪娘は何者だ！？》

《お前も言うか、デブリ！ あれは一夏の中学時代の友人、五反田弾の妹の蘭だ！ あの子も一夏のフラグ犠牲者の一人だ！！》

《何だとお！？ くっ、せっかく二人の夏祭りデートだと言うのに、セシリア達以外にもまだ邪魔者が居たとは！》

《ってか、状況が一気に修羅場と化しているぞ!？ 一夏はどう乗り切るつもりだ!？》

デブリ・ドラゴンとジャンク・シンクロンは軽く混乱しながら見守る。

《まあ、これも一つの試練だな。この程度の苦難を乗り越えなきゃな》

スターダスト・ドラゴンは二体に比べてかなり落ち着いている。

蘭はジッと箒を見て口を開いた。

「すみません、箒さん。少しお話をしたいのでちょっと良いですか?」

「……わかった。一夏、少し待っていてくれるか? すぐに戻る」

「ん? ああ、わかったよ」

箒と蘭は出店の間を抜け、人のいない林の近くで話す。

「……箒さん」

「何だ？」

「箒さんは……一夏さんと、付き合っているんですか？」

蘭は体を震わせながら勇気を振り絞って箒に聞く。

「……ああ、そうだ。一夏と私は恋人同士だ。そして、将来を誓い合った仲だ」

箒は隠すことなく堂々と蘭に明かした。

それが一夏の恋人となった箒の義務だと思ったからである。

「そう、ですか……」

蘭は眼からポロポロと涙を流す。

「蘭……」

箒は蘭に送る言葉が一つも見つからなかった。

「箒さん!!」

蘭は涙を流しながら箒の目をまっすぐ見つめる。

「私、諦めません……一夏さんの事、諦めませんから!!」

箒は臆する事なく蘭を見る。

「私も一夏を手放すつもりはない。何があっても一夏を護る!!」

箒は自分の覚悟を見せ、蘭は力無く笑ってお辞儀した。

「わかりました……箒さん、私はこれで失礼します。一夏さんによろしく伝えてください……」

頭を上げると、蘭はその場から逃げるように立ち去った。

箒は心に淡い痛みを感じながら一夏と合流した。

「あれ？ 箒、蘭は？」

「……帰った」

「え？ どうして……？」

「それは、教えられない……一夏、次会ったときにその事には一切触れるなよ。わかったな？」

箒は少々暗い表情を浮かべ、一夏は頷いた。

「……わかった。じゃあ、デートの続きに行こうか」

「うん」

一夏と箒は再び手を繋いでデートを再開する。

そして、花火の時間が近くなり、一夏と箒は秘密の穴場へと向かった。

そこは背の高い針葉樹が集まってできたこの林の裏には、ある一角だけ天窓を開けたように開いている。

「おー、変わっていないな。ここも」

「そうだな。私も久しぶりに来たが、ここが変わっていないくて安心した……」

ちなみに、この場所を知っているのは一夏と箒と千冬と束だけである。

花火までまだ少し時間があり、箒はチラッと一夏を見た。

一夏は花火を楽しみに待つ無邪気な表情をしていた。

そして、箒は何故そう思ったのか、ある不安が頭をよぎり、心を一気に締め付ける。

（もし、また一夏と離れ離れになったら……？）

箒は小学生の頃に転校して離れ離れになった日々を思い出す。

（離れ離れになっている間に、一夏が誰かに奪われたら……一夏に二度と会えなくなったら……？）

箒の心にとてつもない恐怖心が覆い尽くされる。

（嫌……そんなのは嫌だ！！ 絶対に、絶対に一夏を……一夏を失いたくない！！！）

目頭に涙を浮かべ、箒は唐突に一夏に抱きついた。

「ほ、箒！？ どうしたんだ？」

「……一夏、私はお前が大好きだ。愛している……」

箒の一夏を抱きしめる力が強くなる。

一夏は箒の様子があまりにも変だと感じ、そのまま優しく抱きしめて聞いた。

「……何があったんだ？」

「私は卑怯で卑劣な女だ。一夏を誰にも渡したくない、失いたくない気持ちが……一夏を私だけのモノにしたいという気持ちが溢れてくるんだ……」

「箒……お前……」

（そんなに、俺の事を想ってくれたのか……）

一夏は目の前で自分を深く想ってくれる箒を愛しく思い、箒の顎をクイツと持ち上げて箒の唇を奪い、舌を入れて大胆な唇を交わす。

そして、花火が打ち上がり、赤、青、緑、黄色と様々な色の光が夜空を美しく照らす。

一夏は箒の唇をゆっくり離し、ニツと笑みを浮かべる。

「箒、俺はずっとお前の側にいるよ。箒の夫になるんだから、俺の心も体も全部箒だけのモノだ。何なら、逃げないように縛ってもいいぞ?」

「一夏、まさかそう言う趣味が……?」

「違うって。心を虜にしろって意味だよ」

「そ、そうか……」

一夏は冗談混じりに言うのと、ようやく箒に笑顔が戻る。

「その代わり、妻である箒も俺のモノだから覚悟しろよな?」

一夏の嫌らしく見える素晴らしい笑顔に箒は背筋に寒気が走った。

「わ、わ、私に何をさせるつもりだ!?」

「ん? そりゃあ、男の子が女の子の子にやって貰いたい憧れやロマンを色々とな……例えば、メイド服や裸エ——」

「きゃ、却下だ！ それ以上何も聞きたくもない！！」

「おいおい、そりゃ無いだろ！？」

「ええい！ この話は後だ！ 今は花火を楽しむぞ！！」

箒は一夏の左腕に自分の腕を絡ませて花火を見る。

一夏は苦笑しながら諦め、今は箒と見るこの花火を目に焼き付けることにする。

夏の夜の思い出は、二人の想いを華やかな火のように美しく輝いている。

おまけ。

《……カメラン、ビデオン。撮ったか？》

《バッチリです！》

《よくやった》

デブリ・ドラゴンが尋ねると、D・キャメランとD・ビデオンは手でグッドサインを送る。

《やりやがったな、一夏。自分からキスするなんて……完全に箒に心を驚掴みにされたな。箒だけど》

ジャンク・シンクロンは二人のラブラブっぷりに呆れ果てて、頭を手を乗せる。

《もう、いつ結婚して新婚夫婦になっても可笑しくないな……》

スターダスト・ドラゴンが思わず呟いた一言に、デブリ・ドラゴンの目はキラんと光り、ニヤリと不気味な笑みを浮かべる。

《それ、良いな……》

《え？ デブリ……？》

《ちょっと、千冬の姐さんのところに行ってくるわ》

デブリ・ドラゴンは突然翼を広げて、IS学園にいる千冬の元へ飛んだ。

《ふふふ、そう言えば出会ったばかりで箒の誕生日プレゼントを用意してなかったからな。楽しみにしているよ！》

デブリ・ドラゴンは何かとてつもない悪巧みを企んでいた。

《スターダスト・ドラゴン、凄く嫌な予感がするんだけど……》

《俺もだ。デブリは一体何をやらかすつもりなんだ……？》

ジャンク・シンクロンとスターダスト・ドラゴンはかなり不安な心境でデブリ・ドラゴンを見送るのだった。

第53話 一夏と箒の擬似夫婦生活！？（前書き）

本日、私にとって最高の1日でした。

なぜなら、IS第一巻のブルーレイに付いてきた応募券で何と、購入者限定スペシャルイベント『IS ワンオフ・フェスティバル』のチケットが当選しました！

Σ（□□）！

メインキャストの、内山昂輝さん、日笠陽子さん、ゆかなさん、下田麻美さん、花澤香菜さん、井上麻理奈さん。

更には、OPアーティストの栗林みな実さん出演のトークショー＆ライブです！

（☆▽☆）

もう、感無量です！

、（≡▽≡）／

第53話 一夏と箒の擬似夫婦生活!?

夏休みのある日、シャルロットは、とある家の前にいた。

『織斑』と書かれた表札の何回も読みながら深呼吸をして。

シャルロットは緊張しながら表札の下のインターホンを押す。

（うー、緊張するな……。一夏の家なんて）

シャルロットは一夏が迎えてくるのを緊張しながらもかなり期待している。

ガチャ!

（来たっ!?!）

しかし、シャルロットの期待が裏切られることとなる。

「はー……い?」

玄関のドアから一夏ではなく、代わりに箒が出てきた。

しかも、見慣れない綺麗な着物を着ていた。

更には、料理や家事で着物を汚さないように着る割烹着をその上に着ていた。

「……箒？」

「シャ、シャルロット……？」

シャルロットはもう一度表札を見たが、何度見ても『織斑』で間違いない。

するとそこにケーキを持ってきたセシリアが来た。

「あ、あら？ シャルロットさん？ 奇遇ですわね……箒さん？」

セシリアも玄関にいる箒を見て、携帯電話のナビと表札を確認する。

「ど、ど、どうして箒さんが一夏さんの家から……？」

「それに、その服装って、日本で昔の人が料理や家事をする時に着物を汚さない物だね……？」

セシリアとシャルロットの困惑気味の質問をする。

「えっと、その、だな……」

箒が困っていると、セシリアとシャルロットの後ろからお望みの人

物が話しかける。

「あれ？ セシリアとシャル、来たのか？」

そこには、ホームセンターの買い物袋を下げた一夏が立っていた。

「一夏！？」

「一夏さん、お聞きしたいことがあります！」

しかし、一夏の両サイドには鈴音とラウラがいた。

「一夏の家、久しぶりね。って、あれ……？」

「ほう、ここが嫁と教官の住ま……何だと？」

鈴音とラウラも玄関にいる箒の存在に驚く。

箒は頭を抱えてこの状況を心の底から呪った。

（ああ、夢の生活も今日で終わりか……）

取りあえず、家の外で話すのもなんなので、セシリア達に上がって貰い、全員がソファ―に腰掛ける。

セシリア達の突き刺すような痛い視線が一夏と箒を睨みつける。

「「「どう言うことか詳しく説明して（ください）（しなさい）（ほしい）（くれ）」」」」

「「はい……」」

一夏と箒はシュンとなりながら重たい口を開く。

「実は、だな……」

「その、一夏が帰省している間、私もこの家で一緒に暮らしているのだ……」

二人のダイナマイトクラスの爆弾発言に四人は思考が停止して完全に固まる。

そして……。

「「ええええええええええええええええー」

「っ!!?!??.?」

四人は、当然のように驚愕の叫びをあげた。

「つ、つ、つまり、一夏さんと箒さんが一つ屋根の下で暮らす……同棲ですよ!？」

「有り得ない、有り得ない、有り得ない！！」

「そ、そんな……じゃあ、朝から晩までずっと一夏とイチヤイチヤを!？」

「ちょっと待て、それ以前に教官にバレたら一夏も箒も絶望的だぞ！？」

《それについては問題無いぞー》

「え？」

部屋に置いていたチューナーズ・カードからデブリ・ドラゴンが現れる。

《だって、俺が千冬の姐さんと交渉して許可を貰ったんだぜ？
夏と箒が短い間だけ一緒に住むのを》

そう、篠ノ之神社の夏祭りの夜にデブリ・ドラゴンが企んだ悪巧みとはこれの事である。

《まあ、交渉は大変だったけどなんとか許してくれてな。あ、ちなみに条件があるよ》

「「「条件？」」「」」

《条件は学生にあるまじき行為をしないことなんだけどな。実際、監視役の俺とジャンクロンが見る限り、一夏と箒はそれをちゃんと守っているよー》

デブリ・ドラゴンがこう言うが、四人にとってはかなり絶望的な状況である。

一夏と箒がそう言う事をしていないとしても、それ以外の生活は言わば擬似的な夫婦生活をしているようなもの。

未だに一夏を諦めずに狙っている四人としてはかなり深刻な問題。

さて、どうするかと悩んでいると、四人の視線が合う。

そして、一瞬で四人はお互いの考えていることを理解した。

（（（今、この時だけ同盟を組む！）））

「みなさん、せっかく集まったのでデュエルをしませんか？」

「良いわね、それ。やろうやろう！」

「うん、賛成！」

「父上と店長のアドバイスを受けて完成した新しいデッキを試すぞ！」

四人はまず一夏の気を箒から離す作戦に乗り出した。

(……そろそろ昼食の時間だな)

箒はソファーから立つと、再び割烹着を身に着ける。

「一夏、今日は人数が多いから昼食は麺類がいいかな？」

「ん？ ああ、そうだな。そろそろ作るか。悪いな、みんな。今から箒と昼食を作るからデュエルしてて待っててくれよ」

「「「え?」」」」

一夏と箒はキッチンに行き、昼食作りを始める。

(「(「い、いきなり同盟第一作戦失敗!?!?」)(「(「

四人は表情には出さなかったが、心が挫けそうになる。

《甘いな、ここ数日で一夏と箒のラブラブ度は夫婦クラスまでランクアップしているんだよ》

《ふっふっふ、俺の作戦をそう簡単には崩せないぜ》

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンはニヤニヤとこの状況を楽しんでいる。

第54話 結ばれた二人（前書き）

今回もラストはやっちゃいました（笑）
／（＾Ｏ＾）／

やっぱり一夏×箒は最高です！

IS ワンオフ・フェスティバルのチケットも入手しましたし、
テンションが上がります！

第54話 結ばれた二人

昼食後、箒は軽く頬を膨らませて不機嫌だった。

何故かと言うと、全然一夏に構えられないからである。

セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラが次々と一夏に話しかけた
りアピールをしまくったりして全然箒が一夏と関われない状態とな
っているからだ。

（むう……一夏は私の恋人なのに。おのれ、少しでも近づくために
4人で同盟を組んだな）

一夏の恋人となったことでかなり勘が鋭くなった箒は一旦部屋から
離れて携帯電話を取り出す。

（お前達が同盟を組んで攻めてくるなら、こちらにも考えがある！）

携帯電話のアドレス帳からある人物の電話番号を開き、連絡する。

連絡を終えた箒は部屋に戻ろうとすると、玄関のドアが開いた。

「織斑先生！」

唐突に予想外の人物、織斑千冬が入ってきた。

「む？ 箒か。ただいま」

「お、お帰りなさい！」

箒は千冬のカバンを受け取る。

「ここはIS学園じゃ無いんだから昔みたいに名前で呼んでも構わないぞ？」

「い、いえ……その……」

「ふっ。どうだ？ 一夏との同棲は？」

千冬が意地悪く微笑むと、箒の顔が真っ赤に染まる。

「その……夢みたいな気分です」

「そうか。さて、玄関のこの靴の数。さてはアイツらが来ているのか？」

「ええ。お陰で一夏と全然近づけられません……」

「なら、私が少し手を貸してやろう」

千冬はそう言うと、リビングに入る。

「千冬姉、おかえり」

「ああ、ただいま」

千冬が入ってきたことにより、セシリア達に緊張が走る。

「さて、監視役のデブリ・ドラゴン、ジャンク・シンクロンを聞かせてもらおうか」

チューナーズ・カードからデブリ・ドラゴンとジャンク・シンクロンが現れ、ビシッと敬礼をする。

《はい、千冬の姐さん！　ここ数日、箒と一夏は仲睦まじく健全な生活を送っていました！》

《後日、その様子を詳しく記載した報告書を写真と同封して提出します！》

「おい！　写真とはどういうことだ！？」

一夏が抗議しようとするが、千冬が手を前に出して一夏を制する。

「ご苦労。取りあえず、何も問題は起きてないようだな。一夏！」

「は、はい！！」

「一応言っておくが、私はまだ甥も姪もいないからな」

「は……え？」

「千冬、さん……？」

一夏と箒が眼をぱちくりと瞬かせながら固まる。

「昨日束から連絡あってな。内容は『箒ちゃんといっくんの子供はいつ見られるの!?』とな。あいつは早く、お前達二人の子供を見たいらしいが、そうもいかない。束には悪いが、少なくとも私が居る限り、IS学園を卒業するまでは気をつけろよ。わかったな?」

「は、はい……」

頷くしかなかった一夏と箒を見ると、千冬は不敵の笑みを浮かべる。

「一夏、今日は帰れないから後は箒と好きにしろ。ただし、その4人は泊まるんじゃないぞ」

千冬は自分の部屋に戻ってスーツに着替え終えると、風のように出て行った。

箒は一夏の元へ行くと、体をもじもじさせながら聞いた。

「い、一夏。一つ、聞いて良いか……?」

「う、うん。何だ……?」

「その、将来……子供は何人欲しいか？」

最強クラスの破壊力のある箒の質問に一夏は悶絶しそうになり、セシリア達はふらっと気絶して数十分は起きなかった。

それから時間が過ぎ、午後4時を回った頃、織斑家のインターホンがなった。

（よし、来たか！）

箒がすぐに出迎え、リビングに案内する。

「邪魔するぞ、一夏」

「ふん、来てやったぞ！」

「みんな、こんにちは」

「おっす、久しぶりだな！」

「「お邪魔します！」」

来たのは、遊星、ジャック、アキ、クロウ、龍亞、龍可だった。

突然の来訪者に驚く一夏達だが、呼んだ張本人は箒であった。

「せっかくだから、みんなでパーティーでもしようと思って遊星達を呼んだんだ。材料は買ってきてくれたから早速料理を作ろう」

箒の作戦は一夏を狙わない公平な立場である遊星達を呼んでセシリア達が一夏にあまり近付けられないようにすることである。

取りあえず料理は遊星、アキ、龍可、一夏、箒、シャルロットが中心に行い、残りのみんなは準備などを行う。

約一時間後にはたくさんの料理が出来上がり、みんなでワイワイ騒ぎながらパーティーをしたのである。

パーティーが終わった後は、みんなでデュエルをしたり（場所が無かったのでデュエルディスクを使用なしで）で時間ギリギリまで楽しんだ。

夜になり、遊星達は駄々をこねるセシリア達を連れてIS学園に戻った。

ようやくセシリア、シャルロット、鈴音、ラウラと言う邪魔者が居なくなり、箒はホッとする。

すると一夏は家に居るはずの二体が居なくなっていることに気づく。

「あれ？ 箒、ジャンクロンとデブリは？」

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンの姿が無く、置いてあったチューナーズ・カードも見当たらない。

「いや、みんなが帰った後から見当たらない」

すると、一夏の携帯電話に連絡が入る。

「遊星？」

『一夏、ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンは俺が連れて帰る』

「えっ？ でも、千冬姉からの監視役……」

『今日ぐらい大丈夫だろ。それと、一夏の部屋にある物を置いておいた。じゃあな、箒によろしくな』

「お、おい！ 遊星!？」

遊星の言ってる意味がわからず、取りあえず一夏は自室に向かった。

そこには小さな袋があり、中を覗いた瞬間……。

「遊星、あんにゃろ……覚えてろよ。だが、感謝する……」

一夏は遊星に恨みと感謝の矛盾した気持ちを向けながら電気を消した暗い部屋で悩んだ。

「一夏？」

気になった箒が部屋に入った。

「どうか、したのか？」

腰を下ろし、無意識に可愛らしい上目遣いで一夏を見る。

プツン。

その時、一夏の中で何かが切れた。

一夏は無言で箒を抱きかかえ、そのまま自分のベッドに移動して降ろす。

「え？ 一夏？ どうしたのだ？」

「悪い、箒、もう我慢できない。大好きだ」

一夏は箒の唇を奪い、貪るように重ね合わせる。

「ま、待つ、のだ、一夏あ……一体、何が……」

困惑する箒に一夏は着物に手をかけた。

「ま、待て！ 千冬さんに言われたばかりだと言うのに……」

「心配するな、遊星からのプレゼントがあるからな」

一夏はそれを箒に見せると顔が林檎のように真っ赤に染まる。

そして、とどめを刺すように一夏は箒の耳元で甘く、優しく囁く。

「今夜は寝かせないからな、俺だけの箒……」

「ああっ、一夏ぁ……そんな……ああん！！」

契りを交わした一夏と箒は更にラブラブになったとさ。

第55話 二律背反の休日（前書き）

さあ、みんな大好きブルーノちゃんのお話です！

これにて、夏休み編は終了となります！

次回からいよいよ文化祭編で、IS学園最強の生徒会長さんの登場です！

第55話 二律背反の休日

チーム5D、Sのスーパーメカニックにして、破滅の未来からやって来た青年、ブルーノ（本名・アンチノミー）。

普段なら、いつも何かしらのメカをいじっているブルーノだが、今現在、街にてある人と待ち合わせをしていた。

その待ち合わせの相手とは……。

「お、お待たせしました！」

一夏達のクラスの副担任、山田真耶である。

いつもの服装ではなく、かなりお洒落した服を着ている。

「それじゃあ、行こっか」

「は、はい！」

二人は一緒に街を歩き、買い物をする。

そこから少し離れた場所で遊星達チーム5D・Sの六人が二人を見守っていた。

「始まったな」

「ええ。山田先生、顔真っ赤ね」

遊星とアキはニヤニヤと二人を見ている。

「おのれ、ブルーノごときが良い女とデートしおって……」

「ジャック、お前が言うなよ……」

ジャックは少々苛立ち、クロウは横で呆れている。

「ブルーノも変わったよね。いつもなら機械をイジっているのに突然山田先生に買い物に付き合ってたなんて」

「でも、機械マニアよりはよっぽど良いわよ。何か表情が生き生きしてるし」

龍亞と龍可はほのぼのとした雰囲気で見守る。

そして遊星達はブルーノと真耶の後をそつと尾行する。

ブルーノと真耶は歩きながら楽しそうに話していると、ブルーノの頭の中に精霊達の声が響いてくる。

《マスター！ 何をやっているのですか！？》

（わっ！？ ビックリしたな……どうしたの？ ワンダー・マジシヤン）

TGの紅一点、ワンダー・マジシヤンが若干怒りながらブルーノに話しかける。

《どうしたのじゃありません！ どうして真耶と手を繋がないのですか！？》

（えっ、でっ、でも……）

《私の調べたところによると、恋する女性は好きな男性から手を握られると胸がキュンとするらしいですよ。さあ、今すぐに山田真耶と手を繋ぐのです。出来れば指を絡ませる恋人繋ぎで！》

（え、ええっ！？）

そう言ってブルーノを混乱させるのは、本を片手に持つTGで頭脳

系を担当する司書の、TG ハイパー・ライブラリアン。

《さあ、やるんだブルーノ！ お前と真耶はお互いの気持ちをわかっているんだぞ！》

そして、ブレード・ガンナーがブルーノを後押しする。

（ブレード・ガンナー……わ、わかったよ）

ブルーノは意を決し、ゆっくりと自分の右手を真耶の左手に近づけて、そのまま握る。

「っ！？ ブルーノ……？」

ブルーノの突然の行為に、真耶は驚きを隠せず、頬を朱に染める。

「えっと……真耶と手を繋ぎたくなって。いや、だったかな……？」

「そっ、そんな事はありません！」

「なら、しばらくこのまま……ね？」

「は、はい……」

ブルーノと真耶はそのまま優しくお互いの手を握りながら買い物続ける。

「ブルーノったら、やるじゃない♪」

アキはニヤニヤしながら見る。

遊星は小さく微笑んだだけだが、それ以外は全員ニヤニヤしている。

「ん……？ 珍しいな、箒から電話だ」

ブルーノと真耶に気づかれないようにマナーモードにした遊星の携帯電話が鳴る。

「もしもし？」

『もしもし、箒だ。遊星、アキ達は今側にいるか？』

「ああ、いるよ。何かあったのか？」

『今、私は一夏の家にいるんだが、セシリア達も来ているんだ。それで、せっかくだから、これから一夏の家でパーティーをしようと思うんだ。できれば遊星達も参加して欲しい』

「わかった。少し待ってくれ、みんなと話してみる」

遊星は携帯電話のスピーカーを手で押さえる。

「みんな、これから一夏の家でパーティーをするらしいけど、参加するか？」

「ブルーノはどうするの？」

アキが問う。

「……これ以上ブルーノと山田先生のデートを尾行するのは無粋だ。ここは大人しく撤退しよう」

アキ達は頷き、遊星は携帯電話で箒と話す。

「箒、みんなの了解を得たよ。何か用意する物はあるか？」

『ありがとう。遊星達には料理の材料を買ってきて欲しいんだ』

「わかった。4時ぐらいまでには一夏の家に行く」

『うん、待っている』

「それじゃあ、また後で」

遊星は携帯電話を切ると、そのままアキ達を連れてその場を去り、パーティーの料理の材料を買うためにスーパーマーケットに向かった。

その後、ブルーノと真耶は色んな店で買い物をして、公園のベンチで一休みをする。

「ふう。色々沢山買ったね」

「はい。でも、ブルーノ。いくら海外を渡り歩いてたからって自分の服とかをあまり買わないのはどうかと思いますよ？」

真耶に指摘され、ブルーノは苦笑を浮かべて頭をかく。

「いや……あはは。ゴメン、真耶。ここ数年間はISの技術を学ぶのに必死でね……あまり考えられなかったよ」

「それは……永遠に離れ離れになったお友達と、遊星君達の為ですか？」

臨海学校の後、真耶はブルーノからネオ童実野シティの未来の話や、今まで生きてきた時間の話を聞いているのだ。

「ああ。それが、この世界に流れ着いた僕の役目だと思っているからね……」

そんな儂い表情を浮かべるブルーノを見た真耶は深い寂しさが心に現れる。

真耶は頭をブルーノの肩に乗せて身をゆだねる。

「真耶？」

「少しは……あなたを想っている人の事も、考えて下さい……」

「えっ？ 真——」

ブルーノは真耶の名前を口にする前に、断たれてしまった。

何故なら、真耶の唇がブルーノの唇を優しく塞いだからだ。

ただ唇を重ねるだけの甘い口付け。

二人は数秒がとても長く感じられ、数十秒後にゆっくりとお互いの唇を離れた。

「真耶……」

「ブルーノ。もう、私からどこにも行かないで下さい……ずっと、私の側にいて下さい……」

今にも泣きそうな表情をする真耶をブルーノは抱きしめる。

「ゴメン……真耶はずっと、僕が帰って来るのを待っていてくれたんだね」

「はい……大好きです、ブルーノ……」

「僕も大好きだよ、真耶……」

二人は再び唇を重ねて優しい口付けを交わす。

おまけ。

ブルーノのIS、デルタ・ストライクの中にいるTG達は号泣していた。

《マスター、良かった……》

《遂に山田真耶と結ばれたのですね！》

ワンダー・マジシャンとハイパー・ライブリアンは顔を両手で覆い隠していた。

《やったな、ブルーノ……》

ブレード・ガンナーは何度も頷いて喜んだ。

そして、TG最強のデルタアクセルシンクロモンスター、ハルバート・キャノンが他のTG全員に呼びかける。

《みんな、よく聞け。ブルーノは今、最愛の女性を見つけることが

できた。これからは何があらうとも、どんな困難が待ち受けたとしても、我々はブルーノと山田真耶をこの命を賭けても守り通すぞ！
！
わかったな！？》

《おおおおおーっ！！！！》

TG達は一斉に腕を高く上げて返事し、ブルーノと真耶を絶対に守り通す、鉄則の誓いをここに立てたのだった。

第56話 生徒会長、更識楯無登場!! (前書き)

遂に楯無さんの登場です!

そして、異世界からあの人も参戦です!

第56話 生徒会長、更識楯無登場!!

IS学園の夏休みが終わり、二学期が始まる。

そして、全校集会が行われた。

内容は9月中程にある学園祭と、新任の教師についてだ。

その新任の教師は言うまでもなく……。

「初めまして。新しく整備部の教師に就任することになったブルーノです。みんな、よろしく」

『きゃあああああああーっ!!!!』

ブルーノが挨拶すると、女子たちはイケメン教師の登場に発狂する。

「やったあ、超イケメン教師!」

「しかも、身長もかなり高くて優しそうだし、早く授業を受けたい!」

「整備部に入って良かった〜!」

「ブルーノ先生って、彼女いるのかな!？」

「教師と生徒の禁断の関係になりた〜い!」

主に、IS学園の整備部の生徒が叫びまくり、テンションが最高潮

に上がりまくっている所為か、真耶の放つどす黒いオーラに気づいてなかった。

（ブルーノは私の恋人です。絶対に誰にも渡しません！）

全校集会だと言うのに、一向に静かになる気配がない。

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

生徒会役員の一人が静かに告げ、ざわつきが静かに消える。

「やあみんな。おはよう」

壇上に水色の髪をした不思議な雰囲気を出す少女が現れた。

「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識楯無。きみたち生徒の長よ。以後、よろしく」

その少女、楯無は人を惹きつける魅力を出していた。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは——名付けて、『各部対抗織斑一夏争奪戦』！」

扇子を開き、ディスプレイに一夏の写真が映し出される。

[illegible]

割れんばかりの叫び声に、ホールが冗談無く揺れた。

「静かに。学園祭では毎年各部活動ごとの催し物を出し、それに対して投票を行って、上位組は部費に特別助成金が出る仕組みでした。しかし、今回はそれではつまらないと思い――」

ビシッと扇子で一夏を指す楯無生徒会長。

「織斑一夏を、一位の部活動に強制入部させましょう！」

再度、女子たちの雄叫びが上がる。

「その話、ちょっと待ってもらおう！」

女子たちの雄叫びを一気に抑える声が響く。

「あなたは確か、不動遊星くん？」

遊星は教師からマイクを借りて楯無と話す。

「生徒会長、行動が少々身勝手じゃないのか？」

遊星はあまりの理不尽な行為に少し怒っていた。

「これはね、一夏くんの責任でもあるのよ？ 一夏くんが部活動に入らないから色々と苦情が寄せられてくるから、生徒会としてどこかに入部させないといけないのよ」

「それで学園祭の投票決戦か。ようするに、一夏がどこかの部活動に入ればいいんだな？」

「まあ、そう言う事ね」

「そうか、それなら……一夏！」

「は、はい！？」

一夏は大きな声で返事をする。

「近日中に完成する俺達の部活動、ライディング・デュエル部に入れ！」

「ライディング・デュエル部……？」

「ああ。前に話したライディング・デュエルの部活動だ。もし入るなら、白式をD・ホイールに改造してやるぞ」

「白式を、D・ホイールに改造！？」

一夏の心はグラッと傾いた。

遊星たちの乗るD・ホイールにずっと憧れていた一夏はどんどん惹かれていく。

「ええ〜っ、それは困るな……」

楯無は苦笑いをしながら扇子で仰ぐ。

「……大方、一夏を生徒会に入れるのが目的なんだろう？」

「あら、バレた？」

楯無は舌をちよつと出して楽しそうに笑う。

「やはりな……それと、一夏。デブリ・ドラゴンがお前にプレゼントしたい物があると言っていた」

「デブリが……？ はっ!？」

一夏はデブリ・ドラゴンからのプレゼントを簡単に予測できた。

（もしかして、この前の神楽舞を始めとする数々の箒の隠し撮り写真!?!?!）

自身の最愛の恋人、箒の写真は、今の一夏にとっては、喉から手が出るほどの物である。

「よし! 遊星、ライディング・デュエル部に入るぜ!！」

多くの好条件から一夏はライディング・デュエル部に入る決意をする。

「ああ、よろしく頼むぞ、一夏。そう言うわけだ、生徒会長。これ

なら問題ないな」

「……仕方ないわね。各部対抗織斑一夏争奪戦は撤回します」

楯無は落ち込んだ様子を見せながら宣言する。

多くの女子たちも落ち込み、箸だけはホッとした。

（よかった……遊星たちの部活動なら一夏も安全だ。デブリ・ドラゴンのプレゼントは気になるが……そこは後で問いだそう）

そして、IS学園に異世界からの新たな訪問者が現れる事となる。

ドオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

突然の地響きと轟音がI S学園に広がる。

女子たちは悲鳴を上げ、混乱の渦となる。

楯無は急いで地響きと轟音が鳴った場所へ足を運び、遊星もその後続いた。

「何、これ……?」

いち早く到着した楯無はポカーンと唾然とした。

I S学園の広い中庭に、無数の壊れた機械や物が山のように積もっていた。

「不法投棄にしては妙ね……ん?」

その山の頂に横たわる人影がいた。

「誰かしら?」

楯無は山を気をつけて登った。

「これ……人の形をした、ロボット？」

それは、かなり巨体の人間の姿をしたロボットだった。

だが、ボディがボロボロで、ところどころがかなり破損している。

そして、追いついた遊星はロボットの姿を見て思わず叫んだ。

「アポリア！！！！」

遊星は山を急いで駆け上り、ロボットに駆け寄った。

それは、ブルーノと同じく破滅の未来を救うために未来から送り込まれた刺客の一人である。

始めは遊星達の敵だったが、戦いの中で人間の心を取り戻し、チーム5D'sに未来への希望を託して散っていった男。

絶望の番人、アポリア。

.

第57話 復活！ 絶望の番人！！（前書き）

遂にアポリアさん復活です！

そこで、アポリアさんのISのアイデアを募集しています！

ISの名前や能力やバックアップをお願いします。

m () m

第57話 復活！ 絶望の番人！！

機能停止したアポリアがIS学園に現れ、楯無は目を丸くした。

「アポ、リア……？ 遊星くん。このロボットさんとお知り合いなの？」

「ああ。二度と会えないと思っていたが……」

遊星はアポリアの頬に触れた。

「「「「「アポリア?!?!?」」」」」

残りのチーム5D'sのメンバーが来て、アポリアを見て驚く。

「アポリア!!」

いち早く龍亞が山を登って、アポリアを見ると、涙を浮かべていた。

「遊星、お願い。アポリアを直して！ お願い!!」

龍亞は遊星にしがみついて必死に頼んだ。

「龍亞……わかった。アポリアは絶対に直してやる！ ブルーノ、手伝ってくれ!!」

「ああ、もちろんだ！ すぐに整備室に運んで修理を行おう!!」

遊星達はISを身に纏ってアポリアを整備室へ運んだ。

残された楯無は扇子で仰ぎながら次に行くことを考えていた。

「この壊れた物の山は後で業者を呼んで……よし、まずは一夏くんの実力を計りますかな」

楯無は扇子を閉じ、山を降りて一夏を探しに行く。

アポリアを整備室に運んだ遊星達はすぐにアポリアの修理に取りかかる。

しかし、ジャックと龍亞と龍可のデュエル、更にはゾーンとのデュエルでかなり大破していて、メカニクの遊星とブルーノの二人でも修理は困難を極めた。

遊星とブルーノはアポリアのボディを少しずつ修理し、ジャック達はそのサポートをする。

それから三時間を費やし、ようやくアポリアのボディがほぼ完璧に修理された。

「あとは、動かすエンジンか……」

「それなら良いのがあるよ」

ブルーノは小さなエンジンを取り出した。

「これは？」

「僕がISのコアを研究して造ったモーメントエンジンだよ。小型だけど、出力はみんなのD・ホイールと同じくらいは出せるよ」

「よし。早速使ってみよう！」

遊星はモーメントエンジンをアポリアに繋ぎ、体に入れた。

「今からアポリアを起動する。ブルーノ」

「オッケー！」

ブルーノはコンピューターを操作し、アポリアを起動させる。

「頼む。目覚めてくれ、アポリア」

遊星に続き、全員がアポリアの目覚めを願った。

アポリアの意識は真っ暗な闇の中にあった。

（暗い……ここは、あの世の世界なのか……？）

すると、アポリアの意識に懐かしい声が語りかける。

『いいえ。あなたは眠っているだけです、アポリア』

それは、アポリアの永遠の友、ゾーンである。

（その声……ゾーンか？ 未来は、未来はどうなった？）

『心配は入りません。不動遊星から希望の未来を受け取りました。未来の世界が破滅することはありません』

（そうか……未来は救われたのだな）

『ええ。ですが、少々問題が起きました』

（問題？ ゾーン、それは一体……？）

『私達の世界とは別次元の世界、異世界に破滅の未来が訪れようとしています』

（異世界……？）

『はい。ですが、チーム5D'sが既に異世界で行動してくれたお陰でその未来が少しずつ変わっています。しかし、それでも破滅の未来を回避するためにはまだ足りません。アポリア、あなたにお願いがあります』

（お願い？ 異世界での歴史の改竄か？）

『いいえ、違います。チーム5D、Sの仲間となり、彼らと共に戦って欲しいのです』

（私が、チーム5D、Sと共に……？）

『はい。私はまだ戦うことはできません。身勝手な話かもしれませんが……アポリアにしか頼めません』

（……わかった。私は君のためにもう一度立ち上がり、戦おう）

『ありがとうございます、アポリア。あなたにも遊星達と同じ力を授けます。ISと呼ばれる異世界の戦う力を』

（ああ。行ってくるよ、ゾーン）

『はい。あなたとチーム5D'sの武運を祈っています……』

アポリアの意識からゾーンは離れ、闇の中に一筋の光が現れる。

アポリアは起動し、ゆっくりと目を開けて起き上がる。

「アポリア！」

「不動遊星……」

「大丈夫かい？ アポリア」

「アンチノミー……無事だったのか？」

「お陰様でね」

アポリアは周りを見る。

「ここは……？」

「アポリア、これから言うことを落ち着いて聞いてくれ」

遊星はこのIS学園の事をアポリアに話す。

「なるほど……」

（まだ彼らにゾーンの事を話すには早い。時期を見計らって話そう）

「不動遊星。そして、チーム5D's。折り入って頼みがある」

「頼み？」

「私がこの世界に来たのが偶然か必然かわからない。しかし、私にはまだやるべき事が残っているはず。君達と共に……戦わせてくれ」

アポリアはゾーンの事は伏せて、極力自然な形で遊星達に頼み、頭を下げた。

ジャック達は驚いたが、遊星はスッと手を差し出した。

「わかった。以前は敵だったが、今度は仲間として共に戦おう。アポリア」

「感謝する」

アポリアは遊星の手を握り、握手をする。

ジャック達は笑みを浮かべ、チーム5D'sの新たな仲間として認めた。

龍亞はふと、視点を変わるとあることに気付いた。

「あっ、みんな見て！」

龍亞が指さすと、アポリアの体の中に入っていたデッキが光を放っていた。

「これは……」

アポリアはデッキを手につ。

すると、デッキは勝手に動き、アポリアの中に入った。

「力が……今までにない力が私の中に感じる……遊星。どこか、派手に暴れられる場所は無いかな？」

「派手に暴れられる場所か。わかった、案内しよう」

遊星はアポリアをISアリーナに案内する。

ISアリーナにて、アポリアは自らのISの力を発動し、その能力や性能を試した。

「これが私の新たな力か……」

（ゾーン。君が託したこの力で私はチーム5D'sと共に戦う！
この世界の未来を救うために！）

新たな決意を胸に秘めたアポリアは、IS学園で働く事になったが、何故か用務員として働く事になった。

主にIS学園の広い庭等の掃除を行っているが、手先が異常に器用なためか、掃除が丁寧で誰が見ても完璧と言えるほど綺麗になっている。

しかし、本当の役職はIS学園と生徒達を守る番人なのだが、敵ら

しい敵が襲ってこないのでアポリアは用務員として平和に過ごしている。

・

第58話 楯無の失敗談? (前書き)

ありやりや?

(◇;)

最近の俺は一体どうしたのでしょうか?

世間でシャルロット党があまりにも多すぎるから、一夏×箒に色々と欲望が暴走しているのかな?

第58話 楯無の失敗談？

「疲れた……」

日がすっかり落ちた夕暮れ。

楯無のIS特別コーチを受け終わった一夏は疲れた体を引きずりながら、自室のドアを開けた。

ガチャ。

「お帰りなさい。ご飯にします？ お風呂にします？ それともわ・た・し？」

——ボタン。

ドアを閉じて一秒、状況を整理する。

（さっきのは夢か幻だろう。いくらなんでも楯無先輩が裸エプロンで待ってることが現実にあるわけがない……これが、もし筈だったら……）

一夏は今まで何回か妄想したシチュエーションに心臓がバクバクする。

（やばい、考えただけで鼻血が……）

「一夏？」

「ふえっ!？」

振り向くとそこには首を傾げた箒がいた。

「ほ、ほ、箒さん!？ 私めに何かご用ですかな!？」

「一夏、口調が変だぞ……。いや、なに。いなり寿司を作ってきたから差し入れを……」

「えっ？ 箒のいなり寿司!？」

一夏はテンションが一気に上がり、すぐに食欲が湧いた。

「それじゃあ、一夏の部屋でゆっくり――」

「箒、その前にちょっとストップ」

「どうかしたのか？」

「……夢か幻で無ければ今、俺の部屋に裸エプロン姿の楯無先輩がいる」

「一夏……」

箒は殺気を体から放出しながら日本刀を取り出すが、一夏は冷静に箒の両肩に手を置く。

「楯無先輩については誤解だ。俺は箒を愛しているから」

一夏の凛々しくも真剣な瞳に箒は顔を赤くする。

「わ、わかった……よし。一夏、ジャンク・シンクロンのチューナーズ・カードを貸してくれ」

「え？ あ、ああ……」

一夏はチューナーズ・カードを箒に渡すと、箒はデブリ・ドラゴンのチューナーズ・カードを取り出す。

「一夏、これを持って五分だけ待っている。いいな？」

箒はいなり寿司の入った箱を一夏に渡し、日本刀を構え、デブリ・ドラゴン、ジャンク・シンクロンを呼び出す。

「二人とも、分かっているな？」

《了解！ いつでも！》

《ドキドキワクワクだぜ！》

「――よし、突入！」

箒たちはドアを勢いよく開け、一夏の部屋に突入する。

「お帰り。私にしまーって、あれ！？ 一夏くんじゃなくて箒ちゃん！？！？」

「更識先輩、人の恋人に手を出した罪は重いですよ！！」

「いやーん！ ちょっとしたお茶目なのにー！」

「裸エプロンでお茶目のレベルですか!？」

「残念でした、下は水着だよ」

「それよりも、何故一夏の部屋にいるんですか!？」

「それは、一夏くんの特別コーチになったから寝食を共に――」

「却下です。今すぐに一夏の部屋から出て行ってください」

「即答!？ それにまだ全部言っていないよ!？」

「問答無用です。一夏は私の恋人です! 婿です!! そして、夫です!!! もし、これ以上何かを言うなら、私を未来の義理の妹として認めてくれた千冬さんを今すぐに呼び出します。いくらIS学園最強でも千冬さんには勝てませんよね？」

「ええっ!？ そ、それだけは勘弁して!!」

「それじゃあ、ちょっと大人しくしてくださいね。デブリ・ドラゴン、ジャンク・シンクロン。先輩を抑えている」

《承知いたしました、姫様!》

《さあ、大人しくしろ!》

「いや〜ん! 私に何をするの〜!？」

それから自室から何をやっているのか全くわからない主に楯無の声が響き、一夏は茫然自失する。

ガチャ。

「ううゝ……」

楯無は目頭に涙を浮かべながら部屋から出てきた。

今度はちゃんと制服をしっかり着ている。

「楯無、先輩……?」

「明日、荷物を取りに来るからね……」

「は、はい……」

楯無は体をフラフラしながら廊下を歩いていった。

（何があっただ……?）

一夏はそう思いながらドアをノックする。

「い、一夏か？ 入って良いぞ？」

何故か箒の声はかなり緊張していた。

「一体、どうし、た、んだ……？」

一夏はドアを開けた瞬間、氷のように固まった。

「お、お帰り……なさい。あなた……」

そこには、一夏の妄想通りの裸エプロン姿の箒がいた。

楯無から奪ったエプロンを付け、箒は恥ずかしながらあの伝説の名言を言う。

「まずは、ご飯にします？ お風呂にします？ それとも……」

「わ、私を頂きますか……？」

一夏の理性という名の鎖がいとも簡単に引き千切られる。

「箒を頂きます」

一夏はドアをロックし、いなり寿司の入った箱を静かに床において、
箒をお姫様抱っこする。

「キャッ！」

一夏は箒をベッドに降ろしてそのまま押し倒す。

「い、一夏……」

「箒が悪いんだから……夢にまで見た裸エプロンなんかするから
……」

「やっぱり、男はこういうのに興奮するのか？」

「俺にとっては、箒だからだよ。悪い、今日は……手加減が一切で
きないからな」

「ま、待て！ 私を気絶させるつもりか！？」

「確か今日は……大丈夫な日だったよな？」

「何故それを知っている！？ って、まさか……」

「ああ……これで明日の授業は遅刻確定だな。それと、腰が痛くて
動けなくなったらごめんな」

「だ、ダメだぞ……い、一夏あ……んむっ……」

「んくっ、箒……」

一夏は箒に口付けをし、そのまま肌を重ねて再び交わった。

おまけ、その1。

龍星内にて、デブリ・ドラゴンとジャンク・シンクロンが精霊達にある報告をしていた。

《おーい、みんな。定期報告だぞ》

《今日は特ダネだ》

《何だ？》

ぞろぞろと精霊達が集まる。

《箒は裸エプロンと言う新たな領域に踏み込んだぞー》

《明日は箒が授業に出られない可能性大だ》

《……何iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiっ?!?!?!?!?!》

龍星内で叫び声が響く。

《くっ！ あの糖度オーバードライブのバカップルめ！ 誰か俺に熱々のブルーアイズマウンテンを飲ませてくれ！！》

《アホか！ ジャックじゃあるまいし、そんな物を用意できるわけ無いだろ！？》

セブン・ソード・ウォリアーは精神的に大量の糖分を摂取した状態となり、カタパルト・ウォリアーがツツコミを入れる。

《ほっほっほ。若いとは良いもんじゃのー》

《いえいえ、翁。あの二人はマスターとアキ以上に熱烈過ぎですよ。少しは自重しないと》

スカー・ウォリアーは気楽に言い、ライトニング・ウォリアーは二人を心配する。

《くっ、これでまた他の嫁候補に差を大きくつけられたぞ！》

ロード・ウォリアーは拳を床に叩きつける。

《いや、もう諦めろよ》

スターダスト・ドラゴンの眩きに、箒派以外の精霊達が一斉に叫ぶ。

《簡単に諦められるかあああああああああっ！！》

《おうっ！？》

《本人が諦めない限り、俺たちは全力で協力する!》

《そうですか……》

スターダスト・ドラゴンは苦笑を浮かべた。

《学園祭か……明らかに前途多難の予感がする。気をつけろよ、一夏、箒》

おまけ、その2

「あーあ。せっかく一夏くんの部屋の3人目の同居人になるつもりだったんだけどな……」

一夏の部屋から追い出された楯無は愚痴を呟きながら廊下を歩いていた。

（今の箒ちゃんは、恋する乙女は国士無双、もしくは一騎当千ってやつかな？）

誰が言ったか分からない名言（?）を思い出しながらため息を吐い

た。

（もしこれ必要以上に一夏くんに近づいたら箒に斬られかねないわね……）

IS学園最強の楯無でも、一夏の為に奮迅する箒に勝てる気がしない。

「楯無？」

ふと、楯無は誰かに呼ばれ、後ろを振り向くとジャックがいた。

「あら？ ジャックくんじゃない」

「何故お前がここにいるんだ？」

「一夏くんのでちよつとね……お姉さん、今凄く傷心しているの。丁度良かった。ジャックくん、私を慰めて？」

「まあ、何があったかあまり聞きたくないが、俺の部屋でコーヒーでも飲むか？」

「ありがとう。ジャンクくんが入れてくれるコーヒーを飲むわ！」

「ああ、わかった」

ジャックは楯無を部屋に招き、コーヒーを飲みながら楯無の黙々と愚痴を約一時間以上聞くのだった。

.

第58話 楯無の失敗談? (後書き)

一夏×箒に暴走しがちな私 (笑)

うおおおおおっ!!

≡≡≡へ(＊－－)ノ

はっはっは、誰も私を止める者は居ない!

(☆▽☆)

ちなみにこれからの予定はシンデレラ決戦で……一夏と箒が……ふふふふ。

(－|☆)

第59話 学園祭の出し物と黒ウサギ部隊（前書き）

やっ と黒ウサギ部隊を出せました……。

クラリッサお姉さまは嫁候補以外で好きなキャラクターの一人です
（笑）

第59話 学園祭の出し物と黒ウサギ部隊

教室にて放課後の特別ホームルームで、学園祭のクラスの出し物を決めるためにわいわいと盛り上がっていた。

そして、クラスの女子達の意見は、『男子のホストクラブ』『男子とツイスター』『男子とポッキー遊び』『男子と王様ゲーム』など……。

明らかに遊星、一夏、ジャック、クロウが被害を受けるの間違いなしの出し物だった。

4人は同時に言う。

「「「却下」」」

『えええええー!!』

大音量サラウンドでブーイングが響く。

「明らかに俺達に得はない」

「誰が嬉しいんだ、こんなもん！」

「学園祭の意味を分かっとらんな」

「まったく、俺達は物じゃないんだぜ」

男子が文句を言うと、女子達から反論が来る。

「私は嬉しいわね。断言する！」

「そうだそうだ！ 女子を喜ばせる義務を全うせよ！」

「このクラスの男子四人は共有財産である！」

「他のクラスから色々言われてるんだってば。うちの部の先輩もうるさいし」

「助けると思って！」

「メシア気取りで！」

遊星と一夏はもう一度黒板を見る。

「……アキとなら」

「……箒となら」

遊星と一夏の考えていることはほぼ同じ。

「「これは別にやって良いけど」」

ズドン！！！！

アキと箒を除き、クラスの女子全員が椅子からずっこけた。

恋人とのホストクラブ、ツイスター、ポッキー遊び、王様ゲームなどを妄想したアキと箒は顔を真っ赤にする。

『このバカップルウ!! 　少しは自重しなさああああああい!!』

復活した女子達は遊星達を怒鳴りつける。

その後、なかなか出し物が決まらず、悩んでいるとある人物が手を挙げる。

「メイド喫茶はどうだ？」

そう言ってきたのは、なんとラウラだった。

あまりにも意外で、クラスの全員がぽかんとしている。

「客受けはいいだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からも入れるだろう？　それなら、休憩場としての需要も少なからずあるはずだ」

いつもと同じ口調だが、キャラの問題で理解するのに時間がかかったが、良いアイデアでクラス全員が賛成した。

「あれ？　そうになると、俺達は執事をやるのか？」

遊星のふと思った台詞に、女子達は一斉に答える。

『もちろん!!』

しかし、その答えに一人だけ反対する者がいた。

「あー、悪いけど、俺は執事やんねえわ。厨房とか、全部裏方の仕事をやらせてもらいうわ」

それは、クロウだった。

女子達は理由を聞いたかったが、その前にクロウが言う。

「俺はこんな顔をしているだろ？　こんな顔で接客とかしたら絶対に客に怖がられるし、入りにくくなるだろ？」

自分のマーカーだらけの顔を指差して言うと、女子達は納得したように無言になってしまう。

しかし、それではクロウだけが仲間外れになるような気がしてならないのだ。

それに気づいたクロウは女子達に呼びかける。

「おいおい、何白けているんだよ！　学園祭はみんなで思い出を作るもんだろ？　こんな事でテンション下がるなんてお前らしくねえぞ！　それに、今まで学校に行ってなかった俺の人生初の学園祭なんだぜ！？　もっとテンションを上げようぜ！！！」

クロウの呼びかけに、女子達は再びテンションを上げて色々話し合いをする。

それを見たクロウはうんうんと頷くと、本音が来て、クロウと小声で話す。

「ねえ、クロクロ。本当にそれで良いの？」

本音は心配になってクロウに聞く。

「構わねえよ。みんなと楽しくやればそれで良いんだよ。それに、俺は元々接客は苦手だからな」

「……クロクロ」

「ん？」

「学園祭、一緒に回ろう」

「えっ、良いのか？ ダチと一緒に回らなくても……」

「うん。私はクロクロと一緒に回りたい」

「……それじゃあ、お言葉に甘えて、一緒に学園祭を回ろうぜ」

「うん！」

こうしてクロウは本音と学園祭を一緒に回るようになった。

《クロウ、良かったな……感謝するよ、のほほんちゃん》

ブラック・フェニックス内のブラックフェザー・ドラゴンの本音に感謝して、涙を流した。

その日の夜。

遊星はシャルロットとラウラの部屋へ訪れ、ノックする。

コンコン。

「はい！」

ドアの向こうからシャルロットの声がし、ドアロックを解除されると、遊星はドアを開ける。

「シャルロット、実は——……すまない。部屋を間違えたようだ」
ボタン。

遊星はドアを閉めて立ち去ろうとする。

「わあああああつ！ 待って、待ってよ、お父さん!!」

シャルロットは立ち去ろうとする遊星を無理やり掴んで部屋に入れる。

「む？ どうした、シャルロー——父上!？」

「ラウラ、お前もか……」

シャルロットとラウラの服装はIS学園の制服や私服ではない。

袋状になっている衣服にすっぽりと体を入れ、出ているのは顔だけ。

しかも、フードにはネコミミがついており、手先足先にはこれまた肉球がついている。

ようは、猫の着ぐるみパジャマである。

ちなみにシャルロットが白猫パジャマ、ラウラは黒猫パジャマである。

「まあ、取りあえず一言。可愛いぞ、娘達よ」

遊星はあまりにも可愛く似合っている猫の着ぐるみパジャマを着ている娘達を褒めて頭を撫でる。

「はう……」

「むう……」

父に褒められたシャルロットとラウラは顔を朱に染め、その隙に遊星は携帯電話のカメラ機能を使って写真を撮り、アキに写真をメール添付して送る。

「さて、今日部屋に来た本題はこれだ」

遊星はポケットから学園祭のチケットを六枚を渡す。

学園祭には各国軍事関係者やIS関連企業など多くの人が来場する。

一般人の参加は基本的に不可だが、生徒一人につき、一枚配られるチケットで入場できる。

「俺達はいにく学園外に知り合いは居ない。だから、ラウラ。お前の部隊の人間を何人か招待したらどうだ？」

「私のシュヴァルツェ・ハーゼですか？」

ラウラが隊長をしているドイツ軍IS配備特別部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ（通称、黒ウサギ部隊）』。

ドイツ国内にある10の内、3機のISを保有している名実と共に最強の部隊である。

「ありがとうございます、父上！　すぐに連絡を取って聞いてみます！」

ラウラはISのプライベート・チャンネルを開いた。

同時刻、ドイツ国内軍事施設の兵舎食堂にて、黒ウサギ部隊副隊長

のクラリッサ・ハルフォーフは隊員たちと食事をしていた。

クラリッサはラウラに間違った日本の知識を教えた張本人である。

だが、それは日本のアニメや漫画から得た知識なので、本人に悪気はない。

そのクラリッサの専用機IS『シュヴァルツエア・ツヴァイク（黒い枝）』にプライベート・チャンネルが届いた。

「――受諾。クラリッサ・ハルフォーフ大尉です」

『ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ。クラリッサ、隊員のみんなはいるか？』

「ラウラ隊長、お久しぶりです。ちょうど今全員揃っています」

クラリッサはバンドサインで隊員たちに『食事一時中止・緊急招集』を伝える。

『そうか。実はな、父上達が……』

「父上とは……隊長が父と慕う不動遊星のことですね？」

『それ以外に誰がいる。それで、父上が黒ウサギ部隊の何人かをIS学園の学園祭に招待したらどうだと言ってくれたのだ』

「IS学園の学園祭ですか!？」

『まあ、無理にとは言わないが……』

「行きます！　さすがに全員は無理ですが、どんな手段を使用して
も必ず行きます！！　例えば上官を脅してでも！！」

クラリッサは一夏に惚れてから可愛く変わったラウラとの再会を楽しみに待っていたのだ。

『そうか。なら、必ず私のクラスに來い。紹介したい友人が居るからな』

「はい！　ところで、ラウラ隊長。隊長のクラスはどんな出し物をやるのですか？」

『うむ。メイド喫茶だ』

「メイド、喫茶……？」

クラリッサは驚きに満ちて戸惑う。

「も、もしや、隊長もメイド服を……？」

『当たり前だ。言い出しっぺは私なのだからな』

「……分かりました。では、隊のみんなと話し合い、後日また連絡します」

クラリッサは落ち着きを取り戻し、静かな口調で話す。

「ああ、明日にでもチケットを送る。お前達が来るのを楽しみにしているぞ」

「はい、ありがとうございます。では、失礼します」

クラリッサはラウラとのプライベート・チャンネルを切る。

「……みんな、話はしっかり聞いていたな？」

黒ウサギ部隊の隊員達はうんうんと頷く。

「みんな、IS学園で可愛く変わったラウラ隊長のメイド服姿……見たくないか？」

『見たいです!!』

嘗て、部隊内でドイツの冷水と呼ばれたラウラのメイド服姿。

わだかまりが溶けた黒ウサギ部隊の乙女達は何としても見たいと願う。

「しかし、我々はドイツ軍最強の黒ウサギ部隊！ さすがにあまり大人数でドイツを離れる訳にはいかない……そこで！」

クラリッサは拳を握りしめて、黒ウサギ部隊の部下達に向けて宣言する。

「黒ウサギ部隊副隊長クラリッサ・ハルフォーフはここに、学園祭チケット争奪戦をここに宣言する！ ただし、争奪戦の勝負方法は公平のためにゲーム等の『運』の勝負とする！ 誰が勝っても負けても恨みっこは無しだ！ 異論はないな！？ 黒ウサギ部隊の乙女達よ!!！」

『ありません、クラリツサお姉さま!』

黒ウサギ部隊の乙女達はメイド服姿のラウラに会うため、空いた時間に様々なゲームで勝負してチケット争奪戦をするのだった。

おまけ。

「あ、あのー、お母さん？」

「いつまで……このままなのでしょう？ 母上」

「んー？ 私が満足するまでよ♪」

現在、シャルロットとラウラは母のアキに後ろから人形のように抱きしめられてもふもふされている。

遊星から送られた写真付きメールを見たアキは自室を飛び出し、遊星達が話しているときに突撃して来て、シャルロットとラウラを見るなり、すぐさま確保して抱きしめた。

「ああ、何て可愛い人形かしら。このまま抱き枕にしたいわ」

「ラウラゝ何とかしてゝ」

「む、無理だ！ この猫パジャマの肉球で私の戦闘力をほぼ零にまで低下させている！」

アキは二人を抱きしめる力を更に強くする。

（お、お、お、お母さんの胸が当たっている！ 大きくて凄く柔らかい胸が背中に当たっているよおおおっ！！）

（な、何て良い匂いだ……それに、凄く暖かくて……いかん、眠ってしまいそうだ……）

母性本能を解放したアキにシャルロットとラウラは成す術が無い。

「遊星、今夜は二人の部屋に泊まるわ♪」

「「えっ!?!」」

「わかった。それじゃあ、また明日な」

「ええ」

遊星は立ち上がり、部屋を出て自室に戻る。

（お父さあああん！！ 助けてええええっ！！）

（父上ええええっ！！ 私達を見捨てないでくださいいいいいっ！！）

・
シャルロットとラウラの心の叫びを遊星に届くこともなく、その日の夜はアキの抱き枕となった二人であった。

第60話 ライディング・デュエル部（前書き）

そろそろ龍亞と龍可のIS学園の1日みたいのを書いてみようと思います。

そしたら、いよいよ学園祭当日の話です。

第60話 ライディング・デュエル部

一夏、箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラは放課後に遊星達に案内され、ライディング・デュエル部の部室に入る。

「何だよ、これ……？」

中にはIS学園の整備室顔負けの最新のコンピューターや充分な機材が揃った部屋だった。

「夏休みにジャンク屋から機材を貰ったり、世界各地に行ってたブルーノの知り合いからコンピューターを譲ってもらい、俺達用に改造したんだ」

遊星が説明し、全12人が椅子に座った。

「ライディング・デュエル部はデュエル方法を関係なく、デュエルモンスターズでデュエリストのレベルを高め合い、仲間との絆を深める部活だ。部長は俺、不動遊星」

「副部长は私、十六夜アキよ」

「そして、部員のジャック、クロウ、龍亞、龍可の計六人だ。確認の為にもう一度聞く。一夏達はライディング・デュエル部に入るんだな？」

一夏が先日全校集会でライディング・デュエル部に入ると宣言した後、箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラが入部を希望した。

一夏達は頷き、ライディング・デュエル部に入る決意を固めた。

「よし、わかった。織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、不動シャルロット、ラウラ・不動・ボーデヴィツヒを我がライディング・デュエル部の部員と認める！」

遊星の宣言に、アキ達は拍手し、一夏達は正式にライディング・デュエル部に入部する。

「さて、基本的な活動であるデュエルはいつでもどこでも好きな時に出来る。みんなのISをD・ホイルに改造してあげたいが、今は文化祭の季節だ。申し訳ないが、D・ホイルの改造は文化祭が終わった後でいいか？」

遊星の説明に一夏達は文句を言わずに了解する。

アキが次の議題を説明する。

「では、今度の文化祭でライディング・デュエル部の出し物を決めようと思うけど、何か良いアイデアはある？」

「うーん。飲食店は一組も二組もやってるからな……」

「この部活らしくデュエルはどうだろうか？」

「ですが、来客の事を考えるとそれは止めた方が良くと思いますわ」

「一日中やるのじゃなくて、短時間の出し物が良いんじゃない？」

「難しいね……せつかくだから思い出に残る出し物にしたいね……」

「ISの専用機持ちが12人も居るんだ。ISを使った出し物はどうだろうか？　しかし、教官は認めてくれるか……」

新入部員の一夏達が話し合うが、なかなか良いアイデアが浮かばない。

「そうだ！」

龍亞が突然立ち上がって言う。

「バンドはどうか？　確か、遊星はギター、ジャックはベース、クロウはドラムが出来るでしょ？」

「えっ？　遊星達って、楽器を引けるの？」

一夏の驚きを含んだ質問に遊星達は答える。

「俺達がチームサティスファクション時代にリーダーの鬼柳とやっていたんだ。最近はやってないが、少し練習すればそれなりに引けるはずだ」

「長らくベースに触れていなかったが、このジャック・アトラスに不可能は無い！」

「学園祭ライブか……良いじゃねえか！　俺は賛成だぜ！　俺のドラムテクニクを見せてやるぜ！」

遊星、ジャック、クロウは既にやる気充分だ。

「あつ、私はピアノを引けるからキーボードをやるわ!」

アキが手を挙げ、ギター、ベース、ドラム、キーボードの、バンドとしての十分なメンバーが揃った。

「それじゃあ、俺も何か楽器をやろうかな……やっぱり、ギターは憧れるよな」

一夏が呟くと、遊星の目が鋭くなる。

「一夏、俺がギターを教える。一週間でマスターさせてやる」

「よ、よろしくお願いします……」

一夏は頭を下げ、龍可は箒達を心配そうに見る。

(でも、これじゃあ箒さん達が参加できずに……あつ!)

箒達の事を考えた龍可はあるアイデアを思いつく。

「そうだ! 箒さん達はテレビのアイドルグループみたいに、5人で歌ってみたらどうかかな?」

「「「「えっ!?!」」」」」

龍可の提案に箒達は耳を疑う。

「龍可、それナイスアイデアだよ! 前半は遊星達の演奏で、後半に姉ちゃん達のアイドル風ライブ!」

「うんうん！」

「じゃあ、俺と龍可は司会役をやろうぜ」

「頑張ってライブを盛り上げましょ！」

「おうっ！」

話がどんどん進み、箒達は場の流れから反論さえ出来なくなってしまう。

「わ、私が歌を!?!」

「しかも、大勢の皆さんの前で!?!」

「待ってよ、私達はそんなキャラじゃ無いわよ!?!」

「アイドルだから服はもしかなくても、ヒラヒラの可愛いのだよね……」

「待て、アイドルグループとは何だ？」

箒達は混乱するが、次々と話しを進める遊星達を止めることができず、結局歌うことになったのだった。

その夜、一夏の自室にて一夏と箒がデュエルをしていた。

楯無やその他の女子が部屋に入らないようにと箒自らが監視しているのだ。

「全く、武士の私がアイドルみたいに歌うなど……」

文句を言う箒に、一夏は小さく笑う。

「良いじゃねえかよ。俺は楽しみだぜ、箒の歌とアイドルの衣装♪」

「馬鹿者……そんなことを気にするな。さて、これで終わりだ。真六武衆 シエンでダイレクトアタックだ」

「うげっ!?!? 俺の負けか……」

「これで二勝一敗。私の勝ちだな」

「次は負けないからな」

「ああ。望むところだ」

それから時間が過ぎ、就寝時間が間近に迫る。

「今日は誰も来なかったな……だが、一夏。気をつけろよ。夏休み前のラウラみたいな事になったらまた天誅を喰らわすからな」

ギロリと睨む箒に一夏は冷や汗をかく。

「出来れば、痛い方じゃなくて気持ちいい方に……ぐげっ!？」

箒の鋭い手刀が一夏の頭を狙う。

「気をつけろよ」

「はい……」

「まったく……ところで、一夏。今度の学園祭を二人で回らないか？」

恋人モードに切り替えた箒は可愛らしく一夏に尋ねる。

「ああ、もちろん良いぜ」

「それで……できれば、私以外の女と一緒に回らないで欲しい……」

「ははっ、相変わらず箒は嫉妬深いな」

一夏は思わず苦笑を浮かべて箒の頭を撫でる。

「うう……嫉妬深い女は嫌か？」

うるうると涙ぐんだ目で一夏を見つめる箒。

「……………」

ギュッ。

一夏は箒を抱きしめる。

「一夏？」

「箒は俺を心から想ってくれているから嫉妬してくれるんだろ？
嫌な訳無いじゃないか」

一夏はそのまま箒の頬に優しくキスをする。

「ありがとう、一夏……えっと、もし……お前がその、約束を守ってくれるなら……」

箒は自分の顔を隠すように一夏の胸にうずくまる。

「守ったら？」

「こ、今度のクラスの出し物の……メ、メイド服姿で、一夏を御奉仕してあげてもいいぞ？」

「……マジ？」

一夏は先日 of 裸エプロンと同じく妄想していたシチュエーションにまた心臓の鼓動が早くなる。

「わ、私は嘘は言わん！ 一夏の命令を何でも聞いてやる！」

「わかった。約束するよ」

「う、うむ……」

「なあ、箒……今日、一回だけ、良いか？」

一夏は箒を抱きしめる力を強くして逃げられないようにする。

「ま、待て、一夏！ 先日、あれほど激しく……」

「一回だけだよ。それに、箒の望んだ優しいやつにするからさ……」

一夏は箒をベッドに押し倒し、寝着の着物を慣れた手付きで脱がせる。

「一夏あ……まったく、お前と言う奴は……」

箒は否定しながらも一夏を受け入れる。

おまけ。

一夏と箒が眠りについた後、テーブルに置いた待機状態の白式と紅椿に異変が起きた。

その隣に置いてある一夏の氷結界デッキと真六武衆デッキが異様な光を放つ。

氷結界デッキから三つの青白く輝く光の玉が現れ、真六武衆デッキからは十三の光の玉が現れる。

そして、三つの光の玉は白式に、十三の光の玉は紅椿の中に入り、光は収まった。

一夏と箒はその現象が起きたことに気付かなかった。

しかし、二つのデッキから現れた光が白式と紅椿に新たな力を具現され、目覚める時はそう遠くない。

第61話 双子の穏やかな一日（前書き）

龍亞と龍可メインのお話です！

ちよつとアレ？みたいな展開はありますがそこはお気になさらず（笑）

今日の遊戯王ゼアルで遊馬のことが更にお気に入りになりました！

罪を憎んで人を憎まずってやつですね♪

カードを少しづつ使いこなしてデュエリストのレベルが上がって今のところ文句無しです！

第61話 双子の穏やかな一日

IS学園で預かっている小さな双子で専用機持ちの龍亞と龍可。

1日の始まりは龍可が最初に起きる。

「ん……起きなきゃ……」

龍可はベッドから起き、隣のベッドでまだ起きる気配のない双子の兄の龍亞を起こす。

「龍亞、朝よ。起きて!」

「んにゃ……後、五分……」

「ダメよ、起きて!」

龍亞は龍可の体を揺する。

「眠……い、よ……」

寝ぼけている龍亞は自分の体を揺すっている龍可の手を引っ張る。

「えっ? きゃっ!」

龍可は小さな悲鳴を上げて、そのまま暖かい温もりに包まれる。

「ちよっ、龍亞!」

龍可は龍亞の抱き枕状態になり、龍亞の両腕でしっかり体をホールドされる。

「んにゃむにゃ……暖かい……」

「ね、寝ぼけないでよ！ うっ……抜け出せない……」

龍可は抜け出そうにも、しっかり抱きしめられて体が全く動かすことが出来ない。

更に、密着していることで龍亞の体温が直に伝わり、龍可は心地良い睡魔に襲われる。

（ダメ……このままじゃ、龍亞と一緒に……）

龍可の瞼が重くなり、起きたばかりで脳も働かなくなってしまう。

（でも、たまには……良いかな？ 気持ちいいし……）

遂には起きることがどうでもよくなり、そのまま龍亞のパジャマにしがみついて眠りにつく。

ガチャ。

「龍亞、龍可。起きて……い……る……？」

「そろそろ朝ご飯の時……間……よ……？」

龍亞と龍可を迎えに来た遊星とアキは部屋に入るなり固まってしま

「……アキ、どう思う?」

「……どうもこうも、少なくとも、私達じゃなければ勘違いしそうな光景ね」

「どうする……?」

「ここは、二人の保護者として起こしましょう」

「そうだな」

遊星とアキは間違ったことが起きてないと思いつつ龍亞と龍可を起こす。

食堂にてライディング・デュエル部全員と一緒に朝食を取っていた。

「もぐもぐ……ん? 龍可、どうしたの? どこか体調が悪いのか?」

あまり朝食を食べていない龍可に龍亞は心配する。

「ううん、大丈夫。あまりお腹が減っていないだけ」

（誰の所為だと思っているのよ、もう……龍亞のバカ……）

朝のトラブルでまだ心臓がドキドキしているのだ。

「龍亞と龍可はいつも仲が良いよな」

「ああ。年が離れていない双子だからかな？」

一夏と箒は、龍亞と龍可の兄妹仲にちよつと羨ましく思えた。

朝食を食べ終わった遊星と一夏達は教室へ向かって授業を受け、龍亞と龍可は図書室に向かう。

図書室に向かう途中、庭で掃き掃除をしているアポリアと会う。

「あ、アポリア。おはよう！」

「おはよう、アポリア」

「おお、龍亞と龍可。おはよう、気持ちの良い朝だな」

アポリアは嘗て龍亞を少年、龍可を小娘と呼んでいたが、仲間になったので名前を呼ぶことにしたのだ。

「IS学園の生活には慣れた？」

「ああ。女ばかりのIS学園で最初は戸惑ったが、女子生徒達はい子ばかりだ。私の荒れた心も穏やかになる」

「アポリア、変わったね……」

龍可はポカーンとすると、アポリアは目を閉じて微笑む。

「そうかもしれん。私達の世界の未来が救われたことで、私自身を縛っていた呪縛が解かれたからだと思う……だからこそ、私はこのIS学園を守るためにここに居ることが出来る」

（それが、この世界の破滅の未来を救うことに繋がるのなら尚更だ）

アポリアは異世界での新たな誓いを胸に秘め、青空を見上げる。

「ふーん。ところでさ、あれって何？」

龍亞はあるものを指さす。

それはアポリアがこの世界に来たときに一緒に落ちてきた壊れた機械や物の無数の部品で組み立てた何かだった。

「ああ。あれは私も学園祭で何かをやるうと思い、製作中のアートだ」

「何を作るの？」

「六体のシグナーの竜の像だ」

「「えっ!?!」」

龍亞と龍可は製作中の像をよく見る。

まだ完成したわけではないのが、よく見ればシグナーの六体の竜の姿形をしている。

「凄い！ 相変わらずアポリアは器用だね！」

「うん！ でも、学園祭までに完成するの？」

「空いた時間に少しずつ作っているが、機皇兵が手伝ってくれるから学園祭前までには必ず完成する予定だ」

「「おおっ！！」」

ちやっかり充実な日々を送っているアポリアだった。

その後、図書室でいつものように千冬から出された課題を終え、遊星達と昼食を食べた後にISアリーナで自主練習をする。

「それじゃあ、龍可。離れていてね」

「うん」

龍亞はホープ・ヒーローでパワー・ツール・ドラゴンの姿になる。

「パワー・ツール、それじゃあ新兵器の試運転だ」

《了解。だが、軍用ISの主砲だから気をつけろよ》

「わかってるって！ 行くよ、パワー・サーチ！ 『銀の鐘』^{シルバー・ベル}！！！」

パワー・ツール・ドラゴンの背中に銀色の双翼が現れ、翼のウイングスラスターの三十六の砲口が全て開いた。

そして、龍亞は全方位に向けての幾重の光の弾丸を撃ち出す。

この武装は臨海学校の時、一夏と箒が戦った軍用IS『銀の福音』の主砲である。

パワー・ツール・ドラゴンの特殊能力『パワー・サーチ』は他のISの武装を完全複製して使用することが出来る。

一度でも龍亞が戦った相手の武装ならすぐにパワー・サーチで複製することができるのだが、実際に龍亞は戦っていない。

唯一戦闘を行った一夏と箒の戦闘データの記録しか残っていないため、銀の鐘の複製がかなり遅れてしまったのだ。

光弾を撃ち終わった龍亞は微妙な感覚に首を傾げる。

「うーん……龍可、どうだった？」

試運転データを取っていた龍可は結果を報告する。

「軍用って事もあるから威力が高すぎるわ。出力の調整を行った方がいいわね」

「やっぱり？ うーん、なかなか俺に合った良い遠距離と中距離装備が無いな……近距離装備はダブルツール・D&Cで充分なんだけどな……」

龍亞はこのパワー・サーチを使って、遠距離戦と中距離戦の状況になったことを考えて新たな武装を試行錯誤しながら探しているのだ。パワー・サーチした武装はどれも申し分のなかったが、どうも龍亞には合わず、しっくり来ないのだ。

「まあまあ。時間はあるんだからゆっくり探しましょ」

「ところで、龍可ってフェアリー・ガーディアンのはフォームはエンシエント・フェアリー・ドラゴンしか使わないの？」

「えっ、あ、うん……」

「攻撃用に何か違うシンクロモンスターをスキャンした方がいいと思うけど……」

エンシエント・フェアリー・ドラゴンは防御力と他のISへの支援能力は高いが、攻撃力が低いのだ。

「私もそう思っているんだけど、なかなか私に合うシンクロモンスターが居なくて……」

「じゃあ、ラウラ姉ちゃんに相談してみる？ 確か、カードが沢山ありすぎて困っているって言ってたし」

「うん！」

龍亞と龍可は夜にラウラとシャルロットの部屋を尋ねてお願いする。

「なるほど……新たな力か。よし、私の大量のカードから見つけて龍可のISを強化だ！」

「僕も手伝うよ」

「ありがとう、ラウラ姉ちゃん！ シャルロット姉ちゃん！」

「ラウラさん、シャルロットさん、ありがとうございます！」

龍亞と龍可は二人に礼を言うと、早速四人で大量のカードの中から探す。

「へえー、本当に沢山あるな……」

「良かったら龍亞も何枚かカードを貰っても良いぞ？ 機械族は私

の魔轟神デッキには入らないからな」

「本当に!？」

「例えば、この戦車とロボットが一つとなった『マシンナーズ・フオートレス』とか……」

「おおっ！　かっこいい!!」

「二人共、龍可のカードを探さなきゃダメでしょ」

「「はい……」」

シャルロットに叱られた龍亞とラウラは小さな子供のように謝る。

「……見つけた」

「「「えっ?」」」

龍可は二枚のシンクロモンスターがあった。

「『エンシェント・ホーリー・ワイバーン』、『エンシェント・ゴッド・フレムベル』……」

「エンシェントの名を持つシンクロモンスター……」

「龍可、そのカードで大丈夫か？」

「ラウラさん、本当にこのカードを貰ってもいいんですか……?」

ラウラはフツと笑い、龍可の頭を撫でる。

「ああ、構わない。その代わり、その二体のモンスターの力を最初に私に見せてくれ」

「はい！ わかりました！」

「やったな、龍可！」

「良かったね！」

龍亞とシャルロットは微笑み、龍可は満面の笑みをする。

「うん!!」

龍亞と龍可は自室に戻り、シャワーを浴びてからパジャマに着替えて寝る準備をする。

「ふわ〜……龍可、もう寝よ……」

「うん。お休み、龍亞」

「お休み……」

龍亞と龍可は自分のベッドに横たわり、明かりを消して眠りにつく。

だが。

（眠れない……）

龍可はむくつとベッドから起き上がる。

そして、ふと隣のベッドで寝ている龍亞を見る。

（朝、龍亞に抱き枕にされた時、凄く心地よかったな……）

そう思うと、龍可はベッドから降りてゆっくりと龍亞のベッドに座る。

「んにゅ……？ 龍可……？」

「あ、ごめん。起こしちゃった……？」

「別に良いけど……どうしたの……？」

「実は、寝付けなくて……龍亞と一緒に寝ても良いかな？」

「良いよ……好きにして……」

「えっと……それじゃあ、失礼しまーす」

龍可は龍亞のベッドに潜り込んで一緒に寝る。

「お休み、龍亞」

「おや……す……み……」

寝付きの良い龍亞はそのまま龍可を抱きしめて眠った。

「はうっ!?!?」

突然抱きしめられた龍可は驚いてしまい、変な声を出してしまった。

すると、密着したことで今まで聞いたことの無い音が直に伝わる。

トクン……トクン……。

（これ、龍亞の心臓の鼓動……？）

龍可は龍亞の胸に耳を当ててよく聞く。

トクン……トクン……。

（ちゃんと、動いている……）

人として当たり前と言えば当たり前なのだが、龍亞の場合は話が違
う。

アーク・クレイドルでのアポリアとの戦いの際、この心臓の鼓動が
止まってしまい、龍亞は一度死んでしまった。

しかし。

（でも、龍亞は私の元に帰ってきてくれた……）

龍亞は赤き竜の力で念願であったシグナーとして復活し、遊星達が
認めるほどに一回り成長した。

（いつの間にか、こんなにも逞しくなっていたんだ……）

いつも一緒にいるからこそ気付かないことがある。

龍可は龍亞にしがみつき、龍亞の兄としての優しい暖かさを感じる。

（ありがとう、お兄ちゃん）

龍可は龍亞の胸の中でゆっくり目を閉じて眠りについた。

翌日、再び龍亞と龍可の添い寝を目撃した遊星とアキは本気でどうしようか悩み、千冬に相談するのだった。

第62話 学園祭開幕！（前書き）

遂に学園祭開幕です！

学園祭では色々なイベントを書こうと思うので楽しみにしてください！

第62話 学園祭開幕！

学園祭当日。

一年一組の『ご奉仕喫茶』は盛況で、朝から大忙しだった。

接客班（コスプレ担当）の男性組は遊星とジャックと龍亞と一夏、女性組はアキと龍可と箒とセシリアとシャルロットとラウラ。

男性組はピシッと決まった執事姿で、女性組はとても可愛らしいメイド姿（世間で言う萌え？）である。

特に遊星と一夏は引っ張りだこで、恋人のアキと箒の嫉妬の視線に睨まれながら接客するのだった。

そして、一番心配なジャックは……。

「お待ちせいたしました、お嬢様。ケーキと紅茶でございます」
完璧な執事として接客していた。

それもそのはず。

学園祭当日までデュエル以外あまりにも不器用過ぎるジャックの為に、イギリス名門貴族のセシリア監修の元、クラスの女子達による、ジャック執事改造作戦を実行したのだ。

当然最初はジャックは嫌気をさして逃走したが、その度に捕まり、時間をかけてジャックに執事スキルを身に付けさせ、喫茶店で充分に接客できるほどのレベルに達したのだ。

そんなこんなで、ご奉仕喫茶は行列が出来るほどの人気である。

IS学園に黒い眼帯を付けた三人の乙女達が訪れる。

（遂に……この時が！ 今行きます、ラウラ隊長！）

IS学園のチケットを手に、クラリッサが隊員二人を引き連れてやってきた。

数日前、黒ウサギ隊はゲームの結果と話し合いで、クラリッサを含め、隊員の二人を連れた合計三人でIS学園に来ることになった。

「ああ、遂に可愛くなったラウラ隊長との再会……」

「メイド姿の隊長を早くみたいです！」

「落ち着け、二人共。これから隊長のクラスに向かうんだ。だらしない姿を見せて隊長にがっかりさせるわけにはいかない。少し緊張感を保て」

「はい！ クラリツサお姉様！」

そう言いながらも、クラリツサ自身もかなり楽しみである。

ご奉仕喫茶の長い行列を並び、遂にクラリツサ達の案内が来た。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

遊星がお出迎えをして、クラリツサ達を席に案内する。

（あの左目の眼帯……ラウラの部隊の子達だな）

同じ眼帯をしていることに気づいた遊星はクラリツサ達を席に案内すると、ラウラに交代する。

「ラウラ、五番テーブルを頼む」

「わかりました、父上」

ラウラはメニューを持って行くと、そこには自分の部下が居る。

（む？ クラリツサ達か？）

しかし、ラウラは表情には出さず、メイドとしてクラリッサに接する。

「お嬢様、メニューでございます」

「あ、は、はい！」

（（ラウラ隊長のメイド姿……か、可愛い！！）（））

クラリッサ達はオロオロと若干混乱しながらメニューを受け取って選ぶ。

その際、ラウラはクラリッサにそつと耳打ちをする。

「クラリッサ、今はお前が主で私がメイドだ。今この時だけは私に何を頼んでも良いぞ？」

「は、はい……で、では——」

クラリッサ達はメイドのラウラとゲームをしたり、写真を一緒に撮ったりして心行くまで楽しんだ。

ラウラ自身も部下へのサービスも込めてクラリッサ達を楽しませる。

メイドのサービスが終わると、ラウラは次の仕事に行き、クラリッサ達は満足しながら紅茶を飲む。

すると、クラリッサの目に黒髪を靡かせた少女が目映った。

（あの黒髪の長い大和撫子風の女子……間違いない！）

クラリッサは目を細めて、体から殺気を出す。

（あれが隊長の嫁を奪った篠ノ之箒か……）

クラリッサの殺気に気付いていない箒は食器を片付けてクラリッサ達のテーブルの横を通る。

（隊長の為、覚悟……！）

クラリッサは隠し武器のナイフを取り出す。

だが、それよりも早く先手を打つ者がいた。

ガシッ！！

「ぐおっ！？」

「……何をやっている？ クラリッサ」

怒りのオーラを纏った千冬が得意のアイアンクロードでクラリッサの頭を掴む。

「お、おお、織斑教官！？！？」

まさかの千冬に暗殺を妨害され、クラリッサは驚く。

「ちょっと来てもらおうか。そこの二人もだ」

「「は、はい！」」

千冬はクラリッサ達を使われていない教室へ連れてった。

「それで、ナイフを取り出して何をしようとした？」

「隊長の最大の障害である篠ノ之箒を暗殺しようと思いました……」

「馬鹿者」

ドスッ！ ドスッ！！ドスッ！！！！

「グハッ！？」

クラリッサの頭に向けて千冬の出席簿アタックが三連打で炸裂し、クラリッサは撃沈する。

「「クラリッサお姉様あ！？」」

「今回はクラリッサの独自行動だからお前達は見逃してやる。だが、お前達も箒を暗殺しようとしたら……覚悟しておけよ？」

「「ひいっ！？」」

「と、ところで……織斑教官」

出席簿アタック三連打を喰らった頭を抑えながらクラリッサは復活した。

「何だ？」

「どうして……織斑教官までメイド姿なのですか？」

千冬の今の姿は黒のスーツではなく、箒達と同じメイド服姿だった。クールビューティーメイドの千冬にクラリッサ達は見とれてしまう。だが、千冬のキャラとはあまりにもかけ離れていて、クラリッサは聞いてしまう。

「……似合わんか？」

「いえ！ そんな事はありません！ ただ、私の知ってる織斑教官なら、そのような服は着ないと思いましたので！」

「まあ、確かに……普段の私なら絶対に着ないだろう。だが、一夏と箒が着てくれと言うので仕方なく……」

変なところで弟と未来の義妹に甘い姉の千冬だった。

（（（織斑一夏と篠ノ之箒に頼まれただけで自分のキャラを押し殺した！？ だけど、そのギャップは最高です！！）））

クラリッサ達は千冬のギャップ萌えに感動した。

「さて、お前達が会いたがっていた隊長との再会だぞ」

ドアが開くと、そこにはラウラと遊星とアキがいた。

「」「ラウラ隊長！！」「」

「久しぶりだな、クラリツサ。ところで、何故教官に連れ去られたのだ？」

「そ、それは……」

「まあ、いい。よく来たな。紹介するぞ、父上と母上だ」

遊星とアキは前に出てクラリツサ達と握手する。

「不動遊星だ。君達の事はラウラから話は聞いている」

「十六夜アキよ。よろしくね」

「クラリツサ・ハルフォーフです。初めまして」

挨拶を終えると、遊星とアキと千冬は教室に戻り、ラウラ達はその場で色々と話す。

「どうだ？ 私のメイド姿は？」

ラウラはくると体を一回転させ、メイド服のスカートがふわりと揺れる。

「可愛いです！ 日本人ならこれを『萌え』と言います！」

クラリツサがまたラウラに余計な事を吹き込もうとする。

「萌え？ それは何なのだ？」

「簡単に言えば、対象に対する好意や愛着を意味します！特に日本ではアニメや漫画のキャラクターを対象としますが、今の隊長はそれほどに可愛いと言うことです！」

「む、むう……？　そ、そう言われると恥ずかしいな……」

ラウラは頬を少し赤く染めて体をモジモシさせる。

（（も、萌えです！　隊長！！））

すっかりラウラに釘付けになったクラリッサ達である。

クラリッサは思わずラウラの手を握った。

「ラウラ隊長！　もし私達に出来ることがあったら何でも言うってください！　隊長の嫁である織斑一夏を取り戻すためなら私達は何でもします！」

「そ、そうか？　では、それまで学園祭を楽しんでおけ、私達にとっては一生に一度あるかないかのイベントだからな」

「」「はい！」「」

ラウラとクラリッサ達は一旦別れた。

ラウラはクラスに戻って接客を再開し、クラリッサ達は学園祭の出し物を見て回った。

.

第63話 星屑の幻影（前書き）

今回は遂にあの龍の擬人化が登場します（笑）

性格がちょっと壊れているので注意です。

第63話 星屑の幻影

相変わらず忙しいご奉仕喫茶で働く中、一夏は時計を見た。

（そろそろ弾が来る頃だな……）

一夏がチケットを渡した相手である中学時代の友人、五反田弾との待ち合わせの時間が迫る。

（ヤバいな……まだ行列があるのに俺一人が抜けるのみな……）

どうするか悩んでいると、雑務を手伝っていたジャンク・シンクロンがふわふわと飛んできた。

《一夏、どうした？》

「実は弾との待ち合わせ時間が迫っているんだけど、この混み具合じゃな……」

《それなら俺に任せろ、援軍を呼んでくる》

ジャンク・シンクロンはそう言い残すとその場から消えた。

「ジャンクロン？ あいつ、一体何を……」

《ほう、一夏。お前のクラス、なかなか繁盛しているじゃないか》

突然後ろから声をかけられ、一夏は振り向いた。

そこには、星のように輝いている銀髪に蒼い瞳をした青年がいた。

「えっと……誰ですか？」

（それと、その格好はコスプレですか!?!）

蒼いマントに白い服を着た、まるでファンタジーの魔法使いのような格好をしていた。

「一夏、何をやって——知り合いか？」

箒が来て尋ねるが、一夏は首を横に振ると、青年は苦笑する。

《おいおい。気付かないのか？ 俺はお前達二人の恋愛成就をさせた星の神様だぞ?》

「「……え?」」

一夏と箒は固まる。

二人が恋人同士になったきっかけを作ったのはこの世であの龍しかない。

「「スターダスト・ドラゴン……?」」

青年はフツと笑い、先端がスターダスト・ドラゴンの形をした杖を呼び出す。

《正解だ。だが、今の俺はスターダスト・ファントムだけどな》

それは、スターダスト・ドラゴンが擬人化した姿、『スターダスト・ファントム』である。

まさか龍が擬人化するとは思ってもよらなかったので、一夏と箒は哑然とするしかなかった。

《さてと、ジャンク・シンクロンからの頼みで一夏の代わりに執事の仕事を手伝いに来たぜ。箒、悪いが執事服の予備を持ってきてくれるか?》

「わ、わかった!」

箒は予備の執事服を取りに行った。

スターダスト・ファントムはニヤリと悪の笑みを浮かべて一夏の肩を掴んだ。

《メイド姿の箒、なかなか可愛いじゃないか。なあ? 恋人同士になったことで万年箒ちゃんに欲情している一夏くんよ?》

スターダスト・ファントムに的確に指摘をされた一夏は勝てないと一瞬で悟り、正直に言う。

「ううっ……和服姿の箒も良いけど、メイド服はまた違って最高です……」

《ふふふ……今すぐ箒を自室にお持ち帰りして色々やりたい気分なんじゃないのかな?》

「言わないで……頼むから箒の前では言わないでください……ファ

ントムの兄貴……」

《ははは！ まあ、それはさて置き。一夏、気をつけろよ》

「何をだ？」

《俺の感が正しければ、お前や遊星達にこれからとてつもない女難が襲いかかるぞ》

「リアルに怖すぎるから止めて!!」

《もし、その女難で箒以外の女と何かあったら、箒派の奴らと一緒にお前を殺☆る☆か☆ら☆な☆》

「あなたはそんな性格だったっけ!？」

《この姿だと、龍の時と違って色々性格がぶっ壊れるんだよ。それじゃあ、とっとと友達のところに行ってこい》

スターダスト・ファントムは一夏の背中を叩いて行くように促す。

「わ、わかったよ！ サンキューな！」

《おお、また後でな》

IS学園の門に行くと、一夏は赤い髪をした少年、五反田弾を見つけた。

「お、いたいた。おーい、弾！」

「おー……」

返事をした弾は半死のような有り様である。

「ど、どうした？」

「どうもしない……。俺には女性に言葉をかけるセンスがない……」

一夏が来る数分前、弾はチケットを見せるよう声をかけられた布仏虚に急接近しようとしたが、会話がすぐに終了してしまい、現在のセンスの無さに落ち込んでいる。

「と、取りあえず、俺達のクラスに行くか？」

「ああ……」

一夏は弾を連れて行くと、声をかけられる。

「一夏よ、その男は誰だ？」

それは学園祭の見回りをしていたアポリアだった。

「ん？ おお、アポリア！ こいつは俺の友達だよ」

一夏はアポリアと気軽に話しているが、弾はアポリアの姿に呆然と
している。

「あの……一夏くん、こちらの方は……？」

「アポリアはこのIS学園の用務員兼、番人だ」

（うん。まず、女の子目当てで侵入してきた男はまず勝てないな。
一夏に感謝しなければな）

弾はすぐに悟り、招待してくれた友人に感謝する。

「じゃあ、アポリア。また後でな」

「ああ。私は引き続き見回りを再開する」

アポリアと別れ、弾をクラスに案内する。

「おいおい、ご奉仕喫茶だと？ 凄いなこれ……」

「だろ？」

「取りあえずお前の彼女を呼ぶか。ちょっとお前と一緒に話がある
からな」

「話？ あ、ああ」

弾は席に座り、一夏と箒の二人をオーダーする。

「なるほど、確かに蘭の言ってた通りの子だな。おい、一夏」

「どうした？」

「一発殴らせろ」

ゴイン！！

弾は一夏の頭を強く殴った。

「痛ってえ！！？」

「一夏！？」

「蘭を泣かせた罰だよ」

「何で蘭が！？」

「はぁ……わかったよ。お前にちゃんと話してやるからよく聞けよ？」

弾はため息をつきながら一夏と箒に話す。

蘭が一夏の事をずっと前から好きだったこと、夏祭りの夜に一晩中泣いたことを。

「蘭が……俺を？」

「そうだよ。まあ、まだお前を諦めた訳じゃないからチャンスがあ

ったらお前にアタックするはずだぜ」

「でも、俺は……」

一夏は箒を見る。

（俺は……箒を……）

もう、今更引き返すことが出来ない。

それほどに一夏は箒を愛しているのだから。

「わかってる。その子の事が一番大切なんだろう？ お前は前と同じように蘭と接してくれば良いんだよ」

弾は一夏の友人として、蘭の兄としてどうすれば良いか教える。

「さて、お前に言いたいことを言っただし、俺は行きますかね」

弾は代金をテーブルに置いて椅子から立ち上がる。

「またな、一夏。彼女さんを大切にしろよ？」

「ああ、わかっている。サンキュー、弾」

弾は一夏と別れ、学園祭を回る。

それから一夏も接客に復帰したが、途中から接客の手伝いに入ったスターダスト・ファントムはあっという間に人気者となり、本人もかなりノリノリである。

《お待たせしました、麗しきお嬢様》

「あ、あの！ お兄さん、お名前は！？」

「彼女はいるの！？」

《私のことはファントムとお呼び下さい、お嬢様。それと、プライベートルームの話はいけませんよ》

「キャー！」

「カッコイイー！」

そんなスターダスト・ファントムの接客を見ていたアキは苦笑を浮かべている。

何故なら、精霊化で肩の上に乗っている自分のエースモンスター、ブラック・ローズ・ドラゴンが嫉妬していたからだ。

《スターダスト……あんな小娘に現を抜かして……後で憎悪の棘で強化した私の鞭で調教してやるわ！ 覚悟しなさい！！》

（スターダスト、死なないでね……）

アキはスターダスト・ドラゴンの身を案じた。

（死ぬことはまずないけど、M体質を強化しないでね……）

そして別の意味でも心配した。

それから喫茶店を一回体勢を整えるため、一夏達に一時間の休憩時間を与えられた。

そして、一夏と箒は前から約束通り、二人で学園祭デートをする。

もちろん着ている執事服とメイド服はそのまま、二人は不思議な感覚を覚えながら恋人つなぎをする。

「じゃあ、行こうか？」

「あ、ああ。そ、そうだな……」

「どうした？」

「その、ずっと……楽しみにしていたから……」

「相変わらず可愛い事を言うな、箒♪」

「馬鹿……」

二人は笑みを浮かべながら学園祭デートを始めた。

第64話 一夏、天誅が下る時（前書き）

一夏×箒を更にイチャイチャさせてみました（笑）

今回はちょっと刺激を強くしてみました（黒笑）

第64話 一夏、天誅が下る時

一夏は箒と恋人つなぎをしながら学園祭デートをしている。

他のクラスや部活の出し物を一つずつ見て回った。

昼時が近くなり、学園祭で定番のたこ焼きや焼きそば等を買って、人があまり来ない屋上で食べる。

「やっぱり学園祭の時に食べるたこ焼きは美味しいな」

「そうだな。学園祭で売られている食べ物は確かに格別だな」

「箒、たこ焼き食べるか？」

「ああ、頂——って、えっ!？」

一夏は竹串に差したたこ焼きを箒の前に持ってくる。

「はい、あーん」

「あ、あーん……」

差し出されたたこ焼きを、箒は口を開けて食べさせてもらう。

「美味いだろ？」

「う、うん……やはり、良いものだな……」

以前一夏に食べさせてもらった時のことを思い出しながら幸福感に包まれる筈。

「あ、筈。口の横にソースが付いているぞ」

「な、何？ ど、どこだ!？」

筈は口を拭こうとハンカチを取りだそうとすると、一夏は顔を近づける。

「ここだよ」

ペロツ、チュツ！

一夏は筈の口の隣に付いたソースを舌で舐めて、その後に軽いキスをする。

「っ!？ なっ、なっ……なあっ!？」

筈は口を魚のようにパクパクとさせる。

「どうした？」

対して一夏はケロツとした感じで平然としている。

「ど、どうしたもこうしたもあるかあ！ 何故わざわざ舌で舐める!？」

「うーん……何となく？」

「何となくで恥ずかしい事を平気でやるなあっ!!」

「良いじゃん。恋人プレイの一つだと思えば♪」

「おかしいと思わんのか、お前は!？」

「あっ!　もしかして、口の隣じゃなくてちゃんと唇にキスをして欲しかったのか？」

「ばっ、馬鹿なことを言うな!」

「箒が望むならいつでもどこでもやるよ。優しいキスから激しいデ
イープキー——」

「天誅う!!!」

箒の鋭い手刀が一夏の頭を叩き落とす。

「ごぼっ!..?」

一夏は撃沈して前屈みに倒れる。

「はぁ……はぁ……少しは自重しろ!」

「……………」

「一夏?」

「……………」

箒が話しかけても一夏の反応がない。

「お、おい！ 一夏！」

箒は一夏に駆け寄って体を揺する。

「一夏、一夏あっ！！」

嫌な予感が頭を過ぎり、箒は何度も一夏の名前を呼んだ。

「隙あり♪」

ぐいつ。

「んむう！？！？」

一夏は起きあがると同時に箒の体を無理やり自分へ抱き寄せて唇を奪う。

「んちゅ……くちゅ……ふわあっ……いち、かあ……」

「ほ、うき……ぴちゅ……んう……」

一夏は箒の唇を貪るように何度も向きを変えて口付けをする。

そして、自分の舌を箒の口の中に侵入させて、箒の舌を絡め取るようにする。

「んくっ!? んうっ!?」

箒は今までに無い体験に驚き、一夏の胸を強く叩くが、一夏は一向に止める気配はない。

しかも、体をしっかり抱きしめられて逃げられることも出来ない。

そんな状態が数分間続き、一夏はようやく箒から唇を離して解放した。

箒はぐったりとしてしまい、そのまま一夏に倒れ込んだ。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

「あはは、ちょっとやりすぎたかな?」

一夏は今度は優しく箒を抱き締めて頭をスリスリと撫でる。

「凄く可愛かったぞ、箒♪」

一夏は箒の額に軽くキスをする。

「一夏……」

「おっ、起きたか？ ……箒？」

一夏は箒の雰囲気異質に感じた。

「一夏。よくも……色々好き勝手にやってくれたな……」

全身から黒いオーラが溢れ出し、ゆらりと立ち上がると、一夏は後ずさりする。

「い、いや、その……箒が可愛いからつい……」

「嬉しくないとは言わない……むしろ嬉しすぎて気が狂いそうだがな……」

箒は一体どこから出したのか、愛刀を持ち、柄を持ってスラリと鞘から抜く。

刀身が光で反射して怪しく光る。

メイド服＋日本刀。

ある意味最強の組み合わせに一夏は戦慄する。

「ほ、箒！ 待つんだ！ 話せば分か——」

「少しは反省しろおっ!! 一夏の馬鹿あああああああああ
あああっ!!--!」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアッ!!--!」

箒の逆鱗に触れた一夏は本日二度目の天誅を喰らった。

その後、一夏は何度も箒に土下座をしてようやく許してもらったの
だった。

おまけ。

《馬鹿だ……》

《阿呆……》

《愚か者が……》

こっそり一夏と箒を遠くから見ているジャンク・シンクロン、デブ

リ・ドラゴン、スターダスト・ファントムは一夏に対して暴言を吐く。

だが、見ていたのはこの三体だけではなかった。

「はぁ……一夏さん……」

「一夏の奴、あんなに箒といちゃついて……」

セシリアと鈴音だった。

《セシリア……》

《鈴……》

ターボ・シンクロンとニトロ・シンクロンが心配そうに見る。

「もう……一夏さんを諦めた方が良いのかもしれないね……」

「そうね……箒から一夏を奪うことが日を重ねることに難しくなっているし。何より、あんなに幸せな二人を引き裂くのも忍びないわ……」

セシリアと鈴音は一夏の事を諦めようとする。

「まあ、世界は広いですし、一夏さんみたいな素敵な男性の一人や二人は居ますわよね……」

「いや、寧ろ一夏以上の男を探すわよ」

二人はそう決心しようとしたその時だった。

「待ちなさい、恋する乙女達よ！」

ババンと登場したのは、生徒会長の楯無だった。

「生徒会長？」

「何か用ですか？」

「ふふふ。セシリアちゃん、鈴音ちゃん。まだ諦めるのは早いわよ！」

楯無は扇子でビシッと二人を指差す。

「何をおっしゃってるのですか？」

「今更一夏を箒から奪うなんて……」

「まあまあ、ここはお姉さんに任せて、二人には生徒会主催の演劇に出て貰うわ」

「「演劇？」」

セシリアと鈴音の二人は楯無の考えに全く理解できず、疑問符を浮かべて首を傾げる。

《スターダスト！》

《まさか、これって……》

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンは悪寒が体中に走る。

《IS学園生徒会長の楯無……彼女は一体何を企んでいる！？》

スターダスト・ファントムは楯無にある意味で畏怖の念を抱いた。

第65話 星屑と黒薔薇の始まり（前書き）

最近小説の更新の早いな、俺……。

今回は遊星達のお話で、シンデレラ回はこの次となります。

皆さんが楽しみにして下さるので、私なりにじっくりと時間をかけて書くつもりなので、更新は少し遅くなりますが、楽しみにして下さい！

第65話 星屑と黒薔薇の始まり

喫茶店を整えるために与えられた一時間の休憩時間をどう使うか迷っていた遊星に、恋人のアキからの誘いが来る。

「遊星、学園祭を回りましょう」

アキからの誘いを遊星が断るわけがない。

「ああ、行こう。そうだ、みんなも来るか？」

遊星は龍亞と龍可、シャルロットとラウラと一緒に誘う。

「うん、お父さんとお母さんと学園祭を回りたい」

「私も一緒に行きたいです！」

シャルロットとラウラは喜んで誘いを受けるが、龍亞と龍可は髪をいじりながら、ばつが悪いように困った表情をする。

「あー……遊星、ゴメン。実は楯無姉ちゃんに呼ばれて、俺と龍可は生徒会の手伝いに行かなきゃならないんだ」

「だから、ごめんなさい……じゃあ、行ってきます！」

龍亞と龍可は何かを隠すように教室を出て行った。

「龍亞と龍可、どうしたんだ？」

「どこか様子が変だったけど……」

「生徒会長が関わっている時点で何かあるよね……」

「あの人の行動は全てトラブルの元凶にしか……」

何も起こらないことを祈りつつ、四人は学園祭を回ることにする。

しかし、この祈りは無情にも届かず、特に遊星は酷い目に遭うこととなる。

さっそく四人は親子水入らずで学園祭を回る。

シャルロットとラウラはそれぞれ遊星の腕に抱きついて、まるで本

当の父と娘のように一緒に歩いた。

しかし、それに嫉妬したアキが遊星を横取りして、娘二人と言い争いになったのは言うまでもない出来事だった。

それからしばらく話していると、ラウラはふと思いついたあることを遊星とアキに尋ねる。

「そうだ、父上と母上に聞きたいことがあります」

「聞きたいこと？」

「ラウラ、何を聞きたいの？」

「父上と母上の馴れ初めです！」

「「えっ!？」」

おそらく、子が親に聞きたい話ベスト5に入るであろう馴れ初めの話をラウラはどうしても聞きたいのだ。

「あっ、それ、僕も聞きたい！」

シャルロットも便乗し、二人とも目を輝かせる。

「参ったな……」

「聞いてもつまらない話かもしれないわよ？」

「「構いません！」」

二人に迫られ、遊星とアキは苦笑を浮かべる。

「わかった、わかった」

「それじゃあ、どこかで休みながら話しましょう」

「「はい！」」

遊星達は売店で飲み物を購入してベンチで話をする。

「さて、どこから話そうか……」

「そうね……あれはもう何年も前の話になるわね」

遊星とアキは昔のアルバムを開いて見るように思い出す。

「俺とアキは初めから仲がよかった訳じゃないんだ」

「むしろ、私は遊星を敵視していて憎んでいたわ」

「「ええっ!？」」

アキの意外な言葉にシャルロットとラウラは驚く。

「私が五歳の誕生日にデュエルを現実具現化させるサイコパワーに目覚めて、私のパパを傷つけてしまったの。それから力を制御できずに、他人を傷つけ、恐怖を植え付け、破壊の限りを尽くしたわ……」

アキの意外な過去にシャルロットとラウラは言葉が出なくなった。

アキの表情は暗かったが、だんだん明るくなっていく。

「私が十六歳の時に運命の出会いをしたの」

「それが、お父さんとの……」

「出会いですか？」

「ええ、そうよ」

遊星はスターダスト・ドラゴンのカード、アキはブラック・ローズ・ドラゴンのカードを取り出す。

「俺はスターダスト・ドラゴンと共に、アキとブラック・ローズ・ドラゴンの悲しみを受け止めるため、救うためにデュエルをしたんだ」

「私がどれほど遊星を傷つけても、遊星は真っ直ぐに私の目を見てくれた。何も恐れないで真正面から立ち向かってきた。そして、遊星とのデュエルで私は両親と和解できて、本当の居場所を見つける

ことができたの」

「そっか、それからお母さんはお父さんに……」

「好意を抱いたわけですね」

シャルロットとラウラに指摘され、アキは少し頬を赤くして頷いた。

「でもね、遊星は一夏ほどじゃないけど、かなりの鈍感だったの。何せ、遊星は筋金入りのD・ホイールバカだからね」

シャルロットとラウラの視線が遊星に向けられ、遊星は苦笑いをしながら頬を手でかいた。

「あはは……アキは厳しいな」

「だって、私が告白するまで星の数ほどアピールしたのに、遊星ったら全然気付かないんだもん」

「それは、すまなかった。アキに告白されるまでの約19年間は女性との関わりがあまり無かったから……」

「まあ、今となっては良い思い出わ。それに、今ならいつでも遊星を独占出来るわけだしね♪」

「偶に嫉妬深くてドSなところが何よりキツイけど……」

ボソッと呟いた一言にアキの耳が反応し、一瞬だけ黒薔薇の魔女化する。

「遊星、何か言ったかしら？」

「別に何も」

遊星は視線を反らして白を切る。

そんな二人をシャルロットとラウラは羨ましそうに見る。

「いいな」

「羨ましい……」

「ねえ、ラウラ。一夏のこと、どうする……？」

「うむ。箒に奪われてしまったから……ここは昔の日本みたいに一夏の側室として……」

「それ、絶対に箒に斬られるよ……」

「確かに……実力云々ではなく、阿修羅と化した箒に勝てる気はないな……」

「やっぱりここは、一夏の幸せを願って引き下がった方がいいのかな……？ 何だかんだで一夏と箒はお似合いだし」

「名残惜しいが、そうするしかないな。よし、これからは友人として二人を応援しよう。立场上、二人は狙われやすい位置にいるからな」

「うん、そうだね」

二人は気持ちを新たにし、一夏と箒を応援しようと思ったその時だった。

「ええい！ さっきの二人と似たようなことを言うか！ 恋する乙女達よ！！」

シャルロットとラウラの前に現れた楯無は今度は複数の女子達を引き連れていた。

「総員、遊星君を確保！」

『了解！』

楯無の命令に女子達は一斉に遊星に襲いかかり、縄で捕縛する。

「た、楯無！？ 一体何をするんだ！？」

「その質問の答えは後に分かるわ。連れて行きなさい」

「何を言って――ふぐっ！？」

女子達は遊星の口を布で縛り、遊星は何も喋れないままどこかに連

れ去られた。

「あなた、遊星をどこに連れて行ったの!？」

「お父さんに何をするつもりなの!？」

「話さないなら、今ここであなたを討つ!!」

アキ、シャルロット、ラウラは今にもISを起動しそうな勢いで楯無を睨み付ける。

「遊星君は一夏君達と一緒に生徒会主催の演劇の主役として貰うのよ。もちろん、あなた達もね♪」

「「「演劇?」?」」」

楯無は不気味なほど素晴らしい笑みを浮かべて扇子を広げた。

第66話 シンデレラ激闘劇 ～開幕～（前書き）

取りあえず始まりました、シンデレラ激闘劇！

原作では少し短かったですが、この小説ではかなり長くなる（？）
予定です。

それでは、どうぞ！

第66話 シンデレラ激闘劇 〽開幕〽

「……何だ、これ？」

「これ、ファンタジーの王子様の衣装だよな……」

「なぜ、俺達がこんな物を……？」

「俺、さっきまで本音と楽しく学園祭を回っていたんだけどな……」

「何で教師である僕まで……？」

第四アリーナの更衣室で、遊星と一夏とジャックとクロウ、そして教師であるブルーノがいた。

この五人は楯無率いる女子達に拉致されてここに連れてこられたのだ。

今すぐにこの場から逃げたいが、第四アリーナの観客は満席で逃げることはできない。

「みんな、ちゃんと着たー？」

楯無が五人分の王冠をもって入ってきた。

「はい、みんな王冠を被ってね」

遊星達は無言で王冠を被り、五人の王子様の完成だった。

「さて、そろそろはじまるわよ」

五人が覗くと、第四アリーナいっばいに作られたセットはかなり豪華だった。

ちなみに、演劇の演目は『シンデレラ』で、遊星達は王子様役である。

「基本的にこちらからアナウンスするから、みんなはその通りにお話を進めてくれればいいわ。あ、もちろん台詞はアドリブでお願いね」

((((大丈夫か……?))))

五人は不安を抱えつつ、舞台袖に移動する。

「さあ、幕開けよ！」

ブザーが鳴り響き、証明が落ちる。

幕が一斉に上がり、アリーナのライトが点滅し、演劇が始まる。

「むかしむかしあるところに、シンデレラという少女がいました」

楯無が出だしを喋る。

ここまではまともに聞こえるが、次の説明でシンデレラの根本的から何かがおかしくなっていく。

「否、それはもはや名前ではない。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵

「のわっ!？」

「よこしなさいよ!」

反射的によけた一夏だが、すぐさま中国の手裏剣こと飛刀を投げてくる。

「死んだらどうするんだよ!？」

「死なない程度に殺すわよ!」

「意味がわからん!」

「邪魔だあ! 引っ込んでいろ、この中華娘!!」

ジャックは鈴音の首根っこを掴んで遠くに投げ飛ばした。

「にゃあああああああああああつ!？」

鈴音は本当の猫のように叫びながら投げ飛ばされたが、猫のように垂直に着地した。

「こうなったら……みんな、ドリル・ウォリアーのドリル・ワープで待避しよう!」

遊星は手っ取り早く逃げるために首にかけた龍星を手取る。

「行くぞ、龍——ぐあああああああつ!？」

バリバリバリバリ！！！！

凄まじい電流が遊星の体を突き抜け、膝が地面に付いた。

痛みを遙かに通り越して熱が遊星の肉体を襲い、服の所々が焼き切れて煙を上げる。

「王子様はとある悪い魔女から、自らの剣を手にとると電流が流れる呪いを受けてしまったのです」

龍可のアナウンスによりISが使おうとすると電流が流れることを王子様たちは知ることになる。

「おい、遊星！ 大丈夫か！？」

一夏が駆け寄ると、遊星は苦痛の表情を見せる。

「くっ……昔受けたトラウマが蘇る……」

「電流のトラウマって何！？ 昔何があったの！？」

「こうなったら、この王冠を投げ捨てて逃げるしかない！」

ジャックは王冠に手をかけると、楯無からのアナウンスが来る。

「王子様にとって国とは全て。その重要機密が隠された王冠を失うと、自責の念によって電流が流れます」

「なに？」

しかし、時は既に遅く、ジャックは王冠を外しかけた。

「ぎゃああああああああっ!?!」

ジャックにも遊星と同じぐらいの電流が流れた。

「ああ! なんということでしょう。王子様の国を思う心はそうまでも重いのか。しかし、私たちは見守ることしかできません。なんということでしょう」

「楯無いっ!! 貴様ああああああっ!!!!」

ジャックが怒号の叫びを楯無に向けるが、楯無本人はケラケラと笑って無茶苦茶楽しそうにしている。

「おいおい! このままじゃヤバイぜ!?!」

「早く何とかしないと僕達も危ないよ!」

女子から武器を奪って奮闘するクロウとブルーノは何とか女子達の猛攻を防いでいるが、突破されるのも時間の問題である。

（（（（（一体何なんだ、この劇は!?!）））））

五人の心が度々一つになるのだった。

遊星達は知らなかったのだ。

この演劇に隠された、女子達だけに与えられる秘密の景品を……その答えは、王冠にあることを……。

一方、IS学園のある場所で二人の男女が何やら危ない話をしていた。

「さあて、そろそろ仕事に行くかな……てめえは女一人を誘拐する仕事だったな。しくじったら容赦しねえぞ」

女は顔が良いのに、いかにも悪人顔をしていて、とても口が悪く、男を見下すように言う。

「君こそ、子供相手にしくじるなよ？」

男はふふと不敵の笑みを浮かべて女を見下し返した。

「はっ、誰に言ってる？ 殺すぞ？」

「君は何でもかんでも殺す対象なのかい？ そのような考えを持つなら、成功する仕事も失敗に終わってしまうぞ？」

「いちいち感に来る奴だな。まあ、いい。帰ったらその面を引き裂いてやるよ！」

「なら、私はその綺麗な顔を二度と他人に見せられないようにしてやろう」

男女はまさに一触即発で、今にも殺し合いが勃発しそうな勢いである。

「さて、これ以上君と話すと時間を無駄にしようから失礼するよ」

男は小さく手を振り、その場から立ち去る。

「絶対にてめえを八つ裂きにしてやる……」

女は殺気を込めた視線で男を睨みつけて、男とは逆の方向へ歩いた。

第67話 シンデレラ激闘劇 〵薔薇の姫君〵（前書き）

ふうー！

早く書けたので投稿します！

今回はアキちゃんが頑張ります！

箒ちゃん奮闘は次回になります！

※アンケート。

文化祭編が終わったら、一夏か箒が、媚薬かお酒を飲んで大暴走する話を書くので、暴走させるのをどっちにさせるかアンケートを取りたいと思います（笑）

暴走させたい方の名前をよろしくお願いします。

m () m

第67話 シンデレラ激闘劇 〱薔薇の姫君〱

生徒会主催の演劇でシンデレラの一人として参加者中であるアキと箒が他の女子相手に奮闘していた。

（遊星は……）

（一夏は……）

二人の強い思いは一つである。

（（絶対に渡さない！！））

さて、何故シンデレラ達は王子様の王冠に必要以上に執着しているのかと言うと、それは楯無が仕組んだ秘密の景品だった。

それは『男子の王冠をゲットした子に同室同居の権利を与える』というものだった。

最初こそきょとんとしていた一同だったが、

『生徒会長権限で可能にするわ』

という楯無の言葉を聞いて、ほぼ女子全員が奮い立った。

しかし、アキと箒にとってはかなり危うい状況になってしまった。

アキと箒は恋人である遊星と一夏が他の女子に奪われる可能性が大きくなってしまふのだ。

特に、一夏に失恋したセシリアと鈴音とシャルロットとラウラの目は既に獲物を狙う猛獣のような危ない目となり、もし仮に一夏と同室同居となった日には確実に箒から奪いにかかるだろう。

そうなれば、一夏と箒の恋人としての絆が碎かれる可能性も高くなる。

アキも箒もそれだけは絶対に回避したい。

何としても遊星と一夏の王冠を死守したいのだが、そう簡単にはいかない。

遊星と一夏を狙う女子達はまず最大の障害であるアキと箒のリタイアを狙って襲いかかってきたのだ。

箒は愛刀と篠ノ之剣術で対抗するが、武器を持っていないアキは回避することで精一杯である。

（くっ、せめて私にも武器があれば……）

アキは悔しさがいっぱい表情を歪ませる。

王子様である遊星達同様、シンデレラもISの使用を禁止されるため、武器を呼び出すこともできない。

（私は……遊星を守ることができないの？）

アキの頬に一筋の汗が流れる。

《アキ。あなたはとても大事なことを忘れていない？》

アキの頭に直接語りかけてくるのはブラック・ローズ・ドラゴンの声だった。

（ブラック・ローズ・ドラゴン？ でも、私は……）

《大丈夫。アキには最強の剣と盾があるでしょ？》

（最強の剣と盾……はっ、そうか！）

《ふふふ。わかった？ それじゃあ、行くわよ！》

（ええ、ありがとう！！）

すると、一人のシンデレラが武器を持ってアキに襲いかかる。

「十六夜アキ、覚悟！」

だが、アキは笑みを浮かべていた。

「それはどうかしら？」

ギィン!!

「なっ!?!」

「これが、私の最強の盾よ」

アキの左腕には赤いデュエルディスクが装着されており、それでシンデレラの攻撃を防いだのだ。

「そして……」

シンデレラを押し返し、デュエルディスクにデッキをセットする。

「私の最強の剣、それは……」

デッキからカードをドロウする。

「カードよ!」

アキは五つのモンスターゾーンに五枚のカードを置く。

「現れよ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』! 『凜天使 クイーン・オブ・ローズ』! 『魔天使 ローズ・ソーサラー』! 『椿姫 ティタニアル』! 『スプレンドィッド・ローズ』!」

アキの背後に黒薔薇の龍、対をなす薔薇の双天使、椿を身に纏う美しき姫君、棘の狩人が現れた。

「シンデレラの一人が召喚したのは!」

「互いに深い絆で結ばれた美しき花の精霊達です！」

龍亞と龍可は演劇の舞台を盛り上げるために見事なアドリブでアナウンスする。

「みんな、遊星のところまでお願い！」

《さあ、アキの為に花を汚すお邪魔虫を排除するわよ！》

ブラック・ローズ・ドラゴンの指示に精霊達は頷いて他のシンデレラ達を次々と薙ぎ倒していく。

「アキ……」

遊星はシンデレラ達の猛攻を回避しながら王冠に触れる。

（そうまでしてこの王冠を取らなければならない理由があるのか？）

シンデレラの異様に執着する王冠の奪い合いに、遊星は何かに裏があることに気付く。

（楯無、やはりラウラの言うとおりでトラブルの元凶にしなければならないな。それなら……）

「俺は、王子として国を守る義務がある！」

遊星は大声で王子様役を演じる。

王子様とシンデレラ全員はピタリと停止し、全員の視線が遊星に集

まる。

「だが、俺はシンデレラの一人に恋してしまった……」

「遊星……？」

アキは目をぱちくりさせる。

「今の俺には、二つの選択肢が迫られる。王子として国を守るためにシンデレラと戦うか、愛する女のため^{シンデレラ}に国を捨てるかだ！」

役者顔負けの名演技に観客の声援が飛び交う。

そして、遊星は王冠に手をかけた。

「俺が選んだその選択肢の答え……それは、これだ!!」

遊星は王冠を勢い良く外した。

その瞬間。

バリバリバリ!!!

「ぐああああああああああっ!!!!」

遊星の肉体に再び電流が流れる。

「遊星!!」

「な、何と! 王子様は愛するシンデレラの為に自らの王冠を取り、

自責の電流を受ける覚悟を決めました！」

楯無の予想外の行動に驚きながらアナウンスする。

「ぐっ、がつ、がああああああっ！！！」

しかし、遊星はどれほどの激痛が走っても王冠を戻さなかった。

それどころか、遊星は王冠を握り締めて大きく振りかぶった。

「受け取れ、アキ！！！」

遊星は王冠をアキに向かって全力投球で投げた。

「遊星！ ローズ・ソーサラー、鞭を！」

《はい！》

アキは魔天使 ローズ・ソーサラーから棘の鞭を借りて高くジャンプする。

「はあっ！」

棘の鞭を巧みに使って王冠を巻き付かせてそのまま自分の元へ持ってきてしっかりキャッチする。

「最初に王子様の王冠を手に入れたシンデレラの名は……十六夜アキ！！！」

楯無が堂々と告知すると、観客の拍手がアリーナに広がる。

「遊星!!」

アキは急いで遊星の元へ走った。

「アキ……無事か？」

「それはあなたが言える台詞!？」

遊星の体はかなりダメージを受けていて、今にも倒れそうだった。

「心配するな……セキュリティで電撃拷問を受けた時に比べれば……」

「ちょっと待って! それ、初耳だけど!? 誰がやったの!？」

「そんな事より……疲れた……」

遊星はそのままアキに倒れ込み、アキはゆっくり腰を下ろす。

「遊星!」

アキは遊星に膝枕をして楽な体勢にする。

「その王冠を取ったらどうなるんだ……?」

「あまり、大きな声じゃ言えないけど、生徒会長権限で同室同居にするって……」

遊星は納得するように小さく頷いた。

「なるほど、そう言うことか……じゃあ、アキが俺の王冠を取ったから今まで通りに……」

「ええ。ごめんなさい、遊星。あなたを……傷つけてしまった……」

「ふふふ……」

遊星は目を閉じて小さく笑った。

「何を、笑っているの？」

「いや、そのシンデレラ・ドレスがよく似合っているから、つい……」

「もう……遊星こそ、王子様役、似合っていたわよ」

「止してくれ、柄じゃないんだから……」

「良いじゃない。遊星は私だけの王子様だから」

アキは遊星の額に軽くキスをする。

「そうだったな……アキ。すまないが、もう少しこのままで良いか？」

「良いわ。ゆっくり休んで、遊星」

「ああ」

遊星はゆっくり目を閉じて眠りにつく。

そして、遊星とアキを守るようにブラック・ローズ・ドラゴン達が周りを囲んだ。

箒はアナウンスからアキの勝利を聞き、一安心した。

（そうか、アキは遊星の王冠を勝ち取ったか。私も早く一夏の王冠を取らなくては……）

しかし、箒は現在、一夏に近づくことさえ出来ない。

「邪魔だ、退け！！」

「そうはいかない！ 隊長の為にここでリタイアしてもらうぞ、篠ノ之箒！！」

何故なら、クラリツサ達、黒ウサギ隊の三人が箒を足止めしていたからだ。

（ラウラ隊長、私達が足止めしている間に織斑一夏の王冠を早く！！）

今のクラリツサ達は、ラウラに王冠を奪わせるためなら例え命をも捨てる覚悟である。

（二夏……！）

・
箒の絶体絶命の危機が迫っているのだった。

第68話 シンデレラ激闘劇 ～精霊大乱闘～（前書き）

まだまだシンデレラ激闘劇は続きそうです。

箒の決着は次回まで持ち込しとなります。

第68話 シンデレラ激闘劇 〔精霊大乱闘〕

アキが遊星の王冠を勝ち取った一方、一夏は四人の乙女から追いか
けられていた。

「お待ちなさい、一夏さん!!」

「一夏、いい加減待たないと殺すわよ!!」

「い、一夏! お願いだからその王冠を私に頂戴!!」

「一夏、婿である私にその王冠を寄越すのだ!!」

セシリアと鈴音とシャルロットとラウラがまるで本当の猛獣のよう
に獲物の対象である一夏を狙う。

「ふざけるな! さっき王冠をちよつと外してみたけど、電流がマ
ジで痛いんだぞ!?!」

しかし、一夏の言い分を四人が聞くわけもない。

そして、四人のシンデレラはお互いを邪魔している所為でなかなか
一夏に近付けない。

そこで、

「先にあなた達を排除しますわ!」

「上等よ! 先にあんた達を倒して一夏の王冠は私が奪うわ!」

「あんまり荒っぽいことは嫌だけど、この際仕方ないね！」

「私の大切な部下達が箒を全力で止めてくれているんだ！ その恩に報いる為に貴様らを潰す！！」

四人とも既に殺る気で、それに反応するように精霊達が現れる。

《さて、先に誰から脱落してもらいましょうかね》

《うおおおっ！ 久々に腕が鳴るぜえっ！！》

《ぶっ壊してやるぜ！》

《さあ、王の裁きの時間だ！》

ターボ・ウォリアー、ニトロ・ウォリアー、ジャンク・バーサーカー、ロード・ウォリアー達も既に殺る気で精霊と人間の大乱闘が始まった。

「おいおい……」

一夏はこっそりとその場から退避する。

「箒、大丈夫かな……？」

《おい、一夏……》

ジャンク・シンクロンがげっそりとした声で話しかける。。

（ジャンクロン？　今まで何を……）

《箒派以外の奴らに邪魔されてなかなか来れなかった……だが、心配するな。そろそろ箒派の奴が動き出すから》

（は？　箒派？　動き出す？）

一夏は一体何のことか理解出来なかった。

「はあ……はあ……くうっ！」

箒は息切れをしながら刀を握り直す。

「ほう……確かに剣術の腕はなかなかだ。しかし、幼い頃から軍人として鍛えられている私達の足元には及ばない」

クラリツサは箒の実力に感心しながら、コンバットナイフを構える。

「諦めろ」

クラリツサは足に力を込めて一気に箒の間合いに入る。

「諦め……」

箸は歯を食いしばり、刀の柄を強く握り締める。

「られるかあああああああっ!!」

「っ!？」

間合いに入ったクラリッサを怒号と共にぶっ飛ばす。

「私は一夏の恋人だ!! 例えどれほど実力の差があろうとも、あなたを倒して一夏の元へ行くまでだ!!」

（なるほど……これほどの強い覇気。流石はISを開発した稀代の天才、篠ノ之束の妹だな……）

「それなら、私も本気を行かせてもらう。覚悟！」

クラリッサが一気に畳みかけようとしたその時だった。

《セブン・ソード・スラッシュ!!》

七つの剣による七つの斬撃がクラリッサに襲いかかる。

「なっ!？」

とっさに回避するが、避けきれずにクラリッサのシンデレラ・ドレスに複数の切れ目が入る。

《さて、俺達も派手に暴れよう》

《だからと言って、あまり彼女を傷つけないようにだよ》

《ほっほっほ！ 久々の外じゃぞ！》

《さて、少々ロード達をお仕置きするか》

箒の前に現れたのは、セブン・ソード・ウォリアー、カタパルト・ウォリアー、スカー・ウォリアー、ライトニング・ウォリアーである。

クラリッサに攻撃したのは、もちろんセブン・ソード・ウォリアーである。

《箒!》

「デブリ・ドラゴン!」

デブリ・ドラゴンは嬉しそうにしながら箒の周りを飛ぶ。

《みんなに来てもらったんだ！ みんなは箒の味方だよ!》

「私の……？」

箒は精霊達を見渡すと、小さく精霊達は頷いた。

「みんな……ありがとう！」

ターボ・ウォリアーとロード・ウォリアーは互いの爪で戦いながら
ライトニング・ウォリアー達の気配に気付いた。

《む！？ この気配は！？》

《くっ、ライトニング達が来てしまったか！？》

《仕方ありません……皆さん、一時戦闘を中断しましょう！》

《ライトニング達を倒すのが先決だ！》

ニトロ・ウォリアーとジャンク・バーサーカーも頷き、一時停戦し
てライトニング・ウォリアー達を倒しに向かう。

だが、そんなロード・ウォリアー達の前に二体の精霊が現れる。

《よう、てめえら……》

《よくも俺達を閉じこめたな……》

怒りのオーラを纏ったスターダスト・ドラゴンとジャンク・ウォリアーが現れる。

《げっ！ 関羽！？》

《誰が関羽だ！！》

ロード・ウォリアー達はスターダスト・ドラゴンとジャンク・ウォリアーの怒りのオーラに圧倒されて緊急停止する。

《それじゃあ、行け！ ジャンク・ウォリアー！！》

《ああ、この姿になるのも久しぶりだぜ！》

スターダスト・ドラゴンとジャンク・ウォリアーは拳を握り締める。

《はっ！？ マズいです！ 二体の行動を今すぐ止めないと！》

ターボ・ウォリアーは二体がこれから何をするのかいち早く気付いたが、既に遅かった。

二体は拳を強くぶつけ合う。

《シンクロフュージョン！！》

その瞬間、スターダスト・ドラゴンとジャンク・ウォリアーは混ざ

り合うように巨大な渦となる。

そして、巨大な渦から新たな精霊が姿を現す。

《融合召喚！ 波動竜騎士 ドラゴエクイテス！！》

現れたのは、青を基調とした鎧を身に纏い、大きな翼と槍を持つ竜騎士である。

「融合……？ スターダスト・ドラゴンとジャンク・ウォリアーが一つに……？」

箒は啞然とし、口をポカーンと開けた。

《箒、俺がこいつ等を片付ける。そしたら、カタパルト・ウォリアーで一夏のところまで運んでもらえ》

「わ、わかった！」

《さあ、喰らいな！ スパイラル・ジャベリン！！》

巨大な槍を全力で投擲し、ロード・ウォリアー達をぶっ飛ばす。

《グアアアアアアアアアッ！？》

波動竜騎士 ドラゴエクイテスは、シューティング・スター・ドラゴンの次に強く、ウォリアーズ達の中でナンバー2の実力を持つのだ。

よって、ロード・ウォリアー達が適うわけもなく、瞬殺された。

箒はカタパルト・ウォリアーのツイン・カタパルトに乗る。

「カタパルト・ウォリアー、頼む！」

《任せろ、一夏の所までひとつ飛びだ！ ターゲット、ロック！
カタパルト・シュート！！》

箒に透明のバリアを張って、ツイン・カタパルトから射出する。

第69話 シンデレラ激闘劇 〽覚悟〽（前書き）

シンデレラ激闘劇、筈の決着です！

次回でようやくシンデレラ激闘劇が終了予定です。

そうしたら、久々のバトル突入になりますので！

第69話 シンデレラ激闘劇 〽覚悟〽

一方、セシリア達から逃れた一夏は舞台のセットの陰に隠れていた。

「ふう……何とか少し休めるな……」

汗を拭うと、空から声が響く。

「一夏ああああああああああっ!!!!」

「へっ？」

少し上を見上げると箒がこっちに向かって飛んでくる。

「なあああああああああっ!!?!? ほ、ほほ、箒!!?!?」

一夏は混乱しながらも、飛んでくる箒をしっかりと受け止め、そのまま後ろに倒れるが、ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンが一夏の背中を支え、倒れる衝撃を防いだ。

《あ、危ねえ……》

《流石は俺の相棒……》

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンは箒の無茶に冷や汗をかき、二人からゆっくり離れて見守る。

「箒、大丈夫か……?」

「う、うむ！ すまないな、一夏……」

「そんなに無茶してまでこの王冠が欲しいのか？」

一夏は王冠を指で軽く叩く。

「た、頼む……その王冠を私にくれ……」

「……わかったよ」

「本当か!？」

「まあ、遊星がアキに王冠をあげたからな。俺も男を見せなきゃな」

一夏は箒から少し離れて王冠に手を添える。

「箒、電流が危ないからそこに居ろよ」

「いや、その必要はない」

箒は一夏に近づいて抱き締める。

「えっ？ ちょっと、箒さん？」

箒の意図が分からない一夏は目をぱちくりさせる。

「心配するな。お前だけに苦しい思いはさせないからな」

一夏を片腕で抱き締めた状態で、箒は空いた片手で王冠を掴んだ。

「なっ！　ちょっと、待て！　箒!?」

「じゃあ……行くぞ！」

一夏の制止も聞かず、箒は王冠を取った。

その瞬間。

バリバリバリ!!!

「があああああっ!!!」

一夏の肉体に電流が流れ、悲鳴を上げた。

しかし、電流が流れたのは一夏だけではなかった。

「あっ、くっ、ああああああっ!!!」

同時に箒の肉体にも電流が流れ、今まで受けたことのない激痛からの悲鳴を上げる。

本来なら電流は一夏にだけ流れるはずだが、抱き締めていることで一夏とより密着している箒にも電流が流れているのだ。

「馬鹿、早く、離れ……ろ……」

一夏は箒を引き離そうとするが、箒は一夏を強く抱きしめて離れようとしなない。

「いや、だ……絶対……離れ、ない！　もう、二度と……一夏と、

離れ、離れに……なら、ないと……自分に、誓ったんだ！」

電流の苦痛に耐えながら自分の思いを一夏に打ち明ける。

「ほ、うき……うっ!? がっ、ぐう、がああああああああ
あっ!?!?」

「ひうつ!? くっ、くあっ、あああああああっ!?!?」

突然、二人の体に流れる電流の電圧が上がり、二人の体に更に激しい激痛が走る。

《箒!! 一夏!!》

デブリ・ドラゴンは二人に駆け寄ろうとするが、溢れ出る電流で近づくことができない。

《おい、楯無! あの電流の電圧は人間には危ないだろ! どうな
ってる!?!》

ジャンク・シンクロンが楯無に向けて叫ぶと、楯無は珍しく焦った表情を見せる。

「まずいわ、一夏君の服に仕掛けてある電流装置が誤作動を起こしている! このままじゃ二人の命が危ないわ!」

《くっ、ドラゴエクイテス!?!》

デブリ・ドラゴンはロード・ウォリアー達と戦っているドラゴエクイテスと呼ぶ。

《どうした！？ デブリ！》

《一夏と箒の命が危ない！ お前の能力で何とかしてくれ！！》

《わかった、任せろ！！》

ドラゴエキテスは大きな翼を羽ばたかせて飛び、一夏と箒に向けて手を前に突き出す。

《ウェーブ・フォース！！！！》

両手から文字通り力の波動を出し、一夏の服に仕込まれた電流装置を破壊する。

電流がピタッと止み、一夏は箒を抱き締めたままそのまま後ろに倒れる。

《一夏！！！！》

《箒！！！！》

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンが駆け寄り、セシリア達も戦いをやめて駆け寄る。

「鈴音さんは私と一緒に箒さんの無事の確認を！ シャルロットさんとラウラさんは一夏さんをお願いします！」

「わかったわ！」

「うん！」

「ああ！」

セシリアの指示通り、始めに一夏と箒をゆっくり引き離して、二人の無事を確認する。

「息と脈は……良かった、ありますわ……」

「それにしても、まさかこんな事態になるなんてね……」

セシリアは一安心し、鈴音は呆れて額に手を当てる。

「一夏さんはどうですか？」

「うん、こっちも大丈夫だよ」

「だが、二人とも、あれほどの電流を喰らったんだ。早く医療処置をしなければ……」

《ご心配なく》

《俺達が治してやるよ》

セシリア達が上を向くと、エンシエント・フェアリー・ドラゴンとライフ・ストリーム・ドラゴンが空から降りてくる。

実況席から龍亞と龍可が両手を組んで力を二体の精霊へ込めている。

エンシエント・フェアリー・ドラゴンとライフ・ストリーム・ドラ

ゴンは翼を広げ、翡翠と黄金の粒子を散布させる。

粒子は一夏と箒を包み、電流で受けた傷を癒す。

「あ、れ……?」

「一体、何が……?」

一夏と箒はすぐに目を覚まし、ゆっくりと起きあがる。

《一夏、大丈夫か!?》

《痛いところはないか!?》

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンが一夏と箒の身を案じると、二人は頭を撫でる。

「ああ、とりあえずは大丈夫そうだ」

「心配をかけたな」

そして、箒はあることに気付いた。

「……あれ? 王冠は!? 一夏の王冠はどこだ!?」

どうやら一夏から外して電流に耐えている時、無意識に手放してしまったようだ。

「王冠ならここにありますわ」

「セシリア？」

一夏の王冠はセシリアの手にあり、セシリアは微笑むと、そのまま箒に手渡す。

「どうしてだ……？ お前達も一夏の王冠を狙っていたのに……」

「どうしてって、一夏のさんの王冠は箒さんが持つのに相応しいからですわ。そうでしょう？ 皆さん」

セシリアは鈴音とシャルロットとラウラに尋ねると、一つ頷いた。

「はつきり言って、私達の負けよ。一夏と一緒に電流を受けるなんて考えられなかったし」

「僕達は王冠を奪うことだけに必死だったからね」

「それに、箒の強い思いと覚悟、しっかり私達の心に響いたぞ」

四人は箒の行動に心を胸を打たれ、箒に王冠を譲る事にしたのだ。

箒は王冠を抱き締めて礼を言う。

「ありがとう……みんな」

「あの……それでさ、その王冠を手に入れたらどうなるんだ？」

一夏が一番聞きたかったことを聞くと、箒は顔を少し赤くして言う。

「その……更識会長が、生徒会長権限で一夏と同室同居にしてくれ

ると……」

「えっ？　つまり、また箒と同じ部屋で暮らせるってことか？」

「そ、そうだ。一夏が嫌じゃなければ……」

「何言っただよ。嫌な訳がないじゃないか」

一夏は箒を抱き寄せる。

「俺は嬉しいよ。箒がそれほど俺との一緒の時間を作ろうとしてくれることをな。前は幼なじみとして一緒だったけど、今度は恋人としてな？」

「一夏……うん、そうだな」

箒は両腕を一夏の背中に回そうとする。

「ちょっと、二人共！」

「イチャイチャするなら私達の居ないところでしなさい！」

「見てるこっちが恥ずかしいよ！」

「見ててイラつくから極力私達の前では止めろ！」

四人に睨まれ、一夏と箒は土下座をして謝る。

「「ごめんなさい……」」

そして、六人はお互いを見ると、何故か可笑しくなり、その場で声を出して笑った。

おまけ。

「いやゝ、愛と友情は感動するねゝ」

楯無は満足そうに六人の行動を見る。

しかし、楯無は気付かなかった。

《更識……楯無……》

精霊達の押さえきれない強い怒りに。

《マスターを傷つけ、一夏と箒が死にかけた……》

《これは千冬の姐さんに連絡だ……》

《少々、おいたが過ぎたようだな……》

《流石はトラブルメーカー……》

《ちょっとお仕置きをしないとな……》

《覚悟しろ……》

精霊達の怒りは楯無の運命のカウントダウンの始まりであるのだ
った……。

第70話 シンデレラ激闘劇 〽終幕〽（前書き）

ようやく長かったシンデレラ激闘劇も今回で終わりです。

次回はいよいよ、原作の敵である亡国機業とのバトル突入です！

それでは、どうぞ！

第70話 シンデレラ激闘劇 〽終幕〽

遊星とアキ、一夏と箒の二組のカップルの決着が着いた一方、別の場所では……。

「くっ……手こずらせおって！」

「これが女の子の本気のパワーなんだね……」

ジャックとブルーノの前にはおびただしい数のシンデレラが倒れていた。

そして、四体の精霊が息切れをしていた。

《無駄に疲れたぞ……》

不気味な姿をした紫色の竜、エクスプロード・ウィング・ドラゴン。

《ただの人間がこれほどの力を持っているとは、恐ろしい……》

死兆星を司る死神、天刑王 ブラック・ハイランダー。

《もはや命を賭ける勢いだった……》

サイの姿をした戦士、T G ラッシュ・ライノ。

《つか、どんだけ男に餓えているんだよ……》

右腕を機械で改造された狼の戦士、T G ワーウルフ。

「誰が女と一緒にの部屋になるか！」

楯無が王冠をゲットした女子を同居同室にする景品の情報を聞き、ジャックは余計に王冠を奪わさせないと奮闘したのだった。

「大体僕には真耶がいるんだ。他の女の子とは——」

ブルーノが言い掛けたその時。

「え、えいっ！」

スポッ。

「えっ!？」

ブルーノが頭を触ると、王冠がなくなっている。

「え、えへへ……ブルーノの王冠、私が頂きました！」

「ま、真耶!？」

後ろからこっそりブルーノの王冠をゲットしたのは真耶だった。

しかもちゃっかりシンデレラ・ドレスを着用していた。

「む? ブルーノ、何故王冠を外したのにお前の体に電流が流れない?」

ジャックはブルーノの服から電流が流れていないことに気付いた。

「ああ、それならさっき自分で装置を停止させたからね」

「貴様あ！　だったら俺の装置も早く止めろ！！」

「あー、ごめん。今やるから」

「これでブルーノと一緒に部屋になれますね」

真耶は嬉しそうに王冠を抱き締める。

「全く……君という人は……」

ブルーノは呆れていたが、どこか嬉しそうだっただ。

「このバカップルが……」

ジャックは酷い頭痛が襲い、頭が割れそうになった。

結果、このシンデレラ激闘劇で王冠を奪われずに済んだのはジャックただ一人だった。

そして、最後の王子様、クロウは……。

「おーい……お前達は俺に何をやっているんだ？」

クロウは現在鉄の鎖で縛られ、体の自由が利かなかった。

そして、その周りにはブラックフェザー・ドラゴンと、BF達が大集合していた。

《さて、少なからずクロウを狙ってきた女は倒したし……》

ブラックフェザー・ドラゴンの目線の先には十人くらいのシンデレラが倒れていた。

「倒したなら、何故俺を逃げられないようにしてるんだよ!？」

《決まっている。お前の王冠をこの子に取らせるためだ》

「この子？」

《さあ、みんな。跪くんのだ》

ブラックフェザー・ドラゴンが命ずると、BF達は地面に降りてそのまま跪いた。

そして、クロウに真っ直ぐ歩いてきたのは……。

「はーい、クロクロ♪」

それはシンデレラ・ドレスを着た本音だった。

「本音!?!?」

《さあ、のほほんちゃん。クロウの王冠を取って同室同居となるんだ!》

「うん! さあ、クロクロ。大人しくしていてね」

本音の目はギューピンと光り、もはや小さな獲物を狙う子狐だった。

「いやいやいや! ちょっと待て! 何かが変わる! 俺の王冠を取って何の価値があるんだよ!?!」

《……どうやらわかってないようだな》

「仕方ないな……それじゃあ、口で言わないと分からないかな?」

本音はクロウの前にちょこんと座る。

「な、何だよ」

「クロクロ、今から言うことは本当の事だからちゃんと聞いてね?」

珍しく真剣な表情をする本音にクロウは頷いた。

「お、おう！」

「私、クロクロのこと……大好きだよ。だから、付き合ってください」

「……はああああああああっ?!?!?」

クロウは当然驚いた。

何せ、人生初の女性からの告白を受けたのだから。

「ま、待て！ 俺はろくでもない男だぞ!? そんな、お前となんか……」

クロウが色々と言い掛けるが、本音は人差し指でクロウの口を塞ぐ。

「BFのみんなから聞いたんだよ。クロウがどんな人生を送ったのか……このマーカ―の事もね」

本音はクロウの顔に刻まれたマーカ―の黄色の線をなぞるように触

れる。

「クロウは自分の為じゃなく、親を亡くした孤児の子供達の為にカードを盗んでこのマークを刻まれたんだよね？」

「……ああ。当時の俺は恥ずかしいことに、義賊紛いのことしか……あいつらの為に出来なかったからな」

「やっぱり……クロクロは優しいね」

本音の言葉にクロウは意外そうな表情をする。

「優しい？　俺がか？」

「うん、そうだよ。誰かの為に自分を犠牲にすることは凄いことなんだよ？　そんなクロクロを……私は大好きになったんだよ？」

「……本音」

「ん？　なーに？」

「こんな俺で……本当に良いのかよ？」

クロウの質問に本音は笑顔を見せる。

「うん、私はクロクロが良いんだよ。だから……その王冠を取ってもいい？」

「……ああ、持ってけよ」

「それじゃあ、王冠を頂きます」

本音はクロウの王冠を外してゲットした。

クロウの服に仕込まれた電流の装置は事前にBF達が破壊したので流れることはない。

BF達はクロウを縛った鉄の鎖を外し、クロウは間接を鳴らしながら立ち上がる。

「えっと、取りあえずだな……」

クロウは恥ずかしさを紛らわせるために本音から目を背けながら、ポンと本音の頭に手を乗せる。

「よろしくな、本音」

「うん！ クロクロ、大好き！」

「あ、ああ……」

両想いになったクロウと本音の二人に、ブラックフェザー・ドラゴンとBF達は祝福の声援を上げた。

これにより、波乱の生徒会主催のシンデレラ激闘劇が終幕した。

しかし、この後に新たな敵との戦いが始まるとは、誰も知らなかった……。

.

第71話 IS学園へ介入する闇（前書き）

皆さんお待ちかねの亡国企業とあの人の介入です！

原作五巻もようやくクライマックスに近づいて来ましたね。

早く六巻の内容も考えなくては。

もし、原作に追いついたらどうしましょう？

第71話 I S学園へ介入する間

生徒会の演劇が終わり、執事服とメイド服に戻った一夏と箒は疲労しながら、I S学園で普段人通りの少ない道にあるベンチで座っていた。

「箒、大丈夫か？」

「ああ。エンシェント・フェアリー・ドラゴンとライフ・ストリーム・ドラゴンが癒してくれたとは言え、精神的に疲れた……」

「待ってろ、今何か飲み物を買ってくるから」

「うん、ありがとう」

一夏は自動販売機か売店を探しに行く。

しばらく歩いていると、向こうからスーツを着た女性が来た。

「あの、すみません」

「あ、はい。何ですか？」

一夏は道を迷ったのかと思ったが、女性からは予想外の言葉が来た。

「てめえの白式を私に寄越せ」

女性は悪の笑みを浮かべ、一夏は唾然とした。

「えっと……冗談ですか？」

「いいからとつと寄越しやがれよ、ガキ」

女は一夏の腹を思いっ切り蹴り、地面に引きずる。

「ゲホッ、ゲホッ！ あ、あなた一体……」

「ああ？ 私か？ てめえの白式を奪いに來た美女だよ。おら、嬉しいか？」

倒れている一夏に女は更に蹴りを入れようとする。

《誰が嬉しいか、悪女め》

バキッ！

ジャンク・シンクロンが現れ、女の顔を渾身の力で殴り飛ばす。「ぐっ！ てめえ……私の顔を殴りやがったな！！」

女は殴られたところを手で押さえながらジャンク・シンクロンを睨みつける。

《まあ、俺の多少攻撃力は低いがその綺麗な顔にたんこぶぐらいは出来るだろ。良かったな、その悪人面に似合うぞ。はっはっは!》

ジャンク・シンクロンは女をワザと怒らせるように挑発させる。

「……殺す!!」

ジャンク・シンクロンの狙い通りに女はブチ切れて、背中に蜘蛛のような八つの装甲脚を持つIS、アラクネを起動させる。

《悪女に容赦無しだ。つーか、あんたは一夏を蹴ったんだからお相手だろ? オ・バ・サ・ン》

「私はまだ若いんだよ!!」

《いや、怒ってばっかで顔のしわが寄って、見た目年齢がオバサンに見えるぞ?》

「上等だ……ガキの前にてめえをスクラップにしてやる!」

《スクラップモンスターの仲間入りも良いんだけど、そのガキはどこにいる?》

「ああ?」

倒れていた一夏の姿はいつの間にか無く、ジャンク・シンクロンはニヤリと笑う。

《やれ、一夏》

上空から白式を纏った一夏が一気に急降下して降りてくる。

「ちっ!？」

女はとっさに後ろに下がるが、一夏は既にアラクネを捉えていた。

「零落白夜!!!」

雪片式型の斬撃がアラクネのシールドごと八本の装甲脚の内、四本を切り裂いた。

《ナイスだ、一夏!》

「お前の指示が的確だからだよ!」

一夏はジャンク・シンクロンが出てくる直前に、本人から指示を貰っていたのだ。

その指示とは、

《あの女が殴られる瞬間に白式で上空へ飛べ。俺が注意を引きつける。女がISを出して、タイミングを見計らったら零落白夜で斬れ》

見事にジャンク・シンクロンの思惑通りとなったのだ。

「調子に乗り上がって……白式を奪ったら殺してやる!」

女は怒りから更に殺気を放つ。

一夏は雪片式型を構え直し、ジャンク・シンクロンは右手で腰のレバーを引く。

《悪いけど、あんたのターンは回らないぜ。俺達のバトルフェイズはまだ続いているからな》

ジャンク・シンクロンの言葉の意味を女は全く気付いてなかった。

「椿姫流・壺の型、落椿！」

刹那、アラクネの残り四本の装甲脚が切り落とされた。

女が気付いたときには自分のすぐ目の前に、空裂と雨月を一つに合体させた長刀『椿姫』を持った、紅椿スターダスト・フォームを纏った箒がいた。

一夏から連絡を受けた箒は文字通りすぐに飛んできたのだ。

「てめえは……篠ノ之束の妹、篠ノ之箒！？」

「正直、あなたの口から姉さんの名前を聞きたくないな」

両手で構えた椿姫で横に薙払うように振り、女を吹き飛ばす。

（椿姫の剣技……取りあえず実戦で使えそうだな）

箒が篠ノ之流剣術以外で独自に考えた、長刀の椿姫を使用した我流である『椿姫流』が上手く決まり、箒は少し満足した。

その壱式・落椿は、両手で構えた椿姫で、横に振る腕の力と横に体を回転させる腰の力をフルに使用して、対象を落椿のように切り落とす回転切りである。

「一夏、取り敢えずこいつを叩きのめして動けなくするぞ」

「ああ、こいつには聞きたいことが山ほどあるからな！」

一夏は白式をジャンクフォームにして、雪羅を起動させる。

ISの主力武器を破壊され、女は危ない状況に陥る。

「仕方ねえ……」

女は舌打ちをして、小さなエメラルドを取り出す。

しかし、ただのエメラルドではなく、エメラルドから不気味な黒い霧が溢れ出る。

女はエメラルドを高く投げて叫んだ。

「さあ、来やがれ！ 天魔時戒神、ネツァク！！」

「「っ!?!」」

エメラルドはアラクネの中に取り込まれると、膨大な闇を放出する。
そして、闇は女の姿をした悪魔の形となる。

『我が名は天魔時戒神の一柱、ネツァク』

一夏と箒の脳裏に臨海学校の悪夢が蘇った。

一方、龍亞と龍可は演劇の片付けを手伝っていると、ある人物と再会してしまった。

「やあ、誰かと思えば双子の兄妹ではないか」

「「えっ!?!」」

龍亞と龍可は信じられないと言わんばかりに驚いた。

「お前……ディヴァイン!?!」

「どうして……あなた、地縛神に……」

その人物とは、嘗てアキを含むサイコデュエリストで構成されたアルカディアムーブメントの創始者のディヴァインである。

しかし、ダークシグナーとの戦いで地縛神 C c a r a y h u a に喰われて死亡しているはずである。

「確かに私は地縛神に喰われたが、神は私を見捨てなかった。そして、この世界に導いてくれたのだ!」

「ディヴァイン……まだアキ姉ちゃんを狙っているのか!？」

龍亞は龍可を庇うように前に立つ。

「当たり前だ。アキは私の道具なのだからな!!」

ディヴァインは卑劣極まりない男で、アキを捨て駒にしようとしている。

「さて、アキは今どこにいる？ 教えるんだ」

迫ってくるディヴァインに龍亞は立ち向かうように左腕を高く上げる。

「ホープ・ヒーロー！ デュエルディスク、セット!!」

ホープ・ヒーローからデュエルディスクを呼び出して、デッキをセツトする。

「ディヴァイン、お前にまだデュエリストの魂があるなら俺とデュ

エルしろ!」

龍亞はシグナーとダークシグナーとの戦いが始まる前にディヴァインとデュエルしたのだ。

しかし、龍亞が善戦したが、惜しくもディヴァインに敗北してしてしまったのだ。

「ほう……一度私に負けていながら私にデュエルを挑むのか？ 良いだろう、お前に私の力をもう一度見せてやる!」

ディヴァインもデュエルディスクを左腕に装着する。

龍亞とディヴァインはデュエルの為に今の場所から少し離れてお互いに距離を取る。

その時、龍亞はディヴァインに聞こえないよう龍可に小声で話す。

「龍可、俺が出来るだけデュエルで時間を稼ぐからその間に遊星達を呼んできて」

龍可は小さく頷き、遊星達の元へ走った。

龍亞とディヴァインはデュエルディスクを構え、デッキから五枚ドロースする。

「さて、妹と違って役立たずな君はあの時からちゃんと成長しているのかな?」

ディヴァインは龍亞を挑発するが、龍亞はそんなことに耳を貸さず

に心を深く静めて落ち着いている。

（このデュエル……負けるわけには行かない！）

龍亞は左手で服越しに右腕の赤き竜の痣に触れる。

「ディヴァイン、お前を必ず……倒す！」

「良いだろう……来い！」

龍亞にとって因縁の相手であるディヴァインとのデュエルが始まる。

「「デュエル！！」」

第72話 奇跡の進化（前書き）

今回は一夏と筈がシンクロフォームに続く、新たなチートの発動です（爆）！！

龍亞とディヴァインのデュエルはこのバトルが終わった後に書きます！

では、どうぞ！

第72話 奇跡の進化

『さあ、我が同朋の借りを返す時が来たな』

ネツアクは取り込んだ女のアラクネのような八つの脚が背中に現れる。

「箒、天星双龍破で一気に決めるぞ！」

「わかった！」

『させるか！』

ネツアクから無数の糸を放出して一夏と箒に襲いかかる。

すると、その糸は白式と紅椿の装甲をどんどん傷つけていき、シルドエネルギーが大量に消費される。

『私の出す糸は鋼鉄さえもいとも簡単に斬れる斬糸だ。そして……』

一夏と箒の足元から悪魔の闇の鎖が現れ、二人を縛る。

「しまった！」

「くっ、逃げられない！」

『これでお前達は攻撃することは出来ない……』

「やるじゃねえか、ネツアク」

ネツアクの体から、先ほど取り込まれた女が出て来た。

しかも、アラクネが完全に修復された状態で。

「さあてと、どうやって殺すかな……」

女は楽しみと言わんばかりにニヤリとする。

「あら、そういうのは困るわ。二人は私のお気に入りだから」

場にそぐわぬ楽しげな声の主は、水色のIS『ミステリアス・レイ
デイ』を纏った楯無だった。

『邪魔はさせない』

ネツアクは悪魔を召喚して楯無に襲いかからせると、更に闇の結界を作り出して楯無を追い出し、自分達だけを閉じ込める。

「なっ!?! 一夏くん! 箒ちゃん!」

楯無は結界に攻撃するが、ビクともしない。

「くっ、邪魔よ!」

楯無は襲いかかってくる悪魔を一掃する。

「なんなんだよ、あんたは!？」

一夏は鎖にもがきながら聞く。

「私はな、秘密結社『亡国機業』が、一人、オータム様って言えばわかるがあ!？」

女——オータムが叫ぶと、一夏と箒に装置が取り付けられる。

「さあ、てめえのISとのお別れだ!」

刹那、二人の体に電流に似たエネルギーが流される。

「があああああっ!!」

「ぐあああああっ!!」

再び体に激痛が襲いかかり、悲鳴を上げる。

すると、ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンがシンクロフォルムを解除されて倒れる。

「ジャンクロン!」

「デブリ!」

「ざまあねえな……」

オータムはジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンを踏みつける。

「止めろおっ!!」

「二人を離せ!!」

「できるのか？ ISの無いお前たちでなあ!？」

二人はようやく気づいた。

白式と紅椿が無いことに。

「へっへっ、お前達の大事なISならここにあるぜ」

ネツアクの手には二つの菱形立体のクリスタルだった。

「さっきの装置はなあ! 『剥離剤』^{リムーバー} つつうんだよ! ISを強制解除できるっつー秘密兵器だぜ? 生きているうちに見れてよかったなあ!」

「かえ……せ……」

「ああ? 聞こえねーよ」

「返せ! てめえ、ふざけんな!」

一夏は鎖を引きちぎって、コアを取り戻そうとするが、ネツアクに

返り討ちにあい、再び鎖に縛られる。

すると、オータムは何かを思い出し、不気味な笑みを浮かべながら言う。

「そうそう、死ぬ前に教えてやんよ。第二回モンド・グロッソでお前を拉致したのはうちの組織だ！ 感動のご対面だなあ、ハハハハ！」

「き……貴様あつ!!」

箒は怒りで頭に血が上り、鎖を引きちぎると、無謀にもオータムに殴りかかるが、ネツアクに首を掴まれる。

「がっ……あつ、ああ……」

「箒!!」

「一、夏……」

箒は首を強い力で掴まれ、意識が遠のく。

「箒……箒!!」

一夏は今すぐに箒を助けに行きたいが、体に痛手を負い、鎖で縛られて動くことすらままならない。

（俺は……箒を守ることができないのか？）

（私は……一夏を守ることができないのか？）

二人は互いを思いやる気持ちで一つだった。

（やっと、千冬姉以外で心から大切に思える人と一緒になれたのに……）

（幼い頃から、ずっと大好きだった一夏とようやく結ばれたのに……）

二人はこんなところで全てが終わってしまうことに、無念で心が一杯だった。

そして、二人は手を強く握りしめて強く、強く、心から願った。

（頼む……箒を……俺の一番大切な人を……）

（お願いだ……一夏を……私の大好きで愛する人を……）

すると、ネツアクの持っている白式と紅椿のコアが少しずつ強い光を放っていく。

（（護れる、力を……！））

その時、ISの新たな可能性から、奇跡の力が呼び起こされる。

『な、何だ？』

ネツアクは異様な光を放つコアに気付き、少したじろいだ。

すると、白式のコアから冷気が溢れ出し、ネツアクの腕を凍らせる。

『ば、馬鹿な!?!』

そして、紅椿からエネルギー体の斬撃が放出され、ネツアクを切り刻み、箒と二つのコアを手放してしまった。

「コアが……持ち主から離れたコアが自分の意志で攻撃しただど!?!」

オータムも驚きを隠せず、ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンはその隙を狙う。

右拳を握りしめ、白銀の光を口に集める。

《スクラップ・フィスト!》

《シューティング・ソニック!》

二体の攻撃がオータムを襲い、オータムをぶっ飛ばす。

「ぐあっ!」

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンは白式と紅椿のコアを拾い、それぞれの相棒のところへ持って行く。

一夏はジャンク・シンクロンが鎖を外し、箒はデブリ・ドラゴンが一夏の元へ運び、それからコアを手渡されると、不思議な声が頭の中に響いた。

《願え》

（（願え……？））

《自分の為でなく、愛する者を護りたい気持ちがあるなら、もう一度願え》

一夏と箒はお互いの目を見つめると、ゆっくりと目を閉じてコアを両手で包み込むようにする。

「俺は、箒を……」

「私は、一夏を……」

その時、白式のコアから青白い光が、紅椿のコアから真紅の光が放たれ、一夏と箒を包み込んだ。

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンもその光に包まれると、無数の星から輪となる。

「「護りたい」」

光は輝きを更を増して、大きな光の柱を作り出す。

光の柱は闇の結界を打ち破り、天を衝くように伸びた。

「これは……!?!」

悪魔を全滅させた楯無は見たことのない不思議な現象に驚きながら、中にいる一夏と箒の身を案じた。

「一夏くん！ 箒ちゃん！」

そして、光は収まり、一夏と箒の姿が現れる。

楯無はホッと安心したが、二人の姿を見た瞬間、目を疑う。

「何……あの姿は……?」

楯無が疑うのも無理はなかった。

何故なら、二人が身に纏っている白式と紅椿が見たことのない姿へと変貌しているからである。

一夏の白式は巨大な六つの氷の翼が生え、三本の槍が一夏の周りを踊るように動いていた。

箒の紅椿の装甲はまるで鎧のような形となり、所々で炎を放出している。

そして、雪片式型と空裂と雨月が全く別の形となっていた。

雪片式型は柄が氷の龍に似た形となり、刀身が常に冷気を纏っている。

る。

空裂と雨月は刀の姿から、一太刀の大きな剣となっていた。

それは、ISの開発者である篠ノ之束が想定した三段階の形態進化とは全く別の……言わば奇跡の進化である。

その進化したISの名は……。

『白式・氷龍』

『紅椿・武神』

そして、二人は新たな武器、『雪片氷龍之型』と『武甕槌』を構える。

第73話 氷龍と武神（前書き）

さあ、一夏と篝ちゃんによる、オータムとネツアクのフルボツコタ
イムの時間です（笑）

あまりにも強すぎて私自身も苦笑いをしてしまいました（汗）

でも、悔いはありません！

→開き直り（笑）

第73話 氷龍と武神

一夏と箒のIS、白式と紅椿が新たな姿へと進化した。

すると、白式・氷龍と紅椿・武神から無数の光の球体が現れ、それは形を為す。

白式からは、封印された三体の禁断の古代龍、『氷結界の龍』だった。

紅椿からは、戦国最強の武士の『六武衆』と先代の『真六武衆』。

そして、最強の武士『大將軍 紫炎』。

氷結界の龍のブリューナク、グングニール、トリシューラは一夏を凄まじい殺気で睨みつける。

《我らが主よ、今一度汝に問う》

《我らが氷の力を使い》

《汝は何をするか？》

一夏は首を傾げ、うーんと数秒悩んだ後に答える。

「取りあえず……」

一夏はオータムとネツァクを指さす。

「今やることは……気に入らないあいづらを完膚無きまでにぶっ潰す」

《……ふはははは!!》

《なるほど、それは面白い!!》

《気に入らない悪を滅ぼすのは、我らが力を使うのに相応しい!!》

氷結界の龍たちは一夏の答えに爆笑し、一夏に対する殺気を消した。

《織斑一夏。汝を我らの真の主として認める》

《我らの氷の力を汝の思うがままに使うが良い》

《だが、汝が悪の道へ走った時は我らが裁きを下すことを忘れるな》

「心配すんなよ。少なくとも、箒が俺の側にいる限りな」

一夏は箒を見ると、箒は小さく頷く。

氷結界の龍たちは一夏の答えに満足すると、光に戻って白式・氷龍の中に入った。

次に、大將軍 紫炎は箒の前に立つ。

《現代に生きる武士の血と魂を受け継ぐ少女よ》

「は、はい!」

箒は紫炎から放たれる威圧感に耐えながら答える。

《お主の守りたい者はその愛する男だけか？》

「……違う」

《では、お主の守りたい者は？》

「私の護りたい者……それは、友達、仲間、先生……それから、姉さんと千冬さん……そして、一夏。私の、掛け替えのない人達です」

《お主一人で全員を守るつもりか？》

「私は弱い……一人では全員を護りきる事はできない。だけど、私には共に戦ってくれる仲間達が居ます。その仲間達と一緒になら護ることができる……！」

《……ふっ、儂らが一番望んだ答えだな。お主の思い、確かに受け取った。儂らの力を存分に使うが良い！》

紫炎の一言に六武衆と真・六武衆達も頷き、光に戻り、紅椿の中に入る。

「それじゃあ、行きますかな」

「ああ、白式・氷龍と紅椿・武神の初陣だな」

「えー？　もしかして、お姉さんの出番無し？」

楯無は不満そうに頬を膨らませると、一夏は苦笑を浮かべながら言

う。

「えっと、すいません……楯無さんは少し休んでいてください」

「むー、仕方ないなあ……二人がピンチになったら助けるわ」

楯無は文句を言いながら、扇子を広げて二人の戦いを見守る。

「箒はどっちをやる？」

「私は……女をやる」

「じゃあ、俺は天魔時戒神を」

「気をつけろよ、一夏」

「箒もな」

二人は拳を軽くぶつけ、新たな力を手に戦闘を開始する。

箒は武甕槌を正眼に構え、オータムはアラクネの装甲脚の砲門を開ける。

「ISが進化したぐらいで私に勝てると思うのかぁ!？」

「ただの進化じゃない。この紅椿・武神と武甕槌には六武衆と真六武衆。そして、紫炎の魂が込められているんだ」

「訳の分からねえ事を言ってるじゃねえ!!」

オータムは砲門から実弾を発射する。

「行くぞ……武甕槌!!」

箒が話しかけると、武甕槌は光り輝く。

実弾が直撃し、爆炎が舞う。

「へっ、大した——」

「ニサシ、風の太刀と小太刀!!」

「なっ!？」

爆炎が風に吹き飛ばされ、無傷の箒が立っていた。

「ば、馬鹿な! 確かに直撃した——っ!？ 何だ、その武器は!？」

剣の形をしていた武甕槌が、刃が風の翡色に輝く、太刀と小太刀の二刀になっていた。

「一つ教えてやる。武甕槌は紫炎と六武衆と真六武衆の持つ十三の武器に変化する事ができる。ちなみに、今変化しているのは『六武衆―ニサシ』の武器だ」

「十三の武器に変化するだ?!?」

オータムが驚くと、箒はフツと笑みを浮かべる。

「もっと見せてやる。ヤイチ、水の弓!!」

武甕槌は太刀と小太刀から、弓の姿へと変化し、箒は弦に指をかけて引く。

弓に一本の矢が現れ、狙いを定める。

「穿て!」

手を離し、矢が一直線にオータムへ向かう。

そして、一本の矢は数十本へと分身してオータムに襲いかかる。

「ぐあっ!?!」

シールドを展開するが、防ぎきれず、装甲脚を何本か撃ち抜かれる。

箒はオータムの懷に潜り込み、武甕槌を変化させる。

「シナイ、水の鎚!!」

今度は巨大な二つ鎚へと変化し、箒は体を回転させ、遠心力を利用

して振り回す。

「せい、やあっ!!」

二つの鎚の重量感のある連撃はオータムの胸と腹を捉え、装甲を貫いてぶっ飛ばす。

「ぐがあっ!？」

オータムは胸と腹を強打された事により、体に激痛が走ってせき込む。

「げほっ、げほっ! てめえっ!!」

「これで終わりだ。紫炎、炎の妖刀!!」

武甕槌は炎を刀身に宿す妖刀へと変化し、箒は妖刀を掲げるように持つ。

「九頭龍紅蓮陣!!!」

刀身から九匹の炎の龍が現れ、箒は勢いよく振り下ろす。

「喰らえっ!!」

九頭龍はオータムに向けて牙を向いて突撃する。

「あっ、あっ、ああ……」

オータムは体が全く動けず、何も出来ないまま炎の龍に囲まれ、そ

のまま九頭龍が作り出す巨大な炎の柱に飲み込まれる。

「ぐああああああっ！！！」

さすがに箒も手加減しているので、死にはしないが、それでも地獄のような痛みや熱がオータムを襲う。

「えぐいわね、箒ちゃん……」

楯無は扇子で扇ぎながら呆然として見ている。

（戦国武将の強力な武器を十三種類も……しかも、それを見事に使いこなしている。恐ろしいわ……まさに名前の通り武神の如き力ね）

武甕槌の力に畏怖の念を感じながら一夏を見る。

「さてと、一夏くんは……あらら、こっちも負けず劣らずえぐいわね」

楯無は凍っている地面を足で軽く叩いた。

『そんな……この私が……』

ネツアクは今の状況に絶望を感じていた。

何故なら、体が全く動けず、少しずつ崩壊しているからだ。

「残念だけど、今の俺は無敵だぜ」

それに対して一夏は涼しい表情をする。

何故なら、ネツアクは今、体の所々を凍らされているからだ。

それは、一夏の雪片式型が進化した雪片氷龍之型が関係している。

氷結界の龍の力を秘めた雪片氷龍之型は、氷雪を操ることが出来る。

その刃に触れれば、たちまち体は凍らされてしまう。

一夏はネツアクを切り刻んで、体を凍結させているのだ。

『この……人間があ!!』

ネツアクは斬糸を作り出し、一夏は雪片氷龍之型を薙払うように振

り、氷の斬撃を生み出す。

氷の斬撃は斬糸を一瞬で凍結させて、あっという間に破壊される。

『ちっ、出でよ!!』

ネツアクは無数の悪魔を呼び出すが、それよりも早く、一夏は氷で作られた無数の弾丸を周囲に配置する。

「氷弾乱舞!!」

一斉に発射される氷の弾丸は召喚された悪魔を貫くと同時に氷付けにし、その直後に粉々に破壊される。

『なっ、何だ、この圧倒的な力は!?!』

「悪いな。あんたが神様でも、こっちには世界を終焉に導くほどの力を持った龍が居るからな」

《主よ、トドメだ!》

《悪しき神を……》

《永遠の氷河へ葬れ!!!!》

氷龍たちの声が響き、一夏は右手で雪片氷龍之型を斜め後ろへ振り上げて冷気を吸収する。

「分かったよ、氷龍たち! 一緒に行こうぜ!!」

一夏の背後にブリューナク、グングニール、トリシューラが現れ、口に冷気を吸い込む。

「氷龍零滅葬！！！」

氷龍たちの放つ冷気の一息でネツアクは一瞬で氷像へと姿を変えられる。

そして、雪片氷龍之型から巨大な氷の槍が現れ、一夏が振り下ろすと氷の槍はネツアクを貫き、跡形もなく砕け散った。

砕け散った氷の粒が光に反射し、キラキラと輝く中、一夏は思った。

「これ、人に向ける技じゃないな……」

《……………》

氷龍たちはノーコメントで白式・氷龍の中へ戻る。

「むむむ……ますます私の立場が危ういわね……」

白式・氷龍の力を見た楯無は額と頬に汗を流す。

「このままだと、IS学園最強の称号である生徒会長の名が一夏君に奪われちゃうわ……ああ、お姉さん、どうしよう……」

プライドやその他諸々が奪われる寸前にまで追い込まれた楯無は本気で悩んだのだった。

第74話 再戦デュエル、龍亞VSディヴァイン!!! (前書き)

遂に夢の再戦デュエルが始まりました！

小説デュエルは大変ですが、頑張って書きますので！

※あとがきに重大報告があるので見てください！

第74話 再戦デュエル、龍亞VSディヴァイン!!!

一夏と箒がオータムと天魔時戒神ネツアクを倒した一方、龍亞は邪悪なるデュエリスト、ディヴァインとのデュエルを始めた。

「先攻は私が頂く。ドロー！ ふっ、少年。どうやら運は私を味方してくれるようだ」

ディヴァインは笑みを浮かべる。

「魔法カード『サイキックブレイク』！ サイキック族モンスターの召喚に成功した時、ライフポイントを500払うことでそのサイキック族モンスターのレベルを一つ上げ、攻撃力を300ポイント上げる」

「あっ、そのカードは！」

龍亞はディヴァインのこれから出すモンスターを予想できた。

「そうだ。再び見せてやろう……私の最強カードの一枚を！ 速攻魔法『緊急テレポート』！ 手札またはデッキからレベル3以下のサイキック族モンスターを特殊召喚できる。私はデッキから『サイコ・コマンダー』を特殊召喚！」

LV3 サイコ・コマンダー

地属性 サイキック族

ATK/1400 DEF/800

「そして私は、ディストラクターを通常召喚！」

現れたのは、体を機械に改造された戦士である。

LV4 ディストラクター

地属性 サイキック族

ATK／1600 DEF／400

「サイキックブレイクの効果発動。500ポイントライフを払い、ディストラクターのレベルと攻撃力を上げる！」

LP4000↓LP3500

LV4↓LV5

ATK／1600↓ATK／1900

「レベル5となったディストラクターに、レベル3のサイコ・コマンダーをチューニング！」

サイコ・コマンダーが三つの星から輪となり、ディストラクターが中に入る。

LV5+LV3↓LV8

「逆巻け、我が復讐の黒炎！ シンクロ召喚！ 来い！ 『メンタルスフィア・デーモン』！！」

サイキック族を象徴する巨大な悪魔が現れる。

LV8 メンタルスフィア・デーモン

闇属性 サイキック族

ATK／2700 DEF／2300

「メンタルスフィア・デーモン……」

龍亞は以前のデュエルの時の光景が蘇る。

（そうだ。俺は、あいつの攻撃を受けて負けたよだ。だけど……もう、あの頃の俺とは違うんだ……！）

過去の敗北を乗り越えるため、龍亞はデュエルに勝つための闘志を宿す。

「ほう、闘志の籠もった目をしているな、面白い。私はこれで、ターンエンドだ」

「俺の、ターン！」

ドローしたカードを見て、龍亞は小さく頷く。

（よし。これなら行ける！）

「俺は『D・スコープン』を通常召喚！」

龍亞は顕微鏡の姿をしたロボットを召喚する。

LV3 D・スコープン

光属性 機械族

ATK／800 DEF／1400

「スコープンの効果、手札からレベル4のディフォーマーを特殊召喚する！俺は、『D・ステープラン』を特殊召喚！」

次に召喚されたのは、ホッチキスの姿をしたロボット。

LV4 D・ステープラン

地属性 機械族

ATK／1400 DEF／1000

「合計レベルは7……なるほど、あのカードを召喚するのか」

「当たり前だ！レベル4のD・ステープランに、レベル3のD・スコープンをチューニング！」

ステープランが三つの星から輪となり、ステープランが中に入る。

「世界の平和を守るため、勇気と力がドッキング！シンクロ召喚！愛と正義の使者、『パワー・ツール・ドラゴン』！！」

《行くぜ、龍亞！雪辱の時が来たぜ！！》

現れたのは、電気工具を武器とする龍亞のエースカードの一枚である機械龍。

LV7 パワー・ツール・ドラゴン

地属性 機械族

ATK／2300 DEF／2500

「パワー・ツール・ドラゴンの効果、1ターンに一度、デッキから装備魔法をランダムに手札に加える！！」

デュエルディスクの機能でデッキがシャッフルされ、龍亞は装備魔法カードを手札に加える。

「加えたカードは『ダブルツール D&C』！ それをパワー・ツール・ドラゴンに装備！！」

パワー・ツール・ドラゴンの両手に装備されているパワー・ドライバールとパワー・シャベルが解除され、ダブルツールのパワー・ドリルとパワー・カッターが装備される。

「ダブルツール D&Cの効果で、自分のターンにパワー・ツール・ドラゴンの攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

ATK／2300↓ATK／3300

「パワー・ツール・ドラゴンでメンタルスフィア・デーモンに攻撃！ クラフティ・ブレイク！！」

高速回転させたパワー・ドリルでメンタルスフィア・デーモンを貫いて破壊し、ディヴァインのライフポイントを削る。

LP3500↓LP2900

「ちっ、やるじゃないか！」

「カードを二枚伏せて、ターンエンド！！」

龍亞のターンが終わったことで、パワー・ツール・ドラゴンの攻撃力が元に戻る。

ATK／3300↓ATK／2300

「龍亞!!!!」

龍可が遊星達を連れて戻ってきた。

そして、一番驚いた人物はもちろんアキだった。

「ディヴァイン。あなた、本当に生きていたの!?!」

「おお。久しぶりだな、アキ。会いたかったよ……」

「あなた、何しにここへ!?!」

「決まっているじゃないか。アキ、君を迎えに来たんだよ」

その瞬間、遊星、シャルロット、ラウラがアキの前に立つ。

「貴様にアキは渡さない!!」

「ラウラ、奴がお母さんに半径15メートル以内に入ったら……」

「わかっている。母上に近づく悪漢はすぐに抹殺してやる」

シャルロットとラウラはすぐにISを発動出来るようにする。

「やれやれ。どうやら力づくでアキを奪わなければならないようだ
な……」

「アキ姉ちゃんの所に行きたかったら俺を倒してからにしろ!!」

「相変わらず威勢の良いガキだ。そんなに死に急ぎたいのなら直ぐに終わらせてやる……私のターン!」

ディヴァインはドロートしたカードを見て不気味な笑みを浮かべる。

「ふはははは! このターンでお前を葬ってやる!」

「何!?!」

「私はフィールド魔法『脳開発研究所』を発動!」

すると、ディヴァインのフィールドが不気味な研究所へと変化する。

「脳開発研究所の効果で私はサイキック族モンスターを二度、通常召喚できる。私は『サイコ・ウォールド』と『沈黙のサイコ・ウィザード』を召喚!!」

蝸牛と魔法使いの姿をしたサイキック族が現れる。

LV4 サイコ・ウォールド

地属性 サイキック族

ATK/1900 DEF/1200

LV4 沈黙のサイコ・ウィザード

地属性 サイキック族

ATK/1900 DEF/0

「脳開発研究所の効果でこのカードにサイコカウンターを一つ置く。

ちなみに、このカードがフィールドから離れた時に私はカウンター
の数掛ける1000ポイントのダメージを受ける」

（カードがフィールドから離れれば最低でも1000ポイントもダメージを受けるリスクを自分に背負わせたんだ。一気に俺にトドメを刺すつもりだ！）

龍亞はデュエルディスクを構え直し、警戒を怠らないようにする。

「魔法カード『ミラクルシンクロフュージョン』！ 自分のフィールド、墓地から融合素材モンスターをゲームから除外し、シンクロモンスターを融合素材とする融合モンスターをエクストラデッキから特殊召喚できる！ 私は、メンタルスフィア・デーモンとサイコ・コマンダーを除外！」

メンタルスフィア・デーモンとサイコ・コマンダーが異次元にて混ざり合い、究極のサイキックモンスターが姿を現す。

「現れよ。最強のサイキックモンスター、『アルティメットサイキッカー』！！！」

それは、メンタルスフィア・デーモンの下半身が蛇状に変化し、角や爪が大きく鋭くなり、まるで進化を遂げたような姿だった。

LV10 アルティメットサイキッカー
光属性 サイキック族

ATK/2900 DEF/1700

「なっ、何だ、このモンスターは！？」

アルティメットサイキッカーから放たれる威圧感に龍亞は押しつぶされそうになる。

「さあ、これで終わりだ!!」

ディヴァインの邪悪なる攻撃が再び龍亞に襲いかかる。

第74話 再戦デュエル、龍亞VSディヴァイン!!! (後書き)

祝、100万アクセス突破！

イエーイ！

、(≡▽≡)／

遂に念願の100万アクセス突破しましたーっ！

皆さん、日頃からこの小説を見ていただき、ありがとうございます！

これを祝して、何かやろうと思います！

候補1、キャラクターランキング。

候補2、リクエスト小説（一人か二人までです）。

これのどちらかを希望する人は感想かメッセージボックスまでよろしくお願いします。

m () m

今回は感想書き込みのユーザ制限を解除しますので、ユーザ登録してない方も是非どうぞ！

第75話 龍亞の使命と夢（前書き）

色々考えた結果、今回の100万アクセス企画は、キャラクターランキングを行いたいと思います。

だけど、リクエスト小説は後に必ずやるのでガツカリしないでください（汗）！

投票される方は感想かメッセージボックスまでお願いします。

自分の中で好きなキャラクターを三人選んで、その中の一位、二位、三位を決めてください。

一位は3ポイント、二位は2ポイント、三位は1ポイントで、ポイント数が一番高いキャラクターがランキング一位となります。

期間は、今日2011年6月1日から2011年6月30日までとします。

皆さんの投票をお待ちしております。

m () m

※ランキングを希望で自分のトップ3を既にご書いてくれた方ももう一度投票をお願いします。

第75話 龍亞の使命と夢

デイヴァインはこのターンで龍亞を倒すつもりである。

「サイコ・ウォールドの効果発動。ライフを800ポイントを払ってこのカード以外のサイキック族モンスターの二回攻撃を可能にする。私は1600ポイント払ってアルティメットサイキッカーと沈黙のサイコ・ウィザードを選択する!」

「に、二回攻撃!?!」

「しかし、私のフィールドには脳開発研究所がある。よってライフポイントのコストの代わりに、このカードにサイコカウンターを二つ乗せる。さあ、バトルだ。アルティメットサイキッカーでパワー・ツール・ドラゴンに攻撃!!」

「パワー・ツール・ドラゴンには装備した装備魔法を墓地に送ることで破壊を無効にする! ダブルツール D&Cを墓地に送る!」

「だが、ダメージは受けてもらう」

アルティメットサイキッカーの攻撃の衝撃波が龍亞に襲う。

LP4000↓LP3400

「ぐあっ!?!」

龍亞は衝撃波に吹き飛ばされ、地面を引きずるように倒れる。

「くっ、あっ……」

「アルティメットサイキッカーの二回目のバトル！ パワー・ツール・ドラゴンを破壊だ！！」

アルティメットサイキッカーの爪がパワー・ツール・ドラゴンを貫き、パワー・ツール・ドラゴンは爆発する。

その際、アルティメットサイキッカーの爪が龍亞の体に刺さり、激痛と共に龍亞は顔を歪ませる。

「があっ！？」

LP3400↓LP2800

ズルッと爪が体から抜き、大量の血が噴き出す。

『龍亞！！！！』

遊星達は龍亞に駆け寄ろうとする。

「来ないで！！！！」

ビクッ！

龍亞の叫びに遊星達は思わず立ち止まる。

「まだ……デュエルは続いているんだ……お願いだから、続けさせて……」

「龍亞……」

遊星は今すぐにでも龍亞を助けに行きたがったが、龍亞の消えていないデュエリストの魂に遊星は止めることは邪魔することは出来ない判断する。

「……わかった。その代わり、龍亞、絶対にディヴァインに勝て！」

「うん……ありがとう、遊星……」

龍亞はゆっくりと立ち上がる。

「見損ないましたわ、遊星さん!!」

「龍亞をこのまま見殺しにする気!？」

セシリアと鈴音は激怒しながら遊星を怒鳴りつける。

シャルロットとラウラも同じ気持ちだった。

「鈴さん、龍亞さんを助けましょう!」

「わかったわ! ああ男をボコボコにしてやるわ!!」

セシリアと鈴音はISを発動して龍亞を助けに行こうとするが、ジャックとクロウが止める。

「止めろ、二人共」

「龍亞のデュエルを邪魔するんじゃないねえ」

「どうして邪魔するんですか!？」

「このままじゃ、龍亞が死んじゃうわよ!！」

セシリアと鈴音の言うことはもったもだが、ジャックとクロウは龍亞の為に二人を止める。

「お前達は龍亞のデュエリストの魂と誇りを汚すつもりか？」

クロウの言葉にセシリアと鈴音は一瞬止まる。

「デュエリストの魂……？」

「誇り……？」

「確かにお前達の気持ちが分かる。俺達だって今すぐ龍亞を助けに行きたいぜ。だけど、龍亞はそれを望んじやいねえよ。今はデュエリストとしてディヴァインを倒すことに命をかけているんだ」

クロウの次にジャックは拳を握り締めて自分の顔の前に持ってくる。

「心配するな。龍亞は……どんな絶望的な状況でも希望を失わない。そして、龍可の為に死の世界から生き返ったからな」

龍亞を一人のデュエリストとして認めているジャックも龍亞の勝利を信じている。

龍可とアキは両手を組んで、龍亞の勝利を信じて祈る。

「龍亞……」

「頑張って、龍亞……」

「ずいぶん信頼されているんだな」

「当たり前だ……俺も、最強のライディング・デュエルチームの一人だからね……」

「最強のライディング・デュエルチーム……下らないな。アルティメットサイキッカーの効果、このモンスターが破壊したモンスターの攻撃力分ライフポイントを回復する。私はパワー・ツール・ドラゴンの攻撃力、2300ポイントを回復する」

LP2900↓LP5200

（くっ、ライフポイントが逆転された……）

龍亞は唇を噛んで悔しがる。

「沈黙のサイコ・ウィザードでダイレクトアタックだ!!」

「罠カード……」

龍亞は伏せた罠カードを発動させようとするが、手札にある二枚のカードが目に入る。

（まてよ……確かディヴァインのフィールド魔法は……）

龍亞はデュエルディスクの魔法・罠カードを発動させるスイッチを押すのを止めた。

（ディヴァインに勝つためにはこの攻撃を受けるしかない）

沈黙のサイコ・ウィザードの攻撃が龍亞に直撃する。

「うわああああっ!!」

LP2800↓LP900

龍亞のライフポイントが一気に削られ、体中ボロボロとなる。

「これで終わりだ！ 沈黙のサイコ・ウィザードでもう一度ダイレクトアタック!!」

トドメの一撃となる攻撃。

これが決まれば龍亞は敗北する。

遊星達は息を飲み込む。

しかし、龍亞の目はまだ諦めていなかった。

（ここだ！）

「罨カードオープン！ 『D・スクランブル』！！」

「何だと！？」

「D・スクランブルは相手モンスターの直接攻撃に発動できる！
その攻撃を無効にし、手札から『D』と名の付いたモンスターを特殊召喚できる！ 『D・ライトン』を守備表示で特殊召喚！！」

攻撃を無効にするバリアが張られ、沈黙のサイコ・ウィザードの攻撃を無効にし、龍亞のフィールドに巨大な懐中電灯が現れる。

LV1 D・ライトン

光属性 機械族

ATK／200 DEF／200

「トドメを刺せきれなかったか……まあ、いい。貴様のライフも風前の灯火だ。私はこれでターンエンドだ」

「俺の……ターン」

龍亞は体がふらふらしながらカードをドロースする。

「罨カード、『リビングデッドの呼び声』……俺は墓地のパワー・ツール・ドラゴンを特殊召喚……」

「何……？」

（どう言うことだ？ リビングデッドの呼び声があるなら、サイコ・ウィザードの攻撃の時にパワー・ツール・ドラゴンを特殊召喚すればその分のダメージを受けずに済んだはず……）

ディヴァインの考えに遊星達も同じだった。

わざわざダメージを受けてD・スクランブルを選択した龍亞の考えに疑問を持つ。

「パワー・ツール・ドラゴンの効果で……俺は『団結の力』を手札に加える……そして、ライトンに『D・コード』を装備……」

「D・コード……そうか！ わかったぞ、龍亞の狙いが！」

遊星は龍亞の狙いが分かった。

「俺は……ライトンを、攻撃表示に変更する！」

D・ライトンが懐中電灯からロボットの姿へと変形する。

「D・コードの効果、装備モンスターの表示形式が変更される度にフィールド上の魔法・罠カードを一枚破壊する！」

「何！？ 魔法・罠を一枚破壊だと！？」

「俺は、フィールド魔法、脳開発研究所を破壊する！ 脳開発研究所に乗っているサイコカウンターは三つ！ よって、ディヴァインに3000ポイントのダメージを与える！」

「まさか、これが狙いだっただのか！　ぐあああああああつ！！」

脳開発研究所が無残に爆破され、ディヴァインに3000ポイントという大ダメージを与える。

LP5200↓LP2200

「ディフォーマーは元々表示形式によって効果が入れ替わるモンスター。D・コードを発動するためには最低でも1ターンは必要とする……」

「そのためにワザとダイレクトアタックを受けた。まさに肉を切り、骨を立つ。サイコデュエリスト相手にこれほどの覚悟……見事と言う他はないな」

遊星とジャックは龍亞のデュエルタクティクスに感心するが、同時に不安となる。

何故なら、龍亞は重傷を負っていて血を大量に流していて、今にも倒れそうだからである。

「少年。このままだと出血多量で死んでしまうぞ？　今ならサレンドーをしても良いんだぞ？」

ディヴァインは龍亞に敗北を勧めるが、龍亞は首を横に振る。

「サレンドーはしないよ……俺には、使命とデッカい夢があるからね……」

「使命と夢……？」

「俺は、妹の龍可をずっと守る……そして……」

龍亞は振り返って遊星、ジャック、クロウを見る。

「世界一のD・ホイーラーになる。その時は、遊星、ジャック、クロウを超えてやるんだ」

「龍亞……」

「ふん。世界一とは、確かにデカイ夢だな」

「だけど、本当に実現しそうだから怖いぜ……」

龍亞の目指している夢に遊星、ジャック、クロウは心のどこかで嬉しさが溢れてくる。

「だから……」

龍亞の体から赤い光のオーラがゆらゆらと溢れ出る。

「こんなところで死ぬわけには行かないんだ!! 俺は絶対に勝つ!!!」

その時、龍亞の決意と共に右腕から赤色の強い光が放たれる。

「な、何だ、この光は!?!」

「そう言えば、前のデュエルで言ったよね?」

「何をだ!？」

「俺は五人目のシグナーだって。でも、あながち間違いじゃないよ」
龍亞は右腕の服の裾をめくる。

右腕に刻まれている物を見た瞬間、ディヴァインは驚きの表情をする。

「まさか……その痣は!？」

「俺は、赤き竜のドラゴンズ・ハートの痣を持つ六番目のシグナーだ!」

龍亞のドラゴンズ・ハートの痣が輝きを増し、背後に炎のように燃え上がる竜が現れる。

『-----!!---』

「赤き竜……!」

それは、シグナー達を見守る神の化身、赤き竜である。

「龍亞、受け取れ!!--」

遊星、ジャック、クロウ、アキ、龍可は右腕を上げ、赤き竜の痣を龍亞へと送る。

赤き竜の痣は龍亞の背中で一つとなり、完成する。

「みんな……ありがとう！ パワー・ツール・ドラゴン、行くよ！
」

《おうよ！ 俺達の真の力を見せてやろうぜ！！》

「ああ！ 俺は、レベル7のパワー・ツール・ドラゴンに、レベル1のD・ライトンをチューニング！！」

LV7+LV1↓LV8

D・ライトンが一つの星から輪となり、パワー・ツール・ドラゴンが中に入る。

「世界の未来を守るため、勇気と力がレヴオリュション！」

機械龍から時を越え、シグナーの六体目の龍へと姿を変える。

「シンクロ召喚！！ 進化せよ、『ライフ・ストリーム・ドラゴン』
！！！！」

パワー・ツール・ドラゴンの体全体の機械の装甲が解放され、左腕に矛を装備した黄金に輝く、生命を司るの龍、ライフ・ストリーム・ドラゴンへ進化する。

LV8 ラーフ・ストリーム・ドラゴン

地属性 ドラゴン族

ATK／2900 DEF／2400

「勝つぞ、ライフ・ストリーム・ドラゴン！！」

《あ、このデュエル、絶対に勝つぞ!!》

第76話 因縁の決着（前書き）

長かった龍亞VSダイヴァインとのデュエルも遂に大詰めです！

やっぱり龍亞君って、何だかんだで主人公みたいだね……。。

第76話 因縁の決着

龍亞はディヴァインとのデュエルで、シグナーの竜であり、もう1枚のエースモンスターである、ライフ・ストリーム・ドラゴンを召喚した。

「ライフ・ストリーム・ドラゴンの効果、ライフポイント2000以下のライフポイントを2000にする！」

「何だと!？」

《ライフ・エナジー・バースト!!》

ライフ・ストリーム・ドラゴンが翼を大きく広げると、体から黄金に輝く粒子が散布され、龍亞の体へと吸収される。

LP900↓LP2000

龍亞のライフポイントが回復すると同時に体中に負った傷が全て癒される。

「よっしゃあ! これで全力全開だ!!」

龍亞は右腕をぐるぐる回して元気を取り戻したことをアピールする。

「俺はライフ・ストリーム・ドラゴンに、装備魔法『団結の力』と『魔導師の力』を装備！」

魔導師の力はこのターンに龍亞がドローしたカードである。

2枚の装備魔法がライフ・ストリーム・ドラゴンに大きな力を与える。

「団結の力でフィールド上のモンスター1体につき、攻撃力と守備力を800ポイントアップさせる！」

龍亞のフィールド上にはライフ・ストリーム・ドラゴンしかいないので、攻撃力と守備力は800ポイントしか上がらない。

ATK／2900 DEF／2400↓ATK／3700 DEF
／3200

しかし、それでもディヴァインのアルティメットサイキッカーの攻撃力を上回る。

「そして、魔導師の力で自分フィールドの魔法・罠カード1枚につき、攻撃力と守備力を500ポイントアップさせる！ 俺のフィールドには合計3枚の魔法・罠カードが存在する！」

「待て！ お前のフィールドには魔法・罠カードが2枚しか存在しないはずだ！」

ディヴァインはそう言うが、龍亞はニヤリと笑い、フィールドの魔法・罠ゾーンを指差す。

「これ、なーんだ？」

「これ……？ なっ！ そのカードは！？」

それは、龍亞がパワー・ツール・ドラゴンを蘇生させる時に使用したりリビングデッドの呼び声だった。

「な、何故だ！ パワー・ツール・ドラゴンがフィールドから離れているはずなのにそのカードが存在する！？」

「リビングデッドの呼び声は復活させたモンスターが破壊された時にこのカードも破壊される。だけど、パワー・ツール・ドラゴンは破壊されずに、シンクロ素材で墓地に行った。だから、このカードだけはフィールドに残っているんだ！」

「そ、そんなことが！」

「よって、魔導師の力の効果でライフ・ストリーム・ドラゴンの攻撃力と守備力を1500ポイントアップさせる」

ATK／3700 DEF／3200↓ATK／5200 DEF
／4700

ライフ・ストリーム・ドラゴンの攻撃力は、アルティメットサイキッカーの攻撃力を圧倒的に越え、ディヴァインは体を震わせながら驚きを隠せない。

「こ、攻撃力、5200だと！？」

「ディヴァイン、確かに昔の俺は龍可と違って、力も無く、独り善がりなデュエルをしていた。だけど、今は違う！」

遊星との出会ったあの日から龍亞の運命が大きく変わった。

当初、シグナーでは無かった龍亞が少しずつ強くなれたのも、龍可の存在があったからだ。

「俺も龍可、遊星、ジャック、アキ姉ちゃん、クロウと一緒に、チーム5D'sの一人として戦ってきたんだ!!!」

WRGPで遊星達と世界の数々の強敵とのデュエルを間近で見てきた。

そして、ネオ童実野シティを救うため、共にアーク・クレイドルに乗り込んだ。

「そして、アポリアとのデュエルで俺はシグナーに進化し、ライフ・ストリーム・ドラゴンと出会うことが出来たんだ!」

《そうだ! 愛する者の為に己の身を犠牲にして戦う姿に赤き竜は応え、龍亞をシグナーの一人として目覚めさせたんだ!!! 貴様のような自分の事しか考えず、他人を利用するようなデュエリストにはもう負けない! 龍亞、最後の攻撃だ!!!》

「うん! ライフ・ストリーム・ドラゴンで、アルティメットサイキッカーに攻撃!!!」

ライフ・ストリーム・ドラゴンは命の光を翼に吸収し、口に黄金に輝く閃光を溜める。

「ライフ・イズ・ビューティーホール!!!!」

黄金の閃光が放たれ、アルティメットサイキッカーは閃光に包まれ、破壊される。

「うわああああああああっ!!!!」

LP2200↓LP0

ディヴァインのライフポイントは0となり、龍亞の勝利である。

「勝った……」

龍亞は呆然としながらライフ・ストリーム・ドラゴンを見る。

ライフ・ストリーム・ドラゴンは右手でグッドサインを送る。

「やつ……やつ……」

龍亞は心の底から嬉しさがこみ上げてくる。

「やったあーっ!!!!」

勝利の喜びから一気に興奮して、感情が高ぶる。

そして、何度もジャンプし、拳を高く上に突き出す。

龍亞のデュエルの勝利を見届けた赤き竜はそっと姿を消し、背中に集結した赤き竜の痣は元の持ち主の右腕に戻った。

龍亞は喜びながら遊星達の元へ行こうとする。

遊星達は笑顔を見せたが、その直後に焦りの表情となる。

「龍亞！ 後ろだ！！」

「えっ……？」

龍亞が振り向くと、デュエルが終わったはずなのに、アルティメットサイキッカー率いるサイキックモンスターが龍亞に襲いかかる。

「死ねえ、小僧！！」

それは、暴走したディヴァインの卑劣な行動だった。

《龍亞！！》

ライフ・ストリーム・ドラゴンが両腕と翼で抱き締めるように龍亞を守るが、焦りの表情を見せる。

「死ね……私の邪魔をする奴は全て死ねえええええええっ！！」

もはや狂気と化したディヴァインはサイキックモンスターを使い、龍亞とライフ・ストリーム・ドラゴンに襲いかかる。

《くっ！ 俺一人じゃ龍亞を守りきれない……》

ライフ・ストリーム・ドラゴンが諦めかけたその時だった。

「現れよ、『機皇神龍 アステリスク』!!」

一際大きい声と共に、龍亞とライフ・ストリーム・ドラゴンを巻き付くように巨大な機械のドラゴンが現れた。

《インフィニティ・ネメシス・ストリーム!!!!》

そして、巨大な竜巻を発生させ、サイキックモンスターを吹き飛ばす。

「なっ、何だ、あのモンスターは!？」

ディヴァインが驚いた直後、三体のロボットがディヴァインの前に現れ、そのまま囲んだ。

「ワイゼル・アイン、スキエル・アイン、グランエル・アイン。そのままその男を包囲している」

ガッ、ガッと足音が鳴り、龍亞を庇うように出て来たのは、IS学園の番人・アポリアである。

「アポリア……」

「龍亞、見事なデュエルだった。後は私に任せて休んでいろ」

アポリアは龍亞の頭を軽く撫でる。

「うん、お願い……」

龍亞は精神が一気に疲労してしまい、その場に座り込んでしまう。

遊星達が駆け寄ると、龍亞は力無く笑った。

そして、心の中で熱く燃え上がるような怒りが、こみ上げてきた者がいた。

「許せない……」

龍可はアポリアの隣に立つ。

「よくも、龍亞のデュエリストの魂と誇りを踏みにじったわね……」

「龍可よ、私と一緒にあの男を倒すか？」

アポリアが尋ねると、龍可はゆっくりと首を縦に振る。

「ええ。こんなに怒りがこみ上げてきたのは久しぶり……私はあの人を絶対に許さない！」

《灼熱の炎の如き怒り……ようやく私の出番だな》

龍可の怒りの炎に、デッキの奥底に眠る古代の炎神が反応する。

第77話 古代の精霊と機皇帝（前書き）

さあ……遂にやってきました。

インフィニット・ストラトスの一大イベント。

（☆▽☆）

IS ワンオフ・フェスティバル！！

、（≡▽≡）／

チケットが届いてから数週間、このときをどれほど待ち望んだか！

六種類のイベントグッズをすっかり購入し、トークショー＆ライブを楽しんでいます！

皆さんがどんなトークをしたのか、ライブの感じなどを後で活動報告に書きます！

第77話 古代の精霊と機皇帝

「龍可、これを使い」

アポリアは龍可にカードを投げ渡す。

「このカード……！」

「あの男を逃がさないための処置だ。頼むぞ」

「はい！ フェアリー・ガーディアン、『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』……！」

龍可はフェアリー・ガーディアンを起動させ、エンシェント・フェアリー・ドラゴンの姿となる。

渡されたカードをフェアリー・ガーディアンにスキャンし、早速発動させる。

「フィールド・クリエイト、発動！」

それは、フィールド魔法を操るエンシェント・フェアリー・ドラゴンにのみ与えられた力。

「『機動要塞 フォルテツシモ』……！」

巨大な要塞が周囲に形成され、その中にディヴァインを閉じこめ、龍可とアポリアが中に入る。

「何だこれは!？」

「フィールド・クリエイト。フィールド魔法を元に作られる空間の箱みたいな物です。私を倒すか、このフィールドにダメージを与えて破壊するしか出る方法はない!」

そして、フィールド・クリエイトは使用したフィールド魔法によって効力は違ってくる。

「フォルムチェンジ……」

龍可は静かなる怒りを高めると、周囲に幾つもの火の柱が現れる。

「『エンシエント・ゴッド・フレムベル』!!!!」

火の柱一つとなり、龍可を包み込んだ。

エンシエント・フェアリー・ドラゴンの姿が消え、代わりに灼熱の炎を宿す鎧が龍可の体に装着される。

それは、死者の悲しみと怒りの魂によって目覚め、聖なる炎で闇を焼き尽くす古代の炎神、エンシエント・ゴッド・フレムベル。

「私も行かせてもらう。『ウロボロス』、機皇変形!」

アポリアはゾーンから与えられたISの力を起動させる。

「『機皇帝ワイゼル∞』!!!」

アポリアの体が変形し、シンクロキラーのモンスターの内の一体、

左手に剣を装置した機皇帝となる。

「ISか……それなら私も使うしかないな」

ディヴァインは上着を脱ぎ、上半身裸となる。

そして、龍可とアポリアはディヴァインの体を見て目を疑った。

何故なら、ディヴァインの心臓に近い位置にISのコアが剥き出しに埋め込まれていたのだから。

「あなた……それは……」

「ISは女にしか使えない。だが、体に埋め込んで肉体改造をして繋げば男でも使用する事が出来る!!」

つまり、ディヴァインはISのコアを使用したサイボーグとなってしまったのだ。

「まずは……貴様等を血祭りにあげてやる!」

体に埋め込んだコアが輝き、ディヴァインはサイキックモンスターそっくりの装甲を身に纏う。

「龍可、私が先導する」

「はい!」

アポリアは左手の剣、ワイゼルブレードに闇の力を込める。

「行くぞ、ワイゼル！」

《フン。アレ程度ノ雑魚、スグニ倒シテヤル！》

アポリアは瞬時加速で、一気にディヴァインに近づく。

ディヴァインはバズーカを幾つもの呼び出し、使い捨てで連射する。

「死ね死ね死ねえっ！！」

「私は死なない！　ワイゼル・スローター・スラッシュュ！！」

ワイゼルブレードで空間を切り裂き、異空間を開いた。

バズーカの弾は異空間の中へと引き寄せられ、異空間は跡形もなく閉じた。

ディヴァインは驚き、次の武器を呼び出そうとするが、レーダーが警告を出す。

「後ろから！？　い、いつの間に！？」

「行きます」

龍可はこの姿での攻撃に、エンシェント・ゴッド・フレムベルからアドバイスを貰う。

《愛する者の為の怒りをその拳に宿すんだ》

（この一撃は……龍亜のデュエリストの魂と誇りを踏みにじった、

あなたへの罪の報いよ！)

龍可の怒りから、右拳に罪人を裁く地獄の業火が灯される。

「バーニング・ヘル・ストライク！！」

龍可の怒りの鉄拳はディヴァインの頬を派手に殴り飛ばし、フォルテッシモの壁に激突する。

だが、それだけでは終わらず、地獄の業火がISとディヴァインの体を焼く。

「ぐああああっ！ 熱い、熱いっ！！」

「一気に畳みかける！ 機皇変形、『機皇帝スキエル∞』！！」

《ギャハハ！ アイツヲブツ殺シテヤル！！》

アポリアは白のワイゼルから、青い鳥の姿をした機皇帝となる。

「フォルムチェンジ、『エンシエント・ホーリー・ワイバーン』！！」

《さあ、行きますよ。来なさい、闇を滅ぼす聖なる雷よ！！》

龍可は純白に輝く聖なる飛竜の姿をした天使になる。

アポリアは巨大なレーザー砲、スカイレーザーを構え、龍可は雷雲を作り出す。

「スカイ・スローター・レーザー!!」

「ライトニング・ブラスト!!」

スカイレーザーから強力なレーザービームがエネルギーを溜め、雷雲から聖なる雷が轟く。

だが、ディヴァインに向けるはずのエンシェント・ホーリー・ワイバーンの雷がディヴァインの体に吸収されてしまう。

「えっ!？」

「超能力者は電気によって脳のリミッターを解除する……つまり、私にとってはエネルギーの補充みたいなものだ!!」

ディヴァインは吸収した膨大な電撃を龍可とアポリアに向けて放出する。

「危ない!!」

アポリアは龍可の前に立ち、シールドを展開する。

だが、電撃はシールドを貫き、アポリアのワイゼルレーザーを破壊されてしまった。

「くっ!!」

「ふははは!! サイコ・ソード!!!!!!」

ディヴァインはサイキックモンスターの装備魔法のサイコ・ソード

を呼び出す。

龍可は申し訳なさそうに謝る。

「ごめんなさい。私の所為で……」

「いや、気にしなくて良い。私にはもう一体の機皇帝がある。ただ、エネルギーチャージに時間がかかる」

「わかったわ。私のバックアップで時間を稼ぎます！」

「頼んだぞ！」

「はい、バックアップ！ 『レグルス』！ 『エンシェント・クリムゾン・エイプ』！」

エンシェント・フェアリー・ドラゴンに仕える獅子と、太古から生き続ける槌を持った大猿が現れる。

《龍可を傷つけさせない！》

《あの子を……守ってみせる！》

レグルスとエンシェント・クリムゾン・エイプはあちこち動き回って、デイヴァインを翻弄する。

「機皇変形！ 『機皇帝グランエル∞』！！！」

アポリアは戦車の姿に似た機皇帝となる。

アポリアは右腕に直接取り付けられたキャノン砲、グランエルキャノンでディヴァインを狙い、エネルギーをチャージする。

「膨大なエネルギー反応！？ させるか！」

ディヴァインはアポリアの攻撃を阻止しようとするが、フェアリー・ガーディアンをエンシェント・フェアリー・ドラゴンにフォルムチェンジした龍可が立ち向かう。

「エターナル・サンシャイン！！」

フェアリー・フェザーから放たれる聖なる光でディヴァインを足止めする。

「邪魔するな、小娘！」

そう言われ、龍可はニツと微笑むと、レグルスとエンシェント・クリムゾン・エイプと共に一瞬でその場から退避した。

「エネルギーチャージ、100パーセント！ ターゲット、ロックオン！！」

龍可が退いた先にはアポリアのグランエルキャノンのエネルギーチャージが完了していた。

《絶望ヲアジワイナガラ散ルガイイ》

「グランド・スローター・キャノン！！」

グランエルキャノンのエネルギーが解放され、機動要塞 フォルテ

ツシモを破壊する程の巨大な光線がディヴァインに襲いかかる。

ディヴァインは光線を避けることすら出来ず、そして、叫びすら上げることなく意識を奪われた。

第78話 現れた脅威（前書き）

あとがきにワンオフ・フェスティバルの感想を載せました。

次回からのライブ話はワンオフ・フェスティバルを参考にします！

第78話 現れた脅威

謎の秘密結社、亡国機業の刺客、オータムと天魔時戒神ネツアクを一夏と筭が倒した。

二人は色々と聞きたいことが山ほどあるため、オータムに問い詰めようとする。

しかし、

『こいつに近づくな』

倒したはずのネツアクと似た声が響き、男性の姿をした悪魔が現れた。

「天魔、時戒神が……」

「もう一体……!?!」

『俺は天魔時戒神の一柱、イエソド。悪いが、この女は連れて帰る』

「イエソド……」

オータムは意識を取り戻し、イエソドを見る。

『スコールの頼みでお前を助けに来た』

「スコール……」

オータムはその名を聞くと、心が安らいだのか、ゆっくり目を閉じて意識を手放す。

イエソドはオータムを抱え、そのまま空へ飛んだ。

「逃がすかよ！ うっ、ぐあっ！？」

一夏は追いかけようとするが、突然体に強烈な疲労が襲いかかり、白式・氷龍が解除され、倒れてしまう。

「一夏！ あっ、ぐあ……」

箒も同様に疲労で倒れてしまい、紅椿・武神が解除される。

「一夏くん！ 箒ちゃん！」

楯無は二人に駆け寄ると、そのまま二人を担ぎ、急いで保健室へ運んだ。

楯無は焦っていて気付かなかったが、一夏と箒には以前は無かった物を身に着けていた。

一夏は氷龍の姿が刻まれた腕輪で、箒は真六武衆の家紋が描かれた簪だった。

そして、ディヴァインを龍可とアポリアが倒し、拘束を行おうとしたその時だった。

「龍可！ アポリア！！」

遊星の声が響き、龍可とアポリアが上を向くと、レーザービームが降り注いだ。

「ジャンク・ガードナー！ チェンジ・ガード！！」

龍星はジャンク・ガードナーのガードナー・シールドでレーザービームを防いだ。

『よくやった、M』

背筋が凍るような声がすると、ディヴァインがいつの間にか消えていた。

その声の主は、白衣を身につけた悪魔でディヴァインの首根っこを

掴んでいた。

『私の名前はゲブラー。既にわかっていると思うが、天魔時戒神の
一柱だ』

そしてその隣に、セシリアのブルー・ティアーズに似たISを身に
付けた女がゆっくりと降りてきた。

「あれは、私のブルー・ティアーズと同じBT兵器のある機体!？」
セシリアが驚くのも無理はなかった。

何故なら、そのISは亡国機業がイギリスから強奪したISなのだ
から。

『この男はまだまだ使い道はある。ここで死なすのも惜しいからな』

そう言い残すと、ゲブラーと女は空へと飛んで撤退した。

深追いは逆に危ないので、遊星達は追いかけなかったが、新たな敵
の存在に不安が残った。

すると。

「みんな!!」

一夏と箒を運んだ楯無が飛んできた。

「一夏ちゃんと箒ちゃんが大変なの!」

『えっ!?!』

遊星達はアポリアと一旦別れ、楯無の案内で保健室へ向かった。

ベッドには一夏と箒が死んだように眠っており、ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンはぐったりと椅子に座っていた。

《マスター……疲れたよ……》

《俺はもう、眠いんだ……》

「止めろ! その台詞は某名作映画の死亡フラグにしか聞こえないぞ!!! とにかく、一夏と箒に何があったんだ!?!」

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンから白式と紅椿が、一夏と箒の氷結界デッキと真六武衆デッキの精霊の力で進化したことを遊星達に説明した。

「私は間近で見ていたけど、あの能力は他のISを凌駕するほどの力を持っていたわ。遊星くんはこれをどう捉える?」

「……もしかしたら、俺が原因かもしれない」

『えっ?』

遊星は考えられる可能性を推測する。

「チューナーモンスターとISによる進化の力、シンクロフォルム。それでISのコアに何らかの影響を与えたのかもしれない」

「それじゃあ、シンクロフォームを使用している私のブルー・ティアーズや……」

「私の甲龍もそうなるかもしれないってこと!?!」

セシリアと鈴音は期待の込めた眼差しをするが、シャルロットとラウラは厳しい表情をする。

「でも、新しい力も樂觀視しないほうがいいかもしれないよ」

「その力を使って一夏と筭は体力をほとんど使い果たしてこうなったんだぞ? 私達が仮に使えるとして、リスクが無いとは限らない」

「「うっ……」」

シャルロットとラウラの推測に、セシリアと鈴音は何も言えなくなる。

微妙な空気となり、遊星は手を叩いて空気を変える。

「取りあえず、この話はまた今度にしよう。俺達にはこれからやらなければならないことがある」

『やらなければならないこと?』

遊星以外の全員が頭に疑問符を浮かべて首を傾げる。

「……ライディング・デュエル部のライブを忘れたのか?」

『……ああっ!?!』

ようやく思い出した。

シンデレラ演劇や亡国機業の襲撃ですっかり忘れてしまったのだ。

だが、問題が一つある。

「一夏と箒をどうするか……」

一夏は遊星と一緒にギターを演奏し、箒はセシリア達と一緒に歌う予定なのだ。

遊星達は悩んでいると、楯無が手を挙げる。

「じゃあ、私が箒ちゃんの代わりに出ようか？」

楯無が箒の代わりに出ると立候補する。

しかし、

『断る！！！！』

遊星達が一斉に断った。

「どうして！？ 生徒会長の私に出来ないことは無いわよ！？」

楯無は抗議をするが、遊星は鋭い目つきで睨んだ。

「トラブルメーカーであるお前が何をするかわからないからな」

「ひっ、非道いわ!! お姉さんはそこまで他人に迷惑をかけてないわよ!」

「じゃあ、さっきの演劇の電撃で俺は昔のトラウマが蘇り、一夏と箒が死にかけた件に関してはどう説明する?」

「うぐっ!? それは……」

さすがにそれを言われては、楯無も反論出来なくなる。

そして、ほぼ全員の視線に耐えられなくなった楯無は……。

「うっ、うっ、うわああああああん!!」

楯無は涙を流し、全力疾走で保健室を出て行った。

そして、幼なじみの虚のところへ直行した。

「ど、どうしたんですか?」

「うわあああん! 虚、私を慰めて〜! 頭を撫でて〜!」

「何があったかしりませんが……取りあえず私の胸の中で泣いてください」

「虚お〜!」

虚は母のように楯無の頭を撫でて、赤子のようにあやしたのだった。

「さて、本当にどうするか……」

「遊星、ここは私に任せて」

「アキ？」

そう言うと、アキは一夏と箒の耳に何かを囁いた。

すると。

「よっしゃあ！ ライブが終わるまでは寝ていられないぜ！！」

「ライブで歌い終わるまで私の魂は燃え尽きない！！」

さっきまで死人のようにベッドで眠っていた一夏と箒はテンションマックスで復活した。

あまりのテンションの上がりように、遊星達は若干引いた。

「アキ、二人に何を言ったんだ？」

「んー？ 魔法の言葉よ♪」

「魔法の言葉？」

「一夏には『箒の可愛いアイドル衣装と歌っているところを見たくないの？』。箒には『一夏のカッコいい生演奏を見たくないの？』。予想通りだわ♪」

「なるほどな……」

意外に単純な一夏と箒の性格だった。

とりあえずこれで問題は無事に解決し、遊星達はISアリーナのライブ特設会場へ向かい、最終調整を行う。

第78話 現れた脅威（後書き）

ワンオフ・フェスティバル。

私が見たライブの中で最高……いや、究極と言って良いほど感動でした！

まずはメインキャストの内山昂輝さん、日笠陽子さん、ゆかなさん、下田麻美さん、花澤香菜さん、井上麻理奈さんが登場し、名言を言ってくれました！

「模擬戦で優勝したら付き合ってもらおう！」

「私に話しかけられるだけでも光栄なのですよ」

「料理がうまくなったら毎日酢豚食べさせてあげる！」

「一夏の……みんなのエッチ……」

「貴様たちは私の嫁だ！」

「男でISを使えるのは俺だけだ！」

初っ端から私のテンション上がりまくりです！

最初のコーナーは、印象に残ったシーンを紹介するところでした。

日笠さんは、福音に敗北し、専用機持ちに激励を貰い、再び立ち上がるところです。

ゆかなさんは、まだセシリアがツンツンだったところの一夏の初会話です。

下田さんは、鈴音がセシリアに海でオイルを塗り、セクハラをするシーンです。

ゆかなさんが顔を反らして恥ずかしそうにしていました。

花澤さんは言うまでもなくあの伝説のシーンでした。

一夏のエッチ……。

井上さんはラウラのデレ度マックスの水着シーンでした。

そして、内山さんことウッチーは何故か千冬姉にマッサージをするところでした（笑）

そして、皆さんが待ち望んでいる二期の発表はありませんでしたが、その代わりに一夏達の夏休み話である第13話「恋に焦がれる六重奏」のDVDとブルーレイの発売が決まりました！

内容は一夏の家にみんなが遊びに行く話と、一夏と箒の夏祭り話です。

これは買うしかありません！

しかも、今回の話で第12の後なので箒が頑張るらしいです！

それで、声優陣で色々と思ったこと。

内山さん、小食で蕎麦好き。

日笠さん、声優なのによく舌をかむ（泣）、天然ボケ。

ゆかなさん、可愛い過ぎ（笑）

下田さん、シモネタと周りから言われました（笑）

花澤さん、ドS……。

井上さん、ゆかなさんを裏で操っていました、強い（笑）

そして、待ちに待った歌の前に、弓弦イズル先生がこのライブだけに書いたミニドラマを声優全員が生で言ってくれました！

話は鈴音が一夏をカラオケにさそうところですよ。

そして、当然のようにいつものメンバーで行くことになります。

ラウラがクラリッサにカラオケは何かと聞くのが吹きました。

クラリッサ、カラオケは江戸時代から無いよ？

殻で桶とは違うよ？

歌うところは合ってたけど……。

ヒロイン達は内心暴走しながら行きます。

飲み物を注文するときにびっくりしました。

箒↓焙じ茶、セシリア↓アイスティー、鈴音↓烏龍茶、シャルロツト↓カップチーノ。

うん、これは納得。

そして、ラウラ↓「この中で一番栄養価が高いミルクを貰おうか」

遊星さん!?

まさかの遊星さんと似た名言を言っちゃいますか、ラウラちゃん!?

この時、絶対私以外の観客で遊星を思い浮かんだ人は少くないはずです!

栗林みな実は銀色に輝く衣装を身に着けての登場です!

オープニングのSTRAIGHT JETとカップリング曲のFirst Additionを歌いました!

やっぱりCD以上に感動しました!

そして、今度発売するベストアルバムの一般投票でSTRAIGHT JETが一位でした!

栗林さん驚いていましたよ。

キャラソンは発売中の箒とセシリア以外の三人のキャラソンが歌われました。

箒は、何と、紅く、紅くとベストパートナーの二曲を歌ってくれま

した！

あまりにも嬉しくて心が酔ってしまいました。

しかも、箒と同じ格好をしてくれましたから更にうれしいです！

セシリアはNoble Heartです。

これは言うまでもなく気高いセシリアらしい歌です。

鈴音は好吃スマイル◎です。

典型的な数ある中華風なアニソンのキャラソンでした。

でも、鈴音らしくてとても良かったです！

シャルロットはmon cherie, ma cherie
(モン シェリ マ シェリ)です。

とても優しくて乙女の恋みたいなキャラソンでした。

ラウラはAndie Freude (アン デー フロイデ)
です。

ラウラの強さを求める心境がダークでカッコいいキャラソンになっていました。

そして、最後は五人で歌う、SUPER∞STREAMです！

まるで目の前に本当に箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ

がいるみたいでした！

それで終わりにりましたが、私達のアンコールで会場限定Tシャツを着て登場してくれました！

そして、栗林さんと五人によるOP&EDメドレーを歌ってくれました！

その時、五人がEXILEみたいにぐるぐる回ってくれてかなり面白かったです（笑）

そして、最後の発表で、ワンオフ・フェスティバルのDVDとブルーレイが発売決定になりました！

是非皆さんも購入してください！

私達の頑張り次第で、もしかしたら第二期があるかもしれないので！

第79話 学園祭ライブ（前編）（前書き）

さあ、箒達のライブで、SUPER∞STREAMを歌います！

ぜひ音楽を聴きながら見てください！

遊星は次回の後編で『明日への道』Going my way!
！』と、『みらいいろ』を歌います！

第79話 学園祭ライブ（前編）

ライディング・デュエル部の学園祭ライブの始まりの時が着々と迫る。

遊星達はいつも通りの私服となるが、箒達は違う。

せっかくアイドルみたいに歌うと言うことなので、アキが裁縫部等の部活に頼んで箒達の衣装を特注で作ってもらったのだ。

ようやく箒達の着替えが終わり、遊星や一夏達に御披露目すると、口を揃えて感心する。

『おお~~~~っ!!』

箒達が着たのは、IS学園の制服をアイドル風の衣装にした物で、とても可愛らしいものだった。

衣装の色はそれぞれ着ている人のイメージカラーになっており、箒は紅色、セシリアは蒼色、鈴音は桃色、シャルロットは黄色、ラウラは紫色になっている。

そして、5人は衣装以外でそれぞれ違った飾りを身に付けている。

箒は待機状態の紅椿の金と銀の鈴の紐を紅色のリボンにして髪飾りにする。

セシリアはいつもの蒼色のリボン以外に、蝶リボンを髪に飾る。

鈴音は桃色の可愛らしい帽子を被る。

シャルロットは色鮮やかな赤色のリボンで髪を留める。

ラウラは眼帯に白い花の飾りが付き、黒ウサギの人形が付いた小さなシルクハットを頭にが乗っている。

「みんな、凄く可愛いわよ♪」

アキはハートマークを沢山体から出すようにみんなを褒める。

遊星達も褒めるが、1人だけ言葉が出なかった男がいた。

「えっと……一夏？」

箒はさっきから固まっている一夏に近づく。

「どうした？ やっぱりまだ疲れているのか？」

「えっ？ いや、その……箒、一回くるっと回ってみてくれないか？」

一夏の唐突の願いに箒は疑問に思ったが、取りあえずリクエスト通りに回った。

回ると、箒の黒髪の長髪とミニスカートがふわりと柔らかく揺れる。

「これで、良いのか……って、一夏!？」

一夏はいつの間にか倒れていた。

すぐに起き上がり、照れながら箒を見る。

「ごめんごめん……箒があまりにも可愛かったから……神楽舞の時みたいにまた惚れ直しちゃったよ」

一夏は箒の可愛さに再びノックダウンされたようだ。

「か、可愛い？ ほ、本当か？」

「ああ、とっても可愛いよ。あ、そうだ……」

一夏は遊星達の目を盗み、箒の腰を抱いて引き寄せると、そのまま箒の唇に甘いキスをする。

一夏は唇をゆっくりと離すと、箒はうつとりとした表情になる。

「はう、あん……一、夏あ……」

「ライブが上手くいくおまじないだ。ライブが無事に終わったら、箒の望むキスをしてやるからな」

「う、ん……約束、だぞ……」

「ああ、頑張ろうぜ」

一夏と箒は約束を交わすと、それぞれの持ち場に着く。

遊星、一夏、ジャック、クロウ、アキはステージに立ち、楽器を持つ。

遊星と一夏はギター、ジャックはベース、クロウはドラム、アキはキーボードである。

龍亞と龍可が司会進行役でマイクを持って喋る。

「それでは、ライディング・デュエル部の学園祭ライブ、スタートです！」

「今日だけのスペシャルグループ、『チーム・フューチャーズネクスス』です！ 最初の曲は『SUPER∞STREAM』！！」

龍亞と龍可の紹介が終わると、クロウはドラムスティックで数回叩き、遊星達の演奏が始まる。

5人は片腕を高く上げて歌う。

5人が一度後ろへ下がり、まず箒が前に出ると、左手を握り締めて、胸の前に持って行く。

セシリアが優雅な足取りで前に出て、箒と鈴音とシャルロットとラウラを見つめて微笑む。

鈴音は元気にステップしながら前に出て、前を指さしながら指をくるくる回す。

シャルロットはアイドルのように柔らかく前に出ると、胸に手を当て、体をゆっくり左右に揺らす。

最後にラウラが緊張しながらテテテと可愛らしく前に出て、片手で

風を起こすように横にゆっくりと広げる。

5人は高くジャンプし、興奮を高める。

自分の体の中にあるエナジーを全て放出するように手で表現する。

片手を大きく広げ、自分達の大きな翼を表現する。

そして、広げた片手をゆっくり閉じ、最後にポーズを決めてフィニッシュとなる。

遊星達の演奏も終わり、箒達5人は今まで味わったことの無い達成感が訪れる。

観客から膨大な音量の声援が響き渡り、5人は手を振りながらステージから降りる。

「ふう、何とか成功したな……」

「はう……緊張しましたわ」

「でもこの爽快感は気持ちよかったわ!」

「うん、そうだね! またみんなでやろうね!」

「ああ! さて、次は父上達の番だな!」

遊星達は楽器の微調整を行い、龍亞と龍可が遊星の前にマイクを用意する。

（さあ、次は俺達の番だ！）

第80話 学園祭ライブ（後編）（前書き）

やっと学園祭が終わりました……後何話で学園祭編が終わるだろう……？

一夏の暴走話を書かなければならないし（笑）

第80話 学園祭ライブ（後編）

籌達、『フューチャーズネクサス』が歌い終わると、次は遊星達の番である。

ちなみに、ここからはライブを盛り上げるために精霊達も参加することになっているのだ。

遊星達は演奏と歌の準備を終えると、龍亞と龍可に目で合図を送る。

「さあ、お待たせしました！ 続いては、ライディング・デュエル部の部長、不動遊星がボーカルで歌います！！」

「曲は、『明日への道』
G o i n g m y w a y ! ! 』です」

「どうぞ！！」

クロウのドラムスティックで再び数回叩き、遊星は生き生きとした笑顔で、マイクに向かって叫ぶように歌う。

大音量のロック系の演奏が始まり、最初からクライマックスのように観客もテンションが上がる。

クロウの三大BFモンスターである、アーマード・ウィング、アームズ・ウィング、孤高のシルバー・ウィングが現れ、クロウの後ろで武器を構えたポーズを取る。

ジャックのエクスプロード・ウィング・ドラゴンと天刑王 ブラッ

ク・ハイランダーが現れ、咆哮をあげる。

遊星のジャンク・ウォリアー、ニトロ・ウォリアー、ターボ・ウォリアー、ロード・ウォリアー、ジャック・デストロイヤーが上空に現れる。

アキの両側に凜天使 クイーン・オブ・ローズ、魔天使 ローズ・ソーサラーが現れ、龍亞と龍可の前にパワー・ツール・ドラゴンとエンシエント・ホーリー・ワイバーンが現れて空を飛ぶ。

遊星はギターから手を離し、マイクを観客に向ける。

観客と精霊達の声が響き渡る。

遊星はそれに満足すると、すぐにマイクを自分の元へ持って行き、再びギターを奏でる。

この歌のサビの部分となり、遊星は声の音量をもう一段上げる。

遊星だけでなく、演奏しているアキ、ジャック、クロウ、一夏もテンションが上がり、演奏する手に力がこもる。

遊星は大きく右足で前へと踏み込んだ。

全てを出し切るように歌った遊星は息が切れ、何度も大きく深呼吸をして呼吸を整える。

プロにも劣らない歌声に、観客から拍手喝采が沸き起こる。

箒達は急いで水の入ったボトルを遊星達に渡し、次の曲までの僅か

な時間を休ませる。

精霊達が一斉に消え、遊星達は最後となる曲の準備をする。

箒達はステージから降り、龍亞と龍可が最後の司会をする。

「次はライディング・デュエル部の学園祭ライブ、ラストの曲です！」

「曲は『みらいいろ』です！」

龍亞と龍可の紹介で、遊星と一夏は横目でお互いを見ると、二人のギターで前奏を演奏する。

前曲のロック系の『明日への道　～Going my way!～』とは違い、ヴィジュアル系のゆっくりとした曲を演奏する。

遊星は先ほどの生き生きとした笑顔の表情から一変し、儂い表情をして歌う。

スターダスト・ドラゴンが星屑の粒子を散布させて現れる。

レッド・デーモンズ・ドラゴンが紅蓮の炎を纏いながら現れる。

ブラックフェザー・ドラゴンは体から無数の黒羽を宙に飛ばしながら現れる。

ブラック・ローズ・ドラゴンは美しい黒薔薇の花びらを舞い散らせながら現れる。

エンシエント・フェアリー・ドラゴンが現れ、パワー・ツール・ドラゴンはD・ライトンとチューニングし、ライフ・ストリーム・ドラゴンへ進化する。

スターダスト・ドラゴンを先導に、六体の竜は空へと飛翔する。

六体の竜は体から光り輝く美しい粒子を放出し、観客を魅了させる。

最後に遊星は儂い表情から笑顔を見せる。

遊星が歌い終わると同時に六体のシグナーの竜は、ドラゴン・ブレスを天に向かって放ち、それが一つに合わさると、花火のように綺麗に爆発する。

再び大きな拍手喝采が響き渡り、ライディング・デュエル部の学園祭ライブは大成で幕を閉じた。

その後、ISアリーナの更衣室に行った一夏と箒は遂に限界を迎え、倒れてしまい、保健室に直行することになった。

それから特にこれと言ったトラブルは無く、学園祭は閉幕したのだった。

とある高層マンションの最上階、オータムはジャンク・シンクロンに殴られた頬と箒の九頭龍紅蓮陣で火傷した場所を氷で冷やしていた。

「ずいぶんやられちゃったわね……」

オータムを看病するのは、薄い金髪の美しい容貌の女性だった。

「スコール……」

オータムは顔を赤く染めながらスコールの手を握る。

「まさか、織斑一夏と篠ノ之箒のISが謎の進化を遂げるとはね。予想外だったわ」

「あれはもう、私達の知っているISじゃねえ。ネツアクも、やられちゃった……」

「ここ数ヶ月で天魔時戒神が三体も……イエソド」

スコールはイエソドを呼ぶ。

『何だ?』

イエソドは果物を喰いながら現れる。

「ケテルとケセドの再生はどれぐらいまで続いている?」

『……心臓を破壊されたからまだまだ時間がかかる。それに、シグ

ナー達の攻撃を受けたんだ。余計に時間はかかる』

「そう、わかったわ……ゲブラー」

スコールは次にゲブラーを呼ぶ。

『どうした?』

「あの男はどうしてる?」

あの男とは、ディヴァインのことである。

『……意識を取り戻し、今は休んでいるが、また体を改造しろと言っている』

「そう。なら、今度はコアを脳に埋め込んで直接繋がばどうかしら?
超能力者なら脳は人より発達しているから」

スコールの提案に、ゲブラーはニヤリと不気味な笑みで返す。

『それはいい提案だ。目覚めたらあいつに話してみよう』

「頼むわ。それから、エム。ISを整備に回して頂戴。『サイレント・ゼフィルス』はまだ奪って間もない機体だから、再度調整が必要よ」

「わかった」

部屋に静かにいたエムと呼ばれた少女は短く返事をして部屋を出る。

そして通路で一人、胸のロケットを握りしめて瞼を閉じる。

（もう少し……もう少しだ……これで私の復讐がはじめられる……。そう、やっと——）

その少女はずっと待ち焦がれていた。

（……織斑^{ねえさん}千冬……）

人知れず、少女の口元は邪悪に歪むのだった。

しかし、神はそれを見ていた。

『あの女、やはり面白い……』

その神も少女と同じように口元を邪悪に歪めた。

第81話 決意と天罰ともう一人のトラブルメーカー（前書き）

今回で学園祭編が終わりとなります。

長かった……。

ここで一つ疑問に思いましたが、原作第六巻は何編になるのでしょうか？

すみません！

誰か、私に教えてください！

次を何編と書けばいいのか！

第81話 決意と天罰ともう一人のトラブルメーカー

波乱の学園祭も無事には言えないが何とか閉幕し、現在それぞれのクラスで打ち上げを行っている。

ちなみに一夏と箒は疲労で動ける状態ではないので、それぞれの自室で休んでいる。

しかし、遊星は打ち上げに参加せず、外で待機状態の龍星を片手に夜空を見上げていた。

「新たな天魔時戒神。そして、亡国機業か……」

新たに現れた敵に遊星は不安な気持ちを抱いていた。

（ネオ童実野シティを救った後にこの世界に飛ばされた。俺にこの世界を救えと言うのか？）

この世界の神か、運命かは分からない何かに遊星は問いかける。

（インフィニット・ストラトス。束が開発したパワードスーツがこの世界を変えた……だが、同時にそれが新たな戦いの引き金になっている）

一瞬、遊星の脳裏には、モーメントの開発者である父と、未来の世界で自分と同じ姿になった男が浮かんだ。

（もしかして、束はISを使って何かをするつもりなのか？）

それが何なのかは分からないが、少なくとも、姿を隠して逃亡しているのとか関係しているはず。

「だと、しても……」

遊星は龍星を握り締めて立ち上がる。

（束、お前がISを使って何かを起こそうと関係ない。仲間達と絆の力でお前を止めて、救ってみせる！）

心の中の不安を全て薙払い、遊星は新たな決意を胸に秘めた。

龍星を首にかけ、遊星はクラスの打ち上げに向かう。

「さて。そろそろ戻らないと、アキと娘たちに怒られるからな」

不安が消えた遊星の顔は穏やかになっていた。

一方、生徒会長としての仕事が一段落終わった楯無は腕を伸ばしながら歩いていた。

「さーて、今日のやることは終わったから、少し休みましょうか」

「残念だが、まだお前を休ませないぞ」

「え？」

楯無が恐る恐る後ろを振り向いた瞬間、死神に睨まれたような心境となる。

「お、織斑先生……？ 何故、あなたが打鉄を使用しているのですか……？」

千冬は束に改造してもらった打鉄を使用して楯無を睨んでいた。

「なーに、少しお前にお仕置きしようと思っていてな」

「り、理由を聞かせてくれませんか……？」

今の楯無に、いつもの自信と余裕のある姿は何処にもなかった。

「生徒会主催の演劇で一夏と箒が死にかけたらしいな……」

「ギクッ！？ あ、あれは事故なんです！」

「例え事故だとしてもお前は許されないことをした。それに、怒っているのは私だけではないからな」

千冬が後ろを指さすと、そこにはスターダスト・ドラゴン率いる遊星の精霊達が大集合していた。

《更識楯無……貴様だけは……》

《いい加減にしろよな。神に愛されたトラブルメーカーさんよ……》

《許さない……やり過ぎはよくない……》

ジャンク・ウォリアー、ジャンク・シンクロン、デブリ・ドラゴン
は今にも必殺技を出そうな勢いである。

《悪いことをしたらキツいお仕置きをしなくちゃダメだよな。な
あ、千冬？》

スターダスト・ドラゴンは千冬に聞くと、千冬は同意するように頷く。

「楯無。今夜は私とスターダスト・ドラゴン達全員と模擬戦を行ってもらう」

「ええっ！？　む、無理です！！」

さすがの楯無でも世界最強のIS操縦者とスターダスト・ドラゴン
たちを相手にして勝てるわけがない。

「お前の意志は最初から関係ない。さあ、ISアリーナに行くぞ」

楯無は精霊達に確保され、強制的にISアリーナに連行される。

現在、楯無を助けてくれる人間はこの場にいない。

つまり、孤立無援、四面楚歌である。

「だっ、だっ、誰か、私を助けてええええええええええっ!!!!」

楯無は助けを呼ぶが、本当に楯無を助けてくれる人間はいない。

《これに懲りたら少しは他人を巻き込む行動は控えるんだな》

スターダスト・ドラゴンに指摘され、楯無は大泣きする。

「うわああああああああああん!!!!」

その夜、楯無は連戦の地獄の模擬戦により、体力的にも精神的にも極限まで消耗し、翌日は寝込むことになったのだった。

しかし、人間はそう簡単に性格を変えることが出来ないので、他人を巻き込む癖はまだまだ治らないのだった。

おまけ。

楯無の天罰が終わり、デブリ・ドラゴンはハイパー・シンクロンにパソコンを操作してもらい、箒の携帯電話を借りて、電話をかけていた。

《もしもしー？》

その電話の相手とは……。

『はーい、もしもし？ みんなのアイドル、篠ノ之東だよー？』

何と、自身の相棒の姉である篠ノ之東だった。

《本日は新しい商品が出来たのでお知らせに来たぞー》

『ぬおっ！？ 久しぶりに来ましたか！ 今日はどんなのかな！？』

《それじゃあ、まず……》

《ほいほい。これっとな》

ハイパー・シンクロンは束のパソコンにデータを送る。

『えっと、来た来た。……うおおおおおっ！？ こ、これはあ！？』

送られてきたのは、学園祭での箒と千冬のメイド姿の画像写真だった。

実はデブリ・ドラゴンが盗撮した箒の写真をこっそり束に売っているのだ。

『箒ちゃんとちーちゃんのメイド姿！？ これは合成画像じゃないよね！？』

《まさか。これは、真正正銘の本物だよ。他にも一夏の執事姿とか
箒のアイドル姿の写真もあるよ！》

『何と！ それじゃあ、全部購入するよ！！ お金はいつものよう
にいくくと箒ちゃんの口座に振り込むよ！』

ちなみに、今までデブリ・ドラゴンが売った画像写真のお金は全て
一夏と箒の口座に振り込まれていて、貯金が凄い金額になっている
のを二人は全く知らない。

《毎度ありー》

デブリ・ドラゴンが学園祭で撮影した写真の画像データを束のパソ
コンに全て送った。

『あ、そうだ！ 束さんは凄く嬉しいから、後で箒ちゃんといっく
んにプレゼントを送るね♪』

《プレゼント？》

『うん！ 届くまで秘密にしてね！』

《了解。それでは、またなー》

『またねー！ 次回も楽しみにしているよ！』

デブリ・ドラゴンは電話を切ると、ハイパー・シンクロンは聞いた。

《なあ、プレゼントって何だろ？》

《さあね？　まあ、楽しみに待ってますかね》

後日、束が送ったプレゼントがとんでもない事件へ発展することになるとは、今のデブリ・ドラゴンは予想もしなかったのだった。

「ふははははは！　さあ、これで箒ちゃんといっくんの赤ちゃんが見られるかな！？」

購入した画像写真を見ている束の手にはいかにも怪しすぎる液体が入った瓶があった。

第82話 暴走する一夏の愛と欲望（前書き）

遂に来ました、一夏の暴走話。

かなりヤバくなりそうなので、ご注意を。

第82話 暴走する一夏の愛と欲望

学園祭が終わった数日後の休日、一夏宛てに荷物が届いた。

差出人は何と篠ノ之束であった。

「束さん？ 何を送ったんだ？」

一夏は大きめのダンボールを開け、まず入っていた手紙を読む。

「何々。『やっほー、いっくん元気？ 束さんはいつも元気だよ！ 早速だけど、我が愛する妹と恋人になってくれたいっくんにプレゼントだよ！』。……プレゼント？」

一夏はダンボールの中から袋に詰めてある物を取り出し、中身を確認する。

「えっと、鎖、紐、手錠、蝋燭、鞭……うおおおおおい！ 一体何だよこれはあああああああ！？」

一夏は袋の中身に突っ込みながら急いで手紙の続きを読む。

「『これで箒ちゃんをいっくん好みに調教してね♪ ちなみに、箒ちゃんがいっくんを調教するのも有りだよ♪』。アホかあああああああああっ！！」

一夏は叫びながら手紙を床に叩きつける。

「あの人は自分の妹をどうしたいんだ！？ アブノーマルな属性を

目覚めさせたいのか!？」

そして、ダンボールの中にまた違う袋を見つけ、恐る恐る中身を見た。

中身は世間で所謂、女性専用の『大人の玩具』が大量に入っていた。

「はい、アウトオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

自分にとっては、小さい頃からのもう一人の姉である束の行為に一夏は頭を抱えて嘆いた。

「ダメだ! 俺は束さんの考えている事を全く理解できない! これをどうしろと言うんだ!？」

一夏はベッドにダイブし、送られてきたそれをどう処理するか考えた。

(どうする!？ 束さんに送り返そうにも現在逃亡してるし、場所なんかわかんねえよ! ここは大人しく千冬姉に渡すか!？ だが、それでは出席簿アタックは免れないぞ!)

どう考えても対処法が見つからず、一夏は起きあがるともう一度荷物を見直す。

「……箒を俺好みに調教か……」

一夏は自分の世界に入り、妄想を始める。

これらを使用した時のことを考えていくうちに、一夏の顔はだんだ

ん嫌らしくにやけていく。

「まあ、鎖と蝋燭と鞭は箒の体を傷つけるから止めておいて……それ以外は使えるな」

最初は否定していたが、一夏は束の思惑通りに送られてきた道具を利用することにした。

「束さん、さっきはすいませんでした。訂正します、ありがとうございます」

束に感謝しながら床に叩きつけた手紙を拾って読み直す。

「『最後に小さな瓶が入っているから、それをグイッと飲んでね♪』。えっと、瓶って、これかな……？」

一夏はダンボールの中から栄養ドリンクぐらいの大きさの瓶を取り出す。

ラベルには不吉なドロマークが描かれていた。

「……『これを飲むと、箒ちゃんより仲良くなれるよ。じゃあね♪』。束さん、本当ですか……？」

一夏は不安になりながら瓶のふたを開けた。

瓶の中身の液体から甘い匂いが漂う。

「まあ、毒じゃなさそうだし……ここは束さんを信じて飲んでみますか」

もはや命知らずとはこのこと。

一夏は意を決して液体をグイッと飲み干した。

「うっ、苦っ!？　でも、甘くもあるな……お酒の一種かな……?」

すると、だんだん一夏の体が熱くなっていき、意識が歪んでくる。

「なっ、何だ?　お酒だとしても、何、か……変……ふひやらあ?」

バタッと、一夏は倒れ、しばらくすると、ゆらりと起きあがる。

「ほう、きい……」

そのまま一夏は自室を出て行く。

一方、その頃、箒の自室では。

「全く、あの人は……」

箒は一夏と同じく束からの荷物に呆れていた。

しかし、一夏の荷物の中身は違い、大量のコスプレ衣装だった。

主にアニメのキャラクターの衣装で、可愛いものから際どいものまで何でも揃っており、しかも全て箒の体型に合っている。

《凄いな、束……これが例のプレゼントか》

《これで一夏をメロメロにしろってか？》

荷物を運ぶのを手伝ったデブリ・ドラゴンとジャンク・シンクロンも啞然としている。

コンコン。

誰かがドアがノックし、箒たちは急いでコスプレ衣装をダンボールに詰めた。

「は、はい！ どちら様ですか？」

「箒、俺だよ」

「一夏？ 待ってろ、すぐに開ける」

箒はドアのロックを外し、一夏を迎える。

「どうし——キャッ!？」

突然一夏に抱きしめられ、箒は小さな悲鳴を上げる。

一夏はそのまま箒をお姫様抱っこし、箒のベッドに運んで押し倒す。

《おおっと！ 思春期の若い男は相変わらずだね！》

《急いで一夏の部屋に退避だ！》

デブリ・ドラゴンとジャンク・シンクロンは空気を読んで、二人の邪魔にならないようすぐに箒の部屋から出て行った。

「い、一夏。朝から盛んだな……」

箒は顔を赤く染めながらうつとりとした表情をする。

「箒……頼みがある」

対して、真剣な表情をする一夏。

「な、何だ？」

（もしかして、あのコスプレ衣装を着ろと言うのか？）

束がすでに一夏にコスプレ衣装のことを伝えていると思い、箒はドキドキする。

しかし、一夏の口から発せられたのは全く予想外の言葉だった。

「俺の子供を、産んでくれ……」

一夏のとんでもない頼みに箒は今までに無い思考停止を経験する。

「……………」

「箒……」

一夏は箒の服に手をかけ、ようやく箒は思考停止から戻った。

「はっ！？ ま、待て、一夏！」

箒は一夏の手を払うと、一夏は不機嫌な表情をする。

「何で……嫌がるんだ？」

「嫌とかそう言う問題ではない！ 私達はまだ学生なんだぞ！？
まだ子供は早すぎる！ それに、私が子を宿したら、お前や私にど

れほど大きな負担が掛かるか分かっているだろう!？」

「そんなの……関係ない! 俺は今すぐ箒と子作りをしたいんだ! 俺と箒の赤ちゃんが欲しいんだ!！」

「っ!?!?!?!?!」

箒は絶句した。

一夏の目を見つめると、いつもの優しい目をしていなかった。

完全に正気を失った目をしていた。

一夏は箒を強い力で押さえつけ、服を無理やり脱がし始める。

「や、止める! 頼むから止めてくれ、一夏あ!！」

箒がどれほど叫んでも、一夏の耳には届かない。

(嫌だ……正気を失っている一夏とやりたくない! 誰か、助けて!！)

その時、ドアが派手に開き、正気を失った一夏に不意打ちの必殺技を喰らわせる。

《シューティング・ソニック!！》

《スクラップ・フィスト!！》

デブリ・ドラゴンとジャンク・シンクロンの攻撃により、一夏はぶ

っ飛ばされる。

《箒、今すぐ逃げるんだ!!》

《一夏が起きあがる前に!!》

「わ、わかった！」

箒はベッドから降りると、乱れた服を直しながらデブリ・ドラゴンとジャンク・シンクロンと一緒に部屋を出た。

それから数十秒後に一夏は起き上がる。

「箒……逃がさない……」

一夏は箒の後を追った。

「はっ、はっ、はっ……」

箒は一夏が正気に戻るまでどこか安全な場所を探して寮を出て外を走っていた。

すると、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラが箒を見かける。

「あら？ 箒さんですわ」

「あんなに必死に走ってどうしたんだろ？」

「でも……何か様子がおかしいよ？」

「取りあえず行ってみよう」

四人は走って箒に追いつく。

「み……みんな！」

「箒さん、そんなに汗だくになって、どうしたんですか？」

セシリアが尋ねると、箒はみんなを集める。

「あ、あまり大きな声で言えないから耳を澄まして聞いてくれ……」

四人はコクコクと頷き、箒の話を聞く。

「実は……変な液体を飲んで正気を失った一夏に……その、子作り
をせがまれている……」

「「「……はい？」」」

「冗談ではない！ 姉さんが送ってきた液体で本当に一夏がそう
なっているんだ！」

デブリ・ドラゴンとジャンク・シンクロンが一夏の部屋で見つけた
束からの手紙や瓶でその事実を知ったのだ。

[illegible]

「そんなアホなああああああああああつ?!?!?!?」

「嘘おおおおおおおおおおおつ！？！？！？」

「何だとおおおおおおおおっ!?!?!?!」

普段から嘘を言わない筈の言葉に四人は驚愕する。

《箒！ 騒いでいるところ悪いが向こうから一夏が来てしまったぞ》

デブリ・ドラゴンからの忠告で五人は振り向いた瞬間、背筋が凍った。

「待ってくれよ、俺の箒♪」

ニコニコと笑いながらゆつくりと歩いてくる一夏。

「確かに目が正気を失ってますわね……」

「あんな一夏、見たことないわ……」

「篠ノ博士は一夏に何を贈ったんだろう……？」

「それを飲む一夏も一夏だが……」

四人は一夏に呆れると、箒の前に立つ。

「ここは私達に任せて、箒さんは遊星さんか織斑先生を呼んできてください」

「みんな……すまない！」

セシリアが代表で言い、箒は再び走り出した。

「邪魔すんなよ、みんな……」

一夏は白式を発動させる。

「いいえ！ 邪魔させてもらいますわ！」

「ここは通さないわよ！」

「取りあえず気絶させよう！」

「後は正気が戻るまでベッドにでも括り付けるぞ！」

四人はISとシンクロフォームを同時に発動させ、一夏を叩きのめそうとする。

「ちっ……仕方ねえ」

一夏は舌打ちをすると、左手首にある腕輪に触れると、一夏の足元が冷気で凍り付いた。

「来い、『氷龍神槍』」

そして、一夏の周りに三つの槍が現れ、地面に突き刺さった。

・

第83話 束の野望（前書き）

まだまだ一夏の暴走は続きます（笑）

原作6巻の一夏とシャルロットのデートを箒にしようと思います。

第83話 束の野望

暴走した一夏から逃走している筈は頼りになる千冬の元へたどり着いた。

「織斑、先生……」

「どうした、篠ノ之？」

「実は……」

筈は事の現状を千冬に全て話した。

「あの馬鹿……」

千冬は束と一夏に呆れ果てて頭に頭痛が来る。

そして、千冬は携帯電話を取り出して、もちろんあの人物に連絡する。

『はあい♪ ちーちゃん大好きな束さ——』

「キサマヲイマスグコロシテヤル」

『ヒイツ!? まさかの人生初の脅迫電話!? って、ちーちゃん! 大切な親友に向かってその脅迫電話は無いんじゃない!?』

「誰が親友だ、馬鹿者。貴様のような弟に変な物を送りつけるような奴を親友とは思わないな」

『ひっ、酷い！ 私はちーちゃんを心の底から愛しているのに！それに、ちーちゃんがその気ならいつでも同性結婚も考えているんだよ！？ もちろん、ちーちゃんが婿で、私が嫁だから、ちーちゃんの子供を産んであげるよ！』

「黙れ。私に同性愛の趣味はない。それより、一夏に贈った謎の液体は何だ！？」

『あー、あれね。あれはね、私が作った本能と欲望を解放させるお酒だよー♪』

「本能と欲望を解放させるだど？」

『地球上のほとんどの生物って、太古から自分の子孫を残す共通の本能を持っているでしょ？ それに、人間には大好きな人との子供を欲しがる性欲があるでしょ？ だから……』

「その酒を飲んだ人間の……子孫を残す本能と愛してる人の子供を欲しがる欲望を同時に解放させる……」

『その通り！ まあ、作り方とかなり難しかったから少量しか出来なかったけどね』

「東……お前という奴は！ 一夏に何てことをするんだ！？」

『だって、篝ちゃんといっくんの赤ちゃんを早く見たいんだもん！』

それは、愛する妹とその幼なじみで恋人の子供を今すぐに見たいと

いう少々身勝手な束の野望である。

「だから、二人がIS学園に要る間は私が許さんと言っただろうが
！！」

『えー？ 無理♪ 私は我慢が嫌いだからね。それじゃあ、箒ちゃんによろしくねー♪』

「ま、待て！ 束！？」

ガチャ！ ツー、ツー、ツー。

電話が切れてしまい、千冬は押さえきれない怒りに体がプルプルと震えながら携帯電話を仕舞う。

「篠ノ之。どこでもいいから一夏が正気を取り戻すまで隠れるか逃げろ。一夏は……私が倒す」

（私だって二人の子は見たいがまだ早すぎる。束、お前の野望を打ち砕いてやる）

千冬は打鉄を纏おうとしたときだった。

『箒……さん……』

セシリアからのプライベート・チャネルの連絡が紅椿に来了。

「セシリア！？ どうしたんだ！？」

『申し訳、ありませんわ……一夏さんを止めることが出来ませんで

したわ……』

「なっ!? 四人相手でもか!？」

『はい……ジャンク・シンクロンさんが居なかったので、白式・氷龍にはなれませんでした……それでも、あの力は強すぎます。現に……』

「現に、何だ？」

『私達、全員の体の半分以上を氷付けにされましたわ……』

ISを身に付けているので、体が凍傷したりする心配は無いが、それでもしばらくは動くことすらままならない。

「だっ、だが! あの力を使えば体力をかなり使うはずだ!」

『申し訳難いのですが、一夏さんの体力は全く消費していません。むしろ、力が溢れてくる感じでしたわ……』

「まさか……」

（あの酒の所為で体力が全く減らない状態になってしまったのか!？）

『では、そろそろ切りますわ。箒さん、ご無事で……』

「あ、ああ。わかった……」

プライベート・チャンネルを切り、箒と千冬はわずかな戦慄が走る。

「まさか、たった十分程度であの四人を倒すとはな……侮れない」

ピキピキピキ……。

「「ん？」」

変な音が鳴り、下を見ると地面が凍っている。

「まさか……」

「来てしまったか……」

そこには白式を身に着け、氷龍神槍を背負った一夏がいた。

「何だよ、次は千冬姉が邪魔すんのか？」

千冬は打鉄を起動し、近接ブレードを構える。

「愚弟め……お前を目覚めさせてやる」

箒は紅椿とデブリ・ドラゴンのシンクロフォームを同時に発動させ、
紅椿・スターダストフォームとなる。

「一夏……」

箒は不安になりながら雨月と空裂を握りしめた。

おまけ、その1。

一方、遊星とアキはISアリーナにいた。

観客席で見ているその先では……。

《スターダストオオオオオオオオオオオッ!!!!》

《ま、待て! 落ち着くんだ、ブラック・ローズ!》

《私という存在があらあんな人間の小娘に現を抜かしてえ!》

先日の学園祭のスターダスト・ドラゴンがスターダスト・ファントムで女子達と仲良くしていたことにブラック・ローズ・ドラゴンが嫉妬しているのだ。

《誰が現を抜かした!? 俺はただ楽しく執事の仕事をしていただけだ!》

《うるさいうるさい!!! 黙って私のお仕置きを受けなさい!!! ヘイト・ローズ・ウィップ!!!!》

ブラック・ローズ・ドラゴンは憎悪の棘を装備し、凶悪な棘の鞭で

スターダスト・ドラゴンを痛めつける。

《ギャアアアアアアアアッ！！　ちよっ、痛いわぁっ！！！！》

数年前の嫌な思い出が激痛と共に蘇る。

《ふん！　あなたは根っからのM属性だから問題ないでしょ！！》

《お前が昔からなりふり構わずその棘の蔓で俺に攻撃したからだろ！！？　この、鬼畜ドSドラゴン！！》

《なっ！　何ですって……どうやらあなたにはもっとお仕置きが必要みたいね！　喰らいなさい、ブラック・ローズ・フレア！！》

続いて黒炎でスターダスト・ドラゴンを焼いていく。

《熱い熱い熱い！！　俺の美しい星屑の肉体がこんがり肉のよ
うに焼けてしまうがなぁ！！》

《スターダスト、今度こそ私だけの奴隷になると誓いなさい！！
そして、あなたの体に薔薇の刻印を刻んであげるわ！！》

《無茶を言うなぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！》

スターダスト・ドラゴン、再び絶体絶命のピンチ！

「大変だな、スターダスト……」

「ええ。ブラック・ローズの嫉妬心はハンパないわね……」

遊星とアキは紅茶を飲みながら二体の戦いを見守る。

「本当にアキにそっくりだ」

「何かいったかしら、遊星？」

「空耳です」

「あんまり言うとは……」

アキは遊星の首に手を回して体を（特に胸）をくっつけさせる。

「ア、アキ!？」

「私が遊星を調教しちゃうわよ？」

「ま、待ってくれ！ アキに調教されたら……」

「大丈夫、優しくするから……」

アキは遊星にキスをし、今回の遊星はアキに身をゆだねたのだった。

おまけ、その2。

ジャックとクロウの部屋では、ジャックの荷物をダンボールに詰めていた。

「まさか、俺がこの部屋を出ていくとはな」

「すまねえな、ジャック。追い出すみたいで違う部屋に引っ越させて」

先日のシンデレラ演劇でクロウの王冠を取った本音がこの部屋に引っ越すことになり、ジャックは別の部屋に引っ越すことになったのだ。

「まあ、別に構わんが……それよりもお前に聞いておきたいことがある」

「なっ、何だよ、改まって……」

「お前、本音と上手くやっていけるのか？」

「よ、余計なお世話だ！」

「よし、ならこの俺様がマーサから学んだ女性の扱いについて教えてやろう！」

「だから止めろって言ってんだろ!!」

Bannon!

「クロクロ」

突然ドアを突き破って本音が入ってきた。

「ほ、本音!？」

「ねえ、クロクロ。せっかくのお休みだからどこかに遊びに行こうよ」

「ほう、デートの誘いか。丁度良い。クロウ、とつとと本音を連れて初デートにでも行ってこい! ちゃんとエスコートするんだぞ!」

ジャックが二人の後押しをすると、本音はにっこりと笑い、クロウの腕にしがみつく。

「ありがとう、ジャツ君。それじゃあ、行こうね。クロクロ」

「いやいやいや! 俺はまだ行くなんて……ぬおおおおおおっ!？」

クロウは本音のもの凄い力で引っ張られて行く。

「それでは、レッツ・ゴー!」

「マジかああああああっ!？」

こうしてクロウは人生初のデートに行くのでした。

おまけ、その3。

生徒会室にて、龍亞と楯無はデュエルをしていた。

しかし、そのデュエルも幕が閉じようとする。

「『ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍』で龍亞君にダイレクトアタック♪」

「うっ、俺のライフポイントはゼロ。負けた……」

「うふふ。それじゃあ……約束通り、この紙にサインして」

「はーい」

龍亞は楯無が差し出した書類にサインした。

「うん。これでよし。これからよろしくね、龍亞君♪」

「ねえ、楯無姉ちゃん。本当に俺でいいの?」

「いいのいいの。明日の全校集会で紹介するから今のうちに台詞と
か考えてね」

「うん、わかったよ」

そして、数日後の全校集会で生徒全員が驚く事件が起きるのだった。

第84話 未来への約束（前書き）

今回で一夏の暴走も終了します。

次回から原作六巻に入ります。

やっぱり、一夏のシャルロットの誕生日プレゼントのデートは入れた方がいいのかな……？

蘭も活躍させたいし……。

そしたら箒が阿修羅になりそうな（笑）

第84話 未来への約束

暴走した一夏を止めるため、箒と千冬が戦う。

「行くぞ、箒！」

「はい、千冬さん！」

千冬と箒は一気に接近するが、一夏は三つの氷龍神槍を踊らせる。

氷龍神槍から冷気が漂い、一夏の周囲を凍結させていく。

「氷刃百華」

一夏の周囲から鋭い氷の柱が幾つもの現れ、箒と千冬は急停止と共に後ろに下がる。

「あれが氷龍神槍の力か……」

「こうなったら……武甕槌を使うしかありません！」

（武甕槌の真六武衆の力さえ使えば、あるいは！）

箒は髪に挿した簪を引き抜こうとする。

しかし、一夏はそれを許すわけがない。

氷龍神槍と雪片式型も地面に刺して、白式のシールドエネルギーを全て解放させる。

「氷輪之終焉」

氷龍神槍から全てを凍結させる氷塊の波が周囲へと押し寄せる。

「一夏あっ!!」

千冬はシールドエネルギーを打鉄の加速に使用し、一夏に再び近付こうとしたが、氷塊に触れた瞬間、体中の半分以上が氷付けになる。

「くっ!」

「千冬さん!」

そして次に氷塊は箒に襲いかかる。

すると、紅椿・スターダストフォームが解除され、デブリ・ドラゴンが現れる。

しかし、デブリ・ドラゴンだけでなく、ジャンク・シンクロンも現れる。

《逃げろ、箒!》

《早くしろ!》

二体は必殺技を繰り出して氷塊を破壊するが、波のように次々と現れる氷塊に遂には二体も氷付けになる。

「デブリ! ジャンクロン!」

箒が同様したその時、一夏が背後に現れ、雪片式型を振り下ろす。

「零落白夜」

雪片式型の刃は、紅椿を切り裂くと同時にシールドエネルギーをゼロにする。

紅椿は箒から消えてしまい、ISスーツのみとなってしまう。

「しまっ……」

箒が気付いたときには一夏に押し倒されてしまった。

（一夏の子供……もし、本当に私が子を宿せば、私が母となり、一夏が父となり……念願の夫婦になれる……）

箒は今すぐに一夏と交わり、自らの体に子を宿しても良いという錯覚に陥ってしまう。

だが、これは一夏の意志ではなく、束が贈った酒によるものであると気付く。

「箒……」

一夏は箒の唇を奪おうと顔を近づける。

ポタッ、ポタッ……。

「え……？」

雫が落ちる音が鳴る。

それは、箒の目から流れた悲しみの涙である。

「嫌だ……止めてくれ、一夏……」

箒の拒絶に一夏は心臓が一瞬止まりかけるほどのショックを受けた。

「な、何でだよ！ 箒は俺を愛しているんじゃないのか!?!」

「一夏は……私の愛している一夏はこんな事をしない！ 大切な姉と仲間を傷つけてまで私を欲しがするような真似は絶対にしない!!」

「っ!?!」

（俺は……一体……なにを……?）

その時、一夏の心が何かを思い出させる。

「頼む……思い出してくれ、私の愛している一夏を……みんなを守るために戦うお前の心を……」

箒は一夏の顔に手を添え、唇にキスをする。

それは箒にとっては、元の一夏を取り戻すための賭けでもあった。

唇をゆっくりと離し、箒は一夏の目を見た。

「一夏……?」

「箒……ごめん！」

一夏の目は正気に戻っており、箒を強く抱きしめた。

一夏が束の酒の力から正気に戻ったことにより、氷龍神槍の力は完全に消えることとなる。

それにより、セシリア達と千冬達を封じ込めた氷は一瞬で粉々に消え、無事に解放されることとなる。

千冬は二人の姿を見てふと思った。

「なるほど、これが『愛』の力というものか……やるじゃないか、箒」

千冬は優しく微笑むと、そのまま二人を見守る。

一夏は箒を離すと、もう一度謝る。

「ごめん、箒を悲しませてしまつて……」

「良いんだ。一夏が……私の愛している一夏が私の元に戻ってきてくれたからな」

「あのさ……今ここで箒に言いたい事があるんだけど……聞いてくれるかな？」

「あ、ああ。いつでも良いぞ」

一夏は大きく深呼吸をして、箒と向かい合う。

「俺は……正直、箒との赤ちゃんはすぐにでも欲しいと思っている！」

「——っ!?!?!?」

突然の一夏の宣言に顔を真っ赤にする箒。

「だけど、まだ俺は千冬姉や遊星に比べて戦う力は弱いし、まだまだ学生で未熟だ。だから……」

一夏は箒の手を握り、自分の心の底から秘めた想いを打ち明ける。

「俺が今よりもっと強くなって、箒を幸せにするぐらい働けるようになったら……俺の子供を産んでくれますか？」

箒は思わず口を手で押さえた。

そして、嬉しさのあまり涙が零れ出る。

「一夏……は、はい！」

箒は笑顔になると、一夏に抱きついた。

「絶対に……絶対に、箒と未来に生まれる赤ちゃんを幸せにして守っていくからな」

一夏の約束の言葉に千冬はハッと気づいた。

（そうか。一夏、お前は……誰よりも良い父親になりたいんだな……）

一夏と千冬は両親に捨てられ、二人で暮らしていた。

心のどこかで『親』という存在を恐れ、憎んでいたのかもしれない。

もし仮に自分が父親になった時、子供を幸せにできるかどうか不安になっていたのかもしれない。

（だが、箒という誰よりも大切な存在が出来たことで、未来に生まれてくる子を命を懸けて守り、愛し、幸せにしてやるという決意を無意識の内に秘めていたんだな……）

千冬は小さく笑いながら一夏に近づき、頭を撫でた。

「千冬姉……」

「心配させるなよ、一夏」

「うん。あ、そうだ。千冬姉、束さんの連絡先って分かる？」

「何をするつもりだ？」

「ちょっと話をね」

千冬は携帯電話を一夏に渡し、早速束と連絡する。

『今度は何かな、ちーちゃん！』

「えっと……束さん。一夏です」

『えっ、いっくん！？ 箒ちゃんとはもうやった！？ 後10ヶ月後には可愛い赤ちゃんに会えるかな！？』

テンションがアップした束に一夏は苦笑する。

「残念ですが、箒のキスで正気に戻ったのでやっていません」

『そんなぁ！？？ 愛の力で打ち勝っちゃったの！？』

野望を打ち碎かれたことにより、束の涙声になる。

「まあ、そう言うことです。それで、束さんに言うておきたいことがあるんです」

『言うておきたいこと？』

「俺は……確かに箒との赤ちゃんは欲しいです。でも、まだ箒と赤ちゃんを幸せにできる自信は無いんです。だから……最低でも俺がIS学園を卒業して、何か職について、箒と赤ちゃんを養えるくらいまでは……」

『いっくん……』

「だから、最低でも後三年ぐらいは待ってください……『束義姉さん』」

一夏に『義姉』と呼ばれ、束は感動する。

『ごめんね、いっくん！ 私が馬鹿だったよ！ もう、今すぐ赤ちゃんを見たいなんて言わないよ！』

「はい。あ、それから、贈ってきた荷物の他の物は使えそうです。ありがとうございます」

『うんうん！ それで二人の夜の営みを楽しんでね！ それじゃあ、またね、いっくん！』

「はい。ではまた、東義姉さん」

『うん！ またねー！』

一夏は束と連絡を切ると、千冬に携帯電話を返す。

「あ、そうだ。セシリア達に謝ってこないとな……」

「私も一緒に行くぞ。そうでないと一夏がどんな目に遭うかわからないから……」

「ああ。頼むぜ、箒」

一夏は箒の手を握り、セシリア達の元へ向かった。

残った千冬は二人を見送ると、空を見上げた。

「後三年、か……ふふっ、楽しみだな」

千冬は数年後の未来にできる自分の姪か甥の誕生を楽しみに待つ。

その夜、一夏はセシリア達の謝罪のお詫びとして、四人全員にマッサージをしてやり、疲れた体で自室のベッドにダイブした。

「今日は疲れた……」

そう呟いていると、コンコンと誰かがドアをノックする。

「んー？ どうぞ……」

「し、失礼します……」

「箒？ どうし、たん、だ……？」

自室に入ってきた箒を見て、一夏は固まった。

何故なら、箒の姿は学園祭でいつも一夏が見とれていたメイド姿になっていたからである。

「その……デートのお約束である、ご奉仕に参りました……御主人様……」

箒は恥ずかしながらメイド言葉で、一夏を『御主人様』と呼ぶ。

「わ、私めに何なりとお申し付け下さい……どんな御命令も、御主人様の為なら何でもします……」

バリーーン！！！！

（可愛すぎるんだよ、箒ちゃん！！！！）

箒の可愛すぎるメイドさんに、一夏の理性は簡単に碎かれる。

「それじゃあ……命令するぜ」

一夏は箒を抱き寄せると、そのまま耳元で優しく囁く。

「まずは汗をかいたから一緒にシャワーでも浴びようか、俺だけのメイドさん♪」

「は、はい……御主人様」

メイドとなった箒は、御主人である一夏に一晩中可愛がられたのであった。

第85話 生徒会副会長は誰!? (前書き)

遂に生徒会副会長が決まります!

皆さんはお気づきかもしれませんが、彼です!

第85話 生徒会副会長は誰!?

一夏の暴走事件から翌日の朝、全校集会が行われた。

生徒会長の楯無が重大なお知らせを伝える。

「さて、本日は長年空席だった『副会長』が決定したのでみんなにお知らせしたいと思います」

ざわざわと生徒達が騒ぎ、楯無はバツと扇子を広げて堂々と伝える。

「それでは紹介しましょう！ I S 学園副会長、その名は――」

「将来有望にして、勇気ある少年、龍亞君です！……！」

[illegible]

『何 いい いい いい いい いい いい いい いい いい いい
っ!?!?!?!?』

まさかの副会長にほぼ生徒全員が驚愕し、絶叫した。

「さあ、龍亞君に一言言葉をいただきます！」

龍亞が前に出てマイクの前に立つ。

「えっと……頼りないかもしれないけど、副会長に就任した龍亞です！ みんな、よろしくお願いします！」

龍亞の緊張しながらのスピーチに半分以上の女子が可愛いと呟く。

楯無は龍亞からマイクを交代して話す。

「さて、まだ納得できない女子も居るので言っておくことがあります。副会長の龍亞君は選ばれた部活にレンタル部員として貸すことができます。つまり……」

『つまり……？』

ゴクリと息をのむ女子達。

「この女の子にも見える中性的な容姿の男の子に部活動で手取り足

取り教えるのよ！ 女の子として母性本能が目覚めないかしら！？」

女子達は部活動で龍亞に手取り足取り教えるシーンを想像と言う名の妄想で考える。

『……良いっ！！ 凄く良いです！！！！』

女子達は声を揃えてそう言った。

そして、一体何を想像したのか、鼻血を出す女子も何十人が存在している。

ちなみにアキや箒達五人娘はそれらの女子達には含まれておらず、呆然としていた。

全校集会が終わると、遊星は生徒会室に殴り込みに行った。

Bannon！！

「楯無！！！」

「あら？ 遊星君、どうしたの？」

生徒会室には楯無しか居なかった。

「どうしたのじゃない！ 龍亞が副会長とはどう言うことだ！？」

「昨日龍亞君とデュエルをして、私が勝ったら副会長になるって約束をしたのよ。そして、私が勝ったのよ♪」

「だが、何故龍亞なんだ！」

「龍亞君に期待しているからよ♪」

「龍亞に……期待？」

「遊星君だって龍亞君に期待しているでしょう？ あの子は将来絶対に強くなる。だから、副会長になってもらう代わりに私自らが龍亞君を鍛え上げるのよ」

「……それは亡国機業の対抗策の一つか？」

遊星の言葉に楯無の目は鋭くなる。

それは対暗部用暗部、更識家17代目当主の目だった。

「ええ、そうよ。まだまだ未発達の龍亞君はこれからの私の鍛え方次第では恐ろしい化け物になる可能性は十分にあるわ。何より、龍亞君には幼い頃からずっと心に秘めている妹の龍可ちゃんを守ると言う強い意志がある」

「……確かに龍亞は龍可の為に自分の命を投げ出す程の覚悟を持っ

ているからな」

「だからこそ、私は活動が活発化している亡国機業に対する切り札の一つとして龍亞君を鍛えるの。納得してくれたかしら？」

「……わかった。楯無、龍亞をよろしく頼む」

遊星は龍亞の保護者として、何より大切な仲間として楯無に頭を下げてお願いする。

そして、遊星は頭を上げると自分の気持ちをぶつける。

「だが、龍亞だけには任せない。龍亞は俺達チーム5D'sの一人だ。俺達も今までよりもっと強くなってみせる!!」

遊星は決意の拳を楯無に向けると、楯無はニコニコしながら遊星の拳に自分の拳をぶつける。

「ええ、頼りにしているわ」

それは、大切な人達を自らの手で守るため、奪われないための誓いでもあった。

そして放課後、シンデレラ演劇の景品である王子様の王冠をゲットしたシンデレラは同居同室になるために引っ越しをする。

しかし、ブルーノの王冠をゲットした真耶は一緒の部屋になれなかった。

そもそも教師の部屋を生徒会長の権利で変えることが出来ないので、真耶とブルーノは同居同室になることは出来ないのだ。

そのことに気づいた真耶は人知れず涙を流したのだった。

遊星とアキは元から同室だったので、以前と同じである。

まず始めにクロウと本音。

「クロクロ、今日からよろしくね〜♪」

本音はキツネの着ぐるみパジャマを着て深々と頭を下げる。

「お、おう！」

クロウも慌てて頭を下げる。

「それじゃあ……」

本音はクロウに抱き付いてベッドに押し倒す。

「ほほほ、本音え!？」

「今日のクロクロは本音の抱き枕さん♪」

「何iiiiiiiiiiiiっ!？」

「暖かい……ぎゅう!」

本音はクロウを強く抱きしめてスリスリと頬擦りする。

「や、止めてくれええええええええっ!」

その日のクロウは一睡もできず本音の抱き枕になったそうだ。

次に再び同室となった一夏と箒。

「また……この部屋で一緒だな」

「ああ、そうだな」

「一夏、その……」

「ん?」

すると箒は床に正座で座り、ゆっくり頭を下げた。

「ふ、ふつつか者ですが、よろしくお願いします！」

箒の行動に一夏も慌てて床に座り、頭を下げる。

「あっ、いえ、こちらこそお願いします！」

「ふふふ……」

「な、何だよ、急に笑って」

「いや……何か嬉しくてな。もう、これからはずっと同じ部屋だからな」

「ああ。わかってるよ、箒。俺ももう離れる気はないからな。覚悟しろよ♪」

一夏は箒に近づくと、箒は頬を赤く染める。

「その……お手柔らかにな。昨日はあんなに激しくしたし、明日も授業があるから……」

「わかってるさ、箒」

一夏は箒の寝着を脱がしながらベッドに押し倒す。

「あっ、やん、一夏あ……」

《……こいつらは嫁入りに来た新婚ホヤホヤの夫婦かよ!》

《まあ、いずれはそうなるからな……》

ジャンク・シンクロンは突っ込みを入れ、デブリ・ドラゴンは呆れるのだった。

そして、ジャックは……？

「さて、今日から快適な一人暮らしだな！ ふはははは！」

クロウの部屋から引っ越したジャックは新しい部屋へと意気揚々とドアを開けた。

ガチャ。

「お帰りなさい。ご飯にします？　お風呂にします？　それともわ・た・し？」

――ボタン。

ジャックは無言でドアを閉める。

（どうやら俺は疲れているようだな。裸エプロン姿の楯無がいるわけない！）

ジャックはそう自分に言い聞かせ、もう一度ドアを開ける。

「お帰り。私にします？　私にします？　それとも、わ・た・し？」

「選択肢が一つも存在しないぞ！！？」

「あるよ。一択なだけで」

部屋に待ちかまえていたのは裸エプロンの楯無だった。

楯無はジャックを無理やり部屋に入れる。

「楯無！　何故貴様がここにいる！？」

「えへへ。これ、なーんだ♪」

楯無が取り出したのはシンデレラ演劇で王子様役に被せた王冠だった。

しかもそれは、

「俺が粉々に砕いたはずの王冠!？」

ジャックは王冠を奪われないために自らの手で粉々に砕いたのだ。

「いやー、大変だったわよ。これを完璧に修復するためにもかなりの時間がかかったわ」

接着剤で細かいところまで砕かれた王冠を直したのだ。

楯無生徒会長に不可能は無いのだ!

「何のために俺の王冠を修復させたんだ!？」

「それは……ジャック君と一緒に部屋になるためよ♪　だって……」

「だって、なんだ!？」

「私、ジャック君の事が好きだから♪」

「何だとおおおおとおおおっ!!??」

ジャックは今まで好意を寄せられた女性からアピールを受けていたのは度々あったが、ストレートに告白されたのは初めてである。

「さあ、二人で愛を育みましょう♪」

楯無はジャックを体術を駆使してベッドに押し倒す。

「レッド・デーモンズ、俺を助けてくれ!!」

ジャックは自らの魂と称するレッド・デーモンズ・ドラゴンに助けを求める。

しかし、

《断る》

あっさり自分のマスターを見捨てた。

「な、何故だあああああああっ!!!!」

《良いじゃないか。楯無は最高クラスに良い女なんだし、ジャックも満更じゃないだろ? だから、喰われても問題ないだろ?》

「ありがと、レッド・デーモンズ・ドラゴン君♪ それじゃあ、ジャック君。頂きま〜す♪」

「ま、待て！　まずは話し合——んむう！？」

「んちゅ……んんっ……はむう……ジャック、君……」

この夜、楯無は初めてを捧げ、ジャックは初めてを奪われました♪
この日を機にジャックはますます楯無に逆らえなくなった。

それは何だかんだでジャックが楯無に惚れてしまったからである。

第86話 副会長初めてのお仕事！（前書き）

今回は龍可ちゃんが覚醒します（笑）

何だかんだで龍亞×龍可が成立しています。

でも、このカップリング、どうみても禁断だね……？

兄妹で双子って……。

第86話 副会長初めてのお仕事！

龍亞が副会長に就任し、初めての仕事として、抽選で選ばれた部活にレンタル部員として出向く事になった。

見事最初に抽選で当たった部活は学園祭で箒達のアイドル衣装を作ってくれたファッション部である。

「えっと……俺は何をすれば良いの？」

ファッション部部长に聞くと、何故か嫌な予感しかしない程の素晴らしい笑顔を見せる。

「これを着て貰って、写真を撮るのよ♪」

それは龍亞の体型にあったおびただしい数の服だった。

一方、ライディング・デュエル部では、一夏達のISをD・ホイールに変形出来るよう、遊星とブルーノが独自に作り上げたプログラムをインストールしていた。

「白式、紅椿、ブルー・ティアーズ、甲龍、ラファール・リヴァイヴ・カスタム——、シュヴァルツェア・レーゲン。D・ホイールプログラムインストール……80%、90%、95%……100%。よし、完了だ！」

遊星はプログラムのインストールが完了した待機状態のISを一夏達に返す。

「みんな、さっそく起動してみてください」

一夏達は頷き、ISをD・ホイールモードで呼び出す。

すると、一夏達の目の前にD・ホイールに変形した愛機のIS達が現れる。

どのD・ホイールも遊星号やブラッディー・キスを元にした一般的なバイクの形をしている。

「「「「「おおっ！っ！」「」「」「」」」」

一夏達は目を輝かせながら自分のD・ホイールに触れる。

「すごい！ やっぱり男はバイクは憧れるよなっ！」

「うむ。ISとはまた違った一体感を味わえそうだな」

「私のブルー・ティアーズの美しい蒼のフォルムを壊すことなくここまで綺麗に仕上げるなんて……流石ですわ！」

「全体から細部までのデザインも最高よ！ こんなカッコイイバイ

クは初めて見るわ!」

「これがISの新しい可能性だね。わあ……乗ったこの感じ、いい感じだよ!」

「ライディング・デュエル……今から楽しみだな!」

進化したデュエルである、ライディング・デュエルを今から楽しみにしている一夏達。

「じゃあ、まずは基本操作から教える」

訓練場にて、遊星がD・ホイール基本動作を丁寧に教える。

しかし、初心者最大の難関であるカーブを曲がるのが全員なかなか上手くいかず、普段出ない遊星のあの一面が現れる。

「倒しすぎだ!」

「「「「は、はいっ!」「」「」「」

「体で曲がるんだあ!!」

「」「」「わ、わかっています!!」「」「」

「氣負いすぎだあっ!!」

「」「」「氣負いすぎなんですよおっ!!」「」「」

嘗てアキがライディング・デュエルのライセンスを取得するために立ち上がった鬼教官遊星が再来した。

千冬とはまた違った鬼教官に一夏達は小さな恐怖を抱くのがあった。

その遊星の姿にアキ達は苦笑しながら見守るのだった。

数時間後、遊星の鬼教官指導の甲斐があつて、一夏達はオートパイロットでライディング・デュエルが出来るぐらいの実力がついた。

しかし、鬼教官遊星の訓練があまりにも厳しかったのか、一夏達全員倒れてしまった。

「千冬姉の訓練ぐらいに厳しい……」

「体力と精神力がもうダメだ……」

「まさか、遊星さんにあんな一面があるとは……」

「やっぱり遊星ってクールに見えて熱いわ……」

「まさにD・ホイール命だね……」

「尊敬します、父上……いや、不動教官……」

遊星は手で数回叩き、訓練を終わりにする。

「よし、今日はこれくらいにしよう。みんなの上達が早いから、明日からの訓練は楽になるからな」

「」「」「はい……」「」「」

一夏達は力無く返事をする。

「さてと……」

遊星はそのままどこかに行こうとする。

気になったアキが聞いた。

「遊星、どこかに行くの？」

「ちょっと龍亞が心配だからな。確かファッション部でレンタル部員になっているはずだ」

「そうなの？　じゃあ、みんなでこっそり覗きに行かない？」

アキの提案にジャック、クロウ、龍可は頷き、倒れていた一夏達も気になって一緒に覗きに行くことにした。

ファッション部では、廊下や隣の部屋に響くほどに賑わっていた。

「ねえねえ、龍亞君！　次はこれを着てみて！」

「その前に写真を撮るわよー。はい、チーズ！」

「あーん、もう可愛いわー、龍亞くん♪」

「まさかここまで似合うとはね……」

「妹の龍可ちゃんと双子だから男の子の服も女の子の服も問題無いわね！」

龍亞はファッション部の女子達の制作した服を着せられ、写真を撮られている。

しかも、龍亞はされるがままで、男物女物関係なしに着せられている。

「あ、あのー……いつまでこれをやれば良いのかな……？」

龍亞の言葉にファッション部部长がビシッと龍亞を指さす。

「まだよ！ 着させたい服は沢山あるのよ！ そう言う訳だから逃がさないわよ、副会長さん！」

「あうー……」

その光景をこっそり覗き見をしている遊星達は口をあんどりと開けて啞然としている。

「龍亞……」

「あらら、龍亞ったら大人気ね」

「全く、将来が楽しみだな……」

「まあ、よくよく考えたら龍亞の顔は良いからな……」

遊星とアキ、ジャックとクロウが呟く。

すると、シャルロットとラウラが遊星をちょんちょんと突っついた。

「どうした？」

シャルロットとラウラの表情は何故か恐怖で少し涙目になっており、遊星も気になって二人が指さす方向を見ると、遊星は固まってしまう。

「龍可……？」

龍可の体から赤黒いオーラが沸々と現れ、一夏と箒、セシリアと鈴音もあまりの恐怖に脅えていた。

「龍亞は私だけのお兄ちゃん、龍亞は私だけのお兄ちゃん、龍亞は私だけのお兄ちゃん……」

ブツブツとその言葉を繰り返して呟き、アキとジャックとクロウも脅える。

しかし、その龍可の嫉妬も遂に限界を超えることとなる。

ファッション部の女子達が調子に乗り始め、絶対にやってはいけないことをやろうとする。

「それじゃあ、時間も迫っているから私達が脱がせちゃうわね♪」

「ええっ!? ちょっと、服は自分で脱ぐよ!」

さすがに龍亞も抵抗するが、年上のお姉さんたちに勝てるわけもなく、服を脱がされる。

「良いから良いから♪」

「お姉ちゃん達に全部任せなさい!」

「うふふ、可愛いわね♪」

「はい、腕を上げてね」

「うわぁーん!!」

ブチィ!!
ボオオオオオオオオオウ!!!

龍可の堪忍袋の緒が切れ、嫉妬の炎が燃え上がる。

「いい加減に……」

龍可はフェアリー・ガーディアンを起動させ、炎の鎧を身に纏う。

「みんな、退避だ!!」

遊星が危機を察知し、その場から一斉に退避する。

「しなさあああああああああ!!!!」

そして、龍可はファッション部の扉をぶち破って殴り込んだ。

「て、敵襲!?!」

「る、龍可あ!?!」

「いい加減してください! 龍亞はあなた達の玩具じゃないんですよ!!! これ以上龍亞を弄ぶなら私が許しません!!!!」

龍可の怒声に龍亞とファッション部の女子達はあまりの恐怖にガタガタと震えてしまう。

しかし、震えていたのは龍亞達だけではなかった。

《この心の炎は正しく嫉妬! マスターの兄を思うが故の嫉妬……お、恐ろしすぎる!!!》

古代の炎神である、エンシェント・ゴッド・フレムベルも龍可の嫉妬に恐れてしまった。

「龍亞は返してもらいます！　良いですね!？」

龍可の怒声に圧倒されているファッション部の女子達は頷くしか出来なかった。

「龍亞、早く制服に着替えて帰るわよ」

「う、うん！」

龍亞は着替え室で制服に着替えて出ると、龍可に手を掴まれてそのままファッション部を後にした。

「龍可の嫉妬、アキ以上に怖いな……」

「まだ子供だから上手く心を制御出来てないのよ……龍可を龍亞絡みで怒らせない方がいいわね」

遊星とアキの言葉に一夏達はその事を深く心に刻んだのだった。

龍可リョウカは龍亞リョウアを自室に連れて帰り、ベッドに座らせる。

「えっと、龍可リョウカ。ありがとうな」

「龍亞リョウア……」

龍可リョウカは不安な表情をする。

「龍亞リョウアはずっと私を守ってくれるんだよね……?」

龍可リョウカにいきなりそう言われ、龍亞リョウアは目をぱくりさせる。

「何言ってるんだよ、そんなの当たり前だろ? 俺が何歳から龍可リョウカを守るって誓ったと思っているんだよ?」

「本当……?」

「ああ、本当さ! 俺はずっと龍可リョウカを守るよ!」

龍亞リョウアの純真無垢な笑顔に龍可リョウカはぱあっと笑顔になる。

「うん! ありがとう、龍亞リョウア!」

龍可リョウカは龍亞リョウアに抱きついた。

「えっ、あっ、うん」

(えっと……まあ、いっか)

龍亞は半分訳が分からなくなったが、龍可の機嫌が良くなれば何でも良いと思い、考えないようにする。

ちなみに、この龍可の嫉妬事件はIS学園中に広がり、龍亞に手を出すのはそれ相応の覚悟が必要だと言う教訓が伝えられたのだった。

第87話 無自覚の浮気? (前書き)

浮気じゃないけど、一夏が浮気をします!

何せ6巻のシャルロット&蘭ちゃんのイベントなので……。

そのとき我らが箒ちゃんは!?

次回は私がまたまた暴走しますので(笑)

第87話 無自覚の浮気？

休日のある日、一夏とシャルロットは駅前のショッピングモールに来ていた。

それは一週間前ぐらいにシャルロットが一夏の誕生日プレゼントに腕時計を買ってあげたいと言い、十時に駅前のモニUMENTで待ち合わせをし、二人でショッピングモールを回っている。

本当なら鈴音も居るはずだが、あいにく甲龍の新しいパッケージの試運転のために来られなくなった。

つまり、一夏とシャルロットの二人っきりのデートである。

（やったあ！ 一夏と二人っきり、箒も剣道部の練習でいない……これはもうデートだ！）

最大の障害である箒は剣道部の練習でいないため、シャルロットは心の中はお花畑のように嬉しさ満点である。

ちなみにこのデートの事は箒には伝えていない。

シャルロットが箒に買い物に行くことを伝えておくと一夏に言っていたが、実際には箒に秘密にしてある。

それはもちろん一夏とのデートを楽しむためだ。

（これは友達に腕時計をプレゼントするために出掛けているから問題ないよね♪）

都合のいい思い込みを自分に言い聞かせて一夏の手を握る。

「シャル？」

「ほら、一夏！ あそこの時計屋さんに行こう！」

シャルロットは嬉しさから一夏を引っ張って行こうとする。

「一夏さん？」

突然声をかけられ、振り向くとそこには私服姿の蘭がいた。

「こんにちは、一夏さん」

「おっす。今日は一人？」

「ええ。あの……そちらの方は？」

「シャルロット・デュノアです。よろしく」

「ご、五反田蘭です。あの……一夏さん」

蘭は戸惑った表情で一夏を見る。

「ん？ 何だ？」

「箒さんと……別れたんですか？」

至極当然の質問だった。

一夏は慌てて否定する。

「ち、違う！ 今日ハシャルが俺の誕生日プレゼントを買ってくれて言うから一緒に買い物をしているだけだぞ！」

「えっと、つまり友達同士の買い物ですか……？」

そう聞くと、シャルロットはにっこりと笑って言う。

「うん、そうだよ。だって最近の一夏は箒一筋だからね♪」

「茶化すなよ、シャル……」

「それに、この前何て——」

「だああああっ！ その話はストップだ！！」

先日の暴走事件を口にしようとしたシャルロットを一夏が全力で止める。

（ううっ……ますます一夏さんが箒さんのモノに……）

蘭は更に箒に距離を引き離されたことで苦いものを食べた気分になる。

「あ、そうだ。蘭、ケータイ持ってる？」

「は、はひっ！」

蘭は声が裏返しになり、内心恥ずかしくなりながら携帯電話を取り出す。

取り出した携帯電話をダイレクト接続に切り替え、チケットデータの転送を行う。

「これって……」

「今月行われる『キャノンボール・ファスト』の特別指定席。見たいだろ？」

キャノンボール・ファストとは、ISを使用して行われる高速バトルレースである。

安全性が保証されているので、攻撃による妨害もありである。

今回は市の特別イベントとしてIS学園が参加することになっている。

蘭は思わぬチケットのプレゼントに感激する。

「あっ、はい！　ありがとうございます！　あ、あの！　今日一緒にまわってもいいですか！？」

「「うん」」

感激からの勢いで声を出すと、一夏とシャルロットはあっさりOKを出した。

「じゃ、色々見て回るか！」

シャルロットと蘭はそれぞれ一夏の左右両側に並び、本人は気付いてなかったが、両手に花状態であった。

それからしばらくして、龍星内で昼寝をしていたジャンク・シンクロンが目覚め、チューナーズ・カードから精霊状態で一夏の真上に現れると、今の現状に驚く。

《な、何で一夏がシャルロットと五反田蘭と一緒にデートをしているんだ!?!》

しかも今は楽しそうにオープンカフェで昼食を食べている。

《一夏の奴、何をやっているんだ……》

ジャンク・シンクロンは今の現状に怒りを沸騰させている。

《久々に寝ていた間に箒以外の女とイチヤイチヤして……よし、覚悟しろよ。相棒……》

ジャンク・シンクロンはあの人物と連絡を取る。

一方、IS学園の剣道部で幽霊部員と化していた箒は練習に参加していた。

練習が一段落し、箒が防具を脱ぐと、デブリ・ドラゴンがスポーツドリンクとタオルを持ってきた。

《箒、お疲れ様》

「ああ、デブリ。ありがとう」

タオルで汗を拭き、スポーツドリンクを飲んで水分を補給する。

《あ、それと、ジャンク・シンクロンから連絡が来ているよ》

携帯電話を渡し、箒は不審に思いながら電話に出る。

「ジャンク・シンクロンから？ 何だろう？ もしまし？」

《ああ、箒か？ 緊急事態発生だ》

突然ジャンク・シンクロンから緊急事態と言う単語が出たので、箒は驚いた。

「緊急事態!?! まさか、敵か!?!」

箒は亡国機業を思い浮かべるが、ジャンク・シンクロンからある意味最悪な返事が返ってきた。

《違う……一夏の馬鹿野郎が浮気デートをしている》

「何、だと……?」

箒は携帯電話が壊れてしまっているのではないかと思うぐらい強く握ってしまう。

《一人はシャルロット、もう一人は五反田蘭だ。あつ、今アイスをはい、あーんをしてやがる!!》

ジャンク・シンクロンは今起きている現状を伝え、箒は心を冷静に保ちながら場所を聞き出す。

「……そうか。ジャンク・シンクロン、場所はどこだ?」

《駅前のショッピングモール》

「……今から行っても無駄だろう。ジャンク・シンクロンはそのまま監視を続けてくれ」

《了解!!》

箒は携帯電話をゆっくり切る。

《ほ、箒……？》

デブリ・ドラゴンが恐る恐る呼ぶと、箒は不気味な笑い声をあげる。

「ふふふふ……デブリ・ドラゴン。確か姉さんが一夏に送ってきた物の中には鎖や手錠が入っていたな？」

《う、うん……》

「今すぐ部屋に戻ってダンボールから出しておいてくれ……一夏を迎える準備をしておく」

《は、はいっ！！》

デブリ・ドラゴンは敬礼すると急いで一夏と箒の部屋へと飛んだ。

「一夏……浮気は許さないからな……」

箒の背後には紫炎でも真六武衆でも六武衆でもない鬼神のオーラが現れる。

ブルッ！

「んっ!?!?!?」

一夏は背中に寒気が走り、一瞬震えた。

「一夏、どうしたの?」

「もしかして、風邪ですか?」

「いや、今……死神からの死刑宣告を受けたような……」

「「は?」」

第88話 愛の調教と呪縛（前書き）

やっちまったぜ、O☆R☆E！

ますます一夏と箒をラブラブにしちゃいました（爆）

どこまでやる気だ、私は（笑）

あとがきに劇場版遊戯王の感想を軽く書きました。

第88話 愛の調教と呪縛

一夏とシャルロットと蘭はショッピングモールで楽しい時間を過ごし、蘭を家まで送り届ける。

そして、一夏とシャルロットの二人でIS学園へ帰る。

そんな二人を注意深く監視していたジャンク・シンクロンは近くにあった時計台を見て呟いた。

《そろそろかな……？》

すると、ジャンク・シンクロンの頭にデブリ・ドラゴンからの声が届く。

《ジャンクロン、そろそろマスターの龍星に行った方がいいよ。箒が寮の近くで待ち伏せているから》

《わかった。さて、一夏はどうなるかね……》

《どうなるかな……？ 新しい性癖に目覚めなきゃ良いけど……》

デブリ・ドラゴンは本気で一夏を心配した。

何故なら箒が今から行おうとしていることを一番知っているからである。

《箒は一体何をする気なんだ……？》

箒に密告したジャンク・シンクロンも不安を覚える。

《束が贈ってきた危ない道具を使つての調教》

《マジか？》

《うん、マジ》

《箒は嫉妬深いからな……》

《ヤンデレよりはマシでしょ》

《確かに……一夏、死ぬなよ》

ジャンク・シンクロンはチューナーズ・カードから龍星へ戻り、デブリ・ドラゴンも箒から離れた。

そして、一夏とシャルロットが楽しく話している時、それは始まつてしまった。

「一夏……随分と遅い帰りだな」

箒の調教が……。

ビクッ!?

「「っ!?!?!?」」

一夏とシャルロットが恐る恐る振り向くと、そこには刀を持って待ちかまえ、鬼神のオーラを背負った箒がいた。

「ジャンク・シンクロンから電話があつてな……一夏よ、シャルロットと楽しくデートをしていたようだな?」

「いや、その、デートじゃなくてシャルが俺の誕生日プレゼントに腕時計を買ってくれるって……」

「私に一言も何も言わずにか?」

一夏はシャルロットを見るが、この場には既に居らず、寮に向かつて全力疾走で逃げている。

（シャルさん、箒に伝えたんじゃないのか!?!）

「まさか、付き合つて数ヶ月で浮気をされるとはな……」

「浮気じゃない! 本当だ、箒!?!」

「一夏に浮気をしている自覚は無くても……私の心は酷く傷ついたんだ!?!」

箒は涙目になりながら鎖を取り出して一夏を器用に縛り上げた。

「これ、束義姉さんが贈ってきた鎖!？」

「一夏……いつもは私がお前の奴隷になっていたが、今日ばかりは違うぞ?」

笑みを浮かべた箒は一夏の顎を片手で掴み、唇を強引に奪う。

「ぴちゅ……くちゅ、んちゅ……」

「ほう、ほ、うき……んくっ……」

箒は一夏の唇を離すと、そのまま耳元で囁く。

「今日は私の奴隷になってもらおうぞ、一夏」

「ほ、箒……?」

「ふふふ……一夏が意識を失うまで精力を根こそぎ搾り取ってやるからな……覚悟するんだな」

箒の怪しくも美しい妖艶の笑みに一夏の心は何故か興奮してしまっ
た。

「いっ、痛い……箒……」

「ダメだぞ、それを外したらもう一回戦追加だからな」

「あうっ、ああっ！」

「あっ……止めてくれ、箒……」

「可愛い鳴き声を上げててもダメだぞ？ ほら、我慢しないで……」

「くあっ、あああっ！！」

「ほらほら、一夏の体力もここまでか？」

「もう、ダメ、だあっ！」

「これならまだまだ出せるな……」

そんな感じで一夏は意識を失うまで精力を箒に搾り取られたのであった。

そして、意識を失った一夏は箒の胸の中で眠っていた。

「すまない、一夏……やり過ぎた……」

箒は一夏の頭を優しく撫でながら謝った。

（どうかしている。女である私が愛する一夏を調教するなんて……）

自分のやったことに後悔しながら一夏の額にキスを落とす。

（だが、こうでもしないと一夏が私の手からすり抜けそうで怖い……本当に私は卑怯な女だ。一夏と私の心を縛る鎖が無いと安心出来ないなんて……）

そう思いながらも箒は一夏を抱き締め、再び妖艶な笑みを浮かべて耳元で囁く。

「一夏。私はお前のモノだ。そして……」

「お前は、私のモノだ……何があっても絶対に離さないからな」

それはまるでお互いを見えない鎖で縛り付ける呪縛のような言葉。

しかし、それは一夏と箒が心の底から願っている事だった。

翌朝、箒はいつもの起床時間より数時間も早く起きてしまった。

「おはよう、一夏」

箒は一夏の頬にキスをし、シャワーを浴びるためベッドから降りようとするが、不意に手を掴まれた。

「一夏？」

「箒……」

「すまない、起こしてしまったか？」

箒は優しく微笑みながら片手で一夏の頬を撫でる。

「大丈夫だ。それより……」

一夏は箒を引っ張り、そのまま押し倒す。

「い、一夏？ 何をしているのだ？」

「箒……昨日はゴメン。俺の所為で箒を不安にさせて……だから！」

「ま、待て！ 何故そんなに元気なのだ！？ 昨日私が絞り尽くしたはずなのに……」

「箒が俺のモノだから……俺が箒のモノだから……」

それは昨日、箒が一夏に言った呪縛の言葉である。

「まさか、昨日の私の言葉を聞いていたのか！？」

「ああ。そして、箒が可愛いから……箒が愛しいからだよ!!」

一夏は箒を激しく愛し始める。

「ひゃあん! やん、待って……一夏あ……」

箒は拒否するが、愛しの一夏に求められ、だんだん抵抗できなくなる。

「待てない! まだ時間があるから今日の授業ギリギリまで箒をいっぱい愛してあげるからな!!」

「ふあっ……いやあん……そんなあ……」

「だから……もっと、俺のために乱れてくれ、壊れてくれ、箒!!」

「あっ、あっ、一夏あん……やあああああん!!」

一夏は仲直りの気持ちを込めて全力で箒を愛した。

これにより、二人の互いを愛する気持ちは以前よりも大幅に強化された。

しかし、数時間一夏が愛した結果、箒は腰に激痛が走って全く動けなくなり、その日の授業には出られなくなってしまった。

(やっぱり、私は一夏の奴隷だ……今は私をだけ愛してくれるから……あっ、でも、赤ちゃんが産まれたら愛を分けてあげなければなら……)

・
ベッドの中で嬉しそうに笑いながら改めてそう実感する筈だった。

第88話 愛の調教と呪縛（後書き）

本日発売の劇場版 遊戯王 超融合！ 時空を越えた絆のブルーレイを鑑賞しました！

映画は3Dでしたが、2Dでも映像は綺麗で、動きもとても滑らかでした。

やっぱり三人のデュエリストの夢の競演は最高です！

特に遊戯のブラック・マジシャンとブラック・マジシャン・ガールの召喚時はテンションが上がりました！

相変わらずスターダスト・ドラゴンさんは美しい……私の小説ではあれですけど（笑）

遊戯王5D'sの最終回後に見ると、やはり未来人の事もあり、また違った見方が見えてきます。

パラドックスさんを小説で登場させようかな……でも、あんな性格だし、使っているSinモンスターも対になるモンスターが居なきゃならないし……。

第89話 遊星の伝説? (前書き)

あれ?

シリアスな話を作るつもりが全然シリアスじゃない……。

次回からキャノンボール・ファストのイベントが始まります。

6月の始めからスタートしたキャラクター人気投票の期間が半分経過しました。

まだ投票していない方は是非好きな三人を選んで投票をお願いします!

m () m

第89話 遊星の伝説？

ある日、ISの訓練で遊星や一夏達はキャノンボール・ファストに向けてのISの調整を行っていた。

すると、遊星の龍星からスターダスト・ドラゴンが現れると、どんなでもない宣言をする。

《みんなに悪いが、このキャノンボール・ファストの優勝は俺と遊星で確定だ》

いきなりそんな事を言われ、一夏達はムツとなる。

「何だよ！ 俺と箒の白式と紅椿には無いけど、セシリアや鈴、シャルやラウラのISは高速機動用に色々調整してあるんだぞ！」

一夏が反論すると、スターダスト・ドラゴンは人差し指を振る。

《ちっちゃ、いいか？ お前達に足りないモノ、それは！ 情熱、思想、理念、頭脳、気品、優雅さ、勤勉さ！ そして何よりもおとおとおとおとおおっ！！ 速さが足りない！！！！》

どこの世界三大兄貴の一人と同じ台詞を言う速さを好むスターダスト・ドラゴン。

「「「「全く持って意味不明です！！！！」」」」

スターダスト・ドラゴンの訳の分からない台詞に一夏達は一斉に突っ込む。

「まあ、確かに君達じゃあ遊星とスターダスト・ドラゴンのスピードには勝てないね」

隣で話を聞いていたブルーノがISを整備しながら何気に酷い事を言っていると、一夏達はガンとショックを受ける。

「何せ、遊星には僕が教えた速さの極みである、揺るが無き境地『クリアマインド』と究極の進化『アクセルシンクロ』があるからね」ブルーノが言った『クリアマインド』と『アクセルシンクロ』の単語に、一夏は臨海学校の戦いの時を思い出した。

（そう言えば……悪魔の牢獄から出るときに遊星とブルーノ先生はそんな単語を言っていたよな……？）

「ブルーノ先生、クリアマインドとアクセルシンクロって何ですか？」

「クリアマインドは限界を越えたスピードの中でしか見いだせない世界。そうだな……簡単に言えば、心を明鏡止水みたいになるんだよ。そしてアクセルシンクロは光をも越えるスピードで行われる究極のシンクロ召喚だよ」

「「「「はい???」」」」」

ブルーノの説明にちんぷんかんぷんな一夏達。

ここは先人の言葉である百聞は一見に如かずを頼りに、遊星に直接問い質すしかない。

「クリアマインドとアクセルシンクロはD・ホイールが無ければ使えないんだ。限界のスピードを越えた世界から生まれる進化、それこそがクリアマインドとアクセルシンクロの真髄なんだ」

「それって、俺達にも使えるんですか？」

一夏が聞くが、遊星は苦笑をする。

「それは……無理だな。俺とブルーノにしか使えない力だからな。それに、一夏はアクセルシンクロに頼らなくても充分な力を持っているだろ？」

遊星に指摘され、一夏は氷龍神槍の腕輪を見る。

「そっか、そうだな。何だかんだで氷龍の力は強力だからな」

「うう……羨ましいですわ」

「良いな……私も一夏や箒みたいな力が欲しいなあ……」

セシリアと鈴音がそう呟いた瞬間、ブルー・ティアーズと甲龍が一瞬白く輝いたが、誰も見ておらず、太陽の光が機体に反射していたので誰も気付かなかった。

「そう言えば、お前と遊星号は他のD・ホイールには出来ないことを今まで何度もしていたな」

「そうね。赤き竜の力で過去の世界にタイムスリップしたり……」

「確かアクセルシンクロをする度に空間を跳躍してるよな」

「アポリアの力のお陰で空を飛べるようになったよね」

「後は生身でも宇宙空間に行けるようになったわ」

「「「「「……え???」」」」」」

ジャック、アキ、クロウ、龍亞、龍可が言った遊星とD・ホイールの伝説的な話に一夏達は耳を疑う。

一夏達は六人で固まって話し合う。

「えっ……過去の世界？ 空間跳躍？ D・ホイールが空を飛ぶ？
宇宙空間？」

「まさか、幾ら何でもそんな事を出来るわけ……」

「そうですね。遊星も私達と同じ人間……のはずですから！」

「でも遊星の万能っぷりから考えれば有り得るかも……」

「ねえ、ラウラ。僕達はまだお父さんの事を半分も分かっていないんじゃないかな？」

「確かに……少なくとも過去の世界や宇宙空間に行ける人間は普通居ないからな……」

そして六人はある結論にたどり着き、遊星に聞いてみる。

「「「「「遊星（さん）（お父さん）（父上）は本当に俺（私）（僕）達と同じ人間ですか？」」「」「」」」」

ガン！ ガクッ！！

仲間と娘達に人間かどうか疑われ、遊星は久しぶりに強いショックを受ける。

「お前達は俺を何だと思っているんだ……」

遊星は地面に膝をついて嘆くが、今まで人間では絶対に出来ないことを何度も普通にやってのけた遊星が言っても説得力の欠片がない。

《まあまあ、どんなに遊星が化け物みたいな力を持っても、普通に生活をして体から血が出れば人間だろ？ なあ？》

スターダスト・ドラゴンのフォロー（？）に一夏達は頷いて納得する。

「「「「「確かに」」「」「」」」」

しかし、遊星の心の傷を更に抉る結果となり、そして……。

「ふはははは……スターダスト・ドラゴン!!」

突然笑いだすと、スターダスト・ドラゴンを呼び出す。

《はい！ 何でしょうか、マスター遊星!!》

思わずスターダスト・ドラゴンはビシッと背を伸ばして敬礼のポーズをする。

「キャノンボール・ファストのレース開始からシューティング・スター・ドラゴンに進化するぞ!!」

《俺達の切り札を初っ端からの使用!? 本気なんだな、遊星!!》

「そして、参加者全員のシールドエネルギーをゼロにして、完全勝利でキャノンボール・ファストに優勝するぞ!!」

遊星の中で何かが弾けてしまい、一夏達は激しく後悔したのだった。そして、永遠のライバルであるジャックと親友のクロウのコメントはこうであった。

「珍しいな……あの遊星があんなに壊れるなんて。何年ぶりだろうか……」

「あんな遊星に勝てる気がしないな……本当に優勝しちまいそうだぜ」

その頃、ジャンク・シンクロンはI S学園でアポリアの所に居た。

《アポリア、要らない金属板とかあるか?》

「金属板? それなら私が落ちてきた時の屑鉄の山の一部があるからそこから自由に持ってって良いぞ」

《サンキュー!》

そう言うと、ジャンク・シンクロンは倉庫に入れられた屑鉄の山から質の良い金属板をゲットした。

それをライディング・デュエル部の部室に持ち帰ると、工具を持ってその金属板を加工し始めた。

《この前のショッピングモールで見たアレと出来るだけ同じに作りたいな。写真はデブリから貰うとして……後は俺の腕次第だな!!》

ジャンク・シンクロンは金属板を熱して、曲げて、叩いて、削って何かを作り始めた。

《一夏、喜ぶと良いけどな……》

それは、自分の相棒の一夏の誕生日が迫っているので、手作りでプレゼントを作っているのである。

そしてその日は、キャノンボール・ファストのイベント当日でもあり、学園祭の時と同様に戦場になることを当人達は知る由もなかった。

第90話 キャノンボール・ファスト、レーススタート!! (前書き)

やっとキャノンボール・ファストのスタートです!

前回壊れた遊星がどんな無敵っぷりを見せてくれるか必見です (笑)

そして、鈴音ちゃんが覚醒の時!?

第90話 キャノンボール・ファスト、レーススタート!!

キャノンボール・ファスト当日。

会場の市のISアリーナは超満員だった。

そして、二年生のレースが終盤に入り、一年生である遊星や一夏達は準備に入る。

遊星は龍星をスターダスト・ドラゴンにフォームチェンジしており、その足元にはシンクロチューナーモンスターであるフォーミュラ・シンクロンが待機している。

速さの力を司るスターダスト・ドラゴンとフォーミュラ・シンクロンはまさにレースに相応しいモンスターであった。

遊星は約一週間前の宣言通り、本当にキャノンボール・ファストのレース優勝するつもりだ。

(((((本気だ……))))))

一夏達は遊星を人外扱いして頭のネジをぶっ飛ばしてしまったことを本当に後悔した。

取りあえず少しでも遊星に勝つ確率を上げるために、相棒のチューナーモンスター達を呼び、シンクロフォームを行う。

ちなみに、他の専用機持ちであるジャック、アキ、クロウ、龍亞、龍可はレースに出る遊星の為にサポート役を買って出てレースに参

加しない。

と言っても、参加しない一番の理由は壊れた遊星と戦いたくないからだ。

「みなさん、準備はいいですかー？ スタートポイントまで移動しますよー」

真耶の若干のんびりした声が響き、遊星、一夏、箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラはスタート位置に着く。

『それではみなさん、一年生の専用機持ち組のレースを開催します』
大きなアナウンスが響き、ISのスラスターを点火した。

光速機動用のハイパーセンサー・バイザーを下ろし、全員意識を集
中する。

超満員の観客が見守る中、シグナルランプが点灯した。

3……2……1……ゴー！

一夏達は一気にスタート加速し、第一コーナーを過ぎる。

しかし、ここであることに気づいた。

それをアナウンスが代わりに答える。

『ど、どうしたのでしょうか！？ 不動遊星君がスタートしません
！』

遊星はまだスタートポイントに居て、大きく深呼吸をする。

「勘違いするな。一夏達から妨害を受けて、せっかくのアクセルシンクロを邪魔されたくないからな」

遊星はそう言うのと、一夏達からかなり遅れてスタートした。

ゆっくり目を閉じながら加速していき、遊星はスピード限界を超えた者にしか見えない揺るぎない境地『クリアマインド』を掴む。

「クリアマインド！ スターダスト・ドラゴンに、フォーミュラ・シンクロンをチューニング！」

フォーミュラ・シンクロンは二つの星から輪となる。

遊星は輪の中に突入して、更に龍星のスピードを加速させる。

「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く。光さす道となれ！」

遊星に赤色のオーラが纏い、スターダスト・ドラゴンの星屑の光が更に輝く。

そして、龍星のスピードが光速を越えようとする。

「アクセルシンクロ！！」

遊星が叫んだ瞬間、一瞬の轟音と共に空間跳躍をして姿が消えた。

「「「「消えた！？？」」」」」

アクセルシンクロの空間跳躍により遊星の姿が消えたことで、一夏達は驚き、観客もザワザワと騒ぎ始める。

そして、再び一瞬の轟音が鳴り、遊星が姿を現した。

「生来せよ、『シューティング・スター・ドラゴン』!!!」

スターダスト・ドラゴンは自らの最強進化形態であるシューティング・スター・ドラゴンに進化した。

その流星の如く幻想的で美しい姿に観客達は魅了される。

「行くぞ、シューティング・スター・ドラゴン!!!」

《このまま全員を撃墜させて完全勝利でゴールだ!》

「スターソード・シューティング!」

流星の剣を呼び出して右手に持ち、シューティング・スター・ドラゴンのマックススピードで先頭集団を追いかける。

高速機動形態に調整した一夏達のISよりも速いスピードで、あっという間に遊星とシューティング・スター・ドラゴンはスタートの遅れを取り戻すように一夏達に追いついた。

「は、速い!? 速いよ、お父さん!!!」

「遊星、そのドラゴンのスピードは反則じゃないの!?!」

シャルロットと鈴音の言葉に遊星は不敵の笑みをする。

「ふっ……人外と呼ばれた俺に反則も何もない!!」

相変わらず頭のネジがぶっ飛んでいる遊星だった。

「「まだ人外扱いされたことに怨みを持っていた!?!」」

「スターダスト・ミラージュ!」

遊星は流星の光を纏い、二人に分身してシャルロットと鈴音に攻撃する。

二人はスターダスト・ミラージュの対抗するために、シャルロットはシールドを展開してパイルバンカーを構え、鈴音は龍咆にエネルギーを込める。

しかし、遊星の方が一枚も上手だった。

「スキルエフェクト、『ネクロ・ディフェンダー』! 『くず鉄のかかし』!」

シャルロットはスターダスト・ミラージュの攻撃をシールドで防ぎ、パイルバンカーを撃ち込む。

「灰色の鱗殻!」

鈴音は両肩の衝撃砲を発射する。

「龍咆!」

しかし、灰色の鱗殻はネクロ・ガードナーの力で弾丸の威力をゼロにされ、龍咆はくず鉄のかかしによって防がれた。

二人の血の気が引き、遊星の目がキラーンと光る。

「最後に言い残すことはあるか？」

遊星の死刑宣告に似た言葉にシャルロットと鈴音は涙目になって叫んだ。

「うわあああああああん！ お父さん、ごめんなさい！！！」

「にゃあああああああっ！？ 幾ら何でも強すぎるわよおっ！？」

次の瞬間、スターソード・シューティングがリヴァイヴと甲龍を切り裂くと、二機のシンクロフォルムが解除されてしまい、クイック・シンクロンとニトロ・シンクロンは目を回して倒れた。

そして遊星はシューティング・スター・ドラゴンのスピードを上げて二人を置いていく。

どんどん迫ってくる遊星に、娘のラウラは危機感を覚えて上位争っている三人に話しかける。

「一夏、箒、セシリア！　こうなったら一時休戦だ！　父上を何とかしないと私達全員が倒される！」

「わかった！　箒！　俺の氷龍神槍と武甕槌で一気に行くぞ！」

「ああ、わかった！　行くぞ、一夏！　来い、武甕槌！！」

「氷龍神槍！！」

三匹の氷龍と十三の武士の力が白式と紅椿に宿り、ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンがチューニングする。

「「スピリットシンクロフォーム！！！」」

一夏と箒は光に包まれ、白式・氷龍と紅椿・武神を身に纏う。

一夏は自分の周囲を舞っている氷龍神槍を操り、遊星に向ける。

箒は武甕槌を変化させる。

「カゲキ、風の四刀流！」

箒の両肩にジャンク・デストロイヤーと同じ二本の腕が現れ、電撃を宿す四本の刀を持つ。

そして、一夏と箒の二人は同時攻撃を仕掛ける。

「穿て、氷牙瞬間!!」

「轟け、紫電一閃!!」

三つの氷龍神槍が音速を越えた速度で飛び、四本の刀から強力な雷電を放つ。

「ヴェイクテム・プロテクション!!」

遊星の姿がその場から消え去り、氷牙瞬間と紫電一閃を打ち消した。

「何いいいいいつ!? 消えたと思ったら俺と箒の攻撃を打ち消したあ!?!」

「ば、馬鹿な……遊星はどこに消えたんだ!?!」

「また、空間跳躍したんですの!?!」

「父上! 何処にいますか!?! 返事をしてください!?!」

「ラウラ、俺はここにいるぞ!?!」

ラウラの呼ぶ声に遊星が返事をした。

しかし、

「「「い、何時の間に!?!」」」

何時の間にか遊星は一夏達を追い抜いて一位になっていた。

それは、先ほどの攻撃を打ち消すヴィクテム・プロテクションの空間跳躍で一夏達の前に現れたのだ。

「さあ、後はお前達を撃墜させて終わりだ！　喰らえ、スターダスト・ミラージュ！！」

今度は四人に分身して一夏達に突撃する。

一方、鈴音とシャルロットはニトロ・シンクロンとクイック・シンクロンを抱えながら先頭集団を追いかけていた。

「大丈夫？　ニトロ？」

《にいー……流石はマスターだにいー》

「クイック、調子はどう？」

《大丈夫……すぐにもシンクロフォームをする》

ニトロ・シンクロンとクイック・シンクロンは甲龍とリヴァイヴにシンクロフォームをする。

そして、鈴音は唇を噛みしめ、握って思った。

（今からじゃあ一位は無理かな……？ でも、勝ちたい！！ せっかくレースに出たのに何も残せないなんて悔しい！！）

その時、鈴音の頭に不思議な声が響く。

《勝ちたいか……？》

（当たり前よ、勝ちたいに決まっているじゃん！ って、誰よ！？ 私に話しかけるのは！？）

《勝ちたいなら、我が一族伝統の龍を操ってみよ》

（へ？）

突然、甲龍から天に向かって光が放たれる。

そして、天から鈴音に向かって何かが急降下して降りてくる。

《ギャオオオオオオオオオオオオオウ！！！！》

空気を震わせる咆哮を上げながらそれは降りてきた。

「何よ……アンタは……？」

それは甲龍と同じ、赤みの掛かった黒い体をし、人間のような腕を持った龍だった。

.

第91話 疾風の龍戦士（前書き）

鈴ちゃん、伝説の龍戦士の一人として覚醒する時です！

次回から亡国機業とのバトルに突入します！

話と関係ありませんが、公開されたISの新しいグッズのデザインで箒のはだけた着物姿に思わず鼻血が出てしまいました（笑）

やっぱり、大和撫子風女子のはだけた着物姿は良い！

エロい！（≡△≡）

→変態野郎でスイマセン（笑）

その状態で一夏に迫れば簡単にイチコロなのだと思う作者でした（爆）

第91話 疾風の龍戦士

《ギャオオオオオオオオオオ！！！！》

突然現れた黒龍に観客は騒然とするが、鈴音は落ち着いていた。

（こいつを操ってみろ？ 全く平気で無茶を言うわね。誰だか知らないけど……）

「ねえ、アン——」

《グオオオオオオオオオオオオッ！！！！》

鈴音が話しかけた瞬間、黒龍は口をパカッと開けてあろうことか鈴音に襲いかかる。

ムカツ！

「うるさい！ 少し黙っていなさい！！」

龍咆の衝撃波を黒龍の口の中にぶち込んだ。

《————ッ！？！？》

口の中に酷い痛みが走り、黒龍は口を手で押さえながら苦しんだ。

「り、鈴……？ ちょっとやり過ぎじゃあ……」

目の前の悲劇にシャルロットもオロオロとする。

「話を聞かないでいきなり襲ってきたコイツが悪いのよ!」

「でも、ちょっと可哀相だよ……」

「うっ……」

流石に目の前で涙を浮かべながら苦しんでいる黒龍を見て鈴音も心を痛めた。

「し、仕方ないわね……」

鈴音は黒龍の頭を優しく撫でた。

《ギャオ……?》

「さっきは悪かったわね。いきなり龍咆を口の中にぶち込んだりして……ごめんなさい」

《……グルウ》

ペロッ。

黒龍は舌で鈴音の頬を舐めた。

「ちよっ、何するの? ——ん?」

鈴音は黒龍の口の中をよく見ると、中は機械で出来ていた。

「アンタ、ロボットだったの?」

《ギャオス!》

黒龍はその通りと頷いた。

鈴音は気付いてないが、元々この黒龍は甲龍から生まれたのであるから、ISと同じ機械なのは当然である。

「ギャオスじゃないわよ! アンタ、名前は?」

《……グルル?》

名前を聞かれた黒龍は首を傾げた。

「もしかして、アンタ……名前無いの?」

《ガウ!》

「……しょうがないわね。私が名前を付けてあげるわ。そうね……」

鈴音は髪の毛をいじり、数秒間悩んだ結果、黒龍の名前をすぐに思いついた。

「せっかくだから私の名前の一字をあげるわ。今からアンタの名前は……『ティエンリン天鈴』よ!」

《ギャオン……グル?》

「そう、天鈴よ!」

鈴音から名前を貰った黒龍改め、天鈴は体の向きを変えて鈴音に背中を見せる。

《グルグルウ……》

「え？ 背中に乗れって？」

《グルウ……ギャオン！》

天鈴は嬉しそうな顔をして何度も頷いた。

「わかったわ！ 天鈴、アンタの力を見せてもらおうわ！ シャルロット、一緒に乗るわよ！！」

「えっ？ ば、僕も！？」

「良いから良いから！」

鈴音はシャルロットの手を取って天鈴の背中に乗る。

すると、鈴音の手に天鈴を操る手綱が現れ、甲龍は龍を象った鎧みたいな形となった。

「これは……」

《どうやら、無事にその龍を操ることが出来たようだな》

《流石は我らが見込んだ主だ》

鈴音達の前に現れたのは大剣を携えたオレンジ色の龍戦士『ドラグ

ニティアームズーレヴァティン』と天鈴と似た黒龍に乗った龍戦士『ドラグニティナイトーガジャルグ』だった。

「レヴァティンとガジャルグ……」

《その黒龍——いや、天鈴を頼むぞ》

ガジャルグの頼みに鈴音は微笑む。

「わかったわよ。任せなさい」

《なら、これを受け取れ》

レヴァティンは自らの名前と同じ大剣を鈴音に渡した。

「ありがとう、レヴァティン」

鈴音は大剣『レヴァティン』を背中に背負うと、ガジャルグとレヴァティンは消えた。

黒龍『天鈴』と大剣『レヴァンティン』の二つが揃ったことにより、鈴音のスピリットシンクロフォルムが完成した。

『甲龍・疾風』ジレフォンと名の付いた新たな力に鈴音は嬉しさでいっぱいだった。

天鈴の手綱を握り締めて、意気揚々と声を上げる。

「さあ、天鈴！ 派手に飛ぶわよ！」

手綱を軽く引っ張ると、天鈴は翼を大きく広げ、凄まじいスピードで飛翔する。

「ははは、速すぎるよ、鈴!!」

「あはははは! このまま一夏達に追いついて、遊星に借りを返すわよ!!」

「さあ、後はお前達を撃墜させて終わりだ! 喰らえ、スターダスト・ミラージュ!!」

シューティング・スター・ドラゴンの姿になっている遊星は四人に分身して一夏達に突撃する。

「待ちなさい!!」

その時、烈風が吹き荒れ、遊星達は上空に吹き飛ばされた。

その際に、スターダスト・ミラージュの分身が消えてしまう。

「」「」「なっ?!?!?」「」「」

「新たな力を手に入れ、真打ち鈴ちゃん只今参上!!」

《ギャオオオオン!!》

鈴音と天鈴の派手な登場に遊星と一夏達は驚愕する。

「スピリットシンクロフォームを使えるのは一夏と箒だけじゃないわよ!」

「鈴も使えるのか!?!」

「だが、そのドラゴンはいささか大きすぎないか!?!」

一夏と箒の言葉に鈴音は笑いながら遊星を指さす。

「細かいことは無しよ! この力で遊星、アンタを倒して私が優勝してやるわ!!」

「ふっ……良いだろう! 行くぜ、鈴音!! イコライザ『シンクロ・ストライカー・ユニット』!!」

遊星はキャノン砲を呼び出すと、シューティング・スター・ドラゴンに吸収させて攻撃力を上昇させる。

「スターダスト・ミラージュ!!!」

スターソード・シューティングにシンクロ・ストライカー・ユニットのエネルギーを込め、シューティング・スター・ドラゴン最大攻撃である五人に分身する。

「天鈴！ 全力で遊星をぶっ飛ばすわよ！！」

《グアオオオオオオ！！！！》

天鈴は周囲から膨大な風を口の中に取り込んでいき、鈴音はスピリットシンクロフォルムによって強化された『旋風龍咆』で風のエネルギーを溜める。

「天龍轟碎咆！！！！」

天鈴の風のドラゴン・ブレスと旋風龍咆の風の衝撃波が同時に発射されて一つとなり、巻き込んだものを破壊する巨大な竜巻となる。

「これは……凄いな、鈴音！！」

感心している遊星にシューティング・スター・ドラゴンが突っ込みを入れる。

《感心している場合じゃないぞ！ 流石の俺でもあの竜巻を喰らったら一溜まりもないぞ！！》

「それなら、アレを使うしかないな！ シューティング・スター・ドラゴンと俺の心はいつでも一つだ！！」

遊星とシューティング・スター・ドラゴンのシンクロ率が100パーセントとなり、あの力が再び現れる。

『スター・ドラゴン・システム、発動！！！！』

スターダスト・ドラゴンとその進化形態のドラゴンにのみ与えられ

た龍星のワンオフ・アビリティが発動する。

『スターストライク・ブラスト!!!』

「風よ……俺とシューティング・スター・ドラゴンと一つになり、力を貸してくれ!!!」

遊星は腕を大きく広げると、天龍轟碎咆の竜巻が分散し、シューティング・スター・ドラゴンの体内に吸収されてしまった。

《風が俺の中に……来た来たあっ!! 力が全身に漲ってくるぜええええええええええっ!!!》

そして、シューティング・スター・ドラゴンの青白い流星の輝きが金色へと煌めく。

「何でええええええええええええええええっ?!?!」

鈴音が絶望に直面したように目に涙を浮かんで叫んだ。

一夏達も口をあぐりと開けてしまうほど呆然とする。

「スターストライク・ブラストは風の力をシューティング・スター・ドラゴンが吸収して大きな力に換えるんだ!!!」

「遊星、アンタは化け物!? 怪物!? 妖怪!? それとも悪魔なの!?!」

鈴音の嘆きに一夏達もうんうんと頷く。

「だから俺を人外扱いするな!!」

《人外と言うよりは、今までの数々の死闘を潜り抜けた結果、遊星の精神や肉体が人間の器を超えて進化しただけなんだけどな》

シューティング・スター・ドラゴンは今までの遊星の長きに渡る戦いを思い出した。

始まりは赤き竜に選ばれたシグナーの覚醒。

シグナーの宿敵であるダークシグナーとの戦いで、大切な友を守るために現れた赤き竜の化身であるセイヴァー・スター・ドラゴンとD・ホイールの一体化。

過去の世界で破滅の未来を迎えようとした時、二人のキングオブデューリストとの出会いから、大切な仲間の為に最後まで諦めない心を教えて貰った。

長きに渡る苦悩の末に辿り着いたスピードの限界を越えた境地のクリアマインドとシンクロ召喚を越えた新たなアクセルシンクロの修得。

最後の戦いにて、父の思いを受け取り、未来を守るために仲間達との絆を繋ぎ、手に入れた新たな境地である『オーバートップ・クリアマインド』。

そして、五体のシンクロモンスターによる究極のシンクロ、『リミットオーバー・アクセルシンクロ』。

《どれもこれも、遊星が誰かを守るために自らの限界を越えて進化

したきたんだよな……後でみんなにしっかり話してやらなくちゃな
……》

シューティング・スター・ドラゴンはしみじみと思い、遠い目で見
る。

《……ん？》

遠い目で見ると、空に何かを捉えた。

《あれは……！？ 遊星……！ みんな……！！》

突然、シューティング・スター・ドラゴンは大声を出してみんなの
意識を自分へと集中させる。

「どうした！？ シューティング・スター！」

《どうやら……学園祭以来の邪魔者が来たみたいだぜ》

全員が空を見上げると、そこには無数の黒い点が空を覆い尽くして
いた。

それは……夥しい数の悪魔の軍勢だった。

しかもその中に、ブルー・ティアーズに似た機体を身に着けた女が
いた。

「あれは……サイレント・ゼフィルス……！」

セシリアが目を見開きながら叫ぶと、サイレント・ゼフィルスのI

S
操縦者のエムはニヤリと口元を歪めた。

第92話 逆説と罪を司る男（前書き）

バトル突入にしてまたまた新キャラ登場！

あの人です。

タイトルで既にわかっていると思いますが、遂に皆さんお待ちかねのあの人の登場となります！

第92話 逆説と罪を司る男

無数の悪魔の軍勢と共に現れたサイレント・ゼヒイルスはBTライフルでビームを降り注いだ。

「シンクロ・ストライカー・ユニット、アブソープ・オフ！」

遊星はシューティング・スター・ドラゴンに吸収させたシンクロ・ストライカー・ユニットを解除し、右腕に装着してビームを発射し、BTライフルのビームを相殺させた。

「みんな、大丈夫か!？」

「……お前が不動遊星だな？」

サイレント・ゼヒイルスのパイロット、顔の上半分をマスクで隠した女が遊星を呼んだ。

「だったらどうした！」

「貴様だけは……この場から消えてもらう」

サイレント・ゼヒイルスのBT兵器が遊星を取り囲んだが、その程度で遊星を倒すことなど不可能である。

突如、サイレント・ゼヒイルスから闇の力が現れ、機械とは思えない凶悪で禍々しい形へと姿を変えた。

「私の体とサイレント・ゼヒイルスには天魔時戒神のティファレット

が宿っている……」

「何だと!？」

「消えろ、不動遊星……」

B T兵器からビームが発射されるが、遊星を狙っておらず、ビームで遊星を囲んで魔法陣を描いた。

「悪魔に喰われて……死ね」

「みんな――」

ヒュン!

遊星は魔法陣の力でどこかへと消えてしまった。

「……これで目的の一つを果たした」

「「それはどうかな?」」

無数の弾丸とレールカノンの一発がサイレント・ゼヒイルスに襲いかかる。

シャルロットとラウラが遊星が消えたというのに特に心配をしていない表情をしていた。

それには理由があった。

「僕達の自慢のお父さんがそう簡単に悪魔に食べられると思う?

ねえ、ラウラ？」

「その通りだな、シャルロット。父上が悪魔如きにやられる可能性は限りなく零に近い。少なくとも父上は私が今まで会ってきた人の中では教官と並ぶ最強の部類に入る御方だ。下手をすれば父上は神にも匹敵する力を持っているからな」

すると、シャルロットとラウラは苦笑を浮かべた。

「考えてみれば、とんでもない人の娘になったね。僕達は」

「ああ。だが、私達への愛情は揺るぎないものだ。だから……」

その瞬間、一夏、箒、セシリア、鈴音がサイレント・ゼヒイルスの周りを囲んだ。

「僕達はお父さんが帰ってくるのを信じている！」

「そして、父上が帰ってくる前に少しでも多くの敵を排除する……！」

それは、父である遊星を心から信頼しているシャルロットとラウラだからである。

一方、チーム5D'sの専用機持ちであるアキ、ジャック、クロウ、龍亞、龍可はISを纏って空を覆い尽くす悪魔を別れて退治し始める。

教師であるブルーノも出陣する。

「真耶、みんなの避難を頼むよ！」

「ブルーノは！？」

「僕はみんなを守るために悪魔を倒す！ デルタ・ストライク！！」

ブルーノはサングラスを装置し、デルタ・ストライクを纏う。

「TG・フォルム！ TG ハイパー・ライブリアン！！」

バックアップ！ TG カタパルト・ドラゴン』、TG ジェット・ファルコン』！そして、TG カタパルト・ドラゴンにTG ジェット・ファルコンをチューニング！！」

バックアップで呼び出したジェット・ファルコンは三つの星から輪となり、カタパルト・ドラゴンに纏い、周囲に様々なデータの画像が現れる。

「リミッター解放、レベル5！ ブースターランチ、OK！ インクリネーション、OK！ グランドサポート、オールクリア！ G O！ シンクロ召喚！ カモン、『TG ワンダー・マジシャン』！！」

光の柱となり、中から魔術師、ワンダー・マジシャンが現れる。

そしてブルーノは加速してクリアマインドを掴む。

「クリアマインド！ TG パワー・グラデイエーターに、TG
ワンダー・マジシャンをチューニング！」

ワンダー・マジシャンは五つの星から輪となり、ブルーノは輪の中に突入して、そこから更に加速する。

「リミッター解放レベル10！ メイン・バスブースター・コントロール、オールクリア！ 無限の力、今ここに解き放ち、次元の彼方へ突き進め！ GO！ アクセルシンクロ！！」

ブルーノはアクセルシンクロで空間跳躍し、悪魔達のだ真ん中に現れる。

「カモン、『TG ブレード・ガンナー』！！！！」

ブルーノはアクセルシンクロモンスターのブレード・ガンナーとなり、ブレード・ガンで悪魔達を撃つ。

「ブレード・シュート！！」

しかし、ブレード・ガンナーの力でも悪魔の数は全く減らなかった。

その時、IS学園から空飛ぶ物体が飛翔する。

それは、騒ぎを聞きつけて文字通り飛んできたIS学園の番人、アポリアである。

「アンチノミー！ 一人だけでカッコつけようとするな！！ 行くぞ、ウロボロス！ 『機皇創世』、発動！！」

アポリアの周囲に三体の機皇帝、ワイゼル、スキエル、グランエルが現れ、それぞれがコアの状態に戻ると、アポリアの中に入った。

「三つの絶望よ、新たな最強の力を降臨させよ！！」

アポリアは機皇帝の三つの無限の力を一つにした最強の機皇を呼び出す。

「現れよ、『機皇神 マシニクル∞』！！！！」

アポリアは機皇帝を越えた絶望の魔人、機皇神マシニクル∞となる。左腕のマシニクル・キャノンを構え、エネルギーを充填させる。

「絶望せよ、ザ・キューブ・オブ・デイスペアー！！！！」

絶望へと導くキャノン砲が火を噴き、一気に大量の悪魔達を消滅させる。

「さて……向こうはみんなに任せてあるけど、この数を相手にどこまでやれるかだね」

「こいつら……倒しても倒しても湧いて出てくる。キリがない……」

まるで湧き上がる水のように次々と現れる悪魔の軍勢に、ブルーノとアポリアは額と頬に焦りの汗が流れる。

「おやおや。君達はこの程度で怖じ気付いたのか？」

声が響くと、長方形の形をした異空間の扉から三輪のD・ホイールが現れた。

そのD・ホイールのD・ホイーラーは白と黒の仮面を顔に被っていた。

「くくく……久しいな。我が友、アポリア、アンチノミーよ」

「まさか……お前は！」

「君もどうやら彼に生き返されたようだな」

突然現れた人物にアポリアとブルーノは驚きと笑みが交じった表情を浮かべた。

D・ホイーラーは仮面を取り、顔を露わにする。

そのD・ホイーラーの正体はアポリアとブルーノと同じ破滅の未来の生き残りの一人で、嘗てデュエルモンスターズを消滅させて未来を変えようとした男、パラドックスである。

パラドックスはD・ホイールからデュエルディスクを取り出し、デッキを装着する。

「私は罪深き世界、『Sin World』を発動する!!」

パラドックスを中心に、広域が宇宙に似た不思議な空間となる。

パラドックスはデッキから四枚のカードを墓地に送る。

「さあ、現れよ。罪の力を宿したドラゴン達よ! 『Sin 青眼の白龍』! 『Sin 真紅眼の黒龍』! 『Sin サイバー・エンド・ドラゴン』! 『Sin レインボー・ドラゴン』!」

現れたのは、デュエルモンスターズ界伝説のドラゴンを生贄にして生まれた、闇の鎧を身につけたモンスターである。

「行け、Sinモンスター達よ。滅びのバースト・ストリーム! 黒炎弾! エターナル・エヴォリュション・バースト! オーバー・ザ・レインボー!」

パラドックスが命じると、四体のSinモンスターの強力な必殺技

が悪魔を一掃する。

「くっくくく……はあっ、はははははあ!!!!」

パラドックスは無惨に消された悪魔を見て笑い飛ばした。

第92話 逆説と罪を司る男（後書き）

活動報告にも書きましたが、ノクターンノベルスでこの小説の18禁版小説を書いてしまいました。

つまり、本編では書けなかったカップルの性行為を執筆してしまいました！

Σ（□□）！？

見たい方はこの小説のタイトルに『裏』が付いてあるので探せばすぐに見つかると思います。

ちなみに記念すべき第一作は一夏と箒の初夜話なので。

18歳以下の方は見てはダメですよ（笑）

第93話 大切な人を守る力（前書き）

まだまだバトルは続きそうです。

少なくとも……後一話か二話ですね。

キャノンボール・ファストが終わったら、ノクターンノベルスに遊星×アキを書きたいと思います。

それから、もうすぐ7月7日で篝ちゃんの誕生日が近いので、ノクターンに記念小説を書く予定です。

内容は一夏と篝が福引きの景品で巨大遊園地に行つて、その後高級ホテルに泊まる話です。

今からどうやって一夏と篝をいちゃいちゃさせるか楽しみです（笑）

取りあえず、シチュエーションは観覧車、温泉、布団……（――☆）

第93話 大切な人を守る力

チーム5D・Sの専用機持ち達はISアリーナ観客を無事に避難させるために悪魔達と奮闘していた。

すると、突然周囲の空間が不思議な力によって宇宙のような空間となる。

「何……これは？」

「何だか嫌な空気を感じるぜ……」

アキとクロウは身震いしながら悪魔を倒していく。

それはパラドックスの作り出した『Sin World』だが、アキ達はその力の波動を知らないため、警戒を強くした。

すると、ジャックは見覚えのある人影を見つける。

「楯無……？ どこに向かっている？ すまない、少し外れる！」

「お、おい！ ジャック！？」

クロウの制止を無視してジャックは戦線離脱した。

「あのバカ！ この忙しい時によおっ！！」

「今は口より手を動かすのよ！」

「キャアアアッ！」

高い声の悲鳴が聞こえる。

「「えっ!?!」」

「龍可!?!」

龍可が悪魔達に捕らわれ、身動きが取れなくなっていた。

「や、やだ! 離して!?!」

「龍可を助けなくちゃ!」

「待ってろ、龍可!」

「龍可に……」

嫌がる龍可の姿を見た龍亞はザワツと髪の毛が逆立つように体中から怒りが溢れた。

龍亞から放出される怒気にアキとクロウは体が無意識に停止させてしまった。

「手を出すなあああああああっ!?!」

ブースターを解放させた状態の瞬時加速で突撃し、悪魔達から龍可を引き離し、そのまま抱き上げた。

「龍亞!」

「龍可、そのままじっとしていて」

「うん、うん」

龍亞のいつも以上の怒りの雰囲気、龍可は小さく頷いて龍亞にしがみつく。

「パワー・ツール・ドラゴン、パワー・サーチだ！」

《おう！ 全力全開で派手に暴れようぜ！！》

「『銀の鐘』！！」

パワー・ツール・ドラゴンのウイングスラスターがIS『銀の福音』の銀色の翼へと変わる。

ウイングスラスターの三十六砲門全てが開き、龍亞が体を回転させると同時に銀色の光弾が全方位に向かって一斉射撃され、悪魔を串刺しにした。

「……よし！ 龍可、大丈夫？」

「うん、私は大丈夫よ。ありがとう、龍亞」

「龍可、俺の側から離れないでくれ。絶対に守ってやるから」

ここ数週間、楯無に鍛えられていた龍亞は以前よりも強くなっていた。

「イコライザ、『ダブルツール D&C』。パワー・サーチ、『龍咆・崩山』」

両腕にダブルツールを装備し、更にパワー・サーチで両肩に鈴音の甲龍の龍咆を呼び出した。

パワー・ツール・ドラゴンには今、近接特化型武器のダブルツール D&Cと中距離型砲撃の龍咆。

そして、広域殲滅型武器の銀の鐘を装備している。

どれも破壊力のある武器で、今の龍亞は死角なしである。

「龍可、行こう!」

「うん!」

「ふふ、さすがはエムね。天魔時戒神のティファレットを宿しているとはいえ、あれだけの専用機持ちを相手に、よく立ち回るものだね」
ISアリーナから少し離れた場所で、金髪の女性はサングラス越しに、エムの戦闘を見ながら楽しそうに目を細めた。

「しかし、たいしたことないわねえ。もう少しがんばってほしいのだけど」

「あら、イベントに強制参加しておいて、その言いぐさはあんまりじゃないかしら」

その女性に話しかけたのは、IS学園生徒会長でありながら自由国籍権を持つ天才。ロシア代表の楯無である。

「IS『モスクワの深い霧』だったかしら？ あなたの機体は」

「それは前の名前よ。今は『ミステリアス・レイディ』と言うの」

「そう——ビナー、頼むわ」

女性の体から闇のオーラが溢れ、振り向くと闇から造られたナイフを投げた。

「マナーのなってない女は嫌われるわよ」

瞬間的にISを展開した楯無は蛇腹剣『ラスティ―・ネイル』でたたき落とすと、そのまま女性を狙った。

「あなたこそ、初対面の相手に失礼じゃなくて？」

「『亡国機業』、狙いは何かしら？」

「あら、言うわけじゃない。せっかくいいシチュエーションができたというのに」

「無理矢理にでも聞き出してみせるわ」

「それができるかしら？ 更識楯無さん」

「やると言ったわ、『土砂降り（スコール）』」

蛇腹剣を手放し、同時にランスを呼び出す。

しかし、それよりも早くスコールの背中から黒い翼が現れ、翼の中から大量の下級悪魔が出てきて楯無を襲わせる。

「なっ……！？」

「その子を好きにして良いわよ」

スコールの邪悪な笑みに悪魔達は反応し、牙と爪を向ける。

しかし、突如悪魔達は炎に包まれた。

「灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！！」

炎は悪魔だけを焼き尽くし、楯無は啞然としながら振り向く。

「人の女を勝手に手を出すとはいい度胸だな」

「ジャック君！」

それは紅蓮王をレッド・デーモンズ・ドラゴンの姿へと変形させて楯無を助けに来たジャックだった。

「あなたは誰かしら？」

「俺の名はジャック・アトラス！ 楯無の代わりに俺が貴様の相手をしてやる！！」

「面白いことを言うわね」

スコールは翼を羽ばたかせ、羽根が散ると同時に弾丸のようにジャックに襲いかかる。

「誰が面白いことを言うか！ バスター・モード！！」

ジャックは真紅の炎に包まれ、飛んできた羽根を焼き尽くして灰にする。

「……！？」

「モード・チェンジ！ 『レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター』！！」

悪魔を模した灼熱の鎧を身に纏ったレッド・デーモンズ・ドラゴンの強化形態である、レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターになる。

その力は絶対的な破壊の力で、遊星のスターダスト・ドラゴン／バスターとは対的存在である。

「その姿……あなたの方がよっぽど悪魔ね」

「何とでも言え。だが、俺の燃えるような荒ぶる魂はどんな悪魔をも凌駕するぞ！！」

「どうやら、今回は分が悪いみたいね」

スコールは翼を再び羽ばたかせて宙に浮いた。

「逃がすか！」

ジャックは進化したデーモンアームズ・バスターに灼熱の炎を灯した。

「エクストリーム・クリムゾン・フォース！！！！」

デーモンアームズ・バスターで地面に打ち込み、灼熱に燃える炎の柱を作り出してスコールを包んだ。

しかし、スコールは一切焼けておらず、ニヤリと笑みを浮かべると、炎の柱を打ち消し、そのまま全力で空に逃走した。

今から追っても、スコールの速度には追いつけない。

「ちっ、逃げたか」

ジャックは舌打ちをしながらISを解除した。

「次会ったときには完膚無きまでに俺が叩き潰してみせる！！」

拳を握り締めて宣言するジャック。

すると、

「ジャックく〜ん♪」

「む？ 何だ楯——ぐおっ!？」

楯無はミステリアス・レイディを解除してジャックの背中に抱きついた。

「ありがとう。凄くかつこよかったわ♪ それに、人の女だなんて〜お姉さん嬉しいわ♪」

「ええい、わかったから早く離れろ！ 俺の背中に当たっているぞ!？」

ISスーツはスクール水着と似たようなもので、布一枚越しに楯無の胸がジャックの背中に当たっている。

「えー？ ワザと当てているのよ♪」

楯無はギュッと抱き締めて自分の胸を更にジャックに当てている。

「や、止めんか！ それ以上は俺の理性が保たんぞ!！」

「良いわよ、私はいつでもジャック君に襲われても……私はジャック君のパワーに耐えてみせるわ!！」

若干頬を赤くする楯無にジャックは空に向かって叫んだ。

「いい加減にしろおおおおおおおっ!！」

《……阿呆が。少しは大人になれ、ジャック》

レッド・デーモンズ・ドラゴンはジャックの不甲斐なさにため息をつくのだった。

第94話 誇りと宝石の閃光（前書き）

さあ、セシリアさんの待ちに待ったスピリットシンクロフォームの
発現です！

原作六巻のバトルもクライマックス目前です！

早く簪ちゃんを出したいな……。

でもノクターンやパドックスの話も書かなくては……（汗）

第94話 誇りと宝石の閃光

悪魔の魔法陣によってどこかへ転移された遊星は転移された場所に頭を悩ませる。

「これは何だ……」

そこは見たことのない凶悪な漆黒の獣、いわゆる……『魔獣』が周囲の空間を覆い尽くしていた。

牙を剥き出しにし、舌を出して涎を吐き出しており、いかにも遊星を喰いたそうにしている。

『ギャハハ！ 久方ぶりの人間だ！ 食らいつくしてやるわ！』

「だいたい……全部で千体か。さて、そろそろ魔獣退治を始めるか……」

遊星は平然としながら首や肩を動かして間接を鳴らす。

『貴様は愚かなのか？ 一人で我らに対抗できると思っているのか？』

「誰が一人だと言った？」

遊星はスターソード・シューティングを掲げる。

「不動遊星の名の下に集え、絆を繋ぎし戦士達よ」

龍星からジャンク・ウォリアーやロード・ウォリアーが率いる遊星のデッキのモンスター達が現れ、遊星の元に全て集結する。

これは龍星の最終兵器の一つ、『ウォリアーズ・ファイナル・アタック』と呼ばれる遊星の全てのモンスター達を短時間の間だけ召喚し、敵を完全殲滅させるものである。

「みんな、準備はいいな？」

遊星が一応確認を取ると、モンスター達は頷く。

『馬鹿め！ 我ら千の魔獣から逃げられると思っているのか！？』

「魔獣よ、俺達を舐めてもらっては困る。俺達は今まででありとあらゆる神々と戦ってきたんだ。俺達はお前を倒して、元の世界に帰る……行くぜ！！！」

遊星は絆で結ばれたモンスター達を率いて魔獣退治を始める。

一夏達は襲撃したエムと戦闘を開始するが、思った通りの戦いができないうでいた。

エムだけなら、スピリットシンクロフォームで大幅に強化されたISを使う一夏と箒と鈴音の三人がいれば充分対応出来たが、そろそろと現れる下級の悪魔達が波のように一夏達を襲い、戦いを邪魔している。

そして、エムは自らの体とサイレント・ゼフィルスに取り込ませた天魔時戒神ティファレットの力を使う。

「……ティファレット、パニッシュメントフォーム」

エムが言葉を紡ぐと、サイレント・ゼフィルスの装甲が青色から藍色に染まり、所々に金の装飾が施された天魔時戒神の罰の力を宿した『サイレント・ゼフィルス・ティファレット』となる。

自分達とは方法はかなり違うが、ISの姿が変わり、エムから放たれる邪悪な殺氣に一夏達は戦慄を感じ取る。

「箒！ 鈴！ 俺達のスピリットシンクロフォームの同時攻撃であいつを討つぞ！」

一夏は雪片氷龍之型から冷気が放出され、一夏の周囲に氷で造られた巨大な花が幾つも現れる。

「わかった！ 武甕槌、イロウ、闇の長刀！！」

箒の武甕槌は闇の力が螺旋状に纏った長刀に変えて振りかぶる。

「レヴァティン、アンタの力を借りるわよ！」

鈴音は刃から風が吹き荒れるレヴァティンを構える。

三人は呼吸を合わせていき、悪魔達に邪魔されないようにセシリアとシャルロットとラウラが防ぐ。

そして、三人の呼吸が合わさり、エムに向かって同時攻撃を始めた。

一夏は氷の花を碎き、箒は長刀で弧月を描き、鈴音は大剣を軽く振るった。

「氷華繚乱！！！！」

「常闇之弧月！！！！」

「疾風斬空波！！！！」

氷の花から造られた花びらの形をした無数の氷弾と弧月のように細く鋭い闇の斬撃、そして巨大な風の斬撃が同時にエムを狙う。

エムはシールドビットを展開するが、威力の高い攻撃を完全に防ぐことは出来ない。

「私の盾になれ……屑共」

エムが命令を下すと、下級悪魔達がエムの前に集まり、大きな固まりとなる。

三人の攻撃は悪魔の固まりに直撃し、小爆発が起きる。

固まった悪魔は全滅したが、エムは全くダメージを受けておらず、無傷である。

「ちっ、これが人海戦術の強みかよ!」

一夏達は圧倒的すぎる下級悪魔の兵数で未だにエムに傷一つ付けられていない。

これでは、いたずらにシールドエネルギーを消費するだけである。

エムは不気味な笑みを浮かべ、再び下級悪魔と共に襲いかかる。

そして、エムが標的に選んだのは、自分のISの前の機体である一号機。

「お前は……死ね」

エムはライフルのスターブレイカーでセシリアを狙い討つ。

「お相手しますわ!」

セシリアはロングライフルのブルー・ピアスを構えて、二人は同時にビームを発射する。

しかし、セシリアのビームはサイレント・ゼフィルス・ティファレットのBT兵器のビームで相殺された。

「なっ!?!」

そして、エム渾身の一撃が無防備なセシリアに直撃した。

「あっ……くっ……」

直撃をモロに喰らったセシリアは意識を奪われそうになり、ブルー・ティアーズとターボ・シンクロンとのシンクロフォームも解除され、そのまま下へ墜ちる。

「セシリアー!!」

一夏は白式・氷龍の最大加速で飛び、雪片氷龍之型で悪魔を切り裂きながらセシリアに向かって手を伸ばす。

（私は……このまま負けてしまいますの……？）

セシリアは自分の無力さを恨んだ。

（勝ちたい……そして、あのサイレント・ゼヒイルスを超える絶対的な力を……!）

力を望んだとき、セシリアの頭に声が響いた。

《何のために力を欲しますか?》

（誰……ですの?）

《己の誇りを守るためにだけに力を欲するのですか?》

謎の声の主の問いにセシリアは迷うことなく答える。

（確かに、私自身の誇りを守るためでもあります、それだけではありませんわ! 私にはもう一つの誇りがありますわ!）

《それなら、聞かせて下さい。あなたの誇りを》

（私の愛する人は事故で亡くなってしまいましたわ……私はもう誰も失いたくありません。友達を、仲間を、初恋の人を……守りたい！　それが私の誇りですわ！！）

セシリアのＩＳ学園の日々により芽生えた揺るがなく、何よりも強い『誇り』に声の主は納得したように声が優しくなった。

《わかりました。あなたの誇りは確かに本物のようですね。では、あなたに私たちの輝きの力を授けます》

（それはまさか……スピリットシンクロフォームですか！？）

《さあ、早くあなたの相棒と共に》

（わかりましたわ！）

セシリアは意識を取り戻し、一緒に落ちているターボ・シンクロンの手を握った。

「ターボさん、もう一度行きますわよ！」

《セシリア……わかった、任せろ！》

ターボ・シンクロンはバイザーを下ろし、一つの星から輪となり、セシリアに纏う。

（私に力を貸してください……）

「スピリットシンクロフォーム!!」

セシリアのブルー・ティアーズは幾つもの色鮮やかな美しい光に包まれた。

光が消えても、色鮮やかな輝きは消えなかった。

何故なら、ブルー・ティアーズの装甲がまるで本当の宝石のようになっている、太陽の光に反射してキラキラと輝いていたからだ。

それは、セシリアが待ちに待った新たな力、スピリットシンクロフォームの姿である。

『ブルー・ティアーズ・フラッシュ』の名がセシリアの目の前の画面に現れ、セシリアは威風堂々と再び戦いに臨む。

「さあ、私のスピリットシンクロフォーム、ブルー・ティアーズ・フラッシュの初陣ですわよ! シャイニング・ティアーズ・フルバースト!!」

セシリアは新たな力を得て、それぞれが宝石の力を宿した合計二十機のBT兵器『シャイニング・ティアーズ』を同時発射させる。

第95話 掴んだ勝利（前書き）

さて、キャノンボール・ファストのバトルもこれでやっと終わりました。

次回は一夏の誕生日話でキャノンボール・ファスト編のファイナルです。

そうしたら、原作最新巻の七巻の更識簪編となります！

第95話 掴んだ勝利

セシリアは新たな力、スピリットシンクロフォームを手に入れ、ブルー・ティアーズ・フラッシュを発現させた。

二十機のBT兵器、シャイニング・ティアーズはセシリアの意志とターボ・シンクロンの精密操作により、光の如く空中を駆け抜ける。そして、降り注ぐ太陽の光のようなビームがエムの盾になる悪魔を貫いていく。

「キリがありませんわね。こうなったら、眼には眼をですわ。シャイニング・ティアーズ、ディフュージョンタイプ（拡散式）！」

シャイニング・ティアーズの先端の銃口が変形し、一筋のビームが複数のビームへと分かれ、広範囲に拡散される。

「量には量でやらせてもらいますわ！」

拡散式に変形させたシャイニング・ティアーズのビームの嵐で悪魔を一気に九割以上を一掃させる。

「セシリア、すげえ……悪魔の大群をたった数秒で……」

「どうやらセシリアのスピリットシンクロフォームは対多数用射撃に特化しているようだな」

一夏と箒はセシリアのスピリットシンクロフォームに感心する。

「ねえ、ラウラ。僕達も何かスピリットシンクロフォームが欲しくなっちゃったね」

「確かに……私もシュヴァルツェア・レーゲンの新たな力の可能性を見てみたいな」

シャルロットとラウラはスピリットシンクロフォームが羨ましくなった。

「やるじゃない、セシリア！ そのままあいつをやっつけちゃえ！」

鈴音が声援を送ると、セシリアは手でグッドサインを送り、進化した巨大なライフル、『スターライト・ブレイカー』を構える。

「……調子に乗るな」

エムはスターブレイカーとBT兵器を連携させてセシリアを再び狙い撃つ。

しかし、セシリアの表情には余裕が現れていた。

「うふふ……シャイニング・ティアーズ・シールドタイプ！」

セシリアの周囲にシャイニング・ティアーズが全て集まり、ディフュージョンタイプから変形し、盾の形となる。

シールドタイプとなったシャイニング・ティアーズはエムのビーム攻撃を全て防ぎ切った。

「くっ……」

エムの表情にも焦りが見え始めた。

「諦めなさい。あなたでは、今の私に勝てませんわよ」

セシリアの余裕の挑発にエムはブチ切れた。

「ふざ……けるな!!」

天魔時戒神ティファレトの闇の力をスターブレイカーに全て込め、BTエネルギーを充填させる。

「なら私も本気を行かせてもらいますわ。シャイニング・ティアーズ、バスタータイプ!」

十機のシールドタイプはそのまま、残りの十機はスターライト・ブレイカーに集まり、それぞれが異なる変形をして、スターライト・ブレイカーと合体した。

シャイニング・ティアーズをスターライト・ブレイカーに合体させたことにより最終武器『シャイニング・スターライト・ブレイカー』となり、射撃のスピード、威力を数段階も上げることができる。

「これが最後の私の攻撃ですわ!」

セシリアもシャイニング・スターライト・ブレイカーにBTエネルギーを充填する。

先に充填が終わったのはエムで、スターブレイカーの引き金を引く。

「……死……ね!!」

闇のエネルギービームが発射され、それと同時にセシリアもBTEエネルギーの充填が終わった。

「スターライト・シューティング!!!」

引き金を引き、銃口から色鮮やかな光を持つエネルギービームが放たれる。

二つのエネルギービームが衝突する。

しかし、セシリアのスターライト・シューティングの方が威力が高く、エムのエネルギービームを貫き、一直線にエムに向かう。

「……くっ!」

エムは横に間一髪で回避し、再びスターブレイカーを構えた。

しかし、セシリアの不可思議な行動に思わず手が止まってしまった。

セシリアはシャイニング・スターライト・ブレイカーを下ろし、何も握っていない左手をエムへ向ける。

その心の中に、蒼い雫が落ちる。

水面に落ちた雫は静かに波紋を広げ、光輝くジェムナイト達の姿が現れる。

(ジェムナイトのみなさん、ありがとうございます)

「……？」

セシリアの意図を量りかねるエム。

そして、セシリアがゆっくりと微笑みを浮かべた。

「バーン」

手で作ったピストル。

その指先から何も発せられない。

だが、次の瞬間、エムの背後から光輝くエネルギービームが直撃した。

「！？」

BTエネルギー高稼働率時にのみ使える『フレキシブル偏向射撃』。

スターライト・シューティングのエネルギービームがエムを通り過ぎた後に、セシリアが操作してエムの背中に直撃させたのだ。

本来ならターボ・シンクロンの力で使えることができるが、セシリアはそれを自分のものにしたのだ。

エムのサイレント・ゼフィルス・ティファレットは大きなダメージを受け、すでに戦える状態ではない。

「――スコールか、何だ？ ……………。わかった、帰投する」

エムはスコールからの連絡を受けると、一夏を睨みつけた。

「……何だ」

「……ふん……」

エムは一夏に一瞥すると、ティファレトの力で魔法陣を描き、その場から転移した。

それと同時に悪魔も全て消え去り、ISアリーナを襲った脅威は跡形もなくいなくなった。

一夏達はアキ達と合流し、互いの無事を確かめるが……。

「ねえ、遊星は？」

「「「「え？」「」「」」」

アキの質問に一夏達は声が揃い、固まった。

「え？　って、みんなと一緒にいたんじゃないの？」

「えっと、亡国機業の襲撃者がお父さんをどこかに飛ばして……」

「てっきりもう戻っているかと……」

一同に不穏な空気が流れ込み、沈黙が走る。

そして、大量の汗が体中から流れ出る。

「遊星えっ！！　一体あなたは何処にいるのおっ！？！？」

「お父さん！　こっちはもう終わったよ！　早く帰って来てよおっ！！」

「父上！　どうか私達の元に早くお戻りください！！　元氣な姿を見せてください！！」

アキ、シャルロット、ラウラは遊星の身を案じ、心配で身が張り裂けそうになり、空に向かって大声で叫んだ。

突然、空間に大きな亀裂が生まれ、ガラスのように碎かれ、中から

人影が見える。

「みんな……」

赤いISを纏っているその姿は紛れもなく……。

『遊星！！！』

ノーマルフォルムの龍星は所々破壊されていたが、遊星本人には怪我がなかった。

「良かった。みんな、な、無事、で……」

遊星はみんなの無事な姿を見て気が抜けてしまったのか、精神力と体力が限界を迎え、龍星が遊星の体から解除されてしまう。

当然遊星は地上へ真っ逆様に落ちるが、アキ達が慌てて何とかキャッチし、そのままIS学園へ直行するのだった。

疲労困憊により、1日安静で寝ることになり、アキが付き添うのだった。

後の遊星の話によると、千体の魔獣は遊星とモンスター達が全て退治したが、元の世界に戻れなくなった。

そこで、以前遊星が悪魔の牢獄から脱出した時と同じように、光を越える速度で空間を跳躍するアクセルシンクロで脱出したのだった。

また新たな伝説を作った遊星に、一夏達は遊星は化け物や悪魔などではなく、神様の生まれ変わりでは？　と思い始めたのだった。

だが、それを言うと、せっかく元に戻った遊星が、また頭のネジをぶっ飛ばしかねないので、一夏達は絶対にその事を口にしなかった。

第96話 禁断の交わり（前書き）

やってしまいました……。

（。▽。；）

龍亞×龍可ファンのみなさん、これで良かったのですかね？

ついでにライフ・ストリームとエンシエント・フェアリーもですが……。

皆さん、こんな愚かな作者をお許してください。

m（　　）m

第96話 禁断の交わり

市のISアリーナから帰った龍亞と龍可は学生寮の自室でシャワーを浴びて休んでいた。

「ああ……もう、ダメ……疲れたよお……」

龍亞はパジャマに着替えてベッドに横たわった。

龍可を悪魔から守るために誰よりも奮闘して、疲れてしまったのだ。

「龍亞、お疲れ様」

「うん。龍可もお疲れ」

それから数秒間の沈黙が続き、龍可は何故か緊張しながらその沈黙を破った。

「あ、あのね、龍亞に……お礼をしたいの」

「お礼？ ああ、悪魔から助けたこと？ 別にいらないよ」

「だ、だって、私はいつも龍亞に助けられてばかりで……」

「龍可を守ることが俺の使命なんだから今更お礼なんていいから」

龍亞は手を軽く振って龍可のお礼を断るが、龍可がそれを許さなかった。

「ダメエ!!」

ビクッ!?

龍可は龍亞を無理やり起こして顔を向けさせる。

「な、何!? 龍可、どうしたの!?!」

「龍亞、ちゃんと私からのお礼を貰って! 貰ってくれなきゃ許さないんだからね!!」

龍可は真剣な眼差しで龍亞をジッと見つめる。

「ううつ……」

立場的には兄の龍亞だが、こういうときの龍可には絶対に勝てないのだ。

龍亞はため息をつき、頷くしか道はなかった。

「わかったよ……それで、何をしてくれるの?」

「え、えっと……龍亞、目を閉じてくれる? 私がいいと言うまで開いちゃダメだからね!」

「うん、わかったよ」

龍亞は取りあえず言われた通りに眼を閉じた。

（龍可は一体何をしてくれるんだ?）

そう頭の中で考えていると……。

チュツ……。

龍亞の唇に柔らかい物が優しく触れた。

（え……？）

思わず龍亞は目を開けてしまった。

目の前には龍可の顔があり、龍可の唇と龍亞の唇が重ね合っていた。

（るるる、龍可あっ！？）

龍亞はパニックを起こしてしまうが、体が固まって動けなかった。

龍可はゆっくりと龍亞から顔と唇を離して頬が朱色に染まった。

「もう……開けちゃダメって言ったのに……」

龍可の吐息が甘くなっており、龍亞は更にドキドキする。

「な、な、何で、龍可……」

「いけない事だとは分かっているよ……私達は双子の兄妹だから。でもね……」

龍可は龍亞に抱きついた。

「もう、我慢が出来ないの。私はね、龍亞を……お兄ちゃんとしてじゃなく、男の子として、異性として大好きなの……」

龍可の告白に龍亞は極度の混乱に陥ってしまう。

（な、何で俺はこんなにドキドキしてるんだよ……龍可は俺の一番大切な妹だぞ！？ しかも双子！ それに、龍可を守ることが俺の使命だ！ ここは断るべきなのに……）

目の前の自分と同じ顔をしている妹の龍可に龍亞はとても愛おしさを感じる。

いけないことだとは龍亞自身もわかっている。

だが、龍亞の心も歯止めが効かなくなっている。

「る、龍可あつ！」

「えっ、きゃっ!?!」

龍亞は龍可をベッドに押し倒した。

そして、龍亞は緊張しながら自分の思いを打ち明けた。

「おおお、俺も龍可を妹じゃなくて、女の子として大好きだあ！！」

「龍亞……！」

龍可は龍亞の告白に嬉しさがこみ上げてきて、笑顔となる。

「だ、だから……龍可……」

「うん、いいよ……」

龍可は龍亞の言いたいことをすぐに理解し、パジャマのボタンを外していく。

「来て、龍亞の思いを私に頂戴……」

「龍可……大好きだよ」

龍亞は龍可の唇にキスをした。

そして、二人は許されない禁断の行為へと堕ちていき、秘密の恋人関係となったのだった。

一方、テーブルに置かれたホープ・ヒーローとフェアリー・ガーデンからライフ・ストリーム・ドラゴンとエンシェント・フェアリー・ドラゴンがこっそり覗いていた。

《姉ちゃん、どうしよう……》

自分のマスター達の禁断の愛に、ライフ・ストリーム・ドラゴンは姉のエンシェント・フェアリー・ドラゴンに尋ねる。

《私達にはどうすることも出来ません。龍可と龍亞は純粋な愛でお互いを想い合っているのです。それを無理やり引き裂くことは出来ません》

《だよな……まあ、色々問題が起きて危なくなったら精霊世界に連れて行けばいいんだし》

《そうですね。私達は見守ることしか出来ませんから……》

龍亞と龍可の邪魔をしないように精霊世界へ行った。

《……なあ、姉ちゃん》

《何ですか？》

《龍亞と龍可に習って俺達も……》

《はい？ ……お、お待ちなさい！ ライフ・ストリーム、何をするつもりですか！？》

ライフ・ストリーム・ドラゴンはエンシェント・フェアリー・ドラゴンを押し倒した。

《大好きだぜ、姉ちゃん……》

シグナーの竜とマスターはとても深い絆で結ばれており、それ故に性格もよく似ている。

つまり、ライフ・ストリーム・ドラゴン今の龍亞の影響を受けているのである。

《ま、待ちなさい！ 私は精霊世界を治める王で……あなたの事はもちろん心から愛していますが……》

エンシェント・フェアリー・ドラゴンも龍可の影響を受けているが、何とも思いとどまっている。

しかし、それすらも時間の問題である。

《もう我慢できない。何千年も待ったんだ……俺は姉ちゃんを……エンシェント・フェアリーと今すぐに交わる》

ライフ・ストリーム・ドラゴンはエンシェント・フェアリー・ドラゴンの首を甘噛みする。

《ひゃあん！ だ、ダメです……い、今なら間に合います、止めなさい——ああん！》

《もう止められないぜ……エンシェント・フェアリー。お前も俺と

一緒に堕ちてしまえ……》

《あん……ダメです、ライフ・ストリーム……》

ライフ・ストリーム・ドラゴンとエンシェント・フェアリー・ドラゴンもマスターと同じく禁断の愛に目覚めてしまったのだった。

第97話 一夏の誕生日（前書き）

キャノンボール・ファスト編は次回で終了となります。

そして、キャラクター人気ランキングの投票期間が後5日に迫ったので、まだ投票してない方は是非投票をお願いします。

m () m

そして、投票が終了し、私、天道を司会と、ゲストに遊星と一夏と
籌ちゃんを迎えた、キャラクター人気ランキング小説を7月以内に
投稿します。

第97話 一夏の誕生日

夕方の五時、織斑家にて一夏の誕生日会が始まった。

メンバーはいつもの五人娘の箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ。

それに蘭と、一夏の男友達の五反田弾に御手洗数馬。

生徒会メンバーの楯無と本音は、本来なら行く予定は無かったのだが、今回は虚の付き添いである。

その虚の目的は一夏の誕生日を祝うではなく、ある人物――弾と会うためである。

更には新聞部のエース・黛薫子までいるという大人数であり、リビングはパンク寸前だった。

チーム5D'sのメンバーも参加する予定だったのだが、遊星が疲労困憊で倒れてしまったので、急遽キャンセルした。

そして、セシリア達は一夏に用意したプレゼントを渡す。

蘭は手作りケーキ、鈴音は手作りラーメン、セシリアは高級ティセット、シャルロットは先日一夏とデートした時に一緒に選んだ腕時計、ラウラは実践用のナイフをプレゼントする。

すると、誕生日を荒らす小さな生き物が暴れていた。

《ギャオオオオオウ!!》

それは……巨大な体格からかなり小さくなった天鈴だった。

「うわっ!? ちょっと、鈴! この暴れ龍を止めてくれ!!」

天鈴は誕生日の主役である一夏に噛みつかうとする。

「ま、待ちなさいってば、天鈴! ほら、この酢豚を食べなさい!」

《グアッ? ギャオッ♪》

鈴音は酢豚を天鈴に出すと、天鈴は喜んで食べ始めた。

「全くコイツは……」

鈴音のスピリットシンクロフォルムの待機状態の『疾風天鈴』ジーフォンテイエンリンは手のひらサイズにまで超小型化した天鈴である。

ちなみに今の姿の天鈴は鈴音の指に巻き付いて指輪になることができるのだ。

「あらあら、可愛いじゃありませんか」

「何言ってるのよ! セシリアのそれの方がよっぽどいいわよ!!」

鈴音はセシリアの胸の辺りにはあるキラキラと光る物を指さす。

セシリアのスピリットシンクロフォルムの待機状態の『ジェムハート』は数多の大きな宝石が散りばめられたブローチである。

「あら？ この美しいブローチは英国貴族の私にこそ相應しいのですわよ！」

「豚に真珠ってことわざを知っている？」

「何ですって！？ 鈴さんこそ、その素晴らしい龍には相應しくありません！ 宝の持ち腐れですわ！」

「余計なお世話よ！ ちゃんとドラグニティ達にコイツを頼まれたんだから！」

「私だってジェムナイトの皆さんから託されたんですよ！」

「いい加減にしないか、二人共！！今日は一夏の誕生日なんだぞ！！！」

箒は怒りの一声に、セシリアと鈴音は言い争いがピタリと止まる。

「「ごめんなさい（ですわ）……」」

すぐにセシリアと鈴音は深く頭を下げて謝罪する。

「全く……ゴホン。では、一夏。私からの誕生日プレゼントだ」

箒はそう言って袋を一夏に渡した。

そこそこ大きなそれは、中に包み紙が見えた。

「箒、これって？」

「開けてみる」

言われるまま、袋から取り出して、紙を広げていく。

「おお？ 着物だ！」

「い、いい布が実家にあったのでな。仕立ててもらった」

「おー！ 今度着てみるよ。サンキューな、箒！」

「う、うむ。喜んでくれて私も嬉しいぞ」

着物を誕生日に送るとはまさに箒らしい誕生日プレゼントだった。

しかも箒の持っている物とお揃いである。

すると、テーブルに置いたジャンク・シンクロンのチューナーズ・カードが光り、ジャンク・シンクロンが出てくる。

《一夏、待たせたな》

「ジャンクロン、遊星は大丈夫なのか？」

《疲れたただだから、取りあえず次の授業には出られそうだぜ》

「そうか、良かった」

《さて、一夏。俺からお前にプレゼントがあるんだが、受け取ってくれるな？》

「え？ ジャンクロンも用意してくれたのか？」

《まあな、ほれ》

ジャンク・シンクロンは懷から取り出した物を一夏の手置く。

「これ、ロケットペンダントか？」

それは白銀のロケットペンダントだった。

楕円形の形をし、蓋には雪の結晶の模様が描かれていて、一夏によく似合うデザインだった。

「もしかして、ジャンクロンが作ったのか？」

《ああ。俺もだてにチューナーモンスターをやってないからな、出先は器用なんだぜ》

「サンキュー、ジャンクロン。……あれ？ このロケット、まだ写真が入ってないのか？」

《勝手に入れるのとかと思ってな。写真はデブリから貰ってくれ》

「それもそうだな。デブリ、写真を見せてくれるか？」

《おう、任せな！》

デブリ・ドラゴンが現れ、大量の写真をどっからか持ってきた。

すると、その中の一枚が床に落ち、セシリアが拾う。

「あら？　何かしら、この写真は……えっ？」

写真を見たセシリアは目を手で擦って見直した。

「どうしたの？」

「何々？　僕にも見せてー」

「何かの衝撃写真だったのか？」

鈴音とシャルロットとラウラも気になり、写真を見る。

「「「……えっ？」」」

三人もセシリアと同じ反応をする。

「「「これって……箒（さん）？」」」

その写真は夏休みのお盆休みのお盆休みの週に箒の生家の篠ノ之神社の夏祭り
で、箒が神楽舞をした時の写真だった。

一般人が着ることを許されない純白の衣と袴の舞装束に、美しい金
の飾り。

写真からでも伝わる、箒に纏う神秘的な雰囲気と息を呑むような美
しさに四人は見とれてしまった。

「「「「箒（さん）！！」」」」

四人はすぐさま箒に駆け寄った。

「な、何だ！？ どうしたんだ、いきなり！？」

「まさか……箒さんにこんな素敵な特技があったなんて……素晴らしいですわ！」

「ただの剣道少女じゃなかったんだ……ううっ、同じ女として悔しいわ！」

「ねえねえ、これって何時やったの？ 今度僕達にも見せてよ！」

「これが……クラリッサが言ってた真の日本人女性、大和撫子なんだな！？ 頼む、その和の心を私にも教えてくれ！！」

珍しく尊敬の眼差しを向ける四人に箒は不気味に思えて仕方がなかった。

「一体何の話だ！？ 詳しく説明し——っ！！！？？」

セシリアが写真を見せた瞬間、箒の顔は硬直し、真っ赤に染まっていく。

「%∠∞#@\$√ ◎? ÷×∩≡% ▽☆♂♂♂ ♀♀♀# ∞★ ✂ △ ▬
！！！！」

そして恥ずかしさのあまり、この世に存在しない摩訶不思議な言葉を発した。

「箒さん、言葉が日本語から人外語になってますわよ!？」

セシリアの突っ込みでようやく箒は日本語に戻った。

「そっ、その写真はどこで拾った!？」

「デブリ・ドラゴンさんが落とした物ですわ」

「何!？ デブリ!!」

箒はすぐさま顔を鬼の形相に変え、デブリ・ドラゴンを呼び出す。

《んー、どうした?》

「この写真を撮ったのは貴様かあ!？」

《そうだよ。ちゃんと雪子おばさんから許可は貰ったよー》

「私から貰ってないだろ!？」

《細かい事は気にするなよ。ところでみんな、この写真の元の映像があるけど見るかー?》

デブリ・ドラゴンは箒の神楽舞の映像をDVDに残しておき、それを取り出した。

「「「是非お願いします!」「」「」

「止めろおおおおおおおおおおおおっ!!!」

箒はデブリ・ドラゴンからそれを奪い取るために襲いかかるが、それをひよいとかわして一夏の後ろに隠れる。

《一夏、箒を押さえててくれ。これから神楽舞の上映会を始めるから》

「了解、任せろ！」

一夏は箒を後ろから抱きしめて動けなくした。

「一夏、離してくれ！ 今すぐに私の黒歴史を闇に葬らなければならぬのだ！！」

「黒歴史って大袈裟な……良いじゃん。箒の綺麗な一面をみんなに見せるぐらい」

《それじゃあ、再生するぞー》

「キャアアアアアア！ 頼むから本当に止めてくれええええっ！！」

箒の必死の願いも虚しく、テレビに繋がれたDVDプレイヤーで再生されてディスプレイに映像が映し出された。

『おおお~~~~っ！！！！』

今の日本では数える程しか行われていない神に捧げる神楽舞を始めてみるセシリア達は声を揃えて感心した。

普段の箒から考えられない美しく、神々しい姿を見れたセシリア達は満足したが、逆に箒は恥ずかしさのあまり、一夏の胸の中で泣いてしまったのだった。

その後セシリア達は必死に謝って箒の機嫌を直したのだった。

ちなみに、一夏がロケットペンダントに入れる写真は夏祭りの箒と二人っきりの写真にして大切そうに首にかけた。

第98話 謎の襲撃者（前書き）

今回から更識簪編スタートです。

やってきました原作最新刊の七巻！

特に箒ちゃんイベント盛りだくさんなので楽しみです！！

それから、ノクターンの遊アキ小説の感想をお願いします。

（―――；）

第98話 謎の襲撃者

「お、よかった。売り切れはないな」

一夏は自宅から最寄りの自動販売機で足りなくなったジュースを買いに来た。

誕生会の主役であるが、自分から志願したのだ。

（こんなもんか。さて、戻ろう）

人数分のジュースを購入すると、人影を見つける。

（なんだ……?）

人影は一夏に少しずつ近づいている。

「……………」

人影は少女だったが、見覚えのある顔をしている。

いや、一夏にとって見覚えがあるなんてものじゃない。

「ち、千冬姉……?」

十五、六歳ほどの少女だが、その顔は昔の千冬に異常に似ていた。

「いや」

少女が口を開く。

その顔にはうすら笑みを浮かべていて、千冬姉とは似ても似つかない。

「私はお前だ、織斑一夏」

「な、なに……？」

「今日は世話になったな」

「！？」 お前、もしかしてサイレント・ゼフィルスの――」

「そうだ」

一歩、一夏へと近づく少女。

「そして私の名前は――」

「織斑マドカ、だ」

（織斑……マドカ？ 聞いたことのない名前だが、どうして俺と同じ名字で……いや、そんなことより。なんでそんなに千冬姉に似ているんだ！？）

「私が私たるために……お前の命をもらう」

マドカが差し出したのは、鈍く光を放つハンドガンだった。

パァンッ！！

「なっ……？」

ハンドガンが発砲し、弾丸が一夏に真っ直ぐ向かう。

《ぐっ……》

しかし、一夏には当たらなかった。

「じゃ、ジャンクロン！？」

一夏を身を挺して弾丸から守ったのはジャンク・シンクロンだった。

弾丸はジャンク・シンクロンの胸部の装甲を貫いて内部に直撃してしまった。

ジャンク・シンクロンは痛みを耐えながら左手を振り上げて仲間を呼び寄せる。

《頼むぞ！》

現れたのは、ジャンク・シンクロンと最も仲の良い三体のモンスターである、スピード・ウォリアー、ボルト、ヘッジホッグ、ロード・ランナーである。

三体のモンスターは同時にマドカを攻撃を仕掛ける。

「ちっ……」

マドカはISを展開すると同時に三体のモンスターを吹き飛ばす。

《一夏！ 俺の右腰のレバーを引け！！》

ジャンク・シンクロンは弾丸による内部の損傷で、上手く右腕が動かせないのだ。

「わ、わかった！」

一夏はジャンク・シンクロンの右腰のレバーを思いっきり引っ張った。

《よし、行くぜ！》

ジャンク・シンクロンの体が光り、三つの星から輪となる。

そして、スピード・ウォリアー、ボルト・ヘッジホッグ、ロード・ランナーが輪の中に入り、五つの星になり、光の柱が現れる。

光の柱からスターダスト・ドラゴンがシンクロ召喚され、スターダスト・ドラゴンは長い尻尾でマドカを叩きつける。

《お前は……！？》

「やはり邪魔立てするか……」

叩きつけられたマドカはすぐに立ち上がり、ISで飛び去ろうとする。

《逃がすか！ シューティング・ソニック！！》

スターダスト・ドラゴンは白銀の閃光を放つが、それよりも早くマドカはISで空の彼方へ飛んでいった。

《逃げられたか……無事か、一夏》

「ああ。ジャンクロンとお前のお陰で助かったよ」

《それより、あいつは何者なんだ？ ジャンクロンの意識が教えてくれたが、織斑マドカと言う名前に千冬にそっくりの顔……》

「なあ……スターダスト、頼みがあるんだ」

《何だ？》

「織斑マドカの名前と千冬姉そっくりの顔はみんなには秘密にして

くれるか？」

《何故だ？》

「実は……千冬姉との暗黙の了解で家族の事は禁句なんだよ。だから……」

一夏の事情にスターダスト・ドラゴンは仕方ないという表情を浮かべてため息を付く。

《……わかった、約束する》

「悪いな……」

「一夏……！」

話が終わった直後、紅椿を纏った箒が飛んできた。

「箒！ どうして……」

「デブリ・ドラゴンがお前が狙われていると聞かされて飛んできたんだ！」

「そうか。だけど、心配するな。ジャンクロンとスターダストが守って——おわっ!？」

箒は紅椿を解除して一夏に抱きついた。

ギユウツと箒は一夏を強く抱きしめた。

「ほ、箒さん！　い、痛いです！　それに、色々当たって……」

「うっ、くっ、ひぐっ……」

「箒……？」

箒は一夏の胸の中で涙を流していた。

「よかった……一夏が、無事で……お前に何かあったら、私はもう生きていけない……」

箒は一夏を失うことを何よりも恐れるようになってしまったのだ。

「……ごめん。心配かけたな、箒……」

一夏は箒を優しく抱きしめ、頭を撫でてあやす。

《……ふっ》

スターダスト・ドラゴン小さく笑みを浮かべると、無数の星屑の光となってその場から消えた。

その後、ジュースを持って自宅に戻った一夏と箒はセシリア達に襲われたことを次の日まで秘密にした。

せっかく楽しんでいる誕生会に水を差さないためである。

そして、時間ギリギリまで誕生会を楽しみ、それぞれの帰路についてた。

ちなみに、箒は一夏が襲われたこともあってか、ずっと一夏からくっついて離れなかった。

IS学園の学生寮に戻ってもそれは変わらなかった。

「あの……箒さん。そろそろ離してくれますか？」

「嫌だ。今日は離れたくない」

まるで駄々をこねる子供みたいに一夏から離れようとしなない箒。

ずっと離れて無いので、さすがに一夏も限界に近づく。

「そ、その……俺も理性が危ないのですが……」

「私は……別に構わないぞ」

「えっ？」

箒は一夏から離れ、シャワールームに向かうと何かに着替える。

そして、数分後にシャワールームから出て来た箒に一夏は吹き出し、

鼻血が出そうになって鼻を手で押さえる。

「ぶっ!!!? ちょっと、箒ちゃん!?!」

「その……誕生日プレゼントは先ほど渡したが……もう一つ、恋人としてのプレゼントを一夏に渡したい……」

シャワールームから出て来た箒は、裸に長い白のリボンで体をラッピングした何とも刺激的な格好だった。

リボンは束が先日送ってきたコスプレ衣装の中に入っていた。

最初は何に使うかまったく分からなかったので、束に直接電話で聞いたところ、こういう使い方だと知った。

そして、誕生日で二人っきりになったこのナイスタイミングとしか言いようがないここで使用したのだ。

案の定、一夏は大興奮し、箒の次の言葉をギリギリまで待った。

「えっと、その……誕生日プレゼントは私だから、私を食べて……」

箒は顔を真っ赤にしながらもじもと可愛い仕草を見せて一夏に言う。

「ほ、箒い!!!」

「ひゃっ、やぁん!」

当然一夏も我慢出来なくなり、箒を抱き寄せてそのままベッドに押し倒す。

「ああ、もう！ 俺の箒はどうしてこうも可愛すぎるんだよ！！」

箒は微笑みながら両手を一夏の首に回す。

「一夏……私を食べて？」

「言われなくてもいただきます！」

「ふぁっ、んちゅ……くちゅん……」

一夏は箒の唇に激しいキスをし、そのまま朝まで愛しまくったのだ。
った。

おまけ。

《……なあ、デブリよ》

《何だ、ジャンクロン？》

《俺が身を挺して一夏を守ったのに、結局こんなオチかよ!?》

《言うな言うな。言っても意味がないし、虚しくなるだけだぞー》

《ちくしょう、バカップルが……》

《何だー? お前も嫁が欲しいのかー?》

《あんなの見せつけられたら嫁ぐらい欲しくもなるわ!》

《はいはい……そうですか》

第99話 因縁の対決、星と逆説の再戦（前書き）

タイトルでわかるように遊星とパラドックスが戦います。

デュエルではなく、ISですか……。

全然簪ちゃんを出せない……。

（つ、ん、）

第99話 因縁の対決、星と逆説の再戦

全校集会にて、新任の教師がIS学園に来たので、その紹介をする。その教師が壇上に上がると、女子生徒達はその姿に小さな悲鳴を上げていく。

しかし、たった一人だけは目を疑った。

新任の教師はマイクを手に取り、挨拶をする。

「私の名はパロドックス。IS学園で歴史の教師を勤める。よろしく頼む、麗しき少女達よ」

『きゃあああああああああーっ！！！！』

パロドックスのお世辞を混ぜた挨拶に少女生徒達はブルーノと同じく発狂する。

「またまたイケメン教師が我が学園に！！」

「奇抜な格好をしているけど、長身で引き締まっている肉体だから問題ないわ！　むしろ最高！！」

「もう、どうしたの今年は！？　カッコいい生徒にイケメン教師！ 私達の時代よ！！」

「今度こそ私が先生を頂くわ！」

パラドックスはかなりと言うか既に女子生徒達の人気者となっていた。

すると、パラドックスはある方向を向くとニヤリと笑いながらマイクで再び喋る。

「久しぶりだな、不動遊星」

「パラドックス……！」

「こうして話すのもあの時以来だな。そう……あの世界の運命と生死を賭けたデュエルを……！」

パラドックスはあの時の事を思い出させるように言った。

突然のパラドックスの言葉に周囲がざわざわと騒ぎ始める。

遊星は手を握りしめてパラドックスに向かって叫んだ。

「パラドックス！　何故貴様が此処にいる！？　目的は一体何だ！？」

「おやおや。私に随分恨みを持っているようだな」

「当たり前だ！ 貴様がスターダスト・ドラゴンを使って過去の世界でやってきたことを忘れたとは言わせない！！」

「くっくく……確かに私の大いなる実験でスターダスト・ドラゴンを利用したのは紛れもない事実。不動遊星、貴様が怒るのも無理はない……それなら」

パラドックスはポケットから金色と黒色に輝く懐中時計を取り出した。

「不動遊星、私達の過去の因縁を断ち切るために私ともう一度勝負しよう。だが今度はデュエルモンスターズではなく、この世界の戦いの力、インフィニット・ストラトスでだ！！」

その懐中時計はパラドックスのD・ホイールがISに進化した『パラダイムシフト』である。

そして、ISによる決闘を申し込まれた遊星が断るわけがなかった。

「良いだろう。今度こそ、お前と決着をつけてやる！！ 勝負だ、パラドックス！！！！」

「では、時間は本日の2時にISアリーナで。そこが私達の再戦の舞台だ！！」

こうして大勢の前で遊星とパラドックスの因縁の再戦の約束が交わされた。

波乱の全校集会が終わると、遊星は龍星の整備に取り掛かる。

一夏達は遊星とパラドックスとの因縁がすごく気になり、アキ達に聞いてみた。

アキ達は遊星とパラドックスの戦いを話した。

パラドックスが遊星のスターダスト・ドラゴンを奪い去り、過去の世界でスターダスト・ドラゴンを破壊の道具にし、デュエルモンスターズの生みの親で、世界に大きな影響を与えている『ペガサス・J・クロフォード』を抹殺して、未来の世界を変えようとした。

遊星は伝説のキング・オブ・デュエリストの『武藤遊戯』と『遊城十代』と共に世界を守るために、パラドックスとデュエルをした。

そして、あらゆる時代から最強カードを集めて作られた強大なデッキを使用するパラドックスとのデュエルに勝利し、世界を救ったのだ。

一夏達は過去の世界や、未来をかけた戦いにスケールの大きさに唖然とする。

「まあ、取りあえず遊星の因縁はわかった。ところで……あれは何だ？」

箒の指差す先で起きている出来事に全員首を傾げる

『さあ……？』

「そうだな……」

ため息を付くのも無理はない。

何故なら有り得ない光景がそこにあるからだ。

シュ！ シュツ！！

《うおおおおおおおおおっ！！！！》

バシッ！ バシィッ！！

《よし、なかなかいい調子だぞ！！》

訓練場でスターダスト・ドラゴンがスパークリングの練習をしてい

て、レッド・デーモンズ・ドラゴンがそれを相手をしている。

スターダスト・ドラゴンの鋭いスピードを放つ拳をレッド・デーモンズ・ドラゴンの強靱な両手で受け止めている。

《これほどの速くて鋭いパンチなら奴の顔面をクリーンヒットを狙えるぞ、スターダスト！！》

《はい！ 俺の練習に付き合ってくれてありがとうございます、コーチ！！》

スターダスト・ドラゴンは自分を別のカードに閉じ込め、破壊行為や殺人を無理やり行わせ、更には闇の鎧を纏わせて醜い姿にした憎きパラドックスの顔を自らの拳でぶん殴るためにレッド・デーモンズ・ドラゴンに協力してもらって練習をしている。

しかし、古代からの永遠のライバルであるはずのスターダスト・ドラゴンとレッド・デーモンズ・ドラゴンは、共にスパークリングの練習を続けていくうちに、まるでボクシングの師弟関係のような普通なら有り得ない感情に目覚めてしまった。

「何なんだ、これは……」

レッド・デーモンズ・ドラゴンのマスターであるジャックはこの何とも言えない微妙な感覚に戸惑うのだった。

《さあ、スターダストよ！ 今こそ過去の汚点を拭い去るために、俺の取って置きの必殺技であるアブソリュート・パワーフォースを伝授してやる！！》

《なっ!?! アブソリュート・パワーフォースを!?! よ、よろしいのですか? コーチ!?!》

《その代わり、この残された僅かな時間で、アブソリュート・パワーフォースを自分自身の技として進化させるんだ! それが必要条件だ!?!》

《わ、わかりました! コーチの期待に応えられるよう、パラドックスとの因縁に決着をつけるために必ずアブソリュート・パワーフォースを進化させます!?!》

《行くぞ、スターダスト!?!》

《はい、コーチ!?!》

こうしてスターダスト・ドラゴンとレッド・デーモンズ・ドラゴンはパラドックスの再戦の時間まで練習を重ねたのだった。

そして、2時となり、ISアリーナで龍星を起動させた遊星とパラダイムシフトを起動させたパラドックスが対峙している。

観客席も満員でこの一戦を待ち望んでいる。

「ウォリアーズ・フォルム、『スターダスト・ドラゴン』!!」

《よっしゃあ! 気合い充分。行くぜ、遊星!!》

遊星とスターダスト・ドラゴンは既にやる気満々である。

「Sin・フォルム、『Sin パラドクス・ドラゴン』!!」

パラドクスは罪と逆説を司る漆黒のシンクロモンスター、Sin
パラドクス・ドラゴンの姿となる。

「フィールド・クリエイト! 『Sin World』!!」

パラドクスを中心に、ISアリーナがSin Worldに包まれる。

「Sin Worldだと!?!」

「心配するな。このSin Worldで誰かが死ぬことはない。
さあ、始めよう!!」

「ああ! 来い、パラドクス!!」

遊星とパラドクスの因縁の対決が始まる。

パラドクスは最初から全力で遊星を潰しにかかる。

「バックアップ! 『Sin 青眼の白龍』! 『Sin 真紅眼
の黒龍』! 『Sin サイバー・エンド・ドラゴン』! 『Si

n レインボー・ドラゴン』！」

いきなり四体の強力なS i nモンスターを呼び出し、遊星の周りを囲んだ。

「さあ、この状況からお前はどうか潜り抜けるかな？」

「くっ……」

「喰らえ、滅びのバースト・ストリーム！ 黒炎弾！ エターナル・エヴォリュション・バースト！ オーバー・ザ・レインボー！」

S i nモンスターの同時攻撃が遊星とスターダスト・ドラゴンに襲いかかる。

第100話 因縁を断ち切る絆の一撃（前書き）

祝☆100話突破☆

、（≡▽≡）／

皆さんの応援のお陰でこの小説も100話を突破しました！

これからも私の小説をよろしくお願いします！

記念すべきこの話は、遊星とパラドックスの因縁の決着がつきます
！

第100話 因縁を断ち切る絆の一撃

強力なSinモンスター達の攻撃に遊星はいきなりピンチに陥る。

（こうなったら、ウォリアーズ・ファイナル・アタックで……）

遊星は龍星の最終兵器を発動しようとするが、龍星から五つの光の玉が現れる。

「何だ？」

五つの光の玉は形を成して巨大化し、Sinモンスターの同時攻撃から遊星を守った。

「何だと！？ まさか、あれは……」

パラドックスは龍星から現れたそれらに驚愕する。

遊星も驚き、呆然としながら呟いた。

「レッド・デーモンズ・ドラゴン、ブラック・ローズ・ドラゴン、ブラックフェザー・ドラゴン、エンシェント・フェアリー・ドラゴン、ライフ・ストリーム・ドラゴン……どうしてお前達が……？」

仲間達のシグナーの竜が龍星から現れて自分を守ったことに驚き、戸惑う遊星にレッド・デーモンズ・ドラゴンが答える。

《ジャック達がもしもの時のためにと、俺達を龍星の中に待機させたんだ。このSinモンスターは俺達が相手をする。スターダスト

と遊星はパラドックスと決着をつけろ!》

《コーチ、ありがとうございます!!》

「みんな、ありがとう!」

遊星とスターダスト・ドラゴンがパラドックスの元へ向かう。

その時、観客席にジャック達の姿が見え、遊星は左手でグットサインを見せる。

ジャック達もグットサインをしてそれに応える。

遊星がパラドックスの元に辿り着くと同時に、万全を期すためスターダスト・ドラゴンを強化させる。

「バスター・モード!」

星屑の光が集まり、スターダスト・ドラゴンに鎧が装着される。

「モード・チェンジ! 『スターダスト・ドラゴン／バスター』!」

「来い、不動遊星！ パラドクス・ランス！」

パラドックスはSin パラドクス・ドラゴンの力を宿した黒い槍を呼び出す。

「スターソード・バスター！」

遊星もスターソード・バスターを呼び出してパラドックスに切りかかる。

だが。

《うらあっ！！》

「なっ！？」

遊星の左腕が勝手に動き、拳がパラドックスの顔面を狙う。

「くっ！ はっ！！」

パラドックスはパラドクス・ランスの柄を上手く操り、遊星の拳を受け止めて一旦下がる。

「ふっ……不動遊星、私の顔を直接狙うとは……そんなに私が憎いか？」

パラドックスは遊星を睨みつける。

「いや、違う。今のは、スターダスト・ドラゴンが勝手に……」

《ちっ、そう簡単には殴らせてくれねえか》

スターダスト・ドラゴン／バスターの幻影が遊星の背後に現れ、パキポキと手の関節を鳴らす。

「スターダスト・ドラゴン……そんなに私の顔を殴りたいのか!？」

《当たり前だ! そう言うわけだからパラドックス。お前のその綺麗で腹が立つ顔を思いっ切り殴らせろ♪ そしたら過去の罪を許してやるから》

「待て、一発では済まない気が……」

《もちろん俺の気が済むまでだ。そうだな……最低でも俺の全力パンチを五発だな》

「私の頭蓋骨が完全に陥没してしまうだろ!？」

《気☆に☆す☆る☆な☆》

「気にするだろ!？」

（くっ、マズいぞ……このままだとスターダスト・ドラゴンに私の顔を歪ませられて二度と人に見せられないことに……）

パラドックスは自身が招いた種に若干の後悔を抱きながら大量の汗を流す。

遊星はスターソード・バスターに星の光を集める。

「アサルト・ソニック・バーン!!」

白銀の閃光が放たれ、パラドックスは急いでパラドクス・ランスに闇の力を集める。

「ルイン・ディストラクション!!」

パラドクス・ランスを投擲し、鋭いの闇の一閃をアサルト・ソニック・バーンにぶつけて大爆発を起こす。

だが、その大爆発の際にスターダスト・ドラゴン／バスターの鎧が破壊されてしまう。

「くっ、バスター・モードが……」

「今だ! 『Sin パラレル・ギア』!!」

パラドックスはギアで造られたチューナーモンスターを呼び出した。

《ギア〜♪》

「スターダスト・ドラゴンにSin パラレル・ギアをチューニン

グ！ 貴様のスターダスト・ドラゴンを再び闇に染めてやる！」

「何！？」

「新たな力を手にしたSin パラレル・ギアはあらゆるモンスターをSinモンスターに変えることが出来るのだ！ さあ、再び生まれ変わり、我が僕となれ、スターダスト・ドラゴン！！」

Sin パラレル・ギアから放たれる闇の波動により龍星のウォリアーズ・フォルムが強制的に解除され、龍星からスターダスト・ドラゴンが引き抜かれてしまう。

「スターダスト・ドラゴン！！」

《パラドックス！ 止めろおおおおおおおおっ！！》

スターダスト・ドラゴンの必死の叫び声も虚しく、Sin パラレル・ギアは二つの星から黒い二つの輪となってスターダスト・ドラゴンに纏う。

《くっ……また俺はみんなを傷つけてしまうのかよ……》

チューニングから逃れることの出来ない悔しさにスターダスト・ドラゴンは目を閉じてしまう。

《そうはさせるかよ！ 俺、チューニング！！》

少々幼い声が響くと、スターダスト・ドラゴンに八つの金色の輪が纏われる。

《これは……！？》

スターダスト・ドラゴンに纏う黒色の輪と金色の輪が互いにぶつかり合い、電撃に似た反応を出す。

そして、互いに拒絶反応が起き、スターダスト・ドラゴンから黒色の輪と金色の輪が外れてしまう。

「何！？ Sin パラレル・ギアのチューニングが阻止された！？」

《ギア……》

パラドックスは予想外の事態に驚き、黒色の輪から元に戻ったSin パラレル・ギアは目を回して気絶した。

そして、八つの金色の輪は元の姿へと戻る。

《ふう！ 間一髪、危なかったな……大丈夫か？ スターダスト！！》

《ライフ・ストリーム、お前が助けてくれたのか？》

八つの金色の輪の正体はライフ・ストリーム・ドラゴンだった。

シンクロチューナーモンスターであるライフ・ストリーム・ドラゴンは、Sin パラレル・ギアのチューニングを邪魔してスターダスト・ドラゴンのSin化を食い止めたのだ。

《助かった、ありがとう。それより、他のSinモンスターは？》

《ああ、あれを見ろよ》

ライフ・ストリーム・ドラゴンが示すと、四体のSinモンスターはブラック・ローズ・ドラゴンの棘の鞭に縛られて動けなくなっていた。

棘の鞭はかなり強靱で、引きちぎろうとすれば棘が体に突き刺さって体を傷つけてしまうという恐ろしい物だった。

五体のシグナーの竜は、ブラック・ローズ・ドラゴンの憎悪の棘を利用し、Sinモンスターの攻撃力を極限まで下げて縛ったのだ。

《うわぁ……》

何度もその身に棘の鞭の痛みを受けたスターダスト・ドラゴンはトラウマが蘇る。

《怖え……さすが俺の鬼畜黒薔薇さん》

《スターダスト、何か言ったかしら？》

突然背後にブラック・ローズ・ドラゴンが現れ、スターダスト・ド

ラゴンはかなりの棒読みで答える。

《ワタクシハナニモイツテオリマセンヨ》

「スターダスト！」

遊星、レッド・デーモンズ・ドラゴン、ブラックフェザー・ドラゴン、エンシェント・フェアリー・ドラゴンが集まる。

「馬鹿な……私の力がことごとく覆されるなんて……」

パラドックス目の前の現状にあの時のデュエルと同じく信じられないような表情を浮かべる。

「こうなったら……私の最強の力をらせてやる！ Sin・フォルム！ 『Sin トウルース・ドラゴン』！！」

Sin パラドックス・ドラゴンの進化形態であり、パラドックス最強のモンスターである矛盾を越えた真実を司る金色のドラゴンへ姿を変える。

「トウルース・ランス！」

金色の槍、トウルース・ランスを呼び出し、闇の力を吸収させる。

「不動遊星！ これで終わりにしよう！！」

「望むところだ！ お前との因縁をこの一撃に全てをかける！！」

その時、遊星のドラゴン・ヘッドの痣が輝きだし、背後に赤き竜が

現れる。

『―――！！』

「赤き竜……みんな、行くぜ！！」

《応！！》

赤き竜の痣が遊星の背中に集結し、最後の攻撃をする。

「エンシェント・フェアリー・ドラゴン！！」

エンシェント・フェアリー・ドラゴンは太陽の光を翼に吸収する。

「ライフ・ストリーム・ドラゴン！！」

ライフ・ストリーム・ドラゴンは生命の息吹きを翼に取り込む。

「ブラックフェザー・ドラゴン！！」

ブラックフェザー・ドラゴンは闇の力を白い翼に吸収させ、翼が黒色へと変色する。

「ブラック・ローズ・ドラゴン！！」

ブラック・ローズ・ドラゴンの体の黒薔薇が怪しく咲き乱れる。

「レッド・デーモンズ・ドラゴン！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの体に紅蓮の炎が纏われる。

「パラドックス！　これが俺達チーム5D'sの絆の力だ！　スターダスト・ドラゴン！！」

スターダスト・ドラゴンは宇宙から星の光を集めて一つにする。

六体のドラゴンによるドラゴン・ブレスが一つに混ざり合って巨大な真紅に輝く砲撃となる。

「レジェンダリー・オーバードライブ！！！！」

パラドックスはトゥールース・ランスを振り下ろす。

「喰らえ、フューチャー・ディストラクション！！！！」

トゥールース・ランスから吸収した闇の力を砲撃として放つ。

二つの砲撃が激突し、威力が均衡している。

これは先にどっちが力尽きるかの勝負だった。

しかし、遊星は諦めずに全身から力を出し尽くすように叫んだ。

「ウオオオオオオオオオオオオッ！！！！」

その時、遊星の体が金色に輝き出し、その輝きがシグナーの竜に力を与える。

それにより、レジェンダリー・オーバードライブの真紅の色が金色へ変わり、威力が倍增する。

均衡していた砲撃のバランスが一気に崩れ、パラドックスのフューチャー・ディストラクションを呑み込んだ。

「なっ、何い!？」

金色の砲撃はパラドックスを包み込むように攻撃する。

「私はまた敗北してしまうのかああああああっ!!」

Sin トウルース・ドラゴンのSin・フォルムが解除され、パラダイムシフトが通常形態となる。

そして、スターダスト・ドラゴンが右拳に星の光を集め、パラドックスの真上に飛んだ。

《スターライト・オーバー・フラッシュ!!》

右拳の星の閃光が一瞬輝いた直後、パラドックスは撃墜され、地面に叩き落とされる。

《……まあ、一発だけだがこれぐらいで許してやるか》

パラドックスは地面で気絶し、パラダイムシフトのシールドエネルギーがゼロとなる。

「……勝った」

遊星が呟くと、観客から拍手喝采と大声援が広がった。

過去の因縁の決着がひとまずついた遊星とパラドックスは、過去の出来事を水に流した。

しかし、根本的な性格や考え方から反りが合わないのか、度々衝突するのだった。

そして、遊星とパラドックスの衝突がIS学園の名物になるのだった。

番外編 キャラクター人気ランキングの結果発表！（前書き）

投票期間が終了したので早速キャラクター人気ランキングを執筆しました！

たくさんの投票、ありがとうございました！

番外編 キャラクター人気ランキングの結果発表！

天道「ではこれより、『IS ヘインフィニット・ストラトス』の絆を紡ぎ、運命を変える決闘者」のキャラクター人気ランキングの結果発表を開幕します！ それでは、ゲストの方をお呼びしたいと思います！」

遊星「不動遊星だ」

一夏「えっと、織斑一夏です」

箒「篠ノ之箒です」

天道「この小説の中心人物で、元ネタである遊戯王5D'sとISヘインフィニット・ストラトス」の主人公とメインヒロインに来てもらいました！ 皆さん、よろしくお願いします」

遊星「ああ。それにしても、まさかのクロスオーバー作品だな」

一夏「こっちは『メカ×美少女』ハイスピード学園バトルラブコメ、向こうはライディング・デュエルとシンクロモンスターが導入された新しい遊戯王。確かに世界観が違うよな」

箒「ちょうど二つのアニメの終わる時期が重なったからこの作品が生まれたらしいぞ」

天道「その通り。ふと、ISの形がジャンク・ウォリアーとかだったら面白そうだなと思い、友人と話し合っってこの作品が生まれたのです」

遊星「なるほどな。では、そろそろ始めよう」

天道「はい！ それでは、まずは第25位から第19位の発表です！」

第25位

『レッド・デーモンズ・ドラゴン』

第24位

『山田真耶』

第23位

『ブラック・ローズ・ドラゴン』

第22位

『ブラックフェザー・ドラゴン』

第21位

『更識楯無』

第20位

『鬼柳京介』

第19位

『オータム』

天道「この六人は投票数が同じなのでこうなりました」

遊星「まさか、鬼柳が入っていたとは……」

一夏「名前では何度か聞いたことあるけど、この小説には出てないよな？」

箒「ああ。会ってみたいものだな」

天道「それは難しい気が……次は第18位から第12位です」

第18位

『ラウラ・不動・ボーデヴィツヒ』

第17位

『セシリア・オルコット』

第16位

『スターダスト・ドラゴン』

第15位

『スクール』

第14位

『クロウ・ホーガン』

第13位

『織斑一夏』

第12位

『十六夜アキ』

天道「一気にメインキャラクターが出てきましたね……ちなみにラウラはこの小説では遊星の娘なので不動の名字を加えました」

遊星「アキは12位か……」

一夏「俺は13位か……微妙だな」

箒「何を言ってる。原作では『唐変木・オブ・唐変木ズ』と言われて多くの読者から嫌われていることに比べたら凄い進歩だろ」

天道「箒、厳しいですね。まあ、私も原作の一夏には殺意が沸いてますが……次は第11位から第10位です！」

第11位

『布仏本音』

第10位

『織斑マドカ』

天道「のほほんさんはともかく、織斑マドカには驚きです」

遊星「織斑マドカ？ 誰のことだ？」

一夏「それは……すいません、言えないです」

箒「一夏……」

天道「な、何だか不穏な空気になってきたので次に進みます！ 第9位です！」

第9位

『アポリア』

天道「はい、来ました！ 遊戯王5D's 終盤で多くの伝説を残したネタキャラにして絶望から希望を手に入れた男、アポリア！」

遊星「ネタって……本人は至って真面目なんだが……」

一夏「伝説って、アポリアは何をしたんだよ……」

箒「あの巨体から何をしたかなんて、想像しただけでも恐ろしいな……」

天道「アポリアさんは取りあえず置いておき、次は第8位です！」

第8位

『不動シャルロット』

天道「シャルロットもラウラと同じで不動の名字です。やっぱり原作ISでヒロインの中で一番の人気を誇るシャルロットが来ましたか……」

遊星「特にアニメで一気に人気者になったからな」

一夏「確かに五人のヒロインの中で一番の危険人物だからな……特に俺のアプローチが」

箒「うう、原作の私も頑張って欲しいところだ……」

天道「さて、シャルロットの人気を越える第7位から第5位です！」

第7位

『ライフ・ストリーム・ドラゴン』

第6位

『ブルーノ』

第5位

『エンシエント・フェアリー・ドラゴン』

天道「みんな大好きブルーノちゃんはともかく、ライフ・ストリーム・ドラゴンとエンシエント・フェアリー・ドラゴンの上位ランキングは驚きですね」

遊星「ブルーノは遊戯王5D、s本編で結局生き返らなかったらしいから……」

一夏「ライフ・ストリーム・ドラゴンって、フラグから数年経ってようやく登場したらしいな」

箒「遊戯王5D、sが終盤に入って視聴者も半分諦めていたらしいぞ」

天道「ライフ・ストリーム・ドラゴンが登場した時は涙が出てマジで感動しました！ 次は……私感動の第4位です！」

第4位

『篠ノ之箒』

天道「箒、上位ランクインおめでとうございます！」

遊星「凄いな……ISキャラクターで最上位だ」

一夏「凄くないか、箒！ ISのヒロインでトップだぞ！」

箒「あ、ありがとう……何だか不思議な気分だ……ところで天道、一つ聞きたいことがある」

天道「はい？ 何でしょうか？」

箒「何故私を一夏の相手に選んだのだ？」

天道「あー、それ？ 取りあえず、箒は何でそう思ったの？」

箒「こっちの小説では、原作と違って一夏と私がその、バカップル夫婦と言われるぐらいまで恋人同士になったのは私にとっても感無量だ。ノクターンノベルスにも私達の初夜も書いてくれたし……」

天道「はいはい。それで？」

箒「その……悲しいことに、原作のISではヒロインの中で一番人氣が無いではないか。わざわざ私を選ばなくても、人氣があるシャルロットとかラウラをこの小説のヒロインにすれば良かったんじゃないかと思って……」

天道「……一夏」

一夏「ん？ 何だ？」

天道「今すぐ箒とディープなキスをしてください」

一夏「了解♪」

箒「ま、待て！ 何故そうなる！？ 一夏も何でそんなに乗り気なんだ！？」

一夏「だって、作者って言えば、神様みたいなもんだろ？ 逆らえる訳ないだろ？」

箒「た、確かにそうだが！」

一夏「それじゃあ、箒。頂きます♪ んむっ……」

箒「ふあっ、やあん……んちゅ、一夏あ……」

※しばらくお待ちください。

数分後、箒は一夏の胸の中で抱き締められていた。

箒「ううっ……」

一夏「ほらほら、泣くなって。よしよし」

天道「うむ。良いものを生で見させて貰いました。私は満足です♪」

箒「天道、後で覚えてろ……」

天道「はっはっは！ 箒、ノクターンノベルスでしか書けないような事を命令させましょうか？ 例えば――」

箒「もう止めてくれ！！」

天道「まあ、箒弄りはこれぐらいにして、何故箒をヒロインにしたのか理由を話しますか」

箒「た、頼む……」

天道「結論から言うと、アニメスタート時から一夏の恋人、嫁、妻は箒しかいないと直感で感じたからです！」

箒「直感！？」

天道「更に言うと、私自身の一番好きなタイプが大和撫子風の日本女子だからです！」

一夏「箒は剣道少女で篠ノ之神社の巫女だからな。確かに大和撫子風の日本女子だな」

天道「そして私は、物語の主人公とメインヒロインのイチャラブが大好物なのです！」

箒「イチャラブって……作者は男だよな？」

天道「そうですねー。私はイチャラブ小説を片手にブラックコーヒーを楽しむ男だ！」

一夏「じゃあ、俺と箒のイチャラブを書いている時もブラックコー

ヒーを飲んでいるのか？」

天道「当たり前です！ イチャラブ小説こそ私の最高の糖分！！」

箒「もうわかった……天道がそれほど私と一夏の仲を気に入っているのはわかったから、次のランキングに行こう」

一夏「あれ？ そう言えば、遊星は？」

遊星「ああ、すまない。少しアキの所に行ってた。二人の行為を見ていたら我慢出来なくなってたな」

箒「キスをしに行ったのか……遊星とアキも作者のイチャラブ被害者か……」

天道「その通り！ それでは、次は第3位から第2位です！！」

第3位

『龍可』

第2位

『龍亞』

天道「遊戯王5D・Sの双子ちゃんが最上位にランクインです！」

遊星「龍亞と龍可か……いつも一緒にいてお似合いだからな」

一夏「最近、多くの読者から支持を得て、龍亞×龍可が人気上昇中だからな」

箒「これも天道のイチャラブ被害者か……」

天道「特に第7位ランクインのライフ・ストリーム・ドラゴンの登場で龍亞君がシグナーになって逞しく成長しましたからね。遊戯王5D・Sのキャラクターの中で一番成長したのは龍亞君ですから」

遊星「そうだな。いつか、龍亞と己の全力を出してライディング・デュエルをするのが楽しみだな」

天道「そうですね。では、次はいよいよ栄冠の第1位の発表です！」

一夏「もうここまで来たらだいたい予想できるな」

箒「ああ、そうだな」

第1位

『不動遊星』

天道「遊星、ランキング第1位、おめでとうございます！」

一夏「おめでとう、遊星！」

箒「ぶっちぎりの1位らしいぞ」

遊星「ありがとう。何だか照れるな。こんな俺が1位なんて……」

天道「いやいや、そんな事はありませんよ。遊星は遊戯王シリーズの主人公の中で最高にカッコイイ男だと思っていますから！」

遊星「そうか、ありがとう。天道」

天道「それに私は今でも遊星デッキを愛用していますから」

遊星「そうなのか？」

天道「はい♪」

遊星「じゃあ、これからもずっとそのデッキを使ってくれるか？」

天道「もちろん！」

一夏「俺も遊星みたいな男になりたいな……」

箒「お前には一生無理だ」

一夏「そ、そんなぁ!？」

箒「一夏はそのままだいいんだ。私が幼い頃から愛している一夏には変わってほしくないからな……」

一夏「箒……」

天道「ああ、もう。私達を無視して勝手にイチヤイチャして……あ、そうだ!」

遊星「何か思いついたのか？」

天道「もうすぐ箒の誕生日である7月7日です。そこで……」

遊星「そこで？」

天道「記念小説として、一夏と箒の結婚式話を書こうと思います!」

一夏「……はい？」

箒「……え？」

遊星「ほう、結婚式か……良かったな、二人とも」

一夏「……ええええええええええええっ!?!?!」

箒「ま、待ってくれ!! 結婚式って、そんな……ま、まだ早すぎる! 心の準備が!!」

天道「あ、心配しなくても婚約年齢を満たしてなくても大丈夫な擬似結婚式だから♪」

一夏「ぎ、擬似……?」

箒「それってどういう……」

天道「でも、やることは殆ど一緒だから、楽しみにしててね♪」

一夏「くっ……」

箒「あう……」

天道「では、これにて『ISヘインフィニット・ストラトス』の絆を紡ぎ、運命を変える決闘者」のキャラクター人気ランキングを閉幕します。たくさんの投票、ありがとうございました!!」

番外編 キャラクター人気ランキングの結果発表！（後書き）

と言うわけで、もうすぐ篝ちゃんの誕生日ですので、記念小説を書きます。

皆さん、楽しみにしていってくださいね。

第101話 英雄に憧れる少女（前書き）

やっ と簪ちゃんを出せました……。

ラストにオリキャラを入れてみました。

これから少しずつオリジナル展開を加えていきます。

あんまりぶっ飛びませんけど。

第101話 英雄に憧れる少女

日曜日の穏やかな日。

一夏と箒は自室でゆっくり過ごしていた。

「一夏、痛くはないか？」

「ん……大丈夫。気持ち良い……」

箒が膝枕をして、一夏の耳掃除をしていた。

「箒の耳掻きも良いけど、膝枕が凄く良い……」

「そうか、心が落ち着くのか？」

「ああ、男は膝枕が好きな生き物なんだよ。特に俺の場合は未来の妻の膝枕をな」

「つ、妻って……」

「結婚しても膝枕をしてくれるんだろ？」

「あ、当たり前だ！ 夫に膝枕をしてあげるのも、妻の勤めだからな！」

「ありがとう、箒♪」

一夏は箒の方に向きを変えて、箒の腰に抱きついた。

「あんっ！　もう、一夏は甘えん坊だな……」

箒は微笑みながら一夏の頭を優しく撫でた。

この部屋にいるのは、バカップルを越えたバカップル夫婦である。

「全く、頭痛がするほどのラブラブっぷりね。一夏君と箒ちゃんは」

バカップル夫婦の熱気に当てられた楯無は扇子で仰ぐ。

「「た、楯無さん！？」」

一夏と箒は慌てながらすぐに離れた。

「ごめんね、鍵が開いてたから勝手に入っちゃったわ」

「何のようですか……？」

一夏はトラブルメーカーの異名を持つ楯無（精霊達が命名）がまた何か用事を持ってきたのではないかと警戒する。

すると、楯無は手を合わせて、いきなり拝まれる。

「単刀直入に言うわ。今度の全学年合同タッグマッチで、私の妹と組んで！」

「「はい!?!」」

何が何やらわからない状況だった。

同時刻。

「うーん、暇だな……」

龍亞はIS学園を気ままに散歩していた。

すると、龍亞はいつの間にか整備室に足を運んでいた。

「あれ? 誰がいる?」

そこには黙々とディスプレイとを睨みつけて何か作業をしている少女がいた。

龍亞は気になって整備室に入った。

「こんにちわ」

「っ!？」

その少女は眼鏡を掛けていて、セミロングの水色の髪をしていて誰かにそっくりだった。

「あ、ごめん。驚かせちゃった？」

「ううん、大丈夫……あなたは確か、副会長の……」

「そう、龍亞だよ」

すると、少女は目を細めて龍亞を見る。

「……お姉ちゃんの差し金？」

「は？ お姉ちゃん？ 差し金？」

龍亞は少女の行ってる意味がわからず、首を傾げる。

「隠さなくて良いよ……」

「いや、だから何のこと？」

「……何でここに来たの？」

「んー？ 暇だったから散歩していたんだ」

龍亞の純真無垢な表情に少女は少し困った表情をする。

「本当みたいだね。ごめんね、信じなくて……」

「うん、良いよ。ところで、お姉ちゃんの名前は？」

「私の名前は更識簪……」

「更識？　じゃあ、楯無姉ちゃんの妹？」

「そうだよ。似てないけどね……」

少女——簪は暗い表情を浮かべる。

龍亞は頬を手でかきながらディスプレイを見る。

「これって、ISの設計図？」

「そう。私の専用機。でも、完成してないの……」

「完成してない？」

「……………」

簪は龍亞の瞳をジッと見つめた。

龍亞の純粹で綺麗な金色の瞳に簪は心が揺らいでしまう。

（この子なら、話して良いかな……）

「実はね……」

簪は日本の代表候補生だが、一夏の『白式』の開発により、簪の専用機の開発が大幅に遅れてしまった。

その所為で今までの専用機関係の行事に参加できなかったのだ。

だから、自分で専用機を組み上げているのだ。

「簪姉ちゃんは、一夏兄ちゃんを恨んでいるの？」

「……うん」

「そっか……ねえ、簪姉ちゃん」

「何……？」

「俺、簪姉ちゃんの専用機を作るの手伝うよ！」

「え……？」

「一人で専用機を造るのは大変でしょ？ 俺のパワー・ツール・ドラゴンは他のISの武装を複製することが出来るから、絶対に役に立つから！」

「……いない」

簪は龍亞の善意を断った。

「えっ？　だってさ、一人じゃ限界もあるし……」

「いらないうって言ってるの！　私の事は放っておいて！！」

ビクッ！？

突然、大きな声を出して怒鳴る簪に龍亞は驚いてしまい、尻餅を付いてしまった。

龍亞は目頭に小さく涙を浮かべ、黙ったまま立ち上がる。

「ごめん、なさい……」

龍亞はトボトボとした足取りで整備室から出ようとする。

その後ろ姿に、簪は自然と体が動いてしまった。

「ま、待って！」

簪は龍亞の手を掴んだ。

「簪、姉ちゃん……？」

「ごめん、言い過ぎた……」

「ううん。俺もさ、余計な事を言ってごめんなさい。何だか、簪姉ちゃんが昔の遊星と似ていたがら、つい……」

龍亞の言葉に簪は少し驚いた。

遊星とは直接の関わりがないが、自分の姉に匹敵する、もしくはそれ以上の力を持っているのは知っている。

しかし、その遊星が今の自分と似ていると言われた事に驚きを隠せず、簀は龍亞から話を聞いてみたくなった。

「ねえ、もしよかったら、不動遊星の話を聞かしてくれるかな……？」

「あ、うん。良いよ」

龍亞はWRGPの準備期間での、もがき苦しんでいた時の遊星を簡潔に教えた。

遊星の高度なメカニック技術でもなかなか上手くいかない新しいニューエンジンの開発、強大な敵に立ち向かうための新たな戦術の模索。

それを何ヶ月も探し求めていたが、遊星一人では解決することができなかった。

「じゃあ、彼はどうしたの……？」

「遊星はブルーノと出会って、それを解決出来たんだ」

「ブルーノ先生と？」

「うん。それから、遊星はこう言ってたよ。『一人では、必ずいつか限界の壁がぶつかる。だけど、仲間達の絆があれば限界の壁を乗り越えることが出来る』。って」

「限界の、壁……」

簪は自分の手を見つめて思う。

（お姉ちゃんは天才で、一人で何でも出来る。それに比べて私は……）

「簪姉ちゃん？」

龍亞は簪の顔を横から覗き見ると、二人の顔の距離がかなり近くなつた。

「……っ！？」

簪は顔を朱色に染めて、後ろにバツと下がる。

（な、何で、私、こんなにドキドキしてるの……？ 相手は私より年下の子供よ！ そう、子供、子供……）

簪は何度も心の中で暗示をかけるようにして、自分を落ち着かせる。

（でも……）

そして、簪は自分らしくないことを口にする。

「あ、あの……龍亞君」

「何？」

「さっき、断っておいてなんだけど……気が変わったの。その、手伝ってくれないかな？」

「専用機を作るの？」

「う、うん……」

簪のその言葉に、龍亞は笑顔になって大きく頷く。

「わかった！　じゃあ、早速、簪姉ちゃんの専用機の設計図を見せて！　パワー・ツール・ドラゴンに協力してもらって出来るだけ早く完成させよう！」

龍亞がそう言うと、パワー・ツール・ドラゴンを精霊状態で呼び出して簪と一緒に作業に入った。

「「「……………」」」

龍亞と簪の二人の光景に啞然とする三人がいた。

「えっと、私は一夏君にお願いするはずだったんだけど……」

楯無は扇子を広げてパタパタと自分を仰ぐ。

取り敢えず楯無から話を聞いた一夏は責任を感じて、簪と組むことにしたのだった。

簪は一夏を他人に取られるみたいで嫌がっていたが、一夏と楯無の説得でようやく我慢した。

そして、一目簪の顔を見にこっそり楯無と一緒に来たのだ。

しかし……。

「どうやら龍亞に出番を取られたみたいですね……」

「つまり、一夏が行く必要は……」

一夏と簪の呟きに楯無は苦笑いを浮かべる。

「無いわね……ごめんね、一夏君」

「い、いえ……」

「簪は……大丈夫みたいね。二人共、お詫びがしたいから三時頃に生徒会室に来てくれる？ 美味しいケーキがあるの」

「それじゃあ、お言葉に甘えて……簪も良いだろ？」

「ああ、私も構わないぞ」

「うん。じゃあ、後でね」

三人はその場で解散し、一夏と箒は自室に戻る。

そして、箒は一夏の手を握った。

「一夏！」

「ん？ 何だ？」

「一夏。もうお前が更識簪と組む必要が無くなったから、お前に言いたいことがある。今度のタッグマッチの私のパートナーになってくれ！！」

箒は右手を差し出した。

一夏は優しく微笑むと、箒の前で跪いて箒の右手の甲にキスを落とした。

「はう！？」

「喜んで、我が姫君」

「う、うむ……」

箒は初めて手の甲にキスをされて顔が熱くなり、同時に念願の一夏とタッグマッチのパートナーになって胸が躍る。

次の日の朝。

空から三つの光が落ちてくる。

しかし、三つの光の内の一つが軌道を大きく外れ、IS学園に向かった。

光は地面に落ちる直前に速度がゆっくりとなり、そのまま地面に置かれた。

光が消えると、そこには可愛らしい黒髪の小さな少女が横たわっていた。

「んにゅ……」

少女はすやすやと眠っており、可愛い寝息をたてる。

「パパ……ママ……」

その少女はI S学園に新たな混乱を生む原因となるのだった……。

・

第102話 未来からの三人の来訪者（前書き）

遂に明かされます、謎のオリキヤラ。

その正体は如何に！？

何故か話の内容は甘々ですが（笑）

第102話 未来からの三人の来訪者

早朝、とあるビルの上を二人の少年と少女がいた。

「……いたか？」

少年は肩に刀を担いでビルの上から周囲を見渡している。

「いいえ、何処にも見当たりません」

少女は巫女装束を纏い、コンソールを操りながら空中投影ディスプレイを見つめる。

「この辺り一帯は捜し尽くした。残るは……」

「ええ、兄上。後、捜していないところは一カ所しかありません」

少女は少年を兄と呼んだ。

「そうか……これは運命なのかもしれないな」

「参りますか？」

「ああ」

二人はある場所を見つめる。

「「IS学園へ」」

朝、一夏はジャンク・シンクロンと一緒に教室に向かっていた。

箒はタッグマッチで一夏とパートナーになれて張り切っていて、早朝から授業ギリギリまで剣道部の朝稽古に出ていて、今はいない。

「箒、張り切りすぎて倒れなきゃいいけど……」

《大丈夫だろ。デブリ・ドラゴンもいるんだし》

「そうだな……もしもの時は無理矢理でも休ませるし」

《だよな……って、機皇兵がこっちに来ているぞ?》

「機皇兵？」

空から機皇兵ワイゼル・アイン、スキエル・アイン、グランエル・アイン、が降りてきた。

《✱☛》》↳◎★✕》》

機皇兵達の理解不能の言語をジャンク・シンクロンが通訳する。

《えっと、主が呼んでいますだと》

「アポリアが？」

《✱△＃□↑∈∧！》》

《それでは、レッツゴー！ だって》

「え？」

機皇兵達は三体で一夏を担ぎ、そのまま飛んでいく。

「うわっ、ちょっ、い、いきなり飛ぶなー！！」

《おーい、待てよー》

一夏の後をジャンク・シンクロンも後を追う。

それから一分もしない内にアポリアの所まで運ばれた。

「それで……アポリア、何の用だよ？」

「すまないな、手荒な真似をして。実は……」

アポリアが見せたのは地面に横たわっている少女だった。

「えっと……アポリアさん？　この子は？」

「朝ここを通ったらこの子が倒れていたのだ。迷子かと思い、あらゆるデータベースにアクセスし、この子の身元を見つけようとしたがどこにもデータが無かったのだ」

「それで、何で俺？」

「……この子の顔が一夏に似ていると思ったからな」

アポリアらしくないあまりにも単純過ぎる理由だった。

確かによく見ると、少女の顔は少し一夏に似ていたが、違う誰かにも似ていた。

「そ、そんな理由で!？」

「んう……ふみゆ……」

一夏の大声で少女が意識が目覚める。

むくつと起き上がり、目を両手で擦る。

「ふわぁ……んう？」

可愛らしい欠伸をして一夏を見つめる。

「えっと……」

一夏は優しく笑みを浮かべる。

そして少女はにっこりと笑い、とんでもないことを口にする。

「おはよう、パパ」

少女は一夏をまっすぐ見てそう言った。

「ああ、おはよう……パ、パ？」

一夏は口を開けたまま固まってしまった。

それを見たアポリアは機皇兵と共にその場から立ち去る。

「後は大丈夫そうだな。一夏、後は頼んだぞ」

《お、おい！ アポリア！？ 一夏も正気を取り戻せ！》

ジャンク・シンクロンは一夏の頭を軽く殴る。

しかし、一夏はあまり痛みを感じず、そのまま少女の頭を撫でた。

「えっと、俺と一緒に行くか？」

「うん！　ねえ、パパ。抱っこして〜」

少女は両手を広げて一夏にお願いする。

「あ、ああ。よいしょっと！」

一夏は少女を抱き上げると、少女は嬉しそうに一夏の首をギュッと抱き締めて、頬をすりすりさせる。

「えへへ〜♪　パパ、あったかい、いい匂い〜」

「そ、そうか……」

一夏は自分に目一杯甘えてくる少女に心が癒され、筈とは違う愛おしさに包まれる。

（うーん、何だか良いもんだな……幸せな気分になる）

そして、一夏はそのまま少女を教室に連れて行った。

教室に向かうと、当然のようにクラスメイト達は度肝を抜かれて驚いた。

一夏に似ている幼い少女の登場に一年一組だけでなく、噂を聞きつ

けた他のクラスからも一目見ようと続々集まって来た。

ちなみに、少女は椅子に座っている一夏の膝の上で鼻歌を歌いながら上機嫌だった。

「一夏さん、その子は一体何なんですか？」

「ちゃーんと説明してもらわよ？」

「答え次第じゃ、一夏を蜂の巣にするからね」

「その前に教官と共にその腐った性根を叩き直してやる」

セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラは一夏を睨みつける。

「ちょっと待て、落ち着くんだ！ 子供の目の前で恐ろしい殺気を放つな！」

一夏が慌てると、少女は首を傾げながら一夏に尋ねる。

「ねー、パパ。どうしてみんなは私とパパを見て怒っているのー？」

「そ、それは……まあ、子供は知らない方がいいぞ」

一夏はもう一度少女の頭を撫でる。

「パパ大好き〜♪」

一夏と少女から放たれるほんわかと癒される空間に、セシリア達も心が癒されてしまった。

「か、可愛いですわ」

「な、何よあれ、あんな可愛い生き物がいたの？」

「はう、心が癒されるよ」

「わ、私の膝に乗せたい！ 頭を撫で撫でしたい！ い、一夏！ 私と代われ！！」

セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラは少女の可愛さの虜になってしまった。

少し離れていた遊星とアキも少女の可愛さに癒されていた。

「ね、ねえ、遊星……」

「何だ、アキ？」

「わ、私もね、あんな子供が欲しいな……」

体をもじもじして、遊星を上目遣いで見つめる。

遊星は頬を朱色に染め、アキから視線を外してボソツと呟いた。

「俺は出来るだけ沢山欲しいな……その、アキの体が保つまで……」

「あらあら、遊星ったら欲張りね。それじゃあ、お互いに頑張らなきゃね」

アキは遊星に抱きついた。

しかし、そんな様々な雰囲気を出す教室を一気に恐怖のどん底へ突き落とされる。

「「一夏……」」

ビクッ?!?!?

教室にゆっくりと堂々と入ってきたのは、鬼神のオーラを身に纏った箒と千冬だった。

「一夏、その子は一体誰の子だ……?」

「私が見てない所で、誰に仕込んだ……?」

I S 学園最強タッグの殺気により一夏だけではなく、生徒達全員が戦慄する。

しかし、1人だけ戦慄してない者がいた。

少女は一夏の膝から降りてテクテクと箒の元へ走った。

そして、

「ママ〜♪」

少女は箒に胸に飛び込んで抱き付いた

「……え？」

箒は反射的に少女を両腕で優しく抱き締めた。

少女は箒の胸を両手で触りながら胸の谷間に顔を埋める。

「ママの胸、大きくて柔らか〜い〜♪」

自分の胸を少女に弄ばれている箒だが、箒自身は悪い気がしなかった。

寧ろ一夏と同じく愛おしさに包まれた。

（何だろう……不思議だな。凄くこの子が愛おしい……）

箒は目を閉じて少女を抱き締めた。

それは誰が見ても母と娘が抱擁している光景だった。

隣にいる千冬も困り果てながら少女の顔を見る。

（よく見ればこの子は幼い頃の一夏と箒に似ているな。まるで、二人を一つに合わせたような……）

「一体、この子は何者なんだ……？」

千冬が呟いた一言。

そして、それに答える者がいた。

「その子は織斑一夏と織斑箒の娘だよ、千冬姉」

『えっ？』

全員は声のする方に一斉に振り向いた。

いつの間にか、窓から侵入したと思われる少年少女が立っていた。

少年が一步前に出て口を開いた。

「『織斑 星奈^{せいな}』。それがその子の名前だよ」

「「星、奈……？」」

一夏、箒、千冬は小さき少女——星奈の名前を口に出して復唱する。
そして、二人の男女は自分の名前を名乗る。

「俺は『織斑 月夜^{つくよ}』」

少年は、髪が少し長めで、顔に額から左の頬に向かった刃物傷がある以外は完全に一夏にそっくりだった。

「私は『織斑 風音^{かざね}』です」

少女は、顔だけでなく長い黒髪やスタイル抜群の身体など、見た目そのものが箒そっくりで、唯一違うのは優しい目の形だけだった。

月夜は持っている刀でトントンと肩を叩きながら話す。

「ま、一言で言えば、俺達は未来から来たあなた達の子供だ。取り
敢えずよろしくな、親父、お袋。それから千冬姉」

それに対して、風音は礼儀正しく一礼をしながら謝罪する。

「突然の来訪を申し訳ありません。父様、母様、千冬叔母様……」

IS学園に現れた一夏と箒の子どもと名乗る三人の少年少女。

月夜と風音、そして、星奈。

三人は、未来に訪れる余りにも残酷な運命を切り裂く為にこの世界
に訪れたのだ。

第103話 未来の世界を救う希望（前書き）

さて、月夜達織斑三兄妹が過去の世界に来た理由が明らかになります。

月夜は私なりに格好良くしたつもりですが、ちょっと歪ませました（笑）

彼の好きな人はまさかのあの人です（笑）

第103話 未来の世界を救う希望

月夜は額の傷を指で触れながら千冬の方を向いて話す。

「千冬姉、悪いけど、どこか静かに話せる場を用意してくれないか？
親父と不動遊星に話があるんだ」

「……良いだろう。だが、私も聞かせてもらおうぞ」

月夜は傷から指を離し、にっこりと笑みをする。

「もちろん。さてと、その前に……」

月夜は箒に近づき、星奈の頭を撫でる。

「星奈、大丈夫だったか？」

「うん。月夜お兄ちゃん、おはよう！」

星奈は自分の元気をアピールするように手を挙げる。

「おはよう。風音、お袋と一緒に星奈を見ていてくれるか？」

風音は近づきながらゆっくりと頷く。

「わかりました。では、父様達のお話をお願いします」

「ああ。それじゃあ、お袋。星奈を頼むぜ」

「わ、わかった。任せろ」

箒は一夏に似ている月夜にお袋と呼ばれ、少し戸惑う。

「それじゃあ、行きますかな」

月夜はそう言うのと、千冬が用意した会議室に向かった。

会議室には一夏、遊星、千冬、そして月夜が座っていた。

「さてと……まずはどっから話そうか……」

月夜が少し悩んでいると千冬の鋭い声突き刺す。

「まずは、お前が未来から来た一夏と箒の息子という証拠を見せろ」

「……まあ、当然の質問だな。それじゃあ、ほれ」

月夜は懐から写真を数枚取り出して見せる。

そこは、篠ノ之神社で撮った写真で、月夜と風音と星奈だけではなく、今より成長して大人になった一夏と箒の姿が写っていた。

「日付も数十年も先だ……」

「なるほどな。これは信じるしかないな」

一夏は驚きを通り越して呆然とするが、遊星は特に驚いた様子もなく、冷静だった。

「じゃあ、どうして俺達が過去であるこの世界に来たのか話すぜ」

一夏達は息を呑み込んで月夜の言葉を待った。

「一言で言うなら、俺達は破滅の未来を変えるために、その元凶である『三幻魔』を破壊しに来た」

「「!!?」」

一夏と千冬は耳を疑い、一瞬言葉を失ったが、遊星だけは違った。

「三幻魔、だと……?」

「知っているのか?」

月夜は目を細めて遊星を見る。

「三幻魔は俺達の世界……デュエルモンスターズ界に存在すると言われた、邪悪な精霊の力を秘めた三枚のカードだ。噂によれば、持ち主に永遠の命を与えるらしい。だが、三幻魔のカードは行方不明と聞いたことがある……」

「その三幻魔のカードが今、この世界に存在している」

「何だと!?!」

月夜の口から話される事実、遊星は椅子から勢い良く立ち上がった。

「そして、三幻魔のカードは女帝『アルミサエル』の手にある」

「『アルミサエル?』」

「大昔に死んだ名も無き女だが、三幻魔の力で復活した。そして……俺達の世界から更に数年後の未来に、奴は世界を滅ぼすんだ」

「『なっ!?!?』」

「驚くのも無理はない。実際に未来に行った俺だって驚いたんだ」

月夜は用意された水を飲む。

「……君はどうやって過去や未来に行く術を手に入れたんだ?」

遊星の質問に、月夜は立ち上がると、真紅の色をしたガントレットを見せる

「『紅月』くれないのつき」

一瞬光が月夜を包み、真紅のISが装着される。

「これが、未来の束姉が造った『第七世代型』ISだ」

「何か、装甲の形が紅椿に似ているな……」

一夏の言うとおり、紅月の装甲の形が紅椿と全部とは言わないが、そっくりだった。

「ああ。この紅月はお袋の紅椿のコアから造られたんだぜ」

「そうなのか!？」

「そして、第七世代型ISの能力は『超光速』。光速を更に越える光の速さで動くことが出来る。超光速の能力を極めれば、空間跳躍や、時間跳躍も可能になる。ま、俺しか使えないけどな」

「束は何て物を造ったんだ……」

「俺は改めて束義姉さんの天才的頭脳に感服しました……」

第四世代型を遥かに凌駕する第七世代型の性能に驚愕する一夏と千冬。

「……俺は、束姉と一緒に未来を救う手立てを考えた」

突然、月夜の声音が低くなり、緊張感が走った。

「過去、未来、平行世界、俺はあらゆる世界に飛び、未来を救うあらゆる可能性を探し出した。だけど、俺達の世界だけじゃなく、どの平行世界もアルミサエルと三幻魔によって未来は滅ぼされた」

そして、月夜は遊星を見る。

「……たった一つの世界を除いて」

「どういうことだ？」

「不動遊星。一言で言えば、あなたは異世界から来た住人。この世界にとっては異端的存在だ。だけど、その存在が未来と平行世界を救う唯一の希望なんだ！」

月夜は拳を握りしめて、話す声に力が入る。

「他の平行世界では存在しないあなたはこの世界に大きな影響を与えている。精霊を操る力、第零世代型IS、シンクロフォルム、スピリットシンクロフォルム……それは、アルミサエルと三幻魔に十分対抗できる大きな力だ！」

「俺の異端的存在がこの世界を救う、か……」

「三幻魔の力がまだ覚醒していないこの時代で叩くしかないんだ。俺は……俺の大切なものと未来の世界を守りたいんだ！ 頼む、協力してくれ！！」

月夜は深く頭を下げて頼み込む。

遊星は月夜の元へ行き、肩をポンと叩く。

「……顔を上げてくれ、月夜。君の強い思いはしっかりと俺の心に届いた」

月夜は頭を上げて遊星の顔を伺う。

「じゃあ……」

「ああ、俺は全力で月夜の協力をする」

「あ、ありがとう！」

「ちょっと待てよ！ 俺を忘れるな！」

一夏が慌てて名乗りを上げる。

「親父……」

「その、何だ。俺と筈の未来の息子が戦うって言うのに、父親の俺が戦わないわけにはいかないだろう？ もちろん俺も戦うぜ」

一夏は月夜の頭を撫でる。

すると、月夜は心の奥底から嬉しさがこみ上げてくる。

「……やっぱり、親父は変わらないな」

「ん？」

「な、何でもねえ！　ありがとうな、親父！」

「おう！　って、親父は止めてくれるか……？」

自分とほぼ同年齢の未来の息子に親父と言われて、若干抵抗がある一夏だった。

「無理。俺にとっては過去の親父でも、親父は親父。呼び方を変える気はないぜ」

しかし、あっさり月夜に拒否される。

すると、千冬は携帯で誰かと話し、話し終わると月夜の方を向く。

「月夜。上層部と話は付けた。明日から風音と一緒にI S学園に入れ。部屋も用意した」

「おっ、さすがは千冬姉！　相変わらずやるねえ！」

「織斑先生だ。呼ばなかったら未来の甥と言っても、容赦なく制裁を加えるぞ」

「えー？　千冬姉を先生って呼ぶのは嫌だから、『師匠』って呼ぶぜ」

「何故師匠なんだ！？」

「未来の世界で俺と千冬姉は叔母と甥だけじゃなく、師弟関係なん

だよ」

「そうなのか……？」

「そっ！ そんなじゃあ明日から頼むぜ、千冬師匠！」

「ああ……って、そう簡単に私が了解すると思ったか！？」

千冬はどっからかお馴染みの凶器である出席簿を取り出す。

「まさか、あれがIS学園に名高い伝説の出席簿アタックか！？
親父、遊星、逃げるぞ！！」

月夜はすぐに会議室を飛び出し、巻き添えを喰らいたくない一夏と
遊星もその後が続く。

「まったく……」

残された千冬は出席簿で軽く肩を叩き、テーブルに置かれた月夜が
持ってきた写真を見る。

「月夜、風音、星奈……ふふっ、可愛い甥と姪だな」

千冬は微笑みながら写真を見る。

しかし、ある一枚の写真を見た瞬間、千冬は氷のように固まった。

それは、月夜とその叔母である未来の束とのツーショット写真だったが、一つだけ問題があった。

「……束の見た目が今と全く変わってないのは何故だ？」

少なくとも、4、50は過ぎている束の年齢だが、見た目が今と全く変わっていなかった。

むしろ、今より若干若く見える。

「束、未来のお前は何をしたんだ……？」

千冬の心配の種が増え、頭が痛くなったが、実はもう一つ問題があった。

それは……月夜が誰よりも好意を抱いている女性。

その相手は後に知ることとなり、千冬は更に頭を悩ませるのだった。

第104話 織斑三兄妹（前書き）

月夜、風音、星奈が加わった一夏達の日々が始まります。

そして月夜の好きな人が明らかになります（笑）

※7月7日の午前0時に箒ちゃん誕生日記念小説を投稿します。

第104話 織斑三兄妹

未来から一夏と箒の子ども達が訪れた翌朝。

「ん……もう、朝か……」

箒がまず目を覚まし、目の前にはまだ夢の中である一夏の顔がある。

そして、もう一つ。

「ふにゅ……」

一夏と箒の間には星奈が幸せそうに眠りについて、箒の寝間着を両手でしがみついている。

昨日の夜、星奈が一夏と箒と一緒に寝たいと言い出して、一つのベッドに三人で寝たのだ。

箒は人差し指でお餅のように柔らかい星奈の頬を突つつく。

「ん……むう……」

「やっぱり、可愛いな……」

まだ会って1日も経ってないが、箒の子ども達に対する母性本能が全開である。

箒は携帯電話を持ってきて、撮影モードで一夏と星奈の写真を撮る。

「よし。私ながら良い出来だ」

そのままその写真を待ち受け画面にし、ベッドから降りて制服に着替え始める。

それから少し時間が経ち、一夏と星奈も目を覚ます。

「ふわぁ〜……星奈、眠れたか……?」

「んう……眠れた……ねえ、パパー、ママー。星奈のほっぺにはおはようのチューして?」

「えっと……ほ、箒?」

「わ、わかった……」

二人は少々恥ずかしかったが、自分の顔を近づけさせ、一夏は左頬、箒は右頬にキスをする。

「えへへ♪ パパ、ママ、おはよう♪」

「「お、おはよう……」」

ご満悦な星奈の笑みに少し戸惑う一夏と箒だった。

「親バカか」

「親バカですね」

「「っ!?!」」

いつの間にかもう二人の子ども達の月夜と風音が部屋に入っており、今の光景に呆れていた。

「おはよう、親父、お袋、星奈」

「おはようございます」

「「お、おはようございます……」」

「おはよう〜♪」

取りあえず朝の挨拶が終わり、一夏と星奈の着替えが済むとそのまま朝食を食べるために食堂へ向かう。

「……なあ、親父」

「何だ？ 月夜」

「周りの視線が痛いんだけど……」

「気にしたら負けだ」

食堂にてほぼ全員と言っていいほどの女子生徒達が月夜と風音と星奈を興味津々で見ってくる。

風音と星奈は筈との話に夢中であまり気にしていないが、月夜は落ち着いて食事も出来ずため息を付く。

「はぁ……同世代の女は興味ないんだけどな……」

月夜が誰にも聞こえないようなボソツと呟いた一言だが、一夏の耳にはしっかり届いた。

「待て。じゃあ、お前の好きな女性是谁だ？」

息子の衝撃的な発言に一夏は珍しく千冬に似た鋭いツツコミを入れる。

「え？ 俺の好きな人はもちろん――」

月夜が言いかけた瞬間。

「月夜、風音。早く朝食を済ませろ。私と一緒に職員室に行くぞ」

千冬が話に割り込んで来た。

「師匠！」

「織斑先生だ！」

千冬の出席簿アタックが落とされるが、月夜は人差し指と中指で挟

んで受け止める。

「何だと!？」

「こう見えても物心付いたときから鍛えてるからな。風音、行こうぜ！」

「はい」

月夜と風音は食器を片付け、千冬を置いて職員室に向かう。

「ま、待て！ 私を置いていくな！」

慌てて千冬が後を追う。

朝のSHR、月夜は一年二組、風音は一年四組に配属になった。

月夜と風音と星奈が未来から来たと言う事実は教師や生徒会により、それを知る生徒は口止めされている。

そして、混乱が起きないように、千冬が考えてた月夜達の立場の設定はこうである。

月夜達は一夏と千冬の血の繋がった親戚と言うことにして、一夏と箒を父と母と呼ぶことについては、亡くなった月夜達の両親に似ていると言うことにしたのだ。

月夜と風音はすぐにクラスの人気者となり、クラスメイトとすぐに打ち解けた。

放課後、一夏達と月夜達は訓練場でISの訓練や調整を行う。

月夜は紅月を起動させると、箒が興味深く見る。

「なるほど……確かに私の紅椿と似ているな」

「だろ？ 風音も見せたらどうだ？」

風音は首に掛けた雪の結晶のペンダントを見せる。

「来て、『雪風』！」

風音に纏われたのは装甲が白式とそっくりなISで、手には雪片が握られていた。

「私のは父上の白式のコアを元に束叔母様が造ってくれました」

「それ、雪片だよな……？ まさか、零落白夜も使えるのか？」

「はい。ちなみに私の場合は『真零落白夜』です。父上の零落白夜の半分以下のシールドエネルギーで、シールドを消し去ります」

「俺と千冬姉のワンオフ・アビリティーを越えちゃったよ……」

一夏はガクッとうなだれる。

「パパー、大丈夫？」

星奈が一夏の頭を撫でる。

「ああ。大丈夫——って、星奈もISを持っているのか!？」

いつの間にか星奈にピンク色のISが纏っていた。

「私のは『天照』あまてらすだよ」

「天照も束叔母様が作ったISです。しかし、天照には一切の武装が存在しません。その代わりに……」

風音が説明を始めると、天照から八本のアームが現れ、更に未来の最先端技術を込められて造られた無数の工具が握られている。

「星奈は幼いながらにして束叔母様と同等以上の天才的頭脳を持っています。ISの開発、修理、調整、何でもする事が出来ます」

星奈の意外過ぎる一面に一夏達は言葉を失ってしまった。

その後、星奈の手により一夏達のISは完璧と言っているほどにまで調整されて、機体や武器の出力が上昇したのだった。

すると、一夏は朝の会話を思い出した。

「月夜、そう言えばお前の好きな人は誰なんだよ？」

「ん？　じゃあ、当ててみれば？」

月夜は少し意地悪な笑みをし、風音はため息を付いた。

箒達もそれに食いつき、話に参加する。

「わかりましたわ！　一夏さんの息子さんだから風音さんですわ！」

セシリアが自信満々に言う。

「セシリア、それはどういう意味だ！？」

「セシリア姉、俺はシスコンじゃないから。風音は大切な家族だけど……」

「じゃあ……もしかして星奈！？　ロリコンだったの！？」

「鈴姉……むしろそんな奴が居たら俺が逆に抹殺するわ。星奈は俺達の天使ちゃんだぞ？」

「まさか……お母さんの箒を！？」

シャルロットは若干引きながら言う。

「何だと！？　月夜お！！」

一夏は雪片式型を月夜に向ける。

「シャル姉、そんなことをしたら親父に完膚なきまでに殺されるわ」

「そうか、わかったぞ。教官だな!？」

最後に答えるラウラが自信を持って言う。

「……惜しい」

『惜しい!?!』

「そろそろ答えを言っても良いかな？」

月夜が息を吸って発表するその時だった。

「箒ちゃん! いっくん!！」

ずどどどど……!

砂煙を巻き上げながら無茶苦茶な速度で走る。

それはデブリ・ドラゴンから一夏と箒の未来の子供が来たという連絡を受けて飛んできた束だった。

「さあさあ! どこにいるのかな!？ 私の可愛い未来の甥っ子と姪っ子は!？」

「束叔母様」

「束お姉ちゃん!」

既にテンションマックスの束に風音と星奈が駆け寄る。

「おおっ!? な、何と!? 篝ちゃんにそっくりだけど、どこか
いっくんに似ている顔の感じ! 正しくこれは二人の娘!」

「織斑風音です」

「織斑星奈だよ!」

風音と星奈の笑顔に束の心は射抜かれた。

「か、可愛い~~~~!!」

「うおっ!?」

「ふわっ!?」

束は風音と星奈を自分の胸に抱き寄せて、強く抱き締めて頬ずりする。

「束姉、その辺にしといてくれ。二人が苦しそうだ」

月夜が言うと、束は二人を解放して月夜を見つめる。

「こ、今度はいっくん似の甥っ子!?」

「織斑月夜だ、束姉」

「それじゃあ、『つつくん』と呼ばせてもらうよ!」

未来で、月夜が生まれた時から束が箒の手伝いで面倒を見ていたのだ。

月夜が物心付いた時にはもう既に、束に本気で惚れてしまったのだ。

ちなみに、未来の束は偶然開発した『不老の薬』を飲んでしまい、見た目が二十代のままである。

しかし、未来で月夜は束に告白したが、束は断ってしまった。

叔母であり、すでにかかなりの年齢を過ぎた自分に恋してはいけな
いと言っ
て月夜を降ったのだ。

そこで月夜はある考えに行き着いた。

それは、過去の世界で束に告白し、恋人同士になれば未来に戻った
時も恋人同士のままと
いう、純粋なんだが歪んでいるのか分からない
恋心だった。

だが、月夜の思惑通り、束は顔を真っ赤に染め、珍しく困った表情
を浮かべる。

「ダメだよ、つつくん……」

「俺は、束姉をずっと愛している……」

月夜の真剣な眼差しに、束は心臓がドキドキと鼓動を早める。

「じ、自分で言うのも何だけど、私は変人なんだよ？ つつくんな
ら私じゃなくても他の女の子とか……」

「構わない。俺は束姉の全てを受け止める」

束が一步下がれば、月夜が二歩前に進み、束がだんだん追いつめられていく。

「じゃ、じゃあ！ 証拠を見せてくれる？」

「証拠？」

「つつくんが私を愛している証拠を見せて！」

束は月夜が本気かどうかを確かめる。

「……わかった」

「え？ きゃっ！」

月夜は束の手を取り、自分の元に引き寄せた。

そして、月夜は……。

「んっ……」

「ふむんっ!？」

束の唇にキスをする。

一夏は口を大きく開けながら啞然とし、風音はため息をついて星奈の目を両手で塞いだ。

そして、月夜は束から唇をゆっくり離した。

「これで……良い？」

「はわぁ……」

束は指で自分の唇に触れる。

「これが、キス……私、初めてだよ」

「俺もだよ……」

月夜は恥ずかしさから束から視線を逸らす。

「じゃあ、ファーストキスだね……」

「ああ……」

「あの、つつくん……」

束はポケットから小さな紙を取り出して月夜に渡す。

「これは？」

「私の携帯の番号。その、いつでも電話してね」

「あ、ありがとう……」

「それから……」

束は月夜の耳元に顔を持って行き、そっと囁いた。

「会いたい時にはいつでも呼んでね？ 私、世界中何処にいても飛んでくるから……」

「束姉……」

「じゃあね、つくくん♪」

束はそのまま月夜の頬にキスを落とし、束は逃げるように立ち去った。

「姉さん、乙女になったな……」

妹の箒はそう思ったのだった。

番外編 二人の結婚式（前書き）

ハッピーバースデー、織斑（篠ノ之） 箒ちゃん！！！！
(≡Δ≡)

原作で福音戦と一夏と夜の浜辺でお話をした、まさに箒ちゃん好き
にとっては最高の1日ですね！

これからも私は、一夏×箒を頑張って書き続けます！

番外編 二人の結婚式

それは、有名雑誌のインフィニット・ストライプスの副編集長、黛渚子の一言から始まった。

「「結婚式場のプロモーションビデオの撮影!？」」

一夏と箒は同時に驚いた。

「そうなのよ。実はね、凄く人気のある超高級ホテルの社長さんが、この前の雑誌の二人の写真を気に入っちゃって、是非我が社のホテルの新しくできた結婚式場のプロモーションビデオの主演を二人にやって欲しいって頼まれちゃったのよ」

流石に二人もお互いを見て困り果てた。

すると、渚子は取って置きの秘策を提示する。

「あっ、ちなみに、撮影に出てくれたらそのホテルの高級レストランのディナー券をプレゼントするって」

渚子はホテルのパンフレットを見せる。

「受けましょう」

前回と全く同じ展開で箒は即答した。

「箒!？」

しかし、箒は珍しく条件を出した。

「ただし、私と一夏だけではなく、プラス3人分の合計5人分のデイナー券をお願いします」

「5人？」

一夏は顎に手を添えて考えた。

（まさか、月夜達のかか？）

そう考えれば若干納得がいく。

「わかったわ。それなら多分社長さんも喜んで了解するわ。引き受けてくれてありがとう、織斑くん、篠ノ之さん。それじゃあ、日程とかは追って連絡するね」

こうして一夏と箒は超高級ホテルの結婚式場のプロモーションビデオの主演に参加することになった。

自室に戻った一夏と箒はその事を子供達に話した。

「なるほど。つまり、結婚式の予行演習みたいなもんだな。俺達も行っていいのか？」

月夜の問いに一夏は頷く。

「ああ。エキストラに参加する人を知り合いから何人連れてきても構わないだって」

「素敵です。撮影と言っても、父様と母様の結婚式を生で見られるなんて……」

風音はうっとりとした表情をする。

「私も見に行くー！」

星奈は腕を上下に激しく動かしてアピールをする。

しかし、箒は一つだけ子ども達に忠告する。

「一つみんなに言っておく事がある。私達が親子なのは秘密だから私と一夏の事は親戚の兄と姉と言うことにしといてくれ。絶対に母と父と呼んではいけないぞ。わかったな？」

「「はい！」」

三人の子ども達は手を挙げて返事をした。

そして、撮影日当日。

「でけえー……」

「凄い立派ですね……」

「キレイ……」

月夜、風音、星奈は撮影場所となる結婚式場に呆然とする。

それは日本人に多くの人気があるキリスト教式の結婚式場だった。

汚れが一切無い綺麗な白色の床と壁と天井。

正面には、太陽の光が差し込んで様々な美しい光が式場を包み込む
巨大なステンドグラス。

収容人数もかなり多く、本当に大きくて立派な結婚式場だった。

「こんな所でおや……ではなくて、兄貴と姉貴は撮影すんのかよ……」

「確かに凄いな。二人共、緊張しなければいいがな」

「ああ……って、千冬姉!？」

いつの間にか自分の背後にいた過去の叔母の登場に驚く月夜。

しかし、驚いたのはそれだけではなく、いつもはスーツ姿の千冬が珍しくオシヤレをしていたことだった。

「千冬姉、綺麗じゃん」

「そ、そうか? 久しぶりだから私自身も緊張している」

「叔母様、綺麗ですよ」

「お姉ちゃん、美人」

未来の甥と姪に褒められた千冬は恥ずかしくなり、話題を変えるために咳き込む。

「そ、それより箒の所に行かないか? そろそろ準備が終わる頃だからな」

「姉様のウェディングドレス姿ですか!?! 写真でしか拝見したことが無いから楽しみです!」

いち早く反応したのは風音で、月夜達を引っ張って向かった。

だがその前に一夏を迎えに行く。

一夏の控え室に入ると、四人は一瞬目を疑う。

「……一夏、か？」

千冬は思わず聞いてしまうほど驚いた。

一夏はホテルから用意された黒のロングタキシードを身に纏っていて、いつもの雰囲気とは余りにもかけ離れていて、凄く大人びていた。

それに対して一夏は苦笑を浮かべながら駆け寄ってきた星奈を抱き上げた。

「中身は同じだけど、そんなに変わるものなのか？」

「ああ、最高にクールだぜ、親父！」

「早く父様の素敵なた姿を母様に見せたいです」

「パパ、カッコイイ！」

三人の子ども達に褒められ、一夏は自信が付いてきて、一刻も早く箒に見せたくなった。

「よ、よし！ 箒の所に行くか！」

一夏達は箒の控え室に向かった。

箒の控え室の前には五人の女性が待っていた。

「あら、一夏さん？ とってもお似合いですわ！」

「へえー、良いじゃん。馬子にも衣装ってやつかしら？」

「鈴、失礼だよ。一夏、凄く格好いいよ！」

セシリア、鈴音、シャルロットは一夏の姿を褒める。

「うむ。だが、それでも箒には勿体無いな。今の箒は最高に綺麗だからな」

「そうね。本当に箒ちゃん綺麗なんだから、一夏くんは気をしっかり持たなきゃだめよ♪」

既に箒の姿を見たラウラと楯無は一夏に一応忠告した。

一夏は息を呑み込み、緊張しながら控え室に入った。

まず出迎えたのは……。

「はい、みんなのアイドル篠ノ之束さんだよー！」

「束義姉さん？」

箒ではなく、姉の束だった。

しかも、男性用のスーツを身に着けて、長い髪を縛って男装をしていた。

それに反応したのは勿論……。

「束姉、男装しても可愛い。愛してる」

月夜は束の手を握って口説き始めた。

「ダ、ダメだよ、つつくん……今日は篝ちゃん達の結婚式なのに、そんな……」

束は顔を朱色に染めて困った表情を浮かべる。

どこか嬉しそうだが……。

「いい加減にしてください。馬鹿兄様」

ドスッ！

風音は愛刀で月夜の頭を全力で峰打ちする。

「ゴバツ!？」

「つつくん!？」

前に倒れ込んだ月夜を束が受け止め、その場で束は膝枕をする。

「つつくん、死んじゃだめだよ!」

「ああ……束姉の膝枕、幸せ過ぎて死にそう……」

月夜は幸せな表情を浮かべていた。

千冬は呆れながら束に質問する。

「ところで、何で束が此処にいるんだ？」

「いやー、箒ちゃんといっくんの結婚式をやるって聞いたら居ても経っても居られなくてね。ちなみに、箒ちゃんのバージンロードは私が一緒に歩こうと思ってね♪」

「だから、男装か……？」

「うん！ 似合っているでしょ？」

両手でVサインをする束。

すると、星奈が束のスーツの裾をちゃんと引っ張る。

「ねー、束お姉ちゃん。ママはー？」

「おっと、私の可愛い天使ちゃんは待ちきれなくなったかな？ それでは、登場してもらいましょう！ 箒ちゃん、カモン！！」

奥の扉から箒がゆっくりと出て来る。

「み、みんな……」

一夏達は言葉を完全に失ってしまった。

純白のウェディングドレスに身を包んだ箒はとても美しく、神々しいオーラが出ていた。

月夜達は見とれてしまい、言葉が出なかった。

何にも例えることの出来ない程の美しさに、一夏は思わず体が動いてしまい、箒の手を取った。

「綺麗だよ、箒。この世の何よりも……」

「い、一夏も凄くカッコいいぞ……」

主役の新郎新婦が揃い、いよいよ撮影が始まる。

結婚式場には今回の撮影で呼ばれたエキストラで満員だった。

ちなみに、そのエキストラは全員IS学園の生徒達だった。

勿論、遊星達チーム5D'sも参加している。

何せ、気前の良い社長がエキストラ参加者にバイキングレストランのチケットをプレゼントするからである。

天井付近には精霊状態でスターダスト・ドラゴン率いる沢山の精霊達が撮影を心待ちにしている。

そして、遂に撮影が始まる。

始めに牧師が司式し、先に新郎である一夏が入場して祭壇の前で待つ。

それから間もなくして、新婦の箒は父親代わりの束の腕を組んでバージンロードをゆつくりと歩く。

ウェディングドレスに身を包んだ箒にエキストラ達も感嘆する。

バージンロードの終わりに、束は箒を一夏に引き渡し、二人は手を繋ぎながら祭壇に上がり、二人は見つめ合う。

「箒……」

「一夏……」

天井にいるスターダスト・ドラゴンとデブリ・ドラゴンが箒のウェディングドレス姿に見とれていた。

《箒、今のお前は誰よりも一番輝いているぞ》

《本当に一夏にやるのが勿体ないな……》

デブリ・ドラゴンの一言にスターダスト・ドラゴンは頷いた直後。

ドカーン！！

ド派手な爆発によって扉が吹き飛ばされ、全員の視線が向けられる。

そこにいたのは、嫉妬による殺気を体から溢れ出している無数の男女だった。

『私達、織斑一夏ファンクラブ！』

『俺達、篠ノ之箒ファンクラブ！』

女達と男達の宣言に一夏と箒は呆然とする。

「「ファン、クラブ……？」」

『我々はこの結婚式を認めない！ よって、今から二人の仲を引き裂く！』

ISの専用機持ちは国の代表で、簡単に言えばアイドルみたいなものである。

先日のインフィニット・ストライプスの一夏と箒の記事で二人に大きな人気が出て、それぞれに非公式ファンクラブが作られたのだ。

その中の過激派達が二人の結婚式の情報を探み、中止するために襲撃してきたのだ。

そして、そのリーダー格が宣言する。

「者ども、かかれ！」

一斉に結婚式場に足を踏み入れようとした時だった。

「残念だが、お前達は式場には入らせないぜ」

月夜は鞘から抜刀した刀で突風を生み出し、過激派達を外へとぶっ飛ばした。

「き、貴様……我々の邪魔をするのか!？」

「邪魔？ はっ、上等だ。俺の大切なもんを傷つけるなら、てめえら全員を地獄に叩き落としてやるよお!!」

月夜は不敵の笑みを浮かべて、刀の切っ先を過激派達に向ける。

その隣に、既に刀を構えた風音が出て来る。

「あなた達は私の逆鱗に触れました……ですので、今からあなた達を冥府に送ります」

それに便乗するかのようにエキストラとして参加した遊星達も出てくる。

「さあ……結婚祝いのバトルパーティーの始まりだあ!!」

月夜の宣言で、邪魔者退治と言う名のバトルパーティーが始まってしまった。

「あーあ……」

「むちゃくちゃ、だな……」

一夏と箒は外の大乱闘に呆然とするしかなかった。

「仕方ない……束」

「オツケー、ちーちゃん」

二人の姉、千冬と束は祭壇に上がる。

「千冬姉？」

「姉さん？」

「私達が二人の立会人になる」

「今から宣誓を行うね♪」

一夏と箒はお互いを見つめ、頷いた。

「「お願いします」」

「私もたちあいになろう！」

星奈が少し離れた場所でジッと見る。

始めに、束が一夏に尋ねる。

「汝、織斑一夏は、我が愛しの妹、篠ノ之箒を妻とし、幸せな時も不幸な時も、共に歩み、永遠の愛を誓い、来世まで妻を想い、この場にいる私達全員に誓いますか？」

「誓います。俺は箒を一生愛し続け、箒と未来に生まれて来る子ども達も護ります！」

束は満足そうに笑みを浮かべ、次に千冬が箒に尋ねる。

「汝、篠ノ之箒は、我が弟、織斑一夏を夫とし、如何なる時も、共に生き、二人を分かち敵が現れても、永久の愛を誓い、夫を想い続け、織斑千冬と篠ノ之束に誓うか？」

「誓います。例えどんな事であろうとも、私は一夏と未来に生まれてくる子ども達を愛し、守り通します！」

千冬も満足そうに頷く。

「「それでは、誓いの口付けを！」」

千冬と束がこの場にいる全員の耳に届くように大声で叫び、全員の

視線が集まる。

一夏は箒のウェディングドレスのベールを上げ、二人はゆっくりと唇を重ねた……。

その後、過激派達は完全に壊滅し、二度と一夏と箒を襲わないことを誓わせた。

ちなみに、撮影に関してだが、社長が映像をとっても気に入り、一部編集してほぼそのままの採用となった。

そして、撮影が終わった後、一夏は箒にある約束する。

「箒。今回はめちゃくちゃな事になったけど……いつか必ず、本当の結婚式をやるうな」

一夏は笑顔で右手の小指を出し、箒は嬉し涙を浮かべて自分の小指と合わせて組んだ。

「一夏……ありがとう、私は世界一の幸せ者だ」

そして、二人はもう一度誓い合うように唇を重ねた。

.

設定 織斑三兄妹（前書き）

織斑三兄妹の設定集です！

三兄妹の性格やI Sの紹介をします。

設定 織斑三兄妹

織斑 月夜^{つくよ}

男・十六歳。

未来の一夏と箒の間に生まれた織斑家の長男。

長女の風音とは双子だが、二卵双生児のため似てない。

一夏と箒の似ている比率が7…3で一夏に似ている。

髪は少し長めに伸ばしており、物心が付いた頃から箒から篠ノ之剣術を学んでおり、更に叔母の千冬から戦闘訓練を受けているため、その身体能力はラウラや楯無を遥かに凌駕する。

額から左の頬に向かった刃物傷は14歳の時、千冬とのISでの戦いの時についたものである。

考える時や悩んでいる時に指でなぞるように傷に触れる癖がある。

一夏と同じく誰かを守ることに憧れており、そのため自分の力を必死に磨いている。

一夏の恋愛に対する鈍感はい幸いにも受け継がれておらず、かなり敏感であるが、月夜本人は叔母の束に心底惚れているため、振られた女性は数多い。

ちなみに束は年齢はかなりいつているが、見た目年齢が全く衰えて

おらず、見た目だけは二十代であり、スタイルの良さは健在である（偶然開発した不老の薬を飲んで、見た目が老いなくなったから）。

基本口調は少し乱暴であり、一夏を『親父』、箒を『お袋』、千冬を『千冬姉』、束を『束姉』、風音と星奈は名前をそのまま呼んでいる。

織斑 かざね
風音

女・十六歳。

織斑家の長女で月夜の双子の妹。

一夏と箒の似ている比率が月夜と逆で3…7で箒に似ている。

箒のスタイルの良さと胸の大きさと綺麗な黒髪を受け継いでいる。

唯一継いでないのは箒のつり目と嫉妬深い性格で、いつも優しく柔らかい表情でとても性格は穏やかである。

箒の影響で少々古風な喋り方をする。

風音も月夜と同じく物心が付いた頃から篠ノ之剣術を学んでいるが、月夜に及ばない。

しかし、それでも同じ年齢の時の箒以上の剣術の力を持っている。

時折、束の事で暴走する月夜の重要な突っ込み役であり、竹刀か木

刀か刀（峰打ち）で殴って暴走を止める。

現在好きな男性はいないが、一夏のような素敵な男性と付き合いたいと思っている。

星奈以外の家族はみんな『様』を付けて呼んでおり、それ以外は『さん』付けしている。

織斑 星奈^{せいな}

女・六歳。

織斑家の次女。

一夏と箒の似ている比率が5..5で、どちらにも似ている。

天真爛漫の甘えん坊な性格で、一夏達にいつもべったりで、一夏達も星奈にメロメロである。

一夏の事が大好きで、未来では年相応の『パパのお嫁さん』になる発言をして箒と取り合いをしている。

だが、その性格とは裏腹に幼いながら叔母の束に匹敵する天才的頭脳を持っており周囲からは『篠ノ之束を継ぐ者』と呼ばれている。

その事から箒は束と重ね合わせて危惧しているが、星奈本人は将来は作家を目指しているのでその心配は取りあえずない。

『第七世代型IS』

その大きな特徴は光を越えるの速さで動くことのできる『超光速』。

ISのコアが進化し、操縦者の技量が高ければどこへでも空間跳躍も可能になる。

月夜専用IS

くれないのつき
『紅月』

未来の第七世代型ISで、束が箒の紅椿のコアを使用して造った。

待機状態は真紅色のガントレット。

装甲は紅椿そっくりに造られている。

げっが
『月牙』

鞘付きの日本刀の形をした主力武器。

納刀状態で刃にエネルギーを溜め、抜刀すると、巨大なエネルギー刃を放つことができる。

げっか
『月華』

小太刀の形をした八機のビット型兵器。

対象を刃で切り裂き、月夜自らが持つて戦うこともできる。

『虚空天月』
こくうてんげつ

紅月のワンオフ・アビリティー。

初速から超光速で動くことが出来、更に連続で空間跳躍を行うことができる。

風音専用IS

『雪風』
ゆきかぜ

未来の第七世代型ISで、東が一夏の白式のコアを使用して造った。

待機状態は雪の結晶の形をした髪飾り。

装甲は白式そっくりに造られている。

『雪片無型』
ゆきひらむのかた

雪片式型を改造して造られ、刀、槍、弓、鎖鎌、等の様々な武器に姿を変えられることができる多変型主力武器。

『真零落白夜』
しんれいらくびやくや

千冬と一夏の零落白夜が進化した雪風のワンオフ・アビリティーである。

零落白夜の半分以下のシールドエネルギーで対象のシールドを消滅させる。

更に、雪片無型でシールドを消滅させる斬撃を飛ばすことができる。

星奈専用IS

あまてらす
『天照』

未来の第七世代型ISで、束が新たにコアと共に造った。

待機状態は一夏、箒、千冬、束、月夜、風音の小さなぬいぐるみ（SDタイプ）のキーホルダー。

戦うことを目的としたISではないので、武装は一切装備されていない。

未来のメカニック関係の全ての機材が備えており、ISの開発・修理・調整、何でも出来る。

束特製のスーパーコンピューターが内蔵されているので、解析やハッキングもお手のものである。

設定 織斑三兄妹（後書き）

大学のテストが近くなったので、小説の更新を来月の8月の上旬まで休止か、一週間に一度の更新になります。

皆様に迷惑をかけて申し訳ありません。

夏休みに突入したら毎日一作更新を目指します！

第105話 楯無と簪（前書き）

あれ……？

更新を遅くするつもりだったのに簡単に書けちゃった。

もう早く書くのが癖になっちゃったかな？

第105話 楯無と簪

整備室で風音はクラスメイトの簪のISを見ていた。

「これが簪さんのISですか？」

「うん。まだ武装やプログラムが完成してないけど……」

二人は風音が転入した日に席が隣同士になり、お互いがヒーローアニメが好きと言う理由ですぐに仲良くなった。

「それでは、私も簪さんの専用機作りを手伝います」

「良いの……？」

「はい、手伝わせてください」

「ありがとうございます……」

「じゃあ、少し待ってください。今から強力な助っ人を呼んできます」

「助っ人？」

そう言って、数分後に風音が連れてきたのは。

「……子供？」

「私の妹の星奈です」

星奈は風音に抱き上げられて整備室に連れてこられた。

「風音お姉ちゃん、私は何をすればいいのー？」

「星奈、簪さんのISの完成を手伝ってくれますか？」

「むー……ねえ、お姉ちゃん。お菓子作ってー」

風音はお菓子作りが上手で、時折星奈に作ってと、せがまれるのだ。

「わかりました。今回はクッキーでどうですか？」

「うん！ 星奈頑張るー！」

星奈は元気に風音から降りると、一夏、箒、千冬、束、月夜、風音の小さなぬいぐるみのキーホルダーを取り出す。

「天照」

星奈の体に天照が現れ、八本のアームを出してISの装甲を完成させていく。

IS学園整備科の生徒以上の技術能力に簪は哑然とする。

「……妹さん、何者？」

「束叔母様の後継者と言われている天才です」

「それって、篠ノ之束博士……？」

「はい」

「もう、凄いと言えない……」

簪はため息をつく、元気な声が耳に届く。

「簪姉ちゃん！」

「っ！？　　る、龍亞くん！？」

簪は頬を朱色に染めながら後ろを振り向いた。

しかし、居たのは龍亞だけではなく、遊星とブルーノもいた。

「不動遊星と、ブルーノ先生？」

「今度の専用機タッグマッチも近くなったから、簪姉ちゃんのISを早めに完成させた方が良くってね。遊星とブルーノに頼んで来てもらったんだ」

有能な技術者である遊星とブルーノは確かに強力な助っ人である。

「でも、二人も忙しいんじゃない……私なんかの為に、迷惑じゃない……」

「俺は大丈夫だ。最近時間がかなり空いているからな」

「僕は整備科の教師として困っている生徒を助けに来たんだよ」

遊星とブルーノは迷惑だとは一切思っていなかった。

「それじゃあ……よろしくお願いします……」

簪は二人に向かって頭を下げた。

「ああ！ よし、それじゃあ役割を分担して取り組もう。星奈は装甲を担当しているから、俺とブルーノはプログラムの完成、龍亞は武装の完成、簪と風音は調整を頼む」

遊星がリーダー核となって開発に取り組む。

「「「はい！」」」

「私も手伝うよ〜！」

一体いつから居たのか、布仏本音がゆったりとした声を出しながら手を挙げる。

「本音、あなたいつの間に……」

「お嬢様、私も手伝います〜」

実を言うと、本音は簪の専属メイドなのである。

「それなら、本音は簪たちの手伝いをしてくれ」

「はい！」

こうして、簪のISの開発を最高のチームで開発することとなった。

そして、数時間後。

「出来、た……」

ISの装甲、武装、プログラム、全てが完成した。

「私のIS……『うちがねにしき打鉄式式』！」

打鉄式式とは、防御力重視の打鉄の後継機であり、機動力を重視した第二世代型ISである。

龍亞達は拍手を送り、簪の専用機完成を祝う。

「それじゃあ、簪姉ちゃん！ 早速アリーナで動かしてみようよ！」

「あ、うん。でも……その前に龍亞くんに言いたいことがあるの」

「言いたいこと？」

簪は大きく深呼吸をし、心を落ち着かせて手を出す。

「打鉄式が完成したら絶対に言おうと思っていたの……龍亞くん、私とタッグマッチのパートナーになってくれますか？」

それは簪にとっては、勇気を出した言葉だった。

しかし、

「うん、良いよ」

あまりにもあっさりと龍亞が承諾したので簪はその場でずっこけた。

「そ、そう……ありがとう……」

（私の勇気は一体……）

若干落ち込みながら簪は立ち上がる。

それを見た遊星はある考えにたどり着く。

（もしかして、簪は……いや、まさかな……）

遊星は頭を振り、その考えをすぐに忘れる。

その夜、龍亞と龍可の自室にて、事件は起きた。

「ねえ、龍亞。楯無さんの妹さんとタッグを組んだって本当？」

龍可はジト目で龍亞を睨みつける。

「うん、そうだよ」

「……ねえ、龍亞」

「ん？」

「私のこと、大好きだよね？」

龍可は心配そうな表情浮かべながら尋ねる。

すると、龍亞は龍可を抱き寄せる。

「当たり前だろ？ 俺達は恋人同士なんだし」

龍亞は平然と答え、龍可の唇に軽いキスをする。

そして、龍可はドキドキしながら、ある結論にたどり着く。

（……龍亞、あなたは一夏さん以上に鈍感過ぎるよ！！）

龍可は心の中で嘆きながら、龍亞から離れた。

「龍可？」

「龍亞、先に寝てて！　ちょっと用事が出来たから！」

そう言うと、龍可は部屋から出て行った。

「……変な龍可」

龍亞は特に気にせずベッドに横になる。

一方、ジャックと楯無の部屋。

楯無は椅子に座り、大きくため息をついた。

「はぁ……」

「珍しいな、お前からため息が出るなんて」

ジャックは自分で入れたコーヒーを楯無に渡す。

「私も人間よ。ため息ぐらいつくわ……」

「大方、お前の妹の更識簪の事だろ？」

「うっ……」

ジャックに見事的中され、楯無は凄く苦いものを口いっぱい食べたような顔をしながらコーヒーを飲む。

「……正解よ」

「お前は今まで妹の事を話そうとしなかったからな」

「……恋人の悩みを聞いてくれる？」

「良いだろう。遠慮なく話してみろ」

「うん……簪にとって私はね、コンプレックスの対象なのよ」

「コンプレックス？」

「ええ」

更識家頭首として幼い頃から武術や勉強を人の何倍も励んできた楯無であるが、元々人より優れた才能の持ち主であることから、すぐに当主として十分な人間に育った。

しかし、それにより簪が自分と楯無と比べてしまい、強いコンプレックスに繋がってしまった。

仲の良かった姉妹だが、いつしかギクシャクした関係となり、簪は自分から楯無と疎遠してしまったのだ。

「なるほど、家族でよくある話だな……そう言えば、龍亞と龍可も昔はそうだったな……」

ジャックはダークシグナーの時の戦いの前の出来事を思いだす。

「龍亞くんと龍可ちゃんも？」

「ああ。俺が出会った頃の龍亞はまだシグナーとして覚醒してなかった。既にシグナーである龍可にコンプレックスを抱いていたんだ」

「そうだったんだ……」

「俺達がダークシグナーとの戦いに行く時、龍亞は自分は力の無い足手まといだと言って最初に行くつもりがなかったらしい」

「あの、龍亞くんが……？」

楯無は天真爛漫だが、龍可の為に勇敢に戦う龍亞しか知らなかったのでもとても驚いた。

「普通に考えれば当たり前だ。デュエリストとして未熟だと自覚し、シグナーでも無かった龍亞が生死を賭けた戦いに行くなんて思わないだろう？」

「そう、よね……」

そして、ジャックは小さな笑みを浮かべた。

「だが、それでも龍亞は最後には戦いに行くと言った。何故だかわかるか？」

「それって、やっぱり龍可ちゃんが存在？」

「ああ。龍可はまだ子供で不安も当然大きかった。だから、龍亞に今まで通り自分を守ってくれて言った。龍亞はその約束を貫くために今まで必死に龍可を守るために戦ってきた」

どこか嬉しそうに龍亞の話をするジャックに楯無は微笑んだ。

「ジャック君、何だか嬉しそうに話すね」

「……龍亞は俺の仲間であり、弟みたいなものだからな。それよりも楯無」

ジャックは真剣な表情をする。

「ん？ 何かな？」

「心配しなくてもきつかけさえあれば簪との『絆』を取り戻せるはずだ。お前はいつものように振る舞い、簪と真っ直ぐ向き合う事を考えればいい」

ジャックは楯無にアドバイスをすると、楯無の心を締め付ける鎖が少し解けた気がした。

「ありがとう、ジャック君。お陰で元気が出たわ」

「ああ」

「お礼に、今から大浴場に行ってお背中でも流しましょうか？ そ

の後のご奉仕付きで☆」

良い雰囲気をぶち壊すようにいつもの楯無に戻る。

「ブハアアアアッ!? な、何なんだそれは!?!」

ジャックは思わず吹き出した。

幸いな事に、コーヒーを口に含んでいなかった。

「二人だけの大浴場であーんなことや、こーんなことをするのはやっぱり興奮するわね。じゃあ、行きましよう♪」

「何でお前はいつもそっちの方に思考が向くんだ!?!」

「えー? 人間の当たり前の行動でしょ?」

「お前は人より求めすぎだあああああっ!?!」

ジャックのツツコミが部屋に響く。

バンバン!!

突然、廊下から誰かがドアがノックする。

「むっ? 誰だ?」

ジャックが鍵を開けてドアを開く。

そこには龍可が立っていた。

「龍可？　どうしたんだ？」

「ジャック、楯無さんは居る……？」

「ああ、居るぞ」

ジャックは龍可を部屋に入れる。

「あら、龍可ちゃん？　どうしたの？」

「楯無さん！　私と今度のタッグマッチのパートナーになってください！」

龍可の突然の頼みに、ジャックと楯無は目を丸くする。

「えっと、どうして？」

すると、龍可は体を震わせながら言う。

「龍亞を……龍亞と簪さんに勝ちたいからです！！」

龍可の体からどす黒いオーラが吹き荒れ、ジャックと楯無は恐怖を抱いた。

「楯無さん、お願いします！！」

「わ、わかったわ！　ちょうど私も相手を探してたところなのよ、龍可ちゃんなら大歓迎だわ！」

楯無は即答で承諾し、取りあえずこの場の危機を回避する。

「龍亞……覚悟しなさい!!」

龍可は打倒龍亞と簪を目指した。

「龍可ちゃん、怖い……」

「あれが噂に聞くヤンデレか……」

楯無とジャックは龍亞と簪に対して、ある意味別の心配を抱くのだ
った。

第106話 一夏と箒のラブラブ撮影会（前書き）

七巻の目玉の一つである一夏と箒の撮影会です！

題名の通り、原作以上にラブラブしています（笑）

私は相変わらずですね（笑）

第106話 一夏と箒のラブラブ撮影会

一夏と箒の自室で明日の休日の予定を子どもたちに話す。

「雑誌の取材？ 親父とお袋が？」

「それって、『インフィニット・ストライプス』ですか？」

月夜と風音は箒が入れてくれたお茶を啜る。

「ああ、よく知っているな」

「未来でもあるのか？」

一夏と箒もお茶を啜り、月夜と風音は頷く。

「俺と箒の二人で撮影をしたりするんだ」

「なるほど……世界最強のIS操縦者の千冬叔母様の弟で男で世界で始めてISを使える父様と」

「ISを開発者の束姉の妹のお袋。これは雑誌の表紙や内容を飾るに相応しい組み合わせだな。しかも……」

「パパとママはラブラブ♪」

風音と月夜は頷きながら言い、星奈はジャンプする。

「まあ、箒は最初断ろうとしたんだけどな」

「うっ……仕方ないだろ？ お前との高級レストランのディナー券をくれるって……」

要するに筈はそのディナー券に釣られたと言うことである。

子どもたちはニヤニヤしながら両親を見る。

《高級レストラン、か……》

《高校生じゃ、なかなか行けないよな……》

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンが呟くと、一夏はふとあることを思いついた。

「あ……月夜、ジャンクロン、デブリ、ちょっと来てくれ！」

一夏は月夜達の返事を聞かずに部屋から連れてった。

「一夏？」

「どうしたんでしょう、父様？」

「ふみゅ？ パパ？」

一夏は誰にも話を聞かれないよう寮の外に出る。

「で？ 親父、相談って何だ？」

「ああ。やっぱり高級レストランに行くんだからさ、何か箒にプレゼントしたいんだけど、何が良いか思いつかなくて……」

一夏は頬を赤く染めて少し恥ずかしがりながら言う。

《ほう。一夏、なかなか気が利くじゃないか。箒にプレゼントか……》

《なら、やっぱり箒が心から感動するのが良いよな》

「親父、だったら俺に良い考えがあるぜ」

月夜が軽く手を挙げ、一夏の期待が高まる。

「男女二人で高級レストランのディナーと言えば、もちろんあれしかないぜ！」

「あれ？」

「ただ、親父にはそれなりの負担がかかるけどな」

一夏の瞳には、何かを企んでいる目をした月夜の姿が映った。

そして、雑誌の取材と撮影日当日。

箒は黒のミニスカートに白ブラウス、アウターに薄手の秋物パーカーコートを着て、しっかりとおしゃれをする。

「箒、その服、凄く似合っているぜ」

「そ、そうか？ あ、ありがとう、一夏」

「じゃあ、寒いから手を握って行くか」

「う、うん！」

一夏は箒の手を握り、箒は一気に体が熱くなる。

そして二人は雑誌編集部まで手を繋いで向かった。

その二人を後を三人の子ども達が尾行する。

「ママ、可愛い〜♪」

「まだ16だからな、お袋も初々しいな〜」

星奈と月夜は過去の母の初々しく可愛らしい姿に思わず声がこぼれた。

「……ところで兄様」

あまり乗り気でない風音が月夜に問う。

「ん？ 何だ？」

「私達はこんなことをして良いのでしょうか？ 私達の目的を忘れていませんか？」

そもそも三兄妹が過去の世界に来た理由はアルミサエルと三幻魔を倒して未来の世界を救うためである。

「俺がただ単に親父達と学園生活を送ってただけだと思うか？
毎晩俺は、紅月の空間跳躍で世界中を飛び回って情報収集をしていたんだよ」

「そ、そうだったんですか？ すみません、兄様。生意気な事を言

ってしまつて……」

風音は驚き、すぐに謝罪する。

「いや、謝ることはない。世界中を飛び回っても全くと言っていいほど情報が集まらないんだ」

「情報が集まらない……？ それはもしかして、何か大きな力によつて情報が隠蔽されているという事でしょうか？」

月夜は一つ頷く。

「ああ、俺はそう考えている。楯無生徒会長とI S学園学園長、アポリアとパラドックスにも協力してもらつてるけど、今のところ成果はない。だから、俺は待つ選択をしている」

「待つ、ですか？」

「俺達がヤツらの周りを引っ搔いて行けば、必ず邪魔者と判断して刺客を送ってくるはずだ。そいつらを叩き、情報を聞き出す」

「なるほど、相手の出方をじっくりと待ち、出てきた尻尾を逃さず掴む、ですね？」

「そう言う事だ。嫌でもその内辛い戦いが始まる。だから、今の内に過去の世界で楽しんでおくんだよ」

月夜は風音の頭をポンポンと軽く叩いて、尾行の続きをする。

（やっぱり、兄様には適いません……）

月夜は常に先のことや周りのことを考えて行動している。

そして、一夏と同じように大切なものを守るために全力で立ち向かう勇気を持ち合わせている。

双子と言っても、これだけの差があると風音は実感しているのだ。

（私も兄様のように強くなりたい。私もみんなを守りたいから！）

風音は決意を再び固めて月夜と星奈の後を追う。

一夏と箒の取材を担当するのは、IS学園新聞部のエースの黛薰子の姉である『インフィニット・ストライプス』の副編集長の黛渚子である。

まず始めに二人にインタビューをする。

記事になりそうな質問を渚子から一夏と箒にしていく。

しかし、質問の半分以上は一夏と箒の恋人同士に関するものであり、二人は顔を赤く染めながら質問に答えた。

そして、写真撮影へと移り、一夏と箒はスポンサーから用意された服に着替える。

更衣室に入った箒は用意されたモデル衣装の大胆さに気がつく。

「う……。こ、これは……」

かなり大胆に胸元が開いたブラウスに、フリルが可愛いミニスカート、ショート丈のジーンズアウターだった。

（こ、こ、これを着るのか！？ わ、私が！ この私が！）

いつもの箒なら絶対に選ばないであろう服を目の前にして、完全に固まってしまった。

（いや、しかし、ううむ……。こ、これは、いい機会なのかもしれないな……。これで普段とは違う私を見せて一夏を魅了して、今夜はいっぱい愛してもらおうぞ……。うふふふ！）

モデル衣装を抱きしめながら、一夏との今夜の営みを楽しみにする箒の心が大暴走する。

「よし！ 着るぞ！」

ぐぐぐと握りしめた拳を上げながら、箒は勢いよくブラウスのボタンを外していった。

箒はスタジオの椅子にかけたまま一夏が来るのを待っていた。

その隣でデブリ・ドラゴンがD・カメランとD・ビデオンと共に撮影の準備をしている。

「すみませーん、遅れましたー。織斑一夏くん、入りまーす」

メイク室からスタジオスタッフの声が聞こえた。

「うーん、なんかこれ変じゃないですか？」

一夏の声がし、箒は心臓が弾んだ。

「ぜーんぜん！ 超似合っているわよ。十代の子のスーツ姿っていうのもいいわねえ」

（す、スーツ！？）

箒は一夏の方へと振り向く。

「あ……………」

そこにいたのは、カジュアルスーツを着こなした一夏で、箒の目にはかなり……とても、すごく、格好良く映った。

「い、一夏……」

「お、おう。待たせたな、箒」

「う、うむ……」

一夏と箒は、お互いが普段着ないような魅力的な服装に見とれてしまふ。

「に、似合っているな……。その、なんだ。わ、悪くないぞ」

「お、おう。サンキュ。箒も、その……可愛いぞ」

一夏に可愛いと言われ、箒は少し心配になりながら聞いた。

「ほ、本当か……？ 変じゃないか？」

「当たり前だろ。似合わない訳ないじゃないか……」

一夏は箒の頬に触れ、一夏は思わずそのままキスしそうになる。

「ちょっと！ お二人がラブラブなのはいいけど、撮影始まるわよ！」

渚子に指摘され、一夏と箒は正気に戻る。

「「す、すみません……」」

一夏と箒は頭を下げて謝罪し、撮影を開始する。

.

第107話 見つめ合う二人（前書き）

一夏と箒の相変わらずのバカップル度に書いている私は大撃沈（爆笑）

自重するつもりはアリマセーン！！

ε||ゞ（*~▽~）ノ

第107話 見つめ合う二人

撮影ブースで一夏と箒の撮影が始まり、言われるままにあれこれとポーズを変えていく。

（さっきはびっくりしたなあ……）

一夏はなるべく箒を見ないようにしながら撮影を続けるが、ついつい箒に視線が移っている。

（まさか、箒があんなに変わるとは……。メイクってすごいな）

一目見たとき、あまりの綺麗さに見違えてしまった。

次に胸元と太ももを露出した大胆な衣装にドギマギした。

（いつもの箒なら絶対に着なさそうだな……）

意外性と言うべきか、ギャップと言うべきか……普段でも十分一夏の目には箒は可愛く見えているが、今日は別段にそう思えた。

（なんだろう。いつもの和服や私服と違って大人びているっていうか、その……やべえ、また箒に惚れ直しちゃったじゃないか……）

これで何度目かわからない、惚れ直した一夏は以前よりもっと箒を大好きになってしまった。

「織斑くん、篠ノ之さんともっとくっついて。もっと」

渚子がいきなりそう言い、一夏と箒は戸惑いながらくつついた。

同じソファーに座っている一夏と箒は距離と場所を詰める。

「うーん、なんか並んで座っているだけって絵にならないわねー。
織斑くん、篠ノ之さんの腰を抱いて」

「……は？」

「こ・し・を・だ・い・て。早く！」

「は、はいっ！」

プライベートなら何の問題なく箒の腰を抱けるが、撮影と言うこと
もあるのでかなり緊張しながら一夏は箒の腰に手を回す。

箒の体が触れた瞬間、ふわっ……と甘いバニラ・パフュームが広がる。

「!！」

「あ……」

小さく声を漏らす箒。

その唇には淡いピンク色のグロッシー・ルージュが引かれていて、
そこから漏れた響きはたまらなく艶めかしく聞こえた。

一夏は体中に熱が籠もり、今すぐにも箒に貪るようにキスをして
襲いたくなった。

（お、落ち着け、落ち着け、落ち着け……）

そんな言葉を頭の中で繰り返しながら、一夏は溜まった唾を飲み干す。

「んー。いいんだけど、もうちょっとインパクトが欲しいかな」

のぞき込んでいたカメラから顔を離れた渚子は、腕組みをして天を仰ぐ。

そんな渚子にデブリ・ドラゴンがちょんちょんとつつく。

《なあなあ。俺に良いアイデアがあるぜ》

「ん？ 何かな？ 言ってみて」

デブリ・ドラゴンはニヤリと微笑む。

《一夏が箒をお姫様抱っこをすれば良いんだよ♪》

ばちん！ と、渚子は指を鳴らす。

「それ、いいわ！ 織斑くん、篠ノ之さん、やって！」

満面の笑みだった。

（ああ、もう！ こうなったら自棄だ！！）

一夏は腹をくくり、箒を更に抱き寄せて空いている腕で両足を自分

の方へ持ってくる。

「あっ、一夏……」

箒は艶めかしく、甘い声を漏らす。

「ごめん、ちょっとだけ我慢して……」

一夏は箒の瞳を見つめながらまるで自分だけのモノだと証明させるかのように、ソファーに座ったまま箒をお姫様抱っこをする。

箒はそのまま流れに身を任すようにし、自然に一夏の首に腕を絡めた。

二人の距離は一気にぐっと近づき、何とも言えない空気を纏うのだった。

（箒の目、綺麗だな……）

（一夏の目、綺麗だ……）

昔から変わらないお互いの目をじつくりと見つめる二人。

二人は無意識にキスをするようにゆっくりと顔を近づける。

カシャッ！

突然のフラッシュに、一夏と箒は我に返る。

「んんゝ。いい絵が撮れたわ♪」

《こっちも久々に良いのが撮れたぜ!》

渚子とデブリ・ドラゴンは満足そうに頷いた。

一夏と箒は今更に恥ずかしくなり、ぱっと弾かれたように離れる。

「……………」

渚子はそんな二人を見て屈託のない笑みで親指を立てたグッジョブサインを向ける。

「はい! お疲れさま! じゃあ、ふたりともぽぽっと着替えちゃって。あ、服はそのままあげるから、持って帰っちゃって!」

「は、はあ……」

「わ、わかりました……」

「えーと、ディナー券は後日携帯電話にデータ転送してあげるから、帰る前にアドレス教えてね。それじゃあおつかれ!」

フットワークの軽い渚子に押され、一夏と箒は若干グクシヤクシナから更衣室に向かう。

「そ、それじゃあ、箒」

「な、なんだ?」

「き、着替えに行こうぜ」

「あ、ああ」

二人は来たときの服に着替えて雑誌編集部から出る。

手にはモデル衣装が入った紙袋を持っている。

「な、なあ、箒」

「な、なんだ？」

二人は未だにギクシャクしている。

「そ、その服さ……また着てくれないか？」

「これ、をか？」

「い、嫌なら、いいんだけど……」

「考えておく……」

そして、そんな二人の空気を取り払うかのように可愛い声が響いた。

「パパ〜♪ ママ〜♪」

「「せ、星奈!?!」」

星奈がテテテと二人に駆け寄り、箒が抱き上げる。

「あちゃー、しまった……」

「星奈は少々我慢弱いですから……」

仕方なく月夜と風音も出てくる。

「月夜と風音まで……まさか」

「私達をずっと尾行していたのか?」

「「はい……」」

言い訳が出来ないと諦めた二人は大人しく本当の事を言う。

「星奈に頼んで監視カメラにハッキングして二人の撮影を覗き見していました……」

「私はブレーキ役として止めるべきでしたが、私も見入ってしまいました……」

月夜と風音は膝を地面について、一夏と箒に土下座をしようとする。

「い、いや、別にお前達なら構わないぞ?」

「もちろんだ。やり方は少々危ないが……」

一夏と箒は二人を立ち上がらせる。

すると。

ぐうぐうっ！

「「「ん？」「」」」

四人の視線が星奈に向く。

「ううっ……パパ、ママ、お腹すいたよ。ご飯食べたい……」

星奈のお腹から腹の虫になり、我慢出来なくなったのだ。

「ははっ！ もう遅いからな。よし、みんなで外食するか」

「わーい！」

「月夜と風音も食べるだろ？」

「ああ、俺も腹減ったよ」

「はい、私もお腹が空きました」

月夜と風音も腹を手で撫でながら同意する。

「それじゃあ、みんなでどこかで食べようか」

箒も外食をしようと考えていたので、ちょうど良かった。

「そうだな、みんな行こうぜ！」

織斑家の親子5人はそのまま仲良く外食に出かける。

おまけ。

デブリ・ドラゴンは早速龍星経緯でIS学園に戻ると、束に連絡する。

《こんばんわ》

『はい♪ おはよう、こんにちは、こんばんわ、束さんですよー♪』

《今回もお宝盛りだくさんだぜ！》

デブリ・ドラゴンは本日撮った写真を束に見せる。

『おおっ！ 遂に箒ちゃんといっくんがモデルデビュー！？ あま

り興味がなかったけど、その雑誌を保存用と閲覧用、その他数百通りの使い方のために大量購入しますか!』

《その他数百通りって何だよ? 後は……織斑三兄妹のこれは?》

デブリ・ドラゴンは月夜、風音、星奈の写真を見せる。

『おおおっ! いいね、いいね! 可愛いよ、我が愛しの甥っ子と姪っ子達よ!!』

《それじゃあ……いつもごひいきにしてもらってる束さんにこれをプレゼント!》

取って置き の二枚を束に送る。

『……ぶはあっ!!』

《束さん!?!》

『ごめんごめん……あまりの刺激に束さん、鼻血が出ちゃったよ』

束に送った写真は月夜がシャワーを浴びる前に服を脱いだ時と、シヤワーを浴びている時のセクシー写真だった。

月夜の大事な所はギリギリ隠れているが、恋人の束にとっては最上級の刺激的な写真である。

『ああっ、つくくんカッコいいよ……この服の下に隠れている無駄な脂肪と筋肉が無い引き締まった肉体……もう、今すぐ抱き締めてもらいたい!!』

《何なら今すぐ月夜を誘拐してホテルにでも連れてけば？ 月夜、絶対に喜ぶぞ？》

大興奮大暴走の束にデブリ・ドラゴンが呆れながら言う。

『そうしたいところだけど、束さんは今とっても忙しいの！ だから、私の初めてをつっくんに捧げるのはまた次回の機会にするよ！』

《そうですか……》

『デブリくん、それじゃあね！』

《はいはい》

デブリ・ドラゴンと束は連絡を切る。

束は月夜のセクシー写真を見て体をくねくねさせ、自分をギュッと強く抱き締める。

「つっくん、待っててね。近い内に必ず私の純潔を捧げるからね！」

絶賛大興奮大暴走中の束を止められる者は誰も居なかった……。

「……………ん？」

「兄様、どうしました？」

「今、男として感無量の言葉を聞いた気がする」

「は？」

第107話 見つめ合う二人（後書き）

次回は五反田食堂で……あれ？

内容はどうしよう!？

Σ（□□）!？

軽く修羅場になりそうな……。

第108話 夕食時の修羅場？（前書き）

少し更新が遅くなりましたが、五反田食堂の修羅場です（笑）

次回も迷いますな……。

第108話 夕食時の修羅場？

五人は外食をするために駅に向かったが、どこも満席だった。

すると、一夏がいい店を知っていると言い、その店に行くことになり、20分後に目的の店に着いた。

「ここだ」

「五反田食堂……？」

「そう。前に言っただろ？ 俺の友達の実家だよ」

もちろん弾と蘭の実家で、一夏がよく行ってる定食屋である。

「そ、そうか……」

少しロマンチックな店を期待していた筈はがっくりと落胆する。

そんな母を見た月夜は隠し持っていた愛刀を取り出す。

「親父……」

「ん？ どうし——って、何で月夜は刀を構えているの！？」

月夜は怒気を放ちながら愛刀を構える。

「阿呆親父！！ 少しは女心を知れえ！！！！」

「や、止め、親に刃を向け……ギャアアアアアアアアアアアッ
！！！！」

月夜は峰打ちである程度一夏を痛めつけ、五人で店の中に入る。

「お、弾だ」

「あれ！？ 一夏じゃん！」

店の中は半分ほど客席が埋まっており、エプロンをした弾が料理を運んでいる。

「あ、どうも、篠ノ之さん」

「ああ、この前の誕生日以来だな」

「それと、その三人は？ 妙に一夏と篠ノ之さんに似ている気が……」

弾は月夜達を見る。

「俺は織斑月夜。俺達は親父とは織斑家の少し離れた親戚なんだ」

月夜は未来から来た二人の子供とは言わずに、千冬が考えた親戚の設定をそのまま使う。

「何で……親父？」

弾は疑いの目をする。

「……昔死んだ、俺達の両親と二人がよく似ているから、ついそう呼んじゃうんだよ」

月夜が見事な演技で暗い表情を見せると、弾は疑いを消してすぐに信じて謝る。

「ご、ごめん！ 嫌なことを思い出させちゃって」

「いや、構わないさ。それより、席に案内してくれるか？」

「あ、ああ……」

弾は五人を空いている席に案内する。

「じゃあ、注文が決まったら呼んでくれ」

そう言って、弾はカウンターの中に戻っていく。

「月夜、演技上手いな」

「平常心を保てばこれぐらい親父にも出来るよ」

一夏と月夜は周りに聞こえない小声で話す。

「さてと、俺は焼き魚とフライの盛り合わせにしようかな。みんなは？」

「私は業火野菜炒め定食にする」

「俺はトンカツ定食にする」

「私は天ぷら定食にします」

「星奈はエビフライー！」

「了解。おーい、弾ー。注文いいか？」

「ほいほい。俺は焼き魚とフライの盛り合わせ定食。箸は業火野菜炒め定食。月夜はトンカツ定食。風音は天ぷら定食。星奈はエビフライ定食で」

「ん、了解。じゃあちよつと待っててくれ」

伝票をぱぱと書いた弾は、それを調理場へと持って行く。

——と、そこで五反田食堂の店主であり、弾の祖父である厳が一夏に気づいた。

「ん？ 一夏じゃねえか！」

「あ、どうも。お邪魔してます」

「おう。なんだなんだ、彼女と子供連れか？ ガッハッハッ！」

「彼女は合ってますけど、この三人は俺の親戚の子です」

「おーい！ 蘭！ おーい！」

母屋に向かって大声を出す厳。

「なにー？」

二階から声が返ってきた。

「店に来い！ 急いでな！」

「なんでー？」

「いいから来い！」

祖父の厳に呼ばれた蘭は数分後に食堂入り口からやって来た。

「おじいちゃん、何？ 私、宿題やってたんだけどーって、ええっ！？」
一夏さん！？」

「よっ」

蘭は自分の格好と一夏の姿、それに箒達に交互に視線をやってから耳まで真っ赤になって玄関を飛び出していった。

「なあ、風音……この後嫌な予感がするのは俺だけか？」

「兄様、その予感私も感じています……」

それからさらに10分後。

「い、いらっしやいませ、一夏さん……」

お出かけ着にエプロン装備をした蘭が登場やってきた。

看板娘の登場に、食堂内の男性客は大いに湧いた。

ちらっと箸や月夜達を見た蘭は心の中でしょんぼりと小さくなる。

月夜達の事は弾から既に話を聞いているので、事情は知っている。

（何か、本当の家族みたい……）

蘭の思っていることは事実、正解している。

（羨ましい……）

そう思いながら蘭は出来上がった料理を一夏達に運んだ。

「じゃあ、いただきます」

「」「いただきます」「」

五人は手を合わせてから、早速おかずに箸を伸ばす。

「今日の魚は鮭か。うん、うまいなあ」

「おお。これは……うまいな。醤油の味付けがいい」

「トンカツ、うまっ。衣が軽くてサクサクしてる」

「こっちの衣も軽くて食べやすいです」

「エビフライおいしい」

五人は料理の美味しさから声を漏らす。

「な、なあ、一夏。私の業火野菜炒め、少し食べてみるか？」

「いいのか？　じゃあ早速――」

一夏は箸の更に手を伸ばすが、ごほんごほんと咳払いが遮る。

「た、食べさせてやろう……」

「え？　あ、うん」

「あー、星奈も星奈も！」

「ああ、わかった。星奈、少し待ってろ」

「うん！」

箸は肉と野菜を箸でつまむと、それに左手を添えて一夏の口元へと運ぶ。

「あ、あーん……」

「あー……」

「あああああっ！」

一夏が食べようとしたところで、蘭が大声で叫んだ。

「こ、こほん。改めて――あ、あーん」

「あー」

「ううううっ！」

またしても蘭が大声を上げた。

さっきから何事かと他の客までもがざわざわと騒ぎ出した。

「なんだなんだ？」

「あそこの五大家族が原因か？」

「蘭ちゃんを泣かせたら容赦しねえ！」

「そうだそうだ！」

わーわーと声を上げる男衆、それを「うるせえぞ！」と一蹴する厳。

「……風音」

「わかっています。いつでも準備は出来ています」

月夜と風音はいつでも動けるように心だけ戦闘態勢に入る。

箒はこうまで注目を浴びてしまっでは「はい、あーん」などできるはずない。

「ママ」

「なんだ!？」

「あーん」

ぱくつ。

星奈が差し出したエビフライを、箒は反射的に食べる。

「ママ、おいしい?」

「あ、ああ。ありがとう、星奈」

「ママのも食べさせて」

「わ、わかったぞ」

エビフライをしっかりと飲み込んだ箒は業火野菜炒めを星奈に差し出す。

「もぐもぐ……ごっくん。野菜いため、おいしい!」

「羨ましいな、星奈」

「じゃあ、私のエビフライをあげるからパパのも頂戴」

「ああ、どれがいい？」

端から見れば家族の楽しい食事の光景。

しかし、一人だけ快く思わない者が一人。

「あああああの、おおおお水ををを……」

テーブルに蘭がやってきて、ぶるぶると震える手でグラスを手に取り、ポットから水を注ぐ。

しかし、ショッキングな光景が目には焼き付いて離れないらしく、ばしゃばしゃと水をこぼしまくった。

「おわっ！？ ど、どうした蘭、大丈夫か？」

「ええええええ、だだだだいじょうぶですよ。あは、あはははは……」

蘭の目に大粒の涙が浮かんた。

「ら、蘭？」

「な、なんでもないんです……なんでも……」

そう言ってけなげに涙をぬぐってみせる蘭は、笑みを浮かべようとするとがんばるもののうまいかず、さらに涙が溢れ出した。

「ど、どうした!？」

「う……うええええん！」

だだだーっと、食堂から猛ダッシュで出て行く蘭を、一夏達はあつけにとられて見送る。

「……お袋。もしかしくても五反田蘭は親父を……」

箒は額に手を添えて頷いた。

「なるほどな……親父が好きだけど、恋人が出来て、見事に失恋した。だけど、未だに諦めていない……そして俺達の仲睦まじい光景に絶望したか」

月夜は一夏には無い恋愛に対する感が冴えているので、蘭が何を思ったのか簡単に予想出来た。

「親父、今すぐ追いかけた方が良いぞ。邪魔者は俺が排除しておくから」

「邪魔者？」

「あれだ」

月夜が指さすと屈強な体の男たちがずらっと並んで道をふさいだ。

「村上信三郎、四二歳、建築業！」

「山本十蔵、三九歳、土木業！」

「吉岡修一、四七歳、運送業！」

「寺田克巳、三四歳、サービス業！」

「クリス・マッケンシー、二九歳、自営業！」

いきなりの名乗りとともにポーズを決める五人組。

その後ろには爆炎のエフェクトが見えた気がした。

「我ら蘭ちゃんファンクラブ同盟！」

「は、はぁ……」

「いい歳をしたオッサン共が……恥ずかしくないのかよ？」

一夏と月夜はため息をつく。

「というわけで死ねえ！！」

一斉に一夏に襲いかかってくる五人。

月夜は一夏の前に出て右手を手刀にして構える。

「逝ねや」

月夜は一瞬で五人の間合いに入り、脇腹に手刀を打ち込んで、五人をしばらく動けなくする。

「すげえ……」

「ま、師匠が千冬姉だからな。ほら、早く行けよ」

「あ、ああ！」

一夏は蘭を追いかけるために玄関を出ようとするが、巖が一夏の腕を掴んだ。

「げ、巖さん……」

「おう、一夏よう……外に行こうや」

びききつと血管が顔に浮かんでいる。

可愛い孫娘を泣かせたことに、怒り心頭だった。

「おい、爺さん」

月夜が巖を心配そうに見る。

「何だ、小僧？」

「……死期を早めたくなかったら今すぐその手を離しな」

「あ？」

チャキ！

突然、厳の首もとに木刀の刀身が突きつけられる。

それは眼を鋭く細め、静かな殺気を体から出している風音だった。

「父様を傷つけようとするなら、私はあなたを許しません。そもそも……あなたのお孫さんが泣いたのは、父様を諦めきれない彼女自身の弱い心の責任では？ 父様は何も悪くありません」

いつもと比べてかなり厳しい言葉を並べる月夜に一夏と箒は少しだけ戦慄する。

「……ふん」

厳は一夏の腕を離した。

「一夏、とっとと蘭を連れ戻してこい！！」

「は、はいっ！！」

一夏はすぐに玄関を飛び出して蘭を探しに行き、厳は風音に軽く頭を下げる。

「すまねえな、お嬢ちゃん。俺は昔っから蘭のこととなると頭に血が上ってしまっただけ……」

厳の謝罪に風音から殺気が消え去り、いつもの優しい表情に元に戻る。

「いえ、私こそ申し訳ありませんでした」

風音も頭を下げて謝罪する。

取りあえず一安心した月夜は席に戻り、水を飲む。

（相変わらずキレイな時の風音は怖いな……）

風音は普段は穏やかな性格だが、家族に危害が加わるとその性格が変貌してしまい、兄の月夜でも手が着けられなくなるのだ。

まさに怒らせたら一番怖いタイプなのである。

（さて、親父は大丈夫かな？ ……心配だからこっそり見に行くか）

「お袋、少し夜風に当たってくるわ」

「ああ、わかった」

月夜も玄関を出て、こっそり一夏の後を追った。

第109話 箒の想いの強さ（前書き）

今回は短めですいません。

次回にはタッグマッチバトルがスタートすると思います。

第109話 箒の想いの強さ

「ふぐっ……。ううつ……」

近所の公園のブランコで、ひとり蘭は落ち込んでいた。

その顔はさっきまで泣いていたようで、目が赤くなっている。

「おい、蘭〜！」

探しに来た一夏が息を切らしながら蘭を見つけた。

「はあっ、はあっ、はあっ……。ここにいたのか……」

「い、一夏さん、どうして……」

「はあっ……。はあっ……。どうしても何も、いきなり飛び出して
いったら心配するだろうが」

乱れた呼吸を整えて、顔を上げる一夏。

「さあ、家に帰ろうぜ。みんな心配しているからさ」

一夏は手を差し出すが、蘭は俯いて動かなかった。

「蘭……?」

「一夏さん!」

蘭は唐突に一夏に抱きついた。

「ら、蘭!？」

一夏は当然驚き、体が動かなかった。

蘭は一夏の胸にうずくまりながら口を開いた。

「どうしてですか……?」

「な、何を?」

「どうして私じゃなくて箒さんなんですか!？ 私じゃ……私じゃ、一夏さんの恋人になれないんですか!？」

それは、失恋した少女の辛い恋心から弾けた言葉だった。

一夏は困り果てながら自分の気持ちを正直に告げる。

「俺は……誰よりも箒を愛している。この気持ちが揺らぐことはないんだ……」

しかし、蘭はそれでは納得がいかなかった。

「私は……一夏さんの為なら何だってします! だから、だから……」

蘭は顔を一夏に近づけて無理やりキスをしようとする。

「待ちな!!」

そこに一夏の後を付けていた月夜が現れ、蘭を一夏から引き離す。

「月夜、お前どうしてここに？」

「ちょっと親父が心配で後を付けてきたんだよ」

月夜は蘭を見る。

「さて……蘭だっけ？ 親父抜きで、少し俺と話をしないか？ あんたの疑問を俺が答えてやるよ」

「月夜さん……」

「親父。悪いけど、少し待っててくれ」

月夜は蘭を引っ張って少し離れたベンチに行って蘭を座らせる。

「それじゃあ、話すけど……いいか？」

月夜は一応蘭に確認をとり、蘭はコクつと頷いた。

「よし。さて、蘭がお袋に負けているもの。それは……親父に対する、誰にも負けない強い『想い』だよ」

月夜の蘭が箒に負けているモノに、蘭は首を傾げた。

「想、い……？」

「親父とお袋が小さい頃からの幼なじみだったのは知っているよな

？ だけど、小学校四年の時に家の事情で転校する羽目になり、離れ離れになったんだよ」

「それが、何ですか？」

蘭は月夜の言ってる意味が分からず、月夜はヤレヤレと言った表情でため息を一つついた。

「わからないのか？ お袋はIS学園で親父と再会する、少なくとも六年以上も親父を想い続けているんだよ。転校して離れ離れになってもな」

「っ!？」

月夜から話される事実には、蘭は言葉を失い、絶句した。

「いくら心底惚れていると言っても、離れ離れになっては二度と会えないかもしれない……普通なら、その恋を諦めて次の恋を求めるだろ？ だけど、それでもお袋は親父との再会を夢見て、ずっと想い続けた……」

月夜は夜空を見上げながら右手で自分の髪に触れる。

「しかも、見た目を特に気にする年頃の女の子が、親父が昔褒めてくれたポニーテールの髪型を昔からずっと変えずに、今でも貫き通している」

そして、月夜は結論を蘭に言い渡す。

「つまり、お袋の親父に対する想いは、あんたを含めて他の誰より

も強く、深いんだよ。だから、お袋の想いを親父が応えた。それだけだ」

月夜から結論を聞かされた蘭は自分の手を見て呟いた。

「……一夏さんに対する、強くて深い想い、か……」

蘭をその手を握りしめて思う。

（私の一夏さんへの想いは誰にも負けていないと思っていた。だけど、私は会いたい時にいつでも会えるけど、箒さんは違った。転校で六年も離れ離れになっても、一夏さんの想いは変わらなかった。私にはきつと、耐えられない……凄いな、箒さんは……）

蘭は悲しみに支配されていた心が穏やかになっていく。

（一夏さんの隣にいるのに相應しいのは箒さんだけだ……私が前に進むには……）

蘭の表情を見た月夜はフツと笑みを浮かべて叫んだ。

「おーい、親父！ そろそろ出てきたらどうだ？」

「えっ!？」

「あはは……ばれたか。月夜には適わないな……」

蘭が振り向くと、夜の闇に紛れて見ていた一夏が出てくる。

「ほら、とつとと腹をくくりな」

「わ、わわっ!？」

月夜は蘭の背中を押すように叩いて一夏の前に行かせた。

蘭は一気に緊張したが、ありったらの勇気を振り絞った。

「あ、あの、一夏さん！」

「お、おう！」

「わ、私……一夏さんのこと、会った時からずっと大好きでした！」

蘭は自分の想いを一夏に全てぶつけ、一夏が応える前に蘭は次の言葉を繋げた。

「それから……箒さんと末永く幸せになってください!!」

蘭は自分の恋に区切りをつけるため、新しい次の一步を踏み出すために、一夏と箒を祝福した。

一夏は蘭の頭を撫でて微笑んだ。

「蘭……ありがとう」

その後、蘭を五反田家に送り届け、一夏達はIS学園へ戻った。

IS学園の学生寮に戻ると、月夜と風音は星奈を自分の部屋に連れていく。

「今日もパパとママと一緒に寝るの〜!」

「はいはい。今日は風音と一緒に寝てやるから我慢しなさい」

「それでは、父様、母様、お休みなさい」

「イヤ〜ッ! パパー! ママー!」

星奈は駄々をこねながら月夜と風音に連れてかれたのだった。

そして、一夏と箒は久々に二人っきりで部屋に入る。

「あの……一夏、少し待ってくれるか?」

箒は突然そう言うと、更衣室に入った。

数分後、更衣室から出てきた箒を見た一夏は心臓の鼓動が早くなる。

「箒……それ……」

箒の服装は数時間前に撮影の時に着た、胸元が開いたブラウスに、フリルが可愛いミニスカート、ショート丈のジーンズアウター

だった。

「い、一夏がまた着てくれて言ったから……」

軽く化粧し、唇には撮影の時と同じ淡いピンク色のグロッシュー・ルージュが塗られていた。

一夏は衝動的に箒をベッドに押し倒し、撮影の時には出来なかった貪るようなキスをする。

「ふわあっ、んちゅ……くちゅ……一、夏、激し……んんう！」

箒は今まで以上に激しいキスに戸惑ってしまう。

一度、一夏は箒の唇から自分の唇を離れた。

二人の口には唾液によって作られた銀の糸が結ばれ、すぐに切れた。

「箒……今日はその服を脱がさないでやるから……」

箒の顔は真っ赤に染まり、両手で頬を隠す。

「一夏……その、今夜はいつもより、いっぱい私を愛してくれ……」

「箒……!!」

魅力的な言葉に一夏は興奮し、再び箒の唇に貪るようにキスをする。

「さて、親父とお袋は今頃盛んにやってるかな♪」

「兄様、変態ですね」

「男はみんなそうさ。俺もいつかは束姉と……」

「はぁ……私も早く素敵な男性と出会いたいものです」

「ううっ……パパ……ママ……」

第109話 箒の想いの強さ（後書き）

この話を書いてて、箒ちゃんは本当に凄いなと思いました。

いくら心底惚れているとは言え、転校で離れ離れで六年以上も片思いをしているのは普通に考えれば凄いですよね。

箒ちゃんの一夏への一途な想いは羨ましいですね。

アニメのブルーレイの設定資料集で、日笠さんも箒ちゃんは凄いなと言っていましたし。

だからこそ私は一夏×箒が好きなんだと実感しました。

第110話 激しき嵐の前の静けさ（前書き）

次回は予定通り、タッグマッチができそうです。

今回は龍亞くんがかなりやっちみました（笑）

第110話 激しき嵐の前の静けさ

専用機持ちのタッグマッチの参加締め切りが数日後に迫り、遊星はアキ、ジャック、クロウ、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラを呼び出した。

「呼び出してすまないな。実は、今度のタッグマッチのパートナー決めを俺達で組もうと思ってな。どうせなら、普段あまりない組み合わせで戦いたいんだが、みんなはどうだろう？」

アキ達は事前に遊星から話を聞いていて既に承諾しており、セシリア達の答えを待つ。

「構いませんわ。私達にとってはいい経験になりますし」

「私も賛成よ。面白そうじゃない」

「僕もちろん参加するよ」

「私もです。それで、組み合わせはどうしますか？」

遊星は頷いて咳払いをする。

「各自のスキルとISの性能からパワーバランスが均一になるように俺が考えた」

遊星が自分で考えた組み合わせを発表する。

「セシリアはジャックだ」

「はい！　よろしく願いします、ジャックさん」

「ああ、こちらこそよろしく頼む」

「鈴音はクロウだ」

「へえー、足引っ張らないでね、クロウ」

「へっ、こっちの台詞だぜ」

「シャルロットはアキだ」

「が、頑張ろうね、お母さん！」

「ええ。やるからには優勝よ！」

「そして、ラウラは俺とだ。よろしく頼む」

「は、はい！　よろしく願いします、父上！」

遊星が考えた組み合わせに全員に不満は無く、その組み合わせで決定した。

そして、早速タッグで訓練するためにISアリーナに向かった。

しかし、そこでは先客がおり、激しい戦いを繰り広げていた。

「バーニング・ヘル・ストライク!!」

「甘いわ、清き熱情!!」
クリア・パッション

エンシェント・ゴッド・フレムベルの地獄の業火を纏った龍可の拳と、楯無のミステリアス・レイディのナノマシンで構成された水が衝突することで、フィールドを大量の水蒸気が覆い尽くした。

楯無は蛇腹剣『ラストイー・ネイル』を持ち、鞭のように振るって刃が生き物の蛇のように龍可に襲いかかる。

「『エンシェント・ホーリー・ワイバーン』!」

龍可は上空へ回避すると同時に、フェアリー・ガーディアンをエンシェント・ゴッド・フレムベルからエンシェント・ホーリー・ワイバーンにフォルムチェンジして雷雲を生み出す。

「ライトニング・ブラスト!!」

ラストイー・ネイルのお返しと言わんばかりに、聖なる雷が楯無に落ちる。

「ふうー……はっ!」

楯無は落ちてくるライトニング・ブラストを全て見極めて瞬時加速で避ける。

「やるわね、龍可ちゃん。でも！ それじゃあ、まだまだお姉さんに傷一つ付けられないわよ！！」

「まだまだこれからです、楯無さん！！」

遊星達は自動販売機で購入した飲み物を飲みながら観客席から見学している。

「珍しく気合いが入っているな、龍可……」

保護者である遊星は気合いの入っている龍可の姿を見て心配そうに見る。

「疲れて倒れなきゃいいが……」

「そうね……ねえ、龍可に何があったか誰か知っている？」

アキが聞くと、缶コーヒを飲んでいるジャックが額に汗をかいて話す。

「龍亞が楯無の妹の簪とタッグを組んだのは知っているな？ 龍可
はそれに嫉妬したんだ……兄の龍亞を奪われたみたいに思っ
てな」

「「「ブラコン（ですね）（じゃない）（だね）（か）……」」」

セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラは同時に口が開いてそう言
った。

「しっかしな……龍亞がシスコンなのは知っていたが、龍可がブラ
コンに目覚めるとは……」

クロウが言うと、遊星は顎に手を添えて最近の龍亞と龍可の事を考
える。

「そう言えば、キャノンボールファストと一夏の誕生日があつたそ
の次の日から、龍亞と龍可の仲が以前より良くなったような……」

「良く気づいたな、遊星」

ビクッ！！

『っ！？！？』

いつの間にか遊星達の後ろにアポリアが立っており、遊星達は驚愕
する。

「9月28日早朝、私は恋人同士のように仲睦まじく歩いている龍
亞と龍可の姿を目撃した」

「ふっ……別にあり得ない事ではないだろう」

今度は不気味な笑みを浮かべたパラドックスが現れた。

「太古の昔から人間は他人より親族関係の人間に本気で恋したりすることは山ほどある。古代社会の王族では近親結婚が行われた例があるぐらいだからな」

人間の禁忌の一つについて話すパラドックスに遊星は立ち上がって睨みつける。

「パラドックス、何が言いたい……?」

「くっくく……さあな。さて、これから私は少し用があるのでこれで失礼させてもらう」

パラドックスは言いたいことだけ言い、そのまますぐに立ち去り、遊星達は嫌な予感が心に残った。

一方、別のISアリーナでは龍亞と簪が訓練をしていた。

先日完成した打鉄式式の微調整と、簪が打鉄式式を少しでも完璧に乗りこなすための実践訓練である。

「少し……休憩しようか」

「うん！　ねえ、簪姉ちゃん。打鉄式式の調子はどうかな？」

「大丈夫、順調だよ。龍亞君が手伝ってくれるから」

簪は優しい笑みを浮かべ、龍亞もそれに吊られて笑みを浮かべる。

簪は打鉄式式を解除し、荷物から袋を取り出す。

「カップケーキ、焼いたけど……食べる？」

手作りのカップケーキに龍亞の目がキラキラ輝く。

「食べる食べる！」

龍亞は受け取ったカップケーキを口いっぱい頬張る。

「どう、かな？」

「美味しい！」

「よかった……」

二人はそのままカップケーキを食べながら話をする。

「そう言えば、簪姉ちゃんってヒーローアニメが大好きなんだよね

「？」

「うん。正義のヒーローが悪を懲らしめる、勧善懲悪の物語が好き……」

「正義と悪か……」

龍亞は手を動かすのを止める。

「どうしたの……？」

「ちょっと前の戦いを思い出してね。俺達の戦いはその、勧善懲悪とは違うからね」

「それって、どう言うこと？」

「正義と悪はそれぞれが自分の目的の為に戦うでしょ？　悪もさ、全部が悪いつて訳じゃないことを教えられたからね」

龍亞は過去の戦いから学んだ戦う理由を思い出しながら話す。

「例えば……大切な誰かのため、大勢の人のため、友達のため、未来を世界を救うため……悪にも何かの為に必死で戦う人たちがいるんだよ」

「戦う理由……」

簪は茜色に染まりつつある空を見上げる。

（私の戦う理由は……何だろう？）

自分の戦う理由をまだ見つけていない簪は龍亞に聞く。

「龍亞君の戦う理由は？」

龍亞は右手をギュッと握りしめ、真剣な目で答えた。

「俺はね、龍可を守るヒーローになりたいんだ！」

「……え？」

龍亞の戦う理由に簪は思考が一瞬停止する。

「龍可は昔から体が弱いから……俺が絶対に守るって決めてるんだ！」

「そ、そうなんだ……」

簪は心が一気に暗くなり、声の音量も小さくなる。

（そう言えば、龍亞君の行動原理は龍可ちゃんだって、みんなが言ってたな……）

噂程度でしか聞いたこと無いが、龍亞の今の言葉で確信に繋がる。

（だけど……龍亞君と龍可ちゃんは血の繋がった二人は双子の兄妹！ 私にも必ずチャンスはある！！）

決心を固めた簪は勢い良く立ち上がった。

しかし、勢いが有り余って体のバランスが崩れてしまう。

「わ、わわっ!？」

簪はそのまま座っている龍亞の方に倒れてしまう。

「ん? え、ええっ!？」

完全に反応が遅れてしまった龍亞は簪を受け止める事ができず、龍亞も一緒に倒れてしまった。

「痛た……簪姉ちゃん、大丈夫?」

「私は大丈夫——あんっ!」

簪は変な声を口から漏らして、突然顔を真っ赤にする。

「あの……龍亞君、手を……離してくれる?」

「え?」

龍亞は自分の手を見る。

両手は簪の小さな二つの胸の膨らみを掴んでいて、無意識に少し指を動かして揉んでいた。

「う、うわあああああああああっ!!!」

大声を出して、龍亞はバツと慌てて簪から離れる。

簪は両手で自分の胸を隠すように抱きしめる。

「簪姉ちゃん、ごめんなさい！　ごめんなさい！！　ごめんなさい！！！！」

龍亞は土下座をして、床に額を何度もぶつけて謝った。

しかし、簪は怒った様子を見せずに顔を見せないように振り向いた。

「ううん。私こそごめんなさい……じゃあ、後少ししたら訓練の続きをしようか」

「わ、わかった……」

龍亞は先にアリーナのフィールドに向かった。

残った簪は周囲に誰もいないことがわかったと、その顔は一気にニヤケた。

（えへへ……狙った訳じゃないけど、龍亞君に胸を揉まれちゃったな。やっぱり、好きな人に胸を揉まれると気持ちいいな……）

簪の変態シヨタコンに磨きが掛かった瞬間だった。

唯一の救いは本当にこの場に簪以外の人間が居ないことである。

その頃、一夏は訓練に参加しないで街に出ていた。

そして、ある店に入るとそのままカウンターの女性の店員に話しかける。

「あの、すみません。今日出来上がると連絡を受けた織斑一夏です」

「いらっしやいませ。織斑一夏様ですね。少々お待ちください」

店員は店の奥に入り、数分もしない内に戻ってくると、手には小さな箱があった。

「お待たせしました。ご注文の品はこちらでよろしいでしょうか？」
箱を開けて中身を一夏に確認させると、一夏は満足そうに笑顔で頷いた。

「はい、これです！」

「それでは、こちらにサインをお願いします」

店員は一夏に受け取りのサインを書かせて、一夏に箱を手渡す。

もう既に代金は前払いで支払っているのです、それは一夏の所有物となる。

一夏は箱をポケットに入れて、店を出る。

「ありがとうございました」

店員からの挨拶が響いたが、今の一夏には全く聞こえてなかった。

一夏はポケットに入れた箱を手で触れて嬉しそうに笑う。

（後は、ディナーの時に渡すだけだな。箒、絶対に喜ぶだろうな……
…）

今から箒の笑顔が見られることを心から待ち望んでいた。

第111話 闇の襲撃者（前書き）

更新遅れてすいません！

今回から多分かなりなくなるバトル突入です。

オリジナルを加えているので、原作とはかなり違っていきます。

ノクターンノベルスにブルーノ×真耶の裏小説を投稿したので感想
お願いします！

第111話 闇の襲撃者

タッグマッチ当日。

一回戦第一試合の組み合わせは、龍亞&簪ペアVS龍可&楯無ペアである。

兄妹と姉妹対決と言うこともあって、本日で一番注目の対戦カードである。

フィールドに龍亞と簪、龍可と楯無が対峙する。

「まさか、いきなり龍可と楯無姉ちゃんとか戦うなんて、誰かが仕組んだのかな？」

「まあ、有り得ない話じゃないね……」

「楯無さん……簪さんを足止めしててください。先に龍亞を叩き潰すので……」

「は、はい……」

龍亞のホープ・ヒーローはパワー・ツール・ドラゴンに、龍可はフェアリー・ガーディアンはエンシエント・ゴッド・フレムベルにフォームチェンジする。

そして、観客が見守る中、試合が開始される。

「パワー・サーチ、『ダブルツール D&C』！」

龍亞は開始早々、両腕の装備をダブルツールに切り替え、パワー・ドリルとパワー・カッターは高速回転して空を切り裂き、楯無を狙うが……。

「龍亞 あああああああああああっ!!」

それを嫉妬から生まれた灼熱の業火に身を包んだ龍可が襲いかかる。

「る、龍可ちゃん!? どうしてそんなに怒っているのでしょうか!?」

「うるさああああああい! バーニング・ヘル・ストライク!」

いきなりエンシェント・ゴッド・フレムベルの炎の鉄拳で殴り、龍亞はダブルツールで防御の姿勢を取る。

「はああああっ!!」

しかし、龍可の嫉妬は龍亞の防御を撃ち抜いて、壁にぶっ飛ばした。

「ぐあっ!?!」

パワー・ツール・ドラゴン最強の武装であるダブルツールは粉々に破壊され、両腕の武装はパワー・ドライバーとパワー・シヨベルに戻る。

「龍亞のバカ！ 龍亞のバカ！！ 龍亞のバカアアアアア！！」

龍可は龍亞に暴言を吐きながら、エンシェント・ホーリー・ワイバーンにフォルムチェンジして、雷雲を龍亞の近くに呼び出す。

（こ、これはもしかしくなくてもヤバイ！？）

龍亞の予想通り、雷雲から聖なる雷が取り囲むように落ちてくる。

「ライトニング・ブラスト！！」

（つ、使えるかどうか試したこと無いけどやるしかない！！）

「パワー・サーチ、アクティブ・イナーシャル・キャンセラー『A I C』！！！！」

龍亞はラウラのシュヴァルツェア・レーゲンの慣性停止結界をパワー・サーチを使用して発動させるが、まだ未熟な龍亞には使いこなせるはずがなく、A I Cのバリアを貫いて雷が龍亞に襲いかかる。

「龍亞君！！」

その時、打鉄式式の最大加速で飛んできた簪が龍亞を抱きかかえてその場から離れ、間一髪で雷を回避した。

「簪姉ちゃん、助かったよ……」

「うん。龍亞君……一緒に戦おう！」

簪を龍亞を降ろす。

「うん!!」

龍亞は元氣良く頷いて両手を握り締める。

「パワー・サーチ! 『雨月』、『空裂』!!」

箒の紅椿の二刀が現れ、龍亞の両手に直接装備される。

一方、龍可は仲良く戯れる龍亞と簪の光景を見て更に嫉妬の炎が燃え上がる。

「る……龍可ちゃん……?」

楯無は恐る恐る近づいて龍可を尋ねる。

「楯無さん……」

「な、なに?」

「アノ二人ヲ全力デブチノメシマシヨウ……」

最早今の龍可に大人しく、お淑やかだった姿は何処にもなく、今は嫉妬によって生まれた死神である。

「りよ……了解……」

（うええええええええん！ あんなに可愛かった龍可ちゃんが怖いよお！！ 助けて、愛しのジャックくーん！！！！）

楯無は心の中で泣き叫び、恋人のジャックに助けを求めるのだった。

一方、月夜は風音と星奈と一緒に別のISアリーナの観客席で一夏と箒の出番を待った。

月夜と風音も専用機持ちだが、未来の第七世代型ISでは、第二世代から第四世代とは性能が天と地の差ほどの違いがありすぎるので、タッグマッチの参加を辞退したのだ。

「親父とお袋の出番は後少しだな」

「母様、今日のタッグマッチを凄く楽しみにしていましたね」

「星奈、パパとママの応援頑張る〜！」

すると、月夜の携帯がピピピと鳴る。

「あ、悪い、ちょっと電話に出てくるわ」

風音と星奈に断りを入れると、月夜は観客席から離れる。

誰もいないアリーナの廊下で月夜は携帯を開くと、電話してきた人物に驚く。

「た、束姉!？」

それは、月夜の愛しの恋人、篠ノ之束からの電話だった。

(うおおおおおおおおおっ! マ、マジか!? まさかこんな時に大好きに束姉から電話が来るとは!? お、落ち着くんぞ織斑月夜!! 勇気を持って束姉と電話をするんだ!!!)

かなりパニックに陥っている月夜は高まりつつある心臓の鼓動を抑えながら携帯電話の通話ボタンを押して、スピーカーを耳に当てる。

「も、もしもし? 束姉、月夜です」

月夜は束のいつもの元気な声と挨拶を待った。

しかし、月夜の期待とは裏腹に待っていたのは新たな戦いを告げる束からの緊急連絡だった。

『つくくん、今すぐ箒ちゃんやちーちゃん達に伝えて!!
アリーナに脅威が迫っているの!!!!』
I S ア

「……………え？」

——ズドォオオオンッ!!!!

突然、地震が起きたかのように大きな揺れがI Sアリーナを襲う。

「っ!?! 何だ、今の轟音は!?!」

『遅かったか……つくくん、今五つのI Sアリーナに無人稼働I S、
ゴーレム——が襲撃しているわ!』

「何で束姉が知ってるんだよ!?!」

『だってゴーレム——は私が開発したんだもん!!!』

「はあっ!?!?!」

『今から数時間前に何者かが私の研究所にハッキングして五機のゴーレム——を奪っていったの！　ゴーレム——は私のコントロールがもう一切利かない！！』

稀代の天才、篠ノ之束の研究所にハッキングできる人間はほぼ零のほずである。

「束姉にハッキング!?　誰がやったかわかってるのか!?!」

『わからない……ただ、ファントム・カオスって言葉しか……』

束からその単語を聞いた瞬間、月夜は目を見開いて携帯を強く握りしめる。

「『ファントム・カオス』……」

(遂に……来たか!!)

「束姉、俺達に協力してくれる?」

『も、もちろんだよ!　つつくん、私は何をすればいい!?!』

「俺は今から星奈を連れて千冬姉の所に行く!　束姉は俺の連絡を待ってて!!」

『わ、わかったよ!!』

月夜は束との連絡を切り、真紅のガントレットを高く掲げる。

「紅月!!!!」

紅月を起動させ、観客席へ飛んだ。

(三幻魔……アルミサエル、おまえ達の好きにはさせない!!)

月夜は大切なモノを守るために戦う剣士の瞳になる。

第112話 それぞれの戦い（前書き）

久々の更新です。

変なところが多数あるかもしれないので、その時は指摘をお願いします。

第112話 それぞれの戦い

「織斑先生！」

廊下を走っていた真耶はやっとのことで千冬を見つけた。

携帯電話でゴーレム——の画像を見せて現状を報告した。

千冬、忌々しげに顔を歪める。

「くそっ……早すぎる……。まだ『あいつ』は出せない……」

「え？」

ぼそりとしたつぶやきに、真耶が反応する。

しかし、その独り言は思わず漏れてしまったというものだったらしく、千冬は口を閉ざした。

らしくないといえば、らしくない焦り方である。

「お、織斑先生！ 私たちはどうしたら!？」

真耶は懇願するように千冬を見上げる。

IS学園において『予想外事態の対処における実質的な指揮』は、すべて千冬に一任されている。

それはもちろん、かつて世界最強の『ブリュンヒルデ』を冠したこ

とに起因していた。

すると、千冬から前方の空間が歪み、中から紅月を発動させた月夜と抱えられた星奈が現れた。

「千冬姉!!」

「月夜、お前どこから出てきた!？」

「言っただろ、紅月は空間跳躍できるって! それより星奈をコンピュータールームに連れて行ってくれ! 星奈がいればアーリーナのシステムを取り戻すことができる!」

月夜の説明に真耶が手を挙げて名乗った。

「そ、それなら私が連れて行きます!」

「山田先生、星奈をお願いします!」

「はい!」

「星奈、頼んだぜ!」

「うん、任せて!」

星奈は真耶の案内でIS学園のメインコンピュータールームに向かう。

それを見送った月夜は千冬に聞く。

「千冬姉、これからどうする？」

「私は他の先生たちと突入する。月夜、お前は どうする？」

「決まっている。俺は親父とお袋を助けに行く」

月夜は日本刀の形をした紅月のメイン武器である『月牙^{げつが}』を呼び出して、鞆を腰に装着させる。

「俺の大切な家族は絶対に守る。俺の、命に代えても」

その場で振り向き、紅月から真紅の粒子が溢れ出す。

「無茶をするなよ」

「ああ、千冬姉もな！」

一瞬だけ紅月を加速させ、月夜はその場から空間跳躍をする。

星奈と真耶がコンピュータールームに入ると、先客にブルーノがいた。

「ブルーノ！？ どうしてここに……？」

「今ハッキングでプログラムを取り戻している所だよ。だけど僕一人じゃ時間がかかる。せめて遊星が居てくれたら……」

ブルーノは悔しさから唇を噛み締めながらコンソールを打つ手を早くする。

「任せて、天照！」

星奈は天照を呼び出すと、全ての装甲がパカッと開き、中から無数のケーブルが現れ、コンピューターのあらゆる場所に接続する。

そして、星奈の目の前に天照専用のコンソールが現れ、ブルーノと変わらぬ早さで指を動かして操る。

それを見たブルーノは負けじと手を更に早く動かした。

二人が競い合うことで、IS学園のプログラムが凄まじい速度で取り戻すのだった。

ジャックとセシリア、クロウと鈴音は器用にゴーレム――の攻撃

を避けながら反撃の態勢を整える。

「ターボさん、ジェムハート！」

セシリアはターボ・シンクロンを呼び出し、ジェムハートを持つ。

「ニトロ・シンクロン、天鈴！」

鈴音はニトロ・シンクロンを呼び出し、疾風天鈴を軽く投げる。

「「スピリットシンクロフォーム！！！」」

二体のチューナーモンスターはスピリットチューニングを行う。

セシリアはブルー・ティアーズ・フラッシュを纏い、鈴音は甲龍・疾風を纏うと同時に巨大化した天鈴に乗る。

「デモンズ・フォーム！ 『レッド・デモンズ・ドラゴン』！！！」

ジャックはレッド・デモンズ・ドラゴンの姿となる。

「BFフォーム！ 『アーマード・ウィング』！！！」

クロウは漆黒の鎧を身に纏った鳥人、BFアーマード・ウィングの姿となる。

「ジャック、セシリア、鈴音！ 今からあの無人機に楔を撃ち込む！ サポートしてくれ！」

「なるほど、任せろ！！！」

「「楔？」」

ジャックはクロウのこれからすることを簡単に理解できたが、セシリアと鈴音はチンプンカンプンだった。

「とにかく頼むぜ！！！」

クロウは黒き疾風を纏って飛翔する。

一夏と箒、そして月夜の指示でいち早く駆けつけた風音。

「俺と風音の零落白夜で無人機のシールドを斬る。箒はその間に一気に決めてくれ！」

「わかった。二人共、速攻で決めるぞ！」

「ああ！」

「任せてください！　ですが……その前に！　雪片無型！！！」

雪片無型を大剣へと姿を変えて、大剣の腹を盾にしてゴーレム――

一の攻撃から一夏と箒を守る。

雪片無型は刀型だけではなく、火器銃器系の武器でなければどんな武器にも変化する事ができるのだ。

「父上、母上、早く準備をお願いします！」

「わかった。それじゃあ、全力で行くぜ！ ジャンクロン、氷龍神槍！ 更に、雪羅！！」

一夏はジャンク・シンクロンと氷龍神槍を呼び出すだけではなく、白式を雪羅へ展開させる。

「デブリ・ドラゴン、武甕槌！」

箒はデブリ・ドラゴンと武甕槌を呼び出す。

「「スピリットシンクロフォーム！！」」

ジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンはスピリットチューニングを行い、一夏は白式・氷龍を纏い、箒は紅椿・武神を纏った。

「これが、スピリットシンクロフォーム……」

風音は白式と紅椿のスピリットシンクロフォームに感動を覚えるのだった。

そして、一夏は雪片氷龍型を構え、箒は武甕槌を構えて、風音と共にゴーレム——と対峙する。

遊星とラウラ、アキとシャルロットの不動親子でゴーレム——退治をする。

シャルロットとラウラは既にシンクロフォルムでラファール・リヴアイヴ・クイックフォルム、シュヴァルツェア・レーゲン・ロードフォルムになってゴーレム——と戦っていた。

遊星は龍星を通常状態にして手を上に上げる。

「『スターダスト・ドラゴン』！ 『ジャンク・ウォリアー』！」

遊星の真上にスターダスト・ドラゴンとジャンク・ウォリアーが現れる。

「お前達の力を一つに！！」

《行くぜ、ジャンク・ウォリアー！》

《俺達最強コンビの融合だ！！》

スターダスト・ドラゴンとジャンク・ウォリアーは拳をぶつけ合うと、光の粒子となって龍星に戻った。

「ウォリアーズ・フォルム!!!」

今まで遊星が使用しなかった龍星最後のウォリアーズ・フォルムを発動させる。

「『波動竜騎士 ドラゴエクイテス』!!!」

遊星は蒼の鎧を身に纏い、大きな翼と巨大な槍『スパイラル・ジャベリン』を持つ竜騎士、ドラゴエクイテスとなる。

「ローズ・フォルム、『凜天使 クイーン・オブ・ローズ』!!!」

アキは機動力に長けた薔薇の騎士をした凜天使 クイーン・オブ・ローズの姿となる。

「行くぞ、アキ!!!」

「ええ!!!」

遊星とアキは武器を構えて、シャルロットとラウラと共に戦うのだった。

第113話 月光の剣神（前書き）

今回は月夜君が大活躍です！

更に、新作で遊戯王5D、S×バカとテストと召喚獣のクロスオーバー小説を投稿しました。

興味のある方は是非どうぞ！

第113話 月光の剣神

「あー……どうすっかなあ」

やる気のない声を出したのは三年生のダリル・ケイシーだった。

IS『ヘル・ハウンド・ver2・5』を展開しているが、その手に武器は持っていない。

「お先どうぞッス、先輩！」

そう言ってガッツポーズをしたのは二年生のフォルテ・サファイアであり、無人機を押しつける着満々である。

専用機『ゴールド・ブラッド』は呼び出しているものの、戦闘をするというよりP I Cで空中に寝っ転がっているだけであった。

「てめー、フォルテ。それが先輩に対する態度か」

「なんですとー。それが後輩に与える優しさッスカ」

ちなみにこのやる気のないやりとりの間も、『ゴールド――』は超高密度圧縮熱線によって攻撃を仕掛けてきている。

「あれ、熱そうだな。おい、確かめてみてくれ」

「いやッスよ。先輩こそ、褐色の肌に磨きをつけてきてくださいよ」

かわし、防ぎ、弾き、逸らし、流し、止め。

二人はその態度とは裏腹に、鉄壁の防御を展開させていた。

コンビネーション名『イージス』。

互いの得意能力を使って、二人組が一つの生き物のように機能し、一切の攻撃を通さないというものだった。

「あーらよつと」

「ひよいッス」

当たらない、当たらない、当たらない。

当たってもダメージが通らない。

「しかしなあ、フォルテ」

「なんスカー。ダリルせんぱーい」

「これ、攻撃しねえと終わんねーよなー」

「そッスね」

ブレードを使った突進を、左右別々にひらりと避けるふたり。

その瞳が、細くしぼられていく。

「じゃあまあ、いっちょ」

「反撃するッスかあ」

パシインッ！

左右両方からのトマホークのようなハイキック。

それが『ゴーレム——』の体に命中した。

やる気の無い二人がようやくやる気を出したその時、空間が歪んで不思議な音がフィールドに響く。

「ん？」

ダリルとフォルテが視線を向けると、月夜が現れた。

「フォルテ。誰だ、あいつは？」

「確か、一年生の織斑一夏の親戚で専用機持ちの織斑月夜ッスね」

「まったく、今年は専用機持ちが多いな。高性能な機能を付けてあるのもゴロゴロいるしよ」

「そんな事より、彼はどっから現れたんスかねー」

「知るかよ。おーい、その一年！」

ダリルは月夜を呼びかける。

しかし、月夜は無視して、体がふるふると震えていた。

「どうしたんだ、あの一年？」

「さあ？」

「ま……」

「「ま？」」

ダリルとフォルテは無人機の攻撃を避けながら月夜の言葉に耳を傾けた。

「間違えたああああああああっ！！ 空間座標を間違えて違うアリーナに来てしまったああああああああっ！！」

一夏と箒の元に行きたかった月夜は頭を抱えて嘆いた。

紅月のワンオフ・アビリティー『虚空天月』は空間跳躍で何処にでもワープできるのだが、扱いが難しく、使いこなしている月夜でも偶に空間座標を間違えることがあるのだ。

月夜の嘆くその姿にダリルとフォルテは呆然とした。

大声に反応した無人機は月夜に超高密度圧縮熱線を放つ。

「あん？」

ひらりと超高密度圧縮熱線を回避してゴーレム——を睨みつける。

「おのれ、束姉お手製の無人機め……」

恋人が作り出した厄介極まりない無人機ISに頭に頭痛が響いた。

「後で束姉にあんな事やこんな事をしてお仕置きしなくちゃ……」

ボソツと何やら危ない発言をする月夜は左手で月牙の鞘を持ち、鯉口を切る。

「龍月閃」
りゅうげつせん

右手で束を持ち、鞘から刃を解き放つ。

金色と紅色の二つの色が混ざり合った月牙の刃から三日月の形をしたエネルギー刃が放たれ、一直線に超高密度圧縮熱線を切り裂いてゴーレム——の右腕を切り落とした。

予想外の事態と判断したゴーレム——はシールドビットを展開しながら片腕でブレードを構えて月夜に突進する。

「邪魔だ……舞え、『月華』」
げっか

紅月の背中の装甲に八つの穴が空き、中から小太刀の形をした八機のビット型兵器『月華』が高速で飛び出して美しく舞う。

第七世代ISのビット型兵器である月華は音速を超える速さで空間を駆け抜け、切り裂いていく。

速さに全く対応出来ないゴーレム——のシールドビットを月華で貫き、残る武器はブレードのみとなってしまふ。

「こんなもんか？ まあ、束姉が開発したISでも所詮は機械……」

月華を呼び戻し、その内の一太刀を空いている左手で構える。

「千冬姉の弟子の俺には一生適わねえよ……！」

虚空天月の超光速で紅月を駆け、瞬きをする一瞬より更に速くゴーレム——で懷に潜り込んで、月牙と月華で十字に切り裂いた。

げっこうじゅうじせん
「月光十字閃」

再起動は最早不可能と言うほどにゴーレム——はバラバラに切り裂かれ、月夜は月華を仕舞うと残骸から奇跡的に無事だったコアを手取る。

（後で千冬姉に渡しておくか）

コアを懷に仕舞い、月牙を腰の鞘に収める。

「おー。やるなー、あの一年」

「そうッスねー。下手したら私達二人掛かりでも勝てないんじゃないんッスか？」

「あの織斑先生の弟子って言ってたからな」

「これは化け物師弟ですね」

「とりあえず、頑張った後輩のために私達も動くか」

「了解ッス！」

ダリルとフォルテは事後処理のために動いた。

おまけ。

束は研究所でIS学園のプログラムを取り戻すと同時進行で、研究所にハッキングして五機のゴーレム——を奪った犯人を追っている。

ビクッ!?

突然束は背筋に強烈な悪寒を感じ取り、コンソールを動かす手が止まってしまう。

「な、何！？ 今の嬉しいような、恥ずかしいような、怖いような感じがするこの悪寒は！？」

それが恋人の月夜からのモノだとは知らない束は頭を数回振って再びコンソールを動かす。

「頑張らなきゃ！ 大好きなつくんに顔向け出来ないからね！！！」

その月夜に次会ったら、お仕置きが待っているのを今の束が知るはずがなかった。

第114話 破壊の槍と守護の光（前書き）

今回は短めです。

次回でゴーレム——のバトルが終わって、新しい敵とのネクストラウンドに突入です。

第114話 破壊の槍と守護の光

龍亞と簪、龍可と楯無は互いにいがみ合うのを止め、四人で協力してゴーレム——の破壊に乗り出す。

「クラフティ・ブレイク！」

龍亞は雨月と空裂の鋭い突きでゴーレム——のブレードを破壊する。

「ライトニング・ブラスト！！」

尽かさず龍亞の聖なる雷撃でゴーレム——の装甲を削っていく。

「簪ちゃん、行くわよ！」

「う、うん！」

楯無は特殊ナノマシンによって超高周波振動の水を螺旋状に纏ったランス『蒼流旋』による一点突破の突撃、対複合相互用の超振動薙刀『夢現』の斬撃がゴーレム——の体に突き刺さる。

しかし、ゴーレム——は両腕でランスと薙刀を掴んで止める。

「パワー・サーチ！ ロケット・パイルダー！！」

龍亞が叫ぶと、右腕に巨大なロケットの形をした機械が現れ、ロケットブースターが発射され、ゴーレム——に突撃する。

ロケット・パイルダーは破壊されたが、代わりにゴーレム――は遠くまで吹っ飛ばされ、地面に激突する。

「ナイスよ、龍亞君！」

「だけど、何て堅い装甲なんだ！」

「……こうなったら……龍亞君、龍可ちゃんと簪ちゃんをライフ・ストリーム・ドラゴンで守って。巻き込まれないようにね」

「えっ？　楯無姉ちゃん、何をするの！？」

「ふ、ふふん……。まだまだ、おねーさんの奥の手はこれからよ」

それまで両手で支えていたランスを左手一本に任せて、楯無は真上に向かって右手を突き出す。

「『ミステリアス・レイディ』の最大火力、受けてみなさい……！」

それは『ミステリアス・レイディ』の全身から水を奪い、徐々に形を作っていた。

「こ、これは……？」

「通常時は防御用に装甲表面を覆っているアクア・ナノマシンを一点に集中、攻性成形することで強力な攻撃力とする一撃必殺の大技。名付けて――」

――『ミストルティンの槍』。

それを構成するすべてのアクア・ナノマシンが超振動破碎を行う破壊兵器の塊であり、表面装甲がどんなものであれ、紙くずのように突き破ることができる。

しかも、敵装甲内部でアクア・ナノマシンはエネルギーを転換、一斉に大爆発を起こす。

そのエネルギー総量は小型気化爆弾四個分に相当するという、まさに奥の手だった。

「—————」

エネルギーの流れを感知したのか、『ゴーレム——』は大型ブレードで楯無を斬りかかる。

しかし、『ミストルテインの槍』を作り出すことに集中している楯無は、抵抗も防御も出来ない。

「くっ……！」

ISアーマーが碎かれ、ブレードが肌を切り裂き、鮮血が辺りに散る。

しかし、それは楯無の血ではなかった。

「龍、亞……くん？」

「全く、楯無姉ちゃんも遊星に劣らず無茶をするね……」

龍亞が楯無の盾となり、ゴーレム——の攻撃を防いでいる。

しかし、ホープ・ヒーローの装甲が所々破壊され、龍亞の体から多くはないが血を噴き出している。

「クラフティ……ブレイク!!」

ほぼ零距离で雨月と空裂の突きの二撃を連続で喰らわせるが、ゴレム——を破壊することができずに吹っ飛ばされた。

しかし、時間は充分に稼いだ。

「バックアップ、『D・ライトン』……」

龍亞はD・ライトンを呼び出して、楯無の方を振り向いた。

「楯無姉ちゃんがミストルテインの槍を撃ったら緊急同調でパワー・ツール・ドラゴンからライフ・ストリーム・ドラゴンになるよ……そしたら楯無姉ちゃんはダメージを受けないでしょ?」

「あはは……もしかして、私もダメージを受けることを分かっちゃった?」

「まあ、何となくね。それじゃあ、タイミングを合わせてやろう」

「了解よ」

楯無は後少しで使えるミストルテインの槍の完成に集中する。

「龍可!」

「な、何!？」

「フェアリー・ガーディアンをエンシェント・フェアリー・ドラゴンにフォルムチェンジして簪姉ちゃんを守って! お願い!!」

龍亞の必死の願いに龍可は頷き、すぐさま行動に移す。

「『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』!!」

フェアリー・フェザーを構え、体を一回転して龍亞と龍可の周りに風の障壁を作り出す。

「ウィンディ・シールド」

そして、シールドエネルギーを背中の中の妖精の羽に全て注ぐと、羽は巨大化し、龍亞と簪を優しく包み込んだ。

「これ……」

「私の最強の盾、エターナル・フェアリー・ウイングです」

龍可の言葉の直後に羽はこの世の金属や鉱物を遙かに越える硬さまで硬化され、あらゆるものの攻撃から龍可と包み込んだ者を優しく守る最強の盾となる。

「簪さん、龍亞と楯無さんを信じましょう……」

龍可は手を組んで二人の無事を祈った。

簪も手を組んで祈った。

（龍亞君……お姉ちゃん、頑張って！）

「いくわよ……龍亞君！」

「了解！」

長い時間をかけ、ミステリアス・レイディ最終兵器が発動する。

「『ミストルテインの槍』発動——」

楯無はミストルテインの槍をゴーレム——に投げつける。

それと同時に龍亞はシールドエネルギーを大量消費して数秒でシン

クロフォルムを行える緊急同調を発動する。

「緊急同調！ パワー・ツール・ドラゴンにD・ライトンをチューニング！！」

ライトンが一つの星から輪となり、龍亞とパワー・ツール・ドラゴンに纏い、光の柱が現れる。

ミストルテインの槍はゴーレム——に突き刺さり、表面装甲を突き刺さり、装甲内部でアクア・ナノマシンが膨大なエネルギーに転換される。

「シンクロフォルム！ 進化せよ、ライフ・ストリーム・ドラゴン！！」

大爆発が起こる直前にホープ・ヒーローはパワー・ツール・ドラゴンからライフ・ストリーム・ドラゴンへとシンクロフォルムし、龍亞は翼を広げて、仇なす闇から守る黄金の輝きを放つ。

「ライフ・ストリーム・フィールド！！！」

その直後にISアリーナは光に包まれる。

ドガアアアンツ！！！！

そして、ゴーレム——を中心に大爆発が起きた。

第115話 天使と悪魔の輝き（前書き）

や、やっと書けました……。

この戦いが終われば遂に一夏と箒ちゃんのあのイベントに突入です！

第115話 天使と悪魔の輝き

楯無が『ミストルテインの槍』でゴーレム――に炸裂し、I S アリーナは爆発の後の煙に包まれた。

そして、爆発に巻き込まれた龍亞と楯無、龍可と簪は……。

「楯無姉ちゃん、大丈夫……？」

「うーん……もう無理よ。お姉さん、早く寮に帰ってふかふかのベッドに眠りたいわ……」

「うん、大丈夫そうだね」

龍亞のライフ・ストリーム・ドラゴンの守護防壁であるライフ・ストリーム・フィールドで何とかミストルテインの槍の爆発を防ぐことが出来た。

そして、龍可と簪はエンシェント・フェアリー・ドラゴンのエターナル・フェアリー・ウィングで爆発を防ぎきった。

大きな羽を小さくし、龍可と簪が出て来る。

「龍亞！！！」

「お……お姉ちゃん！！！」

龍可は龍亞に、簪は楯無に急いで駆け寄った。

「龍亞、大丈夫！？」

「大丈夫。心配しないで、龍可……」

簪は涙で声を枯らしながら楯無を呼んだ。

「お姉、ちゃん……」

「あら……？　そう呼んでくれるの、何年振りかしら……」

「無茶ばかりして……死んだらどうするの……？」

楯無は淡く微笑みながら簪の頬に手を置いた。

「お姉さんは不死身よ。それに……学園のみんなと……簪ちゃん、あなたを守るためなら、この命を幾らでもかけるわ」

「お姉ちゃん……」

簪は楯無を抱きしめて、泣いた。

最愛の妹の涙に、さすがの楯無も困った表情を浮かべる。

「ああ、もう……泣かないでよ、簪ちゃん……」

楯無は簪の頭を優しく撫でてあやす。

それぞれのISアリーナに現れたゴーレム——は全て破壊され、戦いは終結した。

他のISアリーナにいた遊星達は一旦龍亞達にいるISアリーナに向かい、それぞれの無事を確かめ合った。

しかし、束からゴーレム——を奪い取り、IS学園へ襲撃した黒幕がすぐそこまで来ていた。

空に黒雲が広がり、巨大な何かが降り立った。

「何だ!？」

シグナー六人の赤き竜の痣が疼き、その降り立ったものを見つめる。

巨大な悪魔の形をした、巨人へと姿を変えた。

「あれは……まさか!？」

遊星の言葉に月夜は頷いた。

「間違いねえ……あれが三幻魔の一柱、『幻魔皇 ラビエル』!!」

巨体な青い悪魔、幻魔皇ラビエルから放たれるとてつもないオーラに、遊星達は押しつぶされそうになる。

幻魔皇ラビエルは無言で拳を握り締めた。

遊星は一瞬で危機を察知した。

（あれは……ヤバイ!!）

遊星は波動竜騎士ドラゴエクイテスの状態で空を駆け、スパイラル・ジャベリンを背中に仕舞って両手を前に出す。

幻魔皇ラビエルは拳から闇のエネルギーを出しながら突き出した。

《天魔蹂躪拳!!!》

幻魔皇ラビエルの唯一の必殺技を、遊星と波動竜騎士ドラゴエキテスが迎え撃つ。

「波動竜騎士ドラゴエキテス!!!」

《ウェーブ・フォース!!!》

両手から全てを反射させる力の波動を放ち、幻魔皇ラビエルの天魔蹂躞拳を受け止める。

その瞬間、二つの大きな力が激突した際に起こる凄まじい威力の衝撃波がIS学園中に広がった。

そして、天魔蹂躞拳の威力が無くなると、遊星は体中の力が全て奪われたようにそのまま下に落ちた。

「遊星!!!」

「お父さん!!!」

「父上!!!」

アキとシャルロットとラウラが遊星を受け止めると、幻魔皇ラビエルはニヤリと不気味に笑った。

《とても強い力を感じる……まるで、我らと何度も戦ったあの男と同じだ……》

そして幻魔皇ラビエルはもう一度その拳を握り締めた。

《その男を我ら幻魔の完全復活への生け贄にしてくれるわ》

アキ達は顔を真っ青にした。

「んなこと、させるかよお!!!」

月夜は月牙と月華を構え、自身最強の必殺技を繰り出す。

「月光十字閃!!!!」

十字字に幻魔皇ラビエルを切り裂いた。

しかし、

《消えろ》

全くダメージが効いていない幻魔皇ラビエルは天魔蹂躞拳を月夜に振り下ろす。

「虚空天月!」

月夜は虚空天月の空間跳躍で回避する。

一夏の元に戻った月夜は月牙を地面に突き立てて荒い呼吸をする。

「月夜、大丈夫か!」

「なん、とかな……やっぱり、三幻魔に対抗するには精霊の力が必要なんだ……クソッ!」

月夜は悔しさの余り、拳で地面を強く叩いた。

そして、しびれを切らした幻魔皇ラビエルは体から大量の闇のエネルギーを放出した。

《これで終わらせてやる……天魔、蹂躪拳！！！！》

空間に叩きつけた拳は遊星達に向けて闇のエネルギーを一気に放出した。

「ブラック・ローズ・ドラゴン！！」

「レッド・デーモンズ・ドラゴン！！」

「ブラックフェザー・ドラゴン！！」

「エンシェント・フェアリー・ドラゴン！！」

「ライフ・ストリーム・ドラゴン！！」

意識を失った遊星を除く五人のシグナーはそれぞれの赤き竜のドラゴンを呼び出し、結界を作り出して闇のエネルギーから全員を守った。

しかし、その際にシグナーとしての力を使い切ってしまった。

遊星とアキを地面に下ろしたシャルロットとラウラは、自分に力のないことを本当に恨んだ。

今二人の一番欲しいもの、大切な者を守るための力。

その願いがラファール・リヴァイヴ・カスタム——とシュヴァルツ
エア・レーゲンに眠ったいた最後の力を呼び覚ます。

《私達の光の力を……》

《我々の闇の力を……》

その時、シャルロットとラウラは光に包まれた。

「シャルロット……ラウラ……？」

意識が朦朧としているアキは呆然としてそれを見る。

光の中、ラファール・リヴァイヴ・クイックフォルムとシュヴァル
ツエア・レーゲン・ロードフォルムが解除され、クイック・シンク
ロンとロード・シンクロンが出てくる。

「ラウラ、これって……」

「シャルロット、どうやら私達にも時が来たようだ」

「それじゃあ……一緒に行こう！」

「もちろんだ！」

シャルロットとラウラは手を繋ぎ、空へ向かって叫んだ。

「「スピリットシンクロフォルム……！」」

光が天を貫き、そこから発生した衝撃波で幻魔皇ラビエルを吹き飛ばした。

光が晴れると、二人のI Sは新たな進化を遂げた姿となった。

シャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタム——は白と金の二色を基調とした美しい装甲となり、その装甲一つ一つが強力な武器となっていた。

ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンは背中に黒の巨大な翼が発現し、右腕に不気味な悪魔を象った巨大な武装腕が現れた。

「ラファール・リヴァイヴ・アンジュ（天使）！！！！」

「シュヴァルツェア・レーゲン・トイフェル（悪魔）！！！！」

天使と悪魔、相容れることのない二つの力がこの場に揃った。

「行くよ、ラウラ！！」

「ああ、シャルロット！！」

第116話 混沌の閃光（前書き）

リアルの方で色々忙しく書く更新が遅くなっています（――；）

まだ大学に行っている方が更新しやすいです。

第116話 混沌の閃光

遂にシャルロットとラウラのスピリットシンクロフォームが出現し、幻魔皇ラビエルと対峙する。

「それじゃあ、僕から！」

シャルロットは両手にサブマシンガンを呼び出すと同時に、装甲が開いて中から小型のキャノン砲が現れる。

「裁きの流星^{ジャッジメント・メテオ}！！！！」

銃口から聖なる光の弾が流星群のように次々と放出され、幻魔皇ラビエルの体に突き刺さる。

《ふぐっ！？ この力は……天の光！？》

《その通りです》

シャルロットの上空に現れたのは、機械のような姿をした天使、『ヴァイロン・オメガ』だった。

ヴァイロンとは、天上界に住む神に等しい存在で、『星の観測者^{スターゲイザー}』として地上を見守る機会仕掛けの天使である。

《あなた達三幻魔の勝手な行為を、これ以上好きにはさせません》

「ヴァイロン・オメガ……」

《シャルロット、あなたに私達の光の力を託します。それで三幻魔から愛する人を守ってください》

「うん！ 任せて！」

ヴァイロン・オメガは頷くと、ラファール・リヴァイヴ・アンジュの中に入る。

《ぐっ、天魔蹂躞拳！》

幻魔皇ラビエルが拳を握りしめると、ラウラがシャルロットの前に出て、不気味な悪魔を象った巨大な武装腕を向けた。

「魔界の鎖」
デビルダム・チェーン

武装腕から無数の悪魔の幻影が現れ、幻魔皇ラビエルの体に巻き付いて動きを封じる。

《今度は魔の力だと！？》

《クックック……ざまあないな。幻魔の皇よ》

ラウラの上空に現れたのは、玉座に座る人の姿をした悪魔、『魔轟神レヴァタン』である。

魔轟神とは、大地の奥深くで眠りについていて、己の欲を満たすために動く邪悪なる魔の神々である。

《貴様のその邪惡に染まった肉体……さぞかし美味であろうな》

レヴュアタンは邪悪な笑みを浮かべた。

「……おい、貴様」

ラウラは進化したレールカノンをレヴュアタンに向けた。

《何の真似だ？ 小娘よ》

「貴様の主はこの私だ。もし、私の邪魔をするなら」

《邪魔をするなら、何だ？》

「貴様を消し去ってくれる。私の大切な者を守ることを邪魔するな
らな」

ラウラは裏切るかもしれない魔轟神の王に脅しをかけた。

本気だとすぐにわかったレヴュアタンは顔色を一切変えず、粒子と
なった。

《仕方あるまい……だが、隙あらば貴様の肉体を操り、欲のために
破壊の限りを尽くす。覚えていろ……》

忠告するレヴュアタンだが、ラウラは全く動じていなかった。

「やれるものならやってみろ。私には、仲間と父上達が側にいるか
らな」

それは、昔と違って1人ではなくなったラウラだからこそその答えだ
った。

そのセリフにシャルロットは嬉しくなり、祈るように両手を組んだ。

「ラウラ……僕達の力を一つにするよ」

「シャルロット？」

「発動……『アーマード・ヴァイロン』!!」

シャルロットとラファール・リヴァイヴ・アンジュが光り輝き、シャルロットの体からISの装甲が勢いよく外れた。

装甲はラウラのシュヴァルツェア・レーゲン・トイフェルの装甲と合体した。

そして、シャルロットの体が光の粒子となり、ラウラの中に入った。

「……………はっ!？」

余りにも突然の事でラウラは一瞬呆然としてしまい、周りをキョロキョロと見渡す。

「シャルロット! どこだ、どこにいるんだ!？」

『ラウラ、僕はここにいるよ』

ラウラの頭に直接シャルロットの声が響いた。

「こことはどこだ?」

『ラウラの中だよ。文字通り、僕はラウラと一心同体になっているんだよ。ほら、体と髪の毛を見てみて』

シャルロットに指摘され、ラウラは自分の体と髪の毛を見た。

まずラウラが目を奪われたのは、僅かしか膨らみがなかった胸の大きさが数段大きくなっていて、小さな身長もかなり伸びていた。

次にラウラの自慢とも言えるべき長い銀髪の毛が、綺麗な金髪になっていた。

「一体、どういう事だ？」

『アーマード・ヴァイロンは私とラファール・リヴァイヴ・アンジュをもう一人のIS操縦者とISと合体する能力なんだよ。体は私と一心同体になったからその影響が出ているんだよ』

「ほう……なるほどな……」

ラウラはレールカノンを仕舞い、両手の装甲を解除して、そのまま両手を胸まで持って行く。

『へ？ ラウラ？』

「シャルロット、ちょっと失礼するぞ」

ムニユ。

ラウラは膨らんだ自分の胸を揉んだ。

『ひゃあああ！？　ラ、ラウラ！？』

「ほうほう、なかなか大きくて柔らかいな」

ムニユムニユ。

ラウラは間接的なセクハラをシャルロットにする。

『もう、ラウラ！　止めてよ！！』

キイイイイーン！

「……っ！？」

頭の中にシャルロットの音が強く響き、ラウラはようやく手を離れた。

『ラウラ……』

「す、すまない……シャルロット」

『早くあいつを倒すよ。それから、今日はラウラを抱き枕にして寝るから覚悟してね？』

「りよ、了解だ……」

シャルロットに圧倒されたラウラは両手の装甲を戻してレールカノンを構える。

それと同時に幻魔皇ラビエルは悪魔の幻影を振り解いた。

『ラウラ、ヴァイロンの天使の力と、魔轟神の悪魔の力を全てレールカノンに注ぎ込んであいつにぶち込んで!!』

「了解だ! カオスバスターライフル!!」

ヴァイロンの装甲がレールカノンに集まり、レールカノンは巨大なライフルへと変形する。

「ターゲット、幻魔皇ラビエル。カオスバスターライフル、エネルギー充填開始!!」

カオスバスターライフルに相反する光と闇の力が収束され、充填される。

その充填される力の大きさに幻魔皇ラビエルも危険だと瞬時に察知し、動けないラウラに攻撃をする。

しかし、ラウラの中にいるシャルロットは不敵の笑みを浮かべた。

『残念だけど……僕達はその簡単にはやられたりはしないよ! ライト・エバシオン!!』

ラウラの体が光に包まれ、その場から一瞬で消え去り、幻魔皇ラビエルの攻撃を回避した。

《なっ……どこに消えた!?!》

「こっちだ!」

ラウラは幻魔皇ラビエルの背後にいて、カオスバスターライフルのエネルギーを充填していた。

幻魔皇ラビエルは再びラウラに攻撃するが、またもやラウラは光に包まれて攻撃を完全に回避しながらカオスバスターライフルのエネルギーを充填していた。

「エネルギー充填、100%!!」

カオスバスターライフルの銃口を幻魔皇ラビエルに向け、ラウラとシャルロットの心が一つとなる。

『幻魔覆滅!!!!!!』

「シャイニング・カオス・セイバー!!!!!!」

引き金を引き、カオスバスターライフルからヴァイロンの天使の光と魔轟神の悪魔の闇が一つになった強大な混沌のエネルギーが放出される。

回避することの出来ない幻魔皇ラビエルは真っ向から受けて立つ。

《天魔蹂躪拳!!!!!!》

混沌のエネルギーと邪悪なる闇のエネルギーが衝突する。

しかし、決着はすぐに着いた。

シャイニング・カオス・セイバーの威力が増していき、幻魔皇ラビエルの天魔蹂躪拳の拳を包み込んでいく。

《そ、そんな、馬鹿な……ぐあっ!?!?》

幻魔皇ラビエルの腕はシャイニング・カオス・セイバーによって消し飛び、腕が丸ごと無くなってしまった。

しかし、幻魔皇ラビエルはこの状況にも関わらず笑っていた。

《ふはははは！ 面白い……少々遊ぶ程度だったがこれほどのものだったとはな》

「貴様、何を言っている？」

《我らの計画は随時進行中だ。世界を闇に葬るためのな。たとえば……》

幻魔皇ラビエルは気絶している遊星達シグナーを見下ろした。

《強い精霊の力を持つ者達が居ようとも、我らを止めることは叶わぬ!?!!》

それを言い残すと、幻魔皇ラビエルの体は薄くなっていき、IS学園から消えた。

「……三幻魔か……」

ラウラの体が一瞬光り、粒子化したシャルロットが出て来て元の姿に戻る。

「大丈夫だよ、ラウラ」

「シャルロット？」

「お父さんなら絶対にこう言うよ。『俺達の絆がある限り絶対に負けない』って」

「そうだな……帰ろう、シャルロット。みんなの所へ」

「うん♪」

シャルロットとラウラは手を繋いでみんなの元へと戻っていった。

第116話 混沌の閃光（後書き）

さて、これで原作7巻の八割方書けました。

……弓弦先生、早く8巻を書いてください（＜|＞）

第117話 禁断の三角関係!?

ゴーレム——と幻魔皇ラビエルの襲撃から一時間後、月夜は千冬と二人だけで話していた。

「千冬姉、これ」

月夜はゴーレム——から回収したISのコアを渡した。

「お前が一つ持っていたのか？」

「ああ。他の無人機のコアは？」

「他の四つの内、一つは機体ごと破壊された」

「じゃあ、無人機から回収したコアは四つって事になるな」

「いや、違うな。月夜の持ってきたこの一つだけだ」

「へ?」

千冬はコアをポケットにしまいながら月夜の目を見ながら言う。

「実は……幻魔皇ラビエルが襲撃したときに無人機から回収した三つのコアが悪魔によって強奪されてしまったのだ」

千冬の口から語られる真実に月夜は目を見開いて言う。

「強奪……まさか、幻魔皇ラビエルの目的は俺たちを葬るためじゃ

なく、無人機のコアを奪うための囷……?」

鋭い勘を働かせる月夜に千冬は頷く。

「おそろくな。コアを使って何をするかわからないが、絶対によくないことが起きるな………」

顔色を若干悪くすると千冬に月夜は立ち上がり、ポンと肩を叩く。

「心配すんな、千冬姉。俺が……いや、俺達がいる」

「月夜………」

「その為に俺達がこの世界に来たんだ。だから絶対に大丈夫だ」

未来の甥からの言葉に千冬の肩の重みが少し下りた気分になる。

千冬は微笑みながら月夜にデコピンをする。

「痛っ!？」

「馬鹿者、大人ぶるな」

「もう、ひでえよ、千冬姉!」

「はははっ!」

それから月夜と千冬はある程度話を終え一旦別れると、月夜は校舎の屋上に行った。

携帯電話を取り出し、束の携帯番号を出して耳に持って行く。

『やっほー！ つっくん！ みんなのアイドル束さんだよーっ！』

「束姉、知っているかもしれないけど束姉の無人機は全部ぶっ壊したよ」

『うんうん、ありがとうね。束さんはホッとしたよ』

「束姉、今夜……会えるかな？」

『今夜？』

「電話じゃなくて、ちゃんと面と向かって話がしたいんだ」

『わかった。じゃあ、後で指定するとあるビルの屋上でね』

「わかった。じゃあな、束姉」

『うん、じゃあね♪』

連絡を切ると、月夜は夕暮れの茜色に染まった空を見上げる。

「未来の親父、お袋、千冬姉。そして、束姉……必ず三幻魔を倒して帰ってくるからな」

月夜は眼を閉じて家族の元へと戻った。

一方、医務室では今回の戦いで一番重傷な龍亞が寝ており、その両側には龍可と簪が挟むように座っていた。

「えっと……二人共、疲れているんだから部屋に戻って休んでいいんだよ？」

「ダメ、龍亞が心配だから看病するの！」

「私も龍亞君が心配だから看病する……」

龍可と簪はほとんど同じ事を言い、二人はジッと睨みつけた。

「龍亞は私が看病しているので簪さんは戻って良いですよ？」

「龍可ちゃんこそ、疲れているでしょ……？」

二人の間に大きな火花が散る。

この嫌な状況に龍亞は大量の汗をかきまくり、心の中で叫んだ。

（遊星でも楯無姉ちゃんでもいいから早くこの医務室に来てえよお
おとおおとおおおっ!!）

そして、その思いが届くことなく龍可と簪の抗争は続く。

「龍亞は……私が見ますから!!」

龍亞の秘密の恋人である龍可は龍亞を自分に抱き寄せる。

「る、る、龍可ちゃん!？」

「龍可ちゃん、あなたは何をしているの!？」

「龍亞は恋人である私が看病しますから!!」

龍可は秘密にしなければならぬ龍亞との恋人の事実を思わず言うってしまった。

「ええっ!？ こ……恋人!？」

当然簪は驚いて口を大きく開いて啞然としている。

そして、その隣の部屋では……。

（（な、な、何ですとおおおおおおおおっ!?!?））

医務室の隣の部屋でこっそり三人の話を聞いていた遊星や一夏達十数人は口を押さえて本当に小さな声で叫んだ。

（ま、まさか、龍亞と龍可が本当に……）

（ど、どうしましょう、遊星！ 二人は双子の兄妹よ!?!? 恋人同士はマズいわよ!?!?）

二人の兄であり、姉である遊星とアキは頭を抱えて困惑した。

一方、一夏は苦い物を食べたような表情をして箒を見た。

（箒……）

（な、何だ、一夏?）

（実はすごい小さい頃……俺は千冬姉と結婚したいと思っていました……）

（な、何い!?!?）

（で、でも、千冬姉もそれを気付いていたらしく、ちゃんと自分の本当に好きな人と付き合えって言われたんだよ）

（じゃあ、今は……？）

（心配するな、俺はもう第一筋だから……）

一夏は箒の手を握りしめて気持ち伝える。

そして、医務室の龍亞と龍可に簪は絶望を味わった。

しかし、

（嫌だ……もう、逃げることは止めたんだ!!）

簪は自分の大好きなヒーローのような勇気を心の中に秘めて行動に移した。

「龍亞君!!!!」

「ひゃい!?!」

（楯無……俺たちにできることはない。ここは見守ることしかない……）

（そんなあ!?!）

肝心なところで役に立たないジャックであった。

そして、龍亞は龍可と簪にどちらを選ぶか迫られた。

「龍亞!! 私を選ぶんだよね!?!」

「龍亞君……両想いだからといっても血の繋がった兄妹が結ばれることはいけないことなんだよ。ちよつとずつでもいいから……私を好きになって?」

「うっ……あう……」

龍亞にとって龍可は最愛の妹であり、恋人だと思っている。

しかし、簪の言うとおり血の繋がった兄妹が結ばれることはタブーである。

それを考えると龍亞は簪に惹かれていく。

頭の中で龍可と簪がぐるぐると回り、龍亞は目を回すように混乱する。

そして、龍亞はベッドから勢い良く降りると、医務室を飛び出していった。

「龍亞（君）！？」

「うわああああああああああっ！！！」

耐えきれなくなった龍亞は龍可と簪から逃げるように全力疾走で走った。

「ま、待ってよ、龍亞あっ！！」

「……逃がさない！」

龍可と簪はISを起動させて龍亞を追った。

ちなみに、この後龍亞は答えを出すことができずにこの日は終わり、龍可と簪は龍亞が選ぶまで積極的なアプローチを続けるのだった。

そして、それを頭を抱えながら見守る遊星や楯無達だった。

第117話 禁断の三角関係！？（後書き）

ある人と話した結果、更識簪編が終了したら、オリジナルの新シリーズを始めようと思います。

内容はシャルロットが本当の意味で父と決別する話です。

原作二巻のあれで、デュノアやフランス政府からシャルロットを守るために遊星達が奮闘します。

第118話 月夜の覚悟（前書き）

さて、そろそろ原作七巻が九割近く終わってきました。

後は一夏と箒ちゃんの食事シーン！

第118話 月夜の覚悟

IS学園で戦闘に関わった専用機持ちは数時間にわたる事情聴取を受け、夕暮れに近づいていた。

そして、一夏と箒は先日の雑誌の撮影の報酬で貰ったレストランに行くことになった。

月夜と風音のアドバイスで一夏と箒はそれぞれ時間を少し空けて行くことになり、先に一夏が向かったが問題が発生した。

「申し訳ございません。当レストランでは、そのような格好での入店はお断りしております」

「……え？」

ホテル『テレシア』の最上階レストランで、一夏は初老のウェイターに入店を拒否されていた

「え、いや、でも……どうすればいいんですか？」

「そうですね。スーツかタキシードでお越し下さい」

「いや、そんなの持っていないですけど……」

チケットだけで入れる店だと思っていた一夏は呆然とする。

「お客様、三階のショップで買うということもできますが、いかがされますか？」

「えーと、ちなみに一番安いのでいくらくらいでしょうか？」

「そうですね……十万円ほどかと」

（ぐあああ！　一高校生が払える金額じゃない！）

「どうしたの？」

本気で困っている一夏に不意に澄んだ声が聞こえる。

振り向くと、そこにはドレスを着た女性が立っていた。

「これは……ミス・ミューゼル」

ウェイターは女性に向かって丁寧なお辞儀をする。

「トラブル？」

「いえ、こちらのお客様のお召し物が当店の規定に沿わないため、入店をお断りしていたところです」

「入れてあげたらいいじゃない。可哀想だわ」

「申し訳ありませんが、ミス・ミューゼルのお願いでもこればかりは……」

「ふう、仕方ないわねえ」

ミューゼルは、とんとんと顎を指先で叩いたあと、一夏の方を向い

た。

「行きましょうか」

「え？ 行くって……どこに？」

「お店。服を買ってあげるわ」

「え……ええっ！？ そ、そんな、悪いですよ！」

「いいのよ。私、若い男の子にプレゼントするのが趣味だから」

そう言って、ミューゼルは一夏の腕を組んで三階のスーツ売り場に連れて行った。

「……どうして、あいつが？」

その二人を遠くから一人の男が尾行していた。

「……一夏」

それからミューゼルは、一夏に高級なタキシードと二十本ほどの綺麗なバラの花束をプレゼントした。

一夏はやっぱり無償でそれを受け取ることができなかったが、ミューゼルは微笑を浮かべたまま一夏を行かせる。

「す、すいません！ 俺、行きます！ あの、本当にありがとうございました！
ざいました！」

「感謝の気持ちだけ受け取っておくわ」

「最後にお名前だけでもフルネームで教えてもらっていいですか？」

「スコールよ。スコール・ミューゼル」

「本当にありがとうございました！ それじゃあ！」

「ええ。それじゃあね、織斑一夏くん」

スコールは一夏を見送る。

その時、一夏は何かが引かかったが、箒がすでに待っているので急いでレストランまで向かった。

「……そろそろ出てきたらどうかしら？ さっきから殺気がビンビン来ていたわ」

スコールは眼を細め、一夏とは反対方向を見る。

沢山のスーツの影から、氷のような冷たいオーラを纏った月夜が出てきた。

「あら？ あなた、一夏くんにそっくりね」

月夜の姿にスコールは目を丸くして驚き、月夜は小さく口を開けて静かに呟いた。

「……亡国機業、何が目的だ？」

「っ！？」

スコールは一瞬表情が固まったがすぐに戻った。

「ねえ……少し、静かな屋上で話さない？」

「良いだろう」

月夜とスコールはすっかり日が暮れ、夜の世界となっている屋上へ
と行き、話をする。

「もう一度言う。亡国機業のスコール・ミューゼル。何が目的だ？」

「ふふふ……そんなに怖い顔をして。単なる私自身の自己満足よ。
この答えじゃ不満かしら？」

「IS学園に度々刺客を送っている奴の台詞じゃねえだろ」

「そうね、確かにそうも言えるわね……」

スコールは意地悪く、楽しそうに屋上をゆつくりと歩きながら月夜
を見る。

「そう言えば、あなたの名前は何かしら？」

「……織斑月夜だ」

「へえ……織斑月夜くんね……そんなに一夏くんの事が大切なのか

しら？」

「当たり前だ。織斑一夏は俺の守りたい者の一人だからな。たとえば、俺の命を懸けても」

「なかなかの覚悟ね。私はそういうのは嫌いじゃないわ」

それから互いは話さなくなり、沈黙が続く。

月夜は右手で左腕のガントレットに触れる。

「……お前ら亡国機業が何を企んでいるかなんて俺にとってはどうでもいいことだ」

「あら、そうなの？　じゃあ、もう会うことは——」

「——だがな」

スコールの言葉を遮り、月夜の体が真紅の光に包まれた。

眩しい真紅の光にスコールは一瞬眼を閉じてしまった次の瞬間。

チャキ！

首もとに鋭き刃が突きつけられた。

紅月を纏った月夜が愛刀の月牙をスコールに突きつけ、声のトーンを低くして喋る。

「お前達が俺の家族、仲間、恋人……俺の全ての大切な者を傷つけようとするなら……俺はお前達亡国機業を――殺す」

月夜の体中から放たれる研ぎ澄まされた刃のような殺気がスコールに突き刺さる。

（この子、異常だわ。篠ノ之束のような非常に強い狂気と、織斑千冬のような無双の強さを持ち合わせている。何が彼を此処までにしたのかしら……？）

スコールの異常さに若干圧されながらもいつものように誰にも屈しない不敵の笑みを浮かべて月夜を見下ろした。

すると、月夜はゆっくり眼を閉じると、月牙をスコールの首もとから離し、鞘に納めて下がる。

「……今回は一夏が世話になったから見逃してやる。だが、次は無
いと思え。殺されなくなったら大人しく平和に暮らすんだな」

月夜はスコールに警告をすると、紅月を解除した。

スコールは汗を拭い、ホッとした表情で月夜を見つめる。

「……残念ながらそれは無理よ。私には私の目的があるからね」

「てめえ……」

「さようなら、織斑月夜くん」

スコールは別れの挨拶をすると、闇に包まれてその場から姿を消し
た。

「ちっ……やっぱりがさないで、そのまま叩き潰して千冬姉に突
き出すべきだったか？」

月夜は舌打ちをして屋上の床を強く蹴った。

「もう、ダメだよ、つつくん。そんな怖いことを言ったら」

不意に背中から抱き締められ、月夜の殺気が一気に消えた。

「た、束姉!？」

「つつくん、久しぶり♪」

篠ノ之束は無邪気な笑顔で月夜を優しく包み込んだ。

第119話 月と兎の対話（前書き）

一夏と箒ちゃんのレストランイベントは次回に持ち越しとなります。

今回は月夜と束さんのお話です。

第119話 月と兎の対話

束に後ろから抱き締められた月夜は顔を真っ赤にしたが、理性は保っているため、束を引き剥がした。

「束姉、呼んだのは他でもない。あの無人機のことだ」

「あー、ゴーレム——ね」

「束姉は何のために作ったんだ？」

「科学者としてISの可能性を広げたただただだよ。まあ、IS学園に送ってみんなと戦わせるつもりだったけど」

笑いながら言う束に月夜は睨みつけ、慌てて束は弁明する。

「だ、だけど、あくまで戦闘データを取るだけだからみんなを殺すつもりはないよ！ 本当だよ！」

「……わかった、束姉の言葉を信じるよ。だけど、そのゴーレム——のコアは……」

「うん、ちーちゃんから聞いたよ。奪われたんだってね」

「束姉はどう思う？」

束は夜を照らす月を見上げながら月夜の周りをゆっくりと歩く。

「私の天才的頭脳が訴えてる。ゴーレム——から奪った三つのコ

アを使って三幻魔の力を増幅させようとしている。例えば……三幻魔の力を秘めたISとかは？」

ISの開発者である束の推測に月夜は固まった。

（まさか……遊星達みたいに第零世代型のような精霊の力を引き出すISを？ そんなことになったら……）

月夜は考える内に息が荒くなっていき、体がガクガクと震え、心臓の辺りを手で強く抑えた。

「俺が……破壊する！！ 絶対に、三幻魔を、アルミサエルを破壊してやる！！！」

「つつくん？」

「俺の命に代えても……絶対に、絶対に！！」

大声を出して自分を追い詰めるような事を言う月夜に、束は優しく抱きしめて月夜を宥めた。

「束、姉……？」

「つつくん、何があったの？ 私には、つつくんの心に深い悲しみと怒りがあるように思えるんだけど……」

「……みんなには内緒にしてくれる？」

「うん」

落ち着きを取り戻した月夜はその場で束と座り、ゆっくりと語り出した。

「あれは……未来の世界で、未来の束姉に紅月を貰った時だった。俺は嬉しくて大空を自由自在に飛んではしゃぎまわっていた。だけど、そのときにまだ会得さえもしていない紅月のワンオフ・アビリティーの虚空天月が発動して、そこから更に先の数年後の未来に行ってしまったんだ……」

「その、未来の世界で何を見たの……？」

束に聞かれ、月夜は重い口を開いた。

「三幻魔とアルミサエルに滅ぼされた、破滅の世界だ……」

月夜の言葉に束は呆然としてしまう。

「破滅の、世界……」

「俺は最初、嘘の世界だと思っていたよ。世界全てが廃墟と化し、生き物すらない完全に滅んだ最悪の世界だったんだよ……しかも、その世界は俺を極限まで追い詰めやがった……」

月夜は爪で手を傷つけるほど強く握り締め、唇を強く噛みしめた。

「何があったの……？」

聞くことしか出来ない束は月夜の手を握りながら聞いた。

そして、月夜から出される言葉に束も初めての絶望を味わうのだった。

「俺が現れた場所の近くに……親父とお袋の屍が横たわっていたんだ……」

「――っ?!?!?」

あまりのことに束は口を手で抑え、言葉が出なかった。

「最初な何かの間違いだと思ったよ……だけど、どこをどう見ても俺の親父とお袋、織斑一夏と織斑箒だったんだ……俺は自分の無力さに嘆き悲しんだよ……」

月夜はあの時味わった深い悲しみが脳裏に、そして今見たような鮮明に蘇り、目に涙を浮かべた。

空いている片手で屋上の床を何度も叩き、言葉を紡いでいく。

「俺は、小さい頃から親父や千冬姉みたいに強くなって大切な人を守りたかった!! だけど、未来の俺は守ることができなかった!!」

「……………」

(これが、つつくんの秘めていた心の闇なんだね……)

束は無言となって月夜の『心の闇』を聞いている。

「だから俺は元の世界に帰って前以上に訓練を重ねて強くなった！俺はもう誰も失いたくない！！俺は命を懸けてもみんなを守るんだ！！！」

家族、仲間、そして恋人……大切な人の為なら自分の命など簡単に投げ出してしまふほどの月夜の覚悟。

束は未来の甥であり、恋人の月夜はこれから起こりうるであろう三幻魔との戦いで本当に命を失いそうな予感がしてならなかった。

（ダメ……そんなのは絶対にダメ！！）

「つつくん！」

束は月夜を抱き寄せて、キスをした。

「んむう （束姉）！？」

驚く月夜に束はキスをしながら自分の舌を月夜の口の中に入れて月夜の口内を犯した。

「んちゅ……くちゅ……つつ、くん……」

「あんう……束……んっ……姉……」

束に攻められる形でそれを受け入れる月夜。

二人はお互いを両腕で強く抱きしめ、舌を絡め合ってディープキスを更に激しくしていく。

そして、束は唇と舌を月夜から離し、月夜は顔を真っ赤にして口をパクパクさせる。

「た、束姉……？」

「つつくん、何でもかんでも自分一人で抱え込まないで。私が……ううん。箒ちゃんやいつくん達が居るんだよ？ みんなで協力しあえば必ず道は開けるよ」

「束姉……」

「だから、もう命を懸けるなんて言わないで……つつくんが死んだら私、嫌なんだからね……」

「……ごめん、束姉」

月夜は泣きそうになっている束を優しく抱きしめた……。

それから少し時間が経ち、ようやく落ち着きを取り戻した二人。

すると束は立ち上がり、月夜に手を振った。

「バイバイ、つつくん。そろそろ帰るね」

束は自分の研究所に帰ろうとしたが、後ろから月夜に抱きしめられてそれを阻まれた。

「つつくん？」

「嫌だ……」

「え？」

月夜は束の耳元でそっと囁く。

「束姉を帰したくない。今夜は俺と一緒に居てほしい……」

「つつくん、ダメだよ……帰らなかったらみんなが心配するよ……？」

「それでも構わない。俺は束姉と一緒に居たい」

「もう、つつくんは甘えん坊さんだなあ……わかったよ。じゃあ、私のもう一つの隠れ家に行こうか」

「ああ、わかった」

月夜は紅月を再び纏い、束を抱き上げて空高く飛んだ。

その後、月夜がIS学園に帰ってきたのは翌日のお昼頃だった。

.

第120話 二人の晩餐（前書き）

はい、やって来ました原作7巻のラストを飾った一夏と箒ちゃんの
ディナー♪

そろそろバカテスも書かなきゃ……。

第120話 二人の晚餐

「……………」

レストランの一番奥の席、夜景が一望できるそこで、箒は落ち着かなそうに座っていた。

なぜかという、着ている服が原因なのであった。

『当店では女性はドレスを着用していただきます』

そう言われて、ドレスを貸し出された。

女性優遇社会であるため、男は買ってこいと突っぱねるが、女性には親切丁寧に店側が貸してくれるのだった。

（へ、変ではないだろうか……？）

箒が身に纏っているのは白を基調としたドレスで、華やかさよりも貞淑さをメインに据えてある。

（やはり、服は和風に限る）

和風をこよなく好んでいる箒はドレスが苦手なのである。

「箒、悪い。遅れた」

「遅いぞ、一夏！ お前は一体何をして――」

遅れてきた一夏に文句の一つでも言わないと、そう思って振り返ると、箒の世界が止まった。

「よっ」

上質な黒一色に統一されたタキシード姿の一夏はスマートで凛々しく見えた。

（か、格好いい……）

言っただけでやるつもりだった文句は箒からは消えてしまった。

ぽーっと一夏の姿を見つめていると、花束を渡された。

「これ。受け取ってくれ」

「こ、これは……バラ、か……？　しかも赤一色の……」

生まれて初めて異性から花束（それも女子の永遠の憧れである赤いバラ）を受け取った箒は、なんだか夢を見ているかのようなぼんやりとした混乱に襲われた。

（い、一夏が遅れていて、私は怒っていて、落ち着かなくて、そしてたらやっと一夏が来て、いきなりバラの花束を渡されて……）

その後、老紳士のウェイターに着席を促され、今夜のスペシャル・ディナーの説明を受けた。

説明から解放されたふたりは自然と深く息を吐いた。

「な、なんというか……あれだな、場違いだ」

「だ、だよなあ。俺達が来たい店じゃないぞ、ここ」

一夏はポケットに手を入れて、小さな箱に触れた。

（これ、箒に渡せるかな……？）

一方、一夏と箒がいるビルの反対側のビルに複数の影があった。

《あの二人は本当に16歳か？》

《服は人を変えるんだなー》

《大人っぽくていいねえ》

ビルの屋上にスターダスト・ドラゴンとジャンク・シンクロンとデブリ・ドラゴンがいて、二人の様子を見ていた。

そして、お馴染みのD・キャメランとD・ビデオンが精霊化して気付かれないように二人を撮影をしている。

更に……。

「母様、素敵です♪ 父様も格好良いです♪」

「パパ、カッコイイ♪ ママ、キレイ♪」

一夏と箒の未来の娘の風音と星奈もいた。

そして、二人は今この場には居ない兄に対して怒っていた。

「全く、兄様はこんなスペシャルイベントに一体どこをほつつき歩いているのだか……」

「お兄ちゃんの後でせつきょうだよ!」

「当たり前です!」

その頃織斑家の長男の月夜は恋人兼叔母の束と甘くて激しい一夜を過ごしているのは当人達以外誰も知らない……。

一夏と箒は順番に出される料理をゆっくり食べていた。

ふと、一夏は手を止めて箸を見る。

「箸、そのドレスだけど、いいな。似合っている」

「ふえ!？　そ、そうか？　い、一夏もそのタキシード、すごく似合っているぞ……」

かなり緊張している箸だが、向かいの一夏も緊張していた。

メインディッシュを食べ終え、デザートが来ると、一夏はポケットに手をつっ込んだ。

(よ、よし……箸に渡すぞ!)

「ほ、箸!」

「な、なんだ?」

「お前に……言いたいことと渡したい物があるんだけど……」

「う、うん」

一夏に見つめられ、顔が熱くなった箸はグラスをてにとって熱冷ましに中身を一気に飲み干した。

「……はれ?」

きゅーと頭に血が上っていくような高揚感と圧迫感に襲われ、目の前の世界がぐるぐると回っている。

次の瞬間、箒はコンセントを抜いたテレビのようにぶつんと意識が飛んだ。

「お、おい、箒？」

いきなりイスにもたれてぐったりとした箒に、一夏はやや焦りながら声をかける。

しかし、テーブル越しでは埒がわからないと思った一夏は、立ち上がって箒の側まで移動した。

「箒、どうした、おい」

「ふにゃ……。いひかぁ……」

「うわ！？　なんだなんだ？　お前、すっげえ酒臭いぞ」

「らにい……。らにをあかな……」

呂律が回っていない箒はふらふらとしながら一夏を叩く。

「せーばい、せーばい……！」

「うわ、ばか、やめろ。こら、叩くな！」

「にゃはははは……」

そんなやりとりを見て、おかしいと思ったウェイターが急ぎ足でやってくる。

「お客様、どうされましたか？」

「いや、俺にも何が何だか……。水を飲んだら急にこうなって」

「水……？ 失礼」

ウェ이터は空っぽになっているグラスを手にとると、その匂いをかぐ。

「だ、誰だ、このお客様にお酒をお出ししたのは！？」

「酒！？」

「しゃけー……」

「は、はい！ 自分です！」

「またお前か！ 運ぶテーブルを間違えるなど何度言ったら……」

がみかみと怒るウェ이터に、ぺこぺこ頭を下げる若者。

酔っばらっている筈、そして、ため息をつく一夏だった。

《おいおい……》

《こんなのアリかよ……》

《一夏の決意の時が……》

スターダスト・ドラゴン達は事の事態にため息をついた。

デブリ・ドラゴンは星奈にちゃんと指で突いて尋ねた。

《なあ、未来の箒も酒が弱いのか？》

「うん、弱いよ。いつもは飲まないけど、飲んじやった時はあんな風になるよ」

《あらら……》

苦笑いを浮かべるデブリ・ドラゴン。

すると、この場を包み込むような殺気が放たれる。

「よくも……よくも父様の……」

《か、風音さん……？》

スターダスト・ドラゴンが恐る恐る尋ねる。

「フフフ……チョットアノウエイターサントオハナシヲシテクルヨ」

風音はいつものように何もないところから愛刀を取り出して箒に誤って酒を出したウェイターのところに行こうとする。

《お前はいつたいどこの魔王さまだぁあああぁっ!?!?》

《鬼だ……本物の鬼がそこにいるぞ!!!》

《ジャンクロン、バーサーカーかガードナーを呼んでくるんだ!!!
俺達だけじゃ死ぬぞ!?!?》

星奈を安全な場所へすぐに移したスターダスト・ドラゴン達は魔王と化した風音を止めるのだった。

そして、数分後にやって来たジャンク・バーサーカー率いる援軍によってようやく風音の暴走を抑えられたのだった。

第120話 二人の晩餐（後書き）

次回で更識簪編が終わると思います。

そうしたら、原作8巻（出るかな……？）の繋ぎに新シリーズをスタートします。

第121話 想いを貴女に（前書き）

これにて更識簪編は終了となります。

次からはオリジナルの新シリーズ、シャルロット編（仮）を……どうしよう？

実は悩んでいます。

シャルロットの新しいIS、本当の父親との絶縁……。

これから出る（？）原作に支障が出そうな気がするので今凄く悩んでいます。

一時更新を停止して活動報告にも書いてある新連載も手ですが……。

皆さんの意見をお願いします。

第121話 想いを貴女に

「ふふふふふ……」

ぎゅうううううう……っ！

「ぐええええっ。箒、やめろ、首を絞めるな！ ……ぐええ！」

完全に酔いつぶれた箒をおんぶして、一夏はIS学園への帰り道を歩いていた。

「はぁ……なんか今日は色々ありすぎて疲れた……」

（だけど、箒のドレス姿、きれいだったな）

自分の最愛の恋人のまた違う魅力に一夏は惚けてしまった。

それから時間をかけてIS学園の学生寮に戻ると、一夏は風音を呼んで酔いつぶれている箒の服をドレスから寝間着に着替えさせてもらってベッドに寝かせる。

「悪いな、風音」

「いえ、これぐらい何ともありません。それでは父様、お休みなさい」

「ああ、お休み」

風音が部屋から出ると、一夏はタキシードからラフな私服に着替え

て部屋を後にした。

それから数十分が経過した。

「ふわぁ……あれ？」

箒は目を覚まし、むくつと起き上がった。

「部屋……？」

まだ意識がはっきりしておらず、酔いが少し残っている状態だった。

「確か……ホテルのレストランで一夏と食事をして……一夏が渡したい物があると言って……それで水を……」

（そうだ、それから私の意識が無くなって……）

箒は頭を抑えて冷静に状況を整理する。

そして、隣のベッドに視線を向けると一夏は眠っていなかった。

「一夏……一夏……！！」

箒はベッドから降り、部屋を飛び出して行った。

誰もいない校舎の屋上で一夏は寝そべっていた。

小さな箱をじっと見ながらため息をつく。

「結局、渡せなかったな……どうするか」

箱をポケットに入れ、夜空をぼーっと見つめる。

「渡すのはまたの機会にしようかな……」

再びため息をついて箱を仕舞おうとする。

「一夏……!!」

夜空を駆ける真紅のISを纏った箒が一夏を見つけるとゆっくり降り立つ。

「箒……もう、大丈夫なのか？」

「まだ少しぼーっとするが大丈夫だ。私が酔ったばかりに一夏に迷惑をかけてしまった」

箒は紅椿を解除しながら頭を下げて一夏に謝罪する。

「箒は何も悪くないよ」

一夏は立ち上がり、優しく微笑みながら箒の頭を撫でる。

「一夏、私に何か渡したかったのではないか？」

「え……？ えっと……」

（わ、渡すしかないのか？）

何の気持ちの決心が付いていない一夏は内心大慌てをする。

（ああ、もう、やるしかない！！）

「箒、ちょっといいか？」

「え？ あ、わわっ！？」

一夏は箒の後ろに回り込んで両腕で抱きしめた。

「い、一夏……？」

「箒は暖かいな……」

ギュッと抱きしめる両腕の力を強くして更に箒と密着させる。

それに比例して箒の心臓の鼓動が激しくなる。

「なあ、箒……」

「な、何だ？」

「思えばさ、IS学園に入学してから六ヶ月が経つけど、色々あったな……」

「う、うむ。そうだな……本当に色々あった。なあ、一夏。その六ヶ月で私が嬉しかったのは何だと思う？」

箒は両手で一夏の腕に触れながら聞いてみる。

「え？　そうだな、束義姉さんから紅椿を貰った時か？」

鈍感な一夏らしい台詞に箒は少し噴き出してしまふ。

「ふふっ、違うぞ。それはな……」

箒は顔を一夏に向ける。

「お前と……六年来の再会を出来たこと。そして、大好きな一夏と恋人同士になれた事だ……」

それは、箒が生きてきて一番嬉しかったことの出来事であろう。

自分を想ってくれる箒の可愛らしい答えに一夏はとても嬉しくなりポケットに入っている箱を渡す決心が付いた。

「箒、今からもっと幸せにしてやる。少しの間だけ目を閉じてくれるか？」

「目を？ わかった。んっ……」

箒は目を閉じ、一夏から与える幸せを待ち望んだ。

一夏は片腕を箒から離してポケットから箱を取り出して開け、箱から一つの小さな物を取り出した。

そして、箒は目を閉じながら今までにないほどの期待感が溢れていた。

（一夏は私にどんな幸せをくれるのだろうか……？ ん？ 私の左手を……）

一夏は左手で箒の左手首を掴み、右手に持ったそれを左手の薬指にゆっくり填める。

（……………え？）

今まで感じたことのない左手の薬指の感触に思考が軽く停止する。

「良いよ、目を開けて」

一夏が耳元で囁く声に箒は目を開け、視線を左手に向ける。

「……………っ?!?!?」

左手のそれを見た瞬間、箒は右手で口元を強く抑えて声にならない小さな叫びを上げた。

左手の薬指に詰められていたのは、小さな真紅のルビーが埋め込まれたシルバーリングだった。

月の光に反射してキラキラと輝いていた。

「一夏……………これ……………?」

プルプルと左手が震えながら一夏に尋ねる。

そして、一夏の口から言葉が放たれる。

「箒、俺と結婚してください」

その言葉は箒のみならず、女性なら誰もが嬉しい極上の一言だった。あまりにも嬉しすぎて、箒は夢か幻聴でないかと錯覚してしまう。

「本当はレストランで渡すつもりだったんだけど、ここになって悪かったな」

ロマンチックな場所を考えていた一夏の謝罪に箒はふるふると顔を横に振った。

「そんなことはない……私の大好きな一夏からこんな素敵なプレゼントをくれたんだ。嬉しすぎて死にそうだ……」

「それじゃあ、答えはもちろんOK？」

「当たり前だ。私は……永遠に一夏の側にいたい」

「じゃあ、俺の左手にこれを填めてくれるか？」

一夏は箱からもう一つの指輪を取り出した。

それは箒の指輪と同じデザインのシルバーリングだが、宝石は青く輝くサファイアだった。

「ルビーとサファイアのペアリング……」

箒はサファイアのシルバーリングを取り、一夏の左手の薬指に填めた。

「箒はともかく、俺はまだ結婚できる年齢じゃないから婚約だな」

「一夏……」

「ん？」

「愛している……」

「俺も愛してるよ、箒……」

一夏は箒を解放して、キスをする。

翌日。

休日の昼頃に昨日の夜から行方不明だった月夜が帰ってきた。

「ただいま……」

目を手で擦りながら食堂で一夏達と話をする。

「月夜、昨日はどこに行ってたんだ？」

「ああ、親父……指輪を渡せたんだな」

「まあな。って、話を逸らすな！」

すると、何かがおかしいと思った筈は月夜の服にある髪の毛を取った。

「……月夜、どうしてお前の服から姉さんの髪の毛があるんだ？」

ギクッ!?

それは篠ノ之束特有の長くて薄い紫色に似た髪の毛だった。

「え、えっと、それは……」

「「月夜……」」

「兄様……」

一夏と箒、それと風音が月夜を睨みつける。

何が何だかよくわからない星奈は首を傾げている。

「……サラバ！」

「「「待てい！！！」」」

耐えきれなくなった月夜はその場から逃亡し、一夏たちが追いかける。

月夜は言えるわけがなかった。

自分の叔母である束と一晩中交わっていたことなど……。

その後、もう一人の叔母である千冬も加わり、捕らえられた月夜はみんなから説教を受けたそうだ。

第121話 想いを貴女に（後書き）

現在活動報告でアンケート募集中の『遊戯王5D's×Fate／stay night』と『仮面ライダーWStrikers Another THE FINAL STRIKERS』の現在の投票数は6・8です。

投票期間は9月末までにし、10月の上旬から連載をスタートしたいと思います。

投票は活動報告をお願いします。

第122話 思いと想い（前書き）

うーん……。

（一”一；）

何か新シリーズが微妙な感じになってしまいました。

ってか、弓弦さん、早く8巻書いてください。

第122話 思いと想い

幻魔皇ラビエルの襲撃から一段落したある日、遊星はシャルロットに誘われて珍しく空いていたISアリーナ模擬戦をしていた。

遊星は龍星をスターダスト・ドラゴン／バスターに、シャルロットは先日手に入れたスピリットシンクロフォルムのラファール・リヴアイヴ・アンジュに変形させ、模擬戦を行っている。

「裁きの流星！！！」

シャルロットはサブマシンガンと装甲の小型のキャノン砲で光の弾を無数に放つ。

遊星はスターソード・バスターを片手で構えて大きく息を吐く。

「行くぞ……スターダスト・ドラゴン／バスター！！！」

《応、出力全開！！》

龍星から放出される星屑の光が遊星の体に絡みつき、瞬間加速を行うとほぼ同時にスターソード・バスターで光の弾を全て切り裂いた。

「やるね……でも！」

シャルロットは瞬間加速で遊星の懷に潜り込んで69口径パイルバンカーを取り出す。

「灰色の鱗殻！！」

ヴァイロンの力で大幅に強化されたパイルバンカーをシャルロットは零距离で引き金を引き、を三発撃ち込む。

ズガンッ！　ズガンッ！　ズガンッ！

三発撃ち込み、シャルロットは龍星のシールドエネルギーを大幅に奪ったと確信したが、それは違っていた。

「残念だったな、シャルロット」

スターダスト・ドラゴン／バスターの蒼穹の鎧は打ち碎かれたが、まだスターダスト・ドラゴンは健在だった。

「しまっ——」

「シューティング・ソニック！」

カウンターに遊星はスターソードから光線を放ち、シャルロットを攻撃する。

しかし、とつさにシールドを呼び出したシャルロットはダメージを極力抑えた。

遊星はフツと笑い、手を高く掲げて叫ぶ。

「フォーミュラ・シンクロン！」

バックアップでフォーミュラ・シンクロンを呼び出し、シャルロットは一瞬で嫌な予感が浮かぶ。

「まさか！」

「スターダスト・ドラゴンにフォーミュラ・シンクロンをチューニング！」

フォーミュラ・シンクロンは二つの輪となり、スターダスト・ドラゴンに纏い、加速する。

「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く。光さす道となれ！ア
クセルシンクロ！」

遊星とスターダスト・ドラゴンの姿が消え、直後にシャルロットの上空にその姿が現れる。

「生来せよ、『シューティング・スター・ドラゴン』！！」

遊星最強のシンクロモンスター、シューティング・スター・ドラゴンの登場にシャルロットは一筋の汗をかく。

「来たね……シューティング・スター・ドラゴン。だけどね！」

汗を手で拭い、アサルトカノンと連装ショットガンを呼び出して構える。

「今日こそ倒してみせる！」

シャルロットの――娘の意気込みに応えるため、遊星はスターソード・シューティングを構える。

「来い、シャルロット!」

「はい!」

それから約10分後、シャルロットが一時は善戦したが、最後には遊星が巻き返し、撃墜されてしまった。

「あはは……負けちゃったな」

「大丈夫か、シャルロット?」

「うん。大丈夫だよ、お父さん」

「そうか、それじゃあ休憩にしよう」

ISを解除して遊星が用意したコーヒーとお菓子で休憩に入る。

コーヒーでホッと一息すると、シャルロットは突然笑みを浮かべた。

「シャルロット、何がおかしいんだ?」

「え? えっと、それは……幸せだなんて思ってた」

唐突にそう言うシャルロットに遊星は眼をぱちくりとして話を聞く。

「IS学園に転入するまでは……僕はこれからもあの人の道具としてこれからも生きていくのかなと思っていたから。それを、今の現状から考えると僕の運命は大きく変わったなと思ってね」

あの人とはシャルロットの実の父親であり、娘を道具扱いした男である。

シャルロットはこの数ヶ月の出来事を振り返る。

「福音、天魔時戒神、亡国機業、三幻魔……この数ヶ月に大変な事はたくさんあったけど、色んな人たちと出会って僕はここにいます。そして……お父さん……不動遊星が僕を娘にしてくれた」

シャルロットはコーヒーのカップを置いてギュッと遊星に抱きついた。

「僕は幸せだよ。ありがとう、遊星お父さん」

遊星はシャルロットの突然の行動に驚いたが、すぐに優しい目をして、左手で頭を撫でる。

「父親らしいことをまだしたつもりは無いが、そう言ってもらえて嬉しいよ、シャルロット。だが……急にどうしたんだ？」

遊星にそう聞かれたシャルロットは暗い表情を浮かべた。

「……昨日、夢を見たんだ。亡くなったお母さんとの思い出を……」

「そう、だったのか……すまない」

「ううん。二年も前に亡くなったから……もう悲しくないよ」

そう言いながらもシャルロットは暗い表情のままだった。

遊星は待機状態のペンダントの龍星を握り締めると、ゆっくり立ち上がった。

「シャルロット、今度の連休空いているか？」

「え？ あ、うん。空いているよ？」

遊星は右手をシャルロットに向けて差し出す。

「一緒に……フランスに行こう。シャルロットのお母さんの墓参りに」

突然すぎる遊星の提案。

だがそれは、シャルロットにとっては願ってもないことだった。

「お母さんの墓参り？ お父さん、本当に僕を連れて行ってくれるの？」

「娘を俺が引き取ったんだ。一度はシャルロットのお母さんに挨拶しに行かないとな」

「で、でも、旅費とか飛行機のチケットとかもあるし、今からじゃ

間に合わないんじゃない……」

「アーマード・ヴァイロンで俺と一つになった後に、シューティング・スター・ドラゴンの空間跳躍を使えばあつという間だ」

「あ……」

シャルロットは開いた口が塞がらなかった。

ラファール・リヴァイヴ・アンジュのアーマード・ヴァイロンは他のIS操縦者と一つに合体する事が出来る。

更に、龍星のシューティング・スター・ドラゴンの空間跳躍能力を利用すれば、例えば地球の反対側でも行くことが出来る。

そうすれば短時間で日本からフランスまでひとつ飛びである。

「さあ、どうする？」

「……行きます！」

遊星の手を取り、勢い良く立ち上がる。

だが、この小旅行が二人を大きなトラブルに巻き込むこととなるの
だった。

・

第123話 謎の光の龍（前書き）

この新章の名前が思いつかないので、募集します！

この章ではシャルロットが危ない目にあったり、遊星がブチ切れたります。

よろしくお願いします！

m
┌
└ m

第123話 謎の光の龍

遊星とシャルロットの母の墓参りへ行く約束の連休がやって来た。

遊星は千冬に頼み込み、あの手この手（デブリ・ドラゴンから入手した一夏のプライベート写真など）で外出許可を貰い、アキ達には事情を説明して納得してもらった。

時刻は午前0時。

フランスと日本の時差はマイナス8時間なので、深夜に向かうことにした。

「シャルロット、行くぞ」

「はい！」

遊星はすでに龍星を起動させてシューティング・スター・ドラゴンの姿になり、シャルロットはラファール・リヴァイヴ・アンジュとなっていた。

シャルロットは胸に手を起き、ゆっくり息を吐いて言う。

「アーマード・ヴァイロン」

シャルロットとラファール・リヴァイヴ・アンジュが光り輝き、I Sの装甲が勢いよく外れて、龍星の装甲と合体する。

そして、シャルロットの体が光の粒子となり、遊星の中に入った。

遊星の目は紫色になり、髪の色が金髪になる。

「これが、アーマード・ヴァイロンか……不思議な感じがするな。
シャルロット」

遊星は自分の中のシャルロットを呼んだ。

しかし、シャルロットは返事をしなかった。

「シャルロット……？」

遊星は呆然としてシャルロットの名前を呼んだ。

遊星の中に入ったシャルロットは不思議な光景を目の当たりにしていた。

『何……これ……？』

シャルロットの目の前には壮大な宇宙が広がっていた。

数多の惑星に、無数の星が集まる銀河。

『これが、お父さんの秘めた力……?』

そして、その宇宙の奥に星のような光り輝く巨大な光があった。

『あれは……?』

その光は巨大な白き龍へと姿を変えた。

『スターダスト・ドラゴン……?』

シャルロットは真っ先にその龍の姿を思い浮かべたが、よく見ると違っていた。

角、腕、翼、脚、尻尾、……その肉体全ての細部が異なり、シャルロットはその神々しくも堂々とした姿に圧倒されていた。

『あなたは、何……?』

謎の龍は口を大きく空けて咆哮をあげ、体から星の光を放出させる。

《―――!―――!》

星の光はシャルロットの中に入っていく、体が一瞬だけ黄金に輝いた。

『今のは……?』

そして、謎の龍が再び咆哮をあげると、シャルロットは目の前が真っ白になる。

「シャルロット！ シャルロット！！」

『……………はっ！？』

遊星の呼ぶ声に意識が覚醒するシャルロット。

「大丈夫か？」

心配そうにシャルロットの身を案じる遊星だが、シャルロットは元気な声で応える。

『うん！ ちょっとぼーっとしちゃっただけだから。それよりお父さん、早く行こう！』

「ああ。よし、頼むぞ。シューティング・スター・ドラゴン」

《任せろ！！》

遊星は空に向かって飛翔し、速度を上げて光速を越える。

ブォン！！！！

空間を突き抜けて、遊星は空間跳躍を行う。

数秒後、遊星は日本からフランスの人里から離れた場所に空間跳躍をし、ゆっくりと降りる。

「着いたか……シャルロット」

『うん』

シャルロットはアーマード・ヴァイロンを解除して遊星の隣に立ち、二人は同時にISを解除して普段着となる。

「まだ少し暗いな、早く街に行こう」

「道案内は僕に任せて」

「頼む」

遊星は龍星からD・ホイールを呼び出し、シャルロットにヘルメットを渡して、後ろに乗せる。

「しっかり捕まっている」

「お願いしまーす」

遊星はD・ホイールを走らせ、シャルロットの母の墓がある近くの街まで向かった。

約三十分掛けて着いた場所はそれなりに発達した都会の街で、人がたくさん賑わっていた。

「墓参りは明日にして、今日はこの街で過ごすか？」

「え？ いいの？」

「ああ、俺は構わないよ。墓参りは明日の朝に行こう」

「うん！　じゃあ……それまで僕とお父さんのデートだね♪」

シャルロットのセリフに遊星は苦笑を浮かべる。

「デートって……」

「ねえ、早く行こう！　久しぶりにジェラートを食べたい！」

「あつ、ちよっ……！」

シャルロットは遊星の腕に抱きつくのと、そのまま強引に引っ張って街に繰り出す。

フランス名物のジェラートを食べ、IS学園の仲間のお土産を一緒

に選んだり。

さながらそれは、父と娘がデートをする光景である。

「あの娘は……!？」

二人のデートを遠くから睨むように見る女性が一人。

シャルロットの楽しそうで幸せそうな顔を見ると、ギリツと齒を食いしばり、手を握りしめて爪を食い込ませる。

「忌々しい……泥棒猫の娘が!!」

女性は携帯電話を壊すような力を手に込めながら取り出した。

遊星とのデートにシャルロットはご満悦で、遊星があらかじめ予約してあったホテルに泊まる。

親子と言ってもやはり色々危ないので（特にアキとか）、それぞれ個室である。

そして、翌朝。

遊星とシャルロットはホテルで朝食を食べると、すぐにホテルをチェックアウトしてシャルロットの母親の墓がある教会に向かった。

第124話 娘から父への秘めた想い（前書き）

ふむ……。

話の区切りの都合上、短くてすいません。

ちなみに、この章の題名を『シャルロット奪還編』にしようと思います。

本日中に設定しておきます。

第124話 娘から父への秘めた想い

ホテルをチェックアウトした遊星とシャルロットは教会に行く前に花屋で墓に供える花束を購入した。

それからD・ホイールで教会に赴き、シャルロットの母が眠る墓に向かう。

「シャルロット。ここか……？」

「うん……ここにお母さんが眠っているの」

シャルロットは墓の前に座り、墓石に触れながら話をする。

「お母さん、二年ぶりだね……ごめんなさい、なかなか会いに行けなくて……」

シャルロットは母に謝り、花束を墓の前に備える。

「今日はお母さんに紹介したい人がいるの。僕のお父さんになってくれた不動遊星さんだよ」

遊星はシャルロットの隣に座り、シャルロットの肩にポンと手を乗せてシャルロットの母と話す。

「初めまして、不動遊星です。訳あってシャルロットの父親になりました。俺は……父親として、シャルロットを守っていきます」

墓前にて約束を交わし、遊星とシャルロットは両手を重ねて拝んだ。

シャルロットは顔を上げ、手を離すと遊星に申し訳なさそうな表情をする。

「お父さん、少しでも席を外してくれるかな？ お母さんと二人っきりで話がしたいんだ……」

「わかった。気の済むまでお母さんと話しておくんだ。俺はこの辺りを散歩しているから」

「うん、ありがとう」

遊星はシャルロットの頭を撫で、その場を後にして散歩に向かう。

残ったシャルロットは母と二人っきりで話をする。

「お母さん、お父さんってとっても素敵な人でしょ？ 僕はお父さんの娘になって今凄く幸せなんだよ」

満面の笑みを浮かべて遊星のことを話す。

「お父さんが居たから今の僕がある。こうしてお母さんに会いに行

けた。感謝しても、し尽くせない程にね……」

急にシャルロットは表情を曇らせて口を閉じた。

大きく息を吐くと、再び口を開いて話をする。

「えっと、お母さんにだけ……僕が今まで秘めていた気持ちを打ち明けるね……」

シャルロットは晴天の青い空を見上げながら言う。

「僕はお父さんを……ううん。遊星の事を父親じゃなくて、男性として大好きなんだ……」

それはシャルロットが胸の奥で秘めていた強い想いだった。

「最初は織斑一夏って男の子を好きになっていたんだけど、多分その頃から同時に遊星も好きになっていたんだと思う。それで、その想いに気付いたのはつい最近なんだ……」

シャルロットの脳裏には今までの遊星の笑顔、D・ホイールに乗っている凜とした姿、戦っているかっこいい姿が浮かんでいた。

「かつこよくて、いつもはクールだけどとっても優しくて熱い心。僕や仲間達を常に大切に想ってくれる、これで惚れないわけがないよ。だけどね……」

シャルロットは唐突に目頭に小さな涙を浮かべて頬に一筋の道を造る。

「遊星には……恋人のアキさんが側にいる。僕が入り込む隙なんて無いんだ……」

遊星にはアキという掛け替えのない恋人がいる。

「アキさんも僕を娘として大切に想ってくれている。僕は今の関係を壊したくないんだ……だから、この想いは僕とお母さんだけの秘密にして、一生胸に仕舞っておくね……」

それから遊星に聞こえないように声を殺して涙を流し続けるシャルロット。

そして、涙を出し終わると、手で顔を拭い、母に向かって笑顔を見せる。

「お母さん。僕はこれから新しい未来に向かって歩いていくから、天国で見守っていてね。絶対に幸せになるから！」

自分の気持ちを全て吐き出したシャルロットは心を締め付けていた鎖が解かれて清々しい気持ちになった。

「じゃあね、お母さん。また来るから！」

シャルロットは手を振って、遊星を探しに向かおうとする。

プスッ。

突然、シャルロットの背中に何かが刺さる。

「え……？」

刺さった何かから液体がシャルロットの中に入り込み、意識が大きく揺らいだ。

「遊、星……」

遊星の名前を呟きながら意識を失い、その場に倒れる。

シャルロットの背中には小さな注射器が刺さっていた。

そこに、複数の黒ずくめの男を引き連れた女が現れる。

女の手には銃が握られていた。

だが、それはただの銃ではなく麻酔銃だった。

「……連れて行きなさい」

「はっ！」

女は男達に命令すると、シャルロットを抱えてその場から消え去った。

そして、女はシャルロットの母の墓を睨みつけると、備えた花をグシャと足で踏みつけた。

「泥棒猫が……」

嫌悪の目で墓を見下ろすと、女はその場から立ち去る。

それから数分後、この辺りを散歩していた遊星はそろそろだと判断してシャルロットの元へと歩く。

（俺もネオ童実野シティに帰ったら父さんと母さんの墓参りに行く。色々話したいことがあるからな）

遊星は両親のことを思いながらゆっくりとした足取りで戻った。

しかし、そこにシャルロットの姿がなかった。

しかも、備えた墓が踏みつけられて散らばっていた。

（シャルロットの姿が無い上に花が踏まれている……どういうことだ？）

遊星は周りを見渡してシャルロットを探す。

すると、遊星の足元に小さく光る何かがあり、すぐに腰を下ろしてそれを拾う。

「これは、シャルロットが大切にしていたブレスレット……？」

それは、シャルロットが一夏とデートした時にプレゼントしてもらった、シルバーの十字架のブレスレットだった。

「まさか……」

遊星は最悪な状況を瞬時に思い浮かべ、ブレスレットを握り締めて

立ち上がる。

「シャルロット……シャルロット……ッ！！！」

遊星は大切な娘の名前を叫んで呼ぶが、それは届くことはなかった……。

・

第124話 娘から父への秘めた想い（後書き）

急展開です！

謎の女にシャルロットが誘拐されました！

次回、遊星がラウラ戦以来のマジ切れモードになります！

第125話 強き心（前書き）

お待たせしました。

シャルロット誘拐から遊星が奪還に向かいます。

第125話 強き心

シャルロットが誘拐され、遊星はすぐに日本のI S学園に連絡を入れた。

『もしもし、遊星。どうしたの？』

「ブルーノ、休みの時にすまない。実は、フランスでシャルロットが誘拐された」

『ええっ！？ シャルロットさんが誘拐された！？』

「俺の推測が正しければ……誘拐した犯人はデュノア社だろう。わざわざ教会で誘拐する奴はそうはいないからな」

『デュノア社って、あのデュノア社？ わかった、データベースの監視カメラなどにハッキングして調べてみるよ。もしシャルロットさんが映っていたらすぐに連絡するね』

「すまない、頼んだぞ。ブルーノ」

連絡を切り、遊星はシャルロットの母が眠る墓の前で腰を下ろし、墓石に触れる。

「あなたの娘、シャルロットは必ずこの手で取り戻します。俺の……命に代えても、必ず！」

遊星は約束をして一礼し、その場を後にする。

一方、麻酔銃で眠らされたシャルロットはゆっくりと目を開ける。

「ん……んう……？」

まだ意識が完全に覚醒していないシャルロットは目を開けて自分がいる場所を確認する。

そして、目の前にいる人物に驚き、意識が一瞬で覚醒する。

「やっとお目覚めのようね」

「何、で……あなたが……？」

そこにいたのは、自分の実父であるデュノア社長の妻であるデュノア夫人だった。

デュノア社長の愛人の娘であるシャルロットにとっては一番会いたくない人物の内の一人である。

そして今、シャルロットは自分に何が起きているか全く理解できなかった。

両手に手錠をかけられ、縄で縛られて動けない状態だった。

「何が起きたかわからないわよね？　なら、教えてあげるわ。あなたは誘拐されたのよ」

「どうして、僕を誘拐するんですか……？」

「進化したラファール・リヴァイヴ・カスタム——を解析する為よ」

「リヴァイヴを……？」

「我が社のハッカーがIS学園のコンピューターにハッキングした時にあなたを含む何人かの代表候補生のISが進化をしている情報突き止めた。あなたの持つリヴァイヴを調べたかったけど、IS学園から圧力が掛かってそれは出来なかった。だけど……」

デュノア夫人はシャルロットを蔑むような目で見下ろした。

「IS学園にいるはずのあなたがフランスに来ていた。しかも、死んだ穢らわしい泥棒猫の墓参りに来るとはね」

「母さんをそんな風に言わないで……！」

「お黙りなさい！」

パン！！

デュノア夫人は口答えしたシャルロットに平手打ちをする。

「っう……」

「私は幸運だと思ったわ。あなたを誘拐して、進化したりヴァイヴを研究できてどの国の第3世代型ISにも負けない、我が社の新しい最高のISを作れると思うとね」

「……僕をどうするつもりですか？ リヴァイヴだけが目的なら、僕を気絶させて待機状態のリヴァイヴだけを盗めばいいはず。僕も一緒に誘拐する理由は無いはずです」

シャルロットはデュノア夫人に屈することなく強い意志を秘めた目で睨んだ。

すると、デュノア夫人は不気味な笑みを浮かべてシャルロットの頬に触れる。

「あなたはあの女に似ていて顔が整っているし、体も良いわ。だから……あなたには他社から融資をしてもらうために娼婦になってもらうわよ」

「なっ!？」

それを聞いた瞬間、シャルロットは耳を疑うと同時に怒りがこみ上げてくる。

「ふざけないで！ 僕はもうデュノアの名を捨てて、縁を切った。僕はもうあなた達の道具じゃない!!」

パン!!

再びデュノア夫人はシャルロットの頬を叩いた。

「うつ、くう……」

二度も強く叩いたので、シャルロットの頬は酷い赤みを帯びていた。デュノア夫人はシャルロットの髪を掴んで、シャルロットに絶望を与えるように追いつめる。

「例え縁を切ってもあなたの体にはあの人の血が流れている。所詮あなたはデュノアから逃れることは出来ない」

「僕は……僕は……」

「一つ言っておくわ。あなたはね……この世界に生まれてはいけない人間なのよ」

デュノア夫人に存在を否定され、シャルロットは生きる希望が潰えるように絶望に追いやられる。

しかし、

「違う……あなたの言っていることは絶対に違う」

シャルロットはデュノア夫人の言葉を否定する。

「何ですって？」

「確かに、僕の体にはあの人の血が流れている。だけど……今の僕はシャルロット・デュノアじゃない。僕は生まれ変わった。僕は……」

シャルロットの心と脳裏には、今一番大切な人の姿が思い浮かべられる。

「不動遊星の娘、不動シャルロットです……！！」

強くなったシャルロットの心。

そして、シャルロットの信じる者がすぐそこまで近づく。

ドオオオオオオオン!!!!

シャルロットの言葉の直後、轟音が鳴り響いて地震のような揺れが大きく響いた。

「な、何!? この揺れは……」

デュノア夫人は携帯を取りだして誰かに連絡する。

「警備部、何が起きたの!?!」

『わ、我が社に襲撃者です! しかもISを使用しています!』

「IS使用者ですって!? 何故ここに……」

「まさか……来てくれたんだ……」

IS使用者と聞いてシャルロットは小さく笑う。

「あなた、何か知っているのね!?!」

デュノア夫人はシャルロットに問い詰める。

「あなたは……世界で敵に回してはいけない人を敵に回してしまいました。その人は……織斑千冬先生を超える世界最強のIS操縦者です!!!!」

シャルロットは不敵の笑みを浮かべて堂々と言い放つ。

襲撃者の正体、それは娘のシャルロットを奪還するために単身乗り込んだ父の遊星だった。

「待っている、シャルロット……」

遊星は龍星を纏っているが、今まで使用したどのウオリアーズ・フォルムの姿ではなかった。

スターダスト・ドラゴンの姿だが、翼と胸部と脚に黒と白の奇妙な形をした鎧が装着され、遊星の顔には黒の仮面が装着されていた。

それは、スターダスト・ドラゴンの対となる邪悪な闇のモンスターである。

「行くぞ、『Sin スターダスト・ドラゴン』……」

遊星は闇の星屑を秘めた剣『スターソード・Sin』を構えて小さく呟いた。

.

第125話 強き心（後書き）

遊星がS i nスターダスト・ドラゴンで襲撃しにきました。

最初はジャンク・デストロイヤーかジャンク・バーサーカーにしようと思いましたが、ふとS i nスターダスト・ドラゴンのカードを見つけて、こっちにしようと思いました。

何故遊星がS i nスターダスト・ドラゴンを使えるかは次回に判明します。

第126話 闇の星屑（前書き）

シャルロット奪還作戦開始です！

作戦と言ってもごり押しですが（笑）

第126話 闇の星屑

S i n スターダスト・ドラゴン。

それはパラドックスの操るS i nモンスターの内の一体。

遊星が何故S i n スターダスト・ドラゴンの力を手に入れたかという、それはI S学園でパラドックスと再会した時まで遡る。

I Sの戦いで決着をつけたあと、パラドックスは遊星にS i n スターダスト・ドラゴンのカードを渡した。

「パラドックス、何のつもりだ？」

「不動遊星、そのカードはお前が持つに相応しい。何せ、S i n スターダスト・ドラゴンはお前の心の闇そのものだからな」

「俺の心の闇だと？」

「お前は今までその不屈の精神と仲間との絆であらゆる強敵を撃ち破ってきた。だが、お前はどんな一度も敵でも憎むことはなく……闇に堕ちることもなかった」

「それが何だと言うんだ？」

「お前は善悪を超越するクリア・マインドを修得する存在だからこそ、今まで一切の闇に捕らわれなかった。S i n スターダスト・ドラゴンはそんなお前の闇を映した姿だ」

「俺の闇を映した姿……」

「だが、私から言わせるには、お前はもう少し闇を覚えろ」

「闇を、覚えろだと……？」

「人間は光だけでは生きられない。光と闇、その二つのバランスがあるからこそ人間という存在が成り立つのだ。光と闇の二つの心を覚えることでお前は更に強くなる」

「……わかった。このSin スターダスト・ドラゴンは俺が譲り受ける。だが、パラドックス、一つだけ言っておく」

「何だね？」

「たとえば俺がこれから闇を覚えても、俺の本質は絶対にならない。仲間達が居る限り、俺は闇には屈しない！」

「クックック……流石は不動遊星。そうではなくてはな」

こうして遊星はパラドックスからSin スターダスト・ドラゴンを譲り受けた。

そして、シャルロットを誘拐されて奪われたことに対する怒り、憎しみが遊星に僅かな闇を生みだし、龍星のウォリアーズ・フォーラムにSin スターダスト・ドラゴンの力を覚醒させたのだ。

遊星はシャルロットが監禁されているデュノア社の警備員を、スターソード・Sinで気絶させていく。

すると、警備員の増援が一気に途絶え、代わりにIS『ラファール・リヴァイヴ』を纏った女達が現れる。

「止まれ！ 貴様は亡国機業の者か！」

「フランス軍か……悪いが俺は亡国機業でもなければデュノア社のISのコアに興味がない」

「何だと？ では、何が目的だ!？」

「……誘拐された俺の娘を取り戻すためだ」

「娘だと……？ まさか、デュノア社の人間に誘拐されたと言うのか!？」

「ああ、だから……」

遊星はスターソード・Sinをフランス軍の女達に向ける。

「俺の邪魔をしないでくれ。娘を奪い返したらすぐにでもここから立ち去る」

「……例えお前の話が本当でも、お前を行かせるわけにはいかない！ 悪いが、ここで拘束させてもらう!!」

女達はラファール・リヴァイヴから銃器を呼び出して遊星の周りを囲み、遊星は深いため息をつく。

「……仕方ない」

スターソード・Sinを床に突き刺し、目を閉じた。

Sinスターダスト・ドラゴンから闇の星屑が溢れ、スターソード・Sinの刃に吸収される。

「すまない。悪く思わないでくれ……」

「はっ!? 止めろ!!」

「――シューティング・ソニック」

スターソード・Sinの刃から吸収した闇の星屑が漆黒の閃光となり、遊星を中心に周囲が闇に包まれた……。

一方、監禁されたシャルロットは遊星が来ていると知ってから落ちていた様子で大人しく座っている。

「……随分落ち着いているわね」

「お父さんが助けに来たからね。僕は信じて待つだけだよ。必ずここに迎えに来てくれる」

「ははっ、それはどうかしら？ フランス軍に応援要請したわ。きつと今頃あなたのお父様はやられているわ！」

遊星の事を何も知らないデュノア夫人は既に自分が勝ったような台詞を吐いている。

「……あなたは遊星お父さんの事を何もわかっていないね」

「何ですって？」

「僕はさっき言ったよね？ お父さんは――」

「シューティング・ソニック！！！」

ドガアアアアアアン！！！！

かなり丈夫な部屋のドアが派手に破壊され、シャルロットはにっこりと笑う。

「世界最強のIS操縦者だって」

「なっ、なっ、なっ……」

突然の出来事にデュノア夫人は口をぱくぱくと開けて壁に寄りかかる。

「シャルロット、無事か!？」

ドアを木っ端微塵に破壊した遊星はSin スターダスト・ドラゴンの黒い仮面を外し、シャルロットに駆けよる。

「お父さん! うん、大丈夫だよ!!」

「待ってろ、すぐに自由にしてやる!」

遊星はスターソード・Sinを振り下ろし、シャルロットを縛っている手錠と縄を一度に切り裂いた。

「ありがとう、お父——きゃっ!？」

シャルロットがお礼を言う途中で遊星に抱きしめられた。

「お、お父さん!?!？」

急に抱きしめられ、シャルロットは顔がトマトのように真っ赤になる。

「良かった……」

「え?」

「お前が無事で……俺はまた、大切な家族を失うところだった……」

遊星の両親は遊星が生まれて間もなくゼロ・リバースで亡くなってしまった。

初めて出来た家族である娘のシャルロットを失うことを、遊星は恐れていたのだ。

遊星の気持ちが無となく伝わったシャルロットは両腕を遊星の背中に回して強く抱きしめる。

「うん……心配かけて、ごめんなさい。お父さん……」

「ああ。よし、それじゃあ……」

遊星はシャルロットを解放すると、壁に寄りかかって全く動けずにいたデュノア夫人を睨みつける。

「お前だな？ 俺の娘を誘拐した犯人は」

「ど、どうして……フランス軍のIS操縦者はどうしたのよ!？」

恐怖から質問の答えが噛み合っていないデュノア夫人に遊星はため息をつく。

「フランス軍のIS操縦者は全て俺が倒した。ISのシールドエネルギーをゼロにしたからな」

それは、Sin スターダスト・ドラゴンのシューティング・ソニックによる一撃必殺だった。

闇の星屑による漆黒の閃光で、フランス軍のラファール・リヴァイ
ヴのシールドエネルギーを一気に奪った。

「そ、そんな……」

「さっき、デュノア社長にメールを送ってもらった。もし、またシ
ャルロットに手を出したら……」

遊星はスターソード・Sinをデュノア夫人に向ける。

「ひいっ!？」

「デュノア社を潰す。だから次はないと思うんだな」

最上級の脅しにデュノア夫人はとてつもない恐怖に捕らわれ、その
まま気絶してしまう。

「……よし、シャルロット」

「はい!」

「花束を買い直してもう一度墓参りに行こうか。そうしたらすぐに
日本に戻ろう」

「はい、お父さん!」

遊星はシャルロットを抱きかかえてデュノア社から脱出する。

脱出してから二人はすぐに花束を購入して、再びシャルロットの母の墓参りに行く。

踏まれた花束を退かし、新しい花束を墓前に供える。

「心配かけてごめんなさい、お母さん」

「シャルロット、お前に返す物がある」

遊星はシャルロットが落としたブレスレットを手渡す。

「あっ！ お父さんが拾ってくれていたんだ！」

「それから、これだ」

遊星は龍星からひし形のISのコアを呼び出す。

「シャルロットのラファール・リヴァイヴのコアだ。コアが外されて解析に入っていたから後で入れ直して貰おう」

遊星がシャルロットを助けに行く直前、デュノア社のISの開発室を襲撃してラファール・リヴァイヴ・カスタム――のコア、装甲、武器などを全て回収していたのだ。

「リヴァイヴ……」

シャルロットはラファール・リヴァイヴ・カスタム——のコアを受け取り、優しく抱きしめた。

「良かった、君が無事で……」

全てを奪い返したと思ったその時。

ピシッ！！

「え？」

パリーン！！

突然に唐突に、ラファール・リヴァイヴ・カスタム——のコアが真っ二つに割れた。

「リヴァイヴ……リヴァイヴ——ッ！！！！」

シャルロットは何が起きたのかわからず、震える手で握り締め、空に向かって叫ぶ。

コアの自壊、それは主の進化の時が近づいく前触れであった……。

第126話 闇の星屑（後書き）

シャルロットのISが自壊してしまいました！

これからどうなってしまうのか！？

次回はラファール・リヴァイヴ・カスタム——に代わる新たなISの登場です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4749q/>

IS 〈インフィニット・ストラトス〉～絆を紡ぎ、運命を変える決闘者～

2011年10月21日08時13分発行